

福井県埋蔵文化財調査報告 第172集

波寄三宅田遺跡

—一般国道416号道路改良工事に伴う調査—

第2分冊 遺物編 I

2 0 2 1

福井県教育庁埋蔵文化財調査センター

福井県埋蔵文化財調査報告 第172集

な み よ せ み や け だ い せ き
波寄三宅田遺跡

—一般国道416号道路改良工事に伴う調査—

第2分冊 遺物編 I

2 0 2 1

福井県教育庁埋蔵文化財調査センター

例 言

- 1 本書は、福井県教育庁埋蔵文化財調査センターが一般県道416号道路改良事業に伴い、平成22年度から平成23年度に実施した波寄三宅田遺跡(福井県福井市波寄町所在)の発掘調査報告書である。報告書は第1分冊遺構編、第2分冊遺物編Ⅰ、第3分冊遺物編Ⅱで構成され、本書は第2分冊遺物編Ⅰにあたり、縄文時代の土器・土製品を掲載した。
- 2 遺物整理は、平成23年4月1日から令和3年3月31日まで福井県教育庁埋蔵文化財調査センターにて実施した。
- 3 本書第2分冊の編集・執筆は工藤俊樹が行った。
- 4 波寄三宅田遺跡に関する成果の発表のうち、本書と齟齬のある場合は、本書をもって訂正したものと了解されたい。
- 5 本書に掲載した遺物と図面・写真は、一括して福井県教育庁埋蔵文化財調査センターに保管してある。
- 6 本書の作成にあたり、下記の機関および個人の方々からご協力、ご助言、ご指導を受けた。記して謝意を表したい(五十音・敬称略)。
[機 関] 愛知県埋蔵文化財センター、石川県埋蔵文化財センター、小矢部市教育委員会、富山県埋蔵文化財センター、富山県文化振興財団埋蔵文化財調査事務所、南砺市教育委員会、東近江市教育委員会、飛騨市教育委員会、若狭町立縄文博物館
[個 人] 石井 寛、長田友也、加納 実、千葉 豊、松井政信、米澤義光、綿田弘実
- 7 遺物整理作業は、福井県教育庁埋蔵文化財調査センターの整理・普及グループ職員および作業員があたった。

凡 例

- 1 本書の遺物挿図の縮尺は以下の通りである。
縄文土器実測図(復元実測図)……1/4
縄文土器実測図(拓影実測図)……1/3
土偶実測図……………1/3
土製円板実測図……………1/3
- 2 遺物実測図と写真図版の遺物番号は符号する。写真図版では、「挿図番号-遺物番号」の表記を用いた。
- 3 写真の縮尺は不同である。

目 次

	頁
第1章 縄文時代の土器	1
第1節 有文深鉢形土器	1
第2節 無文深鉢形土器	150
第3節 鉢形土器・壺型土器	170
第4節 浅鉢形土器・釣手土器	196
第5節 注口土器・双耳壺形土器	210
第6節 底 部	228
第2章 縄文時代の土製品	235
第1節 土 偶	235
第2節 土製円板	235
第3章 後期初頭から前葉土器群の検討	237
第1節 はじめに	237
第2節 第11群土器の分別と変遷	237
第3節 第12群、第19群土器の分別と変遷	241
第4節 第13群、第14群土器の変遷	249
第5節 第15群から第17群土器について	252
第6節 第20群、第21群土器について	256
第7節 第22群から第24群土器について	258
第8節 おわりに	268
第4章 まとめ	271

写真图版目次

- 图版第1 有文深鉢形土器
- 图版第2 有文深鉢形土器
- 图版第3 有文深鉢形土器
- 图版第4 有文深鉢形土器
- 图版第5 有文深鉢形土器・鉢形土器
- 图版第6 鉢形土器・壺形土器・浅鉢形土器・
釣手土器・注口土器・双耳壺形土器
- 图版第7 有文深鉢形土器
(1) 有文深鉢形土器第1群、第2群
- 图版第8 有文深鉢形土器
(1) 有文深鉢形土器第3群~第8群
(2) 有文深鉢形土器第7群~第10群
- 图版第9 有文深鉢形土器
(1) 有文深鉢形土器第11群
(2) 有文深鉢形土器第11群
- 图版第10 有文深鉢形土器
(1) 有文深鉢形土器第11群
(2) 有文深鉢形土器第11群
- 图版第11 有文深鉢形土器
(1) 有文深鉢形土器第11群
(2) 有文深鉢形土器第11群
- 图版第12 有文深鉢形土器
(1) 有文深鉢形土器第11群
(2) 有文深鉢形土器第11群
- 图版第13 有文深鉢形土器
(1) 有文深鉢形土器第11群
(2) 有文深鉢形土器第11群
- 图版第14 有文深鉢形土器
(1) 有文深鉢形土器第11群
(2) 有文深鉢形土器第11群
- 图版第15 有文深鉢形土器
(1) 有文深鉢形土器第12群
(2) 有文深鉢形土器第12群
- 图版第16 有文深鉢形土器
(1) 有文深鉢形土器第12群
(2) 有文深鉢形土器第12群
- 图版第17 有文深鉢形土器
(1) 有文深鉢形土器第12群
(2) 有文深鉢形土器第13群
- 图版第18 有文深鉢形土器
(1) 有文深鉢形土器第13群
(2) 有文深鉢形土器第13群
- 图版第19 有文深鉢形土器
(1) 有文深鉢形土器第14群
(2) 有文深鉢形土器第14群
- 图版第20 有文深鉢形土器
(1) 有文深鉢形土器第15群
(2) 有文深鉢形土器第15群
- 图版第21 有文深鉢形土器
(1) 有文深鉢形土器第15群
(2) 有文深鉢形土器第16群
- 图版第22 有文深鉢形土器
(1) 有文深鉢形土器第16群
(2) 有文深鉢形土器第16群
- 图版第23 有文深鉢形土器
(1) 有文深鉢形土器第17群
(2) 有文深鉢形土器第18群
- 图版第24 有文深鉢形土器
(1) 有文深鉢形土器第18群
(2) 有文深鉢形土器第19群
- 图版第25 有文深鉢形土器
(1) 有文深鉢形土器第19群
(2) 有文深鉢形土器第19群
- 图版第26 有文深鉢形土器
(1) 有文深鉢形土器第19群
(2) 有文深鉢形土器第19群
- 图版第27 有文深鉢形土器
(1) 有文深鉢形土器第19群
(2) 有文深鉢形土器第20群
- 图版第28 有文深鉢形土器
(1) 有文深鉢形土器第21群
(2) 有文深鉢形土器第22群

图版第29 有文深鉢形土器

- (1) 有文深鉢形土器第22群
- (2) 有文深鉢形土器第22群

图版第30 有文深鉢形土器

- (1) 有文深鉢形土器第22群
- (2) 有文深鉢形土器第22群

图版第31 有文深鉢形土器

- (1) 有文深鉢形土器第22群
- (2) 有文深鉢形土器第22群

图版第32 有文深鉢形土器

- (1) 有文深鉢形土器第22群
- (2) 有文深鉢形土器第22群
- (3) 有文深鉢形土器第29群

图版第33 有文深鉢形土器

- (1) 有文深鉢形土器第23群
- (2) 有文深鉢形土器第23群、第24群

图版第34 有文深鉢形土器

- (1) 有文深鉢形土器第25群、第26群
- (2) 有文深鉢形土器第27群、第28群

图版第35 鉢形土器

- (1) 鉢形土器・壺形土器第1群
- (2) 鉢形土器・壺形土器第1群

图版第36 鉢形土器

- (1) 鉢形土器・壺形土器第1群
- (2) 鉢形土器・壺形土器第2群
- (3) 鉢形土器・壺形土器第2群

图版第37 鉢形土器・壺形土器

- (1) 鉢形土器・壺形土器第2群、第3群、第5群
- (2) 鉢形土器・壺形土器第4群

图版第38 鉢形土器・壺形土器

- (1) 鉢形土器・壺形土器第4群
- (2) 鉢形土器・壺形土器第4群

图版第39 鉢形土器

- (1) 鉢形土器・壺形土器第4群
- (2) 浅鉢形土器・鈎手土器第1群、第2群

图版第40 浅鉢形土器

- (1) 浅鉢形土器・鈎手土器第2群、第3群

图版第41 浅鉢形土器

- (1) 浅鉢形土器・鈎手土器第5群
- (2) 浅鉢形土器・鈎手土器第6群

图版第42 浅鉢形土器・注口土器

- (1) 浅鉢形土器・鈎手土器第7群～第11群
- (2) 注口土器・双耳壺形土器第1群、第2群

图版第43 注口土器

- (1) 注口土器・双耳壺形土器第2群
- (2) 注口土器・双耳壺形土器第2群、第3群

图版第44 双耳壺形土器・土偶・土製円板

- (1) 注口土器・双耳壺形土器第2群、第3群
- (2) 土偶
- (3) 土製円板

插 圖 目 次

第 1 圖 有文深鉢形土器第 1 群実測図…………… 6	第 36 圖 有文深鉢形土器第 15 群実測図…………… 70
第 2 圖 有文深鉢形土器第 1 群、第 2 群実測図… 7	第 37 圖 有文深鉢形土器第 16 群実測図…………… 72
第 3 圖 有文深鉢形土器第 3 群～第 8 群実測図… 9	第 38 圖 有文深鉢形土器第 16 群実測図…………… 74
第 4 圖 有文深鉢形土器第 7 群実測図…………… 10	第 39 圖 有文深鉢形土器第 16 群～第 18 群実測図… 78
第 5 圖 有文深鉢形土器第 7 群～第 10 群実測図… 11	第 40 圖 有文深鉢形土器第 16 群実測図…………… 80
第 6 圖 有文深鉢形土器第 8 群、第 10 群、 第 11 群実測図…………… 14	第 41 圖 有文深鉢形土器第 17 群実測図…………… 82
第 7 圖 有文深鉢形土器第 11 群実測図…………… 15	第 42 圖 有文深鉢形土器第 18 群実測図…………… 85
第 8 圖 有文深鉢形土器第 11 群実測図…………… 16	第 43 圖 有文深鉢形土器第 18 群実測図…………… 87
第 9 圖 有文深鉢形土器第 11 群実測図…………… 18	第 44 圖 有文深鉢形土器第 19 群実測図…………… 90
第 10 圖 有文深鉢形土器第 11 群実測図…………… 20	第 45 圖 有文深鉢形土器第 19 群実測図…………… 92
第 11 圖 有文深鉢形土器第 11 群実測図…………… 21	第 46 圖 有文深鉢形土器第 19 群実測図…………… 93
第 12 圖 有文深鉢形土器第 11 群実測図…………… 24	第 47 圖 有文深鉢形土器第 19 群実測図…………… 95
第 13 圖 有文深鉢形土器第 11 群実測図…………… 26	第 48 圖 有文深鉢形土器第 19 群実測図…………… 98
第 14 圖 有文深鉢形土器第 11 群実測図…………… 28	第 49 圖 有文深鉢形土器第 19 群実測図…………… 101
第 15 圖 有文深鉢形土器第 11 群実測図…………… 30	第 50 圖 有文深鉢形土器第 19 群実測図…………… 102
第 16 圖 有文深鉢形土器第 11 群実測図…………… 31	第 51 圖 有文深鉢形土器第 20 群、第 21 群実測図 104
第 17 圖 有文深鉢形土器第 11 群実測図…………… 32	第 52 圖 有文深鉢形土器第 20 群実測図…………… 105
第 18 圖 有文深鉢形土器第 11 群実測図…………… 33	第 53 圖 有文深鉢形土器第 21 群実測図…………… 107
第 19 圖 有文深鉢形土器第 11 群実測図…………… 34	第 54 圖 有文深鉢形土器第 22 群実測図…………… 111
第 20 圖 有文深鉢形土器第 12 群実測図…………… 36	第 55 圖 有文深鉢形土器第 22 群、第 25 群、 第 26 群実測図…………… 112
第 21 圖 有文深鉢形土器第 12 群実測図…………… 38	第 56 圖 有文深鉢形土器第 22 群実測図…………… 113
第 22 圖 有文深鉢形土器第 12 群実測図…………… 39	第 57 圖 有文深鉢形土器第 22 群実測図…………… 117
第 23 圖 有文深鉢形土器第 12 群実測図…………… 41	第 58 圖 有文深鉢形土器第 22 群実測図…………… 123
第 24 圖 有文深鉢形土器第 12 群実測図…………… 45	第 59 圖 有文深鉢形土器第 22 群実測図…………… 126
第 25 圖 有文深鉢形土器第 12 群実測図…………… 46	第 60 圖 有文深鉢形土器第 22 群実測図…………… 130
第 26 圖 有文深鉢形土器第 13 群実測図…………… 48	第 61 圖 有文深鉢形土器第 22 群実測図…………… 134
第 27 圖 有文深鉢形土器第 13 群実測図…………… 50	第 62 圖 有文深鉢形土器第 22 群実測図…………… 136
第 28 圖 有文深鉢形土器第 13 群実測図…………… 52	第 63 圖 有文深鉢形土器第 22 群実測図…………… 137
第 29 圖 有文深鉢形土器第 13 群実測図…………… 55	第 64 圖 有文深鉢形土器第 22 群実測図…………… 138
第 30 圖 有文深鉢形土器第 14 群、第 15 群実測図… 57	第 65 圖 有文深鉢形土器第 23 群実測図…………… 141
第 31 圖 有文深鉢形土器第 14 群実測図…………… 59	第 66 圖 有文深鉢形土器第 23 群、第 24 群実測図 143
第 32 圖 有文深鉢形土器第 14 群実測図…………… 62	第 67 圖 有文深鉢形土器第 25 群、第 26 群実測図 146
第 33 圖 有文深鉢形土器第 15 群実測図…………… 64	第 68 圖 有文深鉢形土器第 27 群、第 28 群実測図 149
第 34 圖 有文深鉢形土器第 15 群実測図…………… 67	第 69 圖 有文深鉢形土器第 29 群実測図…………… 150
第 35 圖 有文深鉢形土器第 15 群実測図…………… 69	第 70 圖 無文深鉢形土器第 1 群実測図…………… 152

第71図	無文深鉢形土器第1群実測図……………	153	第95図	浅鉢形土器・釣手土器第2群、第3群 実測図……………	201
第72図	無文深鉢形土器第1群実測図……………	154	第96図	浅鉢形土器・釣手土器第5群実測図……	205
第73図	無文深鉢形土器第1群実測図……………	155	第97図	浅鉢形土器・釣手土器第6群実測図……	206
第74図	無文深鉢形土器第1群実測図……………	156	第98図	浅鉢形土器・釣手土器第7群～第11群 実測図……………	208
第75図	無文深鉢形土器第1群実測図……………	158	第99図	注口土器・双耳壺形土器第1群、第2群、 第5群実測図……………	212
第76図	無文深鉢形土器第1群実測図……………	160	第100図	注口土器・双耳壺形土器第1群、第2 群実測図……………	216
第77図	無文深鉢形土器第1群実測図……………	161	第101図	注口土器・双耳壺形土器第2群実測図	219
第78図	無文深鉢形土器第2群～第4群実測図	163	第102図	注口土器・双耳壺形土器第2群、第3 群実測図……………	221
第79図	無文深鉢形土器第2群実測図……………	164	第103図	注口土器・双耳壺形土器第4群実測図	224
第80図	無文深鉢形土器第3群実測図……………	166	第104図	注口土器・双耳壺形土器第5群実測図	226
第81図	無文深鉢形土器第3群実測図……………	167	第105図	底部実測図……………	230
第82図	無文深鉢形土器第4群実測図……………	169	第106図	底部実測図……………	231
第83図	鉢形土器・壺形土器第1群実測図……	171	第107図	底部実測図……………	232
第84図	鉢形土器・壺形土器第1群実測図……	174	第108図	底部圧痕拓影……………	233
第85図	鉢形土器・壺形土器第1群実測図……	175	第109図	土偶実測図……………	235
第86図	鉢形土器・壺形土器第1群～第5群 実測図……………	176	第110図	土製円板実測図……………	235
第87図	鉢形土器・壺形土器第2群実測図……	179	第111図	第11群土器変遷図……………	238
第88図	鉢形土器・壺形土器第2群、第3群、 第5群実測図……………	182	第112図	第12群・第19群土器変遷図……………	244-245
第89図	鉢形土器・壺形土器第4群実測図……	184	第113図	第13群・第14群土器変遷図……………	250
第90図	鉢形土器・壺形土器第4群実測図……	187	第114図	第15群～第17群土器変遷図……………	254
第91図	鉢形土器・壺形土器第4群、第5群 実測図……………	191	第115図	参考図……………	255
第92図	鉢形土器・壺形土器第4群実測図……	193	第116図	第20群・第21群土器参考図……………	257
第93図	浅鉢形土器・釣手土器第1群、第3群、 第6群、第12群実測図……………	197	第117図	第22群～第24群土器変遷図……………	260-261
第94図	浅鉢形土器・釣手土器第1群、第2群 実測図……………	198	第118図	鉢形土器および把手……………	268

表 目 次

第1表	土製円板観察一覧表……………	236
-----	----------------	-----

第1章 縄文時代の土器

波寄三宅田遺跡の調査で出土した縄文土器は、コンテナバットにして約100箱がある。出土した縄文土器のうち主体となるものは後期初頭から前葉の土器であり、晩期前葉および早期末葉から前期、中期後葉の土器がこれに続き、やや広い時間幅を有す。本章ではこれら縄文時代の遺物について、分類・説明を加えることとする。なお、本遺跡出土の縄文時代の土器は大半が河跡からの出土であるが、河跡内の土層堆積状況の検討から土器の先後関係を把握することはできなかった。

北陸地方西部域の縄文土器の研究は、調査事例の少なさや層位学的事実の乏しさから、未だ不明な点を多く残している。今回呈示する波寄三宅田遺跡の後期初頭から前葉の土器群は、北陸地方はもとより近畿地方・関東地方・山陰地方などとも密接な関係を持つ資料であり、その価値は高いと判断した。そのため本書では可能な限り遺物の掲載に努めることとした。

本遺跡で出土した縄文土器の総数は80,190点であり、このうち191（うち底部51）点について器形復元を行い実測図として、破片資料3,838点については拓影図などとして提示した。なお、出土土器に対する分類は、器種・器形・文様帯構成・文様構成・文様要素などにより行った。

第1節 有文深鉢形土器

縄文土器のうち深鉢形土器は、有文深鉢形土器と無文深鉢形土器に大きく二分した。なお、早・前期の土器については有文・無文の深鉢形土器を一括して取り扱った。

出土した有文深鉢形土器に対する分類の内容は、次のとおりである。

- 第1群土器 略円筒形の体部と丸底様の底部を有し、外面に縄文、内面に縄文や条痕、ナゲ痕を施す土器。胎土に繊維を混入する例もある。
- 第2群土器 微隆起線および沈線により文様を描く、やや薄手の土器。
- 第3群土器 略円筒形の胴部から、内弯する口縁部に至るキャリパー形の器形を有す土器。口縁下および頸部を横走する数条の沈線で口縁部を画し文様帯とする土器。
- 第4群土器 やや膨らみのある胴部が頸部で大きく開き、強く内弯する口縁部に至るキャリパー器形の土器。一部に、口唇部を再度立上げる例も見え、並行沈線および浮隆線により文様を描く土器。
- 第5群土器 断面かまぼこ状で刻み目を施す隆帯および、半隆起線で文様を描く土器。
- 第6群土器 やや張りのある胴部が、頸部でくびれてキャリパー器形を有する土器が多く、一部に頸部で外反して直線的に開く例もある。また、大型の把手を施す例も見える。口縁部には隆帯もしくは沈線による、楕円と渦巻を組合せた区画文を、胴部には沈線による縦位の区画文を、各々配す例が多い。口縁部および胴部の区画文内には、矢羽根状沈線や刺突などを充填する。
- 第7群土器 第6群土器に近似する器形および文様帯構成を有し、口縁部および胴部の区画内に縄文や刺突文を充填する土器。
- 第8群土器 胴部の張りがやや弱く、頸部から外反して開いて、弱く内弯する口縁部に至る土器。口縁部には沈線による楕円文や多重渦巻文などを組み合わせた区画文を配す。大型の把手を配す例も見える。胴部は沈線により縦位区画される例が多い。
- 第9群土器 短く内傾する口縁部を文様帯とするキャリパー器形の土器。口縁部に楕円形区画文を配し、区

画文間に大型の円形刺突文を加える例もある。胴部を渦文・紡錘文などで縦位分割する例もある。

第10群土器 瓢形の器形を呈し、微隆起線による渦文や円孔、円形貼付文を施すほか、上下方向に貫通する橋状把手を施す土器。

第11群土器 張りのある胴部が頸部でくびれ、内弯気味に開いて口縁部に至る土器。口縁部と胴部の文様帯が連携される。2条沈線により主文様を描き、沈線間に縄文を充填する土器であり、主文様描線が切り合わないことを基本とする。縄文施文の有無によるコントラストで文様を描く土器。平縁と波状縁および、把手・突起などを施す例がある。口縁部文様帯として沈線による半円形の区画文を配し、波頂下に口縁部と連係した垂下文やJ字文を2条一組の沈線で区画し、縄文を充填する縄文帯として施す。また、山形状の縄文帯で胴部文様帯下端を連結させる例もある。なお、一部に口縁部の文様帯と胴部の文様帯が分離する土器も見える。

第12群土器 第11群土器に類似する器形を持つ。口唇部を内側に摘み出して形成して口縁部を弱く内弯させる例を基本とする。なお、一部に胴部から外反して開いて、強く内屈する口縁部に至る例もある。主文様描線は2条の例は少なく、多くは3条一組の沈線帯とし、沈線帯内に縄文を充填する。主文様を描く沈線帯は多くは切り合う。平縁と波状縁のものがあり、一部に大型の把手を施す例も見える。第11群土器で見た半円形の口縁部文様帯は、胴部文様帯との連繫を維持するが形骸化する。胴部の文様帯は、頸部のくびれを境に、上下に二分される場合が多い。胴部上半では波底部から文様を伸ばし、波頂下の空白部に大柄の海馬状の文様を配す例が目引く。また、胴部下半にも文様を続け、胴部全体を縦位分割して主文様を配す。各々の主文様は横走・斜行する沈線帯で頸部のほか数か所で各々連結され、胴部文様帯を構成する。縄文施文部と非施文部とのコントラストにより文様を描く点は第11群土器に類似する。

第13群土器 張りのある胴部が頸部でくびれ、外反して開いて口縁部を内屈させる土器。口縁部の強い内屈により内面に谷線（屈曲痕）を残す例が多い。口縁部に大型の把手を配す例も見える。内屈により得た幅の狭い平坦部に把手間を繋ぐ横走沈線や、口縁部下縁外側部に施す刻み目や縄文で口縁部文様帯を構成する。

文様帯の構成は、口縁部文様帯と頸部から胴部にかけての文様帯2帯で構成するものと、頸部と胴部の境に横走沈線を数条巡らせて画し、頸部文様帯と胴部文様帯に分けて文様帯3帯で構成するものがある。なお、胴部の文様帯には3条ほどの沈線を絡み合わせて、胴部を縦位に分割する例も見える。

第14群土器 やや張りの弱い胴部が頸部でくびれて外反して開き、直立もしくは内傾させる口縁部に至る土器。口縁部、頸部、胴部の3文様帯を配置するものと、口縁部と胴部の2文様帯を配すものがある。口縁部の単位文部を緩く波状とするものや、山形の突起を加える例がある。口縁部の文様帯は、単位文と楕円形の区画文で構成する例が多く、区画文等への縄文の施文には有無がある。なお、一部に口縁部内面に文様をもつ例も見える。2文様帯で構成する土器の胴部文様は、縄文などが通例であるが、3帯構成するものには、頸部を無文とする例が多く、胴部には地文縄文の上に紡錘文や垂下文を沈線で加えて縦位分割するものがある。

第15群土器 張りのある胴部が頸部でくびれて外反し、強く内屈する口縁部に至る土器。口縁部、頸部、胴部の3文様帯構成を採り、口縁部を4単位の波状縁とする例が多い。また、内屈する口縁部と頸部との接合部は、顎を張ったように突出させる例が多い。波頂部には隆帯や沈線によるS

字文、渦文、同心円文、蛇行線文などの単位文を配し、波底部に向かう楕円文・並行線文などを施して口縁部文様帯とする。波底部にも単位文を配す例も見える。横走する沈線で頸部と胴部の境を画し、各々を文様帯とする。頸部は無文帯とする例が多いが、一部に波頂下に放射状文や垂下する沈線を配す例も見える。なお、胴部には全面に縄文を施すことを通例とする。

第16群土器 体部から外反して開く朝顔形器形の土器であり、体部下半で屈曲する例や、張りをもたせる例もある。平縁を基本とするが一部に突起を加えるものや、波状縁とする例も見える。文様帯は口辺部文様帯1帯を基本とする。口辺部文様帯は上下両端を2条から数条の横走沈線で画して横帯する文様帯とする。なお、文様帯上縁に紐線文や8字状の貼付文を、さらに加えるものも見える。文様帯内には2条から数条の沈線により菱形文、鋸歯文、弧線文などの文様を描き縄文を充填する。縄文充填部と無文部をコントラストさせ、連続・横帯する文様帯とする特徴を持つ。また、内面に横走沈線を施す例も多く見える。

第17群土器 第16群土器に類似する朝顔形の器形を有す土器と、第15群土器に類似した器形をもち、内弯する口縁部を波状縁としたキャリパー器形の土器の2種がある。文様帯構成は、朝顔形器形の土器では口辺部文様帯1帯で、キャリパー器形の土器では口縁部、頸部、胴部の3帯の文様帯で構成する。朝顔形器形の土器は口辺部文様帯内を縦位に区切る単位文をもつ。キャリパー形の土器では口縁部と胴部に、朝顔形器形の土器に施した鋸歯文などに縦位分割文を加えた文様を各々配して文様帯とし、頸部は無文帯とする。なお、一部に頸部に横走沈線帯を配し、口辺部、頸部、胴部（縄文施文）の文様帯構成を採る例もある。いずれの土器も3単位の波状口縁を基本とし、一部に平縁の例もある。

第18群土器 張りのある胴部が頸部でくびれ、直線的に外反して口縁部に至る土器である。頸部の伸びには長短がある。平縁と波状縁の土器があり、口縁部内面に沈線や縄文を充填する沈線帯を配すほか、頸部と胴部の境や胴部に文様を配す例もある。なお、器形は類似するが、口縁部を肥厚もしくは屈曲させ、肥厚した口縁部や口端部および内面に縄文を施し、胴部に縄文を施して頸部は無文とする例もまとまりをもって存在する。

第19群土器 張りのやや弱い胴部が頸部でくびれ、外反気味に開いて肥厚する口縁部に至る土器であり、平縁のものや把手・突起を施し波状縁とするものがある。口縁部、頸部、胴部の3文様帯構成を基本とする。口縁部は断面三角形に肥厚させて短く内屈し、内面を緩やかなスロープ状に仕上げる。幅の狭い口縁部文様帯には、波頂部に単位文のみを配すもの、これに波底部に向かう沈線を加えるもの、さらに口縁部下縁外側に刻み目を施すものがある。頸部に文様帯を配す例が少数存在するが、多くは頸部を無文帯とする。胴部文様帯には下端を開放する逆三角形の区画文を多重沈線で配す例が多く、沈線間にC字状の区切り沈線を施して逆L字状の文様とする例も見える。なお、一部に口縁部と胴部の2文様帯で構成する土器もある。

第20群土器 やや張りのある胴部が頸部でくびれて開いて、口縁部を強く内弯させる土器であり、平縁と波状縁の例がある。内弯する口縁部と頸部の2文様帯構成を基本とする。口縁部文様帯に配される文様は簡素で、波状沈線、刺突、並行線などを、間隔を空けて多段に横帯施文する例が多く、波頂部に小さなJ字状の単位文を配す例もある。なお、胴部には条が縦走する節の大きな縄文を施す場合が多い。

第21群土器 やや張りのある胴部が頸部でくびれて外反して開く土器であり、平縁と波状縁の例がある。

口縁部と胴部の2文様帯を基本とする。口縁部文様帯に配される文様は簡素であり、波状沈線、楔形を含む刺突列、並行沈線などを多重に間隔を空けて横帯施文する例が多い。口縁部に配した沈線を窓状の長方形区画文とし、区画間に蛇行沈線を単位文として配す例も見える。なお、外反する口縁部を断面三角形形状に内屈、肥厚させて幅の狭い口縁部文様帯とする例も見える。

第22群土器 やや張りのある胴部が頸部でくびれ、内弯気味に開いて口縁部に至るキャリパー器形の土器を基本とする。なお、一部に頸部から外反して開き、断面三角形形状に肥厚・内折させた口縁部に至る土器も見える。

キャリパー器形の土器では、口縁部文様帯と胴部文様帯の2文様帯構成を基本とし、器面のほぼ全てに文様を施し、施文夥多の印象を与える。また、肥厚・内折する口縁部を幅の狭い文様帯とし、頸部以下に縄文を施す土器や、頸部を無文帯とし、胴部上半に多重沈線による文様帯を配す例も見える。なお、いずれの土器でも平縁と把手や突起を加えて波状縁とする例があり、大型の橋上把手を施す例や三方に透かし孔を持つ例がある。

口縁部文様帯には楔形などの刺突を加えた並行線文や横長の楕円文を配し、波頂部に入字状のくい違いをもたせ単位文とするなど、本群に特徴的な手法を見ることができる。胴部文様帯は垂下沈線で縦位区画し、各区画内を斜行沈線で小分割して扇形文などを充填する例が特徴的である。また、頸部や胴部の文様帯に、多重沈線で方形文などの文様を接続横帯施文する例も見える。さらに、胴部文様帯の上下を沈線帯で限り、区画内を垂下沈線で縦位分割し、区画内部分を斜行沈線で再分割した上で扇形文などを充填する例も見える。

文様は多重に施す例が多く、並行線文、方形文、楕円文、三角文などの基本モチーフと、充填文として扇形文、渦巻文、蛇行（波状）文などがある。各文様には楔形やコの字状の刺突文、結節沈線文、沈線内刺突文のほか沈線末端刺突や単位文周辺への大型の円形刺突なども特徴的である。なお、充填文として節の細かい斜縄文の使用が見えるが、胴部を中心に節が大粒で条が縦走もしくは横走する縄文を使用する。

第23群土器 張りの弱い胴部が頸部でくびれて大きく外反して開き口縁部に至る土器であり、口辺部文様帯と縄文を施す体部文様帯の2帯構成の土器を基本とする。なお、一部に外反する口縁部を外方へ断面三角形形状に肥厚させ、幅の狭い口縁部文様帯を加え、口縁部、頸部、胴部の3文様帯構成の土器も見える。

口辺部文様帯には大柄の波状文や鋸歯文を配して文様帯の上下を区画沈線で限る例もあるほか、口端部に縄文を施す例もある。なお、胴部は縄文とする例が多い。

第24群土器 下膨れの胴部が頸部でくびれて外反して口縁部に至る土器であり、平縁の土器を主体とする。沈線により文様帯の上下端を画して区画内を垂下沈線で縦位分割し、さらに斜行沈線で三角形区画に小分割して口辺部文様帯とする。各区画内には多重沈線による扇形文を充填する例もある。第22群土器に比べて使用する多重沈線は数を減じており、比較的細い沈線を使用する。口辺部文様帯内には、節の細かい縄を地文もしくは充填縄文として施し、胴部には大粒の節をもち条が縦走もしくは横走する縄文を施す例が多い。

第25群土器 地文に縄文を施し、やや膨らみのある胴部が頸部でくびれて外反して口縁部に至る土器である。口端部をやや肥厚させ内面側に摘み出し、口縁部内面をスロープ状に仕上げる例も見える。また、肥厚する口縁部に沈線や刻みを施し文様帯とするものや、外反する口辺部の上下を横帯

する沈線で区画して文様帯とし、沈線で縦位に分割する例も見える。

第26群土器 胴部から直線的に外反して開き口縁部に至る朝顔形器形の土器であり、平縁を基本とするが突起を施し小波状口縁とする例も見える。口端部を拡張して上面を平坦とする例や、断面三角形に肥厚させて幅の狭い口縁部文様帯とする例、器面全体を幅広く口縁部文様帯とする例もある。文様帯の縦横の分割には隆帯を使用する例もある。

第27群土器 やや張りのある胴部から内弯気味に開いて口縁部に至る土器であり、口端部にS字文を施した突起を配す例や、口端部の一部に刻み目を施すものもある。口縁部を横走・垂下する沈線で区画し、刺突や短沈線を充填する例などもある。

第28群土器 口唇部を内方に肥厚させ鏝状に仕上げる土器と思えるが、器形および文様帯の全容を把握できる例はない。文様には鋸歯状の多条沈線や、多条の横走沈線の一部をU字状に窪ませる例などが見える。

第29群土器 張りのある胴部がくびれて頸部から外反して開き、外傾もしくは直立する口縁部に至る土器であり、平縁と波状縁の例がある。文様帯は口縁部と胴部の2文様帯構成を採り、各文様帯内には刺突文や貼付文による単位文と横走沈線から成る文様を配することを基本とする。

ア 第1群土器 (第1図、第2図1～7)

略円筒形の体部と丸底様の底部を有し、多くの土器の外面に縄文、内面に縄文や条痕を施す土器を本群とする。胎土に繊維の混入する例もある。

- 1類 口縁部に管状、篋状の工具により文様を施す土器。
- 2類 器面の表裏に縄文を施す土器。
- 3類 外面に縄文を施して内面に条痕もしくは撫で痕を残す土器。
- 4類 外面を素文とし内面に条痕を施す土器。
- 5類 本群の底部と思える土器。

1類 (第1図1～3)

口縁部に管状、篋状の工具により文様を施す土器である。

第1図1は外反する口縁部片であり、外面には篋状工具による2条の縦位刺突文列を波状に施して内面に条痕を施す。2は口縁部付近の破片であり、外面に縦走する沈線数条を施して内面に条痕を施す。3も口縁部付近の破片であり、C字状の刺突文列を斜行して4条配しており、第2群に含むべきかもしれない。

2類 (第1図4～23)

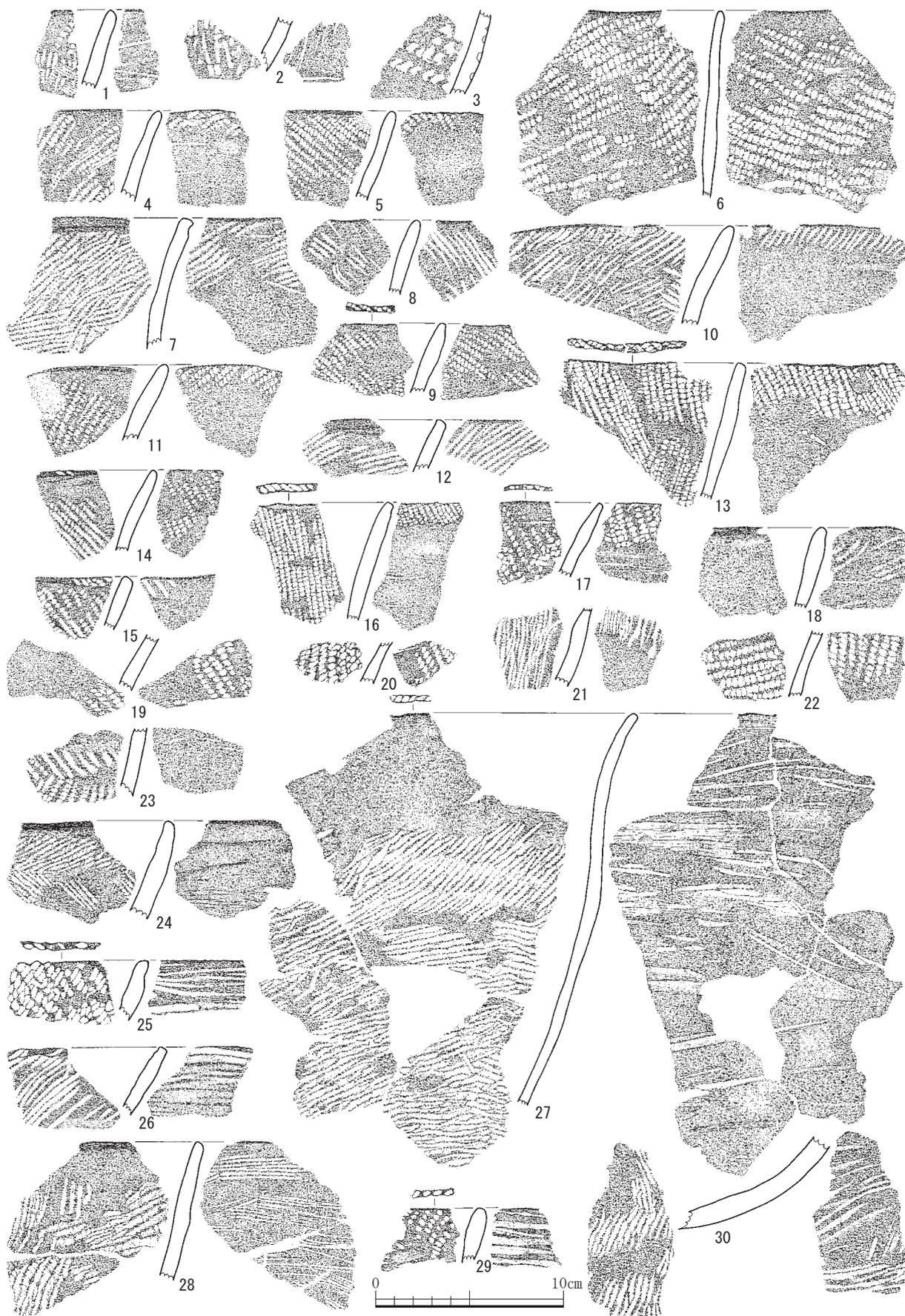
器面の表裏に縄文を施す土器である。

器形は口縁部をやや外反させるものが大半であり、一部に弱く内弯するもの(5)や直立するもの(6)がある。また、内面への縄文施文幅には、幅の広い例(6)や狭い例(10)がある。なお、23は羽状縄文を施す。

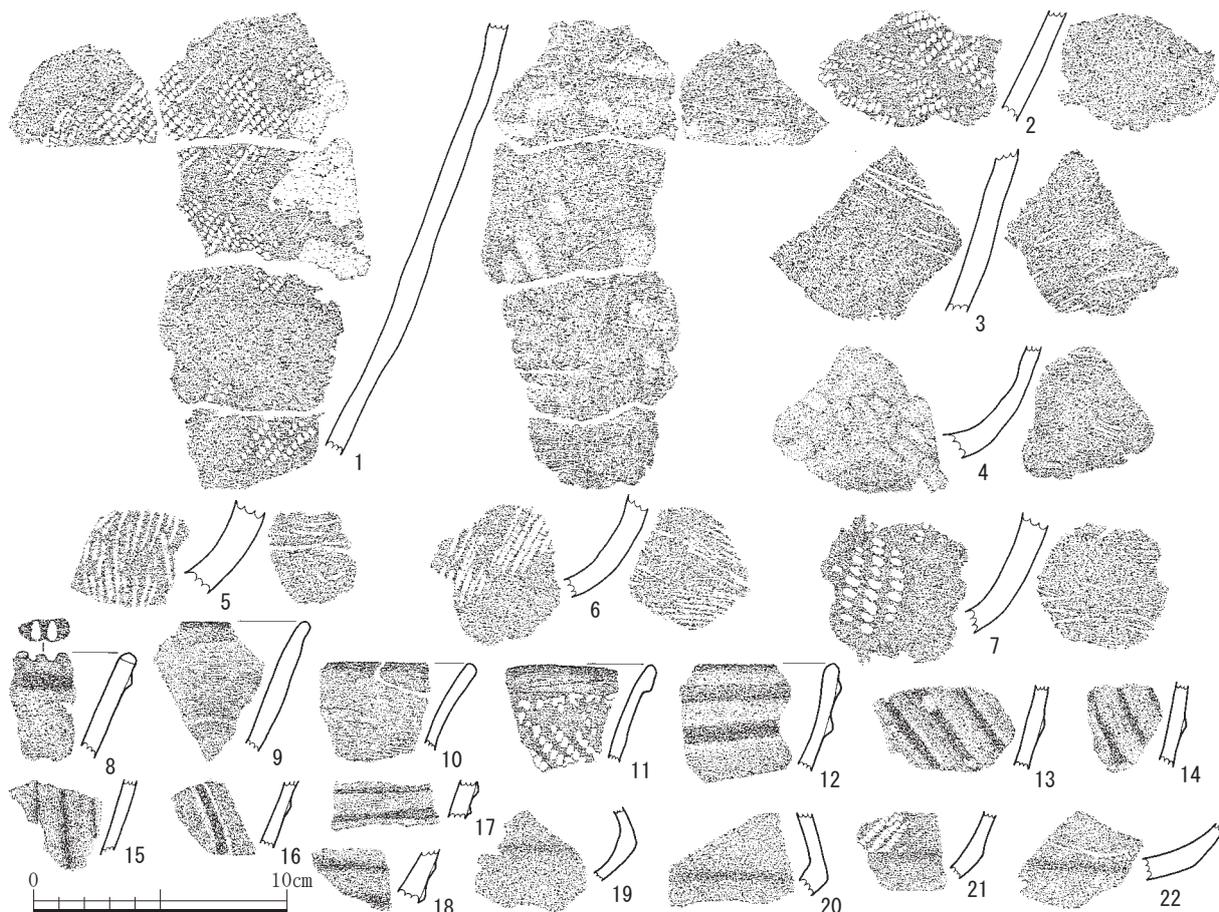
3類 (第1図24～30、第2図1、2)

外面に縄文を施し、内面に条痕もしくは撫で痕を残す土器である。

第1図24は内面に撫で痕を残す口縁部片であり、外面に羽状縄文を施す。27から29は内面に条痕を施す口縁部片であり、25は口端部に縄文を施す。27は口縁部に無文部を配し、口端部に縄文を施す。くびれ部以下に縄文を施すが、上部に斜縄文、下部に横走縄文をそれぞれ施す。30は内面に条痕を残す丸底風の底部片かと思え、底面にも縄文を施す。第2図1、2は内面に条痕や撫で痕を残す胴部片であり、繊維の混入が顕著である。2



第1図 有文深鉢形土器第1群実測図 (縮尺1/3)



第2図 有文深鉢形土器第1群、第2群実測図（縮尺1/3）

は羽状縄文を施す。

4類（第2図3）

第2図3は外面を素文とし内面に条痕を施す土器であり、繊維の混入が顕著である。

5類（第2図4～7）

第2図5から7は外面に縄文を施して内面に条痕を施す丸底風の底部片であり、外面の縄文を底面際まで施文している。

イ 第2群土器（第2図8～22）

微隆起線および沈線により文様を描く、やや薄手の土器を本群とする。

第2図8は口端部に刻み目を施し、口縁に並行して微隆起線を1条横走させる。9、10は無文の外反する口縁部片である。11は口唇部をやや肥厚させて外反する口縁部片であり、縄先端のループを口唇下に残す。12はやや太めの微隆起線文を2条横走させる。13から16は素麺状の微隆起線文を斜行させる土器であり、同一個体の口縁部片と思える。17、18も同一個体であり断面三角形の微隆起線文を横走させる。19から22は本群土器の底部付近の破片であり、丸みのある平底から稜をもち立ち上がり胴部へと移行する。

ウ 第3群土器（第3図1、2）

第3図1は口縁部片、2は頸部片である。略円筒形の胴部が頸部でくびれ、弱く内弯する口縁部に至るキャリパー器形の土器である。1は口唇部先端をつま先状に仕上げて口縁部文様帯の上端区画となる沈線1条を横

走させ、区画内に縦位沈線文を充填する。2は頸部に3条以上の沈線を横走させ、口縁部文様帯内を縦位沈線で充填する。使用する沈線はかまぼこ状の断面とする。

エ 第4群土器 (第3図3～7)

やや膨らみのある胴部が頸部で大きく開き、内弯の強い口縁部に至るキャリパー器形の土器と思える。第3図3は内弯する口縁部から、口唇部を再度上方に立ち上げて口縁部に細い並行沈線3条を横走させる。4、5は頸部片であり、4では地文に楡描沈線を縦位に施し、沈線および蛇行沈線を横走させる。5は並行沈線およびコンパス文を横走させる。6、7は同一個体の頸部片であり、素麺状の浮線を間隔を空けて横走させ、浮線による格子目文を加える。

オ 第5群土器 (第3図8～10)

断面かまぼこ状の隆帯を施す土器を本群とする。

第3図8は外反する口縁部片であり、口端部に縄文を施す。口縁下には並行沈線を横走させ、沈線間に縦位の刻み目を加える。9は横走沈線と刻み目を施した横走隆帯を間隔を空けて施し、沈線および隆帯間に無節の縄文を充填する。10は沈線と刻み目を施した隆帯を間隔を空けて垂下させる。

カ 第6群土器 (第3図11～29)

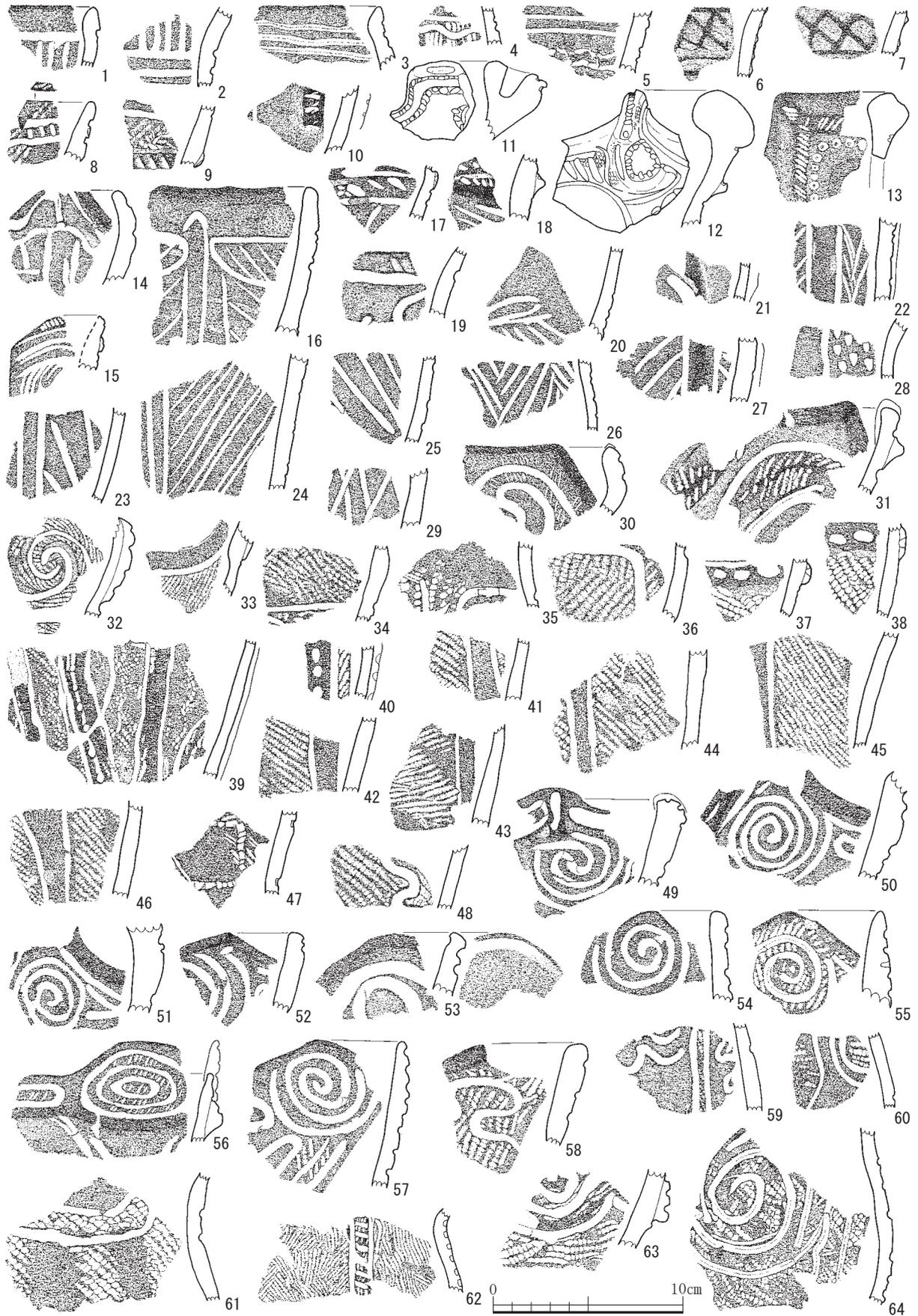
やや張りのある胴部が頸部でやや強くくびれて、内弯する口縁部に至る土器である。キャリパー器形の土器が多く、一部に胴部から外反して直線的に開く土器もある。また、大型の把手を施す品も見える。口縁部には隆帯もしくは沈線による、楕円と渦巻を組み合わせた区画文を配し、胴部には沈線による縦位の区画文を配す土器が多い。口縁部および胴部の区画文内には矢羽根状沈線や刺突などを充填する。

11から15は把手を施す例である。11は頂部を円形に陥入させる円柱形の把手であり、外面に刺突を加えた沈線を施す。12は口縁に直行する円盤状の突起を加え波状縁とする。突起末端から隆帯を伸ばして渦を巻き、口縁部文様帯の区画文の一部とする。突起上および渦巻状隆帯の内側には刺突を加えた沈線を施す。また、区画文の上端となる口唇部隆帯の内側には沈線を加え、胴部にはU字状の沈線を施し区画文とする。口縁下沈線と胴部区画文間には縦位沈線および縄文を充填する。13は方形の板状把手片であり、中央に貫通する円孔を穿って、管状刺突を加えた沈線1条を添わせる。把手外周の稜上には縄文RLを加える。14は波頂部片であり沈線2条を口縁に添わせ、波頂下で渦状に巻くものと思える。15は波頂下に隆帯を配して側縁に刺突を加えた沈線を添わせる。16は外反する口縁部に、沈線による楕円区画文を配し斜行沈線を充填する。区画文間にはしの字状の沈線を基軸として、3条の沈線を垂下させて胴部を縦位分割し、各区画内に矢羽根状の沈線を充填する。17、18は頸部に刻みをもつ隆帯を周回させる例であり、19、20は沈線を頸部に周回させる。21から29は胴部片であり、21、22、27は胴部縦位分割を隆帯で行い、23、24、27は沈線とする。28は区画内に刺突文を充填する。

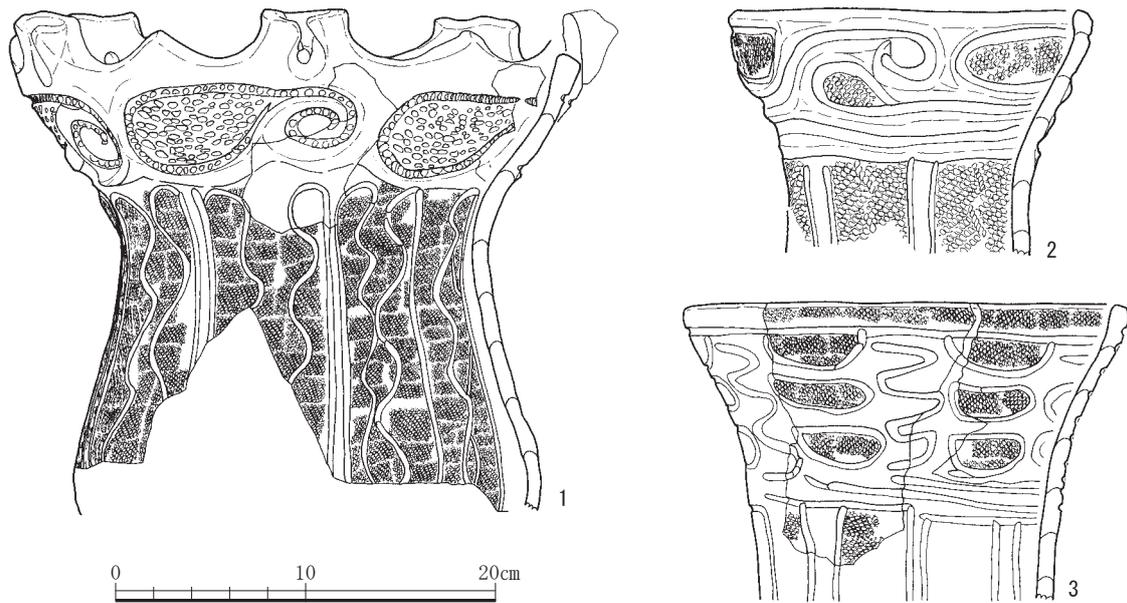
キ 第7群土器 (第3図30～48、第4図)

第6群土器に近似する器形および文様帯構成を有し、口縁部および胴部の区画文内に縄文や刺突文を充填する土器である。

第4図1はやや内弯する口縁部に上面形C字状の半管状把手および、山形突起を交互に5単位配す。口縁部には口唇部と一体化した、隆帯による楕円と渦巻の区画文を横位に配すが、文様の割り付けに齟齬をきたした



第3圖 有文深鉢形土器第3群~第8群実測図 (縮尺1/3)



第4図 有文深鉢形土器第7群実測図（縮尺1/4）

ためか、さらに1単位を山形突起下に縦位に加えている。区画隆帯内側には刺突を加えた沈線を添わせ、刺突文を充填する。張りのある胴部には垂下沈線と蛇行沈線による2区画一對の縦位区画文を配し、縄文RLを充填する。第4図2は内弯する口縁部に、隆帯による隅丸三角形文と、これを挟み楕円文から長く伸びる渦巻文を組み合わせた区画文を各々3単位配す。隆帯内側にはやや幅広の沈線を添わせて縄文RLを充填する。張りの弱い胴部を、口縁部文様帯下縁の隆帯から垂下する2条一組の垂下沈線で縦位分割し、区画内に縦位の結節縄文を充填する。第4図3は円筒形の胴部が頸部で開き、弱く内弯する口縁部に至る土器である。口縁に添い沈線1条を横走させ、頸部に配した沈線2、3条により口縁部文様帯の上下を画す。口縁下の横走沈線から派生する半円文と楕円文を沈線により3段一組で8単位配して口縁部文様帯を構成し、区画文間には縦位の蛇行沈線を加える。胴部文様帯は口縁部下端区画沈線から、沈線を2条一組で垂下させ縦長の矩形区画内に2条の垂下沈線を加えた文様とする。口唇部および口縁部、胴部の区画文内には、縄文LRを施す。

第3図30から33は口縁部片である。30、31は渦巻文を配した方形の板状把手であり、31は把手側縁を拡張して長く皿状に仕上げる。隆帯側縁には沈線を添わせ、30は区画内に、31は隆帯上および把手側縁の拡張部に縄文を加える。32は巴状に渦巻く隆帯両側に沈線を添わせ、33も隆帯両側に沈線を添わせる口縁部片である。34から38は頸部片であり、35、36は沈線による胴部縦位区画文の上端を逆U字状に閉じ、37、38は頸部に刺突列を加えた横走する隆帯を配す。39から48は胴部片であり、縦位区画を隆帯で行うもの（39、40、46）と沈線で行うもの（41から43）があり、39、40は隆帯上に刺突を加える。47は刺突を加えた沈線を矩形に配し、48は地文縄文上に蛇行沈線を施す。

ク 第8群土器（第3図49～64、第5図1～5、15～17、第6図3）

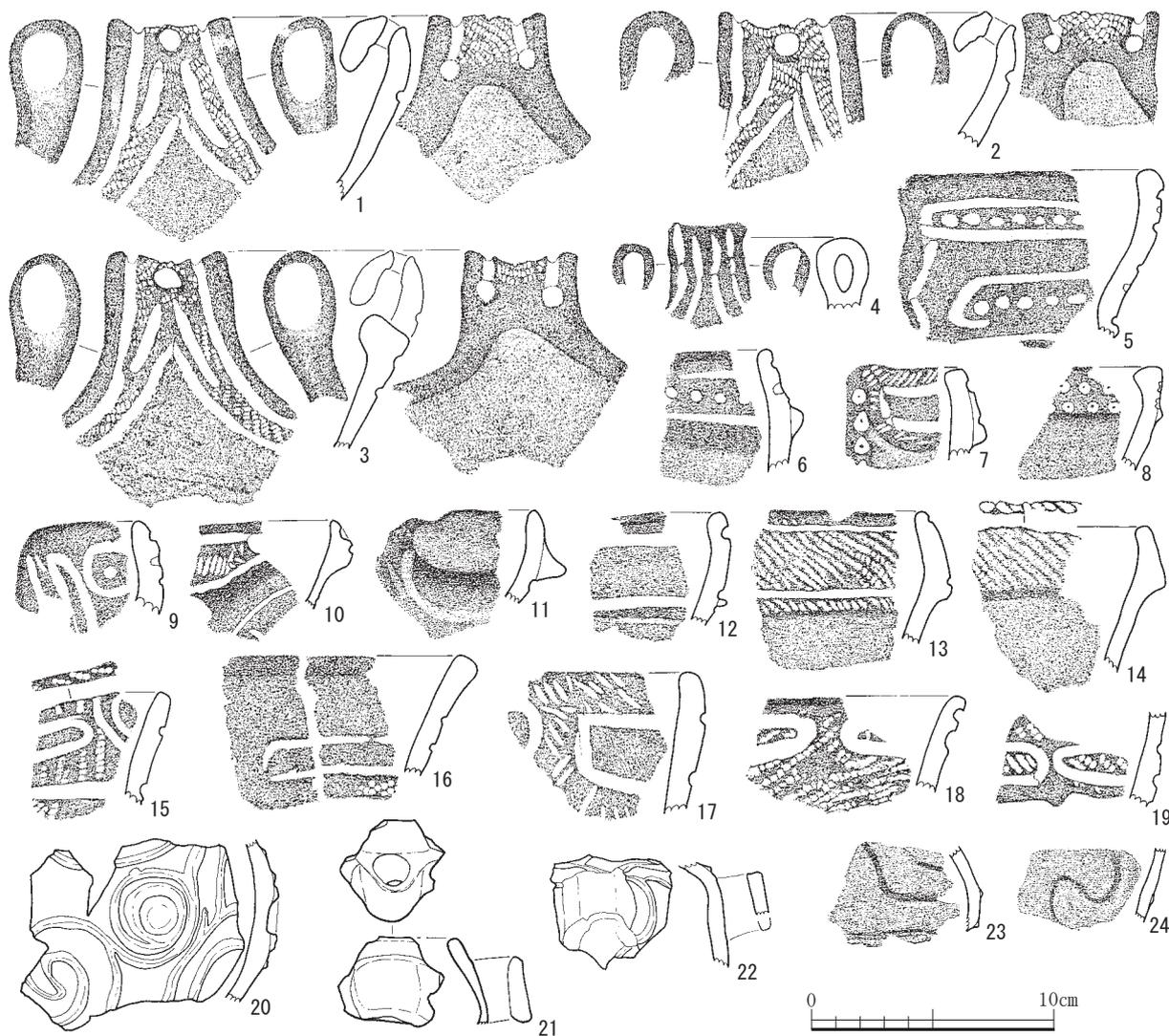
弱く内弯もしくは外反して開く口縁部を有し、口縁部に沈線による渦巻文や横長の楕円形区画文を配す土器を本群とする。

第6図3は胴部から外反して開いて口縁部に至る土器である。口辺部には大柄の渦巻文を単位文として配し、縦位の芭蕉文や蛇行沈線とコの字状文を組み合わせた文様を単位文間に下す。口端部に添わせて擬縄文を1列横

走させ、縦位文様の間にも擬縄文を充填する。また、渦巻文内や蛇行する沈線間、コの字状文内にも擬縄文を施す。

第3図49から57は波頂下に渦巻文や巴状の渦巻文(49)、同心円文(56)を単位文として配した波状縁の土器である。56、57、第7図17は横長の楕円区画文を単位文両側に配すものと思え、胴部には斜行沈線を施す。49から53、55は口縁に添う沈線1条を加え、文様带上縁を区画するものと思える。第3図58は地文縄文上に芭蕉文状の沈線を下している。第3図59から64は胴部片であり、59は縦位、横位の蛇行沈線および縄文を充填する2条の垂下沈線を配す。61は2条の弧状沈線間に縄文を充填するほか、胴部に縦位帯状に縄文を下している。64は地文縄文上に渦巻文および垂下沈線を施している。

第5図5は弱く内弯する口縁部に横長の楕円形の区画文を配し、区画内に刺突文を充填する。第7図15、16、18、19は外反する口縁部片であり、地文縄文上に沈線による横長の楕円形区画文を配す。15は外反して開く波状縁片であり、横走する沈線2条で口縁部を画して波頂部に同心円文を配すほか、楕円形の区画文を配す。地文として縦走縄文RLを施す。16は口縁部を弱く肥厚させる。第5図1から4は大型の平山形把手片であり、このうち1から3は同一個体である。波頂部を内面に巻込み箱状の把手に仕上げ、側面を拡張して貫通する円孔を穿つ。頂部にも貫通孔をもち、口縁に添う沈線を内面まで引込み、末端にやや大型の刺突を加える。これと対となる沈線を口縁部に加え、縄文を充填して縄文帯とする。また、把手頂部外面の縄文帯には八字状の短



第5図 有文深鉢形土器第7群～第10群実測図 (縮尺1/3)

沈線を追加している。

ケ 第9群土器 (第5図6～14、第6図1、2)

短く内屈する口縁部を文様帯とする、キャリパー器形の土器を本群とする。

第6図1はやや張りのある胴部が頸部で開き、内弯する口縁部に至る土器である。口縁下に横走沈線を1条配し、これを上辺として間隔を空けた矩形の区画文12単位を配して口縁部文様帯とする。各区画内には管状刺突列を2段に配す。胴部と頸部の境には3条の横走沈線を配し、上縁の1条を除き管状刺突を加える。口縁部には縄文LRを充填する。また、横走沈線下の胴部には縄文LRを带状に縦走させる。

第6図2はやや張りのある胴部が頸部でくびれて開き、内弯する口縁部に至る土器である。口端部を方角状に整え、口縁に並行して2条の沈線を間隔を空けて横走させ、沈線間に管状刺突文列1条を加えて口縁部文様帯とする。胴部には縦長の矩形区画文を配し、細かい2条一組の縦位並行細沈線を密に施す。

第5図6は口縁部下縁を隆帯で限り、刺突列1条を挟む横走沈線2条を配して口縁部文様帯とする。7は带状に肥厚する口縁部に矩形の区画文を配し、区画文接合部に縦位の管状刺突文列を配す。8は口唇部を内側に肥厚させ、口縁部に並行する横走微隆帯で幅の狭い口縁部を区画し、区画内に円形刺突文列2条を配す。なお、本資料は11群土器とすべきかもしれない。10、11は隆帯により口縁部に弧状区画文を配す。10は区画文接合部に大型の円孔を陥入させるほか、隆帯内側に沈線を加え縄文を充填する。12は口縁部下縁を隆帯で限り、間隔を空けて沈線2条を横走させ文様帯とする。13、14は内傾する口縁部に縄文を施す。13は2条の沈線を横走させ口縁部を区画する。14は口端部にも縄文を施す。

コ 第10群土器 (第5図20～24)

瓢形を呈する土器と思え、いずれも同一個体である。第5図21は上下に貫通する橋状把手を口縁下に配す。22も橋状把手であり、微隆起線で描かれる体部文様とともに配される。20は胴部下半の破片であり、大型の円孔を配した円盤形貼付文を中心に微隆起線で渦文を描く。23、24も同一個体であり、微隆起線で直・曲線文を描く。なお、本例は注口土器の可能性を残す。

サ 第11群土器 (第6図4～9、第7図～第19図)

張りのある胴部を有し、頸部から内弯気味に開き口縁部に至る土器である。口縁部と胴部の文様帯が連繋され、2条の沈線により主文様を描き、沈線間に縄文を充填する土器である。なお、主文様描線が切り合わないことを基本とする。平縁と波状縁および把手、突起などを施す土器がある。口縁部文様帯として半円形などの区画文を配す。波頂下の胴部には、口縁部と連携した垂下文やJ字文を、2条一組の沈線で描いて沈線間に縄文を充填した縄文帯を施す。また、山形状の縄文帯で胴部文様帯下縁を連結させて画す例もある。縄文施文部と非施文部とのコントラストにより文様を描く特徴がある。なお、一部に口縁部の文様帯と胴部の文様帯が連繋せずに分離する土器も見える。

本群土器は復元実測を施した土器以外に文様の全容を知れる例は少ないため、主に口縁部形態により5類に分けた。

1類 平縁の土器を本類とする。一部に小突起を施す土器を含む。

2類 やや小ぶりの把手や突起により、頂部を緩く丸山状にするものや、尖塔状にとがらせる波状縁の土器。

3類 波状縁の土器で、波頂部に大型の把手を配す土器であり、波頂部を大きく山形とするものや円柱管状

とするもの、さらに山形の把手側面を拡張して面をもたせ貫通孔を穿つものなどがある。

4類 上記以外の波状縁の口縁部片を本類とする。

5類 本群土器の胴部片を一括して本類とする。

なお、各類は文様構成や文様要素により、さらにいくつかの種に分類した。

1類 (第6図8、9、第8図、第9図1~21)

平縁の土器を本類とし、口縁下に横走縄文帯を配すもの(A種)、口縁部と口縁下の横走縄文帯上縁沈線を八字状に口端部に切り上げて半円形の区画文を残すもの(B種)、口縁部の半円形区画文の接合部に小突起を加えるもの(C種)に分ける。

A種 (第6図8、9、第8図)

第6図8は張りのある胴部が頸部で強くくびれて外反して大きく開き口縁部に至り、口唇部を短く内弯させ面をもたせた土器である。口端部に刺突を加えた円形貼付文2個一対を4単位配し、各貼付文間には交互に沈線1条を加える。胴部文様帯は口縁部の単位文間に1単位を配し、胴部のくびれ部で連結する。破片を欠くものの、文様はくびれ部で大きく上下に分かれるものと思える。胴部文様は2条一組の幅の広い充填縄文帯で描かれる。口端部の単位文際から横走して、途中スペード文状の突出文を加えて大きくC字状にうねり下る文様は、頸部で隣接文様と連結する。頸部で文様の末端は三又に分かれるが、詳細は不明である。なお、充填縄文にはRLを施す。斜行する大柄の文様や、口端部を短く内傾させる点など、後述する第12群土器に類似する要素をもつ。

第6図9は破片が少なく詳細は不明であるが、張りの弱い胴部が頸部で開いて、弱く内弯する口縁部に至る平縁の土器である。口唇部を弱く内側に巻込み、口端部を平坦に仕上げる。口縁下には並行する2条の沈線で区画する縄文帯を横走させ、縄文LRを充填する。胴部にはS字状や楕円、横走線文などを2条一組の沈線で描き縄文を充填する。主描線が切り合う箇所も見え、第12群土器に含むべきかもしれない。

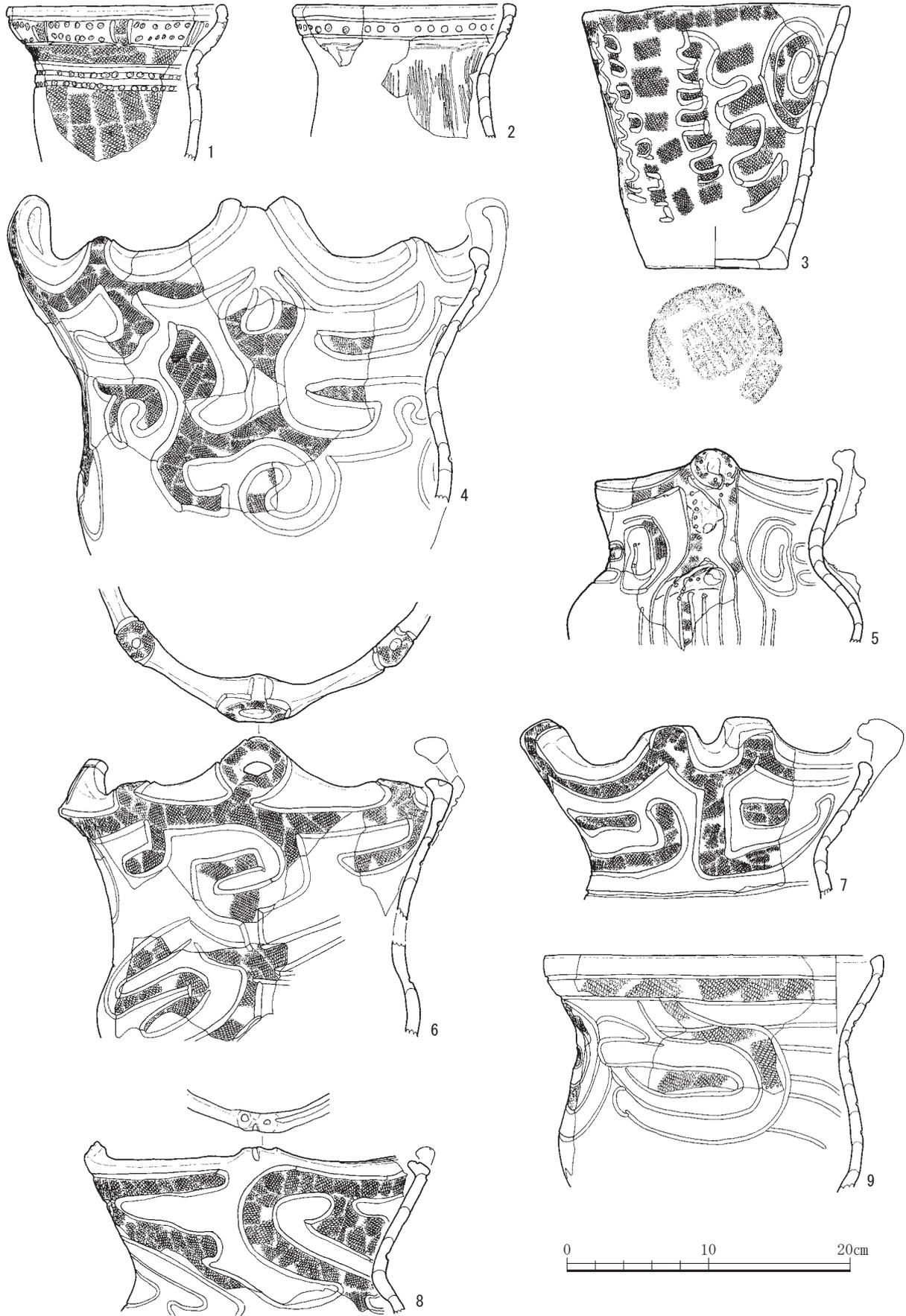
第8図は口縁部に並行する、縄文を充填する2条沈線を文様帯の上限とする土器である。このうち第8図37から50は胴部に繋がる文様を残す例である。大半が口縁部を弱く内弯させるが、一部に外反するもの(7、9)や直線的に開くもの(46)もある。また、口端部を方角状に整えるもの(1~6)や、丸く収めるもの(10~19)、内側に摘み出すもの(20~24)、内傾するもの(27~32)、つま先状とするもの(33~36)などがある。また、数は少ないが、口端部に刻み目を施すもの(9)や縄文を施すもの(10)も見える。また、通例口縁部下を無文部とするが、縄文を施すもの(10、15、17、24、30、39)や、横走する縄文帯以外にも縄文を施すもの(14)もある。なお、24は結節沈線を施し、33は沈線を引く際の強弱痕を残す。縄文帯を区画する沈線は太いものが多いが、一部に細いもの(22、38など)もある。

37は口縁部横走縄文帯の下縁に空間を空けて垂下縄文帯を施し、中位で左右に伸びる横長のL字状の文様を加え、下縁に渦巻状のJ字文を加える。なお、破片左端に突起が見え、C種にすべきかもしれない。

第8図41から44、46から48は口縁部横走縄文帯の下縁に空白を空けて垂下する縄文帯を配すが、鍵の手錠に折るもの(41、42)や、曲線状に下るもの(47など)もある。なお、38、43は沈線が切り合う例であり、38は斜行沈線とJ字文と思える文様が見える。また、50は窓枠状の矩形無文部を配すほか、45は内面の口端部内角に刺突文を加える。

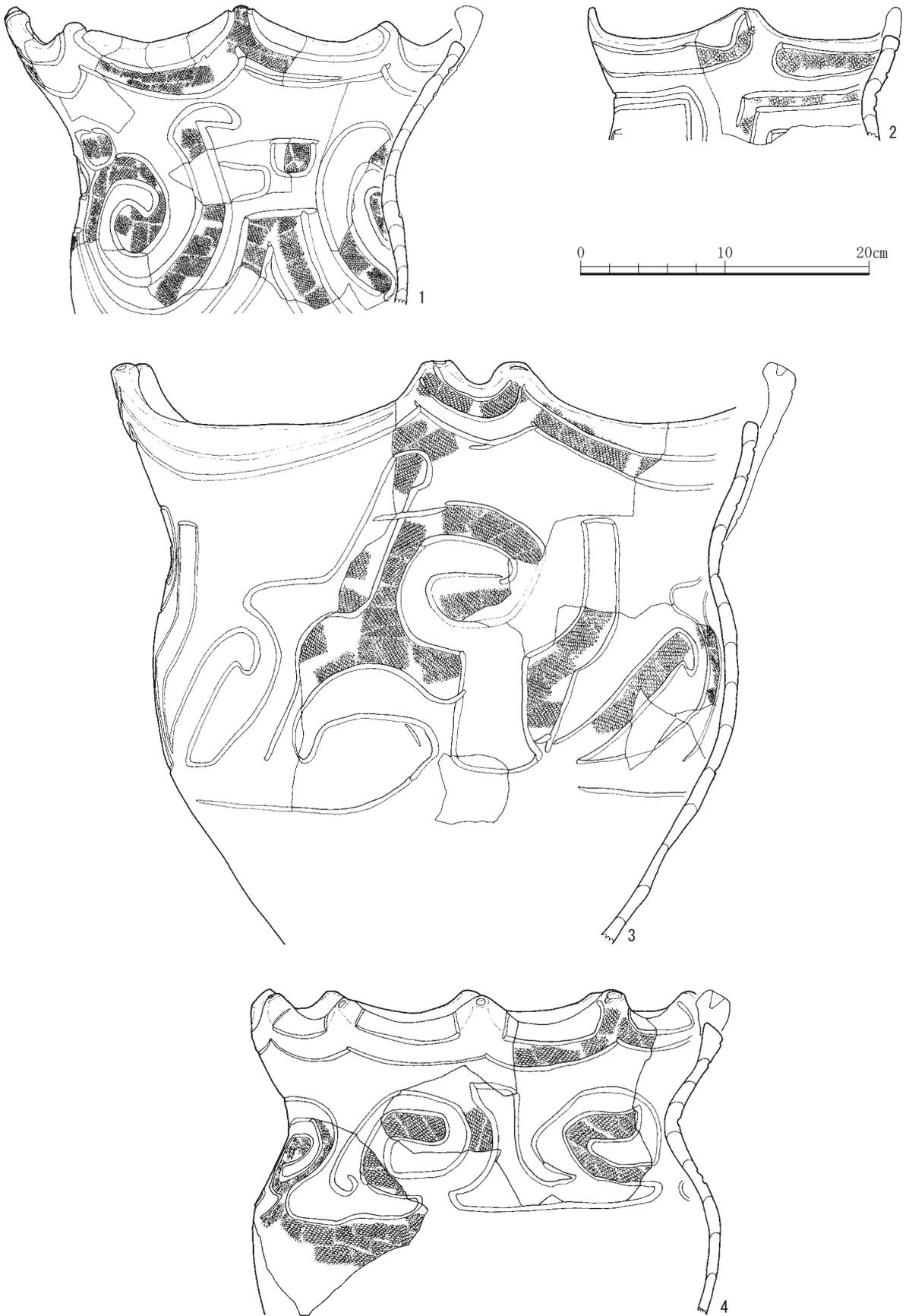
B種 (第9図1~16、第11図27)

口縁下の横走縄文帯の上縁沈線を八字状に切り上げて口縁部に半円形の区画文を生じさせるものを本種とする。八字状の沈線は弧線状を呈すもの(1~12)と鍵の手状とするもの(13~16)があり、半円形区画文の接

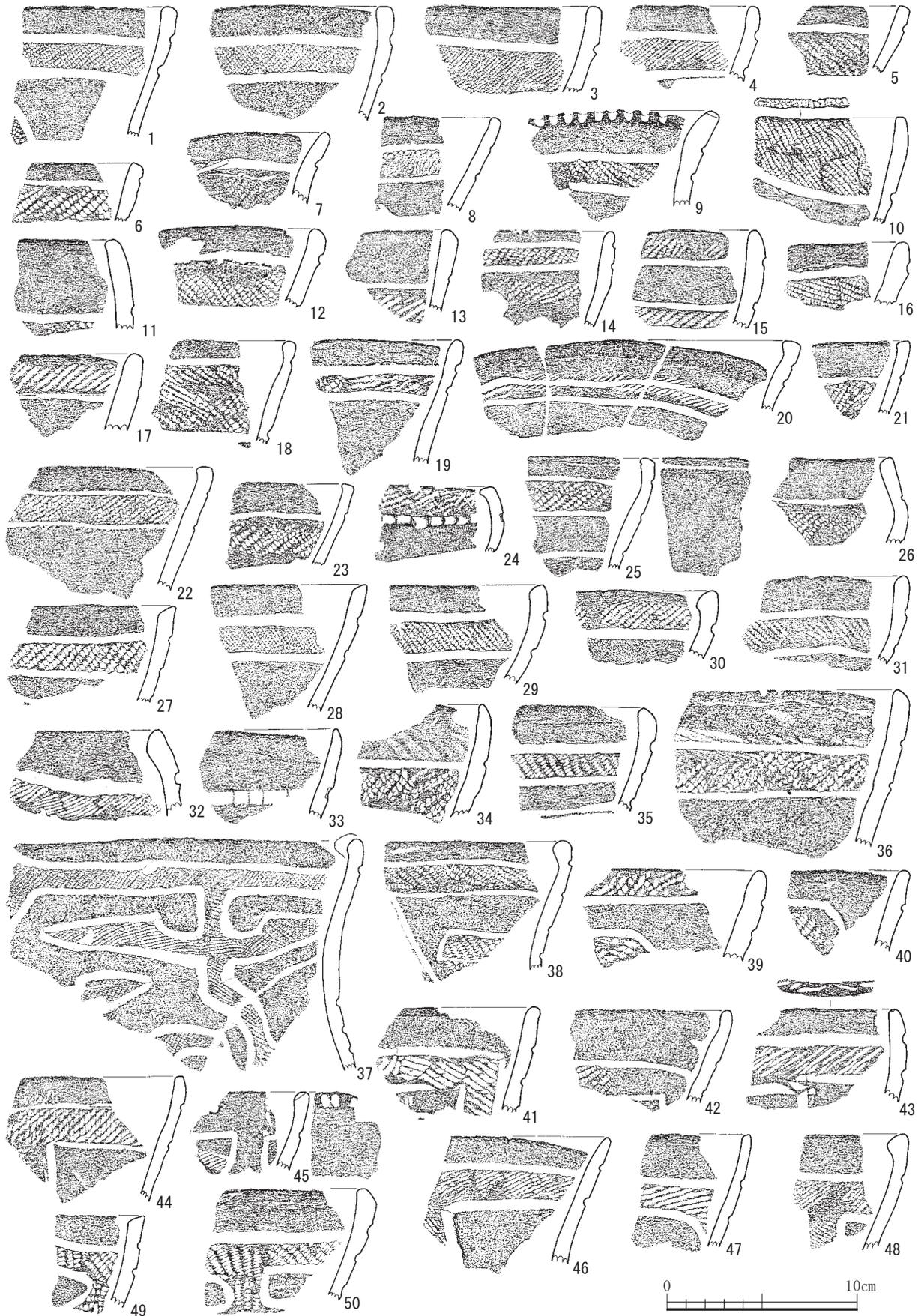


第6図 有文深鉢形土器第8群、第9群、第11群実測図（縮尺1/4）

第1節 有文深鉢形土器



第7圖 有文深鉢形土器第11群実測図（縮尺1/4）



第8図 有文深鉢形土器第11群実測図 (縮尺1/3)

合部に間隔を空けて刻み目を施すものもある（4、10、12）。

第9図1、2は同一個体であり、上縁沈線を八字状に切り上げて下縁に巻方向を逆にしたJ字文を配す。4、16は縄文充填部を反転させており、4は口端部に縄文を施す。6、8、12、15は沈線間に縄文の充填を見ない。

第11図27は平縁の土器であり、口縁下の縄文帯を八字状に切り上げる。口縁下に広く空いた空間に、縄文帯を横走させ三角形の空白部を残す。底辺中央部を空けて、さらに八字状の縄文帯を加えている。

C種（第9図17～21）

口縁部の半円形区画文の接合部に小突起を加えるものを本種とする。口縁部の半円形（19、20）もしくは矩形区画文（17、18、21）間の口端部に、丸山形の突起を加えるものであり、突起側縁の口端部まで沈線を引いている。

2類（第7図1、4、第9図22～51、第11図、第12図）

やや小ぶりの把手や突起により、頂部を緩く丸山状にするものや、尖塔状にとがらせる波状縁の土器を本類とする。

本類は口縁部の半円形区画の形状、口端部形態、文様要素から、緩い山形状の口縁部をもち、口縁下縄文帯の上縁沈線を八字状もしくは鍵の手状に口端部に切り上げて下縁沈線を直線もしくは波状線とするもの（A種）、口縁下の縄文帯が非対称形となるもの（B種）、やや尖った口縁部の突起に口縁下縄文帯の上縁沈線を切り上げて頂部を合わせるもの（C種）、緩く丸山状とする口縁部を有し、口縁に並行する横走縄文帯などを口縁下に配すもの（D種）、波頂部の口縁部内面を肥厚させるもの（E種）、口縁部に円孔を施すもの（F種）、口縁部の区画文内に刺突文を充填するもの（G種）に分ける。

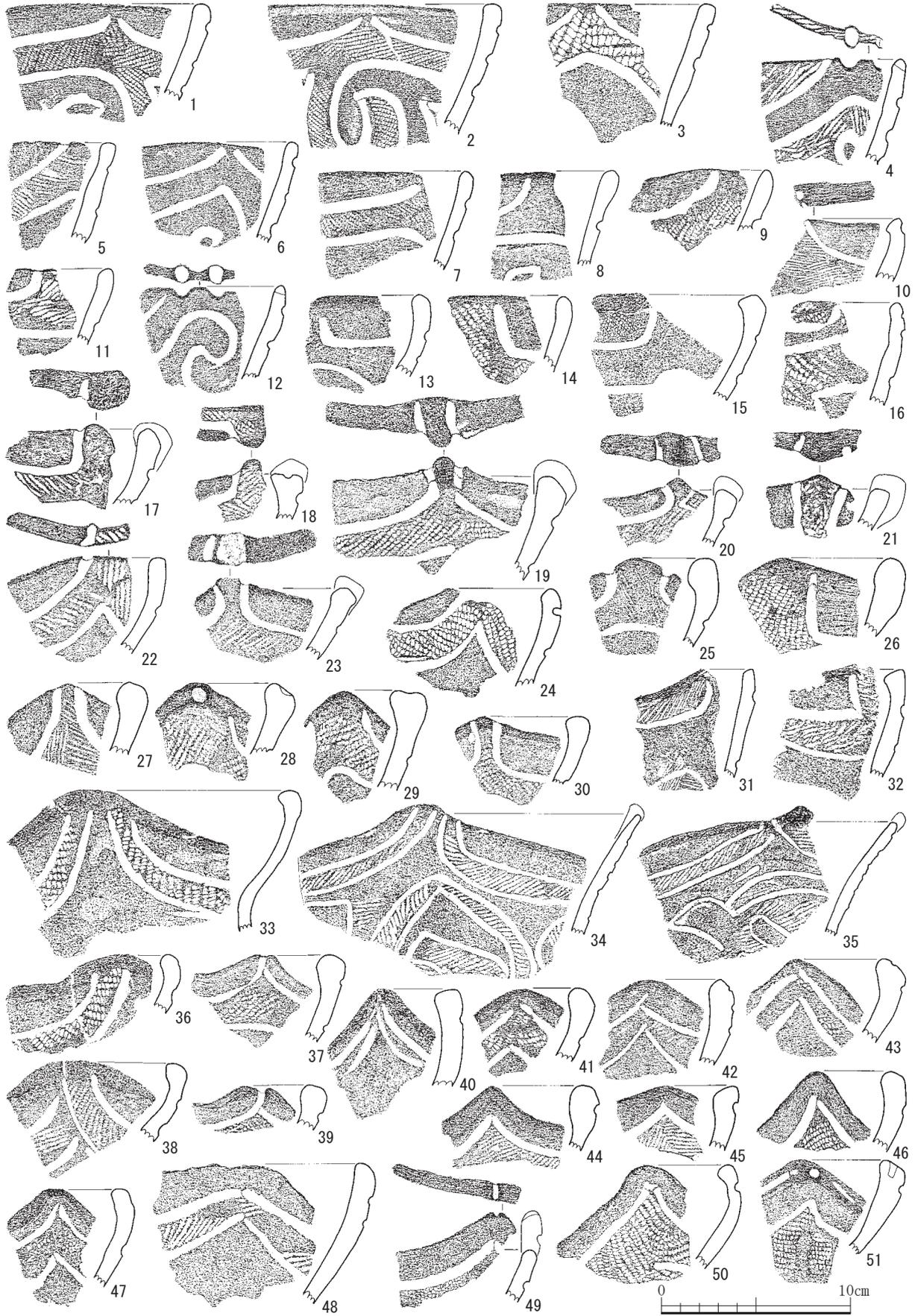
A種（第7図1、4、第9図22～36、第11図1、6～8、12～14、29～32）

口縁下横走縄文帯の上縁沈線を八字状もしくは、鍵の手状に切り上げる波状縁の土器を本種とする。なお、下縁沈線は直線もしくは波状線とする。

第7図1はやや張りの弱い胴部が頸部で大きく開き、弱く肥厚して方角状に整えた口縁部に至る。口縁部には大小一对の山形突起4単位を配す。口縁部には大小の波頂部間を繋ぐ縄文帯を口縁波形に合わせて配し、上縁沈線を口唇部まで切り上げる。口縁部文様帯と胴部文様帯は分離し、胴部文様帯には巻きの強い縦位のJ字文を4単位配して文様帯下縁を山形状の縄文帯で閉じるものと思える。なお、J字文間には縄文を充填する略方形の単独文を配すが、一部にJ字文と切り合う部分も見える。

第7図4は強く張った胴部が頸部でやや強くくびれ、内弯気味に開いて断面三角形に肥厚した口縁部に至る土器であり、口縁部には先端に刺突文を加えた方柱状の突起10単位を配す。口縁部横走縄文帯上縁の沈線は、波頂部際で鍵の手状に折れ口唇部まで切り上がり、これに合わせて下縁沈線を弧状に引いて、連続する縄文帯とする。口縁部と胴部の文様帯は分離し、胴部には下縁の横走沈線1条で連結する、渦巻文や撥形文を組み合わせた単位文を配す。渦巻文内に縄文RLを充填するほか、胴部下半にも縄文を施す。

第11図1は波頂部で横走縄文帯上縁沈線を切り上げて接合部にドーナツ状の貼付文を加える。貼付文を取囲むように縄文帯を垂下させ、下部は錨状の突出文もしくはJ字文として収める。また、波底部には口縁部横走沈線帯から小さなJ字状の文様を突出させ、さらに縄文帯を垂下させる。7は波頂部口端に、中央部に刺突を加えた円形浮文を配し、これを取囲むように口縁部横走縄文帯上縁沈線を切り上げ、下縁沈線からは垂下する縄文帯を配す。8は小波状を呈する口縁部片であり、下縁沈線に三角形の空白部が見える。10は波頂部の口端に管状刺突を3箇所配し、11は口縁下縄文帯上縁沈線を波頂部で切り上げて口端部に2箇所の刻みを施すほか、下縁沈線を下しJ字様の文様を加える。13は緩い山形の口縁部を有し、口縁部を波底部で途切れる弧状



第9図 有文深鉢形土器第11群実測図 (縮尺1/3)

沈線で画し縄文を充填する。頸部には横走する縄文帯を配し、下縁沈線より垂下文やJ字文を下す。29は口唇部をやや肥厚させて口縁部が内弯する土器であり、波頂部で縄文帯上縁沈線を弧状に切り上げるほか、下縁沈線より八字状に縄文帯を下す。30から32は縄文帯上縁沈線を波頂部で弧線状（30、32）や鍵の手状（31）に切り上げるが、下縁沈線を波状とするもの（30、32）と直線とするもの（31）がある。

B種（第7図2、第9図33～38、第11図5）

口縁部縄文帯を画す2条の沈線を共に口端部に切り上げて非対称形となるものを本種とする。

第7図2はやや張りのある胴部からくびれて頸部から内弯気味に開く土器であり、4単位の波状口縁を呈すものと思える。口縁部に配する横走縄文帯は互いに接続せず、波頂下で一方の先端をL字状に屈曲させる。胴部には方形文を多重に配して縄文LRを充填する。口縁部文様帯と胴部文様帯の連繋は見えない。

第9図33は内弯する波状縁の口縁部片であり、切り上げ部を波頂部からやや右方にずらして接合させずに八の字状としている。34は外反して開く小波状を呈す口縁部片であり、波頂部をやや肥厚させ口端部には面をもたせる。弧状の切り上げ箇所を波頂部から右方にずらし、右方縄文帯の末端を鍵の手状としている。胴部には同心円文もしくは渦文を沈線で描き縄文を充填するほか、方形状の文様も見える。35も外反して開く口縁部片であり、口唇部に三角形の突起を施す。横走縄文帯は接合せず、入字状にくい違ふ。胴部には縄文を充填する曲線文を描くが、詳細は不明である。36、38も内弯する波頂部片であり、波頂部で口縁下の横走縄文帯を入字状にくい違わせて配している。

C種（第9図37、39～51、第10図1、2、第11図3、4、9～11、15～18、26、28）

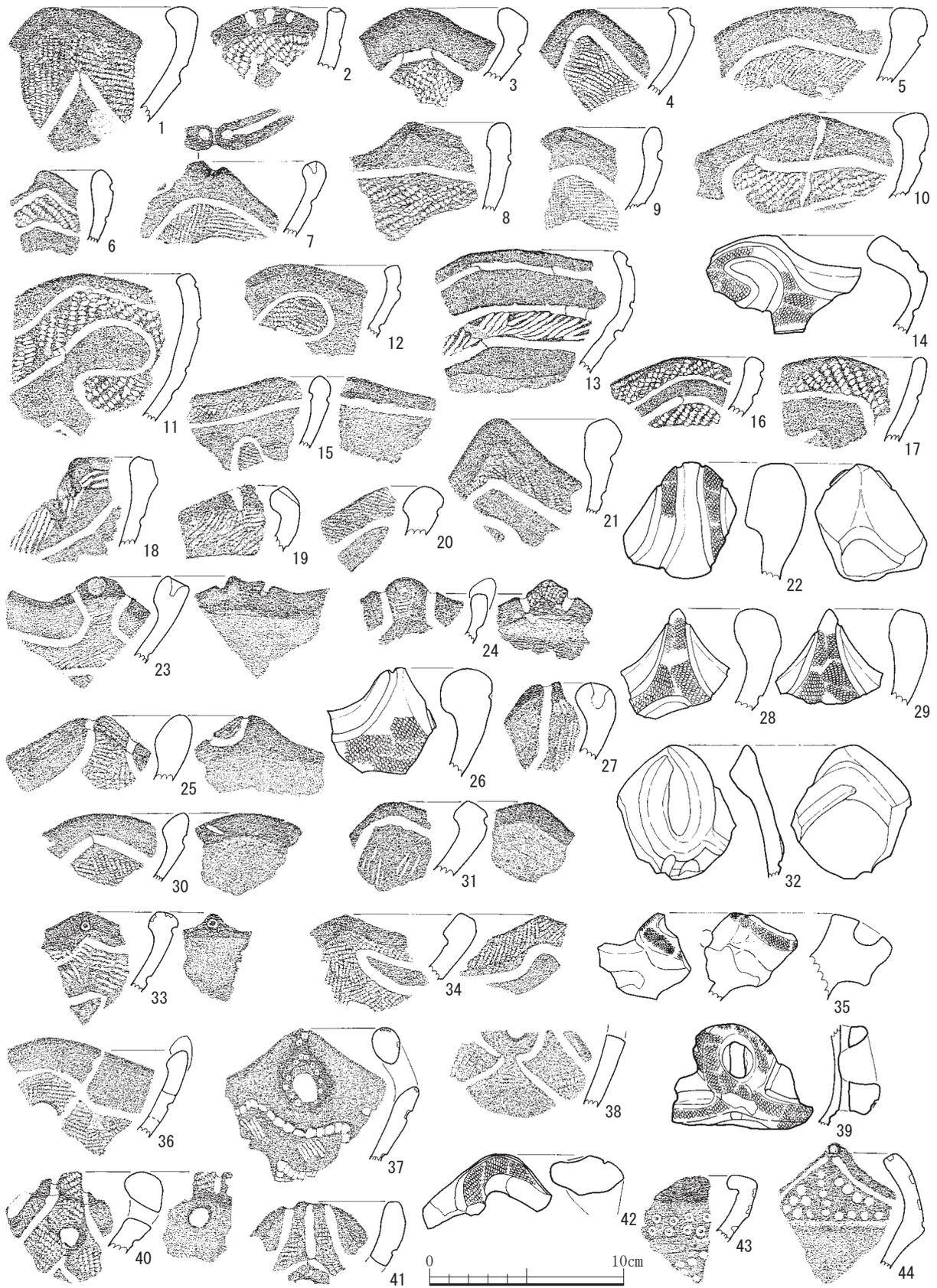
やや尖った口端部に縄文帯の上縁沈線を切り上げ、沈線頂部を合わせる土器を本種とする。

第9図37、39は口縁下の縄文帯上縁沈線を波頂部で接合させ、1条を入字状に口端部に切り上げる。なお、37では縄文帯下縁沈線を横走させる。40から48は波頂部片であり、縄文帯の上下縁沈線の頂部を合わせる。50、51では縄文帯の上縁沈線のみを合わせている。なお、51は波頂部口端部に刺突文と短沈線を加えている。第10図1、2は口唇部と沈線間に縄文を充填している。

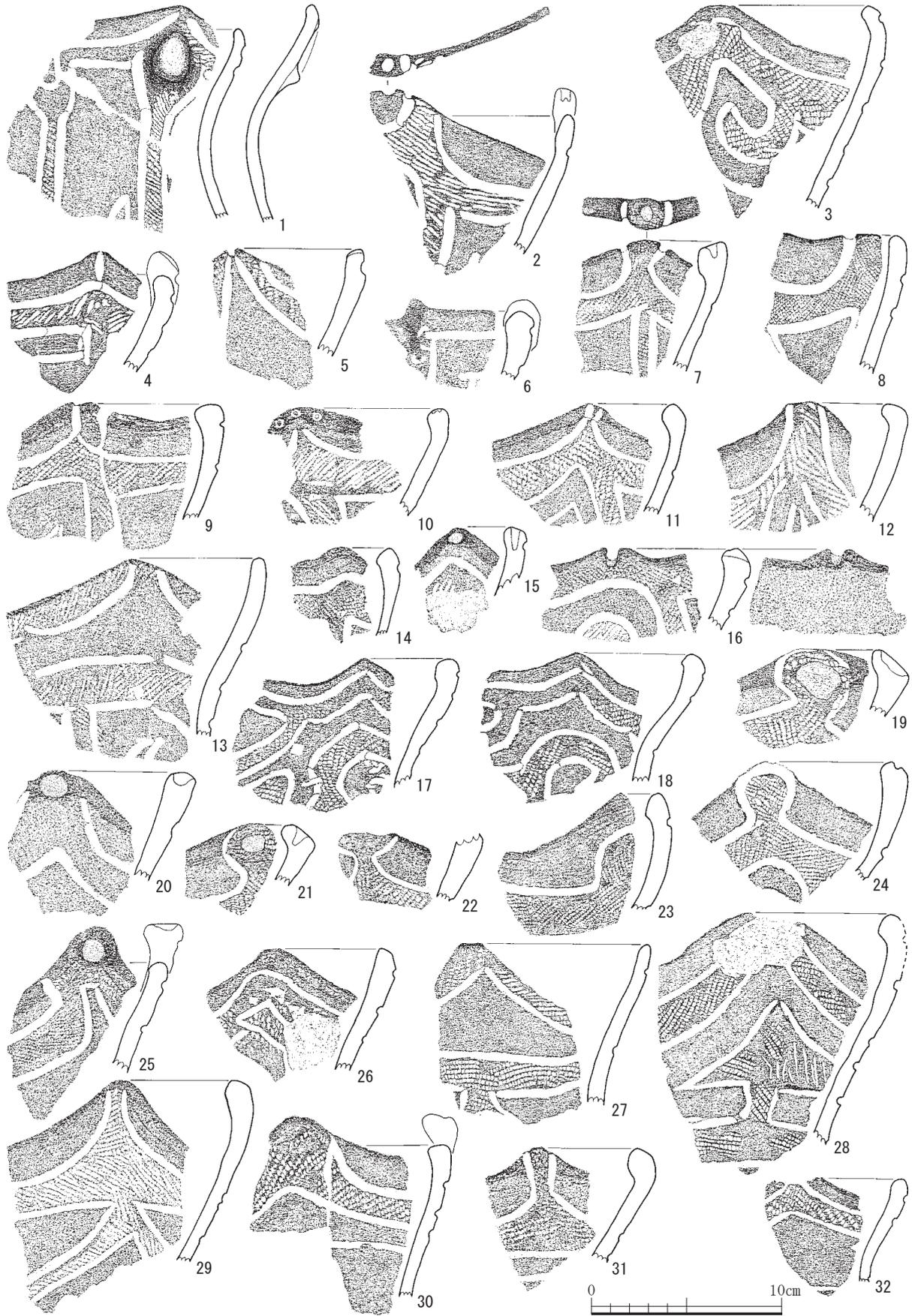
第11図3は口縁の波形に合わせて縄文帯区画上縁沈線を引き、波頂部よりやや下った位置で下縁沈線に間隔を空けて小さなJ字文を加える。4は波頂下で縄文帯区画上縁沈線を合わせ、さらに波頂口端部に向かい短沈線1条を伸ばす。なお、下縁沈線の間隔を空け垂下文を下し、矩形の空白部を残している。10、11は波頂部の口端部に管状刺突文や短沈線を施し、縄文帯上端沈線を合わせるほか、下縁沈線の間隔を空けJ字文を下す。17、18は口縁部をやや内弯させる同一個体片であり、口縁部縄文帯の上下縁沈線を合わせるほか、胴部にJ字文などを施し縄文LRを充填する。28は内弯する波状の口縁部片であり、口端部に面をもたせて方角状に仕上げる。口縁波形に合わせて頂部を合わせた口縁部縄文帯を配す。胴部には横走縄文帯の上縁に間隔を空け、波頂部方へ尖ったスペード状の文様を突出させている。なお、充填縄文には縄文LR、条の太さの異なる縄文LR、および短沈線を使用している。

D種（第10図3～18）

緩く丸山状とする口縁部を有し、口縁に並行する横走縄文帯などを口縁下に配す土器を本種とする。第10図10は内面をやや肥厚させる口縁部片であり、波頂下に単独文かと思える横走縄文帯を施す。11は口端部を方角状に仕上げた内弯する口縁部に、小さなJ字文を加えた口縁部横走縄文帯を配す。12もJ字文を配すが11とは縄文充填箇所を異にする。13は大きく山形に波打つ内弯する口縁部片であり、口縁下に沈線1条、縄文帯1条を横走させる。14は強く内弯する口縁部片であり、左右非対称の山形突起を配し、波頂部に白抜きで小さなJ字文を加える。16、17は縄文帯を口唇直下に置いて白抜きの文様を描く。



第10図 有文深鉢形土器第11群実測図 (縮尺1/3)



第11圖 有文深鉢形土器第11群実測図 (縮尺1/3)

E種 (第10図19~35)

波頂部の口縁部内面を肥厚させるものを本種とする。

第10図19は波頂部片であり、口唇部に刻みを施す。20、21は波頂部片であり、口縁部内面に肥厚帯を廻らせる。口縁部に並行する沈線と口唇部の間に縄文を施す。22は先端を丸く収める波頂部片であり、内面に有段の肥厚帯をもつ。外面にはかみ合わない縄文帯2条を下し、内面肥厚帯には人字状に稜をもたせる。23は波底部の円形の突起片であり、内面にやや幅の狭い肥厚帯をもつ、突起には刺突を加えて口縁部縄文帯の上縁沈線を添わせている。24は波頂部内面の肥厚部に縄文を施す。25は口縁部縄文帯上縁沈線を波頂部からずらし、半円状に内面まで引込み縄文を充填する。26は尖塔形の波頂部片であり、口縁部縄文帯の上縁沈線を、波頂部と右肩部にずらして施す。28、29も尖塔形の波頂部片であり、波頂部の両側、正位の位置から上縁沈線を引いている。30、31は口縁部内面に平坦で面をもつ肥厚帯を施す。32は波頂部外面に扁平な隆帯でJ字文を描き、やや細めの隆線を垂下、斜行させている。内面肥厚帯にも微隆起線により入字状の文様を加えている。33は口縁部内面に肥厚帯をもち、波頂部の内外両面に管状刺突文を配す。34は内面の肥厚部に添わせて沈線を施し、口端との間に縄文LRを充填する。

F種 (第6図5、6、第10図35~42、第11図2、19~25)

口縁部に円孔を施すものを本種とする。

第6図5は大きく張った胴部が頸部で強くくびれ、外反して口縁部に至る波状縁の土器である。口縁部には刺突列を加えたドーナツ状の貼付文を突起として2単位配す。突起下と胴部の肩は撚り紐状の橋状把手で結ばれるものと思え、把手上面には刺突文を加える。口縁下横走縄文帯上縁沈線は突起間を繋いで配されるものと思える。円形突起側縁で上縁沈線を切り上げる。胴部には橋状把手を取囲むように2条沈線で区画された縄文帯を下し、胴部の把手基部下で弧状に分岐させて末端に刺突を加えた沈線3条を区画内に、区画外縁に各1条を垂下させる。屈曲する頸部には末端に刺突を加えた沈線で渦文を単独文として配すものと思え、ほかに横長の楕円文かと思える文様も見える。各文様区画内には縄文RLを充填する。文様帯および文様構成には不明な点が多い。

第6図6はやや下膨れで弱く張る胴部がくびれ、頸部から開いて断面三角形状に肥厚する口端部に至る4単位波状縁の土器である。三角形状を呈する波頂部には貫通する円孔を穿ち、波底部には中央に刺突を加えたドーナツ状の貼付文を加える。口縁部横走縄文帯上縁沈線は波頂部では円孔を、波底部では貼付文を取囲むように切り上げる。さらに波頂部では沈線末端を、八の字状に内面に向かい引き込む。縄文帯下縁沈線に波頂部と波底部で空白を設け、波頂部には大型の渦巻文、波底部には小型のL字文を各々下す。波頂部下の渦巻文からは、さらに2段目の渦巻文を下すものと思えるが、文様の連結などを含め把握は困難である。

第10図35は渦巻状を呈する波頂部把手片であり、渦文側縁に縄文を施す。36は緩く丸山形に波打つ波頂部片であり、口唇部内面に平坦な面をもたす。波頂下には貫通する円孔を施し、口縁部横走縄文帯が円孔を取囲む。37は三角形状の波頂部に大型の円孔を貫入させ、周縁に管状刺突列を円形に配す。口縁部横走縄文帯は波頂下でノの字状に止めて、枝分かれして垂下するものと思える。なお、沈線は結節沈線であり、縄文RLを充填する。38は波頂部の貫通円孔に合わせ横走縄文帯を止めている。39はループする隆帯を鐔状に左右に伸ばし隆帯上に縄文を施す。なお、ループ状の隆帯には上下方向の貫通孔があり、双耳壺とすべきかもしれない。40は口縁部の縄文帯内に貫通する刺突を穿ち、41は貫通する円孔周囲に円形に沈線を施し、2条沈線による縄文帯中央に1条を加える。42は肥厚する三角形の波頂部に円孔を穿ち、周囲に円形に沈線を廻らせて縄文を充填する。

第11図19~22、25は波頂部および波底部に浅い円形の陥入を配し、口縁部縄文帯上縁沈線で取り囲む。22~24は上縁沈線から派生する円文を単位文として配している。

G種 (第10図43、44)

口縁部の区画文内に刺突文を充填する土器である。

第10図43は口唇部を強く内屈させる口縁部片であり、断面三角形の微隆線と口縁部間に管状刺突文列を2条横走させるほか、胴部の並行沈線による区画内に刺突文を充填する。44はくの字状に内傾する口縁部片であり、波頂部に円形刺突を加え、口縁部には三角形の区画を描いて円形刺突文を充填する。なお、本例は第17群土器に含めるべきかもしれない。

3類 (第6図4、7、第7図3、第12図、第13図、第14図1～4)

波状縁の土器で、波頂部に大型の把手を配す土器を本類とする。

本類は波頂部の形状から、整った対称的な山形を呈すもの(A種)、整った対称的な山形を呈すもので、把手上面に略円形の面をもつもの(B種)、中空管状のもの(C種)、山形把手頂部を内方に肥厚させて側面を拡張し単独文を配すもの(D種)、山形口縁を内面に折り返して把手を横断する横方向の貫通孔を設け、把手側面を拡張し耳朶状の面をもたせるもの(E種)に分ける。

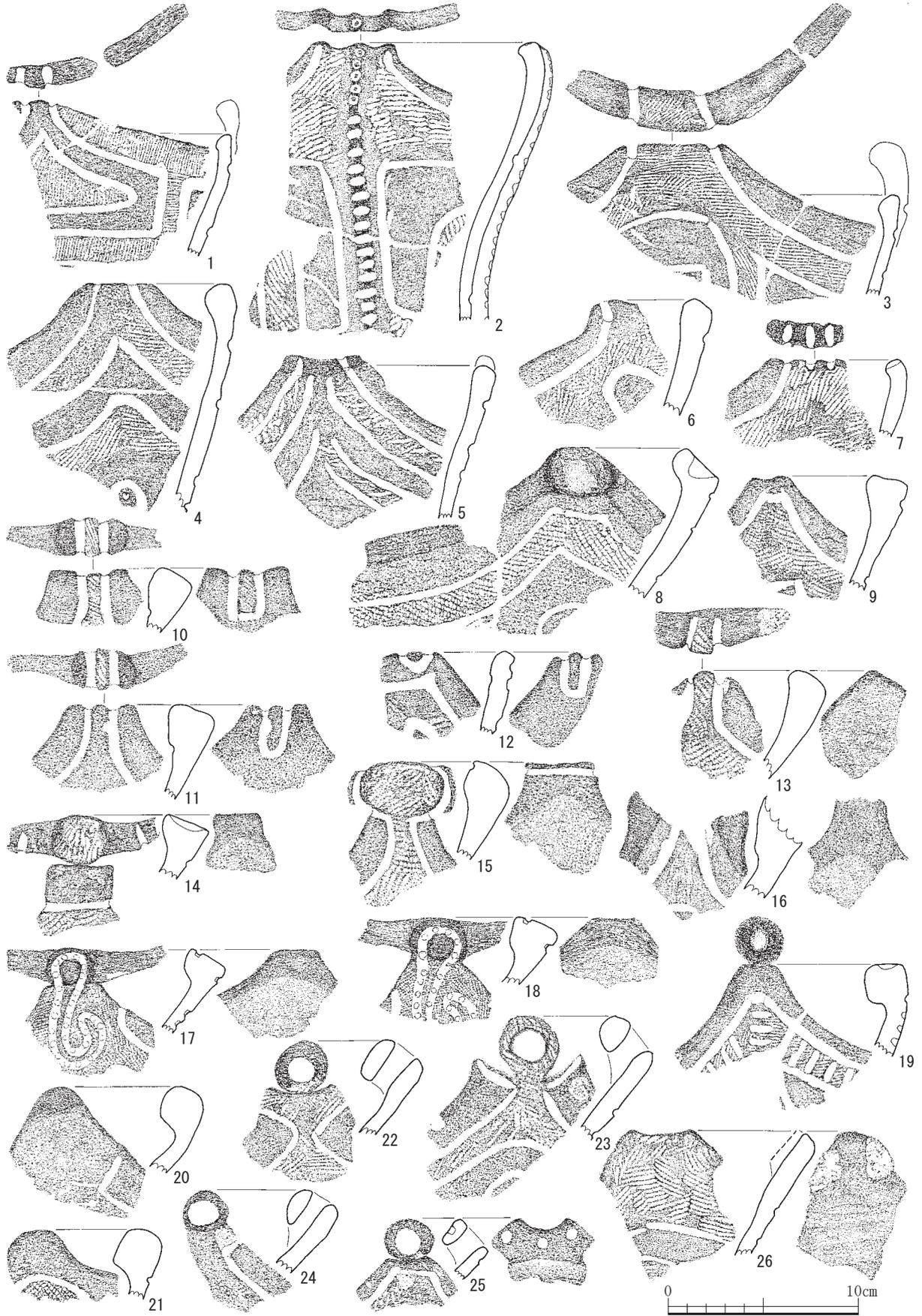
A種 (第6図7、第7図3、第12図1～9、12、13)

左右対称の整った山形を呈する板状もしくは、内弯する把手を口縁部に配す土器を本種とする。

第6図7はやや張りのある胴部がくびれて頸部で外反して開き、内弯気味の口縁部に至る土器である。4単位の波状口縁を有し、波頂部は双頭の方形突起を加えた山形口縁とする。口縁部縄文帯を波形に合わせて配し、縄文帯上縁沈線を双頭の波頂部の上面までU字状に伸ばしている。なお、文様帯は頸部のくびれ部で上下に分かれるものと思え、横走る沈線1条が見える。口縁部には波頂部の口縁部横走縄文帯から、L字状の文様を伸ばし、空白部に楕円文を追加する。縄文はLRを充填する。

第7図3は張りのある胴部がくびれて頸部で外反して開き、内弯気味の口縁部に至る。口縁部には4単位の双頭の山形把手を配した大型の土器である。把手は先端部に円孔を陥入させた円柱状の山形突起一対から成る。口縁部文様帯は波形に合わせて配す横走縄文帯に、波頂部下で沈線1条を加え3条とし、上側沈線間に縄文RLを加えて単位文とする。胴部文様帯は口縁部文様帯と直接接合せず、一部で縄文を区画外まで伸ばして接する箇所が見える。胴部文様帯は、波頂下に柄がついた渦巻文を配して白抜きとし、外周に沈線1条を添えて縄文帯とする。縄文帯側縁には斜行し、突出文を加えたJ字文を配す。なお、文様帯下端を縄文帯から派生する横走沈線で画す。各々の描線が切り合っているほか、数種の文様を組み合わせた単位文様を繰り返し配している。なお、文様帯下端は、弧線文から派生する横走沈線1条で画しており、単位文様1単位の範囲を示すのかもしれない。縄文の充填は不規則であり、区画の内外が明確に区別されていない。

第12図1は山形の波頂部片であり、内傾する口端部に面をもたせ、波頂下に撥形文様を2条沈線で描き上縁沈線を口端部まで八字状に切り上げる。口縁部下縁を横走沈線で画し、櫛歯状工具による細かい集合沈線を充填する。2は山形把手頂部を三つ山状とし、中央の山からは隆帯を垂下させ、口端部および口縁部に管状刺突、頸部以下には刻み目を施す。両側の山に向かい口縁部横走縄文帯上縁沈線を切り上げ、横走る下縁沈線は隆帯に添い垂下させる。なお、垂下沈線は左右に突出し、非対称的な曲線文を描く。区画内には縄文Rを充填する。3は波頂部で口唇部をやや肥厚、内弯させ、口端部に面をもたせる。口縁部横走縄文帯上縁沈線を波頂部で間隔を空けて口端部まで切り上げる。また、下縁沈線は波頂部下で間隔を空けてJ字文を描き縄文RLを充填する。4、5は山形把手下に口縁波形に合わせて八字形の縄文帯を2段に配し、4では更に頂部を丸く収めた文様を波頂下に配して縄文LRを充填する。下段区画では縄文の施文方向を変え羽状様とする。5は下段の八字状文左辺の下縁沈線を欠き、縄文Rを充填する。6、7も波頂部片であり山形把手内角の口端部まで縄文帯上縁沈



第12図 有文深鉢形土器第11群実測図 (縮尺1/3)

線を切り上げる。なお、7は波頂部に刻み目を加える。8、9は波頂部を肥厚させ面をもたせ円孔を陥入する。8は口縁部横走縄文帯も口縁波形に合わせ山形とし、広く空いた波頂部下にJ字文かと思える区画沈線を配す。9も同様の文様構成をもち、波頂下に方角状の区画沈線を配す。共に縄文LRを充填する。なお、9は施文方向の変化から羽状縄文に見える箇所がある。12は板状の山形口縁片であり、口縁部縄文帯を波形に合わせ山形とする。なお、波頂部に口端部を横切る楕円文を施す。

B種（第12図10、11、14～21）

整った対称的な山形を呈すもので、把手上面に略円形の面をもつものを本種とする。

第12図10、11は波頂部を肥厚させ楕円形状の端部をもつ。口縁部縄文帯上縁沈線を波頂部で切り上げて内面でU字状に結合させる。14は波頂部を円柱状に仕上げ、頂部に浅く窪みをもたせ縄文LRを施す。把手基部に2条の横走沈線を加え縄文帯とし、上縁沈線を口端部まで伸ばす。15、16も波頂部を円柱状に仕上げ、15は口縁部縄文帯上縁沈線を把手上面まで伸ばして円文を加え、縄文LRを充填する。17、18は同一個体の波頂部片であり、山形の波頂部を円柱状に拡張して口端部に面をもたせる。波頂部には上面からJ字状に下る刺突を加えた沈線を配す。なお、口縁部縄文帯上縁区画沈線は、波頂部をやや下がった位置で切り上げ、末端は外面に止まる。縄文LRを充填する。19から21は頂部の狭い山形把手を配し、19は頂部に円孔を施す。口縁部横走縄文帯は口縁波形に合わせ山形とし、縄文LR充填後、さらに短沈線を充填する。20は縄文帯上縁沈線を鍵の手状に折って口端部へ切り上げる。21は口縁部の縄文帯を弧状に配す。

C種（第12図22～26、第13図1～6）

波頂部に管状中空の山形把手を配すものを本種とする。

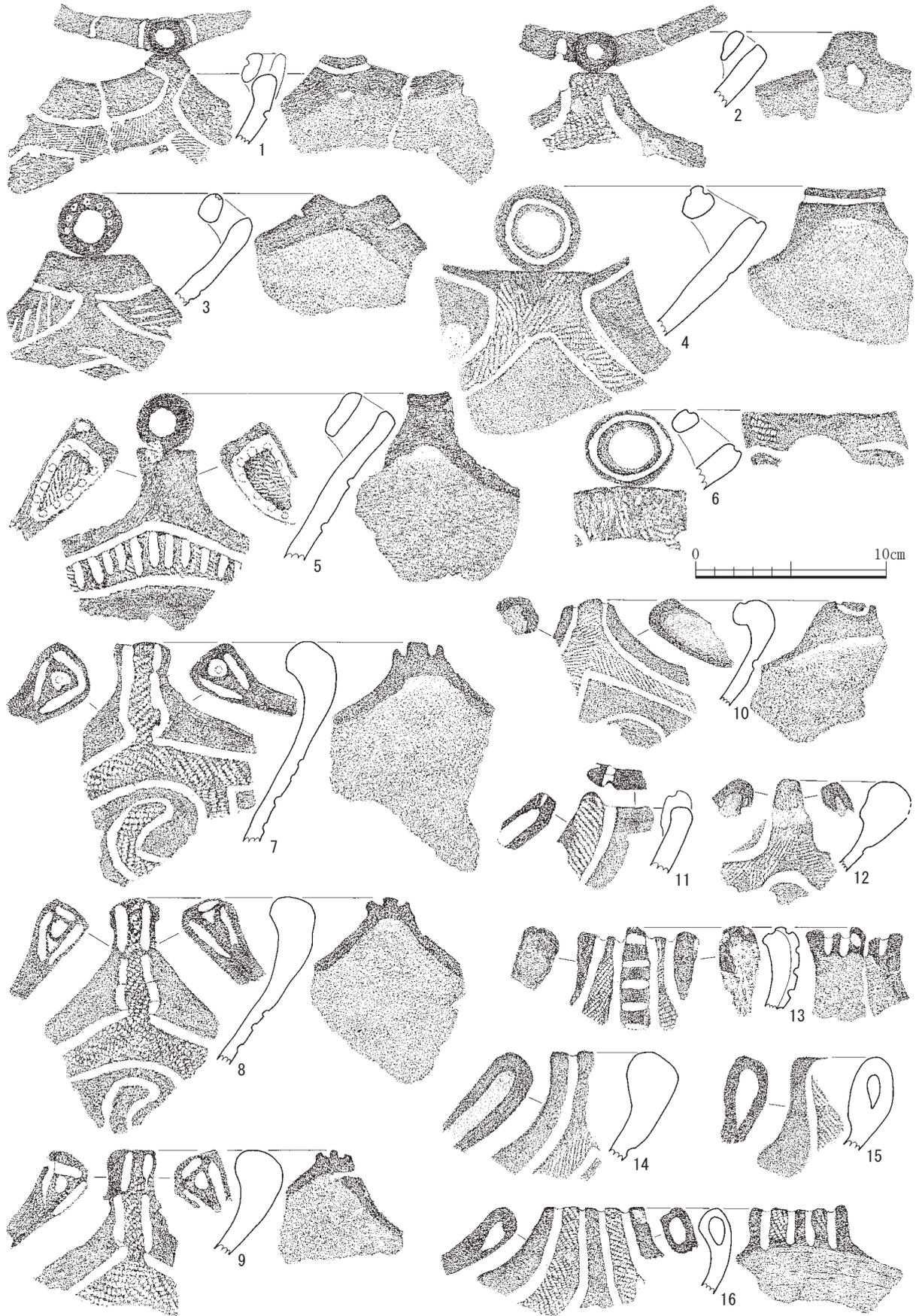
第12図22は波頂部に端面が円形の管状中空把手を配し、口縁部横走縄文帯上縁沈線を把手中位で口端面まで丸みをもって切り上げる。23は山形の管状中空把手を配し、波形に合わせた口縁部横走縄文帯上縁沈線を把手上面際に施す。波頂部下はJ字文と思える沈線区画を配す。いずれも縄文LRを充填する。24は縄文帯区画沈線を外面で鍵の手に折り、25は口縁波形に合わせ山形とする。なお、25内面には管状刺突を3箇所に加える。26は管状部内面側を欠くが、把手下に白抜きで文様を描く。

第13図1は双頭の山形把手片と思え、口縁部縄文帯上縁沈線を口端部まで引き上げて把手外周を周回させる。2は管状部を貫通する円孔を刺突で作出し、口縁部縄文帯上縁沈線にくい違いをもたせ、一方を口端部まで他方を外面で止め、縄文LRを充填する。3は管状中空把手上面に、円孔に添わせた管状刺突列1条を施す。口縁部横走縄文帯上縁沈線は把手基部で口端まで切り上げる。4、6は大型の管状中空把手であり、管状部に添わせ沈線1条を廻らせる。また、波形に合せて口縁部縄文帯を配し、上縁沈線を把手頂部側縁に廻らせる。なお、沈線区画内には縄文RLを充填する。5は長くの伸びる管状中空把手を配し、把手側縁には刺突を加える沈線で、三角形の単独文一對を配して縄文LRを充填する。口縁波形に合わせて配す横走縄文帯は、上縁沈線を山形に広げ、縄文充填後に縦位短沈線を加える。

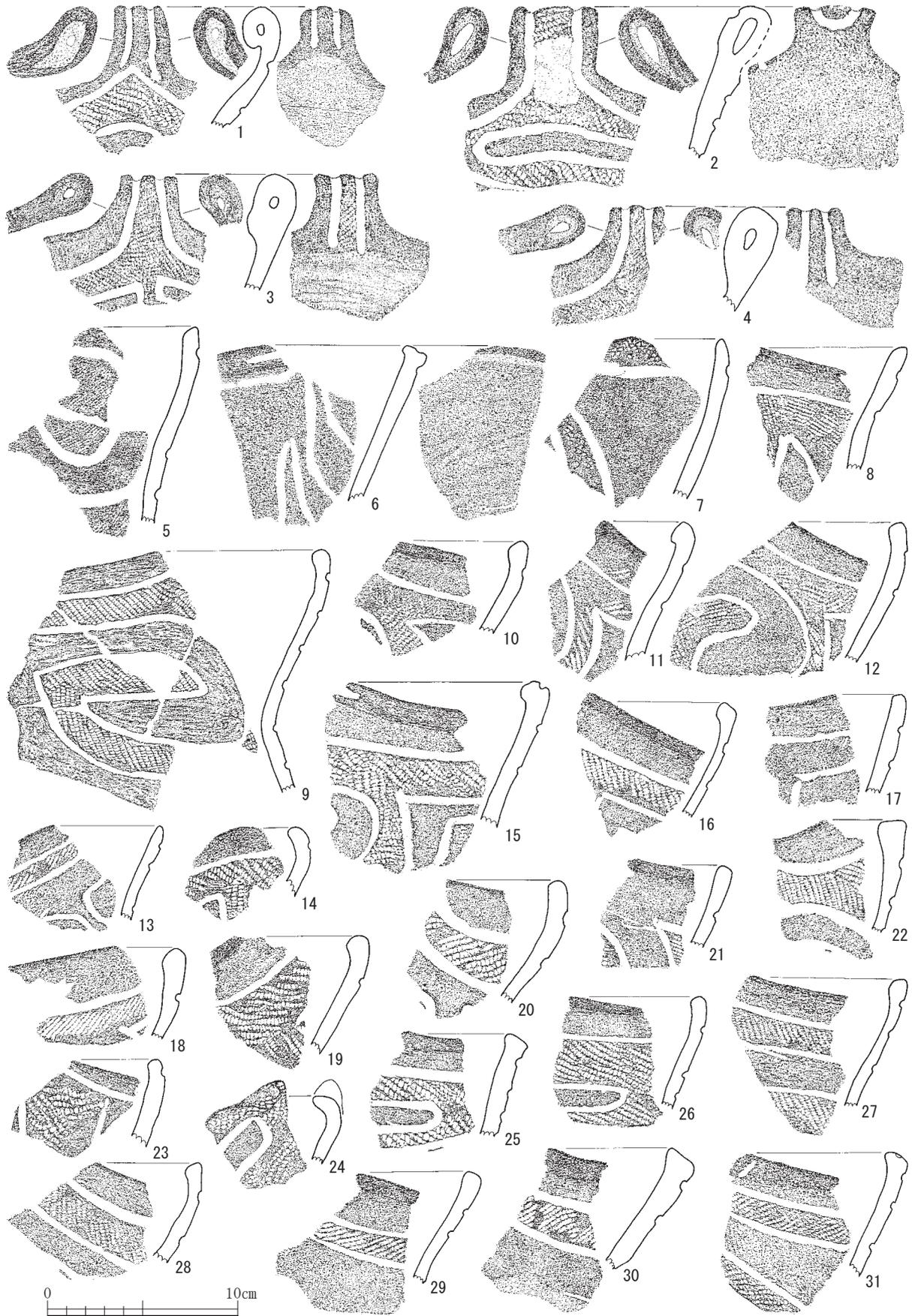
D種（第6図4、第13図7～14）

山形把手頂部を内方に肥厚させて側面を拡張し単独文を配すものを本種とする。

第6図4は張りの弱い胴部がくびれて頸部から外反して開き、内弯する口縁部に至る土器である。口唇部を内方に巻込んで口端部を方角状に整える。口縁部には大把手と、波底部に突起4単位を各々配す。把手側面を耳朶状に拡張して楕円形の窪みを加える。口縁部縄文帯は口縁の波形に合わせて施す。口縁部縄文帯上縁沈線は大把手部では、耳朶状の拡張部に添わせて波頂部上面まで八字状に切り上げ、波底部では突起に添わせ八字状に上面まで切り上げ、口縁部に半円形の区画文8単位を配する。下縁沈線は波底部および波頂部で間隔を空



第13図 有文深鉢形土器第11群実測図 (縮尺1/3)



第14図 有文深鉢形土器第11群実測図 (縮尺1/3)

かもしれない。25、26は横長のL字状の文様を下すものと思える。27から31は波形に合わせ文様を描く例であり、30、31は内面に摘みだしたような返しをもち、第12群土器に含むべきかもしれない。

5類 (第15図～第19図)

本群土器の胴部片を本類とする。

本類は文様から、横走する縄文帯をもつもの(A種)、斜行する縄文帯をもつもの(B種)、垂下する縄文帯をもつもの(C種)、垂下する隆帯をもつもの(D種)のほか、J字文および渦文(E種)、横長のL字状の文様(F種)、突出文および分岐文様(G種)、大柄な鍵の手状の文様(H種)に分ける。

A種 (第15図1～23)

横走する縄文帯を施す胴部片であり、縄文帯の上下を画す沈線は幅広で断面U字状の例が多い。また、充填する縄文には単節(LR、RL)が多く、一部に無節(第15図4、20、22など)も見える。また、節の大きさも大粒のもの(第15図5)から細かいもの(第15図21)まであり多様である。横走する縄文帯は1、2条の例が多い。

B種 (第15図24～31)

斜行する縄文帯を施す胴部片には、器厚は薄手で内面が平滑なもの(第15図30)から輪積み痕を内面に残すもの(第15図6)や、やや厚手のもの(第15図28)もある。なお、外面に引いた沈線が内面に痕跡を残す例は見えない。

C種 (第15図32～50)

第15図32から50は垂下する縄文帯を施す胴部片であり、第17図32、34は縄文帯区画沈線を禾科系植物によつたものと思え、沈線内に痕跡を残す。35の充填縄文は擬縄文かと思える。40、44は沈線内にまばらな押しき痕を残す。41から43、45は沈線に刺突を加えており、丸棒状のもの(41)、管状のもの(42、45)、半管(C字)状のもの(43)が見える。なお、45は管状刺突列により文様を描く。

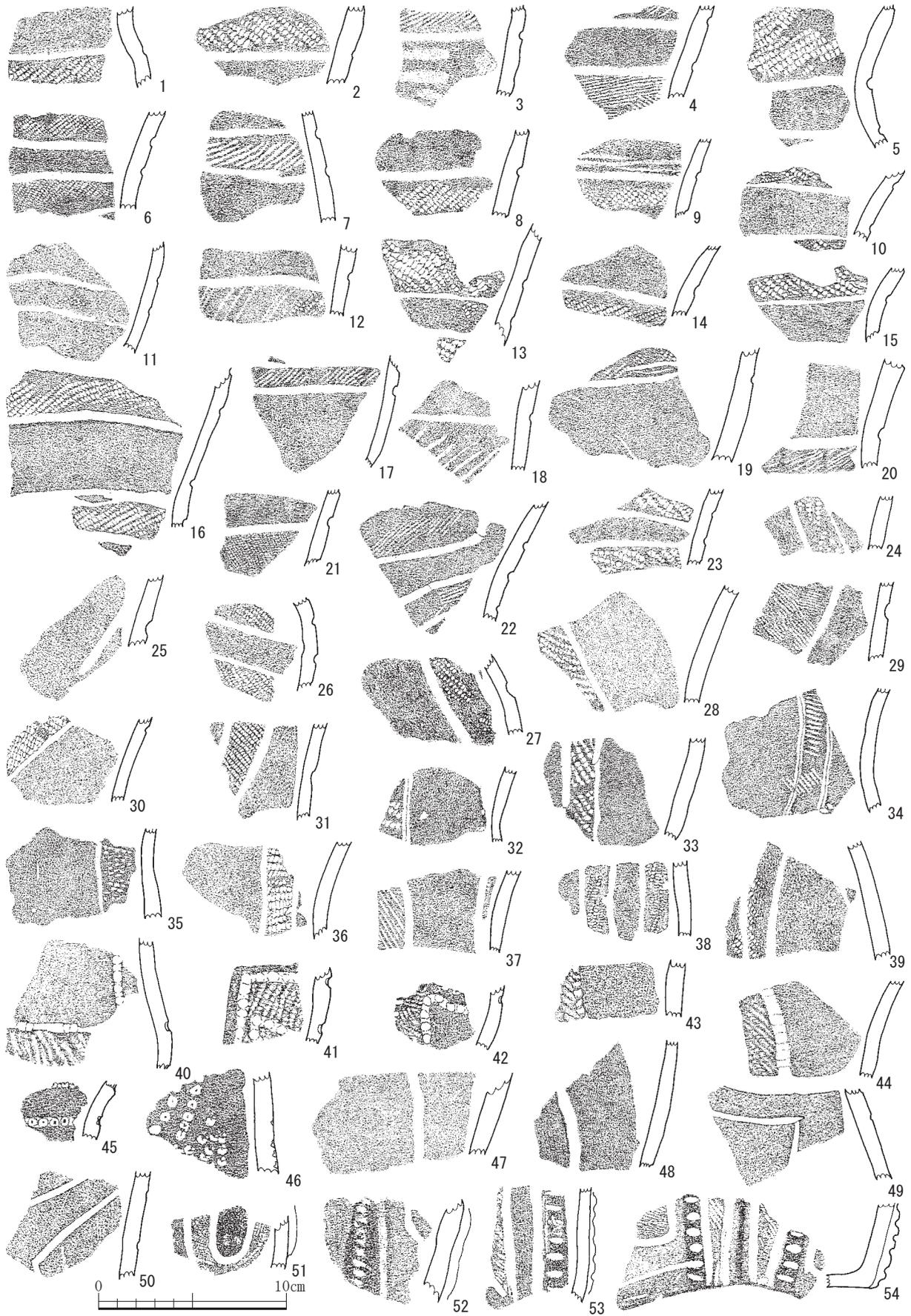
D種 (第15図51～54)

第15図51から54は垂下する隆帯を施す胴部片である。第15図51は垂下隆帯の末端部であり、かまぼこ状の隆帯周囲にU字状に曲がる縄文帯を添えている。52は山形把手を加える口縁付近の破片であり、刻み目を加えた垂下隆帯を下して側縁に沈線を添わせる。なお、口縁部の区画文となる沈線を上方への切り上げる例も見える。53はやや張りのある胴部中位の破片であり、刻みを加える垂下隆帯を配して側縁に沈線を添わせる。また、垂下する縄文帯を並行して施す。44は底部際の破片であり、隆帯3条を垂下させ両側の隆帯には刻み目を加える。隆帯側縁には沈線を添わせ、沈線間に縄文を充填する。なお、横走沈線で文様帯下端を画し、縄文を充填した矩形文も見える。

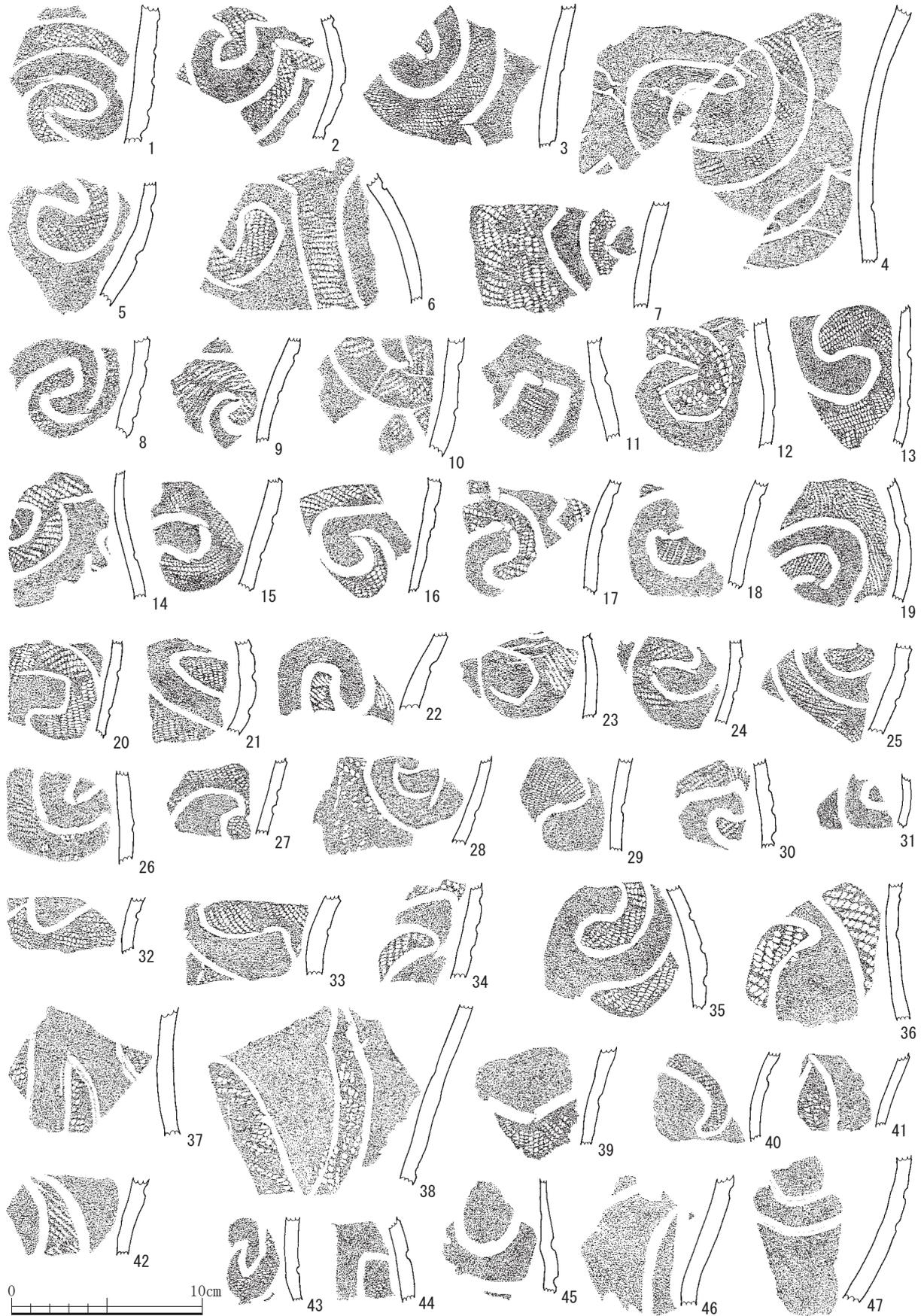
E種 (第16図、第17図、第18図1～8)

第16図から第18図8は丸みのある渦文もしくは縦長のJ字文を加える胴部片であり、第16図1、2は白抜き渦文を描く。3は2段に渦文を重ねて縄文LRを充填する。4は横走する縄文帯から渦文を下し、下縁には山形状の文様帯下端区画縄文帯が見え、縄文LRを充填する。6は垂下する縄文帯から派生して先端に丸みのある渦文を加え、やや節の大きい縄文LRを充填する。7は幅広の縄文帯に渦文を加える。渦文先端の形状には、丸みのあるもの(第16図5、6、35など)や尖るもの(第16図3、4、16など)のほか矩形のもの(第16図11)も見える。

第16図36から47および、第17図1から9は、縦長のJ字文を配した胴部片と思える。37、38はJ字文先端を直立させ、36、42は巻込みをもつ。45から47は充填縄文を施さない。



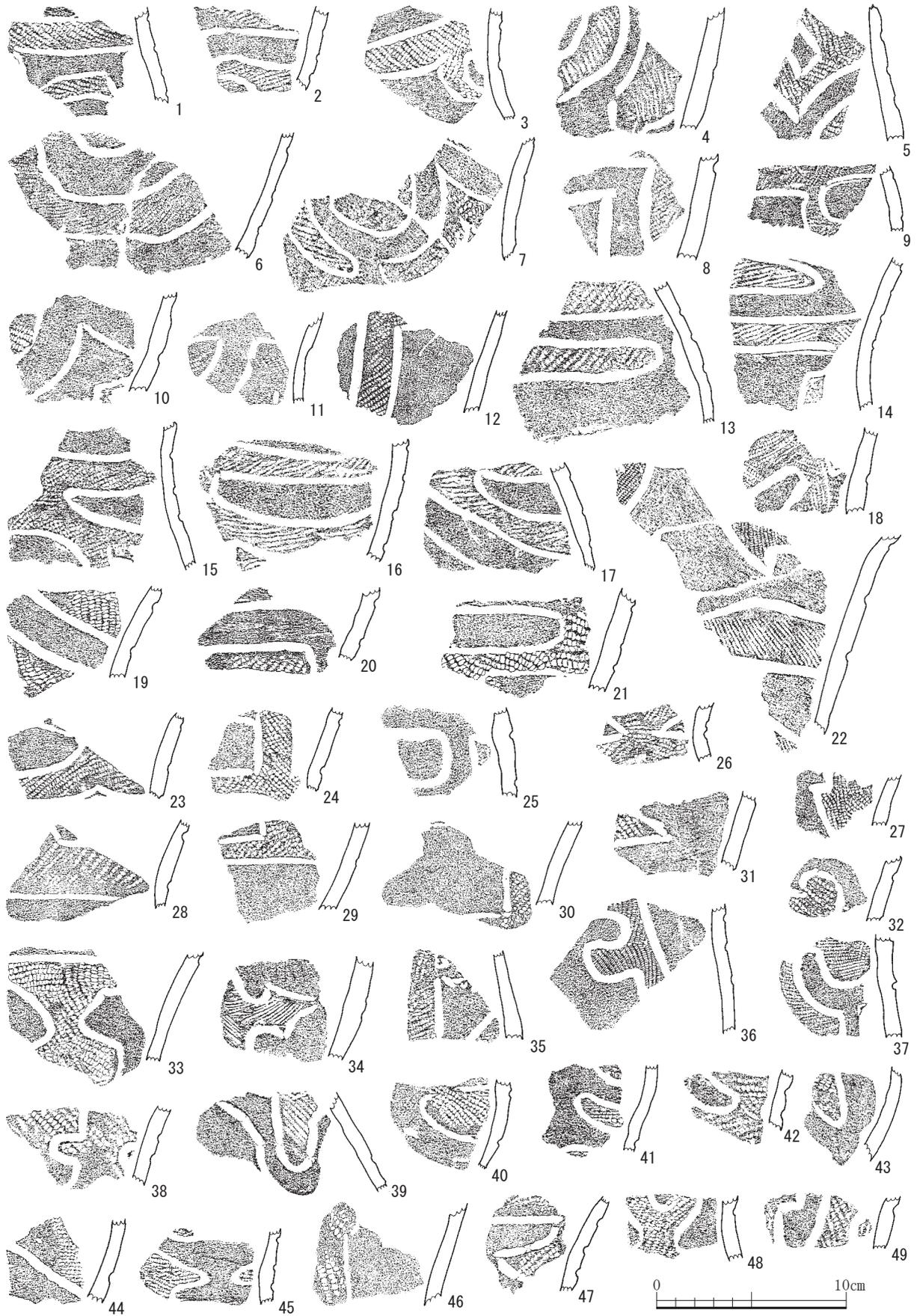
第15図 有文深鉢形土器第11群実測図 (縮尺1/3)



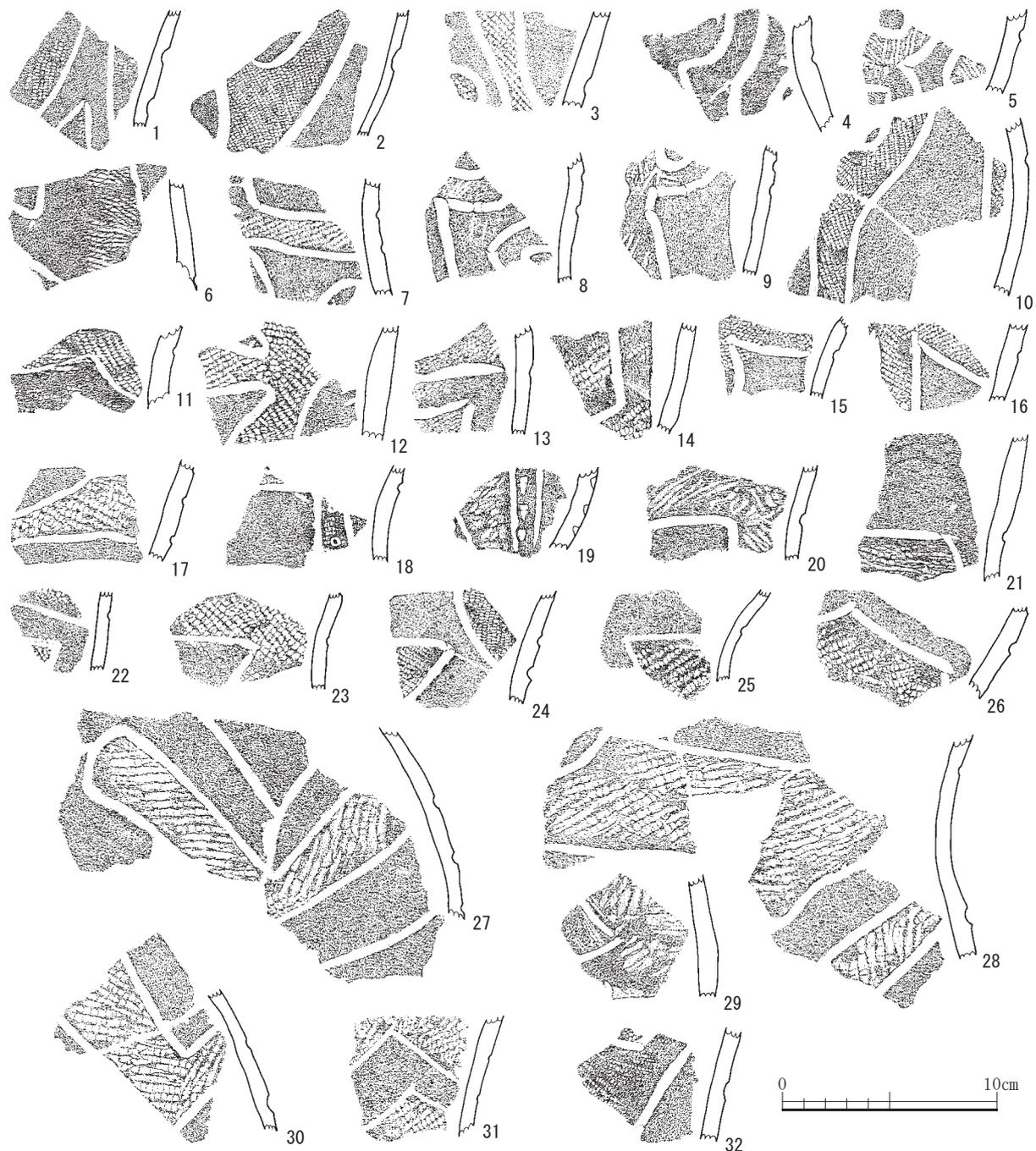
第16圖 有文深鉢形土器第11群実測図 (縮尺1/3)



第17図 有文深鉢形土器第11群実測図 (縮尺1/3)



第18圖 有文深鉢形土器第11群実測図 (縮尺1/3)



第19図 有文深鉢形土器第11群実測図 (縮尺1/3)

第17図も渦文およびJ字文を施す胴部片である。2は白抜き文様となるかと思える。3は太く垂下する縄文帯からJ字文を分岐する。なお、垂下縄文帯には縦の帯縄文を2列充填するかに見える。4は垂下縄文帯から渦文を分岐させる。10は横走縄文帯からL字状文や渦文を下す。11は白抜き文様に見える。14は胴部文様帯の下縁部片であり、横走縄文帯をU字状に窪めている。15、19は沈線と縄文充填箇所に乱れが生じている。16はS字状にくびれる大柄な文様に突出文を加える。縄文LRを充填し、一部で羽状となる。28、32、38はJ字文の分岐例である。第18図6は大柄の弧状文様を描く。また、7は円文を取囲むようにC字状文を対向させている。

F種 (第18図9～30)

第18図9から30は横長のL字状の文様および分岐部の胴部片である。このうち、第18図9は横走る縄文帯

の下縁から、曲線状に横長のL字状文を加えて縄文を充填する。15は横走する縄文帯から横長のL字状の文様を下し、再度分岐して渦文を配すかと思える。16、17は横走縄文帯から弧状に横長のL字状の文様を加えて縄文を充填する。22は三角形に膨らむ横走縄文帯の上方に、先端に方形の袂りをもたせた縄文帯を配す。23から30は文様の結合部の破片であり、23では弧線状に結合する。24、25、28、30は垂下文と横走文を結合させる。なお、29は文様帯の下端を限る横走縄文帯に垂下縄文帯を下している。

G種 (第18図31～49、第19図1～19)

第18図31から49は突出文を施す胴部片である。31は先端を尖らせ、33はスペード状の文様を横走縄文帯から下す。34は菱形の文様を垂下縄文帯から横方向に突出させる。36は斜行する縄文帯に横方向の突出部を重ねている。37は対向するC字文頂部に円形の突出部を加える。38、45は垂下する縄文帯内にC字状の袂入を加える。39から41は楕円形の突出部を加えている。47は横走縄文帯から錨状の文様を下す。第19図1から19も分岐する文様であり、このうち第19図1、2、6、8から10は垂下する縄文帯がハの字状に分岐する。4は縄文帯をC字状に屈曲させたのち垂下させる。5、12は渦文2段の重畳かと思える。7はL字状の文様からの分岐であり、13から16は鍵の手状に折れる文様である。18、19は垂下する沈線区画内に刺突文を充填する。

H種 (第19図20～32)

第19図20～32は鍵の手に折れる大柄の文様である。このうち第19図27、28、31は同一個体であり、L字状、鍵の手状に折れる大柄の文様を多重に配している。

シ 第12群土器 (第20図～第25図)

第11群土器に類似する器形をもつ例が多い。口唇部を内側に摘み出して返しをもたせ、口縁部をわずかに内弯させる例を基本とする。なお、一部に胴部から外反して開き、強く内屈して口縁部に至る例もあり、内面に谷線(屈曲痕)を残す。

主文様描線は2条の例は少なく、多くは3条一組を基本とする沈線帯とし、沈線帯内に縄文を充填する。主文様を描く沈線帯は、一部に切り合わない例もあるが、多くは切り合う。平縁と波状縁のものがあり、一部に大型の把手を施す例も見える。

第11群土器で見た半円形の口縁部文様帯は形骸化する。頸部から胴部にかけて配される文様帯は、頸部のくびれを境に、上下の文様に2分される場合が多い。胴部上半では波底部から文様を伸ばし、波頂下の空白部に大柄の海馬様の文様を配す例が目立つ。また、胴部下半にも文様を続け、胴部全体を4単位程度に縦位分割して主文様とする。各々の主文様は横走、斜行する沈線帯で頸部のほか数箇所でも各々連結され、横帯する胴部文様帯となる。縄文施文部と非施文部とのコントラストにより文様を描く点は、第11群土器に類似する。

本群土器は復元実測を施した土器以外に文様の全容を知れる例は少ないため、主に口縁部形態および口縁部の文様により分類を行った。

- 1類 平縁の土器で口唇部を内側に摘み出して返し状とし、口縁部全体を内弯させる土器。一部に把手、突起を施すものもある。
- 2類 平縁の土器で口縁部を外反させる土器。
- 3類 平縁の土器で口縁部を内折させ、内面に谷線(屈曲痕)を残す土器。一部に把手、突起を施す例もある。
- 4類 波状縁の土器で口唇部を内側に摘み出して返し状とし、口縁部を内弯させる土器。
- 5類 波状口縁の土器で口縁部を内弯させる土器。内面に谷線をもち、口縁部に面をもたせる土器。

6類 本群土器の把手を本類とする。

7類 本群土器の胴部片を一括して本類とする。

なお、各類は文様構成や文様要素により、さらにいくつかの種に分類した。

1類 (第20図2、第21図1~19)

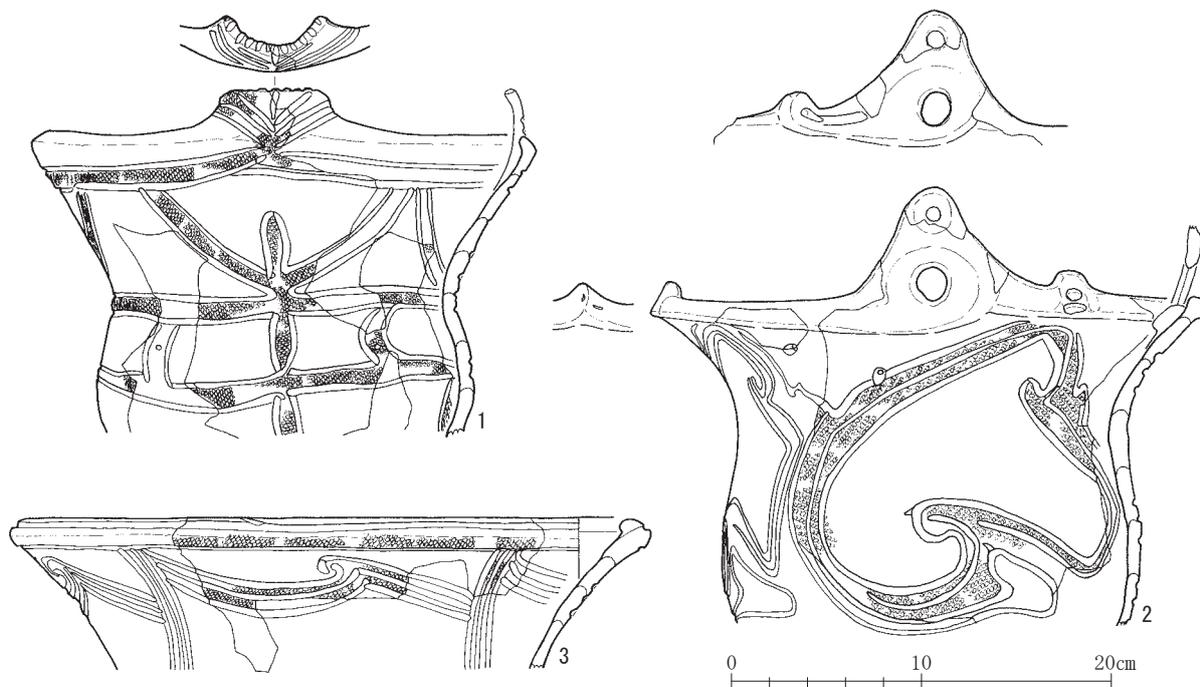
平縁の土器で口唇部を内側に摘まみ出して返し状とし、口縁全体を内弯させるものを本類とする。

第20図2はやや張りのある胴部が頸部から外反して開き、口唇部を弱く内方に摘まみ出して弱く内弯する口縁部に仕上げる。8字形の貫通する円孔を加えた山形大把手と、刺突と短沈線を2段に施す丸山形小突起を組み合わせて一組とし、弱く内弯する口縁部に2単位を配すほか、大把手間に刺突を加えた山形小突起2単位を加えて口縁部を4分割する。また、大把手周辺の内面を有段の肥厚部とし、末端に刺突を加えた短沈線を施し内面文様とする。頸部から胴部までを広く文様帯とし、3条から4条の縄文を充填する沈線帯により文様を描く。把手側縁の小突起から大柄のC字状に描き下る沈線帯は、途中、先端を上縁沈線から突出させて隣接する大柄の文様に接合する。沈線帯先端部に沈線1条を加え、うち上縁沈線2条は、2箇所をコの字状に折り返して小突起下のC字状文の描き出し部へと向かい、いびつな楕円文を描く。なお、C字状文下縁の2条沈線の末端部はL字状に折り結合する。なお、沈線帯に充填する縄文はLRを使用する。

第21図1から19は口唇部を内側に摘まみ出して返し状とするか、内弯させる口縁部片であり、口縁下の横走沈線帯と切り合う斜行沈線帯を施す。沈線帯は2条から3条で構成され、縄文を充填する。9は口縁部横走縄文帯下に接合しない突出文を描き、10は接合しない斜行文を下す。12は外反して開く口縁部を上方に摘まみ出し、胴部上縁に横長の矩形文を配して横走沈線を上下に添えている。13、16は大柄の曲線文を口縁下に配す。14、15、17から19は口縁部に横走縄文帯を配す。

2類 (第21図24、28、29、36)

外反する口縁部を有する土器を本類とする。



第20図 有文深鉢形土器第12群実測図 (縮尺1/4)

第21図24は口縁部に2条沈線を横走させ、沈線下に縄文を施す。28は口縁部に2条沈線を横走させ、下縁沈線と切り合う3条沈線を垂下させる。29は口縁部に横走沈線3条を配し、間隔を空けて横位の曲線文を施す。36はやや肥厚し外反する口縁部に、沈線2条を2段に横走させる。

3類 (第20図1、2、第21図20～23、25～27、30～51、第22図1～24)

平縁の土器で口縁部を内折させ、内面に屈曲に伴う谷線(屈曲痕)を残すものを本類とする。なお、一部に突起を加えるものを含む。本類は口縁部の形状から、内折する口縁部に面をもたせるもの(A種)、やや長く内折する口縁部に単位文を配すもの(B種)、口端部に面をもたせて短沈線もしくは刻みを施すもの(C種)、口縁部を内弯させ内面に谷線を残し、外面を無文勝ちとするもの(D種)、口縁部を強く内折させ平坦に面をもたせ、上面文様をもつもの(E種)に分ける。

A種 (第20図1、第21図20～23、25～27、30～32、34、35)

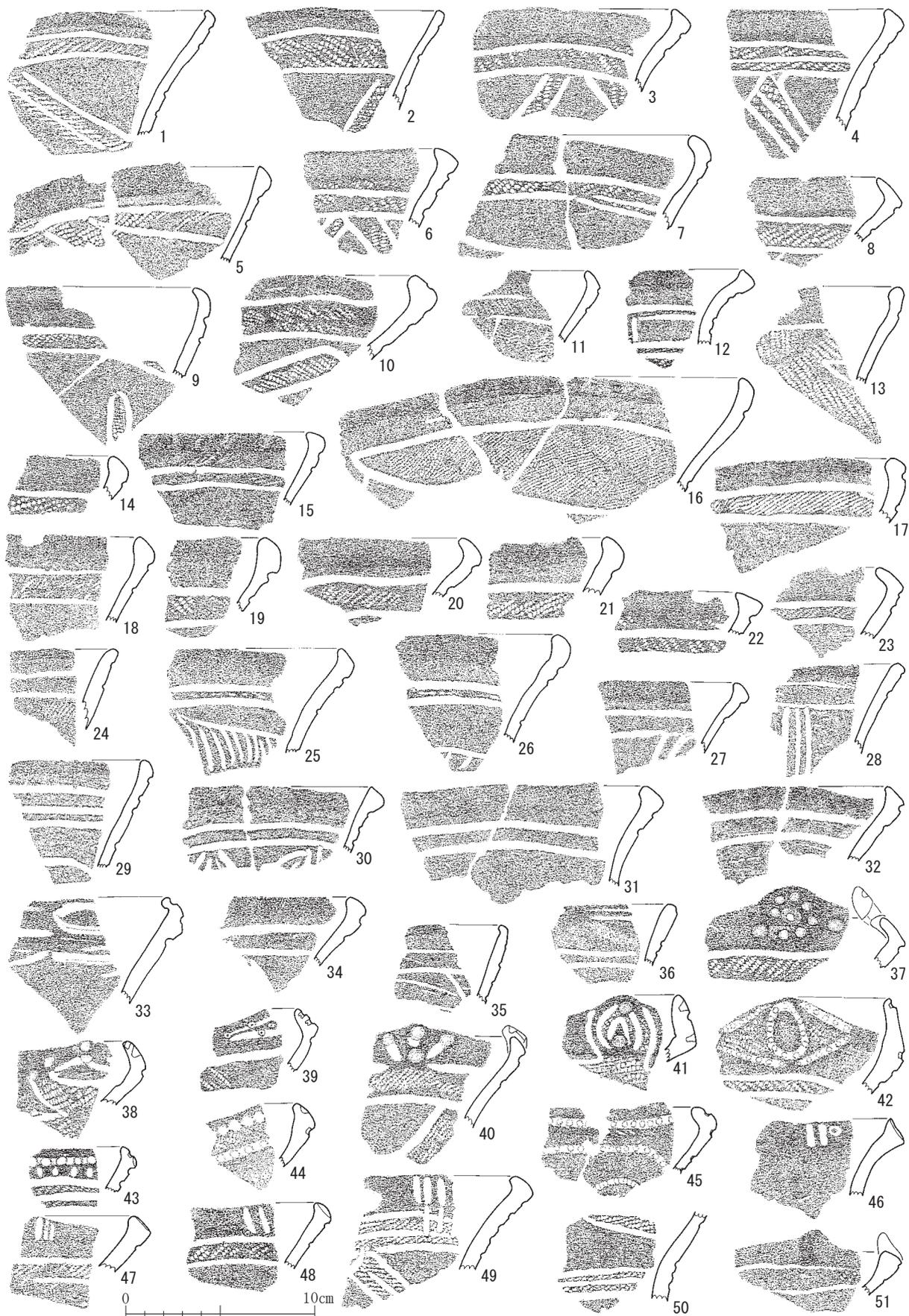
口縁部を内折させて内面に谷線(屈曲痕)を残すものを本種とする。なお、一部に突起を加えるものを含む。第20図1はやや張りのある胴部がくびれて頸部から大きく開き、口縁部を短く内折させて面をもたせる。半円筒状の把手2単位を加え、把手頂部には刻みを施し、外面には垂下沈線を中軸に逆ハの字に開く3条沈線を施す。口縁部、頸部、胴部に2条沈線による横走縄文帯を配して器面を分割する。頸部、胴部の横走縄文帯の把手下には、上下方へ剣先状の突出文を置き、上方を向く突出文の両側から逆ハの字の斜行縄文帯を口縁部横走縄文帯に伸ばす。下方を向く突出文は交差させ胴部横走縄文帯の上縁沈線と結んでいる。また、位置を合わせて剣先状の突出文を、胴部横走縄文帯から下方へ伸ばしている。頸部、胴部の横走縄文帯は、沈線間に円形刺突文を加えたC字状の文様で繋いでいる。各文様描線は横走縄文帯から派生するものと切り合うものがあり、器面を4単位に分割している。なお、沈線間には縄文LRを充填している。

第21図20から23は、口縁部を内折して内面に屈曲に伴う谷線を残すものであり、口縁部に縄文を充填する2条沈線による横走縄文帯を配す。第21図25、26は口縁部に2条沈線による幅の狭い縄文帯を配し、縦位沈線を充填する、大柄の三角形の文様を加える。第21図30は内折しないものの外方へ肥厚させて口端部に面をもたせるなど、本種土器と類似点が多い。口縁部に配した2条の横走沈線と切り合う三角形の文様を配す。35は短く内折して内面に弱く谷線を残している。

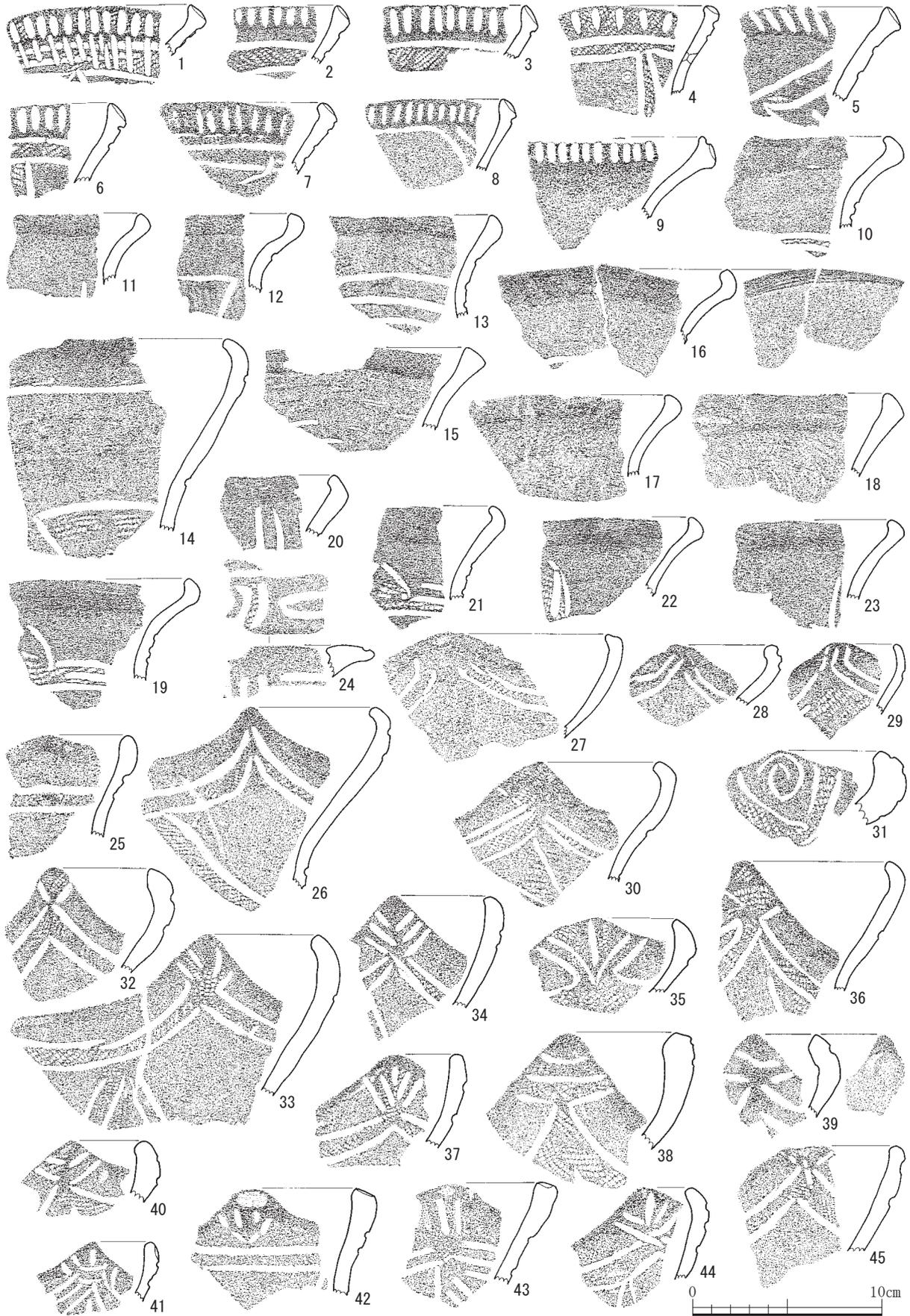
B種 (第21図33、34、37～45、51)

やや長く内折する口縁部に単位文を配すものを本種とする。

第21図33は口唇部を内方に引き出し、口縁部に円文を配して側縁および下縁に2条の横走沈線を施す。34は内弯ぎみに口唇部を内方に摘み出し、外面に2条一組の沈線を横走させ縄文を充填する。37は口縁部にこの字状に低い隆線を張り付けて突起とする。突起中央部には円孔を貫通させ、隆線形状に合わせて刺突文を配す。なお、隆線下縁に刺突文2点を追加する。口縁部には2条沈線で画した横走縄文帯を配す。38は沈線で三角文を描き各頂部に刺突文を加えるほか、口縁部横走縄文帯をC字状に切り上げて末端に刺突を加え、三角文との間に縄文LRを充填する。39は沈線で三角文を描いて交点および沈線内に管状刺突文を加え、区画内にも刺突文を充填する。40は口縁部に矢羽根状に沈線を配し、交点に刺突文を加え突起部の単位文とする。口縁部には2条沈線による横走縄文帯と斜行縄文帯が切り合って配される。41は口縁部横走縄文帯の上縁沈線から派生して、対向するC字状文で単位文とした突起を囲み、交点上下に円形刺突を配す。42は口縁部に三角形に拡張した突起を配す。円文を囲み対向するくの字状沈線を配す。沈線内には円形刺突を加えて三角文内に縄文を充填する。なお、口縁部には2条沈線による横走縄文帯を施す。51は内折して面をもつ口縁部に小山形の突起を加えてC字状の隆線を配す。



第21図 有文深鉢形土器第12群実測図 (縮尺1/3)



第22圖 有文深鉢形土器第12群実測図 (縮尺1/3)

C種 (第21図46～50、第22図1～9)

口端部に面をもたせ、短沈線もしくは刻みを施すものを本種とする。

第21図46は内方に摘まみ出し拡張した口端部に、2条の縦位短沈線と円形刺突文を配して単位文とし、口縁部は無文とする。47から50は口端部に面をもたせ、縦位短沈線数条を単位文として加える。47、48は口縁部に2条沈線で画した横走縄文帯を配す。49、50は同一個体であり、3条沈線による横走縄文帯と斜行する縄文帯を切り合って配す。横走沈線帯には口端部の単位文施文箇所縦位短沈線を加える。なお、50で見えるように、頸部にも横走沈線帯を配して斜行縄文帯の下限としている。

第22図1から9は面をもたせた口端部全面に短沈線もしくは刻みを施すものである。1は横走する縄文帯に短沈線を加え、横走縄文帯下縁から先端が三角形状の文様を下す。2、4は口端部に刻み目を施し、3、6、7は口端部に短沈線を加える。いずれも口縁部横走縄文帯を配し、4、6は垂下する縄文帯を加える。5、8は斜行する短沈線を口端部に配して2条沈線を斜行させる。9は口端部上縁を横走沈線で画して短沈線を加え、口縁部は無文としている。

D種 (第22図10～23)

口縁部を強く内弯させて内面に谷線を残し、外面を無文勝ちとする土器を本種とする。

第22図17、18は口縁部外面を広く無文とする。10、13、15、16は頸部に横走沈線を施し、10は充填縄文を加える。15は内面の谷線はもたないが、外方に肥厚させて内弯様に仕上げる。11、12、14は頸部以下に大柄の文様を配すものであり、14は口縁下に沈線1条を加える。19から23は頸部の横走縄文帯から上方に半円形の突出文を加えて単位文とし、縄文を充填する。19、21は同一個体と思える。

E種 (第20図3、第22図24)

口縁部を強く内折させて平坦な面をもたせ、上面文様をもつものを本種とする。

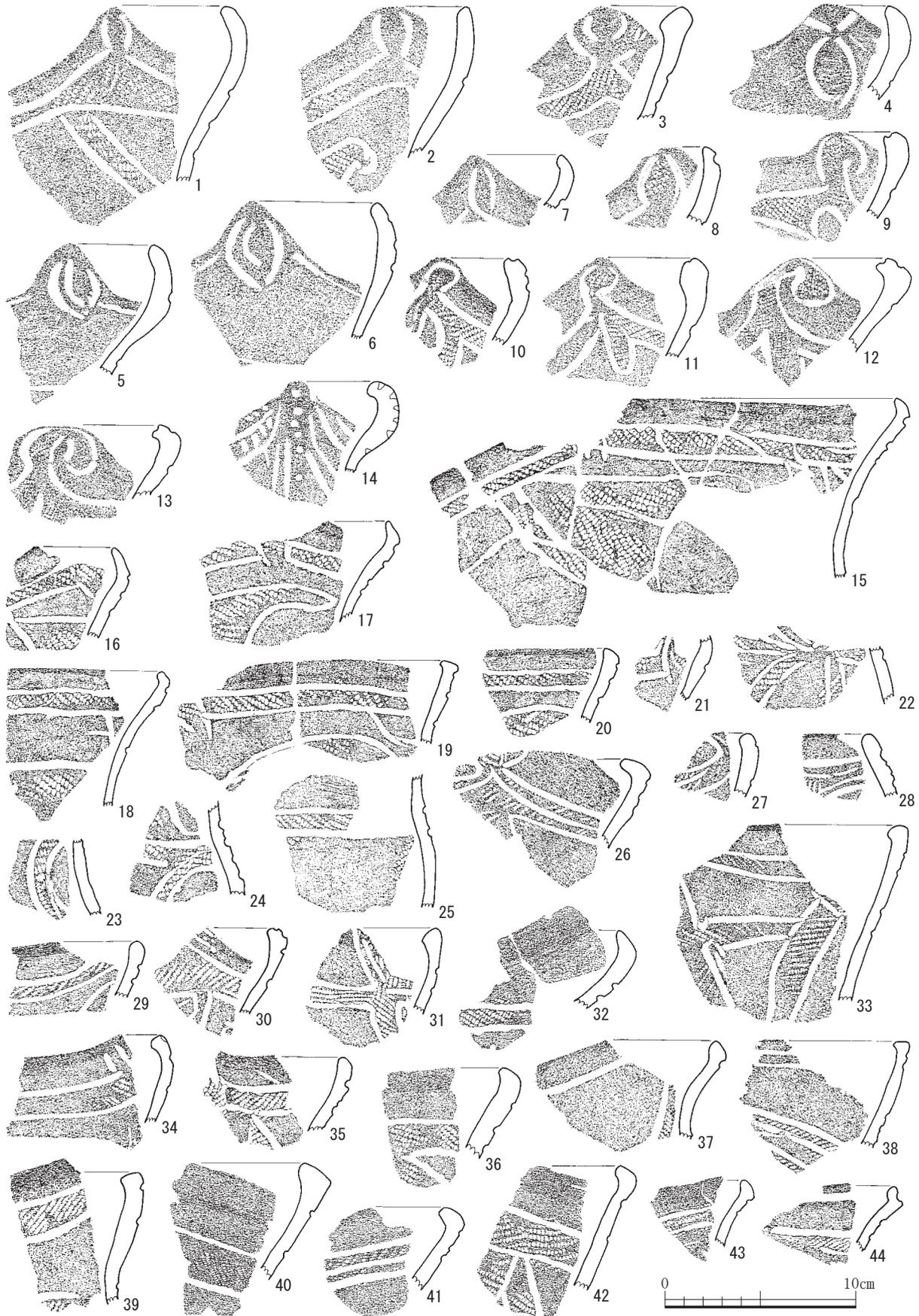
第20図3は胴部から外反して開く朝顔形の深鉢であり、口縁部を強く内折させて内面に谷線を残す。口端部に丸みをもたせ、横走沈線1条のほか単位文として弧線文を配す。また、口縁部下縁に横走沈線1条を加え、縄文RLを充填する横走縄文帯で画す。外反する口辺部を3条の垂下沈線で縦位に分割し、区画間に3条沈線の先端を入り組み状にかみ合わせた弧線文と斜行文を配している。

第22図24は強く内折して上面に面をもたせた平縁の深鉢型土器口縁部片である。口端部に縄文を充填した対向する弧線文を配して単位文とし、単位文間に横長の楕円文を加えて文様帯とすると思える。外面には単位文下で垂下する沈線3条を加え、横走する沈線帯を区切っている。

4類 (第22図25、28～45、第23図1、2、4～11、第24図1～10)

波状縁の土器で、口端部を内側に摘まみ出して返し状とし、口縁部を内弯させるものを本類とする。

第22図25は山形突起を口縁部に配し、口縁下に2条沈線による横走縄文帯を配す。28、29は口縁部の弧状沈線を波頂部で八字状に分け、くい違いをもたせる。なお、29は沈線を口端部まで切り上げ、一方の上縁沈線をこれに添わせている。いずれも沈線帯下に縄文を施す。30はやや尖る波頂部を有し、波頂下で口縁部横走沈線を八字状に分け、斜行する沈線1条のみを口端部に伸ばして単位文とする。沈線下には三角形状の先端部をもつ大柄の文様を配す。単位文、横走沈線間、大柄の区画文には縄文LRを充填する。31は内弯、肥厚する波頂部片であり、口端部を内方に摘まみ出す。波頂部に渦文を加え、対向する2条の同心円文がこれを囲んで縄文RLを充填する。第22図32～42、44、45は、波頂下で分かれる口縁部横走沈線の上縁沈線を、八字状に口縁部に切り上げるものであり、波頂部に縦位もしくは扇状の短沈線を1条から4条加えている。33は波底部から縄文帯を鋸歯状に下している。35は波頂部に垂下する短沈線を施して両側に斜行沈線を加え単位文とし、口縁部



第23圖 有文深鉢形土器第12群実測図 (縮尺1/3)

の横走縄文帯と繋いで区画文としている。36は口縁波形に合わせた縄文帯の上縁沈線を口端部に切り上げ、波頂下で沈線を垂下させる。37は36に類した波頂部文様であり、38は口縁波形に合わせて引く縄文帯上縁沈線を鍵の手に曲げ、波頂部に横走沈線2条を加えて縄文を充填する。

波頂部の形状には尖塔状(36)のものから緩い山形状(45)のもの、突起状(42)のものがある。縄文は横走沈線間および波頂部文様に充填されるが、縄文の充填を見ないもの(43)もある。

第23図1から9は波頂部に対向するC字状文を配すものである。第23図1は波頂下の横走縄文帯上縁沈線を波頂下で口縁波形に合わせて引き、下縁沈線を直線として三角形の縄文帯とし、波底側にずれた位置から斜行する縄文帯を下す。なお、充填縄文はLRを使用する。2も同様の例であり、波頂部付近に海馬文を配すと思え、先端部を小さなC字状文で閉じている。縄文RLを充填する。4は波頂部の逆ハの字状文の先端から対向するC字状文を下す。5、6は同一個体であり、波頂部に対向する1、2条のC字状文を配す。緩く内弯する口縁部には口縁波形に添う沈線1条を配す。口縁部を広く無文とし、頸部に横走沈線1条が見える。7は口縁部縄文帯上縁沈線を口唇部に向け立ち上げて、紡錘形の単位文とする。9は口縁部縄文帯上縁沈線の一端を、波頂部に向かい立ち上げて末端に刺突文を加え、先端をC字状に囲む。なお、波頂下の横方向の縄文帯は、先端の尖る突出文と思え、基部に円形の挟りを加えている。10は口縁部横走縄文帯を口縁波形に合わせて配し、上縁沈線を波頂部で円形に突出させるほか、下縁沈線をJ字状に下す。11は口縁部横走縄文帯上縁沈線を波頂下で円形に突出させ、下縁沈線からU字形の突出文を下す。

5類 (第22図26、27、第23図3、12~44、第24図1~10)

波状口縁の土器で口縁部を内弯させるものを本類とする。なお、本類は口縁部の形状から、口縁部を短く内方に折って内面に谷線(屈曲痕)をもつもの(A種)と、口縁部をやや長く内折させて内面に谷線を残し、口縁部に幅広く面をもたせるもの(B種)に分ける。

A種 (第22図26、27、第23図3、12~14)

第22図26は内弯する口縁部をもち、波頂部を尖塔状の山形とする。口縁部を強く内側に折って内面に谷線を残すほか、口端部に面をもたせて仕上げる。口縁部外面には口縁波形に合わせて横走縄文帯を配し、波頂下で八字状に分けて先端を合わせる。波底部から口縁部横走縄文帯と切り合う斜行縄文帯を下す。なお、沈線間には縄文LRを充填する。第22図27も内弯する口縁部をもち、緩い山形の波状縁とする。口唇部を強く内側に折って口端部に面をもたせる。口縁部横走縄文帯を波頂下で分け八字状とし、縄文LRを充填する。

第23図3は内弯する口縁部を有し、口唇部を短く内側に折り内面に谷線を残す。口縁波形に合わせて口縁部に配する縄文帯は八字状を呈し、上縁沈線を分けて口端部の平坦面まで切り上げる。三角形を呈する波頂部には、対向するC字状沈線を施し単位文とする。縄文LRを充填する。

第23図12、13は同一個体である。丸山形の波頂部を有し、内弯する口縁部を強く内側に折り、口端部を方角状に仕上げて内面に谷線を残す。口縁部横走縄文帯を八字状に合わせて波頂部に向かい伸ばし、先端を渦巻かせる。なお、縄文帯下縁沈線の間隔を空けて縄文帯を垂下させる。14は波状縁の波頂部に小山形突起を加える。口唇部を短く内側に折り、口端部に面をもたせ刻み目を施す。波頂部から円形の刺突文列を下し基軸線とし、2条沈線を矢羽根状に施す。短く立ち上がる口縁部には、2条沈線を横走させ縦位短沈線を充填する。

B種 (第23図15~44、第24図1~10)

口縁部をやや長く内折させて内面に谷線を残し、口端部にやや幅広の面をもたせるものを本種とする。

第23図15から25は同一個体であり、やや張りのある胴部が頸部から外反気味に大きく開く。口縁部をやや長く内折させて内面に谷線を残すほか、口端部に面をもたせる。把手をもつ波状縁の土器と思える。第23図15は

口縁部横走縄文帯を波頂部把手下で折り、縄文RLを充填する。波頂下には1、2条の沈線で大柄の海馬文を描き、先端部をC字状文で繋ぐものと思える。なお、縦位沈線を2条で引く箇所が波底部に見え、海馬文の基部と思える。斜行沈線も見え、第23図1と関連する文様と思える。22、24では頸部横走縄文帯に上下の文様が集まっており、15の大柄な文様下には丸い渦文もしくはJ字文を加え、縦型の文様を構成したものと思える。なお、15では口縁部縄文帯内に、19では口縁部縄文帯下縁沈線に向かう曲線的な斜行文が見える。第23図26は波頂部付近の破片であり、やや長く内屈し面をもたせた口縁部を有し、波頂下で3条沈線による口縁部縄文帯を合わせて上縁沈線から円文状の文様を加える。波頂下には縄文帯下縁沈線と切り合う沈線を垂下させる。27は内弯する口縁部に楕円文を配し、28は口縁下に太い沈線を2条横走させて沈線間に弧状沈線を加える。30は内屈する口縁部片であり、方角状に面をもつ口端部に、沈線と刺突文による単位文を配す。口縁部横走縄文帯は波頂下で三角形状に広くなり、下縁沈線と切り合うJ字文を加える。31は口縁部横走沈線から斜行沈線を伸ばす。32は強く内折する波状縁の口縁部片であり、口縁部に面をもたせる。33は波状縁を呈する口縁部片であり、口縁部をやや短く内折させて口端部に面をもたせる。口縁波形に合わせて口縁部横走縄文帯を2条沈線で画し、下縁沈線より斜行する縄文帯を下す。斜行縄文帯中位で沈線に間隔を空け、剣先状の突出文を横位に施す。なお、斜行縄文帯は折れて長い矩形文様となり、斜め上方に伸ばしているのかもしれない。充填縄文には太さが異なる縄文LRを使用している。34は波状の口縁部片であり、口端部の平坦面に向かい口縁部縄文帯の上縁沈線を折り、口端部に切り上げる。35、36は2条沈線によりJ字文を配す土器であり、J字文先端が横走縄文帯とぶつかる。36は口唇部を内折して内面に谷線を残し、口端部には面をもたせる。沈線は切り合わない。37は口縁部に1条の沈線を口縁波形に合わせて施し、縄文を充填する多条沈線を斜行させる。38は口縁部に2条沈線による横走縄文帯を施し、2条一組の沈線で区画する斜行縄文帯を2組下す。40は波状縁の口縁部片であり、口唇部を肥厚させて内折し、口縁部には広く面をもたせる。41も波状縁の口縁部片であり、口唇部を内折し内面に谷線を残す。外面には3条沈線による縄文帯を口縁波形に合わせて配す。42、43は波状口縁の口縁部片であり、内折して内面に谷線を残し、口縁部に平坦な面をもつ。口縁波形に合わせて横走縄文帯を配す。なお、42には横走縄文帯と切り合う斜行縄文帯を配す。44は口唇部を短く内折させて内面に谷線を残す。面をもたせた口縁部に横走沈線を加え、口縁下に横走する縄文帯を配す。

第24図1は内折して口端部に面をもたせる。口端部には沈線1条を横走させ、下縁に刻みを施す。外面には口縁波形に合わせて沈線2条を引き、切り合う斜行沈線を加える。2、3は内折して面をもたせ口縁部に短沈線を施す波状縁の土器であり、口縁波形に合わせて2条沈線による横走縄文帯を配す。なお、2の口端部短沈線内には刺突文を加える。5、6は波頂部を円文で画す土器であり、口縁部に2、3条の横走沈線を加える。なお、6は垂下する沈線より剣先状の突出文を横位に伸ばす。8は強く内折して面をもたせた口端部に沈線1条を施す。口縁波形に合わせて3条一組の沈線帯を配し、頸部に沈線帯を横走させる。9は2条一組の沈線で同種の文様を配す。10は口縁部を内折して面をもたせた波状縁の土器であり、口縁波形に合わせて2条沈線を配して下縁沈線と切り合う斜行沈線を加える。

6類 (第24図11～34)

本群土器の把手を本類とする。本類は把手の形状および文様から、把手頂部を盃状とするもの(A種)、半円筒状の把手を配すもの(B種)、外面に8字状の貼付文を施し、頂部に浅皿状の円孔を施すもの(C種)、大型の環状把手を配すもの(D種)、円柱状の把手を配すもの(E種)に分ける。

A種 (第24図11、18、19、25)

把手頂部を盃状とするものを本種とする。

第24図11は内面に板状の粘土を加えて把手頂部を陥入させ、盃状の把手を作出する。外面には円孔を中心に対向するC字文を加える。第26図18は口縁部をやや長めに内折させ、内面に谷線を残す。口端部内面をループ状に巻込み、盃状の把手頂部を作出する。把手側面には横走沈線と縦位短沈線による格子目文を施すほか、外面には交点頂部に刺突文を加えた縄文帯を八字状に配す。なお、格子目文部を含め縄文LRを充填する。19、25は内面を襟状に合わせて杯状の山形把手とする。25の把手外面には半円形の同心円文を配して縄文を加え、把手側面の口端部に沈線1条を加える。

B種 (第24図21~24、26、27、29~34)

半円筒状の把手を配すものを本種とする。

第24図21から23は半円筒形の山形把手であり、口縁部を短く内折して内面に谷線を残す。把手外面には横走沈線数条を引き、22では口縁波形に合わせた斜行縄文帯を配す。24は沈線により方形区画を把手外面に配すものと思え、区画内に縄文Lを充填する。26は把手頂部の内角に斜行する刻み目を施し、外面に横走沈線を配す。27は把手頂部を玉縁状に外方へ折り、頂部に末端刺突を加えた沈線を引いて外角に刻み目を施す。なお、外面には貫通する円孔を囲み、同心円文を配すと思える。29は三角形の貫通する透かしを中央に配した山形把手と思え、半円筒形を呈する。正面には逆三角形に刺突を加えた沈線で区画し、区画内に陥入する円孔を加えて縄文LRを充填する。また、上面形に合わせ刺突を加えた沈線1条を施し、側面には縦位の沈線2条を配す。30は口縁部をやや長く内折し外面を文様帯とし、内面には谷線を残す。山形を呈する半円筒形の把手であり、把手中央に円孔を貫通させ、刺突を加えた沈線1条を添わせる。また、把手下には横走、円孔下からは斜行する、刺突を加えた沈線を各々施し、縄文LRを施す。なお、把手頂部には刻み目を加える。31から34は類似する把手であり、半円筒形で外形は山形を呈す。把手中央に円孔を貫通させ、これを取囲み同心円状に刺突を加えた沈線を多重に配す。

C種 (第24図12~15)

外面にS字状の貼付文を施し、頂部に浅皿状の円孔をもつものを本種とする。

第24図12、13は同一個体と思え、口縁部をやや長く内折して内面には谷線を残す。上面から外面に垂れるS字状の隆線を配し、上面側に円形刺突を、外面側に貫通する円孔を施す。縄文LRを充填した口縁部横走縄文帯の上縁沈線を切る。14は口縁部をやや長く内折させ、山形の把手頂部に円孔を陥入させる。把手上縁は横走する沈線および管状刺突列で画し、中央部に縦位の円形刺突一対と3条の横走沈線を配す。15は口縁部をやや短く内折し、口端部から外面にかけて振じったS字状の把手を加える。把手には一対の浅皿状の陥入を加えて縄文Lを施す。外面は把手部を含め口縁部横走縄文帯とし、区画沈線を配す。

D種 (第24図17)

大型の環状把手を配すものを本種とする。

第22図2も本例と同種の把手と思える。内折する口縁部に板状の粘土を足し、肥厚する大型の把手を作出する。把手中央部には大型の円孔を穿って環状とし、外面の円孔の周囲を隆線で囲んでいる。把手内面の肥厚部には、先端を丸く収める三角形の文様を沈線で描く。把手の全景は不明であるが、第22図2から考えると2段の環状部をもつものかもしれない。

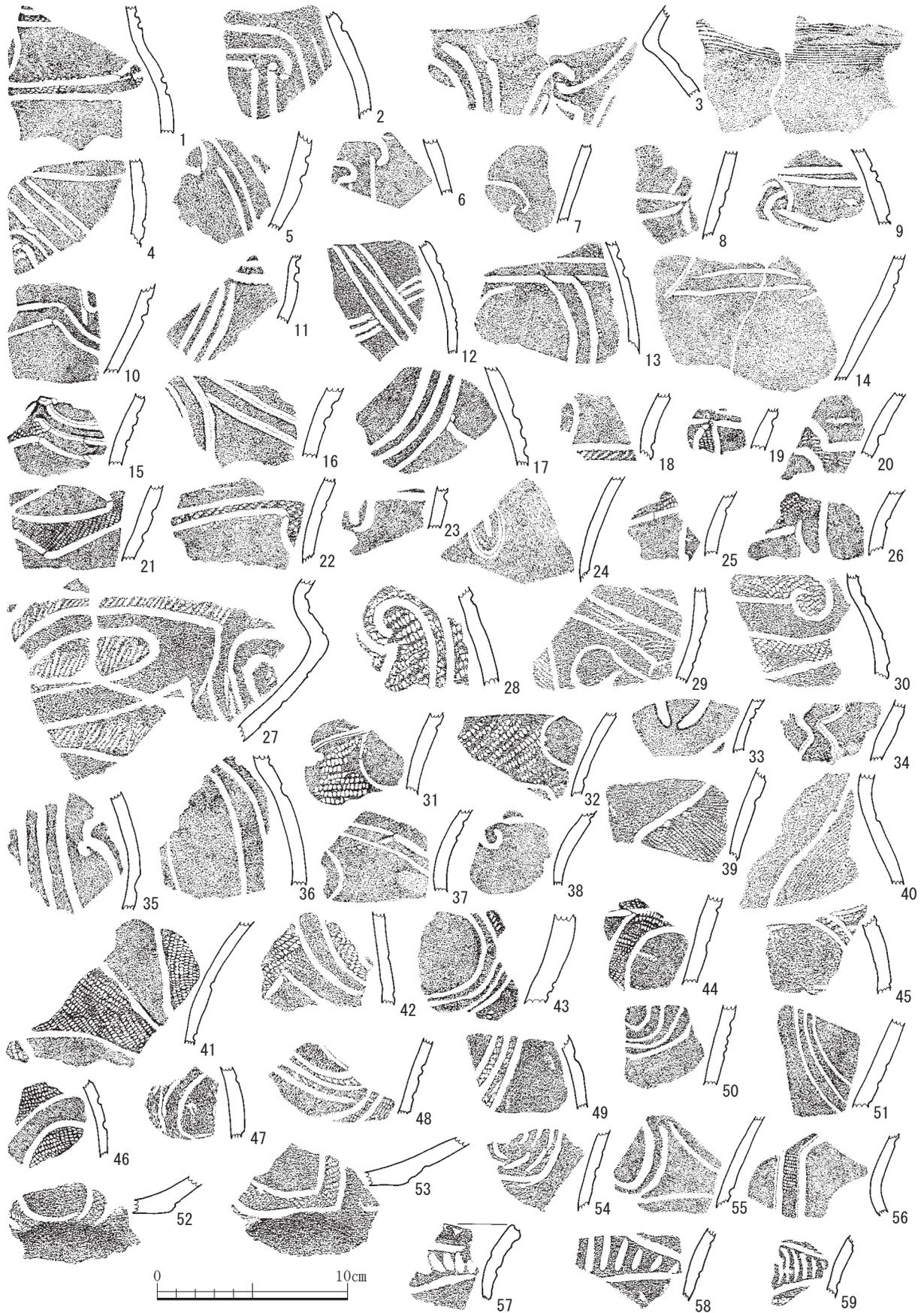
E種 (第24図16、28)

円柱状の把手を配すものを本種とする。

第24図16は口縁部をやや短く内折して内面に谷線を残す。外形は円柱状を呈し、側面に貫通する楕円孔を穿ち橋状把手とし、沈線によるハの字の区画文を加えている。把手は透かし彫り状とし、沈線や刺突文を加える。



第24圖 有文深鉢形土器第12群実測図 (縮尺1/3)



第25図 有文深鉢形土器第12群実測図 (縮尺1/3)

なお、円形の頂部は刺突文をC字状沈線で囲む。広く無文とする口縁部には、把手下に円孔を施し、C字状としの字状を組み合わせた紡錘形の区画文を配して縄文LRを充填する。

第24図28は口縁部をやや長く内折し、内面に谷線を残す。口縁下には縄文Lを充填した口縁部横走縄文帯を配す。把手左肩には刺突を加える沈線3条を下し、横位C字形に把手頂部を浅く窪ませ、円形の把手形状に合わせて刺突を加えた沈線2条を配す。なお、把手外側には刻み目を施す。

7類 (第24図35～45、第25図)

本群土器の胴部片を一括して本類とする。

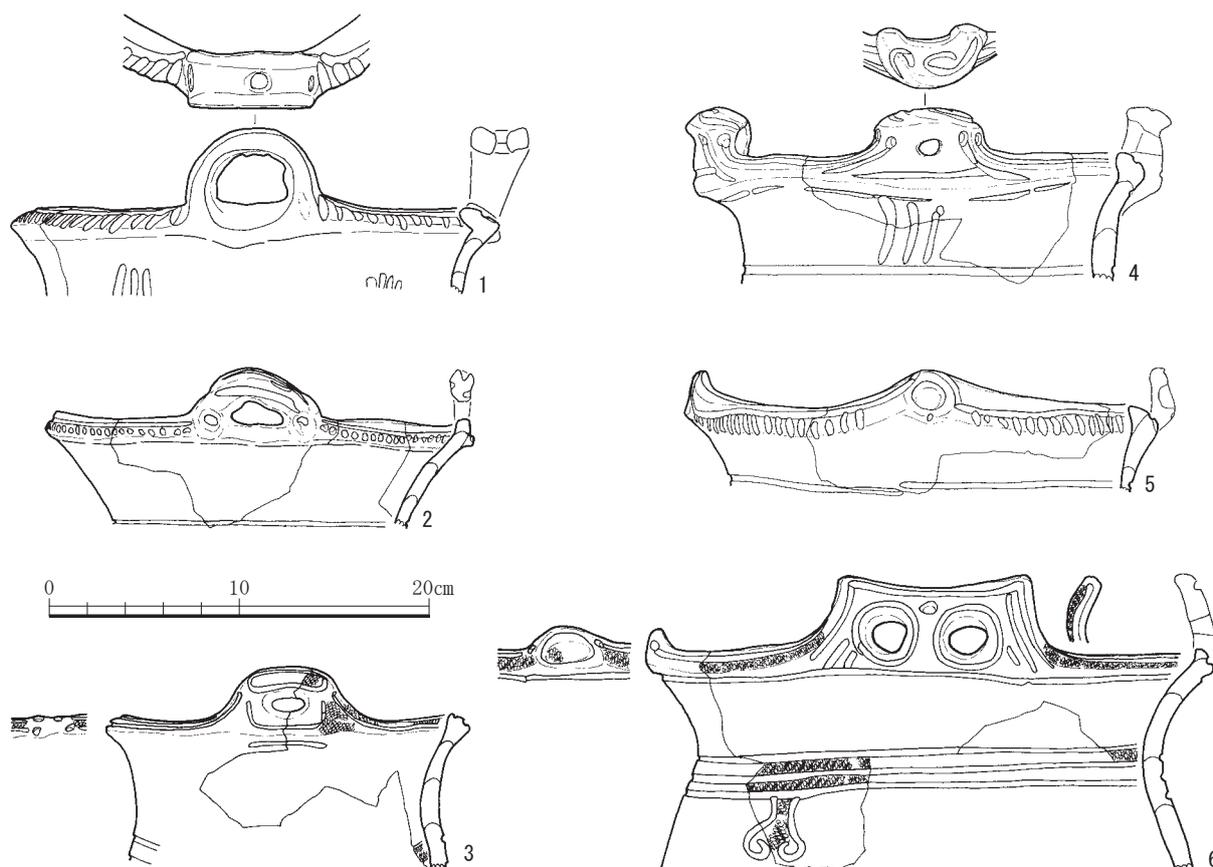
第24図35は3条一組の頸部横走沈線帯から対向するC字状文を上方に突出させ、胴部には矩形かと思える区画内に斜行沈線を加えている。沈線は3条一組を基本とし、沈線間および突出文には縄文LRを充填する。36は胴部上半の横走沈線帯を大柄の弧状沈線で縦位に区画し、区画内に鍵の手に折れる沈線帯を2段に配す。上段の鍵の手状の屈曲部では、沈線先端を巴状に繋ぎ、下段の鍵の手状の屈曲部では、上縁沈線の交点に刺突文を加える。沈線は3条一組を基本とし、沈線間には縄文LRを充填する。37は海馬文の頂部に、C字状の沈線を下して鎖状に繋げる。38は斜行する沈線帯を途中で区切り、三角形の突出部を派生させて縄文を充填する。なお、交差部の沈線末端には刺突を加える。39、41は沈線末端にC字状文を加えて巴状に絡ませる。40は横走沈線から垂下する縄文帯と突出文を加える。42は十字形に沈線を交差させ、43は交差部で縄文帯区画沈線の一方を丸く収め、45は縄文を充填する横走沈線帯から上方に文様を伸ばす。

第25図1は頸部と胴部で周回する、縄文充填の横走沈線帯をC字状の沈線帯で繋げる。2は3条一組で鍵の手状に曲がる沈線帯の外周沈線を丸く収め、中央沈線の末端には刺突文を加える。3は斜行する沈線帯の中位を鍵の手状に突出させ、並行する斜行沈線帯と繋いでいる。なお、内面には調整痕として、刷毛目状の細かな沈線を横走させる。4は胴部の横走沈線帯から斜行沈線帯を伸ばして末端に渦文を施す。5は斜行する沈線を途切れせ、U字状に繋げた横走沈線を伸ばす。6は横走沈線帯を鍵の手に折って末端を丸く収める。7は沈線先端を巴状に絡める。9は横走沈線帯から斜行沈線を伸ばし、接合部で沈線先端を巴状に巻く。10は垂下文の下縁に受け皿状に沈線を配す。11は横走沈線帯から斜行線を下し、12は斜行線どうしが切り合う。13は横走沈線帯下縁に円形の文様を加える。14は文様帯下端部と思え、縦位の文様末端に横走沈線帯を配す。15から17は弧状沈線文と斜行沈線文の組み合わせである。18から20は横走沈線帯などから突出文を伸ばす例であり、対向するC字文(18～20、22～24)や縄文帯の幅を太くするもの(21)、先端を曲げて尖らせるもの(26)などが見える。

第25図27はそろばん玉状に強く屈曲する胴部を有し、文様帯の上端を横走沈線で限っている。区画内には楕円文や三角形の文様を組み合わせで配し、区画内に縄文LRを充填する。28は地文縄文LR上に3条一組の沈線で、先端を丸く収めた垂下文を描く。29は2条沈線で画される斜行、垂下する縄文帯内の空白部に、先端を丸めた棍棒状の文様を加える。30はやや強く内弯する胴部に、先端を丸く収めた棒状の文様および横走沈線帯を配して縄文LRを充填する。31、32は薄手の土器であり、細い沈線で描く文様区画に縄文を充填する。34は芭蕉文状の蛇行沈線を2条下す。35、36は紡錘形状の垂下文様であり、35は先端を丸めている。39から41は大柄で曲線的な文様を描く土器であり、41の三角区画は海馬文かと思う。42から56は円文を配し、沈線は3条一組のものを含め多条のもの(42、47～51など)と2条一組のもの(44、45、53、56など)がある。なお、縄文の充填にも有無がある。第27図57から59は三角形の区画内に縦位短沈線を充填する。

ス 第13群土器 (第26図～第29図)

張りのある胴部がくびれて頸部から外反して開き、内弯もしくは内屈させる口縁部に至る。口縁部の強い内



第26図 有文深鉢形土器第13群実測図 (縮尺1/4)

屈により、内面に谷線(屈曲痕)を残す例が多い。また、口縁部に大型の把手を一、二対配す例も見える。

文様帯の構成は、口縁部文様帯と頸部から胴部にかけての文様帯で2帯構成とするものと、頸部と胴部の境に横走沈線を数条巡らせて画し、頸部文様帯と胴部文様帯に分けて、文様帯を3帯構成とするものがある。後者では頸部文様帯の波頂下に垂下沈線を配す例が少数あるが、多くは無文帯とする。なお、頸部から胴部にかけて一体の文様帯とする土器でも、頸部付近に文様の突出する垂下文様を施したり、斜行する沈線帯を加える例が見える。

頸部から胴部の文様帯には、3条ほどの沈線を絡み合わせて胴部を縦位に分割する例が見える。なお、胴部文様帯の沈線間への縄文充填には有無がある。本群土器は復元実測を施した土器以外に文様の全容を知れる例は少ないため、主に口縁部形態および口縁部の文様により分類を行った。

- 1類 口縁部を強く内折して幅の狭い文様帯とする土器。口縁部内面に屈曲に伴う谷線を残す。
- 2類 口縁部を強く内折して幅の狭い文様帯とし、口縁部下縁外側に刻み目を施す土器。なお、口縁部内面には、屈曲に伴う谷線を残す。
- 3類 口縁部を強く内屈させ、上面に平坦面をもたせて口縁部文様帯とする土器。
- 4類 2類に類似する口縁部形態をもち、口縁部に沈線や充填縄文を施し文様帯とする土器。
- 5類 口縁部を外方に肥厚させて断面三角形とし、幅狭の口縁部文様帯とする土器。
- 6類 本群土器の胴部片を一括する。
- 1類 (第26図4、第27図1~11)

口縁部を強く内折して幅の狭い文様帯とする土器を本類とする。口縁部内面には屈曲に伴う谷線を残す。

第26図4は直立気味の頸部が口縁部で短く内折する土器であり、4単位の把手を加える。把手は方形で上面形は半筒状を呈す。把手外面中央にやや大型の円孔を穿ち、円孔を囲むように末端に刺突を加えた沈線を三角形形状に配す。C字状の上面形をもつ把手上面には、先端を丸く収めた沈線一对を配す。また、把手側面から末端に刺突を加えた沈線1条を引いて口縁部文様帯としている。口縁下および頸部に沈線各1条を横走させて胴部文様帯上縁を画す。無文勝ちの頸部には、波頂下に3条一組の垂下沈線を配している。なお、縄文の施文はない。

第27図1は平縁の土器であり、内折する口縁部に沈線1条を横走させ、口縁下には刺突列を加えた横走沈線帯を配す。横走沈線帯下縁には円文および斜行文を沈線で加える。2も平縁の土器である。強く内折して外方に肥厚させる口縁部片であり、内面に谷線を残す。口縁部には沈線1条を横走させて口縁部文様帯とする。口縁下に横走沈線を配し頸部上端を限り、2条一組の斜行沈線帯を2組配する。なお、一方の沈線間には、横位の短沈線を充填している。5は小波状縁の土器であり、短く内折する口縁部に沈線1条を加え、頸部に3条一組の沈線を垂下させる。なお、沈線上端の一部を矩形に閉じる。6は波状縁の土器であり、内折する口縁部に沈線2条を口縁波形に合わせて配す。頸部には3条一組の斜行沈線を間隔を空けて施す。7は口縁部を短く内折させる土器であり、突起が施されるものと思える。幅の狭い口縁部には沈線1条を加える。突起下で垂下する沈線から、口縁部と頸部に2条一組の横走沈線を加える。8から11は肥厚して緩く内折する口縁部を有し、口縁下に横走沈線を加える。10は沈線下に刺突文を加え、11は斜行沈線を施す。いずれの土器も縄文の施文はない。

2類 (第26図1、2、第27図12~36、第28図1)

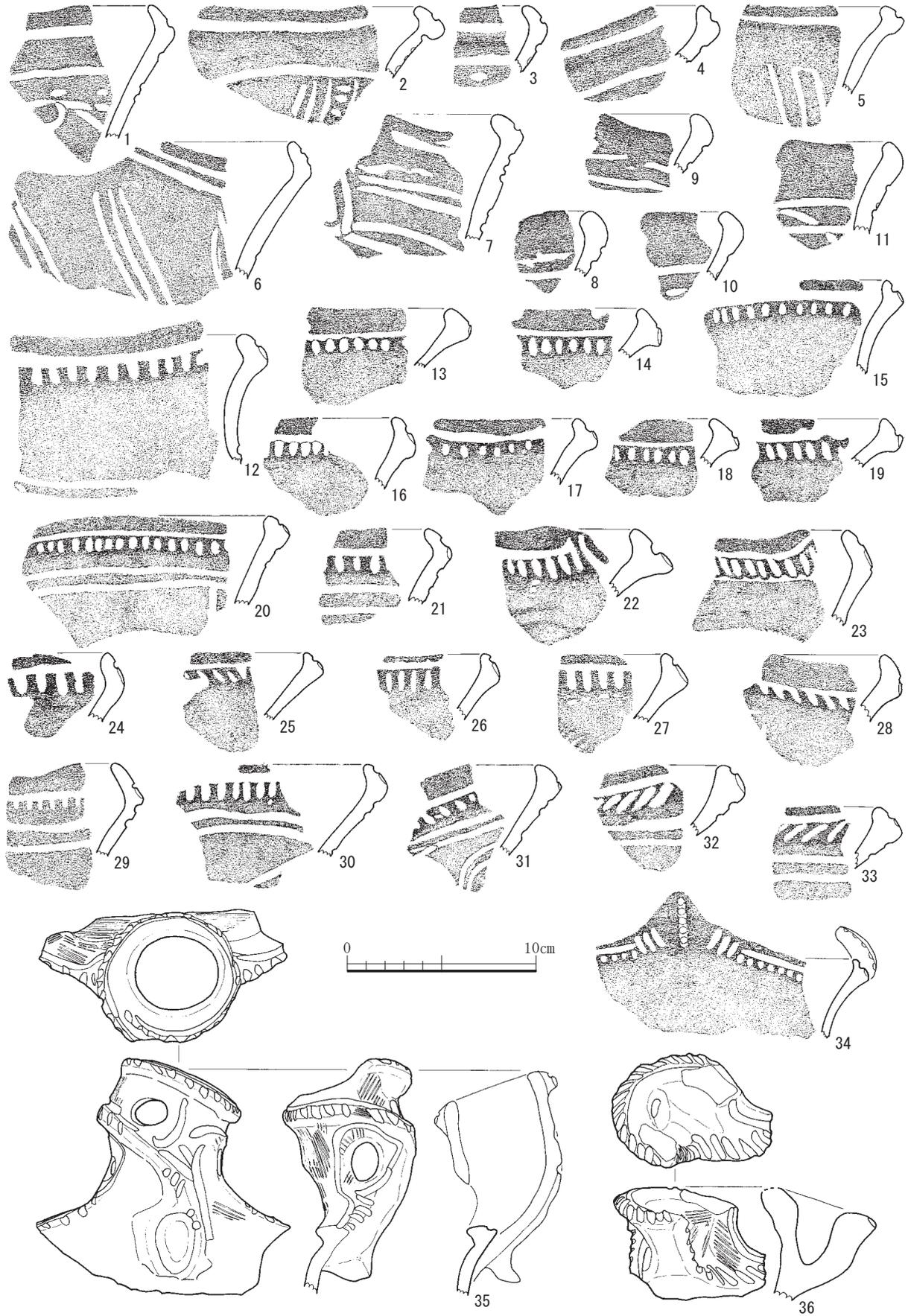
口縁部を強く内折して横走沈線や口縁部下縁外側に刻み目を施し、幅の狭い文様帯とする土器を本類とする。口縁部内面には、屈曲に伴う谷線を残す。

第26図1は頸部から直線的に立ち上がって口縁部を短く内折させる土器であり、口縁部内面には屈曲に伴う谷線を残す。口縁部に板状の粘土を渡し、大きな円孔を持つ環状把手一对を配す。把手上面を幅広く溝状に窪ませ、貫通する3つの円孔を上面と両側面に穿つ。内屈した口縁部には、把手基部で丸みをもち内面方に切り上がる横走沈線を引き、口縁部下縁外側との間に斜行する短沈線を密に加える。無文勝ちの頸部には、把手を挟む位置に3から4条の垂下沈線帯を配す。

第26図2は頸部からやや大きく開き、口縁部を外方に肥厚させて短く内折して直立気味の口縁部に至る土器である。丸棒状の粘土を口縁部に渡し環状把手としており、一对を配すものと思える。略三角形の貫通孔を中央に配し、把手基部外面には一对の貫通する小孔を穿つ。また、小孔を結ぶかのように、環状部に沈線1条を施す。なお、把手内面にも同種の文様を描くほか、上面にも沈線1条を加える。短く屈曲する口縁部には、把手基部から沈線1条を横走させ、沈線と口縁部下縁間には刺突文列1条を充填する。

第27図12は直立気味の頸部から、強く内折する口縁部に至る平縁の土器であり、内面には屈曲に伴う谷線を残す。口縁部には沈線1条を横走させ、口縁部外側との間に刻み目を丁寧に施している。なお、頸部には沈線2条を横走させて縄文を充填する。13から19も同様の例であり、沈線と口縁部外側の間に施す刻み目には、短沈線様の整ったものから、間隔も不揃いな刻み目や刺突まで多様である。

第27図20は口縁部を短く内折させ、内面に弱い谷線を残す。口縁部には沈線1条を横走させ、口縁部外側との間に刻み目を丁寧に施す。口縁下に2条一組の沈線帯を横走させ、無文勝ちの頸部に垂下沈線を施す。21は口縁部をやや長く内切する土器であり、口縁部内面に谷線を残す。口縁部に沈線を横走させ、口縁部外側との間に短沈線様の刻み目を施す。また、口縁下には沈線3条を横走させる。22は把手等を加える波状縁の土器であり、把手等を囲む弧状沈線3条を加えている。やや広く面をもつ口縁部には横走沈線1条を加え、口縁部外側との間に斜行する短沈線を施す。頸部は無文としている。23は把手を加えた波状縁の土器と思え、内折して面をも



第27図 有文深鉢形土器第13群実測図 (縮尺1/3)

たせた口縁部の上下に、口縁波形に合わせた沈線2条を配し、沈線間に斜行する短沈線を充填している。26の刻み目は板状工具による刺突文である。27は頸部の一部に縄文の施文が見える。28は波状縁の土器であり、口縁部に沈線1条を横走させ、口縁下に垂下する沈線1条が見える。29はやや長く口縁部を内切する波状縁の土器であり、口縁部に沈線を横走させて口縁部下縁に短く刻み目を施す。口縁下には口縁波形に合わせた2条一組の横走沈線を配す。30は口縁部を短く内折させ、やや幅広の横走沈線と短沈線様の刻み目を施す。口縁下にも2条一組の沈線を横走させ、これと繋がると思える斜行沈線を配している。31は波状縁の土器であり、内切する口縁部に沈線1条を口縁波形に合わせて横走させ、口縁部外側との間に刻み目を施す。口縁下には2条一組の沈線を配し上限を画し、沈線で曲線文を描く。32、33は同一個体の波状縁の土器であり、口縁部に沈線1条と斜行短沈線を密に加え、口縁下には2条一組の沈線を横走させる。

第27図34は頸部から弱く外反して開き、口縁部を短く内折する土器であり、三角山形の突起を口縁部に配す。突起中央部には刺突を加えた沈線1条を垂下させ、基部の両側には3条の短沈線を斜行させて区画する。幅の狭い口縁部には、沈線1条を横走させて口縁部外側との間に刺突列1条を丹念に施す。頸部は無文帯とし、胴部との境を横走沈線で限っている。

第27図35は中空の大型円柱状把手であり、正面および側面に貫通する円孔を各々1個配すほか、把手内面基部をアーチ状として上面と繋いで中空に仕上げる。把手上面に面をもたせ、側縁に刻み目を施す隆帯を螺旋状に下し、把手正面に配した窪みのある楕円形貼付文に繋いでいる。隆帯に添わせて沈線1条を加え、各円孔の周囲も沈線で囲んでいる。頸部から大きく開いて強く内折する口縁部には、把手側面の円孔を囲む沈線から派生する横走沈線を加え、口縁部外側との間に斜行する刻み目を施す。また、頸部には横走する沈線を施す。本把手の内外面には、調整痕であろう細かな刷毛目状の細沈線が施される。

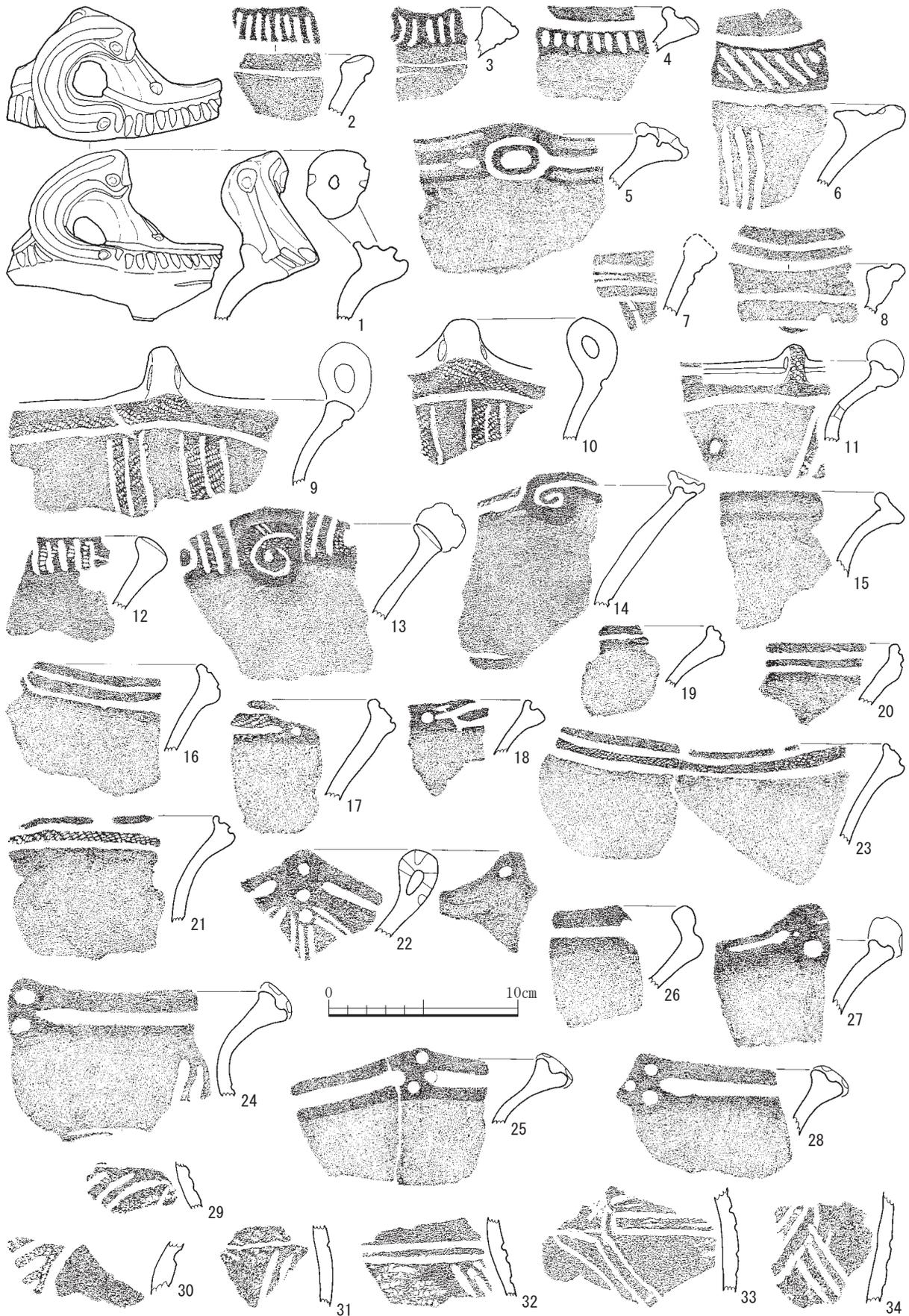
第27図36は強く内折する土器の口縁部に配された、比較的大型の上面形C字状を呈する把手である。把手側縁には大型の貫通する円孔を開けて中空部と繋ぎ、非対称な形状とする。把手頂部には面をもたせ、把手側面に配した沈線を口縁部まで続けて横走沈線とする。また、把手外側に施した斜行する刻み目は、口縁部外側の刻み目へと繋げる。また、円孔内から伸びる沈線を口縁部を横走する沈線とし、把手の左縁に斜行刻みを施す。本例も内外面に調整痕と思える細かな刷毛目状の沈線が施される。

第28図1も三角形状を呈する大型の把手であり、頸部の無文部外面には、調整痕であろう細かな刷毛目状の沈線が施される。中央に円孔を穿つ三角形状の把手は、左辺から底辺にかけて隆帯をC字状に加え立体感を高めている。C字状の隆帯上には沈線1条を引き、末端を刺突文で止めている。なお、C字状隆帯先端部下縁を拡張してさらに刺突文を加える。隆帯内側にも沈線を添わせ、末端を口縁部外側の短沈線様の刻み目に繋げている。また、把手右側基部の刺突文から伸びる沈線は、把手頂部の貫通孔を潜り把手左側縁を添寄せたのち、口縁部を横走する沈線に繋げる。さらに、円孔から始まる沈線を口縁部横走沈線としている。口縁部下縁外側には短沈線状の刻み目を丁寧に施している。このほか、内面にも刺突文とこれに続く沈線1条を加えている。

3類 (第28図2～8)

頸部から外反して開く口縁部を強く内側に折り返し、口端部上面に平坦面をもたせて文様帯とする土器を本類とする。

第28図2、3は同一個体であり、小波状を呈する口縁部片である。口縁部を内面側に折り返すことで、上面文様をもつ口縁部文様帯を作出しており、3では口端部を内方に拡幅して単位文と思える弧状沈線を配し、単位文間には縦位短沈線を充填する。口縁部外面には沈線1条を横走させ、口縁部外側との間に縄文を充填する。4は口縁部を内側に折り返して内面に谷線を残す。口縁部に配す上面文様は、やや幅広の横走沈線1条と口縁



第28図 有文深鉢形土器第13群実測図 (縮尺 1/3)

部外側間に充填した短沈線で構成する。5も口縁部を折り返す例であり、単位文部に粘土を加え浮き上がらせる。口縁部には中央部に大型の円孔を配し、周囲に浅く太い沈線を廻らせて単位文とする。単位文の両側には、浅く太い沈線2条に挟まれた、末端に刺突を加える深い横走沈線を配して口縁部文様帯とする。なお、頸部は無文とする。6は口縁部を長く内側に折り返して幅の広い口縁部文様帯とする。なお、内面には谷線を残す。口縁部を横走する沈線と、これに接して口縁部外側間を埋める斜行沈線で文様帯を構成する。頸部には2条一組の並行沈線を隣接して二組垂下させ、幅広の沈線帯を構成するものと思える。7は口縁部を欠くが、頸部には3条一組の横走沈線帯から斜行沈線帯を下している。8は口縁部に沈線1条を横走させ、頸部にも2条の並行する沈線を横走させる。

4類 (第26図3、6、第28図9～21、23)

2類に類似する口縁部形態をもち、口縁部に沈線や充填縄文を施して文様帯とする土器を本類とする。2類で口縁部文様帯の主な構成要素であった、外側部への刻み目の施文は見えない。なお、本類は縄文の充填などに古手と思える手法を認める。

第26図3は口縁部を内方に肥厚させて断面三角形に面をもたせる。口縁部には中央に貫通する円孔を加えた丸山形の把手を一对、把手間の中間部に小突起の単位文一对を配すものと思える。把手上縁の円孔との間には横長の楕円文を配すものと思え、縄文RLを充填する。また、上縁以外の円孔周囲にはU字状の沈線を加えて画し、さらに把手下の口縁部下縁に短沈線1条を横走させる。把手の側面からは2条の沈線を横走させ、把手の中間で沈線末端に刺突4点を加えて単位文とする。口縁部の2条沈線間および把手を囲むU字状沈線の間には、縄文RLを充填する。また、頸部下縁にも2条沈線で区画された縄文帯が見えるが、全様は不明である。

第26図6は張りのある胴部から頸部が外反して開き、口縁部を短く内折する土器であり、内面には弱い谷線を残す。板状の把手一对を口縁部に配すほか、大把手間の中間部に浅皿状の半円孔を陥入した丸山形の突起一对を配す。内弯する山形の把手には、目を思わせる沈線で縁取られた貫通する円孔一对を正面に配す。円孔間の上部には円形の小孔1個を陥入し、文様の上縁および側縁を角を持ち曲がる山形の沈線1条で画す。さらに大型の円孔側部に2条の斜行沈線を加える。把手側面から引かれる1条の沈線は、把手間の突起部まで口縁部を横走し、末端に刺突を加えて止める。口縁部横走沈線と口縁部外側間および、把手側面には縄文LRを充填する。口縁部下縁に引く沈線1条と、頸部と胴部の境に引く3条一組の横走縄文帯間は、広く無文帯とする。3条一組の沈線帯下縁沈線からは、対向するしの字状の突出文を下して縄文LRを充填する。

第28図9、10は同一個体の口縁部片であり、頸部から外反して開いて口縁部に至る。口縁部を内方に肥厚させ、内面に弱く谷線を残す。口縁部には橋状把手を配すほかに文様はもたない。頸部上縁を横走沈線で画し、把手下に3条一組の垂下沈線を二組、間隔を空けて配す。口縁外側と横走沈線間および、垂下沈線帯には縄文RLを充填する。11も類似する土器であり、頸部から外反して開いて口縁部に至る。口縁部を内側に折り内面に谷線を残す。橋状把手を配した口縁部には、横走沈線1条を加える。頸部は口縁下および胴部上縁を横走する沈線で画し、3条一組の斜行沈線帯を配す。橋状把手上面および斜行沈線帯には縄文LRを充填する。

第28図12から15は頸部から大きく開いて口縁部に至る土器である。くの字に内折する口縁部内面には谷線を残す。なお、口縁部を外面側に突出させることはない。12は口縁部に縦位沈線文を配し縄文RLを加える。13はくの字に折る幅の狭い口縁部に、半球形の貼付文を加え単位文の中心とし、表面には螺旋状に沈線1条を加える。貼付文両側には縦位短沈線を各々3条配し、全体で単位文を構成する。単位文両側には楕円文と思える沈線区画を配し、口縁部全面に縄文LRを充填する。なお、12、13の頸部は無文としている。14は短く内折した幅の狭い口縁部に、音符状に粘土を加えて外方および上方に拡張し、円形の貼付文部で渦巻く沈線を口縁部

に横走させる。なお、沈線末端を円形の貼付文に添わせて内面側まで伸ばしている。口縁部には縄文RLを充填する。また、頸部と胴部の境は沈線を横走させて画し、頸部を無文とする。15は口縁部を浅く溝状に窪めるほかは文様をもたない。

第28図16から21は、口縁部を内側に折って生じたやや幅の狭い平坦面に、楕円形の区画文などを配す口縁部片である。口縁部内面にはやや弱く谷線を残す。16は波状縁の口縁部片であり、楕円形の区画文を口縁部に配すが、区画内への縄文充填はない。17、18は口縁波底部片と思え、刺突文で縄文を充填する区画文を区切っており、17は下縁沈線を区切り、18は末端を楕円形に丸め、区画文間に施している。

19から21、23は平縁の口縁部片であり、19、20は縄文の充填は見られず、21、23は沈線間に縄文を充填する。

5類 (第28図22、24~28)

口縁部を外方に肥厚させ断面三角形状とし、幅狭の口縁部文様帯とする土器を本類とする。口縁部には幅広の沈線と円形刺突を配して文様帯を構成する土器である。

第28図22は山形を呈する小型の把手片であり、外面から粘土を内面まで巻き込み橋状把手とする。口縁部を断面三角形状に肥厚させて面をもたせ、沈線1条を横走させる。なお、把手内外面から橋状把手中空部に向かい小孔を穿つ。把手上面および外面の貫通孔下には、各々円形刺突を施す。外面の小孔からは三方に向かう2、3条一組の沈線帯を配す。

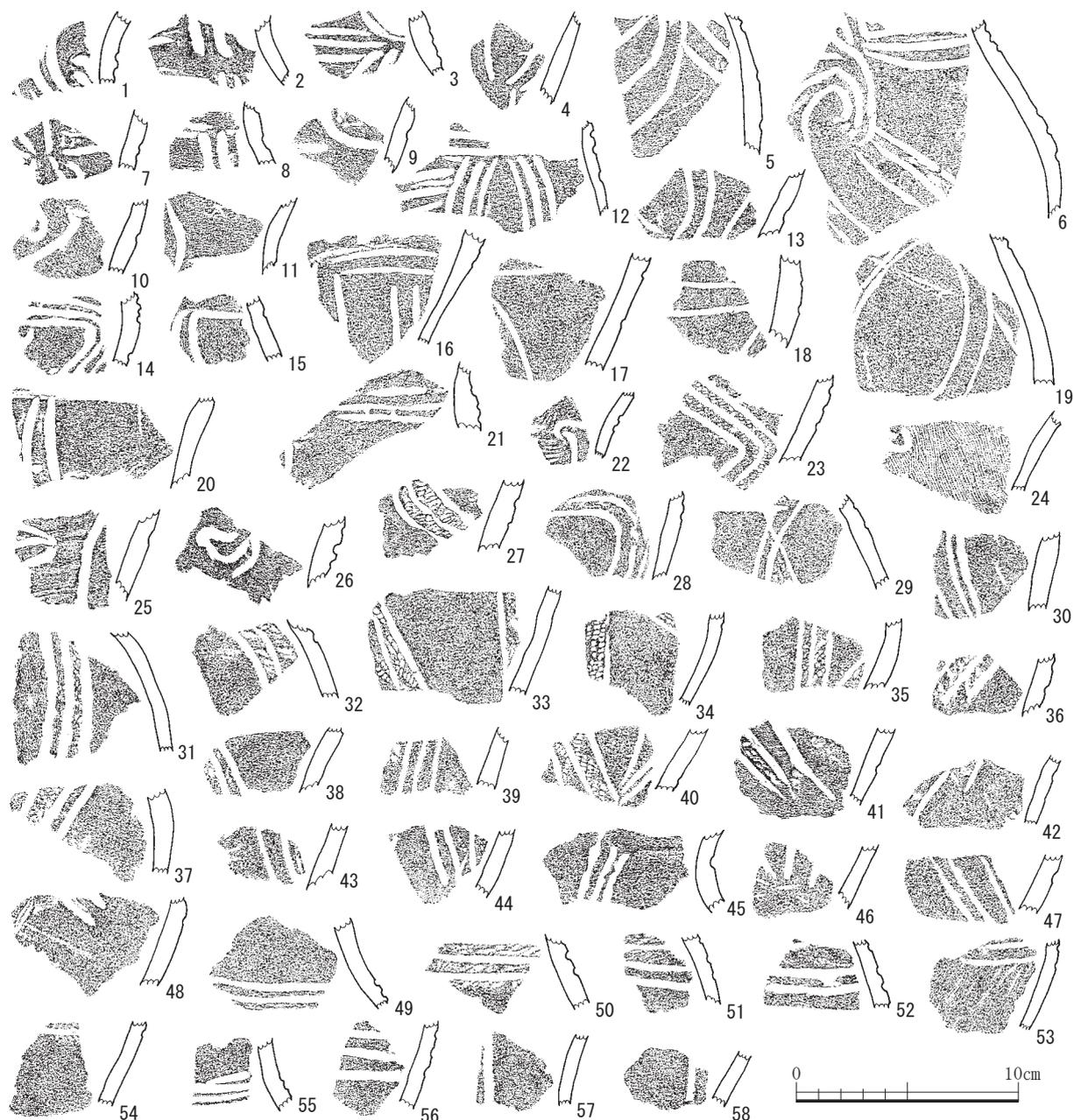
24は口縁部を断面三角形状に肥厚させて幅の狭い文様帯とする。なお、内面には弱く屈曲痕を残す。口縁部には8字状の貼付文を加えて円形刺突を縦位に一对配し、幅広の沈線1条を横走させる。頸部下縁を横走沈線で画し、無文勝ちの頸部には3条一組と思える垂下沈線を配す。25、28は24に類似するが、頸部に文様は見えない。なお、沈線末端に刺突を加えている。26はやや長く口縁部を内折して内面に屈曲に伴う谷線を残す。口縁部には末端に刺突を加えた横走沈線を施す。27は口縁部を断面三角形状に肥厚させて内面に谷線を残す。丸山形の突起を加える口縁部片であり、突起外面には浅皿状の円孔を加える。突起両側より末端に刺突を加えた沈線を横走させて口縁部文様帯とする。なお、頸部は無文としている。

6類 (第28図29~34、第29図)

本群土器の胴部片を一括して本類とする。

第28図29は頸部の横走沈線から3条一組の沈線を弧状に下す。30は大柄の文様を描く弧線から斜行する沈線帯を下す。なお、大柄の文様内は無文とし、斜行沈線間には縄文を充填する。31から34は横走沈線から斜行沈線を下す例であり、31は頸部の横走沈線部に縄文を充填する。32は2条の横走沈線から、先端に刺突を加える3条の斜行沈線を下し、沈線帯外の空白部に縄文を充填する。33は末端をU字状に繋げた横走沈線帯から、3条の斜行沈線を下す。斜行沈線先端を結合させ、縄文の充填はない。横走沈線の状況から胴部中位の文様繋ぎ目部と見える。34は胴部下半の破片であり、3条一組の斜行沈線が山形に切り合い施される。縄文の充填はない。

第29図2、3は頸部片であり、口縁部側の文様と胴部側の文様を繋ぐ頸部と胴部の境に、左右方向に伸びる横走沈線帯を配している。4は胴部下半の破片であり、対向する弧線文と下側文様のつなぎ部かと思える。5は胴部上半の破片であり、弧状を描く間隔の広い3条一組の沈線帯と、斜行沈線帯が切り合っている。6は頸部に配した横走沈線帯周辺の破片であり、口縁部側から3条の沈線帯を頸部まで下し、沈線1条を胴部側の逆しの字状文に絡めている。さらに、しの字先端から3条一組の斜行沈線を下す。全体に文様の描出沈線は粗略な感を受ける。8は頸部の横走沈線帯の間隔を空けて垂下する沈線3条を配す。12は頸部の3条一組と思える横走沈線帯から対向する3条一組の弧線帯を下す。横走沈線帯と紡錘形の沈線帯の交点から斜行沈線を引き下ろすものと思える。13も紡錘形の沈線帯と斜行沈線の組み合わせである。14は横走する沈線帯を緩く曲げて斜行



第29図 有文深鉢形土器第13群実測図 (縮尺1/3)

させる。15は頸部の横走沈線を曲げて弧状沈線を下す。16は口縁部下の破片と思え、横走する沈線帯から間隔を空けて二組の沈線帯を垂下させる。19は大柄な楕円文から斜行沈線を下している。20は頸部の横走沈線から大柄の弧状沈線2条を下す。21は頸部に配した3条一組の横走沈線帯から沈線帯を垂下させる。22は垂下沈線の先端をC字状として絡める。23は3条一組の沈線帯を鍵の手状に折って沈線間に縄文を充填する。24は調整痕である刷毛目状の集合細沈線を全面に施す。25は大柄の弧線を垂下させ、3条一組の沈線帯先端をくちばし状に閉じる。27から32は大柄の曲線文を描く沈線帯の例であり、沈線の条数には2条や3条の例が見えるほか、縄文の充填には有無がある。33から39は斜行線沈線帯の例であり、33から35は垂下する沈線帯との関係が見える。36から48は紡錘形もしくは斜行する沈線帯の先端部の例であり、40や46のように紡錘形となる二組の沈線帯や、41や48のように単独で末端を開放して描き終わるものも見える。49から56は横走する縄文帯の例であり、49から52のように頸部に配すものや、53や56のように胴部下半に配すものもある。57、58は垂下する沈線の例で

ある。

セ 第14群土器 (第30図1～3、第31図、第32図)

やや張りの弱い胴部が頸部でくびれて弱く外反して開き、口縁部下縁で段をもたせて屈曲し、内弯もしくは直立、内傾させる口縁部に至る土器を本群とする。

口縁部、頸部、胴部の3文様帯の構成とするものと、口縁部と胴部の2文様帯の構成とするものがある。口縁部に配した単位文により緩く波状とするものや、山形の突起を加える例がある。口縁部の文様帯は単位文と楕円形の区画文で構成する例が多く、区画文等への縄文の施文には有無がある。なお、一部に口縁部内面に文様を施すものも見える。

2文様帯で構成する土器の胴部文様は、縄文などが通例であるが、3文様帯で構成するものは、頸部を無文とする例が多く、胴部には地文縄文の上に紡錘形や垂下文を沈線で加えて胴部を縦位分割するものが多いものと思える。

本群土器は復元実測を施した土器以外に文様の全容を知れる例は少ないため、主に口縁部形態および口縁部の文様により分類を行った。

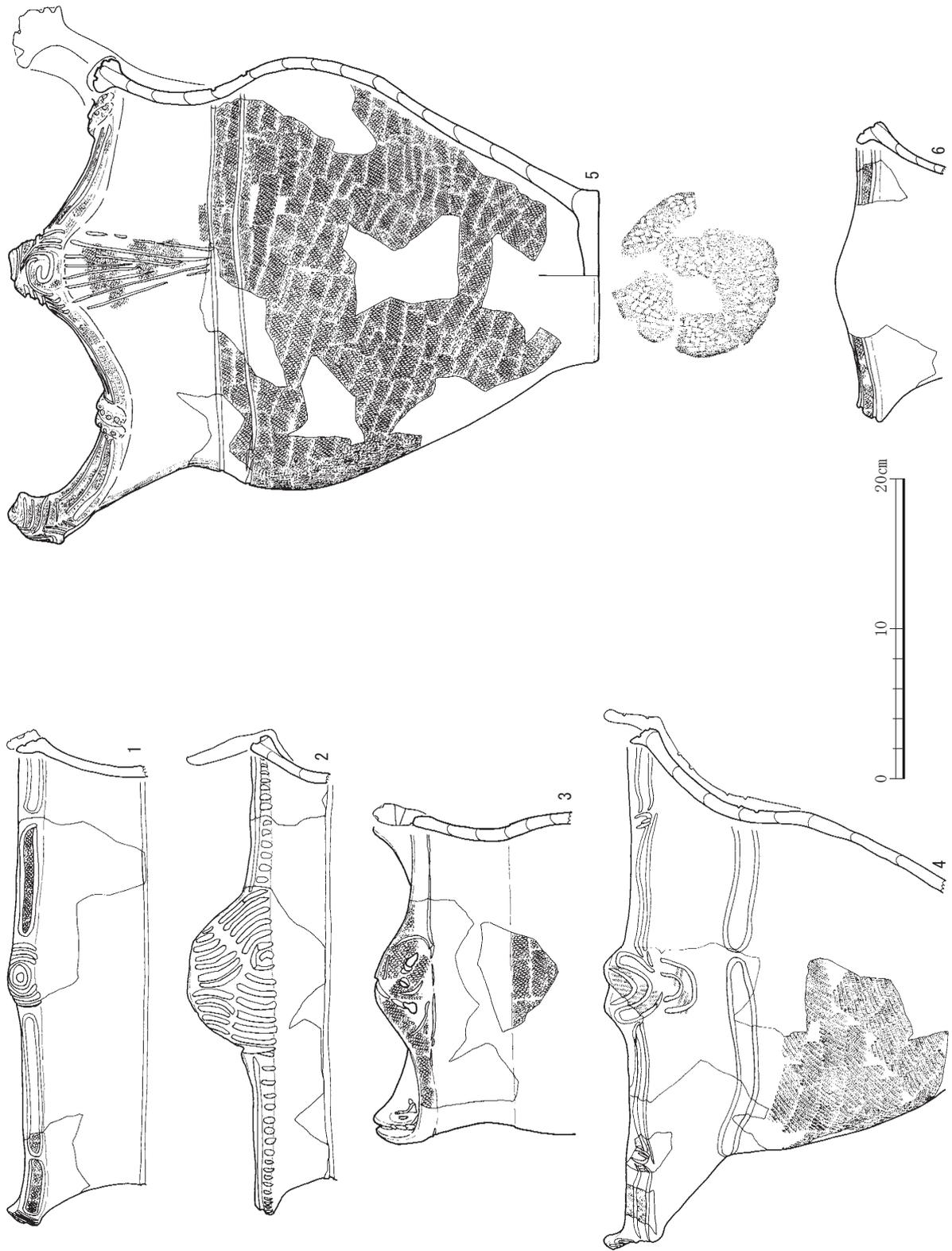
- 1類 平縁もしくは単位文部を緩く波状にする土器。
 - 2類 単位文として山形の把手、突起を配す土器。
 - 3類 口縁部文様帯に楕円形などの区画文を配す土器。
 - 4類 口縁部内面に肥厚帯を配し、内面文様を加える土器。
 - 5類 口縁部、頸部、胴部の3文様帯構成を採る土器の、胴部片と思える土器を一括する。
- 1類 (第30図1、3、第31図1～14)

口縁部を平縁もしくは緩く波状にする土器を本類とする。口縁部文様帯下縁は、文様帯を際立たせるためか、有段とする例が大半を占める。

第30図1は直立気味で長く伸びる頸部を弱く開き、内傾する口縁部に至る土器である。口縁部内面の屈曲部には、撫で状の浅い横走沈線が見え、口唇部をつま先状に尖らせる。単位文により口縁部を緩く波状とし、口縁部と頸部の境には有段による稜をもたせ、口縁部文様帯を強調する。口縁部文様帯は、中心に小円孔を施し円文および対向する弧線文から成る単位文と、縄文LRを充填する楕円文とで構成される。頸部と胴部の境に横走沈線を廻らせ、頸部は広く無文帯とする。

第30図3はやや張りのある胴部が頸部で弱く外反して開き、直立する口縁部に至る3単位波状縁の土器である。波状縁の中央に円形、両脇に三角形の透かし様の貫通孔を3個一組で配し、C字状や三角形の沈線で区画して単位文とする。なお、貫通孔周縁の内面にも、沈線で簡便な文様を加える。口縁部文様帯下縁を横走沈線や屈曲部の微細な稜により画し、口縁部文様帯に縄文LRを施す。頸部と胴部の境は、若干の稜をもたせて区画し、胴部には縄文LRを全面に施す。なお、頸部は広く無文帯とする。

第31図1から3および10、14は単位文中央部に貫通孔を有すものであり、5から9、11から13は円孔を陥入させる。1はやや内弯して口縁部下縁を有段とする緩い波頂部片であり、円孔の周囲に円文や弧状沈線を配し、縄文LRを加える。2も口縁部を有段に仕上げ、貫通する円孔の周囲に同心円状の文様を沈線で施すほか、単位文側縁に楕円形の区画文を配すと見える。なお、縄文LRを区画外にも施す。4は直立する口縁部をもち、頸部と口縁部の境を有段で仕上げる。単位文の中心に配した円孔の周囲には対向する弧線文を加えている。5は外傾する口縁部に、円孔を中心に置く同心円文を配して単位文とし、口縁部と胴部の境を強く撫でて有段に



第30图 有文深鉢形土器第14、第15群実測図（縮尺1/4）

仕上げる。7は波頂部を欠く口縁部片であり、円孔を中央に配した円文と対向する弧線文を配して単位文とする。単位文と間隔を空けて楕円形の区画文が見える。無文の頸部と口縁部の境は有段とし、口縁部に縄文RLを施す。10は口端部を欠く波状縁の口縁部片であり、貫通する小孔の周囲に対向する弧線文を配して単位文とする。口縁部には先端に刺突を加える沈線を横走させ、口縁部外縁の有段部と沈線間に浅く刻み目を施す。11は内弯気味に開く波状縁の土器であり、波頂下に円孔を中心に置く同心円文を配す。口縁部と頸部を分ける有段等はなく、縄文の施文もない。12は弱く内弯する口縁部片であり、やや突出する円文の周囲を沈線で囲み、上下に刺突文一対を配して、対向する弧線文を広く施す。単位文に隣接して、楕円文中央に沈線1条を交えた区画文が見える。口端部および口縁部には縄文LRを施す。口縁部と頸部の境は有段とし、頸部を広く無文帯とする。13は口縁の波頂部付近の破片であり、対向する弧線文の一部かと思える沈線を施す。14は貫通する円孔を中心に、対向する弧線文で縁取る単位文を波頂下に置き、口端部に切り上がる横走沈線と口縁部外側間に施す斜行する短沈線で、口縁部文様帯を形成する。口縁部は内傾し、頸部との境は顎を張ったように突出する。また、波頂下の頸部には垂下沈線が見える。なお、本群において口縁部外側に刻み目や短沈線を充填する例は少なく、本例のほか、後述する第31図2や第31図10を加えるに過ぎない。

2類 (第30図2、第31図15～37)

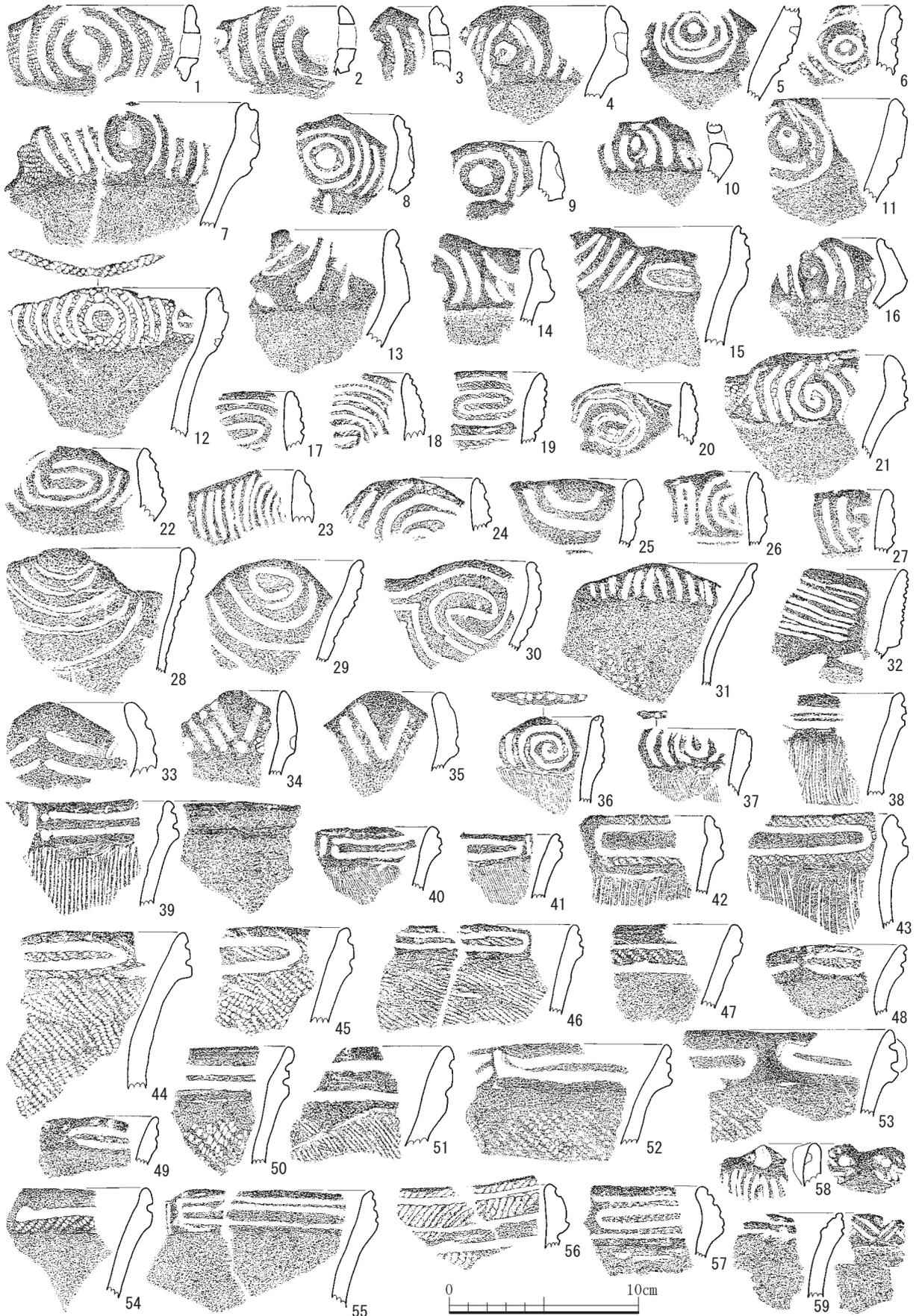
口縁部に山形の把手、突起を配し、突起下に単位文を配す土器を本類とする。口縁部の文様から、口縁部に山形の把手を加え、半円形の同心円文や組み合わせ式の弧状の短沈線による扇形文を配すもの(A種)、三角山形の突起をもち、横走沈線やV字状文を単位文として配すもの(B種)に分けた。

A種 (第30図2、第31図15～30)

口縁部に山形の把手、突起を加えた単位文を配する土器を本類とし、突起や把手に、半円形の同心円文や弧状の短沈線を組み合わせた扇形文を配すものを本種とする。

第30図2は頸部から弱く外反して開き、口縁部を外方に肥厚させて断面三角形状とする土器である。頸部と胴部の境には沈線1条を横走させる。口縁部下縁は顎状に張り出し稜をもつ。口縁部に配した半円形の板状把手は一対と考えられ、把手中央下縁に小型の渦巻文を配し、これを取囲むように沈線による多重扇形文を4単位に分割して配置する。口縁部には沈線を横走させ、口縁部外側との間に縦位の刻み目を浅く、粗く施す。なお、口縁部の形状は後述する第15群土器に類似する。

第31図15は頸部から直立気味の口縁部に至る土器であり、山形突起を配す。突起部には斜行もしくは弧状の多重沈線を配し単位文とし、側縁に楕円形の区画文を加えて口縁部文様帯とする。口縁部と頸部の境は撫で状の調整により弱く有段とする。なお、口縁部、頸部への縄文の施文はない。16は口縁部を内折して幅の狭い文様帯とする。山形の突起下には縦位に刺突文2点を配し、対向する弧線文を加えて単位文とする。口縁部には楕円区画の末端が残る。突起部には縄文を施す。17から20は突起部に渦巻文を加えると思える。19は有段とする口縁部の下縁に2条の横走沈線を加え、口縁部および頸部の沈線間に縄文を施している。20は丸山形の小突起下に渦巻文を加える。21は外反する頸部から、内弯気味に直立して口縁部に至る土器である。口縁部には台形状の突起を配し、突起中央に渦巻文を置いて外縁に対向する弧線文を施す。口縁部と頸部の境は有段とし、縄文RLを施す。なお、胴部にも口縁部際を除き縦走縄文を施す。22は口縁部を内折して屈曲部には稜をもたせ、突起部には二重の渦巻文を施す。23は山形突起部に細めの沈線で多重弧線(渦巻)文を配し、24は丸山形の突起部に大柄の渦巻文を加える。また、25は小突起部にU字状の幅広の沈線3条を引く。26は口縁部の突起下に渦巻文と縦長の矩形文を配して単位文とし、側縁に楕円形区画文を加える。口縁部と頸部の境は有段とし横走沈線を加える。27は平縁で有段とする口縁部に横走沈線と弧線文で単位文を描くが、文様帯の幅から波底部も



第31圖 有文深鉢形土器第14群実測図 (縮尺1/3)

しくは把手間に配した単位文かもしれない。

第31図28から30は、口縁部に山形の突起を配す点は本類土器の通例だが、突起下の単位文が口縁部文様帯に大きく食い込む点が異なる。28は外反して開く口縁部に山形の突起を加える。なお、口唇部は丸く収め、器厚は薄く仕上げる。突起下には上開きの弧線文を多重に引き、最下段沈線から沈線1条を垂下させる。縄文の施文はない。29も類似例であり、外反して開く口縁部に丸山形の突起を配す。突起頂部に渦巻文を置き、上開きの弧線文を多重に配す。口唇部はつま先状に収め、縄文の施文はない。30は内弯する口縁部に丸山形の突起を加え、突起下に先端を丸く繋げた渦巻文を配す。渦巻文とする沈線は口縁下の沈線として左右に伸ばしており、さらに、沈線下縁に1条を加える。本破片は後述する第20群土器に含めるべきかもしれない。

B種 (第31図31~37)

三角山形の突起下に、横走沈線やV字状沈線による単位文を配すものを本種とする。

第31図31は頸部から外反して開いて口縁部を弱く外方に立ち上げる土器であり、口縁部を低く山形の波状縁とする。口縁部と体部の境は有段に仕上げる。なお、口唇部はつま先状に収め、薄手に仕上げる。口縁部には突起下で対向する弧線文を配し、縦位短沈線を連続的に幅広く配す。なお、口縁部への縄文施文はないが、胴部には条が縦走する縄文を施す。32は山形を呈すと思える突起下に、2条一組の並行沈線を多条に横走させ、口縁部下端は有段とする。33は内弯する口縁部片であり、口縁部下縁には段をもつ。口縁部を山形とし、頂部下でやや太めの沈線2条を八字状に分ける。なお、本土器片は第17群土器とすべきかもしれない。34、35は直立ぎみに立ち上がる口縁部片であり、下縁には段をもつ山形の突起を配す。突起下にはV字状の沈線を配し、両側に多重の斜行沈線を添わせる。34は沈線末端に刺突を加える。36、37は頸部から段をもって立ち上がり、直立する口縁部に至る。口縁部には丸山形突起を配し、突起下に巴状の渦巻文を施して外側に弧線文を加える。丸く収めた口唇部には円形の刺突列を加える。なお、頸部以下には調整痕として刷毛目状の細沈線を施す。

3類 (第31図38~57)

口縁部文様帯に区画文をもつ土器を本類とする。

第31図38から41は頸部から外反して開き、内折して立ち上がり口縁部に至る土器である。38は頸部に横走沈線を引き、口縁部に楕円形と思える横長の区画文を配す。なお、頸部には刷毛目状の細沈線による調整痕を残す。39は口縁部外面の有段部に対応して、内面に浅い溝状の窪みを施す。口縁部には弧状沈線による単位文を施した低い突起を加え、先端に刺突を加えた沈線2条を横走させ区画文とする。頸部にはやや粗めの刷毛目状の調整痕を施す。40、41は突起間に単位文と思える縦位短沈線を施し、矩形の横長区画文を口縁部に配す。なお、調整痕の調子から、36、37と同一個体と思え、42、43も同一個体である。頸部が外反して立ち上がり、口縁下で段をもちやや内弯する口縁部に至る。口縁部には横長の楕円区画を配し、区画外に縄文RLを施す。なお、胴部には楕状工具による縦位の条線文を施す。44、45も同一個体であり、外反して開く頸部から直立する口縁部に至る。口縁部下縁に粘土を加え肥厚させ、有段をより明瞭なものとする。44は単位文かと思える縦位短沈線の一部が見えるほか、横長の楕円区画文を配して口縁部文様帯とする。口縁部および頸部には縄文LRを加える。46は外反して開く頸部から、段を付けてやや内傾する肥厚した口縁部に至る。口縁部には横長の楕円区画文を配す。縄文LRを口縁部および頸部に施す。47は直線的に開く頸部から、段を付けて立ち上がり口縁部に至る。区画文内のみ縄文を充填する。48、49も同一個体と思え、頸部から段を付けて直立する口縁部に至る。口縁部には楕円形区画文と横走沈線が見え、区画文内に縄文を充填する。50は外反して開く口縁部片であり、口縁部外面を肥厚させて幅の狭い文様帯とし、2条沈線を横走させる。頸部には縄文RLを施す。51も頸部から外反して開き、口縁部外面を肥厚させて有段状に仕上げる。口縁部には2条の沈線を横走させる。頸部

には楯状工具による斜行する条線を施す。52も外反する口縁部外面を肥厚させ有段とし、幅の狭い文様帯とする。文様帯内には2条の沈線を配すが、一方の末端を矩形に繋げて区画文とする。なお、頸部には縄文RLを施す。53も頸部から外反する口縁部を外方に肥厚させ、区画文間に入り字状に隆帯を加える。口縁部に沈線による楕円形の区画文を配す。なお、頸部には縄文RLを施す。54も口縁部外面を肥厚させ、有段状に仕上げて口縁部とする。口縁部には先端にやや大型の刺突を加えた沈線1条を横走させ、沈線と口縁部下縁間に縄文LRを施す。なお、頸部は無文とする。55も口縁部外面を肥厚させ、口縁下を撫でて直立する口縁部とする。口縁部には沈線1条を交えた横長の矩形区画文を配す。頸部、口縁部いずれも縄文は施さない。56も同様に口縁部外面を肥厚させ、有段で内穹気味の口縁部とする。有段下には太目の沈線1条を添わせ、口縁部には沈線2条を横走させる。意図的かは不明だが、口縁部下縁沈線と有段部の間には縄文を施さず、それ以外には縄文Lを施す。57は内折する口縁部をもち、下縁を撫でて窪ませ有段を強調する。口縁部には2条の横走沈線に挟まれた横長の楕円文を配し、横走沈線間には縄文を充填する。

なお、本類土器の頸部片を見れば、頸部を無文とするもの、頸部に沈線1条を横走させ画すもの、頸部以下に縄文や条線を引くものが見える。

4類 (第31図58、59)

口縁部内面に肥厚帯を配して内面文様を加えるものを本類とする。

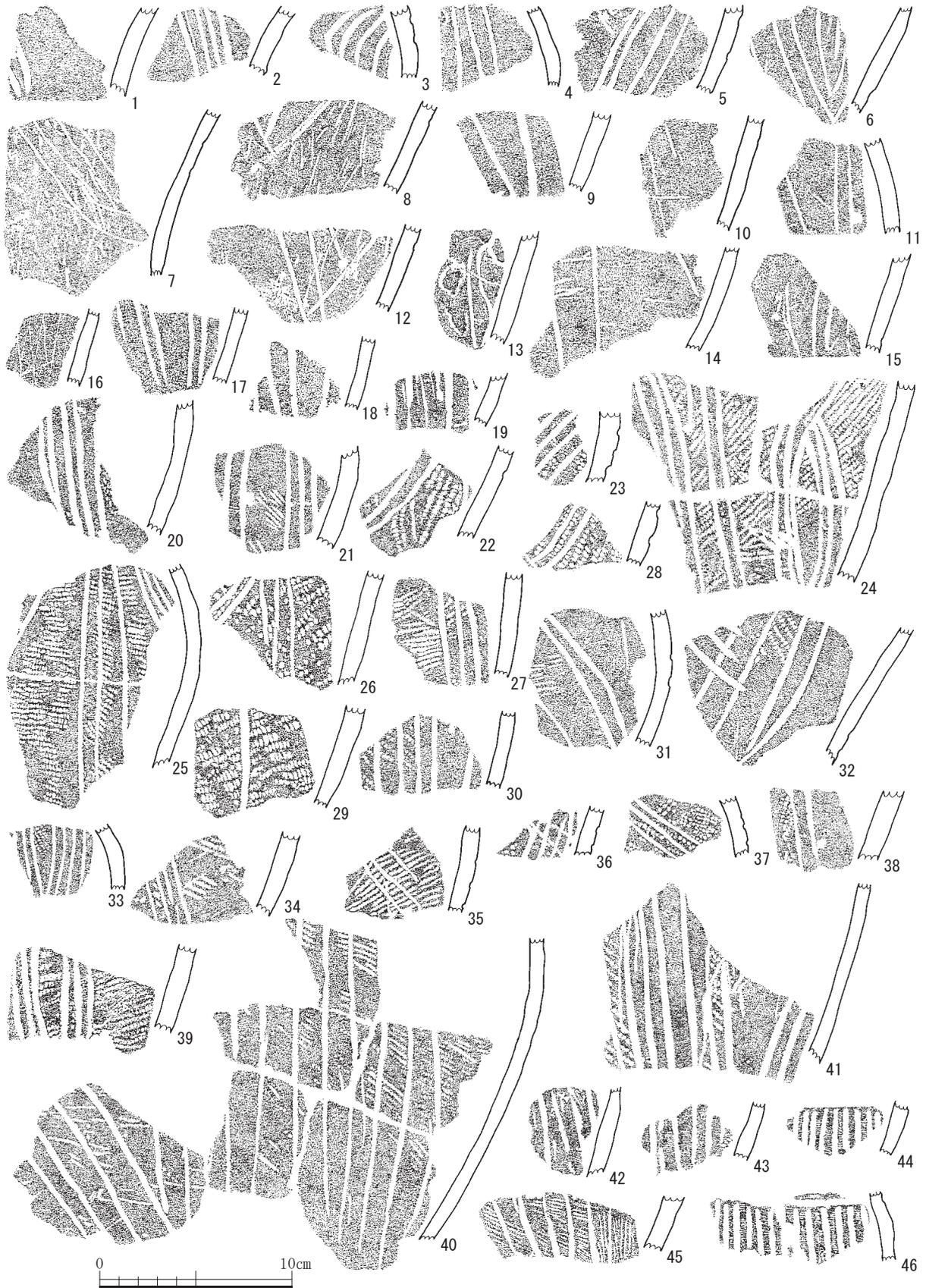
第31図58は山形突起頂部を窪ませ、外面には対向する縦位の弧線文を密に施す。内面は突起頂部から人字形に隆帯を加えて肥厚帯を作り、両側に円形刺突一対を施す。59は外反する頸部から段をもち直立する口縁部に至る。口縁部外面には2条の沈線を横走させる。内傾する内面も有段に仕上げ、2条沈線による鋸歯文を施す。

5類 (第32図)

口縁部、頸部、胴部の3文様帯構成を採る土器の、胴部片と思える土器を一括して本類とする。しかし、3文様帯構成を採るものの中にも、胴部文様帯に縄文や条線を施すものがあると思えるが、ここでは胴部に文様を施すものに限定して取扱うこととする。なお、胴部に縄文等を施す例は、後述の第15群土器の胴部片に含まれているものと思える。なお、本類で取り扱う土器の胴部は地文縄文とするものが多く、無文とするものは少ない。

第32図1から19は無文地に文様を描く土器である。1は斜行沈線の末端部の破片である。2は4条の沈線を斜行させる。3も多条沈線を弧状に引いている。4、5は4条沈線を垂下、斜行させる。6は多条の沈線末端を合わせ紡錘状とする。7は大きく外反して開く胴部下半の破片であり、4条の沈線を斜行させ、下端で横走する沈線に繋いでいる。8も胴部下半の破片であり、対向する弧線の末端を合わせている。9から11は垂下沈線の状況である。12は対向する弧線の末端が切り合う。13は垂下沈線に添わせて蛇行沈線を配している。16は細かい沈線で垂下線と斜行線の末端を合わせて施して格子目状の文様としている。17は胴部下半の破片であり、2条一組の垂下沈線の末端を揃えている。

第32図20は粗く施す地文縄文上に、4、5条の垂下沈線を施す。22は地文縄文上に3条の曲線文を下して垂下文を加える。23は縄文地に多条の斜行沈線を施す。24は胴部下半の破片であり、LRの縄文地に3条一組を基本として垂下文や鎖状文を下している。25は胴部中位の破片であり、LRの縄文地に3条の垂下沈線を引き、両脇に斜行沈線と多条の弧状沈線を配す。26は胴部下半の破片であり、LRの縄文地に垂下沈線と横走沈線を施す。27は細かいLRの縄文地上に、3条の垂下沈線と1条の垂下沈線を間隔を空けて施す。29は大粒の地文LR縄文上に、垂下する3条の沈線を間隔を空けて施している。30も縄文地上に多重の垂下沈線を配す。31は胴部中位の破片であり、縄文地上に斜行沈線を配す。32は紡錘形に配された沈線の末端部の破片と思え、末端



第32図 有文深鉢形土器第14群実測図 (縮尺1/3)

が揃わず切り合っている。33は小型の土器の胴部上半の破片であり、細めの沈線で紡錘形の文様を施す。34から38は多条の斜行沈線を配す例である。39から46は垂下沈線を施す例であり、39は22と同一個体かと思え、間隔を空けて3、4条の沈線を垂下させるが、鎖状に交差する可能性もある。40はLRの縄文地上に多条の沈線を垂下させて斜行する沈線と切り合う。41もLRの縄文地上に垂下、斜行する3、4条の沈線を配す。45は地文に楡描沈線を施す。44、46は胴部上縁の破片と思え、横走沈線から多条の垂下沈線を下す。なお、両片は同一個体であり、地文に刷毛目状の細沈線を施している。

ソ 第15群土器 (第30図4、5、第33図～第36図)

張りのある胴部が頸部でくびれて外反し、強く内屈して口縁部に至る土器であり、口縁部、頸部、胴部の3文様帯構成を基本とする。口縁部は4単位の波状縁とする例が多い。また、内屈する口縁部と頸部の接合部は、顎を張ったように突出させる例が多い。波頂部には隆帯や沈線によるS字文、渦文、同心円文、蛇行線文などを配し、波底部に向かい楕円文、並行線文などを施して口縁部文様帯とする。また、波底部に単位文を配す例も見える。横走する沈線で頸部と胴部の境を画し、各々を文様帯とする。頸部は無文帯とする例が多いが、一部に波頂下に放射状や垂下する沈線を配す例も見える。なお、胴部には全面に縄文を施すことを通例とする。

本群土器は復元実測を施した土器以外に、文様の全容を知れる例は少ないため、主に口縁部形態および口縁部の文様により分類を行った。

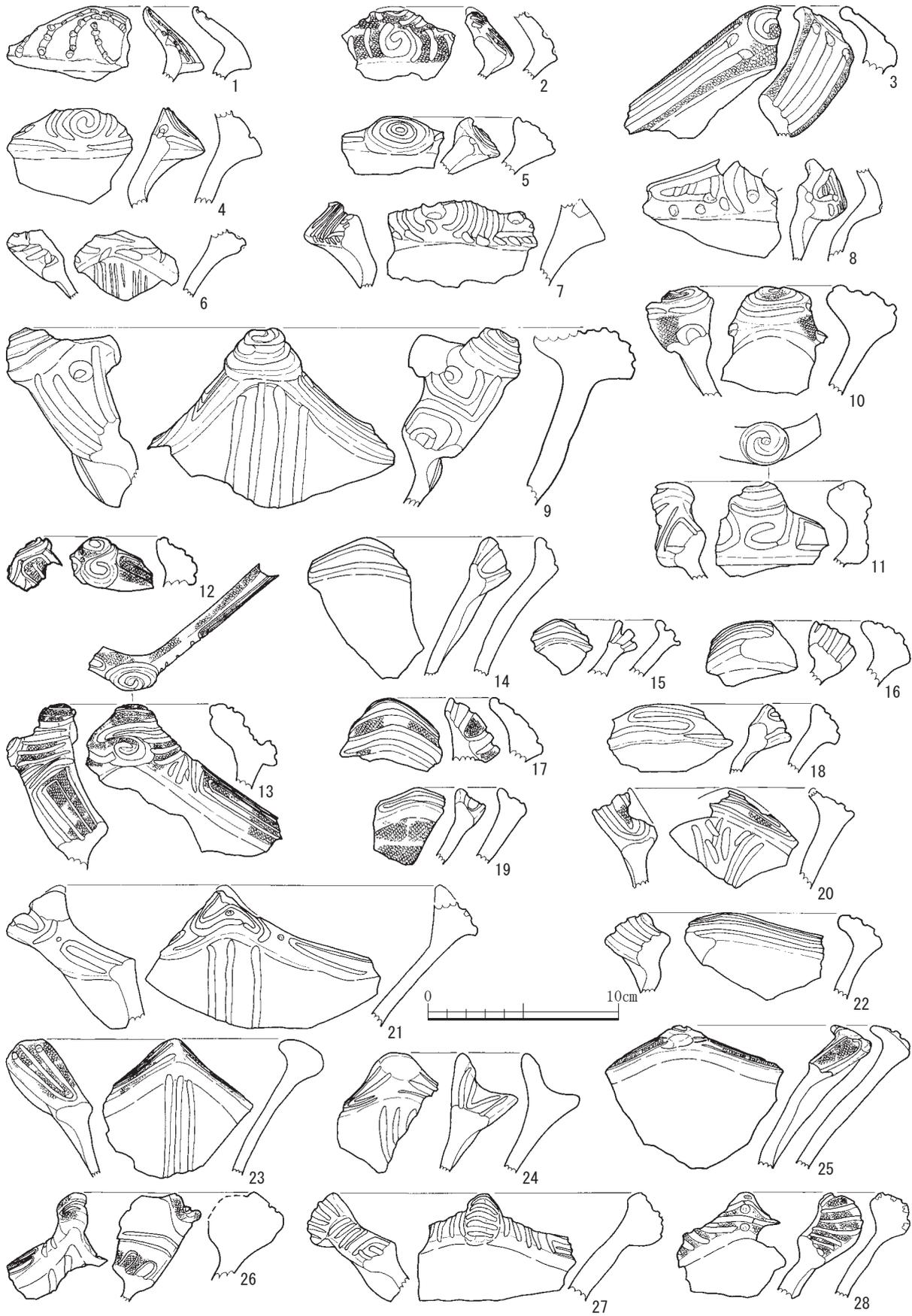
- 1類 口縁部と頸部の接合部が顎を張ったように突出させる波頂部片。
- 2類 1類以外の口縁部片で、口縁部と頸部の接合部の突出が弱い土器。
- 3類 本群土器の胴部片を一括する。
- 1類 (第30図4、5、第33図、第34図1～8)

張りのある胴部が頸部でくびれて外反し、口縁部を強く内屈させる土器であり、口縁部、頸部、胴部の3文様帯構成を基本とする。口縁部は4単位の波状縁とし、口縁部と頸部の接合部が顎を張ったように突出させる土器を本類とする。

本類は波頂部の形状および文様構成から、波頂部中央に渦巻文、同心円文、対向する弧線文などを配すもの(A種)、波頂部を円柱状に拡張し、渦巻文、S字文などを配すもの(B種)、波頂下に沈線による簡略な単位文を配すもの(C種)、小型の山形突起を口縁部に配し、突起下に貼付文を加えるもの(D種)、波頂下に口縁部を縦断する稜をもたせ、稜上に刺突文列を配すもの(E種)、三角山形の波頂部に、弧線文による単位文を配すもの(F種)に分けた。

A種 (第33図1～8)

第33図1は頸部と口縁部の接合点で、口縁部を強く顎を張るように突出させ、内傾する丸山形板状の波状縁の土器である。波頂下の中央には、刺突を加えた沈線で渦文を描くほか、両側に縦位の弧線を加える。2も口縁部下端を突出させる波頂部片であり、頂部の一部を欠く。山形の波頂部と思え、中央には渦文を縦位に2個配して各々対向する弧線文を添わせるものと見え、縄文RLを施す。3は口縁部を内側に強く内折し、波頂部に渦巻文を配す。頸部と口縁部の接合点を下方に張り出たせ、口縁部文様帯を強調する。先端に刺突を加えたやや幅広の沈線を口縁波形に合わせて3条横走させ、口縁部文様帯を構成する。なお、頸部は無文帯とする。縄文は口縁部文様帯の上下端および単位文にLRを施し、3条の沈線間への施文は見えない。4は外反して開く頸部から、口縁部を内傾させる波状縁片であり、波頂部を欠く。波頂部中央に渦巻文を置いて両側に対向する弧線文を配すものと思える。口縁部文様帯の下縁に添い沈線1条を横走させる。5は口縁部をくの字に屈曲



第33図 有文深鉢形土器第15群実測図 (縮尺1/3)

させ、断面三角形に仕上げる。口縁部には円板状に粘土を加え突起とし、中央に配した円形刺突を中心に同心円文2条を配す。また、突起側縁から沈線1条を横走させる。なお、本破片は波底部の突起かもしれない。6は頸部と口縁部の接合点で、鏢状の隆帯を廻らすように口縁部を下方に強く張り出させる。口縁部には対向する弧線文を配すかと思えるが、詳細は不明である。頸部には波頂下の位置に櫛描沈線による条線を垂下させる。7は外反して開く頸部から内傾する口縁部に至る波頂部片であり、頸部から口縁部の移行に際して口縁部側を突出させる。波頂下に円孔を陥入させ、両側に対向する弧線文を多重に配して単位文とする。単位文両側には刺突を加え、沈線による区画文を配すと思うが、詳細は不明である。口縁部文様帯の下縁外側には、斜行する刻み目をやや密に加える。内面には屈曲による谷線は見えず、緩やかなスロープ状となる。8も頸部と口縁部の接合点で強く屈曲させ、張り出しをもたせた波頂部片である。波頂下中央に貫通する円孔を置いて両側に対向する弧線文を配す。さらに、縦位短沈線を充填する三角形の区画文を加えるものと思える。なお、口縁部下縁外側には疎らな刺突文を列状に加えている。

B種 (第30図5、第33図9～13)

波頂部を円柱状に拡張し、渦巻文、S字文などを配すものを本種とする。

第30図5は、底部から直線的に外傾して立ち上がり、張りのある肩部から内弯して頸部でくびれ、直線的に開いて強く内折する口縁部に至る。口縁部は4単位の大波状縁に仕上げ、波底部にも小突起を配す。頸部から口縁部の移行に際して、口縁部を強く鏢状に張り出させ、波頂部に山形把手を配す。把手頂部から口縁部外面に向かいS字状の隆帯を配す。頂部には円孔を陥入させ、隆帯内側に沈線を添わせて末端部を渦巻かせる。また、渦巻文両側には弧線状に沈線を加え、末端を口端部側へ横走させて単位文とする。波底部には口縁部を縦断する2条一組の短い隆帯を配し、頂部に円形刺突列を各々加える。波頂、波底間の口縁部には口縁波形に合わせて3条沈線を配す。なお、口縁部には全面に縄文LRを施す。頸部と胴部の境を横走する2条沈線で画し、胴部には縄文LRを施す。無文勝ちの頸部には、波頂部下で上開きの放射文を並行沈線で施し縄文を充填する。

第33図9は大型の波頂部片であり、内弯気味に開く頸部から強く内屈して口縁部に至る。頸部から口縁部の移行に際して、口縁部側を鏢状に強く張り出させる。また、上半部を欠失するが、波頂部および口縁部外面に粘土を加えて山形円柱状に整形し、把手頂部から螺旋状に下る隆帯を配すものと思える。なお、隆帯頂部には円孔を陥入させ、隆帯内側には沈線を添わせるものと思える。また、把手基部には、左右両面を貫通する円形の小孔を穿つ。口縁部の右側面には口縁波形に合わせて円孔を包む3条沈線を横走させ、左側面には円孔を囲むコ字状の区画文および、二重の長方形区画文を配す。無文勝ちの波頂下には、沈線4条を垂下させる。10も頸部から口縁部の移行に際して、口縁部側を鏢状に張り出させる波頂部片であり、頂部を円柱状とする。把手頂部から側部にかけて沈線による渦巻文を施す。波頂部両側には横長の楕円形区画文を各々配すと思える。11も頸部から口縁部の移行に際し、口縁部側を張り出させる波頂部片である。山形円柱状に粘土を加え、把手頂部の円孔から螺旋状に沈線を下し、正面基部に沈線1条を添わせる。また、把手下には先端を丸めた沈線1条を下す。把手両側の口縁部には、矩形の沈線区画文を配すものと思える。12は小型の土器の波頂部片であり、波頂部に8字状に粘土を加え、縦位のS字状沈線文を施す。波頂部両側には、横走沈線を挟む横長の楕円形区画文を配し、口縁部全体に縄文LRを施す。13は頸部から口縁部の移行に際して、口縁部側をやや強く張り出させる波状縁把手部の破片である。把手頂部と口縁部下縁に円形貼付文を施し、両者を繋ぐC字状の隆帯を加える。頂部および口縁部下縁の円形貼付文上には、螺旋状の渦巻文を加えるほか、C字状の隆帯両側にも沈線を添わせる。波頂部隆帯を取囲み、多重の弧状沈線と垂下沈線を加えて単位文とする。また、波底部に向け二重の横長矩形区画文を配し、口縁部文様帯全面に縄文LRを加える。なお、内面の屈曲に伴う谷線は強くない。

C種 (第33図14~24)

波頂下に沈線による簡略な単位文を配すものを本種とする。良好な例が少ない。

第33図14は口縁部下縁の張り出しが弱く、15は口縁部下縁を強く張り出させる波頂部片であり、三角形の波頂下に、口縁波形に合わせて沈線による三角形の区画文を配す。なお、15は小型の品である。17から19は波頂下に横長のS字状の蛇行沈線を加えるものと思える。なお、17は三角形の区画内にS字状の沈線を加えるかとも思える。17は口縁部の区画文内および頸部に、縄文を施す。18は波頂下の縦位のS字状文の両端を伸ばし、沈線1条を加えて口縁部の上下端を横走する区画文とする。19は口縁下に三角形の区画文を沈線で描き、頸部に縄文を施す。20は波頂部下に二重の三角文を沈線で配し、波頂下の頸部には1、2条の垂下沈線間にハの字の短沈線を加えている。口縁部の区画文内には縄文を充填する。21は把手上部を欠く波頂部片である。外反して開く頸部から、肥厚して内傾する口縁部への移行に際して口縁部下縁を突出させる。波頂下には縦位の稜線を残し、三角形の区画文を対称形に配す。なお、稜線上には円形刺突を配すかとも見え、これを縫うように横位S字文を沈線により施す。波頂部単位文の両側には楕円形の区画文を配す。単位文と区画文間に刺突を加える箇所も見える。波頂部下の頸部には3条沈線を垂下させる。なお、内面に屈曲に伴う谷線を残す。稜線上の刺突を重視すればE種に含むべきかもしれない。16、22は口縁部文様帯に、口縁波形に合わせて横走する3条沈線を配すが、全様は不明である。23は三角山形状を呈する波頂部片であり、口縁部下縁に突出する張り出しをもち、内面にも屈曲に伴う谷線を残す。文様帯の幅は比較的狭く、沈線1条を交えて末端に刺突を加えたつの字状の沈線区画を、波頂下の縦位の稜で対称に配す。また、口縁部文様帯には縄文を充填する。なお、波頂下の無文勝ちの頸部には沈線3条を垂下させる。24も類似の品であるが、波頂部の稜線を欠く。二重のつの字状の区画沈線を、波頂下に対向して配す。

D種 (第33図25~28)

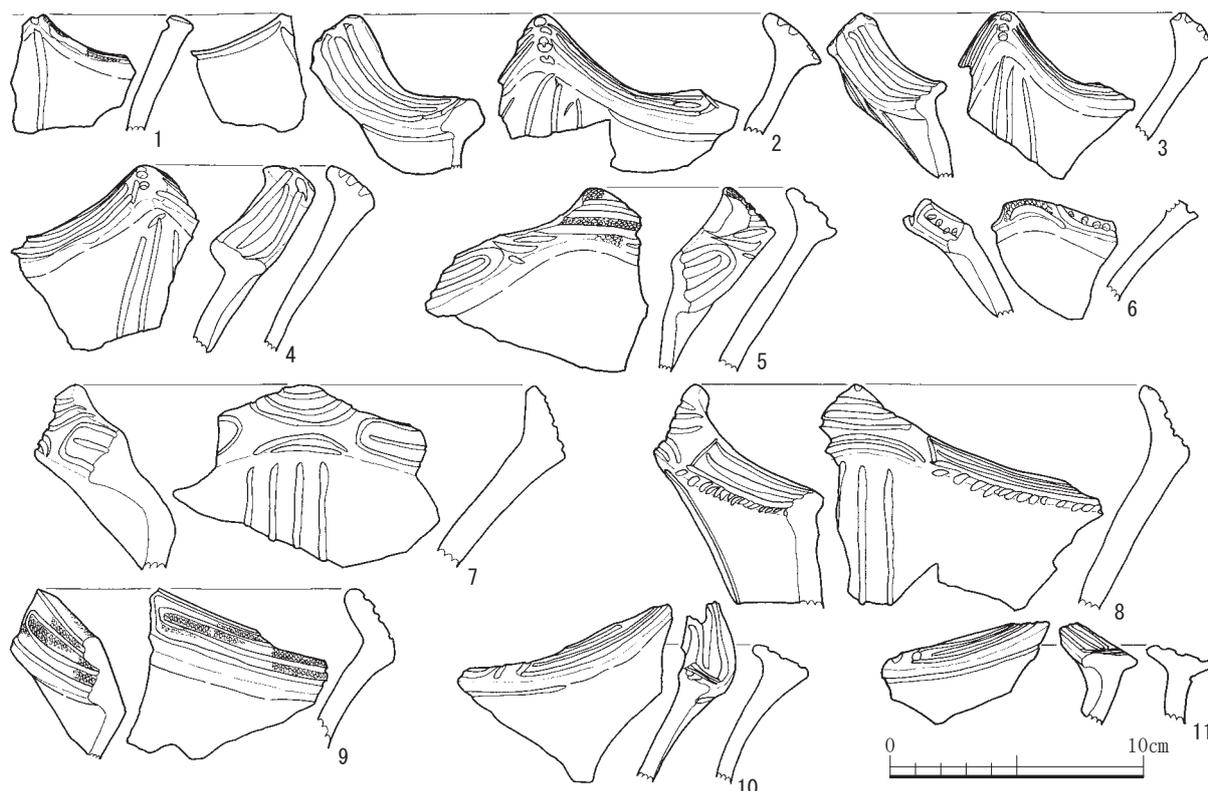
小型の山形突起を口縁部に配し、突起下に貼付文を加えるものを本種とする。

第33図25は外反する頸部から、強く内屈して口縁部に至る土器である。口縁部下縁を張り出させて幅の狭い口縁部文様帯とする波頂部片である。波頂部に略円形の貼付文を加えて口縁部を小丸山状に突起させ、下縁に横長の扁平な棒状貼付文を加える。略円形貼付文上にはしの字の沈線を加える。波頂部両側の口縁部には横長の楕円形区画文および、2条沈線による横走沈線を各々配し、区画内に縄文LRを充填する。26は口縁部下縁を鏝状に張り出させる波頂部片である。波頂部外面を縦位に肥厚させ、中央部に縦方向の稜をもたせ、先端に沈線により縁取られた蛇行隆線を加える。口縁部の把手際には2条の短沈線を添わせ、波底に向かう横長2段の楕円区画文を加える。なお、楕円区画文周辺には縄文LRを施す。27も口縁部下縁を突出させる波頂部片であり、内面には屈曲に伴う谷線が残るが、内面側への口唇部の折り込みは短く、摘まみ出し状となる。波頂部外面の稜に添い、垂下する棒状の貼付文を加えて突起部とする。突起部には多重に短沈線を横走させ、突起両側の口縁部に縦位短沈線を添わせ、横走沈線1条を交えた矩形の区画文を配す。28も同様の口縁部形態をもつ波頂部片であり、波頂部から口縁部を縦断して縦位の棒状貼付文を加え、先端部を肥厚させ縦位の稜をもつ突起部とする。突起先端の稜上には管状刺突文を4個配し、稜で対称となる多重の弧状沈線を施す。口縁部文様帯には縄文LRを加えている。なお、本例は刺突文列を重視すれば後述のE種とすべきかもしれない。

E種 (第34図1~4)

波頂下の口縁部を縦断する稜をもたせ、稜上に刺突文列を配すものを本種とする。

第34図1は口縁部下縁が張り出すものの内面の屈曲線はなく、口端部を方角状に仕上げる。波頂部には短沈線を稜上に配し、口端部に縄文を施す。なお、平坦な口縁部内面には、口縁波形に合わせて沈線を八字状に配す。



第34図 有文深鉢形土器第15群実測図 (縮尺1/3)

口縁部外面には、波頂部より沈線1条を垂下させる。2から4は口縁部下端を張り出させ内面に谷線を残す。波頂部から波底部にかけての口縁部片であり、波頂部外面の稜上には刺突文を縦位に4点を配す。波底部には口縁部を横断する沈線を配し、口縁波形に合わせた沈線3条を横走させる。頸部には波頂部から沈線3、4条を下す。

F種 (第30図4、第34図5～8)

三角山形の波頂部に弧線文による単位文を配すものを本種とする。

第30図4は張りの弱い胴部が頸部で大きく外反し、肥厚、内折して断面三角形の口縁部に至る。口縁部下縁の張り出しは弱く、屈曲に伴い内面に谷線を残す。なお、波頂部はやや外反気味に開く。口縁部に双頭の山形突起を4箇所配し、U字状と扁平なハート形の沈線を縦位に組み合わせて単位文とする。突起中間の口縁部にはU字状の沈線を単位文として配し、突起部との間に2条の横走沈線を加え、縄文Lを施して口縁部文様帯とする。頸部と胴部の境には横長の楕円形区画文4単位を配して画し、胴部には縄文Lを施す。突起下の頸部には二重のU字状文を配し、粗く縄文を充填する。

第34図5は三角山形の頂部をもつ口縁部片である。直線的に開く頸部から内折して口縁部に至る。頸部から口縁部の移行に際して口縁部下縁を鏢状に張り出たせ、口縁部内面には屈曲に伴う谷線を残す。波頂部に3、4条の弧状線文を施し、両側に沈線1条を交えた横長の楕円形区画文を配して口縁部文様帯とする。波頂部を中心に縄文を施す。6は口縁部を欠く波頂部片と思え、口縁部下縁に鏢状の張り出しをもつ。波頂部下縁には下開きの弧線文を単位文の一部として配し、両側に刺突列を交えた横長の楕円区画文を配すと思える。7、8は類似する三角山形の波頂部を持つ口縁部片である。口縁部下縁の突出は弱く、内面には屈曲に伴う谷線を残す。波頂部の山形を囲み3条の上開きの弧線を配し、波頂下には下開きの弧線を2条配し単位文とする。単位文の両側には横長の矩形もしくは楕円形の区画文を配して沈線1条を交える。なお、8では口縁部下縁外側に刻み

目を施す点、7と異なる。波頂部下の無文勝ちの頸部には、沈線3、4条を垂下させると思える。

2類 (第30図6、第34図9～11、第35図)

1類以外の口縁部片で、口縁部と頸部の接合部の突出が弱いものを本類とする。

第30図6は4単位の波状口縁を呈する土器と思えるが、把手の形状等は不明である。頸部から口縁部への移行に際しての口縁部の突出は弱く、内面に屈曲に伴う谷線を残す。口縁部を2条の横走沈線で画して縄文LRを充填する。

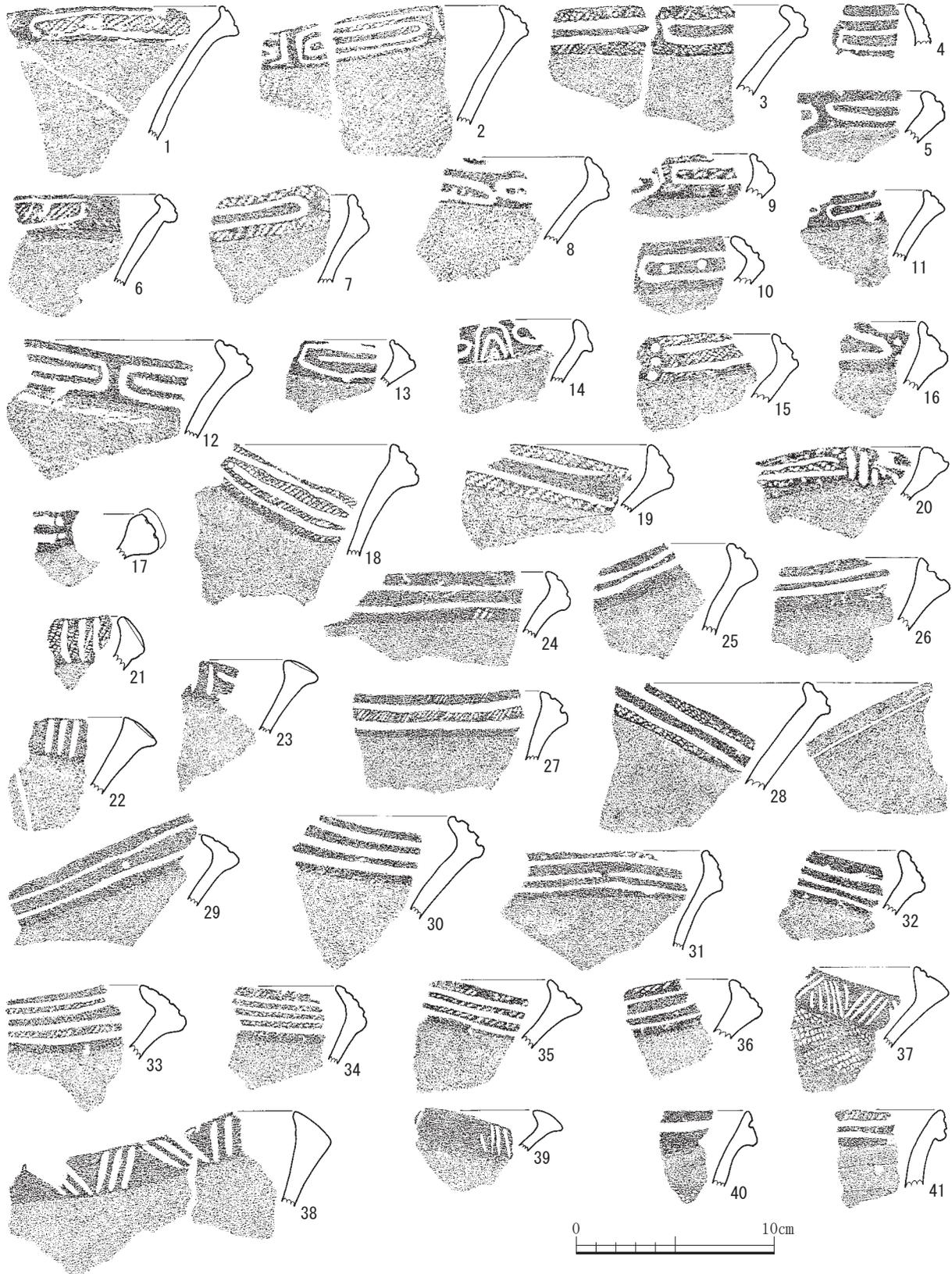
第34図9から11は口縁部の区画文や、波底部の単位文を含む破片である。第34図9は口縁部下縁の張り出しが弱く、内面には谷線を残す。口縁部には二重の横長方形の区画文を配し、縄文LRを充填する。10は2から4と同一個体と思え、口縁部を下る沈線3条を、波底部で口縁部を縦断する沈線2条で画して矩形の区画文とする。11は波頂部から下る沈線1条を交えた楕円形区画文を、波底部で縦位の沈線1条により画して方形の区画文とする。

第35図1、6は同一個体であり、口縁部下縁をやや突出させ、内面に谷線を残す。口縁部には横長の楕円形区画文を配し、縄文LRを充填する。2は波頂部側を弧線文で、波底部側を縦位の短沈線で画し、コの字状の区画内に横長の楕円形文を配す。また、区画内には縄文を充填し、頸部にも縄文LRを施す。3は外面の突出は弱い、内面を強く屈曲させ谷線を残す。口縁部には横長の楕円区画文を2単位配し、区画外に縄文LRを施す。4は口縁部に添う沈線下に矩形の区画文を配し、5は楕円形の区画文を口縁部に2単位配す。6は口縁部の楕円形区画文内に縄文を充填する。7は口縁部下縁の突出は弱く、内面の谷線も弱い口縁部片であり、横長の楕円形区画文を配して区画外に縄文LRを充填する。8は波底と波頂の中間部の破片であり、口縁下に沈線を横走させて楕円文2単位を配す。10は楕円形区画内に間隔を空けた刺突列を加える。11は口縁部下縁を弱く突出させ、内面に谷線を残す小型の土器であり、口縁部に横長の楕円形区画文を配す。12は口縁部下縁をやや張り出させて内面に谷線を残す波状縁の口縁部片であり、波頂部と波底部間には沈線1条を交える楕円形区画文を2単位配す。13は断面三角形状とする口縁部片であり、幅の狭い口縁部に沈線1条を交えた楕円形区画文を配す。14は第32図4の波底部文様に類似する波底部片であり、楕円形区画文間に逆U字状の沈線3条を配す。15は波底部片であり、口縁部を横走る沈線2条の末端を刺突文3点で止めて単位文とし、口縁部全体に縄文LRを施す。16は口縁部を断面三角形状に肥厚させ、波底部で沈線による区画文を、縦位の刺突列2点で受け単位文とする。17は断面三角形を呈する口縁部に、縦位棒状の隆帯を加え側縁に配した刺突文2点と1点を単位文とし、2条沈線と1条沈線を分ける。18は口縁部下縁の突出が強く、内面に谷線をもつ波状縁の破片であり、末端に刺突を加えた沈線1条を交えた、沈線による楕円形区画文を口縁部に配して縄文LRを全面に施す。19は口縁部下縁の突出は弱く、断面三角形状に肥厚させる波底部片と思える。口縁部文様帯は2条の沈線で区画されるが、うち上縁沈線は波底部で弧状に途切れる。縄文LRを区画外に充填する。20は波底部の破片であり、口縁部下縁の突出はやや弱く、内面の谷線も弱い。口縁部文様帯は2条の横走沈線を波底部で縦位の短沈線3条で区切り、縄文LRを全面に施す。21、23は波頂部単位文を構成する対向する弧線文の一部であり、21は縄文を施す。22は直線的に開く頸部から、口縁部下縁をやや突出させる口縁部片であり、内面側に短く折れる。口縁部には縦位の短沈線を配し、頸部の波頂下に垂下沈線を加える。

第35図24から36は口縁部の区画沈線の例であり、2条から4条のものがある。また、縄文の充填にも区画内、外や全面、無文などのものが見える。37、38は口縁部下縁の突出が弱く、内面に谷線をもつ口縁部片であり、描き方の異なる鋸歯文を配す。39は間隔を空けて斜行沈線を多条に施している。40、41は口縁部を外面側に折り返して口縁部下縁を突出させる例であり、幅の狭い口縁部に沈線1、2条を横走させ、41は縄文RLを施し

ている。

3類 (第36図)

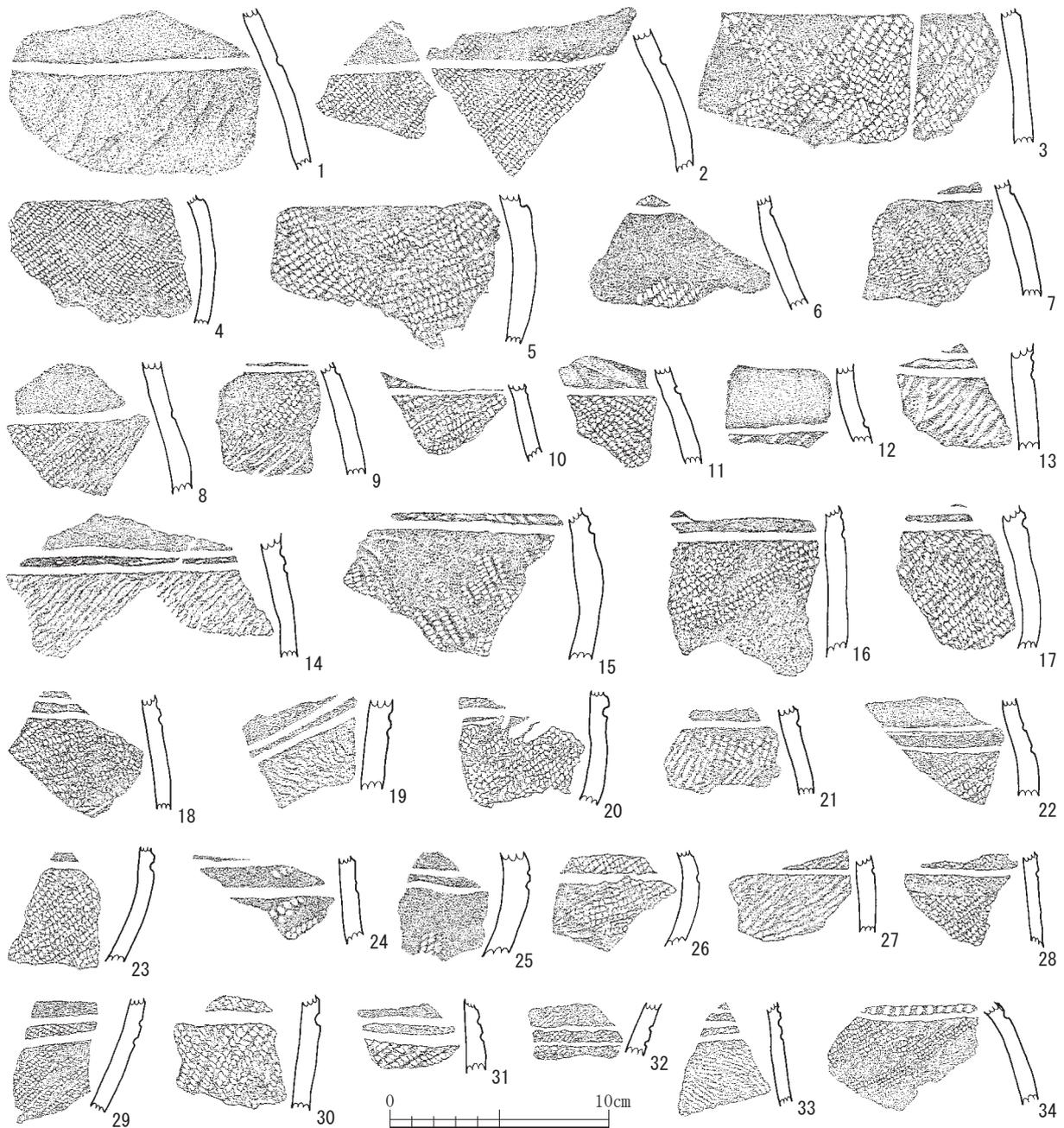


第35図 有文深鉢形土器第15群実測図 (縮尺1/3)

本群土器の胴部片を一括して本類とする。本群土器の胴部としたものには、第14群土器の胴部を含む可能性があるほか、後述する第18群土器の胴部との分離にも難がある。

第36図1から12は頸部と胴部の境を1条の横走沈線で画すものであり、13から32は2条で、33は3条で画すほか、34は2条沈線間に筒状工具による縦位の短沈線（刺突）を加える。横走沈線下の胴部に張りをもつものが多いが、29、30など張りをもたないものも見える。胴部には縄文を施す例が大半であるが、1のように無文とするものもある。縄文は単節斜縄文を主体とし、無節のもの（14、27）や2種の縄を使うもの（9）も見える。また、横走沈線間への縄文の施文にも有無がある。なお、33は器厚が薄く、第2群土器に含むべき品かもしれない。

タ 第16群土器（第39図1、2、第37図、第38図、第40図）



第36図 有文深鉢形土器第15群実測図（縮尺1/3）

胴部から外反して開く朝顔形の器形を有する土器であり、体部下半で屈曲する例や、張りをもたせる例もある。平縁を基本とするが一部に突起を加えるものや、波状縁とする例も見える。文様帯は口辺部文様帯1帯を基本とする。口辺部文様帯は上下両端を2条から数条の横走沈線で画すことで、横帯する文様帯の画角を決めている。なお、文様帯上縁に紐線文や8字状の貼付文をさらに加えるものも見える。文様帯内には2条から数条の沈線により、菱形文、三角文、鋸歯文、弧線文などの文様を描いて縄文を充填する。縄文充填部と無文部をコントラストさせ、連続した横帯する文様帯とする特徴をもつ。また、内面に横走沈線を施す例も多く見える。

- 1類 口辺部文様帯上縁に紐線文を施す土器。
- 2類 口辺部文様帯上限を区画する沈線帯の上縁もしくは、沈線間に刺突文列を施す土器。
- 3類 横走沈線帯もしくは横走縄文帯で口辺部文様帯上縁を画す土器。
- 4類 口唇部に突起を施す土器。
- 5類 本群の胴部片を一括する。
- 1類 (第37図、第38図1～23)

胴部から外反して開く朝顔形の器形を有し、口辺部文様帯の上下を横走縄文帯等で画す土器であり、口辺部横走縄文帯上縁に紐線文を配す土器を本類とする。

本類は口縁部文様帯の文様モチーフの違いから、多重沈線による菱形文を配すもの(A種)、三角文を配すもの(B種)、弧線文を配すもの(C種)、多重沈線による鋸歯文を配すもの(D種)、渦巻文を配すもの(E種)、横走沈線帯および縄文を充填する横走沈線帯を配すもの(F種)に分ける。

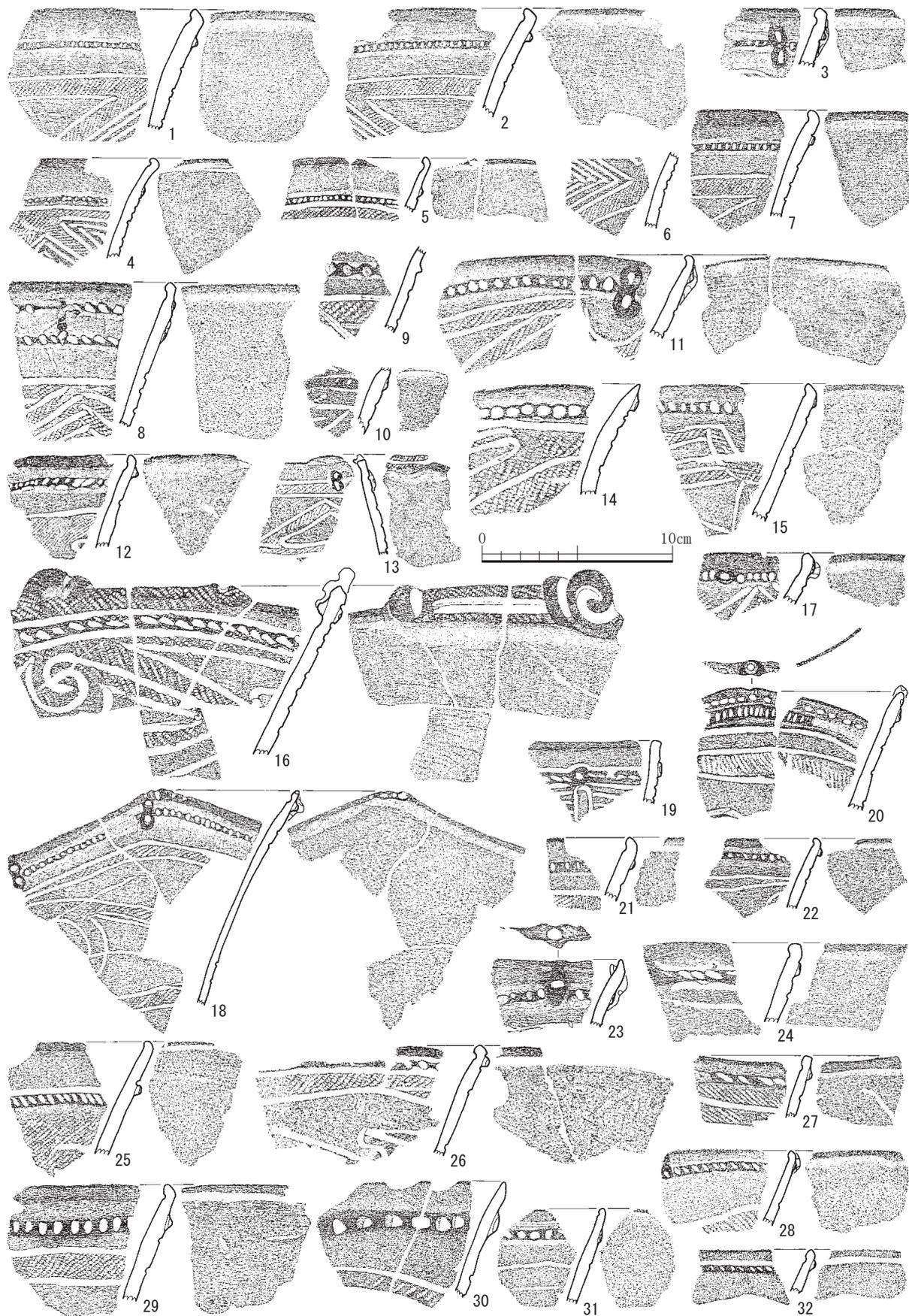
A種 (第37図1～6)

第37図1から3、6は同一個体であり、外反する口端部に稜をもたせ、口辺部を2条沈線で菱形および三角形に区画して細かな縄文LR充填する。また、菱形区画内には多重沈線による菱形文等を充填し、三角形区画内は無文地とする。文様帯と口端部間には刻みを施す細めの紐線を横走させ、8字状の貼付文を配す。口唇部を内側に折り、屈曲部内面にやや幅広の沈線1条を横走させる。4、5も同一個体の口辺部片であり、縄文LRを充填する縄文帯で菱形や三角形の区画を行い、多重沈線による菱形文、三角形文を充填する。文様帯上縁の横走沈線帯に添い、細かな刻みを施す紐線1条を加える。口唇部を内側に折り、屈曲部内面に横走沈線1条を施す。

B種 (第37図7、9～12、15、第38図16)

外反して開く口辺部を有し、2条沈線で画した口辺部文様帯内に、縄文帯で三角文を描く土器であり、口辺部上縁に刻みを加える紐線を横走させる。口唇部を短く内側に折り、屈曲部内面に沈線1条を横走させる。なお、11や15に見える口辺部文様帯上縁沈線の窪みは、紐線に加えた8字状貼付文を受けたものと思える。

第37図7は外反する口辺部に2条沈線による三角文を配し、縄文RLを充填する土器である。口辺部上縁を広く空け、刻み目を加えた紐線文1条を横走させる。口唇部を短く内側に折り、屈曲部内面にやや幅広の沈線1条を横走させる。9は口端部を欠く口辺部片であり、D字状の爪形文を加えたやや幅広の紐線を横走させ、間隔を空けて三角文が食い込む横走縄文帯(LR)を配す。10も口端部を欠く口縁部片であり、刻みを施す紐線下に、三角文が食い込む横走縄文帯を配す。なお、内面に沈線1条を施す。11は直線的に外反する口辺部を有し、刻みを施すやや幅広の紐線を横走させて8字状の貼付文を加える。口辺部文様帯上縁の縄文帯は、8字状貼付文下で皿状に受ける。また、同所より三角文を描く縄文(LR)帯を斜行させ下す。口唇部を内側に短く折り、屈曲部内面を撫でるように断続的に幅広の沈線1条を施す。12は口唇部を内側に短く折り、外面には稜を残す。内面には屈曲線をなぞるように幅広の沈線1条を横走させる。外面には斜行する刻みを加えた紐線1条を横走させ、間隔を空けて口辺部の横走縄文帯を配す。15は口唇部を内側に短く折り、内面の屈曲部にや



第37図 有文深鉢形土器第16群実測図 (縮尺1/3)

やや幅広の沈線1条を廻らす。口辺部上縁には刻みを加えた紐線1条を横走させる。口辺部外面には間隔を空けた縄文帯2条を横走させ、紐線文に加えた8字状貼付文を受けるU字状の縄文帯に繋ぐ。なお、U字状文下縁には、縄文を充填する三角文を描くものと見える。なお、内面の沈線はなぞり状を呈す。

第38図16は口唇部を弱く内側に折り、内面に幅の広いなぞり状の沈線1条を配す。口唇下には扁平でやや幅広の紐線1条を横走させて斜行する刻みを施す。また、8字状貼付文を口端際から紐線にかけて施す。なお、紐線両側に沈線を添わせ、口辺部文様帯の上縁を区画す横走帯とする。8字状の貼付文下の口辺部には、小さな管状刺突文列を充填する三角文を重ねて配すものと見える。

C種 (第37図13、16)

弧線文を配すものを本種とする。

第37図13は樽型を呈する小型の土器である。口端部を方角状に整え、山形の突起を加える。突起上には弧状沈線を加え、区画内の突起端部に縄文を施す。口辺部上縁を画す横走縄文帯上縁沈線を跨ぎ、8字状の貼付文を加えており、紐線文を上縁沈線に置き換えたものと思える。横走縄文帯下には、縄文帯内側沈線が撥形となる弧線文帯を配す。16は大きく外反して開く口縁部片であり、口唇部を内側に折って内面に屈曲線を残す。口唇部に二山と一山の突起を各々1個配す。口唇下を横走する断面D字状の紐線には斜行する刺突文列を加え、紐線両側に沈線を添わせる。紐線に添う沈線下に間隔を空けて横走沈線1条を加え、空間部からは2条の斜行沈線を異方向に下し、大柄の三角文を描く。大柄の三角文内には、斜行沈線と円文を組み合わせた巴状の渦巻文と、小型の撥形状の三角文を組み合わせる弧線文とする。縄文は沈線間および、突起部の口辺に施す。また、口辺部内面には粘土帯を加え肥厚させ、二山の突起部に渦巻文と縦位短沈線を、一山の突起部には縦位短沈線を加え、突起間に横走する幅広の沈線1条を施す。なお、突起部下縁および口辺部の内面には、やや幅の広いなぞり状の沈線を横走させる。

D種 (第37図8、17)

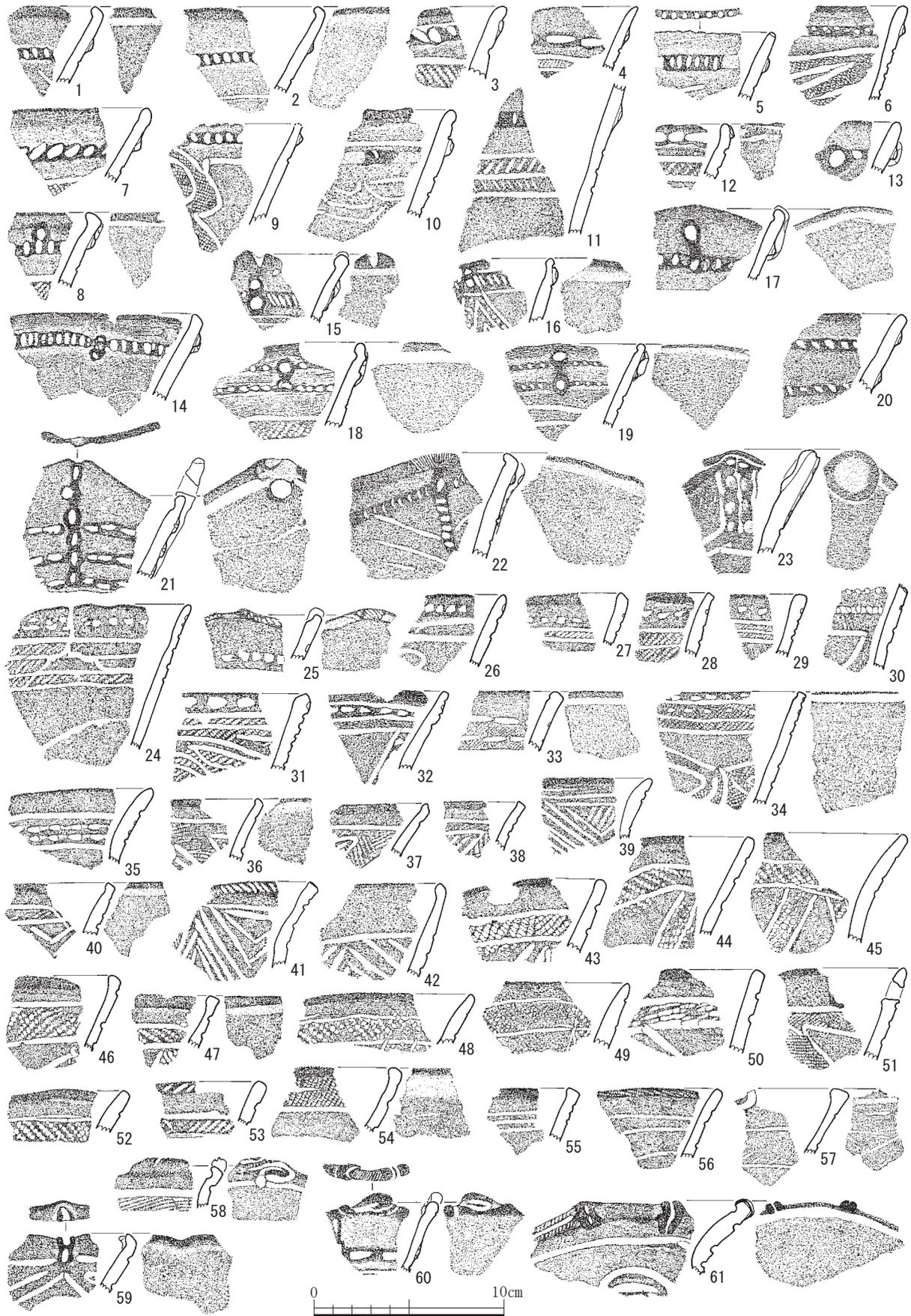
多重沈線による鋸歯文を配すものを本種とする。

第37図8は外反してやや弱く開く口辺部を有し、口唇部を短く内側に曲げて内面の屈曲部に沈線1条を加える。外面には斜行刻みを加えた低い紐線を2条横走させ、垂下する紐線で連結する。広く空けた口唇下には横走する沈線1条を引き横走文様帯の上限を画し、多重沈線による鋸歯文を配したのち、横走沈線も多重化させて噛み合う文様としている。文様帯内には縄文LRを充填する。17は口辺部上端を内側に折り、内面の屈曲部になぞり状の沈線1条を加える。口唇部の屈曲により生じた外面の稜線に添い、刻みを施す紐線1条を横走させ、紐線上に刺突を加えた円形の貼付文を施す。紐線下には多重沈線による鋸歯文を配し、文様帯の上限区画は紐線で行っている。

E種 (第37図14、18、20、22、第38図9)

渦巻文を配すものを本種とする。

第37図14は16と同様の渦巻文を描く弧線文系の土器と思え、外反して開く口唇部をつま先状とし、内面に横走沈線をもたない。口唇下には幅の広い扁平な紐線を配し、丸みのある刺突文を加える。紐線下には沈線を横走させ、幅の広い沈線を数条斜行させ縄文を施す。18は波頂部の上面形が楕円形となる2単位波状縁の土器である。口唇部を内側に短く折り、内面の屈曲部にやや幅の広い沈線1条を廻らせる。また、外面には屈曲に伴う稜を残す。波頂部には山形の突起を加え、3箇所口端部を縦断する短沈線を施し二山状に仕上げる。なお、両側の短沈線先端には管状刺突文を加える。外面の稜直下には刻みを加えた紐線1条を横走させ、波頂部および波底部に8字状の貼付文を加える。口辺部文様帯の上下は横走する2条一組の沈線帯で画し、沈線間に縄文



第38図 有文深鉢形土器第16群実測図 (縮尺1/3)

L Rを充填する。口辺部文様帯内には、両端が大きく渦を巻く斜行沈線帯を配すものと思える。20は平縁の口端部に山形の突起を加え、頂部に円形突起を加えて二山状とする。口唇部は丸く収め、内面の沈線をもたない。口唇下に縦長の刻みを施す扁平で幅の広い紐線を廻らせ、口唇部との間に1条の刺突列を加える。口辺文様帯の上端は3条の沈線帯で画し、下側の2線間に縄文を充填し、破片下端に見える渦巻文に繋がるものと思える。22は口唇部を内側に短く折り、内面の屈曲部を沈線でなぞる小型の土器である。口唇部下に斜行する刻みを加えた紐線を横走させる。口辺部文様帯上限を2条の篋描き沈線で画し、渦巻状の文様と繋げると思える。

第38図9は口端部を欠く口辺部片であり、内面になぞり状の幅広の沈線を残す。外面の口辺部には刻みを施す紐線を横走させ、下縁に沈線1条を添わせる。紐線と間隔を空けて横走沈線を配し、3字状に見える曲線的な渦巻状の縄文帯を下している。なお、紐線文を文様帯上端区画となる横走沈線帯内に取り込んだものと思える。

F種 (第37図19、21、23～32、第38図1～8、10～23)

横走沈線帯および、縄文を充填する沈線帯を配すものを本種とする。

第37図19は円筒形の土器であり、口端部を方角状に整えて内面への沈線の施文はない。口唇下に空白部を設け、斜行する刻みを施した扁平な紐線を横走させ、刺突を加えた円形の貼付文を施す。紐線の上下両側には沈線を添わせ、円形貼付文下に沈線による逆U字状文を垂下させて口辺部文様帯を縦位分割する。垂下文の両側は多重に横走沈線を施す。21は口唇部を短く内側に折って内面に沈線を施す。外面には刻みを加える扁平な紐線1条を横走させ、間隔を空けて配した2条沈線による縄文帯により口辺部文様帯上限を画す。23は口唇部をつま先状に仕上げ、貼付文上の口端部を内側に折り、窪みをもたせて刺突文を加える。口縁下には刻みを加えた紐線を横走させて刺突文を施し、口端部から繋がる不整な台形状の貼付文を加える。なお、口端部の刺突文と関連付ければ、口端部より下がる8字状貼付文とも考えられる。紐線両側はやや幅の広い沈線でなぞられ、下縁に紐線と沈線で画される横走縄文帯を配す。24は口唇部を弱く内側に折って口端部を丸く収め、内面に幅広の沈線1条を横走させる。口唇下には両側に沈線を添えた斜行刻みを加える紐線1条を横走させる。紐線と並行する沈線1条を加え縄文を充填し、口辺部文様帯の上限を画す横走縄文帯とする。25は口端部を方角状に整え、内面に沈線1条を廻らせる。口唇部と間隔を空けて、上縁を沈線で縁取る斜行刻みを加えた紐線1条を横走させ、口辺部文様帯の上限を画す。紐線と途切れる横走沈線間に縄文を充填するが、文様の詳細は不明である。26は口唇部を短く内側に折り、内面の屈曲部に沈線1条を横走させる。外面には、口唇部に接して両側を沈線で縁取る刻みを加えた紐線を横走させ、紐線下に配した横走沈線との間に縄文を充填する。横走縄文帯下は菱形状の無文部とするが、鶴の嘴状に陥入する沈線区画先端から蛇行沈線を下し、菱形状区画沈線に繋いでいる。27は口端部を方角状に仕上げ、内面に沈線1条を横走させる。口唇下に斜行刻みを施す紐線1条を配し、間隔を空けて施す2条の横走沈線間に縄文を充填し、幅の広い縄文帯とする。28から32は紐線と横走縄文帯の間に空間を空ける例である。28は口唇部を短く内側に折り、内面の屈曲部に沈線1条を横走させる。口端部際に配した、斜行刻みを加えた紐線と口端部間には、8字状の貼付文を配する。なお、紐線上縁には沈線を添わせる。口辺部の横走縄文帯は紐線との間隔を空けてやや斜行する。29は口唇部を内側に折って外面には稜を生み、内面の屈曲部には沈線1条を廻らす。口端部と間隔を空けて配す横走する紐線には刻みを加える。紐線下に間隔を空けて、2条の横走沈線で画された縄文帯を配す。30は口唇部をつま先状とし、内面に沈線をもたない。口唇下に幅広の扁平な紐線を横走させ、不揃いな円形状の刺突を加える。紐線と間隔を空けて配する縄文帯は右傾する。31は口唇部を丸く収め、内面に沈線を廻らす。刻みを加え横走する紐線の両側は沈線でなぞられ、間隔を空けて配した2条の横走沈線間には縄文の充填はない。32は口唇部を短く内側に折って外面には稜を残し、内面の

屈曲部に沈線1条を廻らす。外面の稜に添わせ、斜行刻みを加えた紐線1条を施す。なお、紐線上縁には沈線を添わせる。

第38図1から23も口唇下に紐線を横走させる例である。1は口唇部を短く内側に折り、内面に沈線1条を横走させる。外面口唇下に両側に沈線を添わせた紐線1条を横走させ、斜行沈線を下す。2は口唇部を短く内側に折り、内面に沈線1条を横走させる。外面は口唇下を広く空け、刻みを施す紐線1条を横走させる。口辺部文様帯上限を沈線2条で画す。このうち3から6は口唇内面への沈線施文がない例である。3は外反ぎみの口唇部を丸く収め、口唇直下に極めて扁平な紐線を施して斜行する刻みを加え、間隔を空けて横走する縄文帯を配す。4は口唇部をつま先状とし、扁平な紐線上に横長の短沈線を加える。なお、横走する縄文帯の幅は狭い。5は口端部を方角状に整え、口唇部に刻みを施す。口唇下にはやや幅広で扁平な断面かまぼこ状の紐線を配し、縦位の短沈線で刻みを施す。6は丸く収める口唇下に、刻みを加えた断面三角形の紐線1条を配す。横走沈線2条で口辺部文様帯上限を画すが、下縁沈線を短く止めて鋸歯文を陥入させる。口辺部文様帯全面に縄文を充填すると思える。7は口唇部を弱く内側に折り、内面に沈線1条を廻らす。口唇下には斜行刻みを加える紐線を配し、間隔を空け縄文帯を横走させる。8も同様な例だが、口唇部の内折は強く、外面の紐線上縁には口端部より垂れさがる8字状の貼付文を配す。10は口唇部を外側に丸め、上縁に沈線を添わせる紐線1条を横走させる。口辺部の上端を画す横走縄文帯の先端を繋げて区画文状とし、空白部に上開きの弧線文3条を配している。11は口唇部を欠くが、断面三角形の紐線を横走させる。口辺部文様帯上限を3条沈線で画し、上下の沈線間に施文方向を異にする縄文を充填する。12は弱く内弯する口唇部に、口端部と一体化した紐線を配し、円形や短沈線状の刻みを加える。紐線下には間隔を空けて横走縄文帯を配す。

13から23は紐線と貼付文の例である。13は口唇部をつま先状とし、口唇下に大型の円形貼付文を加える紐線を配し、貼付文には刺突を、紐線には斜行刻みを施す。14は内弯ぎみの口唇下にやや幅広の紐線を配し、縄文の押捺による刻みを施す。紐線を跨ぐ8字状貼付文を加えるが、口辺部の文様は見えない。15は山形の突起を口端部に配し、短沈線で切り二山形とする。口唇下の紐縁は扁平で低く、斜行刻みを施す。紐線を跨ぐように8字状貼付文を加える。17は丸山状に口唇部を隆起させ、刻みを加えた断面三角形の紐線と口端部を長い8字状貼付文で繋いでいる。18は口唇部を短く内側に折り、外面には稜を残して内面の屈曲部に沈線1条を廻らす。外面には間隔を空けて2条の斜行刻みを加えた紐線を横走させ、8字状貼付文で紐線を繋いでいる。なお、間隔を空けた2条の横走沈線間に縄文を充填し、口辺部文様帯上限を画す。19も同様の例であり、微隆起線状の2条の紐線を8字状の貼付文で繋いでいる。20は方角状に整えた口端部をもち、口辺部外面に扁平な刻みを加える紐線2条を横走させる。21は二山形の波頂部をもつ波状縁の土器であり、中央に貫通する円孔を配す。内面には円孔で左右に分ける沈線1条を配す。外面には横向きの雨垂れ状刺突を加えた紐線3条を横走させ、波頂部から垂下する紐線がこれを繋いでいる。22も波頂部を欠く口辺部片であり、口唇に添い横走する刻みを施した紐線を、8字状貼付文で枝分かれさせる。斜行する沈線を施すが、器面の荒れが著しく詳細は不明である。なお、内面にはやや幅広の沈線1条を廻らせる。23も波頂部片であり、波頂部内面に円孔を陥入する大型の円形貼付文を加え、脇から口唇に添う沈線1条を施している。外面には、波頂部から2本一組の刺突を加えた紐縁を垂下させる。両側に添わせる沈線は、紐線末端で八字状に分けて左右に伸ばし、口辺部文様帯上限を画す沈線帯とする。

2類 (第38図24～35)

横走縄文帯による口辺部文様帯上限区画沈線の上縁もしくは沈線間に、刺突文列を施す土器を本類とする。

24は口唇部をつま先状に収め、内面に沈線をもたない。口辺部文様帯上限は、縄文を充填する4条の横走沈

線で画す。上限沈線と口端部の間には1条の刺突文列を配す。なお、部分的に2条となるのは、周回させたためであろう。25は小山形突起を加えた口辺部片であり、口端部内側にかけて突起部で分かれる沈線を引く。なお、突起部を含めた口端部には縄文を施す。口辺部上縁を限る沈線に添い、D字状の刺突列を横走させる。26は口唇部をつま先状とし、口辺部文様带上縁を限る2条の横走回線の上縁に刺突列1条を配す。27は弱く内弯する口辺部を有し、口端を方角状に整える。3条の縄文を充填する横走沈線帯の上縁に刺突文列を加える。28、29も外反する口縁部の外面に、ほぼ同様の文様を施す。30は方角状の口端部外側に刻み目を施し、口辺部上限を画す2条沈線による横走縄文帯の上縁沈線内に刺突文を加えるほか、下縁沈線から弧状沈線を下す。31も口端部を方角状とし、口辺部文様带上限を画す2条沈線を口唇部近くに配し、沈線と口唇部間の狭い部分に、大ぶりの刺突文列を配す。文様帯は横走沈線に短く止まる沈線1条を加え、空いた部分に斜行する沈線帯を配す。口辺部上限の横走沈線間および、斜行沈線帯内に配した紡錘形の文様内に、縄文LRを充填している。32は外反しやや肥厚する口辺部に3条の沈線を横走させ、上端の2線間にD字状の刺突を1列充填する。なお、口辺部文様帯は三角文で構成すると思え、刺突を加える斜行沈線が見える。33は口端部を方角状に整え、内面に沈線1条を廻らす。口辺部文様带上縁を画すと思える、2条の横長短沈線列および横走沈線間には縄文LRを充填する。34も口端部を方角状に整え、口端際の内面に沈線1条を横走させる。外面には縄文LRを充填する3条沈線を横走させ、口端部間および、上縁の2条沈線間に刺突列を各々1条充填する。なお、口辺部文様帯には弧線文と三角文の組合せ文様を描くかと思え、縄文を充填する。35は外反する口辺部上端を限る2条沈線間に2列の刺突列を充填するが、外反の強さから第21群土器に含むべきかもしれない。

3類 (第38図36~56、第39図1、2)

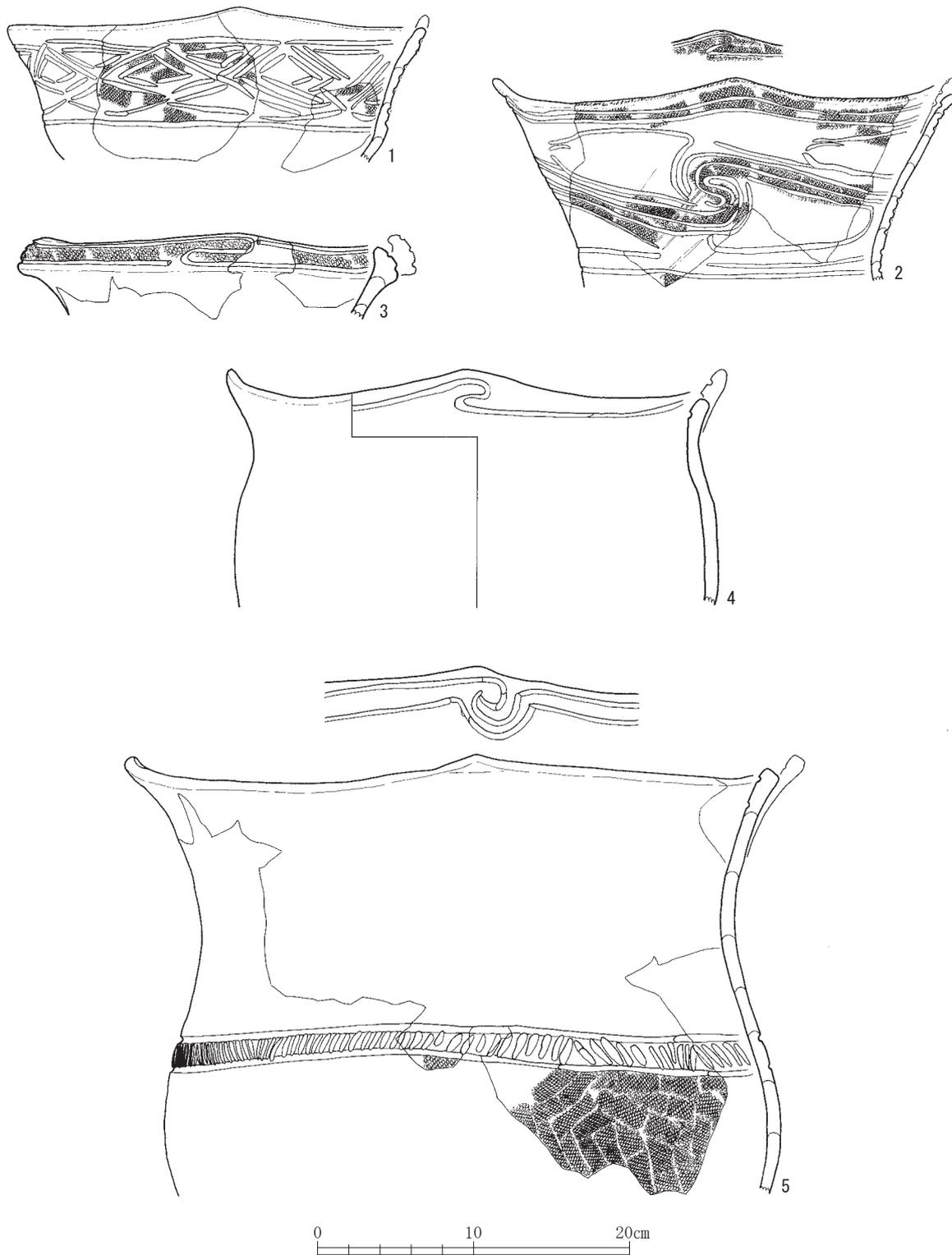
横走沈線帯もしくは横走縄文帯で、口辺部文様带上縁を画す土器を本類とする。

第39図1は内弯気味に大きく開く体部下半から、屈曲し外反して立ち上がり、弱く内弯する口縁部に至る2単位波状縁の土器である。口辺部内面は幅広く撫でて浅く窪ませ、口唇部を丸く収める。体部の屈曲から弱く内弯する口辺部までの間を口辺部文様帯とし、文様帯下限を横走、周回する沈線1条で画す。なお、上限を画す明確な描線はなく、逆三角形の文様の底辺を揃えてこれに代えている。口辺部文様帯は、中央に配した菱形文の上下に三角文を置いて、帯状に連続する文様列で構成する。なお、各区画内には沈線1条を加え、多重沈線による文様を描く。なお、菱形文中央部などを含め、文様帯内には縄文LRを施す。

第39図2は直立気味の体部から直線的に大きく開き口唇部に至る、4単位の山形波状縁の土器である。口端部に面をもたせ、先端を外面側に引き出す。口辺部内面には口縁波形に合わせて沈線1条を配し、波頂下でS字状に蛇行させて下し、横走させて波底部付近で再度口縁波形に添わせる。口端部、内面の沈線までの間およびS字蛇行部には縄文LRを施す。口辺部文様帯は、上限を口縁波形に合わせた2条一組の横走縄文帯で、下限を直立する体部の上端に施した2条一組の横走沈線帯で画す。口辺部文様は4条一組の沈線で描出する。4条一組の斜行沈線の中央2線の先端をフック状に丸めて繋ぎ、隣接する斜行沈線から伸びる逆巻きのフック状文と入り組ませ、巴状に渦を巻かせる。4条沈線の外縁沈線は、途中から口縁側に伸びて逆行して渦巻文外縁を囲んで始点に戻り、撥形状の区画文を完成させる。下縁沈線もほぼ同様の描線を描く。この区画文は、弧線文を配す土器に見える撥形状の区画文に通じるモチーフに見える。なお、縄文LRの充填は文様帯上限区画沈線帯および、渦巻文を含む斜行沈線帯とする。

第38図36から38は口辺部文様帯の上限となる横走沈縄文帯から、三角文を描く斜行縄文帯を下す。なお、区画内には斜行沈線を多重に充填するものが見え、菱形文となることも考えられる。39は外反し口唇部をつま先状に収める。口辺部文様带上限を横走沈線1条で画し、逆三角形の区画文底辺を横走沈線に添わせ、区画内に

縄文を充填する。斜辺部分は菱形文を描くと思え、斜行沈線を多重に配している。40は口唇部を短く内側に折り、内面に撫で状の沈線を廻らせる。外面には2条の横走沈線で画された縄文帯を横走させ、口辺部文様帯の上限とする。多重沈線を三角形に配しており、菱形文と三角文による文様帯構成を採ると思える。41は外反する口辺部片であり、口端部を方角状に仕上げ縄文を施す。横走沈線1条で文様帯上限を画し、多重沈線により正



第39図 有文深鉢形土器第16群～第18群実測図（縮尺1/4）

逆の三角文の連続もしくは三角文と菱形文の組み合わせで、口辺部文様帯を構成するものと思える。42はやや内弯する口辺部を持ち、口端部に面をもたせる。口唇下を広く空け、横走沈線1条で文様帯上限を画し、方向を変えた多重の斜行沈線を下す。

第38図43は波状縁の土器であり、口唇部を丸く収める。口縁波形に合わせた2条沈線で画す縄文帯を口唇下に配し、下縁より斜行する沈線2条を下す。44は平縁の土器であり、文様帯の上限となる縄文帯が波打ち、下縁の沈線から縄文帯を斜行して下す。49、50も同様の文様構成を採り、47、54がなぞり状の幅広で浅い沈線を内面に施す。51は直線的に開く波状縁の土器であり、口唇下の無文部下縁に円孔を穿つ。横走する縄文帯の下縁沈線を曲げ、斜行縄文帯を派生させている。52から56は口唇下の横走縄文帯および沈線帯の例である。

4類 (第38図57~61)

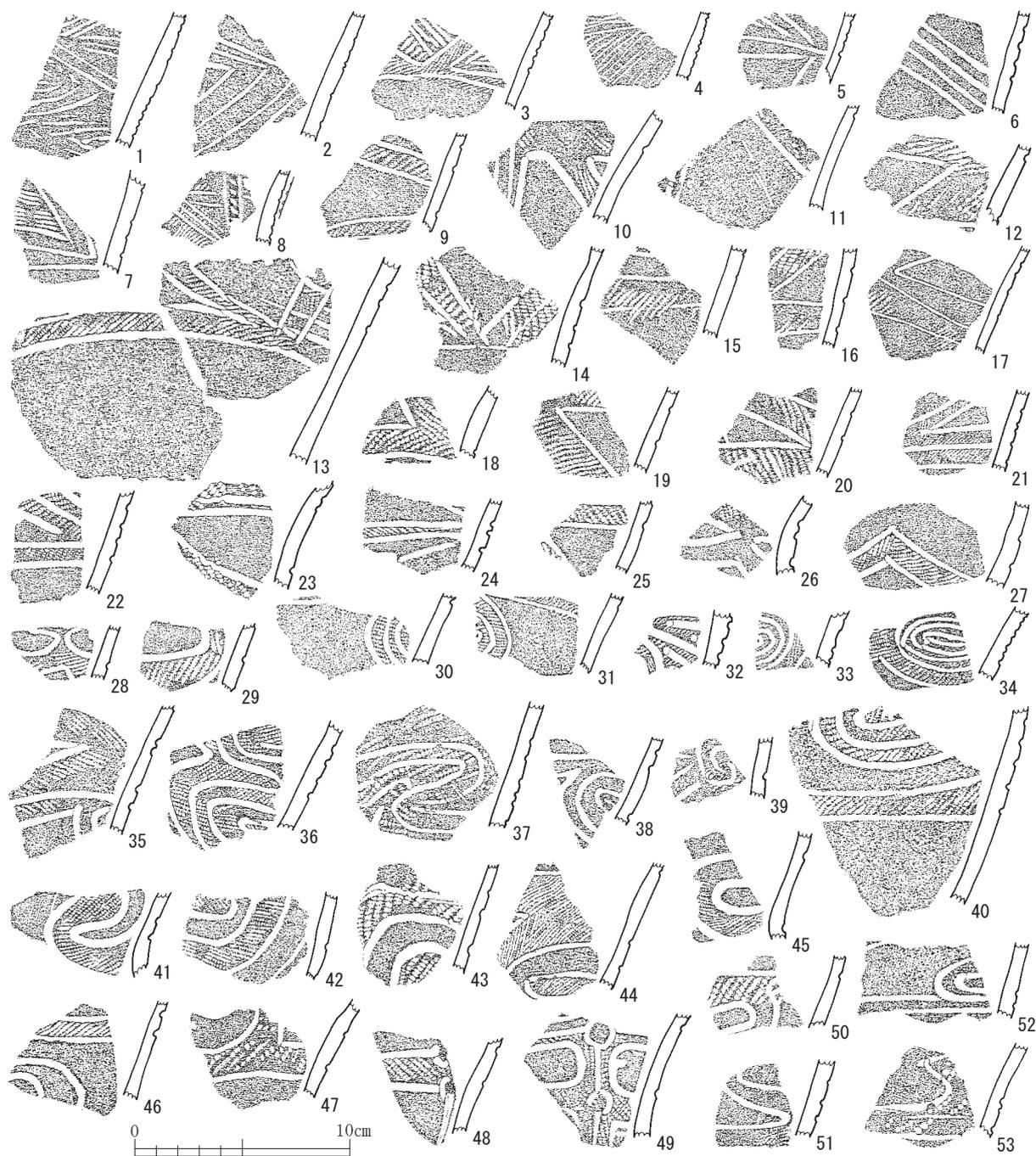
口唇部に突起を施す土器を本類とする。

第38図57は口端部を方角状に整え、内面になぞり状の幅広で浅い沈線を施す。小突起を端部に施すが、欠失が多い。口唇下に細い沈線2条で横走帯を描く。58は丸く収めた口端部に横長の楕円形小突起を施す。突起上面から内面にかけて、先端を渦卷かせる横S字状の沈線を配す。内面のS字部先端に、内面の横走沈線を区切る刺突文を加える。外面には沈線2条で画した縄文を充填する横走縄文帯を配す。59は第40図23に類似する口縁部片である。口唇部を短く内側に折り、内面の屈曲部になぞり状の沈線を施す。口端部を窪ませ、口端部から垂れる8字状の貼付文を加える。口辺部文様帯上縁は、8字状貼付文下で途切れる横走沈線で画し、多条沈線による三角文を配す。60は口唇部を丸く収め、大小二山の突起を配す。突起内面に施す横U字状の沈線先端を、突起基部を通り外面に伸ばし三角形状に収める。外面の口縁下を横走する横長D字状の刺突を加えた紐線は、小山形突起から垂下する刺突を加えた紐線と結んでいる。61は強く外反する口縁部を短く内側に折り、口唇部を丸く整え内面に沈線1条を廻らす。口端部を横断し外面に垂れる楕円形の小突起一対を、間隔を空けて配し、上面に縦位の短沈線1条を加える。突起間を除く口端部に沈線1条を配し縄文を施す。外面には文様帯の上限を横走沈線1条で画し、沈線による渦卷文を配す。

5類 (第40図)

本群土器の胴部片を一括し本類とする。

第40図1から8は多重沈線により文様を描くものである。1、2は菱形文と思える。3は文様帯下縁に配した三角文で、主描線内に縄文を充填し、区画内には多重沈線を充填する。4は多重沈線を充填する三角文で、口辺部上縁の文様か。5は菱形文かと思え、6は大型の三角文か。7は多重沈線で菱形文を描き、区画内に縄文を充填する。8は刻みを加えた紐線を垂下させ、三角文を側縁に配す口辺部片であり、2条の横走沈線で文様帯上限を画している。なお、地文風の縄文を施す。9から21は縄文を充填する三角文の例であり、口辺部文様帯の上下を限る縄文帯から派生するもの(10、12、18、19)と切り合うもの(13、14)がある。10は細めの垂下沈線2条により文様帯を縦位分割し、上下に向き合う三角文を配して縄文を充填している。13、14は口辺部文様帯下限の破片であり、横走縄文帯の間隔を空けて三角文を配している。17は菱形文と見える。21、22、24は鋸歯文と思え、生硬さのある多重沈線により文様を描く。23、26、27は2条沈線による弧線内に縄文を充填する。30から46は渦卷文を施す口辺部片であり、32は沈線末端に刺突を加え、34は多重沈線により同心円文を描く。35は弧線文下に渦文を配し、37はS字状にクランクさせる。39は渦状に曲がる2条沈線先端をC字状の沈線で閉じており、第12群土器に含むべきかもしれない。40は口辺部文様帯下限あたりの破片であり、縄文を充填する渦卷文を配す。41から45の大柄な文様は、第11群もしくは第12群土器かもしれない。48は横走縄文帯から上下に文様を伸ばす。49は円文と縦位沈線を組み合わせて垂下文を描き、両脇に楕円文を加えて袈裟状



第40図 有文深鉢形土器第16群実測図 (縮尺1/3)

の区画文とし、縄文RLを充填する。52は横走沈線に渦文を加え、51、53は蛇行沈線を加えている。

チ 第17群土器 (第39図3、第41図)

本群土器の器形には、第16群土器の器形に類似する朝顔形の器形を有す土器と、第15群土器に類似した屈曲する器形をもち、内弯する口縁部を波状縁としたキャリパー器形を有す土器の2種がある。

文様帯の構成は、朝顔形の土器では口辺部文様帯1帯で、キャリパー器形の土器では口縁部、頸部、胴部の3文様帯で構成する。また、両器形ともに有文とする各文様帯内には、文様帯を区切る縦位の単位文を配す。

キャリパー器形の土器では、口縁部と胴部に施した鋸歯文などの横帯文様に、蛇行沈線などの縦位の単位文

を加えて文様帯とする。なお、頸部は無文帯を通例とするが、一部に頸部に横走沈線帯を配して口辺部、頸部、胴部（縄文施文）の文様帯構成を採る例もある。いずれの土器も3単位の波状縁を基本とし、一部に平縁の例もある。文様帯は第15群土器に見えた、鋸歯文などのモチーフを基本とする例が多い。なお、本群は器形および文様帯構成から、以下の類に分けた。

1類 体部下半から外反して開く、朝顔形器形の土器。

2類 張りのある胴部が頸部で強くくびれて開き、内弯する口縁部に至るキャリパー器形の土器。

3類 本群土器の胴部片。

1類（第41図1～6）

体部下半から外反して開く朝顔形器形の土器を本類とする。

第41図1は波状縁の土器であり、頸部の横走沈線にフック状の文様加えている。2は外反して開く口辺部片であり、口唇部をつま先状に外方へ伸ばす。口辺部文様帯の上限を2条の横走沈線で画し、多重横走沈線帯を蛇行沈線で区切っている。なお、沈線と口端部間に刺突列を1条廻らせ、沈線帯には縄文を施す。3は外反する波状縁の口辺部片であり、口唇部をつま先状とする。内面には波頂部で蛇行する横走沈線を加える。口辺部文様帯の上端は2条沈線で限るが、波頂下で下縁の沈線を切って2条の蛇行沈線を下す。文様帯内には縄文を充填する。4も波状縁の土器であり、口唇部を丸く収める。内面には口辺波形に合わせた2条沈線を横走させ、口端部と沈線間に縄文を充填する。口辺部文様帯の上端は2条沈線で限るが、下縁沈線の途切れ部に三角形の文様を組み込む。5も波状縁の土器であり、波頂部を短沈線で切り二山状とし、各頂部に刺突文を加える。口辺部文様帯の上限は2条沈線で描く縄文帯で画すが、波頂下では沈線1条を加えて浅皿状の陥入をもたせる。縄文LRを充填する縄文帯下縁に間隔を空け、波頂下より渦巻状の縄文帯を下している。6も波状縁の土器であり、口唇部をつま先状として内面に幅狭く面をもつ肥厚部を設ける。なお、肥厚部下縁は内弯状に内面を削っている。口辺部に波形に合わせて3条一組の沈線で鋸歯文を描き、区画内に先端をフック状に丸めた沈線1条を加えている。波底部で鋸歯文の交点を空け、S字文等の単位文を配すものと思える。

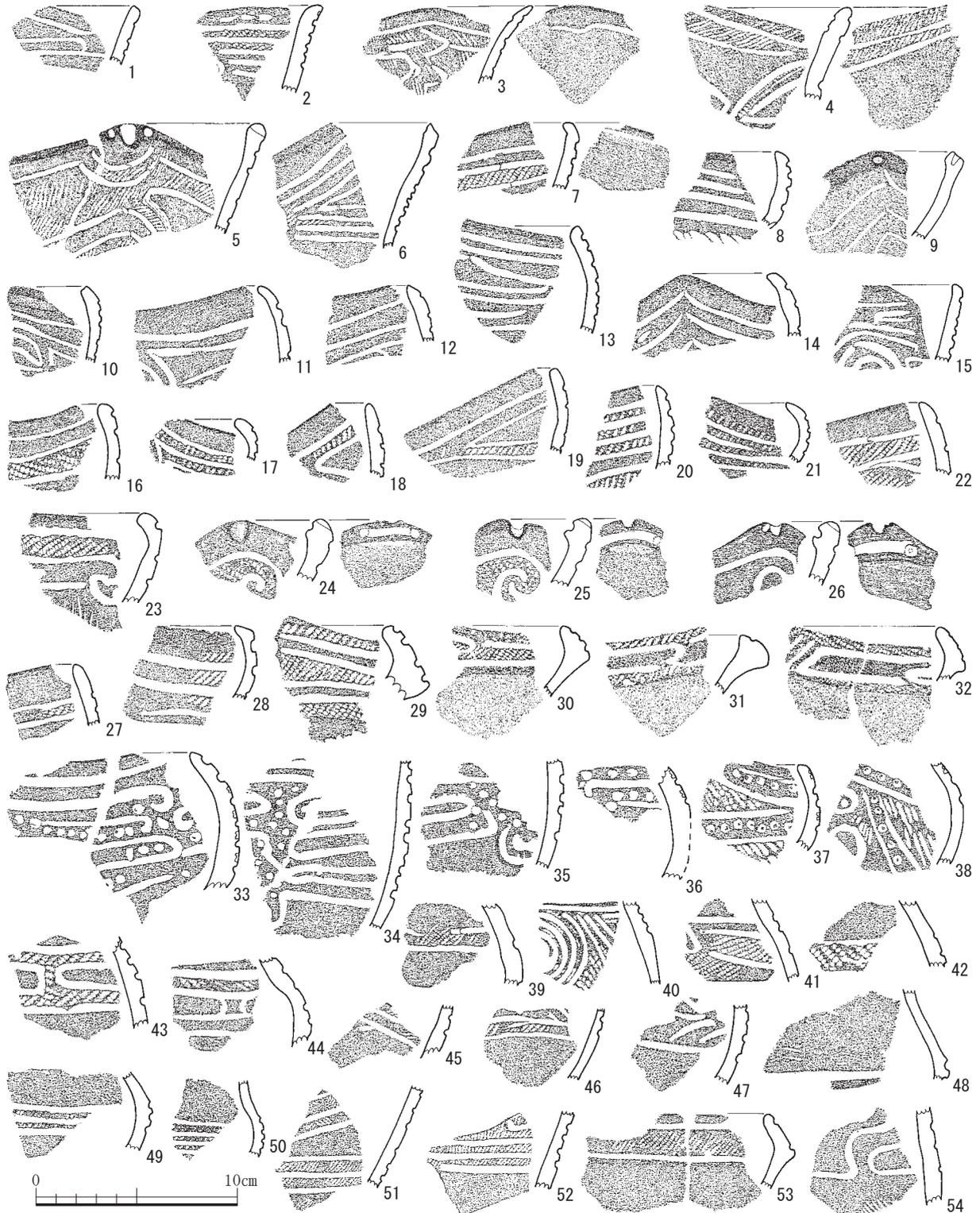
2類（第39図3、第41図7～38）

張りのある胴部が頸部で強くくびれて開き、内弯する口縁部に至るキャリパー器形の土器を本類とする。

第39図3は頸部から外反して開いて口縁部を短く内弯させる波状縁の土器であり、頸部は無文帯とする。口縁部文様帯上縁を画す沈線を波頂部でS字状に蛇行させて下し、下縁区画沈線として次の単位文まで横走させ、4分割する口縁部文様帯とする。なお、沈線末端には刺突文を加え、文様帯内には縄文LRを充填する。

第41図7は波状縁の土器であり、口端部を内側に折って内面に谷線をもつ。口縁部には沈線3条を横走させ、下2条間に縄文を充填する。8は口唇部をつま先状に収める内弯口縁の土器であり、沈線4条を口縁波形に合わせて横走させて下縁に刻みを施す。9は丸山状の波状縁片であり、口唇部を内側に短く折って口端部に面をもたせる。波頂部上端に刺突を加え、波頂下で鋸歯文の頂部を合わせる。なお、文様帯上縁の沈線を、しの字状に口端方に切り上げている。10は内弯する波頂部片であり、口縁部文様帯の上縁を1条沈線で画す。波頂下に2条沈線による渦巻文を配し、斜行沈線を波底部に向けて伸ばす。11も同様の文様を配す波底部片であり、渦巻中央から波頂部に向かい沈線を伸ばす。12も波状縁片であり、口縁部外面を弱く肥厚させる。沈線3条を口縁波形に合わせて引き、下縁沈線にフック状の文様を加える。13も内弯する波状縁片であり、口縁部文様帯の上縁、中央、下縁に各々2条沈線を引いて文様帯内を2段に分け、上開きの弧状沈線を充填する。14は内弯する波頂部片であり、頂部を丸山形とする。口縁部文様帯の上部には、鋸歯状に頂点を合わせた沈線各3条を引き分ける。15は口縁部文様帯の上限を沈線1条で画し、2条沈線による渦巻文を単位文として配す。渦巻文

に向かい、先端をフックさせた2条一組の沈線を上部と中部に向かわせる。16は口縁部文様帯の3条の上限沈線のうち下2条間に縄文を充填する。17は口唇部を丸く収めた内弯する波状縁片である。口縁部文様帯の上縁沈線を口縁波形に合わせて配して縄文を充填する。波頂部には渦文を配すものかと思える。19は口唇部を方角状とする内弯する波底部片である。口縁部文様帯上限を口端部の稜に添わせた1条の沈線で限り、これと対と



第41図 有文深鉢形土器第17群実測図 (縮尺1/3)

なる沈線を波底部付近で分岐させ、口縁部方に伸ばして三角形の区画文を描く。沈線間には縄文を充填する。20は内弯する波状縁片であり、沈線を横走させて縄文を充填する。21は口縁部を強く内折し外面に稜をもつ波底部片である。2条一組の沈線を稜に添い引くほか、口縁部下縁を限る沈線を横走させる。22は内弯する波状縁片であり、口縁波形に合わせて2条沈線を引いて切り合う三角形の区画沈線を斜行させる。沈線間には縄文LRを充填する。23は波底部片であり、内弯する口端部に面をもたせる。口縁部に3条の沈線を配し、中央沈線をの字状に下して下縁沈線を区切る。上縁と中央の沈線間に縄文LRを充填する。24、25は同一個体であり、丸山形の波頂部片を縦位の短沈線で二山状に分ける。内面には両端に刺突を加えた短沈線を横走させる。口縁下には縄文を充填する渦文を配し、文様帯を区切るものと思える。28は口縁部をくの字に内折し、外面に強く稜を残す。稜に並行して幅のやや広い沈線3条を横走させ、縄文を充填する。29から32は外反する頸部から内弯する口縁部への急激な移行により、口縁部下縁が有段となる土器である。29は緩い山形波状縁の土器であり、口縁波形と口縁下縁の稜に添う2条沈線を配す。沈線間を無文とし、それ以外に縄文LRを施す。30、31は波底部片であり、第41図3に類似する文様を施すと見える。32は口縁部下縁を外方に突出させる波底部片であり、矩形区画の一端にS字状の蛇行沈線を加え、波頂部方に斜行沈線を配す。なお、口端部には縄文を施す。第15群土器に含むべきかもしれない。

第41図33から36は同一個体であり、丸く大きく内弯する口縁部とやや張りのある胴部をもつ。口縁部文様帯上縁と下縁を沈線1条で画し、下縁からは横走沈線1条を伸ばして波頂下で三角形の区画を形成すると思える。口縁部文様は先端をフック状に丸めた文様を3段に配し、中央および下段には沈線に添い刺突列を加える。胴部文様帯上縁と下縁も沈線1条で画し、先端をフック状の文様で閉じた2条一組の沈線の先端部や、単位文の周辺部に刺突文の充填が見えるほか、下縁沈線に上開きの窪みをもたせる箇所も見える。

37、38も類似した文様であるが、37は波底部片であり管状刺突を加えた2条沈線を分岐させ、三角形の区画を形成すると思える。38は波頂部片であり、円文等を単位文として垂下する2条沈線を添わせており、前述の横走沈線とぶつかり区画文とするのではと思う。なお、区画内には縄文RLを充填する。

3類 (第41図39～54)

本群土器の胴部片を本類とする。

本類は器形と文様帯の配置等から、胴部を幅広く文様帯とするもの(A種)、胴部が稜をもって屈曲し、稜を上縁として文様帯を配すもの(B種)、胴部の稜もしくは最大径部を下縁として文様帯を配すもの(C種)、外反器形のもの(D種)に分ける。

A種 (第41図40～42、46、47)

40は頸部に2条沈線を引いて文様帯の上限とし、同心円文(渦巻文)と斜行沈線を配す。41は1条沈線で胴部文様帯上限を画し、蛇行沈線を単位文として3条沈線を緩く斜行させる。46、47は胴部文様帯下限の沈線の状況であり、文様が球状を呈する胴部の下半にまで及ぶ。

B種 (第41図48～50)

48から50は屈曲する胴部上縁の稜に添い、沈線を横走させる。A種に比べ文様帯の幅は狭い。

C種 (第41図39、43、44、53、54)

39は胴部の屈曲線上部に、沈線1条で文様帯の下縁を限り、途切れる沈線1条をこれに添わせる。43は沈線2条で文様帯の上下を画し、横長の矩形文様を区画内に配して矩形外に縄文を充填する。44は横走る4条沈線で文様帯を構成し、C字状の区切り文を加える。53は口縁部片であり、くの字に屈曲するやや幅狭の口縁部の上下を沈線で限り、縄文を充填して文様帯とする。54は胴部片であり、弱く屈曲する稜上に沈線1条を引き

文様帯の下限とし、2条の蛇行沈線を下す。なお、胴部下縁に縄文を施す。

D種 (第41図45、51、52)

51は朝顔形の器形と思え、3条沈線で文様帯の下縁を限って3条沈線を斜行させ鋸歯文を描くものと見え、沈線間に縄文を充填する。52も朝顔形器形の土器と見え、横走する3条沈線で文様帯の下限を画す。フック状文が見えることから、単位文近くの破片と見える。

ツ 第18群土器 (第39図4、5、第42図、第43図)

張りのある胴部が頸部でくびれ、直線的に外反して口縁部に至る土器である。頸部の伸びには長短がある。平縁と波状縁の土器があり、口縁部内面に沈線や縄文を充填する沈線帯を内面文様とするほか、頸部と胴部の境や胴部に文様を配す例もある。

なお、器形は類似するが、口縁部を肥厚もしくは内折させ、口縁部や口端部および内面に縄文を施す。また、胴部に縄文を施すほか、頸部を無文とする土器もまとまりをもって存在する。

1類 口縁部を肥厚させ面をもたせる土器であり、面をもつ口縁部に上面文様を施すもの。

2類 1類土器の胴部片を一括する。

3類 外反する口縁部を肥厚もしくは内折させて外面に縄文を施し、頸部を無文、胴部に縄文を施す土器。

なお、内面文様を施す土器もある。

4類 3類土器の胴部片を一括する。

1類 (第42図1～5、9)

張りのある胴部が頸部でくびれ、直線的に外反して口縁部に至る土器であり、口縁部を肥厚させて面をもたせ、上面に文様を施すもの(A種)、口縁部内面を肥厚させて受け口状とし、文様を施さないもの(B種)に分ける。

A種 (第42図1～4)

第42図1、2は頸部から外反して開き、やや肥厚した口縁部内面を上方に向けて文様を施す土器である。内面文様は口端部に添い、間隔を空けて2条沈線を横走させて縄文LRを施す。なお、頸部と胴部の境には沈線を横走させ、頸部を広く無文帯とする。3は内面の肥厚部下縁を有段に仕上げ、鍵の手状に折れるL字文を対向させて区画文とし、区画内に横走沈線1条を加える。なお、肥厚部全体に縄文を施す。4は頸部から強く外反して開く口縁部片である。断面三角形に肥厚させた口縁部上面に2条沈線を横走させる。頸部上端および頸部と胴部の境に沈線2条を横走させ、胴部境の沈線間には縄文を充填する。

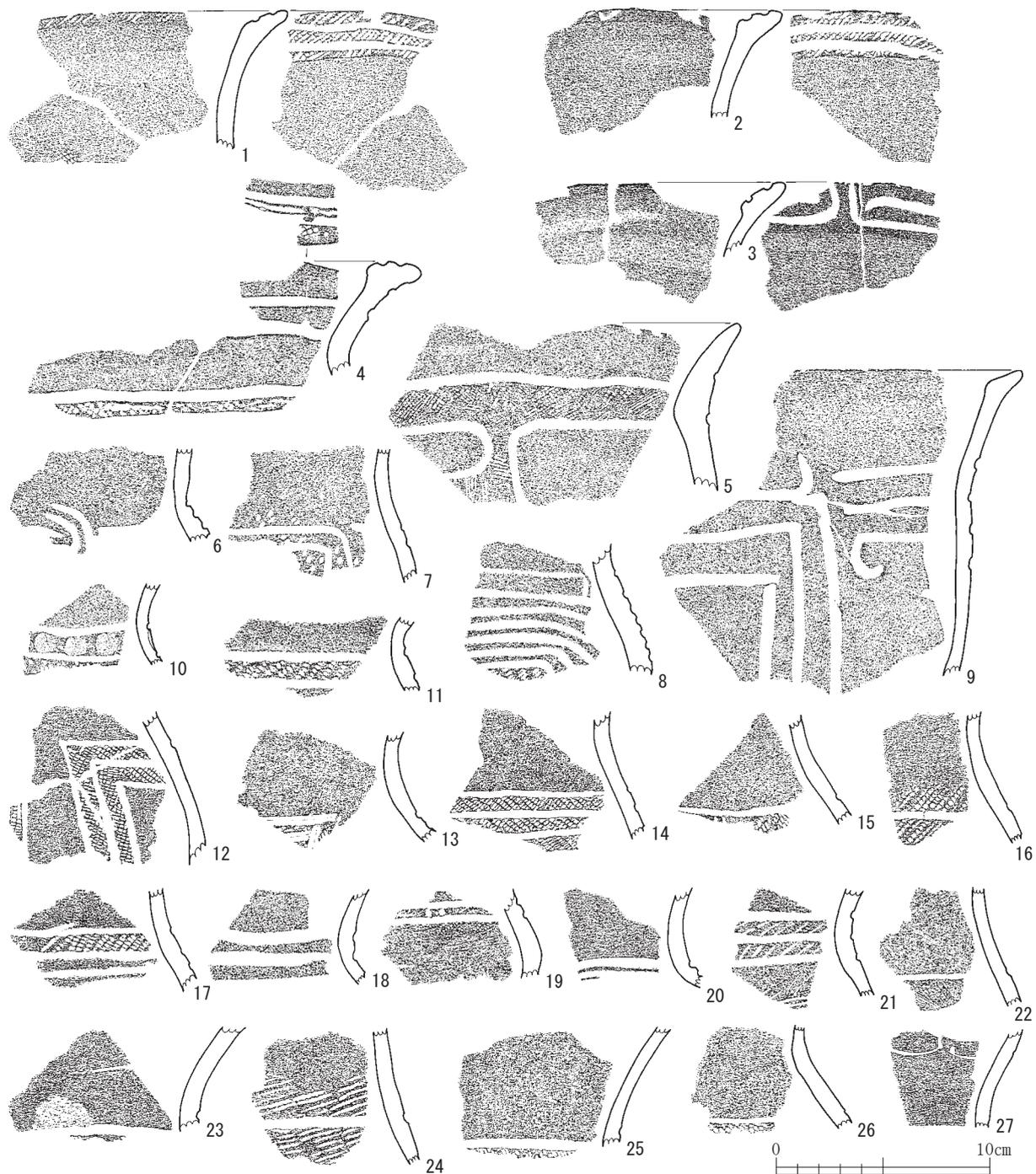
B種 (第42図5、9)

第42図5は頸部が肥厚し弱く外反して開き、口唇部をつま先状に収める土器である。頸部に1条の沈線を横走させ文様帯の上限とし、横長楕円形の区画を間隔を空けて配す。沈線間には縄文RLを充填する。9は張りの弱い胴部が頸部で弱く外反して開いて口縁部に至る土器である。口縁部を内方に肥厚させ断面三角形とし、口唇部をつま先状に収める。口縁部を無文とし、胴部には3条一組の沈線で鍵の手に折れるL字状の文様を連続して施して横帯化させる。なお、上縁および下縁沈線の先端にC字状の文様を加えている。

2類 (第42図6～8、10～27)

本群1類土器の胴部片を一括して本類とする。

第42図6は横走沈線帯を蛇行沈線2条で区切り、7、8、12、13はL字状に横走沈線を屈曲させる。また、10は横走する2条沈線間に、指頭かと思える圧痕を列状に施す。11、14から18、20から26は胴部上縁を横走する沈線の例であり、沈線間に縄文を充填しないもの(18、20、22)も見える。19は胴部最大径の上縁に、刺突



第42図 有文深鉢形土器第18群実測図 (縮尺 1/3)

文1対2点を加える横走沈線帯を配して、縄文を充填する。27は胴部上縁に沈線1条を横走させ、口縁部に細い沈線で楕円形状の区画文を配す。

3類 (第39図4、5、第43図1~28)

口縁部を肥厚もしくは内折させ、口縁部や口端部および内面に縄文を施す土器を本類とする。外反する口縁部を肥厚させ、幅の狭い縄文帯を口縁部に配し、頸部を無文、胴部に縄文を施す土器(A種)と、内面に沈線による文様を施す土器(B種)に分ける。

A種 (第43図1~28)

頸部から外反して開き、口唇部を肥厚もしくは方角状に整える土器であり、口縁部の外面に帯状の縄文帯を配す土器を本種とする。なお、口縁部内面および口端部に縄文を施すものも見える。

第43図1は口縁部を外方に肥厚させ、口縁部下縁を有段に仕上げる。口縁部および口端部に縄文LRを施し、頸部を無文とする。なお、口縁部に突起を配した痕跡を残す。2は口縁部が弱く内弯する土器であり、口唇部を内方に肥厚させ断面三角形状とし、口端部に縄文を施す。3は口縁部を外方に肥厚させ、口端部に面をもたせる。口端部および頸部に縄文RLを施す。4は口縁部を弱く外方に肥厚させ縄文を施す。5、6、16、18は頸部を無文とし、5は口唇部を外方に弱く肥厚させ断面三角形状に仕上げて口唇部に縄文を施す。6は胴部上縁に沈線を横走させ、弱く肥厚する口縁部外面に稜を残して口唇部に縄文を施す。7は6に似た口縁部形態をもち、口縁部を無文とする。頸部に間隔を空けて、縦位帯状に縄文LRを施す。8は頸部から外反して開き、口唇部を内折させて口縁部、頸部を無文とする。なお、胴部には大粒の縄文RLを施す。9、11は口縁部を外方に弱く肥厚させて口縁部に縄文を施し、頸部を無文とする。10は口唇部を外方に肥厚させ断面三角形状とし、肥厚部および口端部に縄文LRを施す。なお、頸部は無文とする。12は口唇部を断面三角形状に肥厚させて肥厚部に縄文を施す。13は頸部から外反して開き、口端部を方角状に整える。口縁部および口端部に縄文LRを施す。15は張りの弱い胴部が頸部で外反し、方角状に仕上げた口端部に至る。口端部および胴部に縄文RLを施す。16は口唇部を外方に肥厚させ、肥厚部に縄文を施す。17は外反して開く口縁部を内方に折り、口縁部に縄文を施す。19は口縁部外面を肥厚させ、口唇部をつま先状に収める。口唇部の肥厚部に縄文RLを施す。なお、胴部上縁に横走沈線を施し、頸部を無文とする。20は口唇部を外方に肥厚させ断面三角形状とし、口端部に面をもたせる。口縁部および頸部に縦位の条線を施す。21は断面三角形状に肥厚した口唇部をもつ、口縁部が無文の例である。22は内弯して直立するやや幅の狭い口縁部を有し、口縁部に縄文を施す。23は波状縁の土器であり、玉縁状の口縁部を有し、頸部に縦位沈線を配す。24から27は口縁部内面に縄文帯をもつものであり、24、26、27は内外面の縄文帯に加え、口端部にも縄文を施す。なお、25は外面を無文とする。28は内面に横方向の刷毛目状細沈線による調整痕を施す。

B種 (第39図4、5)

頸部から外反して開き、口唇部を肥厚もしくは方角状に整える土器であり、口縁部内面に文様帯をもつものを本種とする。

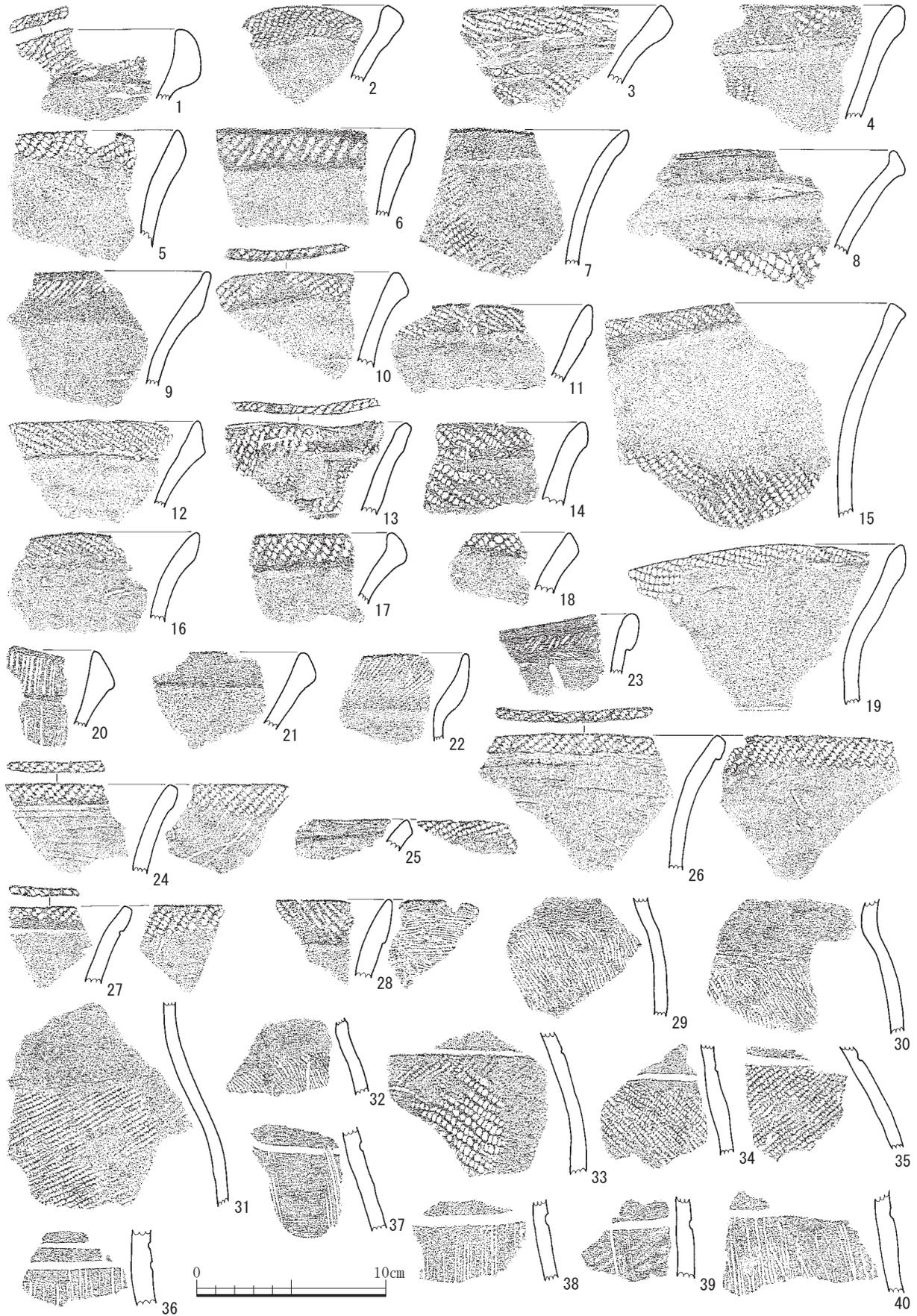
第39図4は張りのある胴部が頸部で短く外反し、内方にやや肥厚して口縁部に至る土器であり、口縁部を4単位の山形波状縁とする。口縁部内面には口縁波形に合わせ沈線を横走させ、波頂下でS字状に蛇行を加える。外面を無文とする。

第39図5はやや張りのある胴部がくびれ、頸部から外反して開く土器であり、口端部を方角状に仕上げる。4単位の波状縁を呈す。胴部の上縁に沈線2条を横走させ、斜行する短沈線を一定区間で方向を変えて充填する。口縁部、頸部の外面を無文とし、胴部には縄文LRを施す。口縁部内面に2条沈線を口縁波形に合わせて施し、波頂部で上縁沈線をノの字状に曲げ、下縁沈線を浅皿状に窪めて単位文とする。

4類 (第43図29~40)

3類土器の胴部片を一括して本類とする。

第43図29から32は胴部上縁の区画沈線をもたずに、頸部を無文とし胴部に縄文を施す例である。29、30、32は同一個体の胴部片であり、無節の縄文を施す。33、34は1条の沈線で、35は2条沈線で胴部上縁を画す。36から40は櫛状工具による縦位の条線を胴部に施す例であり、沈線1条で胴部上縁を画す。



第43圖 有文深鉢形土器第18群実測図 (縮尺1/3)

テ 第19群土器 (第44図～第50図)

張りのやや弱い胴部が頸部でくびれて外反気味に開き、肥厚する口縁部に至る土器であり、平縁と把手、突起を施し波状縁とするものがある。口縁部、頸部、胴部の3文様帯構成を基本とする。

口縁部は断面三角形に肥厚させて短く内屈し、内面を緩やかなスロープ状に仕上げる。幅の狭い口縁部文様帯には、波頂部に単位文のみを配すもの、波頂間に沈線を加えるもの、さらに口縁部下縁外側に刻み目を施すものがある。

頸部に文様帯を配す例が少数存在するが、多くは無文帯とする。胴部文様帯には下端を開放する逆三角形の区画文を多重沈線により配す例が多く、沈線間をC字状の短沈線で連結して逆L字状の文様とする例も見える。なお、胴部の沈線帯への縄文の充填には有無がある。また、把手の形状は豊富である。

- 1類 口縁部を無文とするか、単位文のみを配する土器。
- 2類 口縁部に配した単位文を左右に拡張する土器。
- 3類 口縁部に配した単位文を各々沈線で連繋する土器。
- 4類 口縁部に配した単位文を各々横走沈線で連繋し、口縁部下縁外側に斜行沈線や、刻み目を施す文様帯をもつ土器。
- 5類 本群土器に伴うと思える把手、突起を一括する。
- 6類 本群土器の胴部片を一括する。

1類 (第44図2、3、第45図1～5)

やや張りの弱い胴部から外反して開き、口縁部を内弯させる土器である。口縁部内面をスロープ状に仕上げる土器が多い。口縁部を無文とするか、単位文のみを配する土器を本類とする。頸部に無文帯をもたないもの(第44図2、3、第45図1、4、5)ともつもの(第45図2、3)がある。

第44図2はやや張りのある胴部から頸部でくびれて弱く開き、内弯する口縁部に至る土器であり、口縁部外面を僅かに肥厚させて内面をスロープ状に仕上げる。口縁下に沈線1条を横走させ、頸部には横走沈線からU字状の沈線を下した横長の窓枠状区画文を2段に配す。なお、窓枠状区画沈線の垂下部はノの字状の曲線となる。胴部には逆三角形の盾形区画文を二重に配し、斜辺に各々沈線1条を加える。なお、盾形区画文の内側には、渦巻文を加え沈線3条を垂下させる。

第44図3は張りのある胴部が頸部で外反して開き、内外に弱く肥厚する口縁部に至る。頸部に沈線2条を横走させて胴部文様帯の上限とする。胴部には大きく蛇行する沈線の両端を下して渦巻かせ、隣り合う同様の単位文と巴状に絡ませる。渦巻文間には沈線を横走させる。

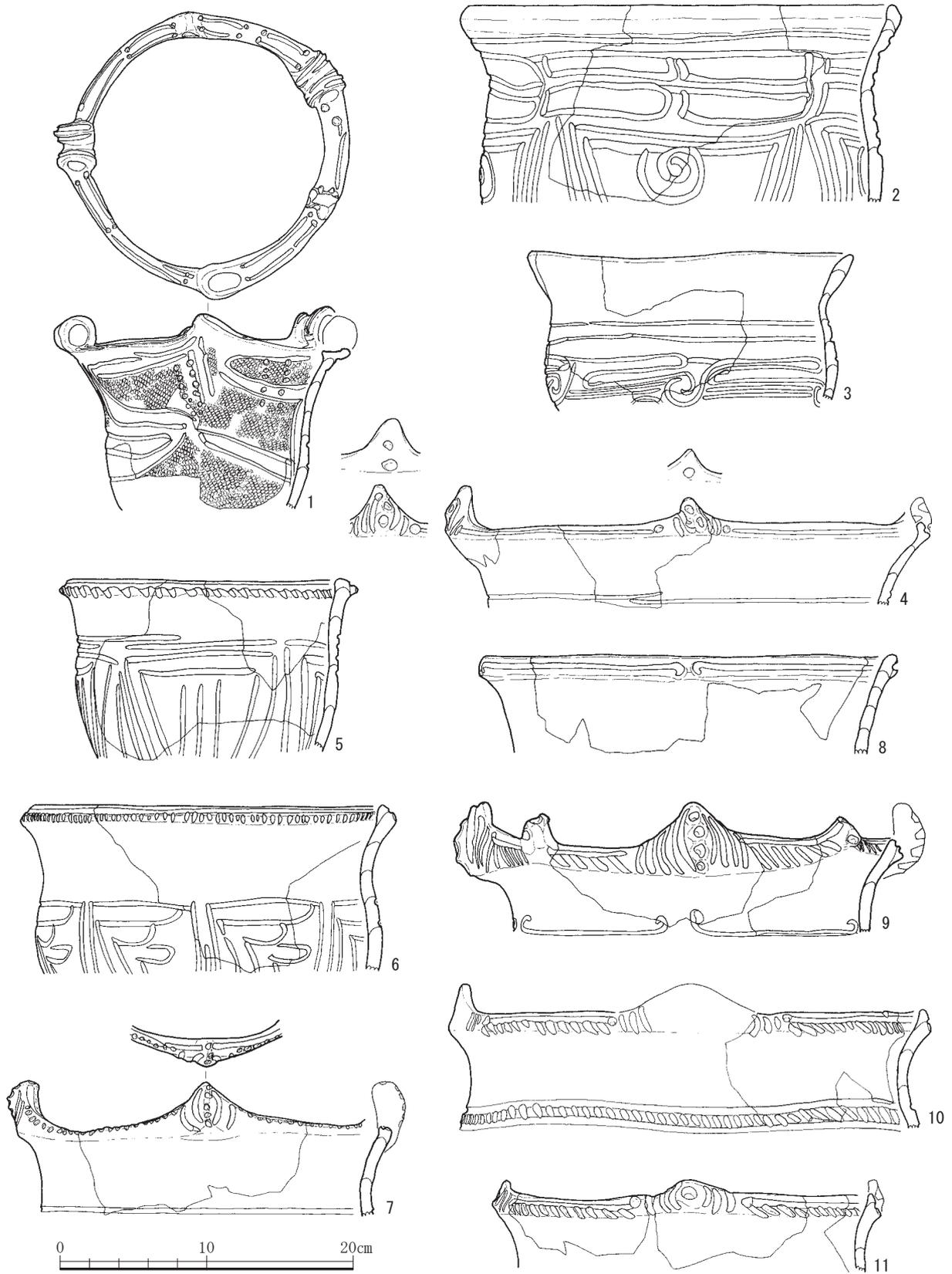
第45図1は外反する頸部から、肥厚して断面三角形に仕上げて面をもたせる口縁部に、幅の狭い文様帯を配す土器であり、三角山形の突起を施す。突起下には中央に蕨手状文を加えて両側を4条の短沈線で画した単位文を配す。波底下の頸部には2条沈線による大型の円文を配して3条沈線で連繋する。上縁沈線はしの字状に口縁部方へ曲げ、下縁沈線は楕円形の区画文とするものか。2、3は同一個体の把手片であり、把手部のみ文様を加え単位文とする。半円筒状で上面形はC字状を呈し、斜行する刻みを把手頂部に施す。把手中央には貫通する円孔を加え、上縁を横走沈線2条で画して側縁を対向する弧線文で縁取る。頸部には横走沈線を配し、縄文を充填する。4は内弯する口縁部に丸山状を呈する把手を配し、内面はスロープ状に仕上げる。把手下には3条の対向する弧線文を配し、内側の沈線先端を丸め蕨手状としている。なお、把手右半には横走する短沈線を充填する。5は外形が台形状を呈する把手頂部片であり、上面形V字状となり中央に垂下する稜をもつ。稜の両側には横走沈線3条を引き分け、口縁下に沈線2条を横走させる。

2類 (第45図6～20、24、27、第46図13、14、16、31、33、34)

口縁部に配した単位文を左右に拡張する土器を本類とする。

第45図6は山形を呈する突起をもつ波状縁の口縁部片であり、波頂下の中央に円孔を陥入する。円孔の上下には刺突文を配し、3条の対向する弧線文を加えて単位文とする。また、単位文両側の口縁部には縦位の短沈線を加える。なお、胴部上縁を横走沈線で画し頸部を無文帯とする。7は外反する口縁部を断面三角形に肥厚させ、縦位の短沈線を全面に施し文様帯とする。口縁部下には沈線3条を横走させ、逆三角形の区画文を配すと思える。8は内弯する口縁部片であり山形突起をもつ。波頂下には円形刺突1点を加え、蕨手状の縦位沈線を施し、両側に対向する弧線文を配して単位文とする。単位文側縁には弧線文を変化させた斜行沈線を施し口縁部文様帯とする。頸部には波底部方で途切れる横走沈線3条を施す。9も内弯する波頂部近くの口縁部片であり、単位文となる弧線文から続く斜行短沈線を口縁部に施す。なお、頸部は無文としている。10は三角山形を呈する把手片であり、把手下に稜をもたせて内弯する。把手中央に貫通する円孔を穿ち、口縁直下に沈線1条を稜を挟みハの字状に引き分ける。円孔両側に配した対向弧線文を縦位短沈線化して伸ばして文様帯とする。なお、頸部は無文とする。11は三角山形の突起を施す口縁部片である。波頂部より隆帯をしの字状に下し、隆帯中心部を貫通する円孔を穿つ。隆帯内側にはUの字状の沈線を施す。口縁直下に沈線を横走させ、対向する弧線文および短沈線を口縁部に配す。一方の弧線文は口縁部を越えて頸部上縁まで及んでいる。胴部には多重方形区画文と三角形文を配す。12は内弯する波頂部片であり、内面をスロープ状に仕上げる。山形突起を配し、突起下中央に貫通する円孔を穿つ。口縁直下に沈線1条を配して波頂下で引き分ける。波頂下の円孔の周囲を沈線で囲い、両側に対向する弧線文を加え、頸部は無文とする。13は直線的に開く口縁部を弱く内弯させ、口端部には面をもたせる。三角山形の突起を口縁部に配し、内面は内弯しスロープ状に仕上げる。突起下には8字状の貼付文を配し、貼付文両側に弧状沈線を加え単位文とする。また、単位文で引き分ける沈線を口縁直下に配し、縦位短沈線を口縁部に加える。なお、頸部には横走沈線3条を引き、縄文RLを施す。14は把手中央部を縦位に肥厚させ刻みや刺突を加え、両側に対向する弧状沈線を配し単位文とする。単位文側縁から沈線1条を横走させ、口縁部下縁との間に斜行する短沈線を加える。なお、頸部上縁には突起下で途切れる沈線2条を横走させる。15は2、3に類似するが、把手内面側を螺旋状とし、外面に縄文を施す点が異なり、別個体と判断した。把手頂部には管状刺突を加えて外縁に刻み目を施す。把手下に沈線2条を横走させ、貫通する円孔をU字状の沈線で囲い、対向する弧線文を添わせる。突起側縁から口縁に添う沈線1条を伸ばす。16は三角山形把手を加える。把手中央には刺突と円孔を交互に一对配し、円孔両側に対向する弧線文を加えて単位文とする。口縁部には沈線2条に挟まれた、縦位短沈線を並べ文様帯とする。胴部には3条一組の対向する弧線文を縦位に配して、胴部を縦位分割すると思える。17は台形状の内弯する把手を口縁部に配す。把手中央には貫通する大型の円孔を穿ち、沈線による円文および、末端に刺突を加える対向する弧線文を添わせる。波頂部側縁から口縁に添う沈線1条を引き分け、弧線状の縦位短沈線を連続させ口縁部文様帯とする。また、弱く外反する頸部には沈線2条を横走させる。18、19、24は外形が台形状を呈する半円筒状の把手である。18は把手上面に斜行する短沈線を加え、外面に大型の貫通する円孔を穿つ。把手下に横走する沈線1条を施し、円孔を囲み対向する弧線文を配す。19は把手頂部に沈線1条を加え、把手外側との間に縄文を施す。外面には円孔を陥入させ、U字状沈線で周囲を囲み単位文とする。24も同様の例であるが、上面形U字状を呈する半円筒形の把手上面への施文はない。20は本類土器の波底部片であり、隅丸三角形に区画文を閉じ、短沈線および円形刺突文を加える。27は口縁部に山形の把手を配した内弯する口縁を有す土器である。把手には8字状に粘土を加えて貫通する円孔一对を穿つ。貼付文両側には二段の対向する弧線文を加えて単位文とする。第46図13、14は第45図9

の突起に類似する単位文をもつ。13は尖塔状を呈する突起中央部に円孔列を縦位に加え、両側に対向する弧線文を配して単位文とする。14も同様の文様を配すが、方角状に仕上げた口縁部を内傾させる。



第44図 有文深鉢形土器第19群実測図 (縮尺1/4)

第46図16、31から34は本類もしくは1類の破片であり、16は山形突起をもつ口縁部片である。波頂部から刺突を加えた沈線1条を垂下させ、他を無文とする。31は口縁部を無文とし、34はU字状文を正逆に加える。

3類 (第44図1、4、7、8、第45図21~23、25、26、第46図1~12、15、17~30、32)

口縁部に配した単位文を各々横走沈線で連繋する土器を本類とする。

第44図1は張りの弱い胴部が頸部より外反して開き、外方に肥厚して口端部に面をもたせた口縁部に至る。口縁部と胴部の2文様帯構成を採るが、文様の割り付けに齟齬が生じている。口縁部文様帯は平坦な口端部に上面文様として配される。外形中央部を窪ませ台形状を呈し、両側に円孔を加えた把手2個と、山形小突起2個および、三角山形で片側に円孔を加えた把手1個を配す。台形状把手は側面に隆帯を加えて輪状の肥厚部とし、輪上および内側に沈線を加える。山形小突起は内面に浅く円孔を加える。把手、突起間には末端に刺突を加えた沈線2条を並行して施すが、1条とする箇所や、中間に刺突を加える箇所、中間の刺突文部で文様を分ける箇所もある。胴部文様は把手、突起下に配した垂下する2条の列点文列と2条の垂下沈線で縦位分割するが、列点文間に配する文様には、2条沈線による逆Z字状、逆5字状、列点文列を挟んで対向する曲がりの鋭角な蛇行線文などばらつきが見え、沈線間を除き縄文RLを充填する。第18群土器1類に分類すべきかもしれない。

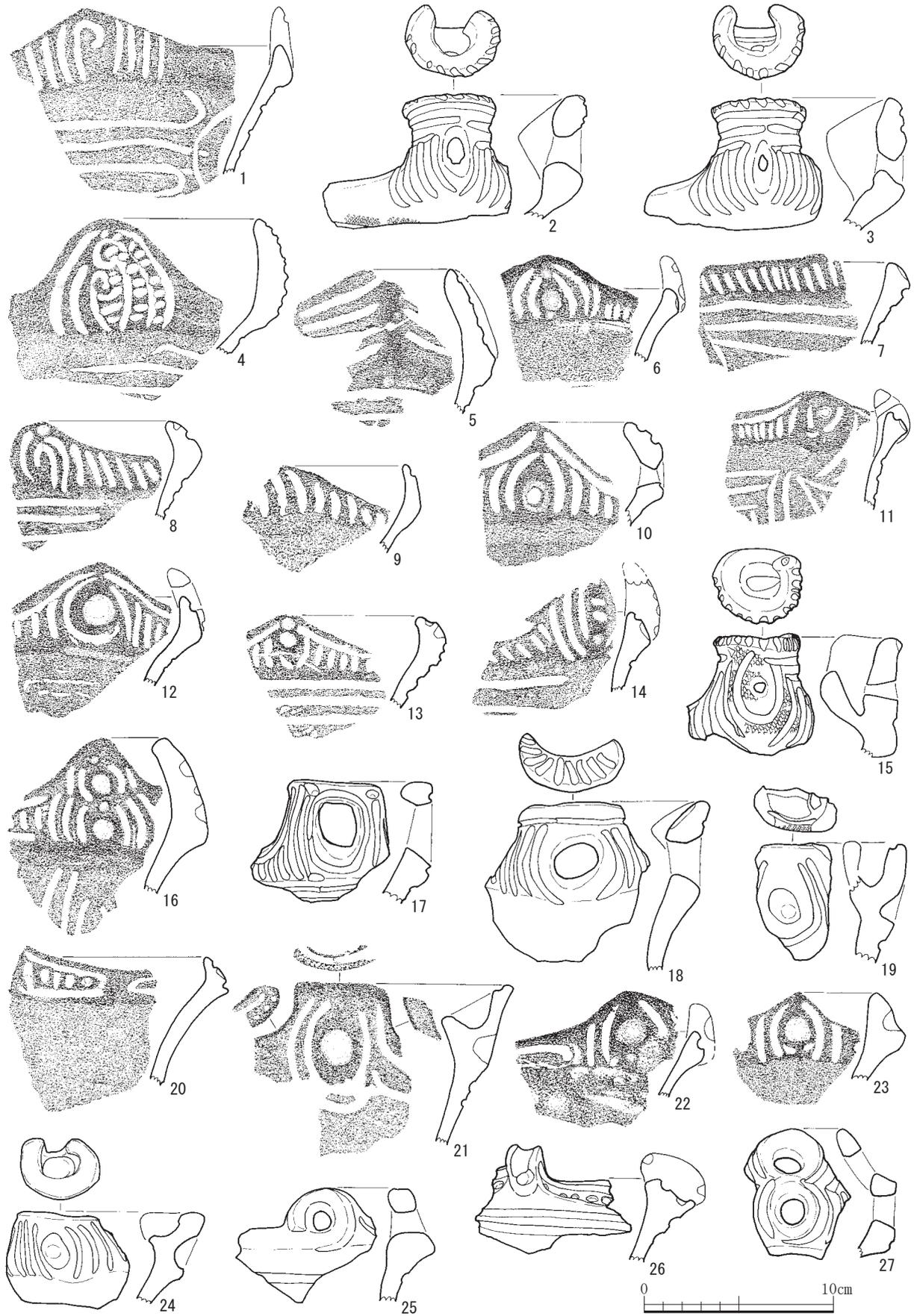
第44図4は頸部から外反して開き、口縁部を内側に折り三角山形の突起を施す土器である。突起には大小の2種があり、各一對を配す。大突起には斜めを向く8字状の貼付文を加え、対向する弧線文を貼付文の両側に配す。なお、一部の弧線文の末端には刺突文を加える。また、内面には縦位に2個の円形刺突を施す。小突起は8字状貼付文を逆方に斜行させ、対向する弧線文を貼付文に添わせ、内面に刺突1箇所を加える。各突起間には末端に刺突を加える横走沈線1条を施す。胴部上端に沈線1条を横走させ、頸部を広く無文帯とする。

第44図7は外反気味の頸部から、緩く内弯して口縁部に至る土器であり、口端部を方角状に仕上げて4単位の三角山形突起を施す。突起頂部から刺突文列を垂下させ、対向する弧線文で周囲を囲み単位文とする。面をもつ口端部には沈線1条を横走させ、口端部外縁との間に刺突文を加える。頸部と胴部の境に沈線1条を横走させて画し、頸部を広く無文帯とする。

第44図8は頸部より外反して開き、口縁部を断面三角形状に外方へ肥厚させる。肥厚部には両端をしの字状に丸めた沈線を4単位配すと思える。なお、頸部は広く無文帯とする。

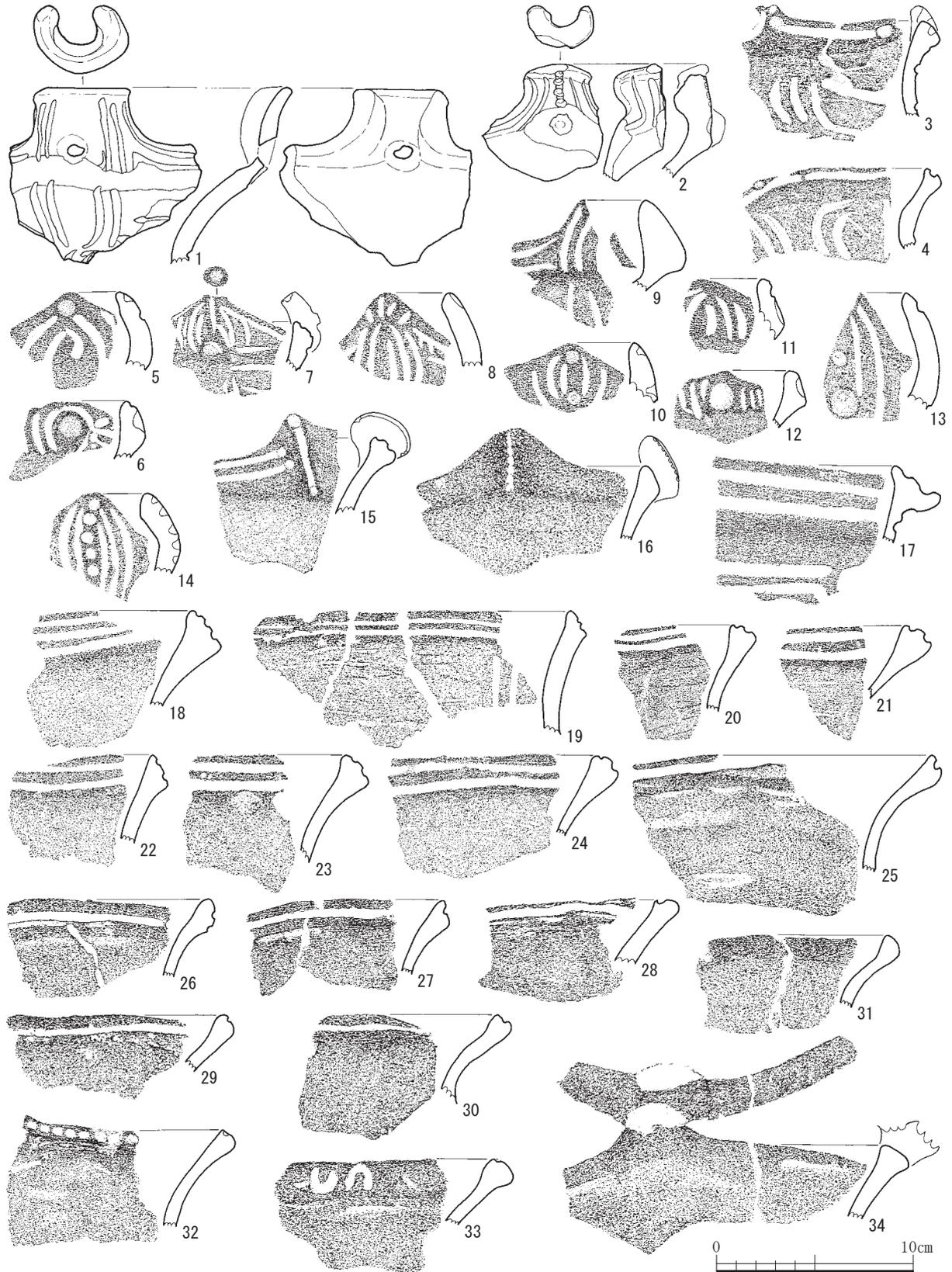
第45図21は口縁部を内方に肥厚させ断面三角形状とし、口縁部に盃状の把手を配す土器である。把手上面には沈線1条を、口端部には先端に刺突を加えた沈線1条をそれぞれ引き、外側との間に刺突列を加える。把手下に大型の円孔を陥入させてU字状の沈線2条を添わせるが、外側のU字状文から2条沈線を口縁に添わせ引き出している。22、23は三角山形の突起を加える口縁部片であり、内面をスロープ状とする。突起下に円孔を陥入させ、両側に対向する弧線文各2条を配す。突起間は先端をしの字状に丸めた沈線で連繋するものと思える。25は中央に貫通する円孔を穿った丸山形の突起を施し、口縁部を外方に肥厚させ断面を三角形状とする。口縁部には、突起を挟んで交互に沈線1条を横走させるものと思える。なお、頸部にはやや幅広の沈線1条を横走させる。26は外反する口縁部を外方に肥厚させて断面三角形状とする。口縁部に円盤状の突起を横断させ、突起外面に両端に刺突を施した短沈線1条を加える。把手側縁から先端をしの字状に丸めた沈線を横走させ、口縁部外側との間に円形刺突文を列状に加えている。

第46図1、2は外反する頸部が口縁部で内折し、半円筒形の把手を配す土器である。1は口縁部下縁の屈曲部外面を欠き不明な点もあるが、把手下中央に貫通する円孔を穿ち、U字状沈線2条で縁取るものと思える。また、把手側面および基部より沈線各1条を口縁部に横走させる。把手下の頸部には、対向する弧線2条一組を2段に加えて文様帯を縦位分割するものと思え、縦位分割文から横走沈線を伸ばしている。2も同様の破片



第45図 有文深鉢形土器第19群実測図 (縮尺1/3)

であり、把手下中央に円孔を陥入し、把手頂部から刺突を加えた沈線1条を垂下させてハの字状に沈線を添える。把手側面には先端を内方に反らせた沈線を配し、口縁部横走沈線として伸ばす。3は把手部を欠失するも



第46図 有文深鉢形土器第19群実測図 (縮尺1/3)

の、把手下に円孔を穿ち、外縁に沈線を添わせる。外反して開く口縁部を肥厚させ断面三角形とし、口縁部に両端に刺突を加えた沈線1条を配す。把手下の頸部に3条の弧線文を縦位に配し、側縁に半月形の横長区画文を配す。4も類似する土器であり、断面三角形に肥厚する口縁部に沈線1条を横走させる。頸部には沈線1条を垂下させ、2条一組の弧状沈線を背中合わせに配す。5は内弯する把手片であり、頂部に刺突を加える。渦を巻く沈線を中央に配し、対向する弧線文で囲んでいる。7は内弯する口縁部を外方に肥厚させ断面三角形とし、口縁部に山形突起を加える。突起頂部には円孔状の刺突を加え、突起より垂下する稜線上に短沈線を施す。下端に半円形の刺突を加え、両側に対向する弧線文を配する。口縁部上下縁には各々沈線1条を引き三角形の区画文とする。頸部上端の横走沈線2条を途切らせ、突起下に2条沈線を垂下させる。8は尖塔状の突起片であり、頂部にハの字状の2条の短沈線を施し、突起下に対向する弧線文を施す。弧線文から左右に伸びる2条沈線間には刻み目様の短沈線を加える。9は環状を呈する把手片と思え、口縁部を外方に肥厚させ断面三角形の口縁部とする。把手外面に弧線文2条を添わせ、把手側縁から沈線2条を横走させる。把手下の頸部には弧線文かと思える沈線2条を下す。10は山形の小突起片であり、突起下に刺突文2点を縦位に配し、対向する弧線文で囲んでいる。11は山形小突起下に対向する弧線文を配し、12は突起下の円孔を縦位沈線で囲む。15は外反して開く頸部を外方に肥厚させ、丸みのある口縁部とする。口縁部を横断する卵形の突起を配し、頂部には両端に刺突を加えた短沈線1条を施す。口縁部には先端に刺突を加えた沈線2条を配す。17は口縁部を内外に肥厚させ面をもたせて上面文様を施す土器であり、幅の広い2条の横走沈線を施す。頸部上縁に沈線による文様を描くが、詳細は不明である。32は刺突を加えた沈線を口縁部に施す。18～26は口縁部を三角形に外方へ肥厚させ幅の狭い文様帯とし、沈線1条から3条を横走させるが、口縁部への縄文施文は見えない。なお、19は頸部に垂下する沈線2条を加える。28から30はやや肥厚する口唇部をもち、口縁部に沈線を施す土器である。

4類 (第44図5、6、9～11、第47図)

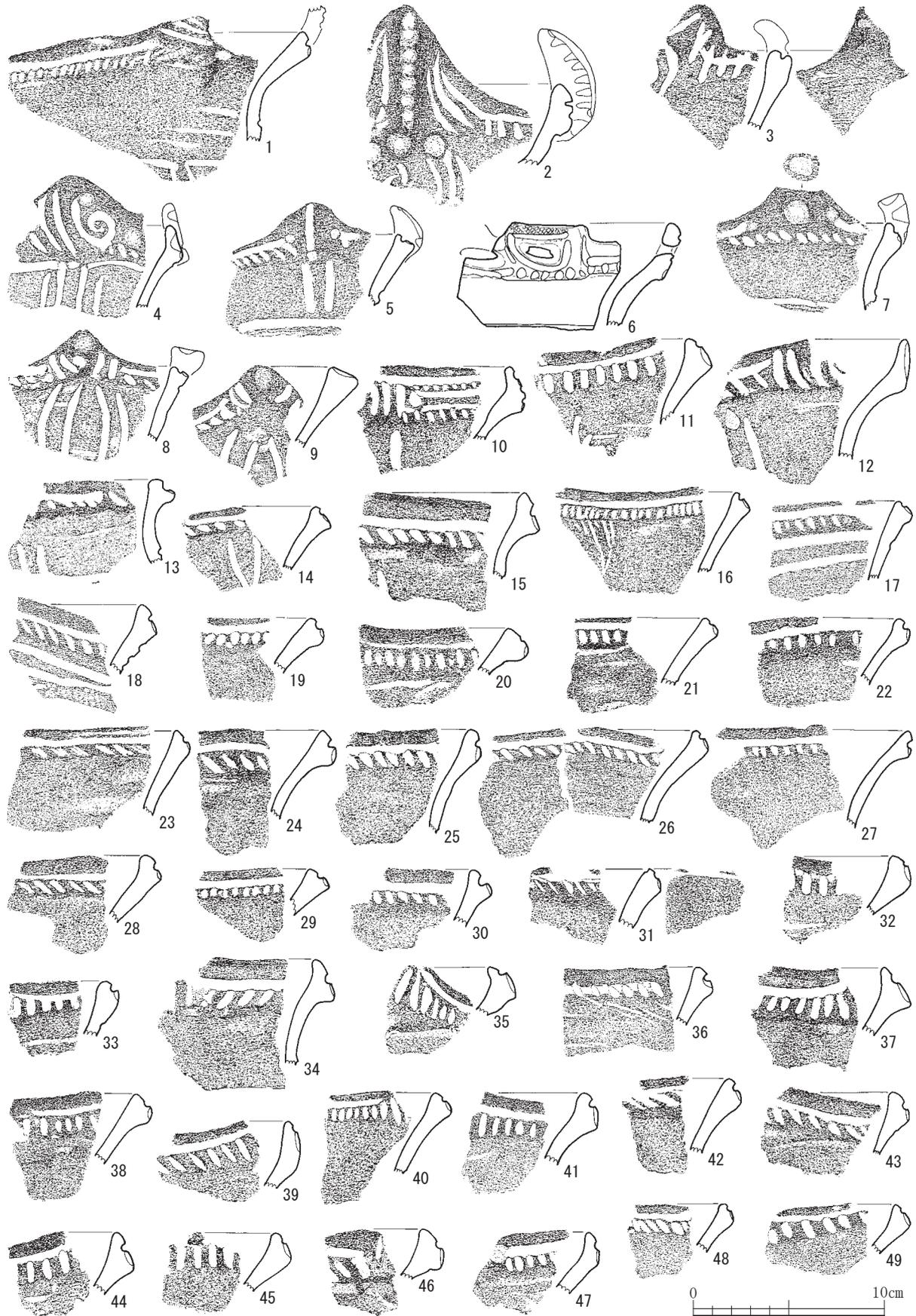
口縁部に配した単位文を各々沈線で連繋し、口縁部下縁外側に斜行沈線や刻み目を施すものを本類とする。

第44図5は張りの弱い胴部が頸部から弱く開き、内方に肥厚させた断面三角形の口縁部に至る土器である。幅の狭い口縁部に沈線1条を横走させ、口縁部下縁外側に刻み目を施す。胴部には逆三角形の沈線区画を3重に配し、区画内には沈線3条を垂下させる。なお、縄文の施文は無く、頸部は広く無文帯とする。

第44図6は張りのある胴部が頸部で外反し、内方に肥厚させた断面三角形の口縁部に至る土器である。幅の狭い口縁部に沈線1条を横走させ、口縁部下縁外側との間に刻み目を密に施す。胴部には縦長の長方形の区画文を配し、区画内に7字を3段に重ねた文様を加える。なお、縄文の施文は無く、頸部は広く無文帯とする。

第44図9は直立気味の頸部が口縁部際で開き、外方に肥厚させた断面三角形の口縁部に至る土器である。口縁部には大小の突起各々4個を交互に配す。大きい三角山形の突起頂部に刺突を加え、突起下を肥厚させ稜線上に円形刺突を垂下させ、両側に対向する弧線文で囲み単位文とする。突起間に配す山形小突起は、8字状の貼付文を加え肥厚させて両端に円形刺突を加える。大小の突起間には沈線1条を横走させ、口縁部下縁外側との間に斜行沈線を加える。頸部と胴部の境は、大小の突起下で引き分ける先端をしの字状に丸めた横走沈線で画し、頸部を無文とする。

第44図10は頸部より外反して開き、直立気味の口縁部に至る土器であり、口縁部内面をスローブ状とする。突起をもつと見えるが詳細は不明である。突起基部には対向する弧状沈線を加え単位文とする。突起間には両端に刺突を加えた沈線1条を横走させ、沈線と口縁部下縁外側間に斜行沈線を加える。頸部と胴部の境は斜行沈線を充填した2条沈線で画すものと思え、頸部は広く無文とする。



第47圖 有文深鉢形土器第19群実測図 (縮尺1/3)

第44図11は直立気味の頸部が口縁下でやや開き、口縁部を内方に肥厚させ口唇部をやや内傾させる土器である。口縁部内面をスロープ状とし4単位の山形突起を配す。突起下には円孔を陥入させ、対向する弧線文で囲み単位文とする。突起間には末端に刺突を加えた沈線1条を横走させ、口縁部下縁外側との間に斜行沈線を施す。頸部は広く無文とする。

第47図1は張りの弱い胴部が頸部で大きく開き、肥厚し断面三角形の口縁部に至る土器であり、口縁部内面をスロープ状に仕上げる。突起部を大きく欠くが、突起下に貫通する円孔を穿ち、直下に刺突文1点を施す。円孔外縁に斜行沈線を引き単位文とする。幅の狭い口縁部には沈線1条を横走させ、口縁部下縁外側に刻み目を施す。胴部には矩形の縦長区画文を配すかと思うが、詳細は不明である。2は尖塔状の把手を配した口縁部片であり、把手頂部から隆帯1条を垂下させ、稜線上に刺突を加えた沈線を引き下す。隆帯下縁には大型の円形刺突3個を横位に配すほか、隆帯側縁に背中合せの弧線文を配す。弧線文のうち外側の沈線を伸ばして横走沈線とし、沈線と口縁部下縁外側間に縦位の短沈線を加える。胴部上縁には中央部にC字状文を正逆に組み合わせて垂下させ、その外側を3条一組の弧線文で囲んでいる。単位文と一体化して横走沈線を引き出す手法は、本群第3類とすべきかもしれない。3は肥厚する口縁部に貫通する円孔を施した環状の把手を配し、円孔周囲を沈線で囲む。環状部には放射状の沈線を加え、肥厚する口端部には沈線1条を横走させ短沈線を施す。4は外反する頸部から内傾する口縁部に至る山形突起をもつ口縁部片であり、内面をスロープ状に仕上げる。突起の左半部を肥厚させ弧状沈線を重ね、右半部は楕円形の平坦面とし、渦文と円孔を末端に加えた沈線を斜行させ単位文とする。口縁部の単位文間には、末端に刺突を加えた横走沈線と、口縁部下縁外側の刻み目による文様を配す。突起下の頸部には4条の垂下沈線を配し、垂下文部で途切れる沈線1条を口縁直下に横走させる。5は口端部を外方に肥厚させて山形の突起を加える口縁部片であり、内面をスロープ状に仕上げる。突起部外面を肥厚させ、両端に刺突文を加えた短沈線を垂下させる。突起側面から刺突文を末端に加えた沈線1条を横走させ、口端部下縁外側に斜行する刻み目を施して幅の狭い口縁部文様帯とする。頸部と胴部の境に沈線を横走させ、突起下の頸部には2条の垂下沈線を施す。6は外反する頸部が急激に屈曲して直立する口縁部に至る、板状の方形把手をもつ口縁部片であり、頸部から口縁部の移行に際して口縁部下縁に段をもつ。把手左半を欠き全様は不明である。粘土を加え肥厚させた把手両側に隆線を垂下させ、方形の区画内に楕円形もしくは三角形の貫通孔を穿つ。貫通孔周囲の隆線内側を沈線で囲い、把手上縁に縄文を施す。把手の区画隆線外縁に添わせて沈線をL字状に曲げて横走沈線とし、沈線と口縁部下縁外側の刻み目で口縁部文様帯を形成する。頸部と胴部の境に沈線1条を横走させ、頸部は広く無文とする。7は短く外反する頸部から、弱く内弯して肥厚する断面三角形の口端部に至る、山形突起をもつ口縁部片である。突起頂部と外面中央に円孔を陥入させる。肥厚した口縁部には末端に刺突を加えた沈線を横走させ、口端部下縁外側に全周する刻み目を加え文様帯とする。頸部下縁は横走沈線2条で画す。8、9は外反する頸部から、肥厚して断面三角形に面をもたせた口端部に至る、山形突起をもつ口縁部片である。突起部は肥厚し頂部に円孔を陥入させ、対向する弧線文で周囲を画し単位文とする。また、口縁部に沈線1条を横走させ、口縁部下縁外側との間に施す刻み目で文様帯を構成する。波頂下に対向する弧線文を縦位に配し、胴部文様帯を縦位に分割する。

第47図10は外反する頸部を内方に折り、内傾する口縁部に至る波頂部付近の口縁部片である。口縁下に沈線1条を横走させ、波頂部周囲を画す弧線文を配す。横帯沈線下には、横走する2条沈線を加え、単位文際に施す円形刺突で横長の矩形区画を構成する。矩形区画文上下両縁には斜行する刻み目を施す。なお、単位文下の頸部には、太めの沈線による2条の垂下文を配している。11は口縁部を外方に肥厚させ断面三角形とした波状縁片である。口縁部に横走沈線1条を引き、口縁部下縁外側との間を縦位短沈線で丁寧に刻んでいる。なお、

無文勝ちの頸部には2条一組の斜行沈線を配す。12は外反する頸部を内方に折り、直立気味の口縁部に至る波頂部付近の破片である。口縁部には単位文外周を画す弧線文を配し、単位文から横走する沈線1条を伸ばし、口縁部下縁外側間に斜行沈線を施し文様帯を構成している。頸部には2条沈線を垂下させている。13は強く外反する頸部から、外方に肥厚させ断面三角形とする口縁部に至る土器であり、斜行する刻み目を加えた沈線1条を口縁部に配す。頸部下限を横走沈線で限り、3条沈線による縦位の弧線文を頸部に配す。14は直線的に外反する頸部から、弱く内弯する口縁部に至る波状縁片であり、口縁部を内方に肥厚させ断面三角形とする。口縁部には沈線1条を横走させ、口縁部下縁外側には斜行する刻み目を加えて文様帯とする。頸部には対向する弧線文かと思える沈線を配す。15は外反する頸部から直立気味の口縁部に至る波状縁片であり、口縁部には沈線1条と刻み目を施す。なお、頸部に垂下沈線が見える。16は平縁の口縁部片であり、横走沈線とやや細かな刻み目を加え文様帯とする。なお、頸部下縁を横走沈線で画す。17は直線的に外反し、外方に肥厚させ断面三角形の口縁部に至る波状縁片であり、口縁部に沈線1条と口縁部下縁外側に斜行する刻み目を施し文様帯とする。頸部上縁には沈線2条を口縁に合わせて横走させる。13も同様の波状縁片であり、2条の横走沈線下に縄文の充填が見える。

19から49は横走沈線と口縁部下縁外側の刻み目を施す口縁部片である。口縁部の文様帯幅が比較的広いもの(25、34、37、39)や、口縁部を外方や内方に肥厚させ断面三角形の幅の狭い文様帯とするものがあり、後者の例が多い。なお、刻み目には短沈線状のものを含み、斜行する例が多く、丁寧に密接して施すものと、粗いものが見える。なお、36のように沈線の下縁に刻みを施すものもある。口縁部下縁に沈線を加えるもの(20、33、35)は少なく、大半は頸部を無文とするものと思える。

5類 (第48図)

本群土器に伴うと思える把手、突起を本類とする。

本群土器に伴う把手、突起には半円筒状や円柱状を呈す把手や、山形を呈す突起が大半である。ここに示す把手、突起はその類型を大きく外れたものも多く見え、全てが本群に伴うものではない可能性があるが、ここでは一括してこれを提示し、本遺跡における把手の多様さを見ておくこととする。

円柱状で上面形が円形を呈するもの(A種)、半円筒状もしくは上面形が螺旋状を呈するもの(B種)、橋状把手をもつもの(C種)、外面形が台形状を呈し、透かし穴をもち、横向きの橋状把手様を呈すもの(D種)、その他の把手、突起(E種)に分ける。

A種 (第48図1～3、5)

円柱状で把手上面を円形とするものを本種とする。中空のものはない。

第48図1は頂部に円盤を乗せたものであり、内弯する口縁部を有する。2は円柱状の把手頂部を拡張したもので、頂部中央にやや深い円孔を陥入させ、刺突文を1、2点加えた同心円文2条を外周に添わせる。把手基部には乳房状の突起を加え、側縁に大型の円孔を陥入させる。また、突起上縁には横走する短沈線2条を配す。突起側縁には2条の沈線を口縁に向け伸ばし、口縁側の沈線先端をしの字状に丸める。なお、内弯する口縁部内面にも、大型の円孔1点を加える。3は外面形山形の把手であり、弱く内弯する内面には幅広で浅い沈線での字状の文様を描く。波頂部には大型の円孔を陥入させ、外周に沈線2条を廻らす。把手両側には2、3条の沈線を施し、口縁部に伸ばすと思える。外面の把手下には沈線による八字状文を中央に配し、2、3条の沈線で周りを囲んでいる。5は円柱状の頂部に厚みのある円盤を乗せた把手であり、内面に基部を横断する円孔をもつことや接合部の曲面から、注口土器の把手の可能性もある。円盤上面中央に大型の浅い円孔を加え、周囲に渦を巻く沈線を多重に施す。円盤と円柱の接合部には沈線1条を廻らせ、垂下する2条沈線を基部で左右に引き分ける。



第48図 有文深鉢形土器第19群実測図 (縮尺1/3)

B種 (第48図4、6～8)

半円筒状もしくは上面形が螺旋状を呈する把手を本種とする。

第48図4は内弯する口縁部に配した上面形が螺旋状を呈する把手であり、外面形は台形状を呈す。上面から内面に向かう大型の貫通する円孔を穿つ。把手中央部には、巴状に渦を巻く沈線2条を左辺から延ばし、うち1条は途中でしの字状に入り組ませる。なお、渦巻文の上縁および側縁を沈線1条で画す。6は内弯する口縁部に配した半円筒形の把手であり、外面形は頂部が張出す台形状を呈する。上面形に合わせ弧状沈線3条を配し、中央沈線先端には刺突を加える。また、把手内角には刻み目を施す。把手外面の肥厚部下縁には、沈線1条を横走させ縦位沈線を密に加える。7は内弯する口縁部に配した半円筒状の把手であり、外面形は台形状となる。把手基部にV字状に2条沈線を引き、沈線間に円形刺突列を加える。なお、口縁部には幅広で浅いなぞり状の沈線3条を横走させる。

C種 (第48図9～15、22、23)

橋状把手をもつものを本種とする。

第48図9は内弯する無文の口縁部に配した山形の橋状把手である。把手頂部に円錐状の孔を穿ち、内面の屈曲部にも大型の円形刺突を加え、側面には貫通する円孔を加え橋状とする。10は外反し口唇部を丸く収める口縁部に配した大型の橋状把手であり、上端部を欠く。なお、橋状部は板状となる。把手下端には大型の円孔を加え、先端をしの字状に丸めた沈線と斜行沈線および、その外縁を方角状に縁取る沈線を加える。なお、丸味のある口縁部に沈線1条を配す。11は内弯気味に開く頸部から、断面三角形に肥厚させた口縁部に至る、台形状の橋状把手を加えた口縁部片である。把手中央に貫通する円孔を穿ち、沈線で弧線状に縁取る。なお、橋状部は両側から楕円形の窪みを加え、左側から刺突を加えて貫通させる。12は内弯して開く頸部から、内方に肥厚させ断面三角形とする口縁部に至る土器である。側面形は環状で、外面形は頂部中央部が窪む略台形を呈する。把手基部に刺突を加えた円形貼付文一対を配し、把手側縁に添わせた沈線2条を、内面側まで引き下ろす。なお、口縁部には先端をしの字状に丸める沈線1条を加える。13は外反して開く頸部から、内側に肥厚させて端部に面をもたせた口縁部に至る土器である。外面形は右側の山が低い二山略台形の橋状把手である。14は外反して開く頸部から、外方に肥厚させ断面三角形とする口縁部に至る土器である。外形は台形を呈する橋状把手であり、平坦な頂部には幅広の沈線によるC字状文を加える。口縁部を横走する沈線は、橋状部の円孔内を貫通している。15は外反して開く頸部から、内方に肥厚させ断面三角形を呈す口縁部に至る。口縁部には外面形が尖塔形の細い山形の橋状把手を配す。側面形は紡錘形で雨滴状の貫通部をもつ。16は三角山形の橋状把手片であり、巻貝状に右面の円孔が広く左面を細く仕上げる。橋状部には2条沈線を斜行させる。なお、口縁下には沈線1条を横走させる。22は内弯する口縁部に配した異型の橋状把手であり、右半を欠失する。口縁部には沈線による矩形の区画文が見える。口縁部から断面が楕円形の橋状部を外方に伸ばし、先端に厚みのある円盤を貼り付けて中央部に円孔を陥入させる。橋上部上面には沈線2条を斜行させる。橋状部の孔は楕円形を呈し、基部で上下の橋状部を隆帯で楕円形に繋いでいる。橋状部が二又に分かれるものかもしれない。23は上面形は半円筒状を呈し、外面形は分銅型を呈す。把手上面には円孔を穿ち、左面から貫通して右面の開口部と繋がっている。把手頂部にはU字状に折り返す沈線2条を引き、折り返し部に刺突文を加える。外面には巴状に絡んで渦を巻く沈線2条を引き、うち1条を口縁方に伸ばしている。把手上面、側面および外面に縄文LRを施す。

D種 (第48図17、20、21)

外面形が台形状を呈し、透かし穴をもつ横向きの橋状把手様を呈すものを本種とする。全形のわかる例はない。

なお、本種は後述する第22群土器の一部に類例があり、この群に含むべきかもしれない。

第48図17は小型の品であり、台形状の支柱部から左方に橋状部を伸ばす。浅皿状に窪みをもつ支柱部上面には円形刺突を加え、刺突に添わせたS字状沈線を把手外面まで引き下ろす。なお、沈線下縁にU字状の沈線を添えている。三角形かと思える透かしにより橋状部を作出し、上面には弧状沈線を多重に加える。20は方形の支柱部から断面D字状を呈する橋状部を左方に伸ばす。なお、支柱部の基部と頂部を欠く。支柱部中央には、円形の貼付文を加えた後、貫通する円孔を穿つ。円孔の外縁には二重の方形文を配す。支柱部内面には、上面から垂下する沈線3条を加え、側縁になぞり状の沈線を引き下ろしている。支柱部上面の内側をU字状に窪め、外縁に添い沈線1条を加える。楕円形の透かしにより形成した橋状部の上面は平坦とし、沈線2条を縦走させる。なお、内側の沈線先端は、支柱部のU字状沈線に繋げている。21は分銅型を呈する支柱部から、楕円形の透かしにより形成した断面D字状の橋状部を左方に伸ばしている。支柱部外面には沈線により下部を多条に渦巻かせたS字状文を配し、口縁部に向かう沈線1条を加えている。支柱部の頂部は円形とし、巴状に絡み渦を巻く沈線2条を配し、平坦に面をもたせた橋上部へと伸ばしている。

E種 (第48図18、19)

上記4種に含まれない把手を一括して本種とする。

第48図18は円形の把手であり、外面中央に貫通する円孔を穿つ。なお、把手内面にも上下方向の貫通孔の痕跡があることから、双耳壺の把手の可能性もある。外面上下には刺突文と円文を加えた円形の貼付文を一対配している。円形貼付文際から、円孔を囲む対向弧線文を各々2条施す。19はやや内傾する尖塔形の山形突起であり、突起頂部に円形刺突を加える。中央には雨滴状の貫通孔を施し、これを取囲む雨滴状の沈線を配す。

6類 (第49図、第50図)

本群土器の胴部片を本類とする。

本群土器の文様帯構成には第44図2、5、6に見えるように、口縁部、頸部、胴部の3帯構成を採るもの(A種)と、良好な例に乏しいが、第45図16、第48図1、第47図8に見えるように胴部を縦位分割して口縁部、胴部の2帯構成を採るもの(B種)に大きく分けることができる。また、A種には頸部を有文帯とするもの(第44図2)と無文帯とするもの(第44図5、6)に分けられる。また、A種の胴部文様帯への縄文施文には有無がある。

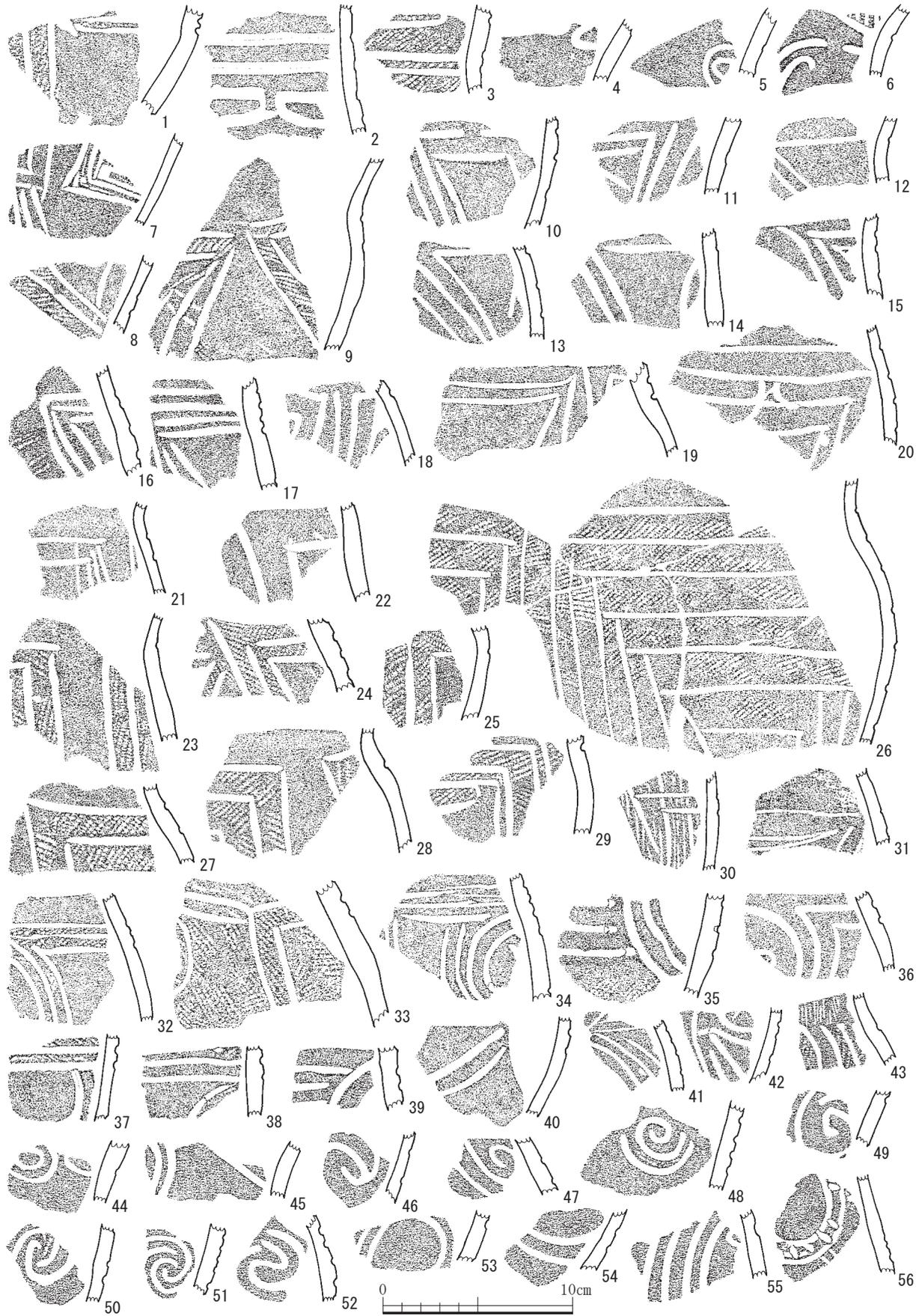
A種 (第49図、第50図20~55)

口縁部、頸部、胴部の3帯の文様帯構成を採るものを本種とする。胴部文様帯は下端を開放する区画文を横位に連続させるものと思える。なお、本例に含まれるものとして、第45図1、4、8、13などがある。

頸部を有文帯とする例は乏しく、第44図2が代表例となる。頸部に間隔を空けた2条の横走沈線を配したのち、沈線によるU字状の区画文を加え文様帯としている。なお、U字状区画の側辺が、ノの字状に弯曲する点は注意される。

第49図9から31は頸部を無文とし、胴部に逆三角形の盾形区画を配す例である。逆三角形文を多重に配す例(第49図26)や、第49図20に見えるように、多重逆三角形文の一部に対向するC字状文を加え7字状の文様を生む例も見える。第49図29も7字状の文様の例である。また、本来は逆三角形の区画内に、多重の逆三角形文を充填することを基本としていたが、第49図9や16のように独立した逆三角形文とする例も見える。なお、第49図21から25、27から31も本種に含まれるものであり、第49図23、27、28などは独立した多重の方形区画文かもしれない。

第49図32から56は頸部に無文帯をもち、胴部に多重沈線による円形文を配すものであり、本類に含まれる可能性がある。第50図19から27は胴部の多重区画文の破片であろう。28から55は頸部下縁に配した横走沈線の状

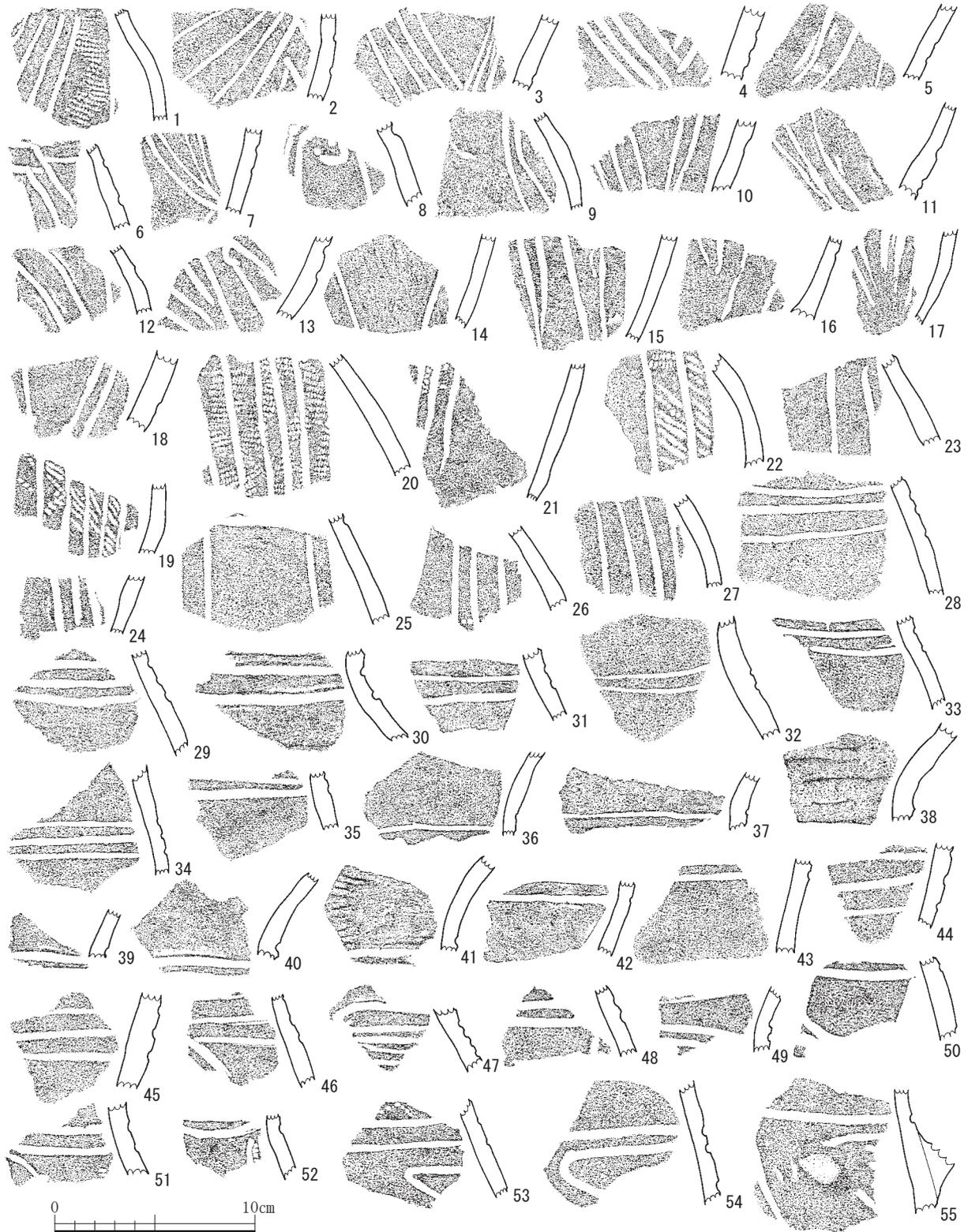


第49圖 有文深鉢形土器第19群実測図 (縮尺1/3)

況である。なお、本種の文様帯への縄文の充填には有（第49図23～29など）無（第49図10～15、17～20など）がある。

B種（第50図2～18）

良好な例に乏しい。第46図1は、把手位置に合わせて、対向する弧線文を2段に配し、弧線文脇から横走沈



第50図 有文深鉢形土器第19群実測図（縮尺1/3）

線を伸ばしている。第47図8もほぼ同様な文様を、突起下に配すものと思える。

第50図3から18は紡錘形の文様の一部と思え、7の破片下端には2段の痕跡が見える。第50図15から17は紡錘形の文様末端の状況であり、文様を閉じることなく開放して終えている。全体として、文様に縄文を充填するものは少ない。

ト 第20群土器 (第51図1、第52図)

やや張りのある胴部が頸部でくびれて開き、口縁部を強く内弯させる土器であり、平縁と波状縁の例がある。内弯する口縁部と頸部の2文様帯構成を基本とする。口縁部文様帯に配される文様は簡素で、波状沈線、刺突、並行線などを、間隔を空けて多段に横帯施文する例が多く、波頂部に小さなJ字状の単位文を配す例もある。なお、胴部には条が縦走る縄文を施す場合が多い。本類は文様要素から以下の類に分ける。

- 1類 口縁部に波状沈線を横走させる土器。
- 2類 口縁部に刺突文列を横走させる土器。
- 3類 口縁部に小さなJ字状文などの単位文を配す土器。
- 4類 口縁部に横走沈線を配す土器。

1類 (第51図1、第52図1～31)

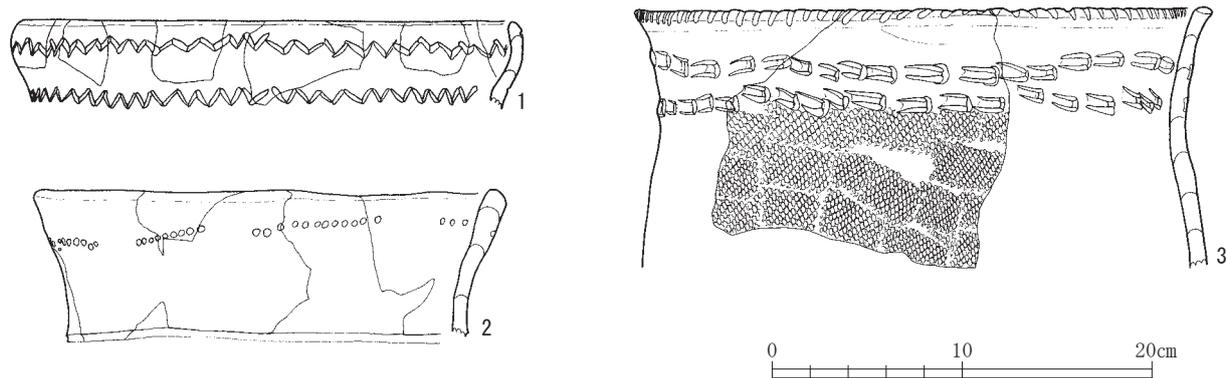
口縁部に波状沈線を横走させる土器を本類とする。

第51図1は内弯する口縁部を有し、口唇部を丸く収める。口縁部中位と頸部上縁には波状沈線各1条を配す。

第52図1は弱く内弯する口縁部片であり、口唇部を丸く収める。口縁直下に波状沈線を1条横走させ、頸部までの間を広く無文としている。2は内弯する口縁部片であり、口縁部を内側に巻込むように丸め、口端部に面をもたせる。口縁直下に波状文1条を横走させ、頸部を広く無文とする。なお、波状文は波頭状を呈する。3は波状文を半裁の管状工具の押捺で施し、均整の取れた文様に仕上げる。4は内弯し口端部に丸みをもたせる土器であり、波文の間隔が狭い。6は波状縁の口縁部片であり、波底が分銅形に張り出す。8から12は口縁部の波状文を多重に施す例であり、8は並行沈線により二重の波状文とし、9は単線引きによる。10は弱く内弯する口縁部片であり、口端部を方角状に整える。波状文は二条の単線引きで施す。11は内弯する口縁部片であり、上開きの弧状沈線を3重に横走させる。12は強く内弯する波状縁の土器であり、口縁部を内側に肥厚させる。口端部は丸く収めて波状沈線4条を施す。13から18は横走沈線と波状文を組み合わせる例である。16は緩く内弯する波状縁片であり、結節沈線3条を横走させて口縁部を画し、沈線間に波状沈線1条を加えている。15、17、18はいずれも波状縁の口縁部片であり、口縁直下に沈線1条を廻らせて上端を画し、波状文1、2条を添えている。

第52図19から23は波状文を口縁部に施し、頸部以下に縄文を配す例である。19は口縁部を弱く内弯させ、口唇部を内方に肥厚させて口端部を方角状に仕上げる。2条一組で長い波形の波状文を口縁下に配し、頸部には縄文RLを施す。20は内弯する口縁部を有し、口唇部を内側にやや肥厚させる。2条の波状文を斜行させ、地文に縄文RLを施している。21は丸山形の波頂部をもつ口縁部片であり、口縁部を緩く内弯させて口端部に面をもたせる。口縁波形に添わせ波状沈線1条を配し、沈線下には回転方向を変えた羽状縄文を施す。23は弱く内弯して開く口縁部に、沈線および波状沈線各1条を横走させる。なお、頸部には縄文を施す。

第52図24から31は、縄文の代わりに条線を施す土器である。24は内弯する口縁部を有し、口唇部を内方に肥厚させ、口端部に面をもたせる。鋭角な波状沈線2条一組を口縁下に横走させ、横走もしくは斜行する条線を施す。25は頸部から弱く内弯して開き、口縁部において内弯の度を強め、口唇部を丸く収める。口縁直下に波



第51図 有文深鉢形土器第20群、第21群実測図（縮尺1/4）

状沈線文を1条横走させ、単線引きの細沈線を垂下することで連弁様の文様に仕上げている。26は弱く内弯する口縁部を有し、口唇部をつま先状に収める。口縁直下に下向きに開く弧線による波状文1条を横走させ、頸部以下には縦走する条線を施す。27は3条程度の条線を波状沈線下に施す。28は弱く内弯する口縁部片であり、口縁下に引く波状の先端を丸めた沈線には途切れが見える。31はつま先状に仕上げた口端部に斜行する刻み目を施し、波状文には工具である繊維痕を残す。

2類（第52図32～37）

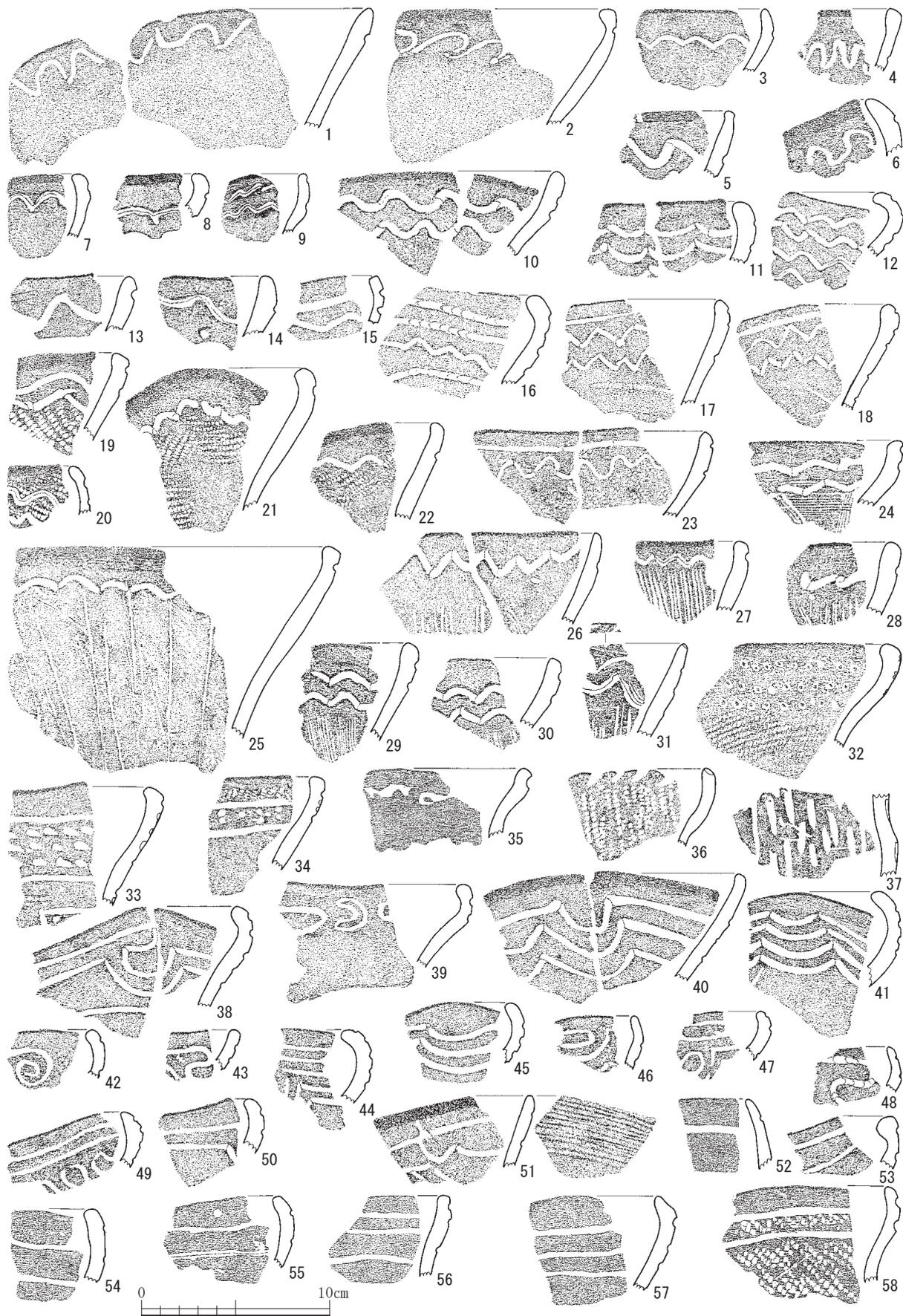
口縁部などに刺突文列を配す土器を本類とする。

第52図32は内弯する口縁部を有し、口唇部を内方に弱く肥厚させる。口縁に並行し管状刺突列3条を横走させ、頸部以下には縄文LRを施す。33は内弯する口縁部を沈線2条で幅広く画し、区画内に雨滴状の刺突列3条を横走させる。なお、胴部に矩形かと思える区画文が見え、刺突文を加えている。34も内弯する口縁部片であり、口端部に面をもたせる。沈線2条で画した区画内に、刺突文を2点、1点の順に加え、口縁下に縄文を施す。35は直立する頸部から短く内弯する口縁部に至る土器であり、口縁直下および頸部に楔状の刺突文列を横走させる。36も内弯する口縁部を有し、口端部には斜行する刻み目状の刺突を施し、胴部には条が縦走する縄文RLを施す。37は2条の垂下沈線間に、縦長の短沈線状の刺突文を充填する。

3類（第52図38～52）

口縁部に小さなJ字状文などの単位文を配す土器を本類とする。

第52図38は内弯する口縁部を有す丸山形の波状縁の土器であり、口唇部を丸く収める。頸部に1条の横走沈線を廻らせ口縁部を画す。口縁波形に合わせて2条沈線を配し、上縁沈線は波頂下で小さなJ字状の単位文を配す。下縁沈線は単位文を受けるように、U字形に窪みをもたせる。39は内弯する口縁部片であり、波底付近の破片かと思う。沈線による楕円形の区画文間に、C字状の単位文を配す。40は頸部から弱く内弯して開き、口端部に面をもたせる平縁の土器である。口縁に並行する3条沈線を横走させ、同一箇所まで3条をU字状に窪めて単位文とする。41、45は同一個体である。強く内弯する丸山形の波状縁の土器であり、波頂下において40と同様の文様を4条沈線で描く。42は内弯する口縁部に、口縁に並行する沈線1条を引き、先端を渦巻かせ単位文とする。43は38に類した文様である。44は強く内弯する土器であり、5条の沈線をU字状に窪めるかと思う。46から48は小さなJ字状の文様を単位文として配す。なお、48は結節沈線を使用する。49は波状縁の土器であり、口縁波形に合わせて横走する2条沈線下に波状沈線を横走させる。51は弱く内弯して開く波状縁の口縁部片であり、口縁下に沈線2条を横走させ、下縁沈線を上縁沈線にC字状に繋げて単位文を構成すると思われる。なお、内面には横方向の条痕調整が見える。



第52圖 有文深鉢形土器第20群実測図 (縮尺 1/3)

4類 (第52図52～58)

口縁部に横走沈線を配する土器を本類とする。

波状縁の土器(53～55)と平縁の土器(52、56～58)があり、口縁部に沈線2、3条を廻らせる。58は内弯する口縁部に、間隔を空けて沈線2条を横走させ文様帯とし、節の粗い縄文RLを施す。なお、57の内弯する口縁部をつま先状に整え内屈させる例は、第17群土器に含むべきかもしれない。

ナ 第21群土器 (第51図2、3、第53図)

やや張りのある胴部が頸部でくびれ、外反して開く土器であり、平縁と波状縁の例がある。口縁部と胴部の2文様帯構成を基本とする。口縁部文様帯に配される文様は簡素であり、波状沈線、楔形を含む刺突列、並行沈線などを、多重に間隔を空けて横帯施文する例が多い。口縁部に配した沈線を窓状の長方形区画文とし、区画間に蛇行沈線を単位文として配す例も見える。なお、外反する口縁部を断面三角形に肥厚させ、幅の狭い口縁部文様帯とする例も見える。

本群土器は口縁部の文様帯構成や文様要素により、以下の5類に分ける。

1類 口縁部に波状沈線を横走させる土器。

2類 口縁部に刺突文列を横走させる土器。

3類 口縁部に区画文や単位文を配す土器。

4類 口縁部に楔形の刺突文を配す土器。

5類 口縁部を肥厚させ断面三角形の幅の狭い文様帯とし、頸部に楔形の刺突文列や波状文を配す土器。

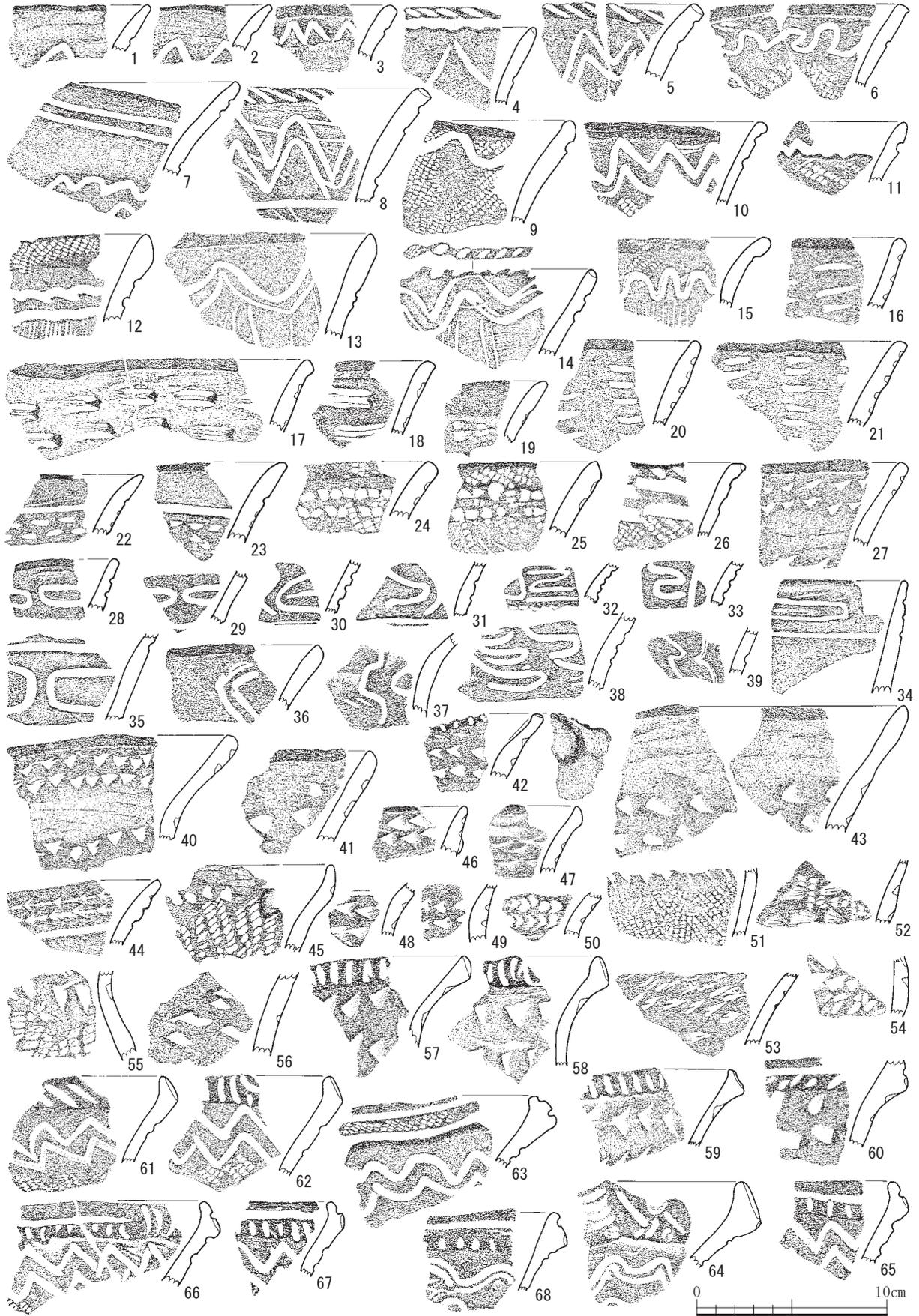
1類 (第53図1～15)

やや張りのある胴部が頸部でくびれて外反して開く土器であり、口縁部に波状沈線を横走させるものを本類とする。

第53図1から5、7、8は縄文や条線を施さない土器である。1から3は外反する口縁部に波状沈線1条を配す。4は上開きの弧線文を横位に連続させて波状とし、口端部に斜行する刻み目を施す。5、8は外反する口端部を方角状に整えて斜行する刻み目を施す。5は2条一組の波状文を配す。なお、8は沈線1条を横走させ口縁部下縁を限り、口縁部に2条一組の大柄な波状文を配す。7は波状縁の土器であり、口縁直下に2条沈線を横走させ、2条一組の波状文を配す。

第53図6、9から11は胴部に縄文を施す土器である。6は外反する平縁の土器であり、口端部を方角状に仕上げ面をもたせる。不定形な波状文1条を横走させ、胴部には縄文RLを施す。9は外反して開く波状縁の土器であり、口唇部を丸く収める。地文に縄文LRを施し、口縁に添わせて波状文1条を横走させる。10は口縁部を外方に反らせ、口唇部を玉縁状に仕上げる。波状文2条を横走させ、胴部に縄文を施す。11は外反する平縁の土器であり、口唇部をつま先状に収める。口縁下に細かい波状文を横走させ、縄文LRを施す。

第53図12から15は条線を施す土器である。12は外反する平縁の土器であり、口縁部を外方に肥厚させ、口端部を丸く収める。肥厚する口唇部に縄文LRを施し、口縁部を横走する2条の波状文下に縦位の条線を施す。13は外反する平縁の土器であり、口唇部をつま先状に仕上げる。2条一組の大柄な波状文を口縁下に配し、縦位の粗い条線を施す。14は直線的に開く口縁部片であり、口端部に斜行する刻み目を施す。また、口縁下には波幅の広い2条一組の波状文を施し、2から3条一組の条線文を縦位に施す。15は強く外反する口縁部片であり、口唇部を玉縁状に仕上げる。波状文1条を横走させ、口端部および波状文間に縄文を施し、波状文下には縦位の条線文を施す。



第53圖 有文深鉢形土器第21群実測図 (縮尺1/3)

2類 (第51図2、3、第53図16~26)

口縁部に横走する刺突文列を配す土器であり、刺突の形状にはバリエーションが多い。また、沈線区画内に刺突文を充填するものや、刺突文列を多重に横走させるものもある。

第51図2は頸部から緩く外反して開く平縁の土器であり、口縁部を弱く肥厚させて、口端部に面をもたせる。胴部上縁を横走する沈線1条で画し、口縁部には10個内外を一組とする、円形刺突文を短く列状に横走させる。

第51図3はやや張りのある胴部がくびれて外反して開き、口縁に至る平縁の土器である。口端部を方角状とし斜行する刻み目を施す。口縁部には大型のコの字状の刺突文列を2重に施し文様帯とする。胴部には節の大きな斜縄文LRを施す。

第53図16は外反する口縁部に、横長の三角形状刺突文列を3重に施す。17は外反する口縁部を有し、口端部を方角状に仕上げる。口縁下にはコの字状の刺突文列2条を横走させる。18も同様の破片であり、刺突内に工具の繊維痕が見える。19も同様のコの字状の刺突であるが、先端部が強く押されて2個一対の刺突が、2列の刺突のように見える。20、21は外反する口縁部に、短沈線様の横長の刺突文を多重に配す例である。22は大きく外反して開く平縁の土器であり、口唇部をつま先状に仕上げる。口縁下に沈線2条を横走させ、横長の雨滴状刺突文を充填する。23は口縁下を横走する沈線を文様区画の上縁とすると思え、横長のD字状刺突文列を横走、斜行させる。24は外反する口縁部をもち、口端部に面をもたせる。口端部に縄文を施すほか、地文として縄文RLを施し、D字状の刺突文列を2重に横走させる。25は外反する口端部を方角状に整え、口縁部にD字状の刺突文列を2条を横走させる。口端部に縄文を施すほか、地文として縄文を施す。26は外反する口縁部を外方に伸ばして玉縁状とする。口端部に斜行する刻み目文を施し、口縁部に2条の短沈線列を引いて、地文として縄文RLを施す。

3類 (第53図28~34)

口縁部に沈線による区画文や単位文を配すものを本類とする。

第53図28、29、34、35は楕円もしくは隅丸長方形の区画文を口縁部に配す例であり、29、35は区画文の上下を横走沈線で画し、28、34は下縁を横走沈線で画す。28、34は外反する口縁部を有し、口端部を方角状に仕上げる。口縁部を横走沈線1条で画し、口端部との間に横長の楕円形や方角状の区画文を配す。30から33は区画文間に単位文として縦位の蛇行線文やS字状文を配すものであり、30、31は縦位の弧線文で区画し、32、33は方形区画文を配す。また、単位文下にも横走短沈線を施す。なお、32は破片下端に刺突文列を加える。36から39は単位文と思える縦位の蛇行沈線を口縁部に配する外反器形の土器である。

4類 (第53図27、40~56)

口縁部に楔形の刺突文列を配す土器を本類とする。

第53図27は頸部でくびれ、口縁部を外反させる平縁の土器であり、口縁直下に楔形の刺突文列2条を横走させ、間隔を空けてくびれ部に1条を横走させる。40は頸部でくびれて外反する口縁部に至る平縁の土器であり、口端部に面をもたせる。口縁直下に楔形の刺突文列2条一組を横走させ、くびれ部にも楔形の刺突文列2条一組を波状に施す。41は口端部に面をもたせ、口縁下に浅く楔形の刺突文列2条を施す。42は外反する口縁部内面に円形の浅い窪みを加え突起上に仕上げ、口端部に刻み目を施す。外面の口縁下には楔形の刺突文列2条を横走させる。43は外反する口縁部片であり、口縁下に間隔を空けて大ぶりの楔形刺突文を2列横走させる。44は波状を呈する口縁部片であり、口唇部をつま先状とする。口縁波形に合わせて沈線3条を横走させ、うち上縁の2条には楔形の刺突文を加えている。45は外反した後口縁部を直立させる平縁の土器であり、口唇部をつま先状に仕上げる。口縁下に配した浅皿状の円文に向かい、D字形の刺突文列1条を横走させる。なお、地文

として条が縦走する縄文LRを施す。46も外反する頸部から直立する口縁部に至る土器であり、屈曲部と口唇部間に楔形の刺突文列2条を横走させる。47は外反する口縁部を外方に肥厚させ、3条の楔形刺突文列を横走させる。48から56は胴部片であり、52はD字に近い楔形刺突文であり、工具の繊維痕を刺突内に残す。53も楔形の刺突文内に工具の繊維痕を残す。55は大ぶりで縦長の楔形刺突文を配し、刺突下に条が縦走する縄文LRを施す。56は菱形状の楔形刺突文を施す。

5類 (第53図57～68)

口縁部を肥厚させ断面三角形の幅の狭い文様帯とし、頸部に楔形の刺突文や波状文を配すものを本類とする。第22群に含むべきと思うが、波状文や楔形の刺突文列の流れを見るため本群に留めた。

第53図57から59は、肥厚し断面三角形とする口縁部に、縦位の刻み目文を施す小波状縁の土器である。口縁部にはやや大柄の楔形刺突文列を2条横走させる。59は口端部に単位文かと思えるC字状の文様が見える。60は口唇部を欠くものの、外反し肥厚させた口縁部に沈線1条を横走させ、口縁部下縁外側に斜行する刻み目を施す。口縁下にはコの字状の刺突文列2条を横走させる。

61は肥厚し断面三角形の口縁部に、斜行する短沈線を施す幅の狭い文様帯とする。口縁下には粗く波状文を2条横走させ縄文を施す。62は肥厚し断面三角形の口縁部を、幅の狭い口縁部文様帯とする。口縁部には縦位の短沈線のほか、単位文と思えるU字状文等も見える。口縁下には2条一組の波状文を横走させ縄文を施す。63は外反する口縁部を肥厚させ、口端部を幅の狭い文様帯とする波状縁の土器である。口縁部には2条沈線を横走させ、沈線間に縄文LRを充填し文様帯とする。口縁下にはコンパス文に類似する波状文を描く。64は双頭山形の突起を配し、口縁部下縁外側に刻み目を施す。口縁下には波状文2条を横走させる。65から67は同一個体であり、外反する口縁部を肥厚させ断面三角形とし、幅の狭い文様帯とする。口縁部文様帯には重弧線文による単位文のほか、沈線1条を横走させ口縁部下縁外側に刻み目を施す。口縁下には波状文2条を横走させ縄文を施す。

ニ 第22群土器 (第54図、第55図1～10、12、第56図～第64図)

やや張りのある胴部が頸部でくびれ、内弯気味に開いて口縁部に至るキャリパー器形の土器を基本とする。なお、頸部から外反して開き、肥厚する断面三角形の口縁部に至る土器も見える。また、口縁部内面は第19群土器に似て、スロープ状に仕上げるものが多い。

キャリパー器形の土器では、口縁部文様帯と胴部文様帯の2文様帯構成を基本とし、器面のほぼ全てに空白部を残さず文様を施し、施文夥多の印象を与える。

また、肥厚させ断面三角形の口縁部を幅の狭い文様帯とし、頸部以下に縄文を施す土器や、頸部を無文帯とし、胴部上半に多重沈線による文様帯を配す例も見える。なお、いずれの土器でも平縁と、把手や突起を加えて波状縁とする例があり、大型の橋上把手を施す例や三方に透かし孔をもつ例もある。

口縁部文様帯には楔形などの刺突を加えた、並行線文や横長の楕円文を配し、波頂部において入字状のくい違いを持たせて単位文とするなど、本群に特徴的な手法を見ることができる。

胴部文様帯は垂下沈線で縦位区画し、各区画内を斜行沈線で小分割して扇形文などを充填する例が特徴的である。また、頸部や胴部の文様帯には、多重沈線で方形文などの文様を連続横帯施文する例も見える。

さらに、胴部文様帯の上下を沈線帯で限り横帯する文様帯とし、横帯内を垂下沈線で縦位分割して区画内部を斜行沈線で再分割した上で、扇形文などを充填する例も見える。

文様は多重に施す例が多く、並行線文、方形文、楕円文、三角文などの基本モチーフと、充填文として扇形文、

渦巻文、蛇行（波状）文などがある。各文様には楔形やコの字状の刺突文、結節沈線文、沈線内刺突文のほか、沈線末端刺突や口縁部の単位文周辺への大型円形刺突（大型円孔）なども特徴的である。

なお、充填文として節の細かい斜縄文の使用が見えるが、胴部には大粒の節をもち、条が縦走もしくは横走する縄文を使用する点も特徴的である。

本群土器は復元実測を施した土器以外に、文様の全容を知れる例は少ないため、主に口頸部の文様帯構成および配置で大別し、口縁部形態および文様構成により細別を行い、文様要素により細別を補った。

- 1類 頸部から外反して開いて短く内弯する口縁部に至る土器と、頸部から外反して開き断面三角形状に肥厚して口縁部に至る土器があり、いずれも幅の狭い口縁部を文様帯とする。口縁部文様帯直下から胴部に亘り、幅広く胴部文様帯を配す土器。
- 2類 器形は1類と同様とするが、頸部と胴部の境を沈線で限り、頸部を広く無文とする土器。
- 3類 器形は1、2類と同様とするが、頸部以下に広く縄文を施す土器。
- 4類 外反して開く口縁部を外方に肥厚させ断面三角形状に仕上げ、口縁部に幅の狭い文様帯を配し、胴部に充填縄文を加えた縦位区画の文様帯を配す土器。
- 5類 胴部文様が不明のため1類から4類に明確に分類できないものや、隆帯を加える土器。
- 6類 本群土器の胴部片を一括する。
- 7類 本群土器の把手、突起を一括する。

1類（第54図1～3、第56図、第57図1～42）

頸部から外反して開いて短く内弯する口縁部に至る土器と、頸部から外反して開いて肥厚して断面三角形状の口縁部に至る土器がある。幅の狭い口縁部を文様帯とする土器であり、口縁部文様帯直下から胴部に亘り、幅広く胴部文様帯を配す土器を本類とする。

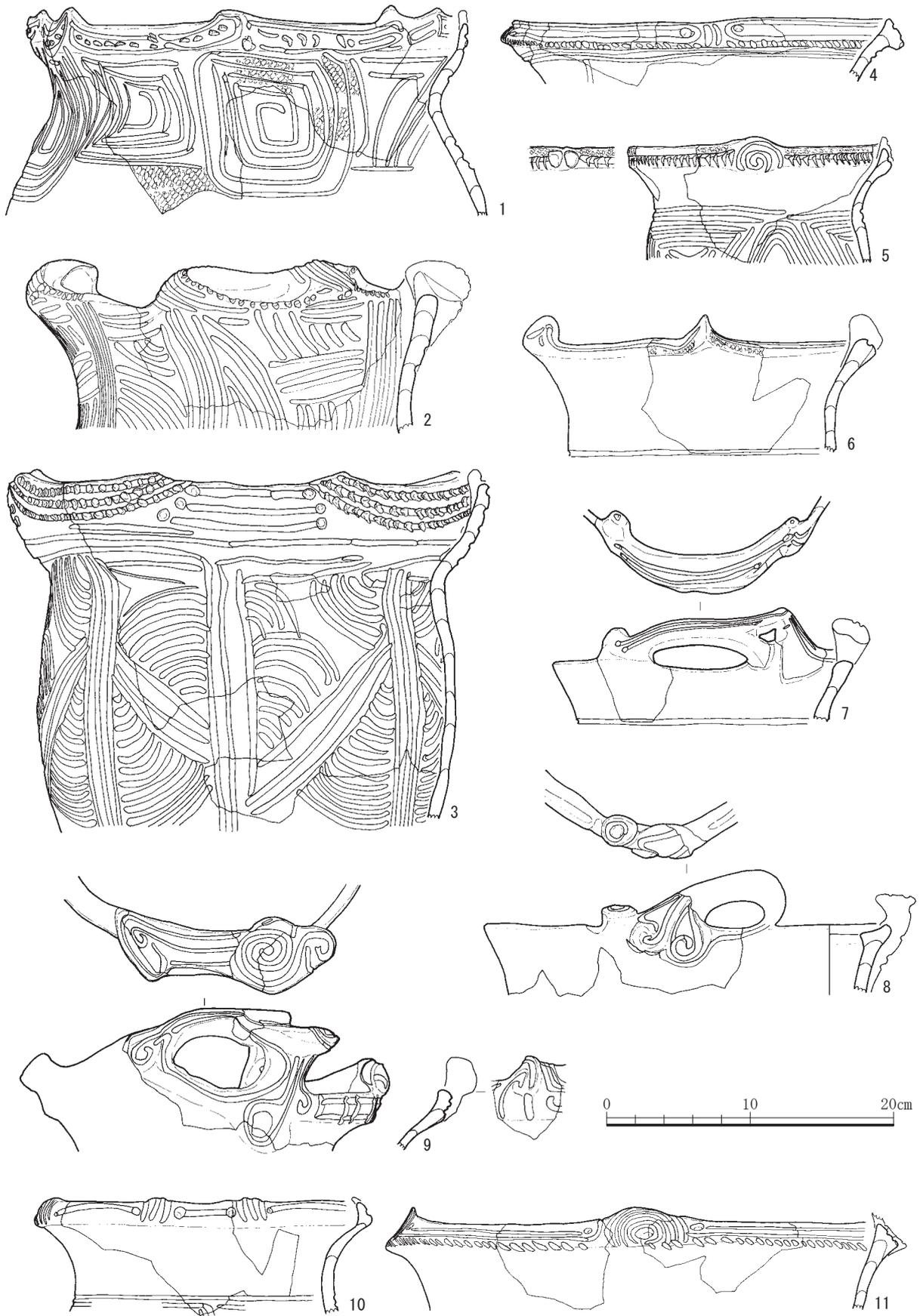
本類は文様要素から、楔形の連続刺突文を施すもの（A種）、結節沈線および沈線内に刺突を加えるもの（B種）、沈線により文様を描くもの（C種）、口縁部に配した沈線区画内に刺突文もしくは短沈線を充填するもの（D種）、口縁部文様帯下縁外側に刻み目を加えるもの（E種）、肥厚し直立する口縁部に短沈線を加えるもの（F種）に分ける。

A種（第54図3、第56図1～4）

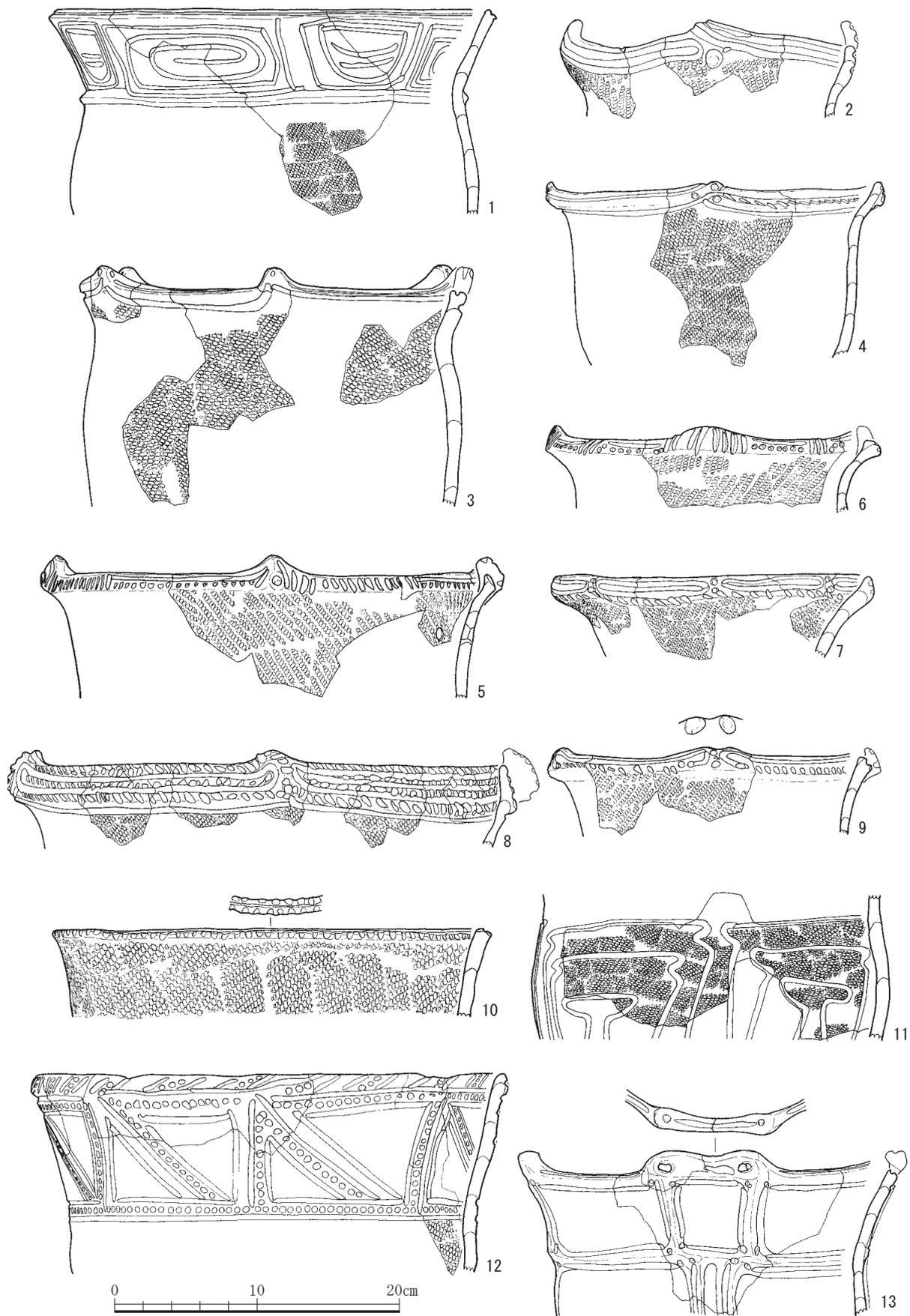
やや張りのある胴部が頸部でくびれ、内弯気味に開いて口縁部に至るキャリパー器形の土器である。口縁部文様帯と胴部文様帯の2文様帯構成を基本とし、器面のほぼ全てに空白部を残さず文様を施すものを本種とする。楔形の連続刺突文を文様に加える例もある。

第54図3はやや張りのある胴部が頸部でくびれ、大きく内弯して開き口縁部に至る土器である。口縁部に山形波状縁の中央部を浅く窪めた、双頭の山形突起4単位を配する。双頭山形の波頂部を片掛けして巻く沈線3条を、口縁波形に合わせて施し、沈線内に円形および楔形の刺突文を加える。波頂下には両端に大型の円形刺突を加えた3条の横走沈線を施し口縁部文様帯とする。頸部には沈線1条を引き文様帯の上端を画し、3条一組の垂下沈線で器面を4単位に縦位分割する。また、縦位分割沈線上端に2条の横走沈線を加え、縦位分割沈線中間で再度3条沈線を垂下させ、最終的に器面を8単位の矩形に分割する。なお、縦位分割沈線の末端は開放するものと思える。さらに、区画中段に3条一組の斜行沈線を方向を交互に代えて施し、縦位区画内を上下に2分する。各小区画内には、区画隅に向かう多重沈線による扇形文を充填する。

第56図1から3は同一個体の口縁部片であり、直立気味の頸部から短く内弯して開いて面的に肥厚させた口縁部に至る。口端部には斜行する刻み目を施す。2の弧状沈線中心には貫通する円孔が穿たれ、両側の対向す



第54圖 有文深鉢形土器第22群実測図 (縮尺1/4)



第55図 有文深鉢形土器第22群、第25群、第26群実測図（縮尺1/4）



第56圖 有文深鉢形土器第22群実測図 (縮尺1/3)

る弧状沈線2条が対となり単位文を構成する。単位文の左右から横走沈線2条を伸ばし、下縁沈線の先端には刺突文を加える。また、下縁沈線には斜行する刺突文を加えている。口縁直下には楔形の刺突文列3条を接続して施し横走帯とする。4はやや張りのある胴部がくびれ、内弯して短く立ち上がって山形小突起を加えた口縁部に至る。楔形刺突文を連続押し引きする沈線2条を、山形小突起を巻いて片掛けし、隣接する突起下で末端をU字状に繋げ、突起下の沈線間に大型の円孔1対を斜めに配す。口縁部直下の横走沈線1条で胴部文様帯上端を画し、波頂下で垂下する沈線1条で胴部文様帯を縦位に分割する。各区画内には縦位、横位の沈線を多重に充填する。なお、胴部の沈線は角押しの結節沈線の一部を使用する。

B種 (第56図5～34)

結節沈線および刺突を加えた沈線で文様を描くものを本種とする。

第56図5から7、12は同一個体の口縁部片であり、直立する頸部から弱く開き、短く立ち上がって口縁部に至る。口縁部下縁を肥厚させ口縁部に面をもたせて山形小突起を配す(7、12)。口縁部には山形突起部を片掛けに巻く、刺突を加えた沈線2条を横走させ、片掛け沈線と横走沈線の接合部で斜行沈線を加えている。なお、口端部には斜行する刻み目を加える。口縁直下に沈線1条を横走させ胴部文様帯の上端を限り、1、2条の垂下沈線で胴部を縦位に分割する。胴部の各区画内の状況は、4に似たものかと思える。8は外反する口縁部片であり、鏝状の隆帯を横走させて口縁部文様帯下縁を限り、隆帯に添わせてD字状の刺突を加えた沈線1条を横走させる。なお、隆帯下縁には縄文を施す。また、胴部には斜行する刺突を加えた沈線2条を下すが、詳細は不明である。9は外反する口縁部を外方に肥厚させ、断面三角形の幅の狭い文様帯とする。口端部外側に斜行する刻み目を施し、口縁部にはD字状の刺突を加えた押し引き沈線2条を横走させる。口縁部直下には沈線1条を横走させ胴部上端を限り、垂下沈線1条で胴部文様帯を縦位分割する。区画内には縦位沈線や扇形文を充填する。10は内弯する口縁部片であり、口縁下に沈線2条を横走させて文様帯の上限とする。文様帯内にはC字状の刺突を加えた沈線を、横走もしくは斜行させるが文様構成は不明である。11は直立する胴部が頸部でくびれて外反して開く口縁部に至る。口縁部には幅広の沈線内に、細かな篋状工具による直線的な刻みを密に施す。胴部上端を横走沈線で画し、区画内に扇形文を描くと見える。13は内弯する口縁部を肥厚させて断面三角形とし、小突起を加える。口縁部にはD字状の刺突をもつ結節沈線をつま先状に折り返し、区画文としている。口縁下の肥厚部に添う沈線1条を、突起下で垂下させている。14も同様の破片であり、結節沈線をつま先状に折り返して区画文としている。15、16は同一個体である。弱く外傾する胴部から開き、口縁部全体を外方に肥厚させ山形突起を配す。口縁部内面にはなぞり状の幅の広い沈線を廻らせる。山形突起頂部には刺突文を加える。山形突起を片掛けして巻く円形刺突を加えた結節沈線1条を施し、隣接する突起下で末端をしの字状に丸めるものと思える。なお、下縁には末端に刺突を加えた結節沈線1条を添わせるが、途中で途切れる(16)。突起下の沈線集合部にやや大型の円形刺突一対を並置する。胴部上端全体を限る沈線は見え、長方形の区画沈線で胴部文様帯を縦位区画するものと思える。区画内には先端をしの字に丸めたL字形文や縦位や横位の沈線、弧線文などを充填し、波頂下の胴部文様帯上縁部に大型の円形刺突文を加えている。なお、沈線は部分的に結節としている。17は弱く内弯して開く口縁部に山形突起を配す。突起下には刺突文列を下し、交点部から口端部に斜行する刻み目を施す。口縁部直下に横走する沈線4条を施し、上端の沈線は押し引きとする。18は口縁部全体を外方に肥厚させ、弱く内弯して開く口縁部片であり、山形突起を口縁部に配す。突起下にはやや大型の円形刺突2点を縦位に配し、口縁に添い楔形の刺突を加えた沈線1条を施し口縁部文様帯とする。口縁部直下にはやや幅の広い沈線1条を横走させる。19は頸部から弱く内弯して開き、口縁部を外方に肥厚して直立させ、山形突起を加える土器である。突起部を巻き片掛けする刺突を加えた沈線1条を配し、沈線下縁に斜行

する刻み目を添わせる。胴部上縁には3条の横走沈線を配し文様帯を画す。突起下で2条は途切れ、同所から斜行沈線3条を下す。20は外反して開く口縁部を外方に肥厚させて断面三角形に仕上げる。口縁部には大小の円形刺突を加え、口端部より斜行する結節沈線2条を施す。胴部には垂下沈線1条のほか縄文を施す。21、22は口縁部全体を肥厚させ、口端部に刻み目を施す。21は単位文の外縁と見える弧線文から結節沈線2条を横走させ、上縁沈線末端に刺突を加える。22は口縁部文様帯の上下を沈線と結節沈線で画し、区画内に3点の円形刺突を並べる。なお、外側2点は貫通する。23は口縁部を外方に肥厚させ断面三角形とする波状口縁片であり、刺突を加えた沈線1条が突起部を巻き片掛けする。なお、突起下には円形刺突を加える。また、胴部上端を横走沈線1条で画す。24も口縁部を外方に肥厚させて断面三角形とする、弱く内弯する口縁部片である。口縁部には円形刺突を加えた沈線1条を横走させ、下縁に刻み目を施す。胴部上端にはやや幅の広い沈線2条を横走させる。25も同様の口縁部片であり、C字形の刺突を加えた沈線1条を口縁部に配す。胴部上端を横走沈線1条で画し、垂下沈線で縦位分割した区画上端を横走沈線で閉じて扇形文と思える曲線文を充填している。26も同様の口縁部形態をもつ。円形刺突を加えた沈線を横走させ、沈線と文様帯下縁間に斜行する短沈線を加える。胴部上縁は2条沈線で画す。27は山形突起を加えた口縁部片であり、突起を巻き片掛けする3条沈線を口縁部に施す。なお、両側沈線には刺突文を加え、突起下に大型の浅皿状の大型刺突を1点配す。28は内弯する口縁部を外方に肥厚させ、幅狭く面をもたせて口縁部とする波頂部付近の破片である。口縁部には刺突を加えた沈線により三角形の区画文を配し、区画内に縄文LRを充填する。胴部上縁を口縁部の肥厚に添わせた沈線2条で画し、短沈線で梯子状に区切った沈線3条を垂下させている。29は肥厚し内弯する口縁部に、28と同様の単位文を配す波頂部付近の破片であり、区画内には斜行する短沈線を充填する。胴部には横走沈線2条が見える。30は肥厚し内弯する口縁部に、中央を窪ませた方角状の突起を配す。突起中央の窪みには刺突文を縦位に2点加える。口縁部には刺突を加えた沈線1条を横走させ、沈線下縁に刻み目を施す。また、胴部上縁を横走沈線で画す。31は直立気味の頸部から肥厚する口縁部に至る波頂部付近の破片であり、口縁部に配した円孔の跡が確認できる。口端部に斜行する刻み目を施し、突起部を巻き片掛けする沈線1条を配す。また、突起下には弧状沈線3条を加え、やや大型の円形刺突2点を加える。胴部上縁には斜行する刻み目を加えた沈線1条を横走させている。32は肥厚して内折する口縁部片であり、口端部を欠く。口縁部には刺突を加えた沈線を横走させ、胴部上縁に沈線2条を横走させる。33は外反する胴部から、短く内弯する口縁部に至る波状縁の土器であり、口縁部に刺突を加えた沈線1条を横走させる。胴部上縁を横走沈線1条で画し、区画内に扇形文を充填する。34は直線的に外反して開き、口縁部下縁を肥厚させて直立する口縁部に至る、山形突起をもつ土器である。突起頂部に刺突文1点を加え、口端部には斜行する刻み目を施す。突起下にC字状の沈線を二重に施し、上縁沈線を左右に伸ばして口縁下に沈線1条を加える。先端を丸めたしの字状の刺突を加える沈線と、C字状沈線を巴状に絡めて単位文とする。突起下の胴部には、U字状に折り返し垂下する沈線を中央に配し、胴部を縦位分割する。刺突を加えた沈線が破片右端にも見え、区画文となると思える。なお、胴部上端を画す沈線等は見えず、口縁部下端に生じた稜をこれに代えているものと思える。

C種 (第54図2、第56図35～53)

沈線で主文様を描くものを本種とする。

第54図2は外反する口縁部に大型の把手4単位を配した土器であり、外面形は双頭山形を呈す。双頭間の谷部中央から左山の内側面にかけて浅皿状に幅広く窪め、左山の内側面に大型の円孔を加える。右山の外側面には頂部から渦巻く隆帯を伸ばし、隆帯側縁をなぞり状に窪ませている。左側の山を巻き片掛けする沈線4条のうち1条を、胴部上縁に廻らせ胴部の上端を画す。さらに、右側の山の頂部を巻き片掛けする弧線4条を施す。

なお、右側の把手部外面から左側の山の頂部にかけて、および右側の山の頂部から隆帯末端には、刻み目を加えている。胴部上端を画す沈線には、右山の下で1条、左山の下で2条の沈線を加える。さらに、両方の山部付近から垂下する4条の沈線で胴部を縦位分割し、垂下沈線頂部より斜行する沈線4条を加えて、胴部を小分割すると思える。区画中位に配した4条の横走沈線を挟み、方向を異にする扇形文を充填している。

第56図35は口縁部を面状に肥厚させ弱く内弯する土器であり、尖った山形突起を施す。口縁部には山形突起を巻くように3条沈線を片掛けする。胴部上縁を画す沈線1条を横走させ、三角形の区画文を多重沈線で配している。36は口縁部で外反の度を強め、口端を方角状に仕上げ文様帯とする波底部片と思える。口縁部には刺突文を囲む縦位の弧線文2条を配して単位文とし、口縁部に向かい切り上がる沈線1条と、口端部外側に刻み目を施す。胴部には上端を画す2条沈線を波底の単位文部で途切らせ、三角形の区画文を配すかと思える。37は外反する口縁部を外方に肥厚させ断面三角形の口縁部とし、沈線1条を横走させ口端部外側に刻み目を施す。胴部上端を途切れる横走沈線で画し、多条の斜行沈線による鋸歯状の文様を配す。38は口縁部を肥厚させ断面三角形状に仕上げ、沈線2条を配して口縁部文様帯とする。口縁部際に配した横走沈線により胴部上端を画し、垂下沈線で胴部を縦位分割する。さらに、斜行沈線2条を加え胴部文様帯を小分割し、多重沈線による扇形文を充填する。39は内弯する口縁部に山形突起を加えた波頂部片であり、波頂下に浅い円文を配し単位文とする。しの字状に単位文を囲む沈線1条と、単位文から始まる2条沈線を横走させ、口縁部文様帯とする。胴部には波頂下に頂点を持つ鋸歯文を配す。40は外反する口縁部を肥厚させ面をもたせる。単位文と思える弧線文を加え、口唇部側に折れる沈線1条を配して文様帯とする。なお、口端部には斜行する刻み目を施す。口縁部直下には沈線1条を交えた横U字状の沈線区画を配す。41、42は外反する口縁部を肥厚させ面をもたせる波状縁の土器であり、42は左端に突起等を配す。口縁部には沈線2条を横走させ、胴部には逆三角形状の区画文を配すと思える。43は直立する胴部から、内弯しつつ開いて口縁部に至る土器である。口端部に斜行する刻み目を施し、単位文となる楕円形の沈線文様と、これから伸びる2条沈線を横走させる。胴部上縁に沈線4条を横走させる。44は口縁部を断面三角形状に肥厚させ文様帯とする波状口縁の土器であり、口縁部を横断する山形の橋上把手を配す。口縁部には把手部を貫通する沈線1条を横走させる。把手下に配した垂下沈線で胴部を縦位分割するほか、区画文かと思えるL字状沈線や、横走沈線、斜行沈線などを配す。45は外反して開く頸部から、外方に強く肥厚させ断面三角形状に面をもたせた口縁部に至る。波頂部に8字状の貼付文を配する波状縁の土器であり、8字中央に刺突を加えるほか、下縁に沈線を添わせている。また、波頂部に向かう横U字状の沈線屈曲部に刺突1点を加え、口縁部下縁外側に配した沈線1条を含めて口縁部文様帯とする。胴部には間隔の空いた斜行沈線2条を下す。46は外方に大きく肥厚させ、上面に面をもたせた波状縁の口縁部片である。口端部と胴部上端を画す横走沈線間を口縁部文様帯とすると思え、末端に刺突を加えた沈線2条を配す。なお、胴部には2条の斜行沈線が見える。47は外反する胴部から、内方に肥厚させ面をもたせた口縁部に至る土器であり、口縁部を縦断する楕円形の突起を配す。突起上面を浅皿状に窪め、松葉状に沈線2条を施す。胴部上縁には沈線2条を横走させる。48は内弯する波頂部片と思え、三角形状の区画内側に円文を施す。49は外反する口縁部を外方に肥厚させ断面三角形状の口縁部とし、山形小突起を配す土器である。突起頂部に浅く円孔を加え、突起両側には末端に刺突を加えた沈線を引き口縁部文様帯とする。波頂下には3条沈線を垂下させる。50は45と同一個体と思え、外反する口縁部を外方に肥厚させ断面三角形状の口縁部とし、沈線2条を横走させ文様帯とする。胴部には間隔を空けて沈線2条を横走させる。51は内弯する口縁部を外方に肥厚させ、沈線1条を横走させて口縁部文様とする。胴部上端には沈線2条を横走させる。52は外反する口縁部を内方に肥厚させ、面をもたせた口縁部に沈線1条を配す。胴部上端にも沈線1条を横走させる。53は外反気味の胴部から内弯して開き口縁



第57圖 有文深鉢形土器第22群実測図 (縮尺1/3)

部に至る土器であり、口端部に沈線1条を廻らす。口縁部文様帯を欠く土器と思え、胴部上端を画す沈線を口縁下に横走させている。口縁部より垂下する2条沈線で胴部を分割する。区画文内には、垂下文から派生する弧線文や横走線文、先端を渦巻かせる斜行沈線文のほか、L字状の沈線文などを、2条一組の沈線で描く。

D種 (第54図1、第55図12、第57図12~15)

口縁部に配した沈線区画内に、刺突文もしくは短沈線を充填するものを本種とする。

第54図1は大きく張った胴部が頸部で強くくびれ、内弯しつつ開いて直立する口縁部に至る土器である。口縁部には単独の山形小突起2単位と双頭山形の突起4単位とを配す。単独の山形小突起下の口縁部文様帯下縁には、やや大型の円孔を施して左右に区画文を分ける。左側の区画文は楕円形とし、区画内に刺突文を充填する。なお、波底部では刺突文を縦位に2点加え二分している。右側の区画文は単独突起側で上縁沈線を雷文状に巻込ませ、双頭突起側をしの字状に丸める。下縁沈線は雷文脇から伸ばし、双頭突起側でU字状に折り返す。区画内には縦位の弧状短沈線を加え、波底部には刺突文(一部では大型の円孔)を加えている。また、双頭山形の突起間には、短い刺突文を充填する楕円形もしくは横U字状区画文を口縁波形に合わせて施している。なお、口縁部文様帯のモチーフは、単位ごとにばらつきが多い。胴部には多重沈線による渦巻文を方形、鼓形に組み合わせ接続して配して横帯する文様帯を構成し、一部に縄文を施す。なお、胴部文様帯の上下縁を限る沈線は認められない。胴部には地文として節の大きな斜縄文RLを施す。

第55図12は口縁部が弱く外反して開く土器であり、口縁部と頸部の文様帯2帯で構成する。頸部文様帯の上下縁を横走沈線1条で画す。頸部文様帯内は縦走沈線で縦位分割し、さらに斜行沈線で三角形の小区画に分割し、区画内に三角文を充填する。沈線間に充填する刺突は、区画ごとに位置を変更させている。口縁部には2条沈線と1条の刺突文列を短く斜行させ文様帯とする。胴部は縄文RLを施す縄文帯としている。

第57図12、13は同一個体で、やや肥厚する口縁部が外反して開く平縁の土器である。口縁直下には斜行短沈線間に刺突文を加え、口縁部に刺突文を加えた縦位、斜行の2条沈線を引く。14は口縁部を断面三角形状に肥厚させ幅の狭い文様帯とする。口縁部に人字状に切り合う刺突を加えた沈線を施し、胴部には斜行沈線間に刺突を施した鋸歯文を配す。15は外反する口縁部を外方に肥厚させ断面三角形状とし、2条沈線間にC字状の刺突文を加え文様帯とする。胴部には垂下する2条沈線と、鍵の手に曲がる沈線を配して沈線間に刺突文を充填する。

E種 (第54図4、第57図1~11、16~37、40)

口縁部文様帯下縁外側に刻み目を加えるものを本種とする。

第54図4は外反する口縁部を外方に肥厚させ、断面三角形状に仕上げて幅の狭い文様帯とする。楕円形の区画文内の両端に刺突文を加え、区画文間には2条の短い弧線文を配し単位文とする。また、口縁部下端外側には斜行する刻み目を施す。頸部上端を2条沈線で画し、垂下する沈線1条を施す。

第57図1、2は同一個体であり、内弯、肥厚する口縁部に、2条沈線を引き口縁部下縁に斜行する刻み目を施す。また、口端部にも斜行する刻み目を施す。胴部上縁を途切れる横走沈線で画し、横走沈線および斜行沈線で三角文かと思える文様を配す。3は波状縁の口縁部片であり、口縁部を外方に肥厚させ断面三角形状とし、沈線1条を横走させ口端部に縄文を施す。なお、口縁部下縁外側の刻み目は波頂部付近に止まると見える。胴部には大柄の波状文を三角形状に曲げ、周囲を三角文で囲む。4は山形小突起を加える土器であり、内弯する口縁部を外方に肥厚させ文様帯とする。波頂下に円形刺突2点を縦位に施し、下縁に斜行刻みを部分的に加える。末端に刺突を加えた横U字状の区画文を口縁部に配し、区画内には斜行短沈線を充填する。胴部上端を沈線1条で画し、垂下沈線で胴部を縦位分割すると思える。なお、横走沈線からしの字状の沈線を波頂下に伸ばす。5は外反する口縁部を外方に弱く肥厚させて口縁部に面をもたせ、横走する沈線1条と口縁部下縁外側の

斜行刻みで文様帯とする。胴部には横走沈線2条を配し、下縁沈線から沈線を垂下させる。6は外反する口縁部を外方に肥厚させ口端部に刻みを施す。口縁部には楕円形の区画文を配し、下縁沈線に刻み目を加え文様帯とする。胴部には横走や斜行する沈線を三角形状に施す。7も同様の器形をもち、口縁部には沈線1条と斜行する刻み目を施し文様帯とする。胴部上端を横走沈線1条で画し、垂下沈線1条で胴部文様帯を縦位分割する。各々に沈線1条を加えて鍵の手状の区画文などを描く。8は内弯する口縁部を肥厚させ、口端部に斜行する刻みを施す波底部片である。円孔の単位文から3条の沈線を横走させ、中央沈線下には斜行刻みを加える。横走、垂下する沈線で文様帯を分割し、区画内に斜行沈線を施す。9は弱く内弯する口縁部を肥厚させ、口唇部に斜行する刻み目を施す。2条沈線を横走させ沈線下縁に刻み目を加え口縁部文様帯とする。胴部上端を横走沈線2条で画し、斜行沈線を施す。10は内弯する口縁部外面を肥厚させ口唇部に刻みを施す。単位文となる弧状沈線2条を配す。口縁部には沈線2条を横走させ、上縁沈線末端には刺突を加え、下縁沈線と口縁部下縁外側間に刻み目を加える。なお、胴部上端を横走沈線で画す。11は内弯する口縁部を肥厚させ、巴状に絡まる2条沈線を単位文として配す。末端に刺突を加えた沈線で文様帯の上下を画し、口端部および文様帯下縁に刻み目を施す。胴部には横走沈線1条と斜行沈線2条を施す。16は口縁部を断面三角形状に外方へ肥厚させ、2条沈線間に刺突を加えるほか、口縁部下縁外側に刻み目を施す。胴部には斜行する沈線3条を施す。17は内弯する口縁部を外方に肥厚させ断面三角形状とし、横走する沈線1条と口縁部下縁外側に加えた刺突で文様帯を構成する。胴部上縁を横走沈線で画し、円形刺突1点を加えている。18は外反する口縁部を断面三角形状に肥厚させる波状縁片である。波頂下には貫通する円孔を加え単位文とし、弧状沈線1条を添わせる。口縁波形に合わせて刻みを加えた沈線1条を引き、単位文際に円形刺突1点を施す。胴部上縁には沈線2条を横走させる。19は口縁部を断面三角形状に肥厚させ、山形突起を加える。突起下には貫通する円孔を配し、円孔周辺に隆帯を施す。隆帯内側に沈線1条を廻らせるほか、隆帯上に刻みを施す。末端に刺突を加えた沈線1条を横走させ、口縁部下縁外側に刻み目を施す。なお、胴部上縁を沈線1条で画す。20は内弯する口縁部下縁を肥厚させ、C字状の隆帯を加えて突起とする。突起中央部に貫通する円孔を施し、隆帯上に末端に刺突を加えたC字状沈線を施す。横走沈線1条と口縁部下縁外側に施す刻み目で文様帯とする。21も類似の山形突起片であり、突起下に貫通する円孔を施し、周囲に刻みを加えた隆帯を配す。突起両側には横走沈線先端に縦位の短沈線を加え、横走沈線と口縁部下縁の間には刻み目を施す。胴部には沈線を施すが詳細は不明である。22は口縁部を断面三角形状に肥厚させ、山形突起を加えた波顶部片である。縦位短沈線を充填する楕円区画文と、口縁波形に合わせた沈線下縁に短沈線を充填する区画文を、突起下で人字形に配す。胴部には口縁波形に合わせ山形に沈線を施して胴部上端を画す。胴部には多重の沈線が見えるが、詳細は不明である。23は弱く内弯する口縁部を肥厚させ、円孔を加えた山形突起を口縁部に配す。円孔外側を円形および弧状の沈線で縁取る。刻みを施す沈線を横走させるほか、末端に刺突を加えた沈線を口唇下に配すと思える。胴部上端は横走沈線で画す。24は外反して開く頸部から、肥厚し断面三角形状を呈する口縁部に至る土器であり、山形突起を口縁部に配すと思える。山形突起を巻き片掛するL字状に曲がる2条沈線および、これに蓋をするかのように短沈線を引き口縁部の区画文とし、他方からも沈線1条を伸ばし、口縁部下縁外側に刻み目を施す。なお、突起には貫通する円孔施すと思えるが詳細は不明である。25は内弯する口縁部を外方に肥厚させ断面三角形状とし、非対称形の尖塔形突起を施す。正面側の突起には中央に円孔を加え、上下に管状刺突を施して円孔周縁を弧線で縁取る。突起側面側には円孔を陥入させ、上下に管状刺突を加え弧状沈線を添わせる。突起基部から刺突を加えた沈線1条を横走させて口縁部文様帯とする。なお、胴部には斜行沈線2条を配す。26は口縁部を外方に肥厚させ断面三角形状とする口縁部片である。口縁部には楕円形の貼付文一対を配し、L字状に曲がる刺突を加えた沈線下に、斜行短沈

線を加え口縁部文様帯とする。胴部には横走沈線を多条に配す。27は口縁部を外方に肥厚させ断面三角形とし、下縁を刻む沈線1条を横走させる。胴部には沈線2条を横走させる。28は口縁部を外方に肥厚させ断面三角形とする波状縁片である。口縁部に沈線1条を横走させ、先端を短沈線で止めて区画文とし、区画内に刻み目を充填する。なお、胴部上縁には多重の横走沈線を断続的に施す。29は口縁部を断面三角形に肥厚させ、弱く内弯する口縁部とする。波頂部には口端部より下る8字状の貼付文を配し刺突2点を施す。横走する沈線2条間に斜行する短沈線を加えて口縁部文様帯とする。胴部は突起下で途切れる沈線1条を配し文様帯の上限を画す。30は25に類似する非対称型の把手を配し、口縁部下縁に引いた沈線1条と口唇間に斜行する刻み目を加え文様帯とする。胴部には斜行沈線を方向を変えて格子目状に引いている。31、36は口縁部を外方に肥厚させ断面三角形とする波状縁片である。口縁部には沈線1条を横走させ、口縁部下縁外側との間に斜行する刻み目を施す。なお、胴部上縁は横走沈線で画す。32、33も同様の平縁の口縁部片であり、33は斜行する胴部文様が上縁区画沈線を切っている。34は口縁部を外方に肥厚させ断面三角形に仕上げ、横走沈線および口縁部下縁の斜行短沈線で口縁部文様帯とする。胴部上縁を横走沈線で画し、多重の扇形文を配している。35も同様の小波状縁の土器であり、胴部上縁を画す横走沈線を途切らせて縦位区画沈線を垂下させる。37は外反する口縁部を外方に肥厚させ断面三角形とし、沈線1条を横走させて口縁部下縁外側に刻みを施す。胴部上縁を沈線1条で画し、斜行する沈線を施す。40は口縁部を外方に肥厚させ断面三角形とし、沈線1条を横走させ口縁部下縁外側に刺突を加える。胴部上縁は沈線で画す。

F種 (第57図38、39、41～45)

肥厚し直立する口縁部に短沈線を加えるものを本種とする。

第57図38は外反して開く胴部から、肥厚して直立する口縁部に至る二山形の突起を加えた口縁部片である。口縁部には縦位短沈線を密に引き、胴部には多重の方形文や楕円文を配す。39は外反する胴部から弱く肥厚する口縁部に至る土器である。口縁部には縦位短沈線を密に引き、胴部には鋸歯状に沈線を施す。41は外反する胴部から、断面三角形に肥厚する口縁部に至る口縁部片であり、口縁部を無文とする。胴部には多重の方形文を描くと思え、地文に縄文を施す。42は口縁部を断面三角形に肥厚させる波頂部片であり、波頂部を囲む弧線1条が見えるほか縦位短沈線を施し文様帯とする。胴部上縁を横走沈線で画し、垂下沈線で胴部を縦位分割する。43は外反する胴部から、断面三角形に肥厚させる口縁部に至る。口端部には縄文を施す。口縁部上縁に沈線1条を横走させ、縦位短沈線を密に施す。胴部上縁に横走沈線1条を配して文様帯上限を画し、3条の沈線で胴部を縦位分割するものと思える。なお、区画内には斜行沈線を充填する。44は直立する口縁部下縁に横走沈線3条を引き、口縁下に縄文LRを充填する。胴部には斜行する沈線を多重に配す。45は断面三角形に肥厚させた口縁部に、縦位短沈線を施し口縁部文様帯とする。胴部上縁は横走沈線2条で画す。

2類 (第54図5～11、第57図46～59、第58図1～31)

器形は1類と同様に、頸部から外反して開き短く内弯する口縁部に至る土器と、頸部から外反して開き断面三角形に肥厚する口縁部に至る土器がある。幅の狭い口縁部を文様帯とする土器であり、胴部と頸部の境には横走沈線を配して画し、頸部を広く無文帯とする。胴部には沈線による三角形文などを多重沈線で配す例が見えるが、類例に乏しく不明な点が多い。

本類は文様要素から、楔形の連続刺突文を施すもの(A種)、結節沈線および沈線内に刺突を加えるもの(B種)、沈線により文様を描くもの(C種)、口縁部に配した沈線区画内に刺突文もしくは短沈線を充填するもの(D種)、口縁部文様帯下縁外側に刻み目を加えるもの(E種)、内外方に肥厚し外反する口縁部に、短沈線を加えるもの(F種)に分ける。

A種 (第54図5、第57図46～49)

やや張りのある胴部が頸部でくびれ、外反気味に開いて口縁部に至るキャリパー器形の土器である。口縁部文様帯、頸部無文帯と胴部文様帯の3文様帯構成を基本とすると思え、楔形の連続刺突文を文様に加えるものを本種とする。

第54図5は口縁部を外方に肥厚させて断面三角形の短く内弯する口縁部とする。口縁部には渦巻文に沈線1条を添わせた丸山形の突起を2単位配すほか、波底部には並列する1対の円孔を2単位配し、都合4単位に分割する。単位文間には楔形の刺突を連続して加えた沈線1条を横走させ、口唇部外面に縄文LRを施す。頸部と胴部の境を、突起下で途切れた横走沈線で画し、頸部を広く無文帯とする。胴部には多重沈線による三角形の区画文の上下を交互に代えて接続して配し、区画内に弧線文などを加え縄文を充填するものと思える。

第57図46は口縁部下縁を肥厚させ面をもたせる波状縁の土器であり、口縁部には楔形の刺突を連続して加える沈線2条を横走させる。47は内弯する口縁部を面的に肥厚させる波状縁片であり、頸部を広く無文帯とする。山形突起を配した口縁部には、突起を片掛けに巻き連続する楔形刺突を加えた沈線2条を施し、隣接する突起下でU字状に繋ぐ。また、突起下の口縁部には大型の円孔を斜めに1対陥入させる。48は外反する口縁部を外方へ断面三角形に肥厚させ、沈線2条を施し下側沈線には連続する楔形の刺突を加えて、幅の狭い文様帯とする。49は面的に肥厚する口縁部に、山形突起を加え波状縁とする。47に類した文様を口縁部に配し、口縁部に細い縄文LRを、胴部に縦走縄文RLを施す。

B種 (第57図50～59、第58図1～3)

口縁部全体を肥厚させるものは少なく、口縁部を外方へ断面三角形に肥厚させるものが多い。また、頸部を無文とする。第57図50は肥厚する口縁部に、篋状工具による細かい沈線を連続して施す幅の広い沈線1条を横走させる。51は幅の狭い口縁部に刺突を加えた沈線1条を波状に施し、口縁部下縁外側に刻みを施す。52は断面三角形に肥厚する口縁部に、角状工具による結節沈線2条を施す平縁の土器である。53は波状縁の土器であり、2条のC字形の刺突を加えた沈線を斜行させるほか、口端部にも刺突を施す。54も波状縁の土器であり、口縁に添う沈線1条と末端をしの字状に曲げる、刺突を加えた沈線1条とを配す。55は山形小突起を加える口縁部片であり、末端に管状刺突を加えた結節沈線2条で突起を片掛けに巻き、突起下から鍵の手に曲がる沈線1条を加え単位文とする。第57図56から58、第58図1から3は外反する口縁部を断面三角形に肥厚させ、刺突を加えた沈線1条を横走させる。第58図3は山形突起を加える口縁部片であり、頂部を円柱状とする。第57図59は内弯する口縁部を外方に肥厚させ、断面三角形とする波状縁の土器であり、C字状の工具による結節沈線2条を配す。

C種 (第54図7～10、第58図6～13、15)

沈線により文様を描くものを本種とする。なお、第54図7から10、第58図15は内弯する口縁部に大型の把手を配すものであり、第19群土器の把手の一部に類似する例が見えるが、本来は別群として分類すべきかもしれない。

第54図7は内弯する口縁部に、台形状の横向きの橋状部をもつ把手を配す土器である。支柱部の頂部際には別に貫通する円孔を1箇所加え、支柱部の形状に合わせて側縁に2条の弧状沈線を配す。橋状部は扁平な板状とし、上面には末端に刺突を加える沈線2条を施す。なお、橋状部の基部には角状の突起1個を加え、先端に刺突を施す。頸部と胴部の境に横走沈線1条を引き、頸部を広く無文とする。

第54図8も横長の橋状把手末端部の破片と思える。外反する口縁部を内方に肥厚させ、内面に鏢状の凸帯を廻らせる。支柱部および橋状部の大半を欠く。橋上部の基部には円柱状の突起を加え、先端に円文を施す。橋

状部を扁平な板状とし、外側縁を口縁部外面まで隆帯として伸ばし渦を巻かせる。把手外側縁に添う沈線を隆帯内側に添わせて、先端をしの字状に丸める。また、橋上部内側縁に添わせる沈線をS字状に蛇行させ隆帯に向け下す。さらに、隆帯外側に沈線による渦巻文を下す。なお、橋状部の基部から大型の窓状透かしの縁に添い沈線を横走させている。橋状把手は2単位を配すと思える。なお、頸部は無文としている。

第54図9は内弯する口縁部に、外形三角形の大型で横向きの橋状把手を一对2単位配し、大把手間に山形突起一对2単位を配す土器と思える。支柱部は扁平な方柱板を前後に2枚建て、頂部を瓢状の天板で蓋をして支柱部とし、後ろの板には円孔を加えている。また、前板は下方に突出し先端に円孔を穿つ。支柱部から左方へ続く橋状部は扁平な板状とし、基部近くで捩じり、幅の広い平坦面を外方に向け、楕円形の大きな窓枠状の透かしを見せる。支柱部外面には下縁の円孔を囲む沈線および、末端をしの字状に丸める沈線1条を加える。支柱部上面には横S字状の渦巻文を配す。橋状部には3条の沈線を配し、外側の沈線は透かし孔下縁を縁取り橋上部の基部側で鍵の手状に止める。中央の沈線は末端をしの字状に丸める。内側の沈線は橋状部の基部側で鍵の手状に折る。橋状部の基部側にも何らかの造作があると思えるが、詳細は不明である。大把手間には山形の突起を配し、突起中央部に縦位にC字状の隆帯を加え、隆帯上に施す沈線1条を口縁形に合わせ横走させる。口縁部下縁に配した横走沈線で口縁部文様帯の上下を画し、縦位の短沈線を間隔を空けて施す。山形突起下には沈線1条を垂下させるほか、隆帯と絡むC字状の沈線1条を加える。突起側縁に弧状沈線2条と先端をしの字状に丸める横走沈線1条を配し、口縁部文様帯を形成すると見える。

第54図10はやや張りのある胴部から、大きく開いて内弯する口縁部に至る、横長で低い双頭の山形小突起を配した土器である。双頭の山形小突起下に背中合わせで3条の弧線文を配し、突起間には両端に刺突を加えた沈線1条を施し口縁部文様帯とする。頸部と胴部の境に沈線を廻らせ、頸部は広く無文とする。胴部には方形区画文かと思える文様が見えるが、詳細は不明である。

第58図6は内弯する山形の波頂部片である。波頂下に上面を浅く窪ませた円盤状の貼付文を加え、貼付文際を廻る沈線1条を口縁下に伸ばし、他方に沈線2条を伸ばす。なお、頸部は広く無文とする。7は山形波状縁の波頂部片であり、内弯する口縁部下縁を肥厚させ口縁部下縁を有段とする。波頂下に稜をもつように縦位三角形の隆帯を加え、隆帯頂部で渦巻く沈線と口縁下の沈線を八字状に引き分ける。8は山形小突起を口縁部に配した内弯する口縁部片であり、突起下に円孔を加えて末端に刺突を加えた沈線を両方向に引いている。9は内弯する口縁部を外方に肥厚させ、くの字に曲がる口縁部とする。8字状の貼付文を加えた橋状把手を口縁部に配し、沈線1条を横走させる。10は口縁部を面状に肥厚させ直立気味の口縁部とし、緩い山形突起を加える。突起下で先端を丸めた沈線を横走させ文様帯とする。11はくの字状に内折する山形突起片であり、突起下に円形刺突2点を縦位に配し、対向する弧線文を加え単位文とし、口縁部には縦位短沈線を施す。12は外反し環状の把手を配すと思える口縁部片である。環状部を2条沈線で縁取り縄文を施すほか、方角状に面をもたせた口縁直下に、沈線1条を廻らせ縄文を加える。なお、頸部は広く無文とする。13は内弯する口縁部下縁を肥厚させ、断面三角形の口縁部とする。口縁部には山形突起を配すと思え、突起下には円孔を加えた円形の貼付文を加える。突起下および波底部に縦位沈線を多重に加え単位文とし、単位文間には横走沈線を多重に配す。また、胴部上縁には横走沈線2条を配し、頸部を無文とする。15は外反して開く口縁部に、三角形に尖る把手を加えている。把手頂部から垂下する隆帯を中央に配し、左右に円孔を穿つ。また、内面には外面の円孔に繋がる大型の円孔を施し、下縁に円形の貼付文2個を加える。波頂下の隆帯両側には刺突を加えた沈線を垂下させる。一方の円孔には縁取りを施し、先端を丸めた沈線1条を加えている。突起側縁には両端に刺突を加える沈線を各々配し、方角状を呈する把手側面にも、両端に刺突を加えた沈線を施している。



第58圖 有文深鉢形土器第22群実測図 (縮尺1/3)

D種 (第58図16~19、21)

口縁部に配した沈線間に刺突文を充填するもの本種とする。

第58図16は外反する口縁部を肥厚させ、幅広の沈線2条を横走させて、沈線間を横走する隆带状とする。隆帯上には刺突列1条を施す。17は内弯する口縁部の下縁に粘土を加え拡張し、幅の広い口縁部とする波頂部片と思え、刺突を充填した2条沈線を入字状に組み合わせ、組み合わせ部に大型の円孔を陥入する。なお、口唇部には斜行する短沈線を施す。18は内弯する口縁部を断面三角形に肥厚させる波状縁の土器であり、口縁部に配した2条沈線間に刺突文を列状に充填する。19は外反する口縁部を断面三角形に肥厚させ、波頂下に円孔を穿つ口縁部片である。口縁部には沈線間に刻みを加えた沈線2条を配し、波頂下では沈線1条を加える。内面の波頂口唇部に刻みを施す。21は内弯する口縁部に沈線2条を引き、沈線間に角状の刺突を加える。

E種 (第54図6、11、第58図4、5、14、20、22~30)

口縁部文様帯下縁外側に刻み目を加えるものを本種とする。なお、刻み目の代わりに縄文を同一箇所にも施すものも本種に含めた。

第54図6は外反する口縁部を外方に肥厚させて断面三角形に仕上げ、山形突起を4単位加えると思える。突起側面で鍵の手もしくはしの字状に先端を丸める沈線を1条横走させ、沈線と口縁部下縁外側間に縄文RLを施す。頸部と胴部の境を横走する沈線で画し、頸部を広く無文とする。

第54図11は外反する口縁部を外方に肥厚させて断面三角形に仕上げ、内面をスローブ状とする。山形の小突起4単位を配すものと思える。突起下の中央部に円孔を陥入させ、同心円文および対向する弧線文を多重に施す。突起両側には末端を上方に鍵の手状に折る沈線と、末端に刺突を加える横走沈線とを配し、口縁部下縁外側に斜行する刻み目を施す。なお、頸部は広く無文とする。

第58図4は外反する口縁部を外方に肥厚させ断面三角形とし、山形突起を加える。突起下には先端を丸める沈線2条を異方向に伸ばし、間に短い弧線文を加える。沈線と口端部の間には刻み目を加える。頸部と胴部の境に沈線を横走させ、頸部を広く無文とする。5は短く内弯する口縁部に山形の小突起を配し、突起下に円形刺突1点を加える。先端に刺突を加える沈線を左右に引き分け、口縁下縁外側に斜行する刻み目を施し口縁部文様帯とする。14は第56図6に類似する土器であり、外反する口縁部を外方に肥厚させ断面三角形に仕上げ、口縁部を横断するC字状の突起を施す。突起上端には刺突を加え、幅広の沈線を稜線上に施す。口縁部には末端に刺突を加えた沈線を横走させ、沈線と口縁部外側間に縄文を施す。20は内弯する口縁部を外方に肥厚させ、断面三角形の口縁部とする。口縁部には山形小突起を加え、突起下の外面に粘土を加えて縦位に肥厚させる。突起下の肥厚部に斜めに2箇所刺突を加える。突起下で末端を丸める沈線を口縁部に横走させ、沈線と口縁部下縁との間を縦位の短沈線で刻んでいる。なお、頸部は広く無文とする。22は口縁部の下縁を肥厚させ断面三角形に仕上げ、口端部に横長の突起を加える。突起を巻き片掛けする2条沈線を引き、他方にも2条沈線を横走させる。なお、突起下の沈線交点に刺突1点を加える。沈線と口縁間および口縁部外側間には斜行する刻み目を施す。頸部は広く無文とする。23は口縁部下縁を肥厚させ、断面三角形とする。口縁部には形状不明の突起を配し、突起下の円孔の両側を弧線文で囲むほか、口縁部下縁に沈線1条を加え、斜行する刻み目を施す。24は外反する口縁部を断面三角形に肥厚させる。弧状沈線および2条の横走沈線で矩形の区画文を配し、口縁下および区画内に刺突を列状に充填する。また、口縁部下縁外側に斜行する刻み目を施す。25は弱く外方に肥厚し断面三角形とする口縁部に、沈線1条を横走させ口唇間に縄文を、口縁下縁との間に斜行する刻み目を施す。26、27は同一個体であり、外反する口縁部を外方に肥厚させ、小山形突起を加える。突起下で入字状に沈線を組み合わせ、口縁部下縁間に楔形の刻み目を施す。28は外反する口縁部を外方に肥厚させ、断面三角形

状に仕上げる。口縁部には末端に刺突を加えた沈線1条を横走させ、口縁部下縁に斜行する刻みを施す。30は外反する口縁部を外方に肥厚させ、直立する口縁部に沈線1条を横走させる。沈線と口縁部下縁外側間に縄文RLを施す。

F種 (第58図31)

内外方に肥厚し外反する口縁部に、短沈線を加えるものを本種とする。

第58図31は外反する頸部から立ち上がり、再度短く外反して口縁部とし、内外面に肥厚に伴う稜を残す。口縁部外面には縦位の短沈線を施す。

3類 (第55図1～11、第58図32～42、第59図、第60図1～3)

器形は1類と同様に、頸部から外反して開いて短く内弯する口縁部に至る土器と、頸部から外反して開いて断面三角形に肥厚して口縁部に至る土器がある。幅の狭い口縁部を文様帯とする土器であり、頸部以下に広く縄文を施す土器である。

本類は文様要素から、楔形の連続刺突文を施すもの(A種)、結節沈線および沈線内に刺突を加えるもの(B種)、沈線により文様を描くもの(C種)、口縁部に配した沈線区画内に刺突文もしくは短沈線を充填するもの(D種)、口縁部文様帯下縁外側に刻み目を加えるもの(E種)、肥厚し直立する口縁部に短沈線を加えるもの(F種)に分ける。

A種 (第58図32～35)

楔形の連続刺突文により文様を描くものを本種とする。

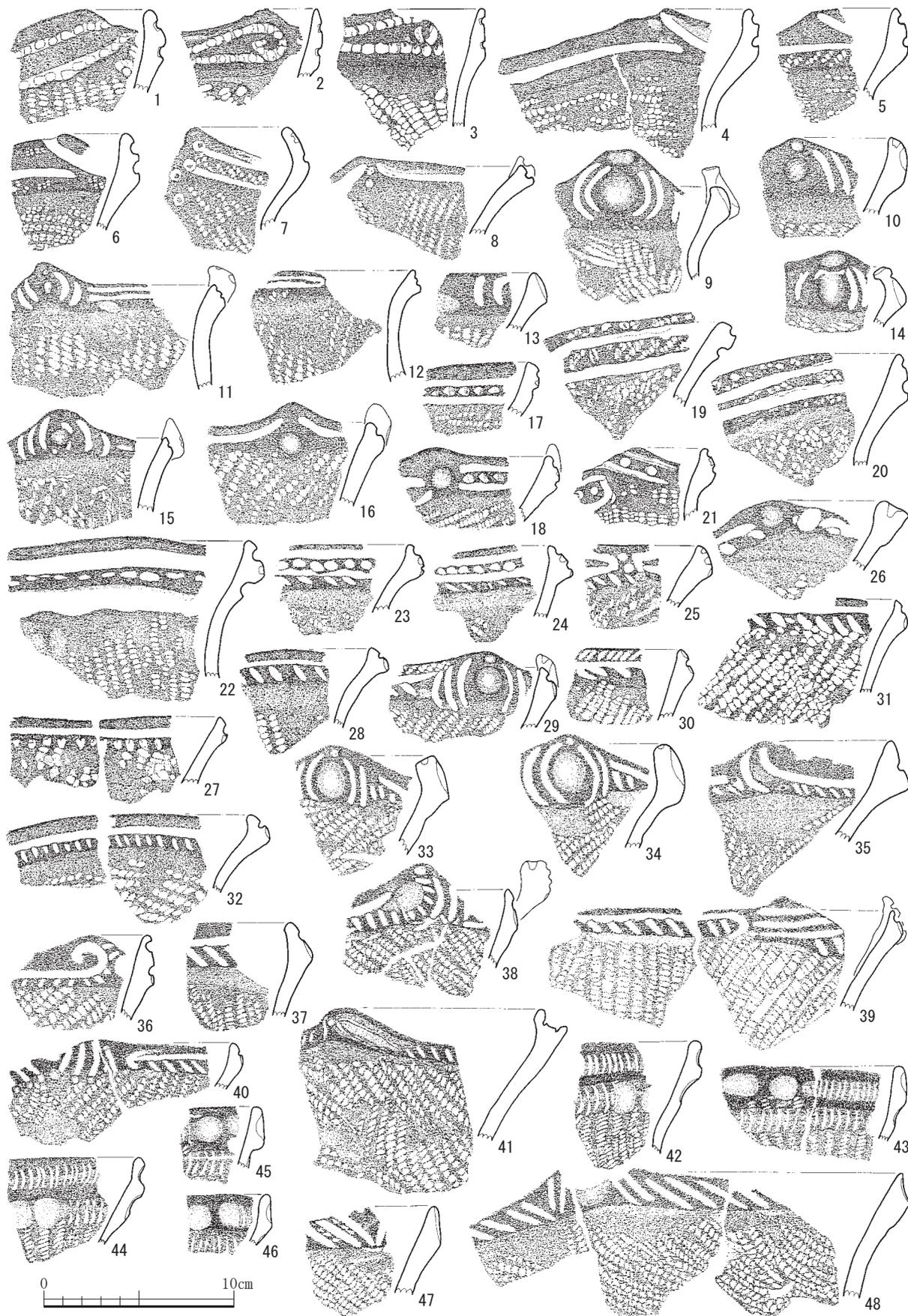
第58図32、33は同一個体であり、直立する頸部から内弯気味に開いて、面的に肥厚する口縁部に至る土器であり、口縁部には山形突起を施す。山形突起を巻き片掛けする2条の楔形刺突文を連続して加えた沈線は、隣接する突起際でU字状に連結する。また、突起下には大型の円孔を斜めに2個陥入させ口縁部文様帯とする。頸、胴部には条が縦走し、節の大きな縄文RLを施す。34は外反する口縁部を外方に肥厚させ、断面三角形に仕上げ2条の楔形刺突文を加えた沈線を横走させる。また、頸部には縄文LRを施す。35は面的に肥厚し内弯する口縁部に山形突起を施す土器である。突起を巻き片掛けする楔形刺突文を加えた2条の沈線は、隣接する突起際でU字状に連結する。U字連結部を挟み斜めに大型刺突2点を陥入させて口縁部文様帯とする。胴部には条が縦走する縄文RLを施す。

B種 (第55図4、第58図36～42、第59図1～3)

結節沈線および刺突を加える沈線で文様を描くものを本種とする。

第55図4は内弯する口縁部を断面三角形に肥厚させ、低い山形小突起4単位を配す土器であり、口端部には斜行する刻みを施す。2条沈線を突起下で人字状に組み合わせ、上側沈線の一部に斜行する刻みを加える。また小突起下の沈線間に円形刺突文をそれぞれ1、2点加えている。なお、頸部、胴部には縦走縄文RLを施す。

第58図36は外反する口縁部を面的に肥厚させ、刺突を加えた沈線2条を横走させる波状縁の土器であり、口縁部下には条が縦走する縄文を施す。37は口縁部を肥厚させ、山形突起を加える波状縁の土器と思え、突起部を巻き片掛けする2条の、C字状の刺突を加えた結節沈線を施す。頸部には扁平な節の縦走縄文RLを施す。38は内弯する口縁部下縁を肥厚させ、顎の張ったT字状の口縁部に仕上げ、2条の結節沈線を横走させる波状縁片である。39は山形突起を配する口縁部片であり、山形突起を巻き片掛けするC字状の刺突を加える沈線2条を横走させ、沈線1条を加えて大型の円形刺突を突起下に加える。なお、条が縦走する縄文RLを頸部に施す。40は外反して開く口縁部下縁に粘土を加え肥厚させ、直立する口縁部に文様帯を配す平縁の土器である。渦巻文を囲む弧線文を単位文とし、両側に2、3条の沈線を横走させ文様帯とする。上縁沈線と口唇部間には斜行



第59図 有文深鉢形土器第22群実測図 (縮尺 1/3)

刻みを、中央沈線先端には刺突文を施す。なお、下縁沈線には斜行する刺突をそれぞれ加えている。また、頸部には節が大きな縦走縄文RLを施す。41は外反する口縁部を外方に肥厚させ断面三角形状とし、管状刺突を加える沈線1条を横走させる。42は口縁部下縁を肥厚させ断面三角形状とする平縁の土器であり、口端部に斜行刻みを施す。口縁部の横走沈線2条のうち上側沈線には刺突を加える。第59図1は内弯する口縁部を面的に肥厚させる山形突起部の破片であり、突起を巻き片掛けする沈線2条には、縄先端部による刺突を加える。また、突起下にも縄先端の刺突による円孔を陥入させている。頸部には縦走縄文LRを施す。2、3は同一個体であり、外反する口縁部下縁を弱く肥厚させ山形突起片を施す。口縁部には刺突を加える2条沈線を横走させ、突起下で上側沈線を渦巻させる。

C種（第55図1～3、第59図4～16、19、20）

沈線により文様を描くものを本種とする。

第55図1はやや張りのある胴部がくびれて、外反する口縁部に至る平縁の土器である。口縁部と胴部の境を横走する隆帯1条で画し、胴部には斜縄文を施す。口端部を方角状に整え沈線1条を配し、口縁部には方形の渦巻文と、2条の横走沈線を充填した台形状の区画文とを交互に配している。

第55図2は内弯する口縁部を面的に肥厚させ、4単位の山形突起を配する土器である。山形突起を巻き片掛けする2条沈線を、隣接する突起際でU字状に連結させる。また、突起下の連結部横には大型の円孔1個を陥入させる。胴部には扁平な節をもつ縦走縄文RLを施す。

第55図3は張りの弱い胴部から外反して開き、口縁部に山形突起6単位を配する土器である。突起頂部には刺突を加え、方柱状に仕上げる。口端部には末端に刺突を加えた沈線1条を配す。また、口縁部外面には、波頂下で人字状とする途切れる沈線1条を横走させ、頸部、胴部には節の大きな斜縄文RLを施す。

第59図4から6は類似する土器であり、口縁部を面的に肥厚させ山形突起を配し、突起を巻き片掛けする沈線1条を隣接する突起際まで伸ばす。なお、4は突起下に円形刺突を加える。7は内弯する口縁部に山形小突起を加える波状縁の土器であり、波頂下の口縁部下縁に円形刺突を加え単位文とする。また、沈線末端に管状刺突を加えた沈線2条を口縁部に横走させ、斜縄文RLを施す。8は外反する口縁部を外方に肥厚させて断面三角形状とし、低い山形突起を配する。突起下に円形刺突2点を縦位に配し、単位文を挟み沈線を左右に引き分ける。頸部には縄文LRを施す。9、14は同一個体であり、内弯する口縁部を肥厚させ、頂部に抑えを加えた山形突起を配す。突起下には大型の円孔を陥入させ、周囲を弧線文で縁取る。10も内弯する口縁部を肥厚させ、丸山形を呈する波頂部に刺突1点を加え、波頂下の円孔を縁取る弧線文を両側に配す。頸部には縦走縄文を加える。11、12は同一個体であり、外反する口縁部を肥厚させ断面三角形状とし、山形小突起を配す。突起上には刺突文2点を加え弧線文で縁取る。突起側縁から2条沈線を横走させ、隣接する突起際でU字状に連結すると思える。頸部には縦走縄文LRを施す。13は波底部片と思え、縦位の弧線文を口縁部に施す。15、16は外反する口縁部を肥厚させ断面三角形状とし、山形小突起を配す土器である。15は口縁下に刺突を加え弧線文で縁取り、横走沈線1条を口縁部に伸ばす。16は突起下に大型の円孔を陥入させ、幅の狭い口縁部に横走沈線を施す。19、20は口縁部を肥厚させ、横走する2条沈線を配する波状縁の土器であり、口端部を含め縄文を施す。

D種（第55図6、8、第59図17、18、21～24）

口縁部に配した沈線区画内に刺突文もしくは短沈線を充填するものを本種とする。

第55図6は内弯する口縁部下縁を外方に肥厚させ断面三角形状に仕上げ、口縁部に低い山形小突起4単位を配す。突起下には縦走沈線と斜行沈線を配し単位文とするほか、突起間にも縦位短沈線3条を加え単位文とする。単位文間には沈線を横走させ、口縁部下縁との間に刺突列1条を施す。なお、胴部には縦走縄文LRを施す。

第55図8は内弯気味に開く口縁部下縁を、横走する隆帯状に肥厚させ、口縁部に配した山形小突起からC字状に下る隆帯と結合させ区画文とする。口縁部には隆帯区画内側と口縁形に添わせた横長の楕円形区画を配すほか、口縁部下縁隆帯にも沈線1条を添わせる。口縁部上縁および沈線間には各々D字状の刺突を加えるほか、隆帯上にも刻み目を施す。なお、頸部には斜縄文LRを施す。

第59図17、18は同一個体である。低い山形小突起を口縁部に配し、突起下に大型の円孔1個を施す。円孔から左右に2条沈線を伸ばし、沈線間に三角形の刺突を加える。21は外反する口縁部を肥厚させ断面三角形とし、山形突起を巻き片掛けする2条沈線間に刺突を加え、隣接する突起際で沈線をU字状に連結する。頸部には縦走縄文RLを施す。22は口縁部を面的に肥厚させ、幅の広い沈線2条で肥厚部分を欠き落とし、沈線間を隆帯状の突出部として刺突文を加える。胴部には縦走縄文LRを施す。23は内弯する口縁部を肥厚させ断面三角形とし、沈線2条を横走させ沈線間に円形の刺突を列状に加えるほか、口縁下縁外側に斜行する刻み目を施す。24は口縁部を外方に肥厚させ断面三角形とする波状縁の口縁部片であり、横走する2条沈線間にD字状の刺突を加えるほか、口縁部下縁外側に斜行する刻み目を施す。

E種 (第55図5、7、9、10、第59図25~41)

口縁部文様帯下縁外側に刻み目を加えるものを本種とする。

第55図5は口縁部下縁を肥厚させ断面三角形とし、山形突起4単位を配す。突起頂部および突起下には円形の刺突各1個を加え、外面の刺突をハの字状に沈線で囲い、右側へ斜行短沈線を広げ単位文とする。単位文間には沈線1条を横走させ、口縁部下縁との間にD字状の刺突を加えて口縁部文様帯とする。なお、頸部、胴部には粗く節の大きな斜縄文RLを施す。

第55図7は外反する口縁部を外方に肥厚させ断面三角形に仕上げる平縁の土器であり、円形刺突2点を縦位に配し単位文とし、単位文間に楕円形の区画文を配すほか、口縁部下縁外側に斜行する刻み目を施し文様帯とする。なお、頸部、胴部には斜縄文LRを施す。

第55図9は外反する口縁部を外方に肥厚させ断面三角形に仕上げ、口縁部に双頭山形の突起を配した波状縁の土器である。口縁部内面には突起に合わせて円形の貼付文を一对加え、貼付文間をなぞり状に窪めている。口縁部外面の山形突起下に円形刺突2点を縦位に配し、先端を丸めて末端に刺突を加えた沈線を左右方に伸ばす。なお、丸めた沈線先端に、別の刺突を加える部分もある。また、口縁部下縁外側には斜行する刻み目を施し、口縁部の文様帯とする。頸部、胴部には節の扁平な斜縄文LRを施す。

第55図10は外反する口縁部をもち、方角状に仕上げた口端部に沈線1条を加えて内、外角に刻みを施す。胴部には斜縄文LRを施す。

第59図25は第55図7に近似する。26は外反する口縁部を肥厚させて方角状に仕上げ、刺突を加えた山形突起を配す。突起側縁に太い沈線を添わせ、横走する沈線を左右に伸ばし口縁部下縁に刻み目を施す。27は外反する口縁部を外方に肥厚させ断面三角形に仕上げ、沈線1条を横走させ口縁部下縁外側にD字状の刺突文を加える。頸部には縦走縄文を施す。28は外反する口縁部を外方に肥厚させ断面三角形に仕上げて沈線1条を横走させ、口縁部下縁に斜行する刻み目を間隔を空けて施す。頸部には縦走縄文を施す。29は口縁部を肥厚させ断面三角形とし、山形突起を配す。突起部には円盤状の貼付文を薄く加える。突起頂部に刺突を加え、突起下の円盤状の肥厚部には浅い円孔を陥入させる。円孔外周には対向する弧線文を配して単位文とし、沈線1条を横走させ口縁部下縁外側に斜行する刻み目を加える。口唇部に縄文を施し口縁部文様帯とする。頸部には斜縄文LRを施す。30は外反する口縁部を外方に肥厚させ断面三角形とし、斜行する短沈線を加えた横走沈線1条を配すほか、口唇部にも細かく斜行する刻み目を施し文様帯とする。頸部に斜縄文を施す。31は外反して

開き外面を肥厚させ断面三角形状に仕上げる。口縁部に沈線1条を横走させ、口縁部下縁に斜行する短沈線を加え文様帯とする。なお、頸部には節の大きな斜縄文LRを施す。32は口縁部下縁を外方に肥厚させ断面三角形状に仕上げ、沈線1条を横走させ、沈線と口縁部下縁間には縦位の刻み目を施す。頸部には条が横走する縄文LRを施す。33は口縁部下縁を肥厚させて断面三角形状に仕上げ、山形突起部にはさらに円盤状に粘土を加え肥厚させる。山形突起頂部には円形刺突1点を加え、肥厚する突起下には浅皿状の円孔を陥入させる。円孔周縁を弧状沈線で囲い単位文とし、側縁から沈線1条を横走させ口縁部下縁外角に刻みを加えて口縁部文様帯とする。頸部には斜縄文RLを施す。34は33と同一個体かと思えるが、突起下の粘土貼付が著しく立体感に富む。35は外反する口縁部を外方に肥厚させ断面三角形状に仕上げ、山形突起を配す。突起部にはさらに粘土を加え肥厚を強める。山形突起を巻き片掛けする2条沈線は、1条をC字状に短く止め、末端に刺突文1点を施す。残る沈線1条は隣接する突起際まで横走させる。横走沈線と口縁部下縁の間には斜行する刻み目を施す。36は外反する口縁部を外方に肥厚させ断面三角形状に仕上げ、山形突起を加える。突起下で先端を丸めた沈線1条を横走させ、突起下から口縁部下縁に繋がる刻み目を施し文様帯とする。37は口縁部を外方に肥厚させ断面三角形状とし、横走沈線と斜行する刻み目を施す。38は口縁部を面的に肥厚させ、山形突起からC字状に下る隆帯を口縁部下縁に繋げ、刻み目を施す。C字状の隆帯内側に円孔を陥入させ、沈線1条を横走させる。外側には隆帯に添わせて弧状沈線を引き単位文とする。なお、突起頂部には円形刺突を加える。頸部には斜縄文RLを施す。39は口縁部下縁を外方に肥厚させ、断面三角形状に仕上げる。山形突起を配し、突起下に沈線3条を横走させ、把手際で先端を下方に丸める横走沈線を施し、口縁部下縁外側に斜行する刻み目を施す。頸部には節の大きな縦走縄文LRを施す。40は内弯する口縁部に突起を加える土器であるが、突起頂部を欠失する。突起部には末端に刺突を加えた対向する弧線文を単位文として配す。突起際で丸めた横走沈線1条を配し、口縁部下縁に斜行する刻み目を添わせている。頸部には斜縄文LRを施す。41は弱く内弯する口縁部を有し、片流れの山形突起を配す。突起頂部に刺突を加えるほか、突起内側を窪めてU字状の沈線を施す。頸部には斜縄文RLを施し、施文方向を変えることで羽状とする部分がある。

F種 (第59図42～48、第60図1～3)

肥厚し直立する口縁部に短沈線を加えるものを本種とする。

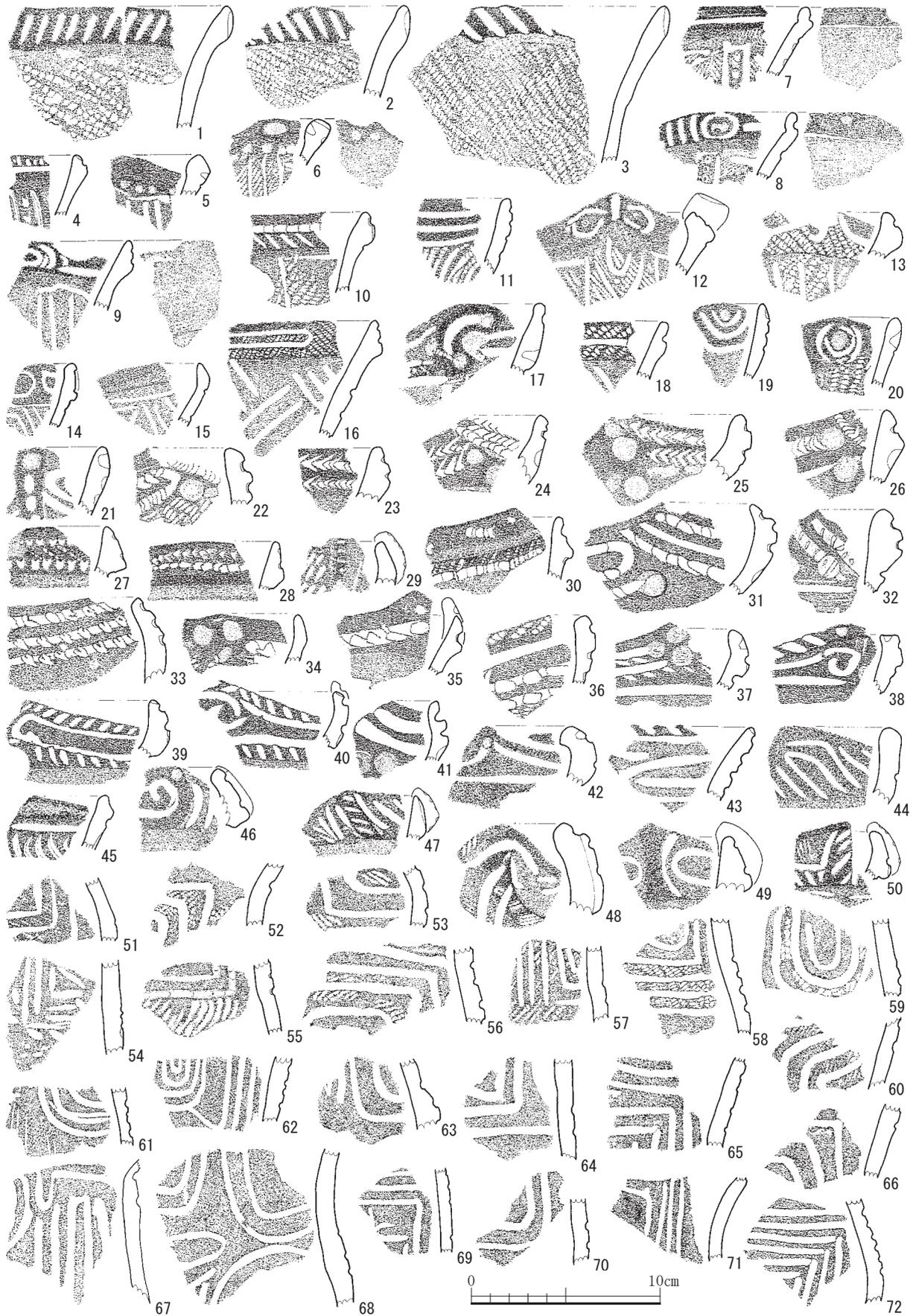
第59図42は外反する胴部が口縁部で直立気味となる。口縁部に隆帯1条を横走させ上下に幅広の沈線を引いたのち、扁平なC字状刺突文を連続施文する。また、下段の刺突文列には2個一対の大型円形刺突を加えている。頸部には縦走縄文RLを施す。43、44は同一個体であり、内弯して開く口縁部上縁が直立気味となる。文様は42とほぼ同じで、大型円形刺突文を上段と下段に位置をずらして施す。45、46は口縁部を直立させる破片であり、42から44に比べC字状の刺突が直線的となる。47は外反して開く口縁部を外方に肥厚させ断面三角形状とし、方向を変えた斜行短沈線を口縁部に配し文様帯とする。48は外反して開く口縁部を外方に肥厚させ断面三角形状とし、山形かと思える突起を口縁部に配す。突起下には大型の円孔を口縁部下縁に配し、短沈線2条をハの字状に配して単位文とする。口縁部には斜行する短沈線を配し文様帯とする。頸部には斜縄文RLを施す。

第60図1は外反する口縁部を面的に肥厚させ、斜行する短沈線を施し文様帯とする。頸部には斜縄文RLを施す。2、3も外反する口縁部を肥厚させ、斜行する短沈線を口縁部に施す。

4類 (第60図4～21)

外反して開く口縁部を外方に肥厚させ、断面三角形状に仕上げて口縁部に幅の狭い文様帯を配し、胴部に充填縄文を加えた縦位区画の文様帯を配す土器を本類とする。

第60図4は断面三角形状に肥厚する口縁部に横走沈線1条を配し、口端部に刻み目を施す。刺突を加えた2



第60図 有文深鉢形土器第22群実測図 (縮尺1/3)

条沈線を垂下させ、胴部を縦位分割するものと思える。5は口縁部に山形の突起を加えた、外反する口縁部をもつ土器であり、口縁下に横走沈線1条を配し、沈線3条を垂下させる。なお、突起下には管状刺突を列状に加える。6は口唇部を丸く収め、山形突起の中央部に抑えを加えて双頭状に仕上げる口縁部片であり、突起下の内外両面に3点の円形刺突を加える。口縁部には刺突より沈線を左右に伸ばし、胴部には沈線3条を垂下して縄文LRを充填する。7は口縁部をくの字に内屈させ幅の狭い文様帯とし、沈線1条を横走させる。内面にも沈線1条を加える。胴部上縁を画す横走沈線を切り、D字状の刺突文列を加える矩形区画を垂下させ、両側の区画には斜行沈線で三角文を描いて縄文LRを充填する。8も7に類似する口縁部形態をもち、内面には刺突1点を加え、屈曲部に沈線1条を横走させる。口縁部外面には楕円形の円孔1点を加え円文で囲み、左側には弧状沈線を添わせて単位文とする。また、単位文から沈線1条を横走させ口縁部文様帯とする。胴部には単位文より垂下する刺突を加えた矩形区画文を配して文様帯を縦位分割し、縄文を充填する斜行文を配す。9は外反し断面三角形状に肥厚させた口縁部に、弧線文を添わせた円文を単位文として配し、横走する沈線を加えて幅の狭い文様帯とする。胴部には2条沈線を充填した縦位の矩形区画文を配す。なお、内面には単位文下で途切れる沈線1条を横走させる。10は肥厚し断面三角形状とする口縁部に、結節沈線1条を横走させ、下縁に斜行沈線を施す。胴部には鍵の手状に折れる沈線を下して縦位の区画文とする。区画内には縄文RLを充填する。11は弱く内弯する口縁部に横走沈線3条を引く波状縁の土器であり、口縁下には多重の扇形文を配し縄文を施す。12は内弯する口縁部を外方に肥厚させ、断面三角形状に仕上げる。山形突起を口縁部に配し、突起頂部に縦位短沈線を加え、両側に刺突を加えた円文を配し単位文とする。U字もしくはV字の沈線を縦位多重に施し、両側に矩形区画文を配して胴部を縦位分割する。胴部には縄文LRを施す。13は口縁部を外方に肥厚させ、断面三角形状に仕上げて口縁部下縁に稜をもたせる。突起を加えるが欠失が多い。口縁部には突起下で先端を丸めた沈線を横走させ、隣接する突起際で口縁方に弧状に切り上げる。突起下の胴部には沈線3条を垂下させ、縄文LRを充填する。14は内弯して直立する口縁部を肥厚させ、円文、楕円文などの区画文を配す。胴部上縁を横走沈線で画し、縦位楕円文かと思える垂下する区画文の脇に、斜行沈線を多重に配している。15はくの字に内折する口縁部に面をもたせる波状縁の土器であり、胴部上縁を横走沈線で画す。2条の垂下沈線の両側に区画文を配す。16は外反する口縁部を外方に肥厚させ、断面三角形状に仕上げる。口縁部には横長の楕円文を配し、区画外に縄文RLを充填する。胴部には多重沈線による鋸歯文を配す。17は外反する口縁部を面状に肥厚させ、山形の突起を配す。突起下には末端に刺突を加えた、C字状の沈線を配し単位文とする。両側に加えた刺突文から、2条沈線を横走させ文様帯とする。18は外反し断面三角形状に弱く肥厚する口縁部に、沈線1条を横走させ縄文を充填する。胴部には斜行沈線2条を配す。19、20は弱く内弯する口縁部に、円孔を囲む同心円文や、円文を単位文として配し、20は頸部に条が縦走する縄文RLを施す。21は弱く内弯する口縁部に刺突を加えた垂下隆帯1条を配し、頂部に円孔を加える。隆帯両側には楕円形の区画文を配すと見える。

5類 (第60図22～50)

胴部文様が不明のため1類から4類に明確に分類できないものや、隆帯を加える口縁部片を本類とする。

本類は文様要素から、楔形の連続刺突文を施すもの(A種)、結節沈線および沈線内に刺突を加えるもの(B種)、口縁部に配した沈線区画内に、刺突文もしくは短沈線を充填するもの(C種)、沈線により文様を描くもの(D種)、口縁部に隆帯を配すもの(E種)に分ける。

A種 (第60図23～26、28)

楔形の連続刺突文を施すものを本種とする。

第60図23は外反する口縁部を外方に肥厚させ、断面三角形状に仕上げる。口縁部には楔形の刺突文を加えた

沈線2条を横走させる。24は22に類似する文様を口縁部に配し、突起下に大型の円孔2点を斜めに配す。25は山形突起下に大型の円孔3点を縦位に配し、突起を巻き片掛けする楔形刺突文を加える沈線2条を、隣接する突起際の円孔まで伸ばすものと思える。26も同様の破片であり、突起を巻き片掛けする楔形の刺突文を加えた2条沈線末端を、隣接する突起下に配した大型の円孔に繋ぐ。28は外反する口縁部を肥厚させ断面三角形に仕上げ、楔形刺突を加えた横走沈線、横走蛇行沈線を配す。

B種 (第60図22、27～36)

結節沈線および沈線内に刺突を加えるものを本種とする。

第60図22は内弯する口縁部を面的に肥厚させ、山形突起を配すものと見え、突起を巻き片掛けする沈線を隣接する突起際でU字状に連結させる。沈線内に刺突を加え、突起下に大型の円孔を施す。頸部には条が縦走する縄文RLを施す。27は外反する口縁部を断面三角形に肥厚させ、半裁した管状工具による刺突を加えた沈線2条を横走させる。29は内弯する口縁部に、垂下する短い隆帯を配し上面に刻みを施す。隆帯側縁には三角形の刺突を充填する。30は内弯する口縁部下縁を隆帯状に肥厚させ縄文を施す。口縁部上縁にD字形の刺突を加えた結節沈線を斜行させる。口縁下にも結節沈線1条を横走させる。31は山形突起をもつ口縁部片であり、突起下に大型の円孔1点を加える。山形突起を巻き片掛けする3条沈線を隣接する突起際まで伸ばし、上縁2条をU字状に連結するほか、下縁1条を円孔に繋いでいる。32は面的に肥厚する口縁部に突起を施す。突起下には大型の円孔2点を並置し、突起を巻き片掛けする沈線2条のうち1条を円孔に繋げ、上縁の1条は隣接する突起まで伸ばし、大型の円孔に繋げると思える。なお、沈線にはC字状の刺突を加え、文様帯下縁を2条沈線で画す。33は波状縁の土器であり、波形に合わせ管状刺突を加えた沈線3条を横走させる。34は内弯する山形小突起片であり、頂部に大型の円孔3点を三角形に配す。円孔からは刺突を加えた沈線を横走させる。35は内弯する口縁部を面的に肥厚させ山形突起を配す。口縁部にはD字状の刺突を加えた沈線を突起下から横走させる。36は波状縁の土器であり、口縁に添い沈線1条を横走させるほか、刺突を加えた沈線2条を配す。なお、口端部に縄文RLを施す。

C種 (第60図37～40)

口縁部に配した沈線区画内に、刺突文もしくは短沈線を充填するものを本種とする。

第60図37は内弯する口縁部を面的に肥厚させ、山形突起を加える。突起下には縦位に円孔2点を配し、側縁から沈線2条を横走させ、上縁沈線の末端には刺突を加える。また、胴部上縁を横走沈線で画す。口縁部の沈線間および口縁部下縁との間には、斜行する刻み目を加える。38は内弯する口縁部を面状に肥厚させ、山形突起を施す。突起頂部には刺突を加え、口端部に斜行する刻み目を施す。突起下には先端を丸めた沈線1条を横走させるほか、横走する沈線1条を口縁部下縁に施す。39は内弯する口縁部下縁を肥厚させ、下縁に稜をもたせる。山形小突起を口縁部に加え、突起下で矩形に連結する沈線2条を配し、沈線と口縁間および口縁部下縁との間に斜行する刻み目を施す。40も類似する土器であるが、突起下で先端をC字状沈線と絡む先端を丸めた沈線を横走させるほか、口縁部下縁に沈線を横走させる。口縁部上縁と下縁には刻み目を施す。

D種 (第60図41～45)

沈線により文様を描くものを本種とする。

第60図41は山形突起をもつ口縁部片であり、突起を巻き片掛けする2条沈線を加え、突起下には円孔2点を並置する。42は強く内弯する突起部片であり、突起部を巻き片掛けする2条沈線および、末端に刺突を加える沈線1条を配し、口縁部下縁を横走沈線1条で画す。43は外反する口縁部片であり、口端部に刻み目を加えるほか横走沈線やU字状の沈線を施す。44は内弯し突起を加える口縁部片であり、突起下にU字とL字状の沈線

で単位文を配し、斜行沈線を施す。45は外反する口縁下を横走沈線で画し、縦位の弧線文を連続させる。

E種 (第60図46～50)

口縁部に隆帯を配すものを本種とする。

第60図46はくの字に内折する口縁部に、丸山形突起を施す。突起頂部には刺突を加え、C字状の隆帯を施す。隆帯内縁に添い先端を丸めた沈線1条を加え、外側に短い弧状沈線を添わせる。47は短く内弯する口縁部に山形小突起を加え、突起から刻み目を施す隆帯を斜行させ、斜行沈線を添わせる。48は内弯する口縁部に尖塔状の突起を加える。口縁波形に合わせ沈線1条を添わせるほか、波頂部からC字状の隆帯を下し、弧状の2条沈線を加える。49は山形突起を加える口縁部片であり、波頂部から弧状の隆帯を下す。隆帯上にはC字状の短沈線を加え、両側に楕円形の区画文を配す。50は短く内折する口縁部に、刻みを加えた垂下隆帯を配す。隆帯側縁を縁取る沈線を鍵の手に折り、口縁部下縁に添う沈線と繋げ区画文とする。なお、口縁部の区画内には縄文を充填する。

6類 (第60図51～72、第61図～第63図)

本群土器の胴部片を一括して本類とする。

本類は文様要素から、多重沈線による方形文や楕円形文を胴部に接続して施し、横帯する文様帯とするもの(A種)、多重沈線による数種の文様を組み合わせ、横帯する文様帯とするもの(B種)、胴部を縦位分割する垂下沈線を配し、区画内を斜行沈線で小分割して扇形文などの充填文を施すもの(C種)、胴部文様帯下縁を横走沈線で画すもの(D種)、縄文や刺突文を充填する沈線帯を施すもの(E種)に分ける。

A種 (第60図51～72、第61図1～20)

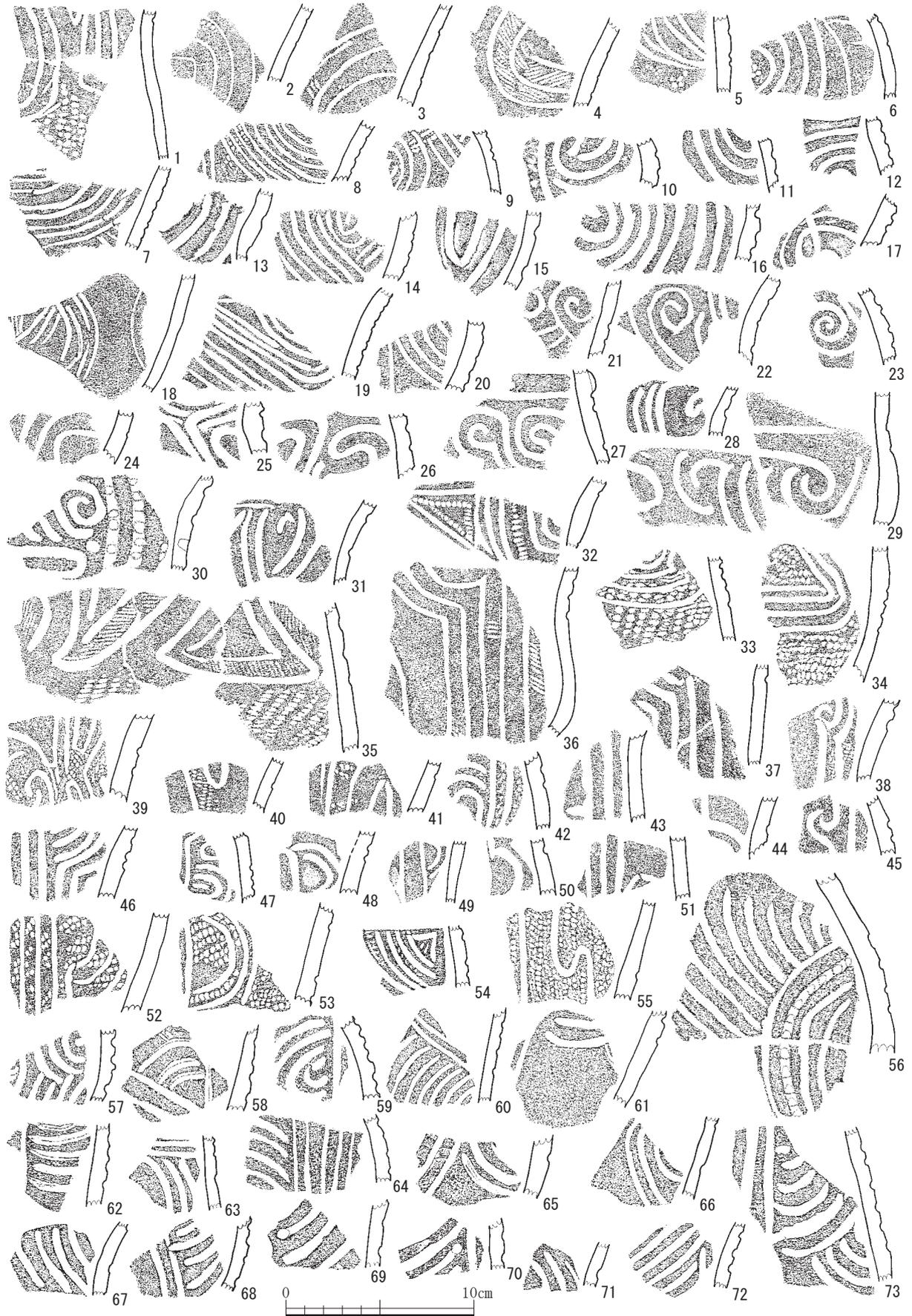
多重沈線による方形文や楕円形文を胴部に接続して施し、横帯する文様帯とするものを本種とする。

第60図51から60は多重沈線区画内に縄文を充填するものであり、51から53は多重の方形文を配している。54は三角形状の多重沈線下縁に斜行刻みを添わせ、垂下沈線下で横走沈線を途切らせている。55は鍵の手状に折れる沈線内に刺突文を加え、胴部に縄文を施す。また、57は垂下沈線下で横走沈線を途切らせる。59は楕円形もしくはU字状の区画文と見える。61から72、第63図1は方形文もしくは楕円形文を配すが、縄文の充填がみられないものである。62は垂下沈線帯の外側沈線を、多重方形文方にL字状に曲げている。64は方形文と楕円形文を組み合わせた文様かと思え、横走沈線が胴部文様帯の下縁を画しているのかもしれない。67は胴部上縁の破片であり、強くくびれて口縁部に至ると思える。胴部上縁にU字状の窪みをもつ沈線1条を横走させ、円文や多条縦位沈線を配している。68は下膨れの胴部片であり、上段に方形文を下段に円文や多重の楕円文を配すと思えるが、胴部を縦位に分割する垂下沈線は見えない。第61図1は楕円形文と方形文を組み合わせ、胴部を縦位に分割する沈線は見えず、各文様を接続・横帯させて胴部文様帯を構成するものと思え、胴部に縦走縄文を施す。2から18は円形文もしくは楕円形文を多重沈線で描くものであり、うち1から9は縄文を充填する。8に垂下沈線が見えるが胴部文様帯を縦位分割するかは不明である。14は楕円形の文様をY字状の多重沈線で囲み、16は中央に刺突を加え、沈線を多重の同心円状に施すものか。19は胴部上縁を画す横走沈線から半円形と略三角形の文様を多重に施す。20は垂下沈線2条と多重扇形文を配すものである。垂下沈線は胴部縦位分割線と見え、扇形文は充填文であろう。

B種 (第61図21～35)

多重沈線による数種の文様を組み合わせ、横帯する文様帯とするものを本種とする。

第61図21から29は胴部上縁を隆帯や沈線で画す土器であり、文様帯下縁の状況は不明である。いずれの土器も類似した文様をもち、渦巻文を囲む弧線文を配す。29は頸部と胴部の境を横走沈線で画し、先端を丸める横



第61図 有文深鉢形土器第22群実測図 (縮尺1/3)

走沈線とC字状の沈線を絡め、外周に弧線文を加えている。さらに、外側の弧線文をL字に折り先端を丸め、新たな弧線文と絡めている。30は弱く曲線を描き下る刺突を加えた沈線2条と、U字状の横走沈線に画された内側に、渦巻文と弧線文を組み合せた文様を配している。31は文様帯の上縁を横走沈線で画し、小さなC字状文の周囲を弧線文で囲む縦位文様を配している。32は方形文と三角文の組み合せ文様であり、刺突を加えた沈線を交えて横帯する文様を描く。33は地文縄文上に多重の円形文を描き、34は隅丸三角形の文様を描き、横走する縄文を充填する。35は三角形の文様の天地を逆にして配し、接続する横走文様としている。文様帯の下縁を区画する沈線はなく、各文様の頂部や辺を合わせて横帯文様に見せている。文様帯下縁には節の大きな縄文RLを施し、文様帯内には節の細かい縄文RLを充填する。

C種 (第61図36~73、第62図、第63図1~23、27~31)

胴部を縦位分割する垂下沈線を配し、区画内を斜行沈線で小分割して扇形文などの充填文を施すものを本種とする。

第61図36、37は胴部を縦位に分割する垂下沈線を曲げ、区画内にD字状の張り出しをもたせる。38、45は沈線末端を丸め、巴状に絡めて張出させる。39は縦位分割沈線を放射状に分岐させ、一部は沈線を巴状に絡ませており、縄文を充填する。なお、本例や40、41は、E種に含めるべきかもしれない。42は垂下沈線と扇形文の組み合わせであり、充填文として最も多い。46も垂下沈線際の扇形文を、垂下沈線の一部を張り出させて囲んでいる。47から53は垂下沈線にD字状の張り出しを加えている。54は胴部文様帯の上縁を画す横走沈線と、胴部を縦位分割する垂線間に配した扇形文である。55は地文縄文上に縦位沈線の一部をハンマー形に突出させる。56は垂下沈線の脇に、刺突を加えた沈線を含む多重沈線によるD字状文を描き、側縁に扇形文を配す。58は垂下沈線と斜行沈線間に扇形文を配している。69、70は扇形文末端に刺突を加えている。73は垂下沈線により区画された内部に扇形文を、方向を変えて多段に充填する例である。

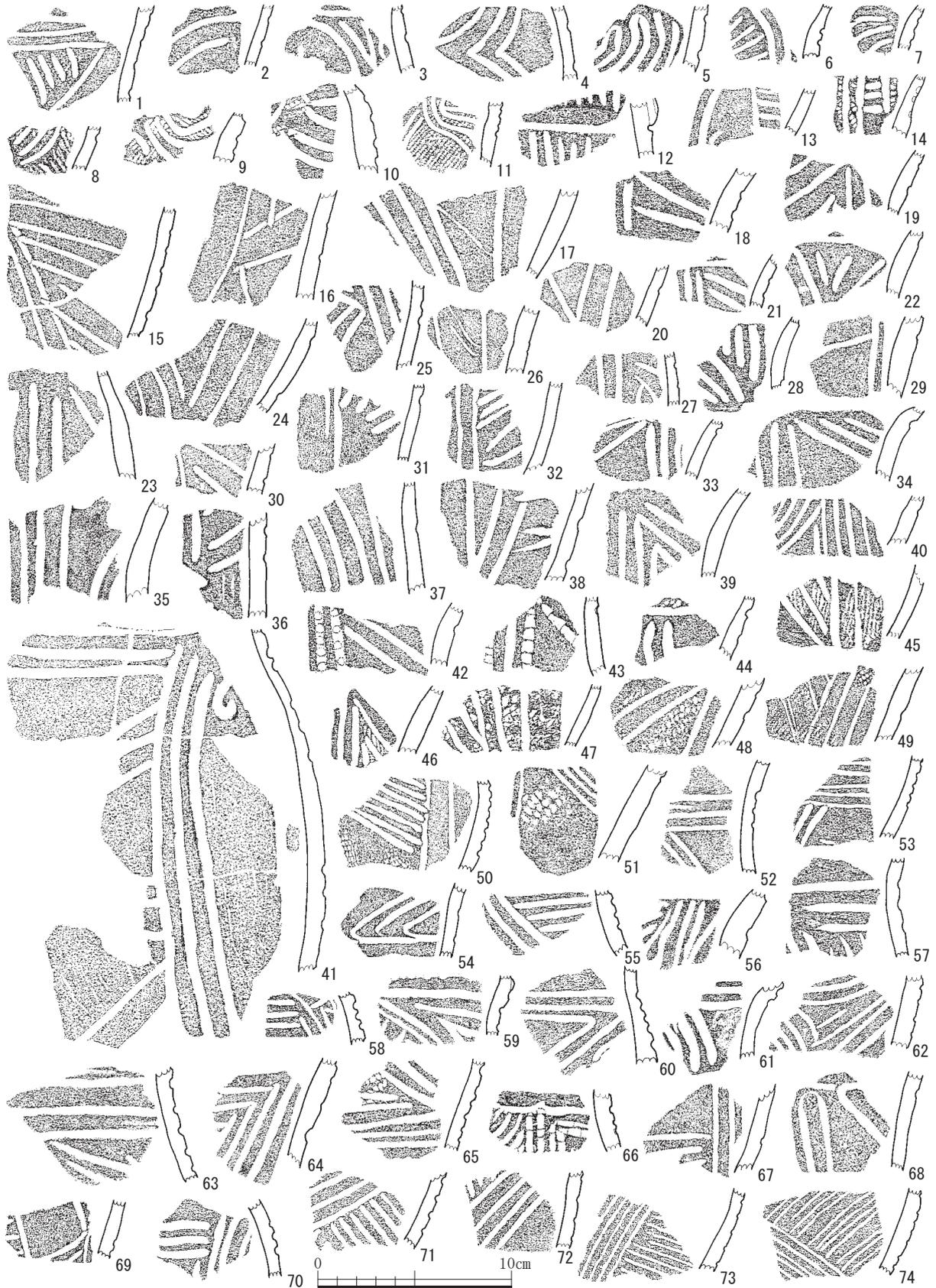
第62図1は胴部上縁を画す沈線と、区画を小分割する斜行沈線間に、扇形文を加えた例である。13、14は垂下沈線間に横走短沈線を密に充填する。15は垂下沈線から斜行沈線を充填文として多重に配し、16は斜行沈線の方向を変えて施す。18から40は垂下沈線と斜行沈線の組み合わせであり、斜行沈線には区画文と充填文がある。

第62図41は胴部上縁を1条の横走沈線で画し、大きく紡錘形状に折り返す、先端を丸めた3条沈線による縦位文様を、胴部上限沈線に添う2条の横走沈線を切って配している。各縦位分割文様の間には斜行する3条沈線を、方向を変えて階段状に配置している。三角形の小区画内へ扇形文などの充填は見られないことなどから、本例を第13群土器もしくは第19群土器として位置付けるべきかもしれない。50から74は垂下沈線と斜行沈線もしくは横走沈線と斜行沈線の例であり、うち71から74は斜行沈線どうしの切り合いであり、鋸歯状の文様を呈すのかもしれない。

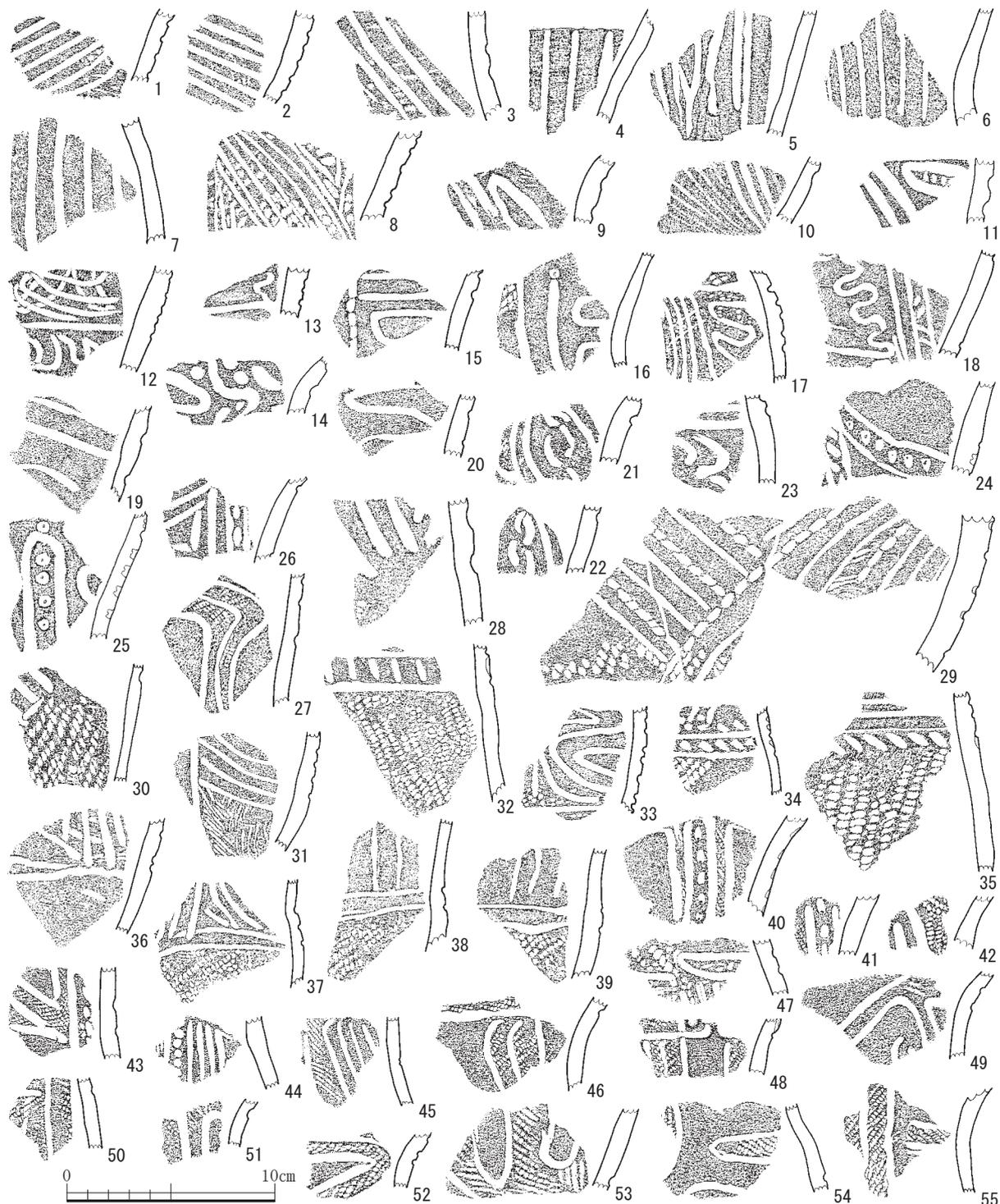
第63図1から10は斜行沈線や垂下沈線単体の状況である。8は地文縄文上に斜行沈線や縦走沈線を密に施す。11から20は楕円形の小区画や蛇行沈線の配置状況である。12は多重の弧状沈線を左右と横方向に施した文様下限を横走沈線で画し、沈線下に横走する蛇行沈線を添わせる。17、18は沈線で方形状に区画された内側に蛇行沈線を加え、19、20は大柄の蛇行沈線を下している。21、22はC字状の短沈線を鎖状に組み合わせ垂下させている。24から26は沈線区画内に刺突文を充填しており、E種に含め本群4類の胴部片とすべきものか。29は刺突を加えた沈線1条おきとする沈線帯を、鋸歯状に配す土器であり、縄文が見えることから胴部下縁の文様と見える。なお、31は扇形文下の空白部に、施文方向を変えて羽状に見せる縄文RLを充填している。

D種 (第63図32~39)

胴部文様帯下縁を横走沈線で画すものを本種とする。第54図3や第61図35などの胴部文様帯下縁の処理法と



第62図 有文深鉢形土器第22群実測図 (縮尺1/3)



第63図 有文深鉢形土器第22群実測図 (縮尺1/3)

は異なる例が見える。

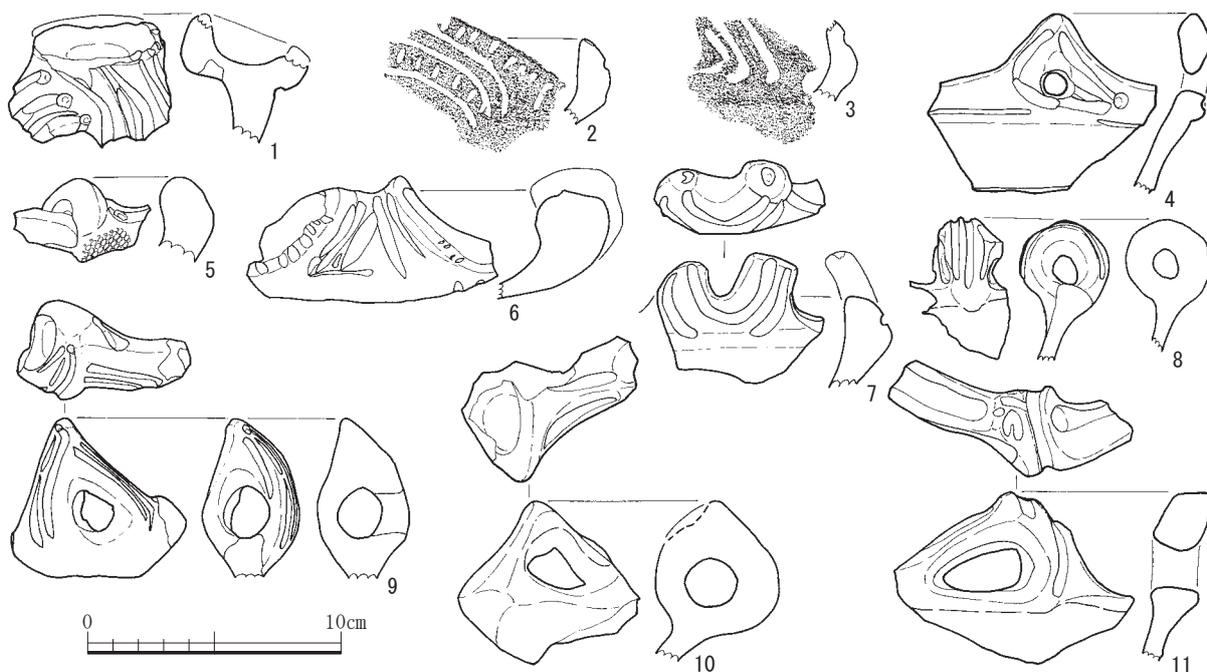
第63図32は文様帯の下縁を2条の並行沈線で限り、沈線間に縦位の短沈線を充填する。35は文様帯下縁沈線に添わせて、斜行する刻み目を加える。33は弱く内弯する胴部片であり、破片下縁に縄文が見えることから文様帯の下縁と見える。垂下沈線と文様帯下縁を横走する2条沈線で限られた区画内に、渦文や蛇行線文を配している。34は下膨れの胴部片であり、横走沈線と刺突文列各2条で文様帯下限を限り、刺突文を充填する2条の斜行沈線を区画内に配す。なお、横走沈線下には縄文LRを施す。36も胴部文様帯下縁の破片と思え、垂下

する4条沈線を横走沈線で限り、斜行沈線を区画内に配している。37は下膨れの胴部片であり、胴部を縦位分割する2条の垂下沈線を横走する2条沈線で限り、区画内に扇形文を充填する。なお、横走沈線下には縄文を施す。38、39は同一個体の胴部片であり、縦走沈線の下縁に2条の横走沈線を引いて画面を限り、横走沈線下には縄文LRを施す。

E種 (第63図24~26、40~55)

縄文や刺突文を充填する沈線帯を施すものを本種とする。本群土器4類の胴部片と思える。

第63図24は外反する口辺部片であり、刺突を加えて垂下する2条沈線に刺突を加える弧状沈線を繋げている。25も外反する口辺部片であり、U字状に閉じて垂下する沈線間に管状の刺突列を加え、側縁に蛇行沈線を添わせている。26は刺突を加えて垂下する沈線帯に、三角形の多重沈線区画を加えている。40も外反する口辺部片であり、U字状に閉じて垂下する沈線間に刺突を充填し、両側に方形の区画文を配す。一部に縄文の充填が見える。41も垂下沈線間に刺突を加え、縄文を充填する口辺部片である。42はU字状に垂下する沈線間に縦走沈線を1条加えて縄文を充填する。43は40、41と同一個体の口辺部片であり、刺突を加えた垂下沈線で胴部を縦位に分割し、三角形のモチーフを組み合わせ区画内に配して、縄文を充填している。44は弱く張りのある胴部片であり、刺突列1条を垂下させて側縁に縦走多重沈線を添わせ、三角形の区画文を配す。45は先端を鍵の手状に曲がって斜行する多重沈線と垂下沈線間に縄文を充填する。46は横走する2条沈線から垂下沈線1条を下して区画し、区画内に縦走する蛇行沈線2条を配す。横走沈線間および蛇行沈線間に縄文を充填する。47は地文縄文の胴部片であり、左右方に伸びる刺突を充填した楕円文を配し、交点から沈線3条を垂下させる。48は方形の小区画内に刺突を加える貼付文を配し、数条の垂下沈線を下して縄文を充填する。49は外反する口辺部片であり、渦文を加えた沈線帯に縄文を充填し、放射状の文様を描く。52は大きく蛇行する沈線間に縄文を充填する。53は胴部下半の破片であり、U字状の区画内に楕円形文を配し縄文LRを充填する。54は下膨れの胴部片であり、楕円形や円形の沈線区画内に縄文を充填する。55は縄文を充填する垂下沈線帯の脇に、縄文を充填する横走沈線帯を配している。



第64図 有文深鉢形土器第22群実測図 (縮尺1/3)

7類 (第64図)

本群土器の把手、突起を本類とする。

第64図1は盃状の把手であり、把手中央からしの字に渦を巻く隆帯1条を下す。多重沈線を隆帯に添わせ、末端には刺突を加える。2、3は大型の透かしをもつ横長橋状把手の橋状部の基部の破片である。2は断面略三角形の橋状部に沈線3条を加え、透かし孔周縁の沈線間に縦位の刻み目を加える。3は橋状部の基部に円柱状の突起を加え、外面に刺突を施す。橋状部には先端を丸めた沈線3条を配す。4は三角形の山形突起を配した口縁部片であり、突起下に貫通する円孔を穿つ。突起外面には円孔を囲む三角形の沈線区画を配し、頂点1箇所には刺突を加える。5は口唇部に縄状に編んだ隆帯を加える突起片である。6は頂部が窪んだ山形の橋状把手片であり、突起頂部の窪みから短沈線を放射状に伸ばす。橋上部側縁には刻みを施す。7は円柱状の突起を2個一対で施す。突起頂部には刺突を加え、両突起を結ぶU字状の沈線1条を施し、弧状沈線を添わせる。8は口縁部を横断する、円盤状の橋状把手である。把手内面から外面に3条沈線を引く。9、10は三角錐形の橋状把手であり、三方に透かしをもつ。9は正面の透かし孔の周囲に2から3条の沈線を添わせる。11も三方に透かしをもつが、大型の窓枠状透かしを正面に据える横長の橋状把手である。柱状部を環状に仕上げ、貫通する円孔を横長の窓状透かしまで伸ばす。支柱部上面には沈線1条を横断させる。橋状部を上面が浅く窪んだ方角状に仕上げ、頂部に突起1箇所を配し、突起下に刺突を加える。

又 第23群土器 (第65図、第66図1～16)

張りの弱い胴部が頸部でくびれ、大きく外反して開いて口辺部に至る土器である。口辺部文様帯と縄文を施す胴部文様帯の2文様帯構成の土器を基本とする。なお、一部に外反する口縁部を外方に肥厚させ、幅の狭い口縁部文様帯を加える3文様帯構成の土器も見える。

口辺部文様帯には、大柄の波状文や鋸歯文を配しており、文様帯の上下を区画沈線で限る例もあるほか、口端部に縄文を施す例もある。なお、胴部には縄文のみを施す例が多い。

本群土器は復元実測を施した土器以外に文様の全容を知れる例は少ないため、主に口辺部の文様帯構成および配置で大別し、口縁部の形態および文様構成により細別を行い、文様要素により細別を補った。

1類 外反して開く口辺部に1、2条の沈線により鋸歯文や波状文を描く。文様帯は口辺部と胴部の2文様帯で構成する土器。

2類 外反して開く口辺部に多重沈線により鋸歯文や波状文を描く。文様帯は口辺部と胴部の2文様帯で構成する土器。

3類 外反して開く口縁部を外方に肥厚させ幅の狭い口縁部文様帯とし、頸部文様帯、胴部文様帯の3帯で構成する土器。

4類 本群土器の胴部片を一括して本類とする。

1類 (第65図1～12)

外反して開く口辺部に1、2条の沈線により鋸歯文や波状文を描く。文様帯は口辺部と胴部の2文様帯で構成する土器を本類とする。

本類は文様要素から、口端部を素文とするもの(A種)、口端部に刻みを加えるもの(B種)に分ける。

A種 (第65図1～7)

外反する口端部を方角状に整えるものが多く、丸く収めるもの(第65図6、7)は少ない。1は沈線2条を鋸歯状に配し、2は1条で鋸歯文を描く。3から6は2条で鋸歯文を描いている。7は玉縁状の口唇部に沈線

1条を横走させ、2条の垂下沈線で縦位分割して多条の斜行沈線を加えている。

B種 (第65図8～12)

口端部を方角状に整え刻みを施す土器であり、12は山形状の小突起を加え突起部のみに刻みを施す。10は斜行沈線が弧状をなしており波状文かもしれない。11は斜行沈線が切り合っている。

2類 (第65図13～31)

外反して開く口辺部に多重沈線により鋸歯文や波状文を描く。文様帯を口辺部と胴部の2文様帯で構成する土器を本類とする。本類は文様要素から、口端部に刻みを加えるもの(A種)、口端部を素文とするもの(B種)に分ける。

A種 (第65図13～22)

外反する口端部を方角状に仕上げるものが大半を占める。13、14は同一個体であり、口端部に斜行する刻みを施し、口辺部上縁を2条の横走沈線で画し文様帯とし、3から4条の斜行沈線を人字状に配す。15はやや丸みのある口端部に短沈線を引き、波状文かと思える2条一組の沈線を口辺部に配す。16は口縁直下の横走沈線から垂下沈線を下し、交点に刺突文を加える。区画内には4条の斜行沈線を引く。17は口縁直下に2条沈線を横走させている。18は口端部に斜行する刻み目を施し、口辺部文様帯上縁を1条の横走沈線で画し、横走沈線と弧線を組み合わせた文様2、3条を配す。19、20は同一個体であり、口端部に直行する刻み目を施す。口辺部下縁を楔形の刺突列で画し、大柄の波状文を多条で描く。21は口端部をつま先状に仕上げ、斜行する刻み目を施す。口辺部下縁を横走沈線で画すと見え、区画内に2条沈線による波状文を配す。

B種 (第65図22～31)

外反する口唇部をつま先状もしくは、丸く収めるものが多い。22は沈線1条を横走させ口辺部上縁を画し斜行する多重沈線を施す。23は口辺部上縁を2条の横走沈線で画し斜行沈線を加えている。24は横走沈線で口辺部上縁を画し2条一組の斜行沈線を施す。なお、部分的に縄文の施文が見える。25は口唇部をつま先状に仕上げ、口辺部の上下を横走沈線で画す。2条一組の斜行沈線を、方向を変えて交互に配して鋸歯文を描く。また、鋸歯文の頂部は下側沈線でそろえる。胴部には斜行もしくは縦走縄文LRを施す。26、27は同一個体であり、口唇部をつま先状に仕上げる。口辺部上縁を2条の横走沈線で画し、縦位の垂下沈線で文様帯を縦位分割する。区画内には斜行沈線を充填するが、一部の沈線には刺突を加える箇所も見える。28は4条一組の沈線で口辺部上縁を画して斜行沈線を加える。29は口端部および口縁直下に沈線各1条を横走させて斜行沈線を施す。30、31は同一個体の口縁部片であり、口辺部上縁を横走沈線2条で画し、垂下沈線2条で文様帯を縦位分割する。区画内には先端を渦巻かせる大柄の波状文を加える。なお、口唇部に無節の縄文を施す。

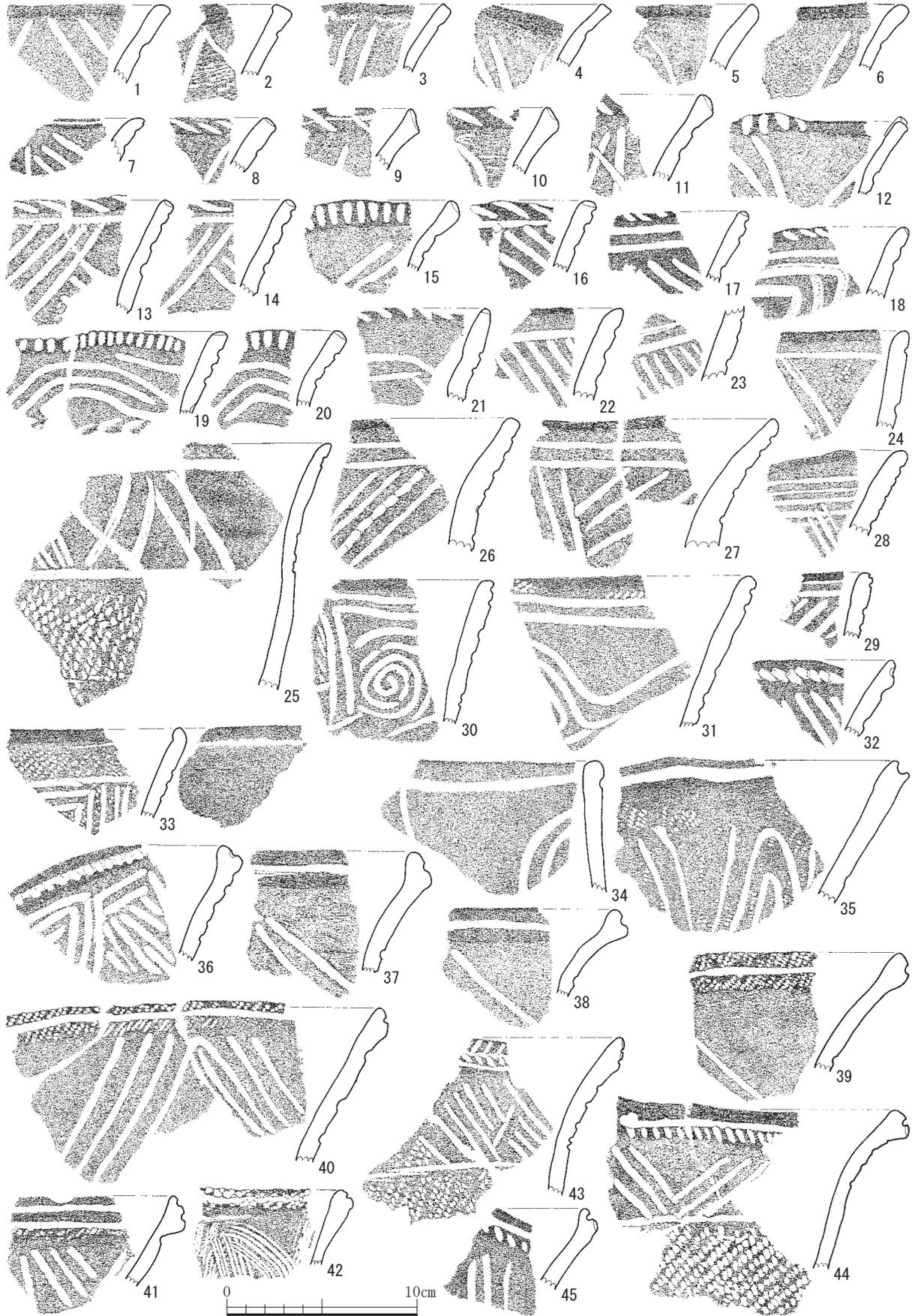
3類 (第65図32～44)

外反して開く口縁部を外方に肥厚させ幅の狭い口縁部文様帯とし、頸部文様帯、胴部文様帯の3文様帯で構成する土器を本類とする。本類は文様要素から、内面に沈線を加えるもの(A種)、口端部に刺突を加えた沈線を廻らすもの(B種)、口縁部を肥厚させ横走沈線を施すもの(C種)、口縁部に沈線と縄文を施すもの(D種)、口縁部に沈線と刻みを施すもの(E種)に分ける。

A種 (第65図33)

内面に沈線を加えるものを本種とする。

第65図33は外反する口縁部を短く内方に折り、内面の屈曲部に沈線1条を横走させる。口縁下をやや広く空け、横走沈線1条で口縁部文様帯上縁を画す。文様帯内には縦走沈線および、鍵の手に曲がる沈線を配す。口縁下には縄文を施す。なお、口辺部と胴部の2文様帯構成を採る可能性が高い。



第65圖 有文深鉢形土器第23群実測図 (縮尺1/3)

B種 (第65図32、36)

口唇部に刺突を加えた沈線を廻らせ、口縁部、頸部、胴部の3文様帯構成とするものを本種とする。

第65図32は口縁部をつま先状に収め、口端部にD字形の刺突を加える。頸部には斜行沈線を多重に施す。36は外反する口縁部を内方に肥厚させ、断面三角形状とする。狭く面をもたせた口縁部には、刺突を加えた沈線1条を廻らせ文様帯とする。頸部には三角形区画文や、斜行沈線を充填する台形状の区画文を接続して配す。

C種 (第65図34、35、37、38)

肥厚する口縁部に沈線を横走させ、口縁部、頸部、胴部の3文様帯構成を採るものを本種とする。

第65図34は壺型の器形を有す土器であり、口縁部上端を横走沈線で画し、多条の楕円文を加える。35は外反して肥厚する口端部を方角状に整え、沈線1条を施し口縁部文様帯とする。頸部には多条沈線による大柄の波状文を施す。なお、頸部には縄文を一部に施す。37は弱く内弯する口縁部下縁を肥厚させ断面三角形状とし、口縁部に沈線1条を横走させる。頸部には垂下沈線頂部から斜行する2条沈線を施す。38は外反する口縁部を外方に肥厚させ断面三角形状の口縁部とし、沈線1条を横走させる。頸部には斜行沈線を施す。

D種 (第65図39、40、42)

外反する口縁部を肥厚させ沈線および縄文を施し、口縁部、頸部、胴部の3文様帯構成を採るものを本種とする。

第65図39は外反する口縁部を外方に肥厚させ、横走沈線1条を廻らせ縄文LRを施す。40も外反する口縁部を断面三角形状に肥厚させ、沈線1条を廻らせ縄文を施す。頸部には大柄の波状文を沈線1条で描き、斜行沈線を添えて多重の沈線文様とする。42は外反する口縁部を断面三角形状に肥厚させ、口端部に面をもたせる。方角状に整えた口端部に沈線1条を加え縄文を施す。頸部に櫛描沈線による斜行文や波状文を施す。

E種 (第65図41、43～45)

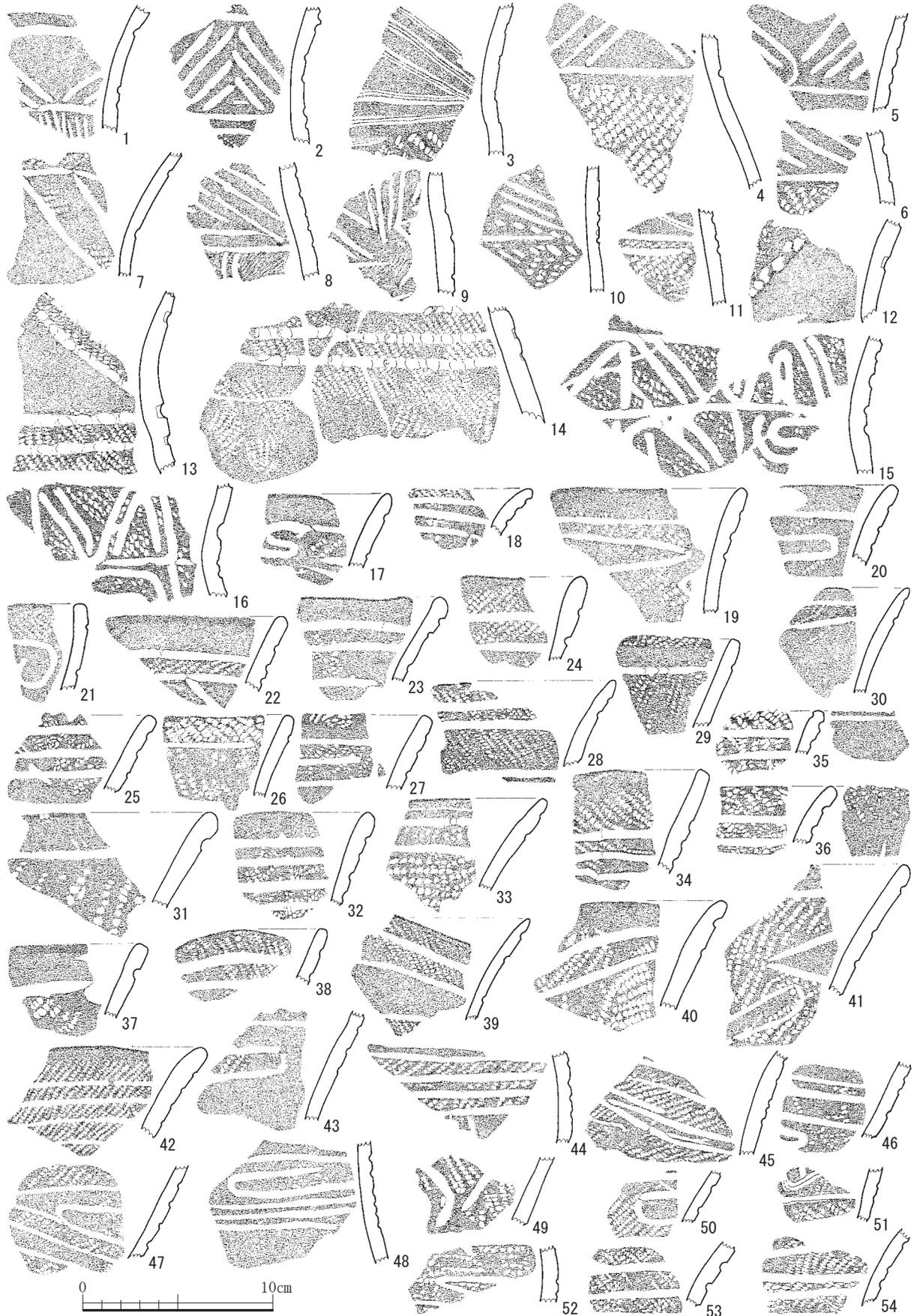
外反する口縁部を外方に肥厚させ、横走沈線、刻み目、縄文を施す土器を本種とする。

第65図41は外反する口縁部を外方に大きく肥厚させ、断面三角形状で有段となる口縁部とする。口縁部には横走沈線2条を配し、口縁部下縁外側に縄文を施す。頸部には垂下沈線を加えて文様帯を分割し、斜行沈線を入字状に重ねて鋸歯文を描く。43は外反する口縁部を外方に肥厚させて幅の狭い文様帯とする。沈線1条を横走させ、方向の異なる短沈線を矢羽根状に配して文様帯とする。頸部下縁を沈線1条で限り、間隔を空けた斜行沈線で菱形の区画を描き、区画内に斜行沈線を充填している。胴部には縄文LRを施す。44は張りの弱い胴部から大きく開いて口縁部に至る土器であり、外反する口縁部を外方に肥厚させて断面三角形状に整える。末端に刺突を加えた沈線を横走させ、沈線と口縁部下縁外側間に刻み目を施す。頸部下縁を横走沈線で画し、方向を変えた多重の斜行沈線で鋸歯文を描く。胴部には節の大きな斜縄文LRを施す。45は波状縁の土器であり、外反する口縁部を外方に肥厚させ断面三角形状に仕上げ、沈線と刻み目を施す。頸部には3条一組の斜行沈線を施す。

4類 (第66図1～16)

本群土器の胴部片を一括して本類とする。

第66図1は口辺部文様帯の上下を各々横走沈線1条で画し、区画内に2条一組の斜行沈線を、方向を変えて施し鋸歯文を描く。胴部には縦走縄文を施す。2は外反する口辺部を横走沈線で画し文様帯とし、先端を合わせた斜行沈線で鋸歯文を描く。胴部には縄文を施す。3は工具の繊維痕を残す沈線2から3条を横走させ文様帯下縁を画し、斜行沈線を加えている。なお、胴部には縄文RLを施す。4は張りのある胴部がくびれて口辺部で開く土器であり、口辺部文様帯下縁を横走沈線1条で画し、3条一組の斜行沈線の方向を変えて鋸歯状に



第66圖 有文深鉢形土器第23群、第24群実測図 (縮尺1/3)

配している。胴部には縄文LRを施す。5は斜行沈線の片側をU字状に丸めている。7は強く外反する口辺部片であり、横走沈線で区画された縄文帯で口辺部文様帯の上限を限り、縄文を充填する斜行縄文帯を配す。8、9は同一個体である。8は三角形の区画文の下縁に、2条沈線によるC字状の文様を加える。なお、横走沈線下には縄文を施す。9は多重垂下沈線の末端にC字状の突出を加え、文様帯の下縁を限ると見える横走沈線との交点から、斜行沈線を伸ばしている。胴部には無節の縄文を施す。10は文様帯の下縁沈線に斜行刻みを加え、刺突を加えた沈線を斜行させる。12から14は同一個体であり、張りのある胴部と外反する口辺部をもつ。口辺部下縁を、刺突を加えた3条沈線で限り、文様帯内には三角文を配す。沈線間および胴部には縄文LRを施す。15、16も同一個体であり、垂下沈線を中央に配した三角文を2段に配し、一部にはS字状に蛇行する沈線も加えている。地文として縄文RLを施す。

ネ 第24群土器 (第66図17~54)

下膨れの胴部が頸部でくびれ、外反して口縁部に至る土器であり、平縁の土器を主体とする。沈線により文様帯の上下端を画し、区画内を垂下沈線で縦位分割し、さらに斜行沈線で三角形区画に小分割して口辺部文様帯とする。各区画内には多重沈線による扇形文を充填する例もある。第22群土器に比べ、使用する多重沈線は数を減じており、比較的細い沈線を使用する。口辺部文様帯内には、節の細かい縄文を地文もしくは充填縄文として施し、胴部には大粒の節をもち条が縦走もしくは横走する縄文を施す例が多い。

本群土器は資料的に零細であり、口辺部片(1類)と胴部片(2類)に分けるに止める。

1類 (第66図17~42)

外反する口辺部を有する土器であり、口唇部を丸く収めるものや、つま先状とするもの、方角状とするものなどがある。17は縄文を充填する横走沈線帯を、S字状の単位文で区切る。18は強く外反する口辺部に、縄文を充填する横走沈線帯を配す。下縁の沈線にC字状の区切り文が見える。19は外反する口縁下に横走沈線を廻らせ、大きく蛇行する沈線を2箇所到下すかと見え、縄文を充填する。21は弱く内弯する口縁部に、先端を丸めた横走沈線を口縁下に加え縄文を施す。22は口縁下の横走縄文帯から斜行する縄文帯を下す。23は口辺部に2条一組の横走沈線を2段に配し縄文を施す。24は口唇部を内方に肥厚させる土器であり、口縁下に縄文を充填する横走縄文帯を配す。25は外反する口辺部片であり、縄文を充填する3条の沈線を横走させる。26は外反する口端部を方角状に整え、口縁下に沈線1条を廻らせ、口端部および口縁部に縄文を施す。27は外反する口辺部片であり、方角状に口端部を整える。U字状に連結する沈線間に横走沈線1条を加え、口端部および区画内に縄文を充填する。28は外反する口辺部片であり、口唇部をつま先状に仕上げる。沈線2条を2段に横走させ、細かい縄文RLを施す。30も口唇部をつま先状に仕上げ、横走する2条沈線による縄文帯を1条配す。31は外反する口辺部を外方に肥厚させ、口唇下を横走する沈線1条下に節の大きな縦走縄文を施す。32は外反する口辺部に多条沈線を横走させ縄文を施す。33は外反する口辺部に沈線2条を横走させ横走縄文を施す。34は口端部を方角状に整えて地文に縄文を施し、口唇部との間隔を空けて横走沈線を配す。なお、横走沈線は途切れを見せる。35も地文に縄文を施すほか口端部にも縄文を施し、2条の横走沈線を口縁直下に横走させる。36は口縁部内面にも縄文を施す。38は大きく波打つ波状縁の土器であり、口縁波形に合わせて幅広で浅い沈線2条を施し縄文を充填する。39は波状縁の口辺部片であり、口辺波形に合わせた沈線区画をもつ縄文帯を1帯と、横走する縄文帯を配し縄文RLを充填する。40は口縁下に2条一組の沈線を波打たせ、地文となる縄文LRを施す。41は口縁直下に沈線1条を廻らせ縄文LRを施し、沈線による三角形や長楕円形の区画内を磨消する。42は口辺部に横走沈線を多重に配し縄文を充填する。

2類 (第66図43～54)

第66図43は外反する口辺部片であり、縄文を充填する矩形区画を配す。44は内弯する口辺部下縁の破片と思え、横走する沈線帯下に渦巻文状の文様を配す。46は横走沈線下に蛇行沈線を加える。47は弱く内弯する胴部片であり、鋸歯状の区画帯から横走沈線を派生させる。48は横走沈線帯間にU字状の沈線を加える。49は弧線文、50は矩形の区画文内を磨消している。また、51、52は蛇行する沈線文を配す。

ノ 第25群土器 (第55図11、第67図1～11)

地文に縄文を施し、やや膨らみのある胴部が頸部でくびれ、外反して口縁部に至る土器を本群とする。口唇部をやや肥厚させ内面側に摘み出し、内面をスロープ状に仕上げる例も見える。また、肥厚する口縁部に沈線や刻みを施し文様帯とするものや、外反する口縁部の上下を横帯する沈線で区画し文様帯とし、沈線で縦位に分割する例も見える。

第55図11はやや張りのある胴部をもつ。頸部を無文とするものと思え、胴部には地文として縄文RLを施す。区画文斜辺に蛇行部を設けた逆三角形状の方形区画を二重に配し、区画中心部にハンマー形の文様を描く。

第67図1、2は同一個体であり、外反する口縁部を外方に肥厚させ、断面三角形状の幅の狭い口縁部文様帯とする。口縁部には沈線1条を廻らせ、口縁部下縁外側に刻み目を施す。また、無節の縄文を施す頸部には沈線2条を配す。3は口端部に方角状に面をもたせ、横走沈線で口縁部上縁を画して斜行沈線を多重に加える。4は地文に横走縄文LRを施し、多重の渦巻文や弧線文を配す。5、6、8は同一個体の胴部片であり、地文縄文LR上に、胴部上縁を画す横走沈線を引き、垂下する2条沈線で文様を縦位分割する。垂下沈線の上端部には、渦巻文や渦文を充填するD字状の張出し文を多重沈線で描く。7は縦走縄文RL上に弧線文を重ねて配している。9は先端が渦巻く沈線により胴部を縦位分割し、横走する2条沈線により方形区画を設けるものと思え、区画内には斜行沈線や区画文より派生する渦巻文を加えている。なお、沈線区画内および胴部下半に縄文RLを施す。10は胴部に地文として節の大きな縦走縄文RLを施す。横走沈線1条と横走沈線2条で、頸部と胴部上縁を画し、垂下沈線3条を胴部に配す。11は無節の縄文を地文とし、U字状に折り返す垂下沈線と胴部上縁に配した横走沈線により、頸部に方形区画を設ける。

ハ 第26群土器 (第55図13、第67図12～40)

胴部から直線的に外反して開き口縁部に至る朝顔形器形の土器であり、平縁を基本とするが、突起を施し小波状口縁とする例もある。口端部を拡張して上面を平坦とし文様帯とする例や、断面三角形状に肥厚させて幅の狭い文様帯とする例、器面全体を幅広く文様帯とする例もある。文様帯の縦横の分割に隆帯を使用する例もある。

本群は良好な例に乏しいが、文様帯の配置や文様要素から、以下の4類に分けた。

- 1類 外反する口縁部を内方に肥厚させて上面を向く文様帯を配すもの。
- 2類 外反する口辺部を広く文様帯とするもの。
- 3類 外反する口縁部を外方に肥厚させて断面三角形状を呈す幅の狭い文様帯とするもの。
- 4類 本群土器の胴部片を一括する。

1類 (第67図12～16)

外反する口縁部を内方に肥厚させて上面を向く文様帯を配する朝顔形器形の土器を本類とする。

第67図12は肥厚し上方を向く口縁部に、大型の円孔を陥入する円形の貼付文を加え、両側に2条沈線を伸ばし文様帯とする。口辺部外面は4条の垂下沈線で文様帯を縦位に分割し、2条一組の横走沈線を3段に配して



第67図 有文深鉢形土器第25群、第26群実測図 (縮尺1/3)

いる。13、15は肥厚し上方を向く口縁部にC字状の隆帯を配す。隆帯内側には円形刺突を加えて、両方向に幅広の沈線1条を伸ばす。口辺部外面には沈線3条を下す。14は波状を呈する口縁部片であり、波頂部に円孔を加える。また、末端に刺突を加える沈線1条を横走させる。16は内外に肥厚し、上方を向く口縁部に山形突起を加え、口唇部に刻み目を施す。円盤状に口縁部を横断する突起上面には沈線1条を加え、両側に円孔を施す。口縁部内面には、末端に刺突を加えた幅広の沈線1条を両方向に伸ばす。口縁部外面には突起を巻き片掛けする沈線1条を配す。

2類 (第67図17～25、29～36)

口辺部外面を広く文様帯とする朝顔形器形の土器を本類とする。

第67図17は外反する口縁部に、横走沈線2条を加えた山形突起を配す。口辺部外面には、突起下で間隔を空けて多重沈線を垂下させる。18は外反する口縁部に山形突起を配し、中央を押えて二山状とし、突起下にはやや斜行する沈線3条を下す。19、25は外反する口辺部に短沈線3条を下している。20から23は口縁直下に2条沈線を横走させ、下縁の沈線を途切らせて垂下沈線を加えるものであり、20、22、23は横走沈線の下縁側を空けて縦走沈線を組み入れる。21は下縁側の横走沈線を切って縦走沈線を配す。24は口縁部付近の破片であり、下縁沈線を曲げて垂下させる。26から36は口縁部直下に横走沈線を廻らせる例であり、結節沈線とするもの(29、31)や縄文を施すもの(35、36)も見える。

3類 (第55図13、第67図26～36)

外反する口縁部を外方に肥厚させ、断面三角形の幅の狭い文様帯とする朝顔形器形の土器を本類とする。

第55図13は直立する体部を外方に屈曲させ、直線的に開いて口縁部に至る朝顔形器形の土器であり、口縁部に双頭状の小突起4単位を配す。突起頂部には刺突2点を加えて沈線で連結する。また、突起外面には貫通する円孔を2箇所配す。なお、突起両側の口端部には沈線1条を伸ばす。突起下から隆帯2条を垂下させ、体部上縁の屈曲部を廻る隆帯に繋げる。垂下する2条の隆帯は間隔を狭め、さらに下方に向かわせる。隆帯両側縁には末端に刺突を加えた沈線を添わせる。なお、間隔を狭めた2条の隆帯上には、末端に刺突を加えた沈線を施している。

第67図26は外反する口縁部に双頭状の小突起を加え、突起脇の口端部に沈線を配す。口縁下を広く空け、突起下に配したU字状の単位文を挟み、末端に刺突を加えた沈線を両方向に伸ばす。27は沈線1条を加え口縁部下縁外側に刻み目を施す。口辺部には沈線1条を横走させる。28、29は口縁部を外方に肥厚させ、断面三角形の幅の狭い文様帯とする。28は刺突を加えた沈線1条を横走させ、口縁部下縁外側には刻みを施す。30は口端部を方角状に整え、口辺部外面には沈線3条を横走させる。34は口縁下に3条の沈線を横走させ、沈線下縁より2条沈線を垂下させる。35は口縁下に沈線1条を横走させ、口端部および口縁部上縁に縄文を施す。36はつま先状に伸ばした口唇下に2条の沈線を横走させ、縄文を充填する。

4類 (第67図37～40)

本群土器の胴部片を一括して本類とする。

第67図37は口縁部付近の破片であり、たが状に横走する太い隆帯上に、沈線および先端を鍵の手に曲げる沈線を施す。隆帯から刻みを加え扁平な隆帯を分岐させ、側縁に沈線を添わせる。38は体部片であり、刺突を加えた円形の貼付文を三角形の頂点に配し、下縁の円形貼付文から隆線を垂下させる。なお、垂下する隆線間には刺突列を配す。39は体部下縁の破片と思え、鏢状に張り出し横走する隆帯に、紡錘形の刺突を加えた垂下隆帯を繋ぎ、交点には円形刺突を加える貼付文を配する。区画内には櫛状工具による文様を描くが、詳細は不明である。40は片掛け状に横走する刺突を加えた2条沈線と、U字状に繋がる刺突を加えた沈線間に、円形刺突

を加えた貼付文を配す土器であり、文様施文部には縄文を施している。

ヒ 第27群土器 (第68図1～28)

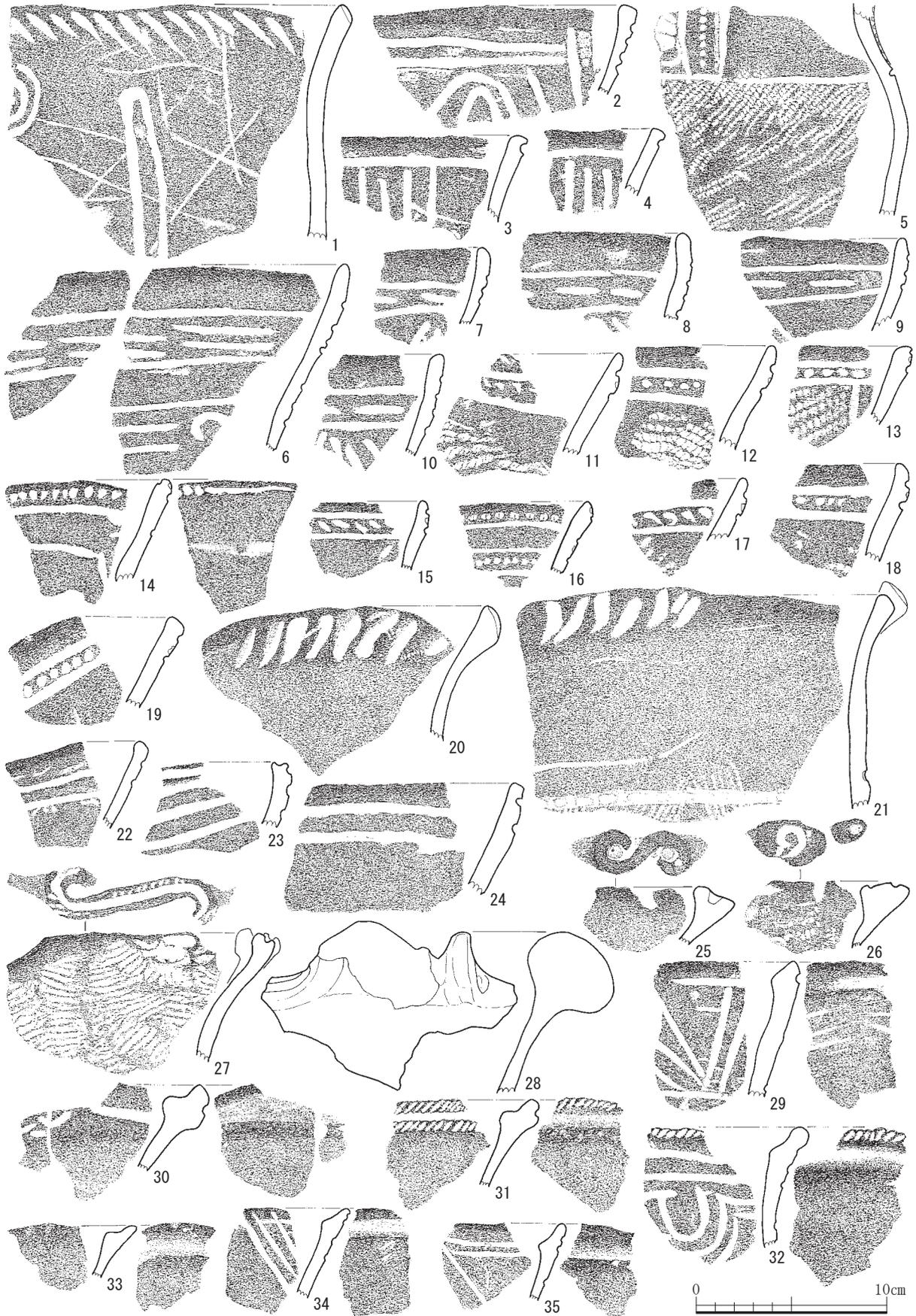
やや張りのある胴部が内弯気味に開いて口縁部に至る土器であり、口端部にS字を施した突起を施す例や、口端部の一部に刻み目を施すものもある。口縁部を横走・垂下する沈線で区画し、刺突や短沈線を充填する例などもある。

第68図1は弱く張る胴部から内弯気味に開く土器であり、口縁部に斜行刻みを施し、胴部には頂部をU字状に折り返す沈線を配す。2、5は同一個体の土器と思え、張りのある胴部が頸部でくびれ、内弯気味に開き口縁部に至る。口端部を方角状に整え、口縁下に配した2条の横走沈線と、頸部と胴部の境に配した横走沈線で文様帯を画す。文様帯内は刺突を加えて弱く盛り上げる隆線側縁に、沈線を配して縦位区画し、区画内に大柄の波状文を多条で配す。3、4も同一個体であり、内弯気味に開く口縁部を有し、口端部を方角状に整える。口縁部上限を横走沈線1条で画し垂下沈線を施す。6は内弯気味に開く口縁部片であり、横走する短沈線を充填する2条一組の横走沈線帯を2段に配す。なお、下段には円文が見え、単位文かと思える。7から10は類似した文様をもつ。内弯気味に開く口縁部片であり、口縁下に短沈線を充填する横走沈線帯を配し、区画から斜行沈線を下す。11から19は2条の横走沈線間に刺突列を充填する口縁部片であり、11、12は沈線帯下に縄文を施す。13は垂下沈線で区画し、区画内に縄文を充填する。14は内面に刺突文を加えて沈線を横走させ、外面には内面の刺突施文部に合わせ横走沈線2条を止め、下縁沈線を垂下させる。16は刺突文帯を2段に配す。17から19は側縁に沈線を加えた隆線上に刺突を加える。19は波状縁の口縁部片であり、沈線間に刺突を加える。20、21は同一個体であり、外反して開く口縁部を断面三角形に肥厚させる。内弯する低い山形の突起を加え、突起部に斜行する幅広の短沈線を加える。なお、頸部と胴部の境には2条のD字状刺突を加えた沈線を横走させ、胴部に縄文を施す。22から24は内弯気味に開く口縁部に横走沈線を配すものであり、22は波状縁、23は口端部に浅く窪みをもたせる。25から27は口端部にS字状の突起を加える土器であり、25はS字沈線両端に刺突を加える。26は突起上にC字状文を加え、側縁に刺突を施した小突起を加える。27は内弯する口縁部に横長のS字状突起を横置し、上面にS字沈線を加える。なお、S字両端は外面に突出する。胴部および突起には縄文Lを施す。28は外反して開く口縁部に配した横長の橋状把手の支柱部片と思え、柱状部横に口縁部を横断する円孔を加えた円盤状の突起を付加する。なお、透かし部の口縁には沈線1条を横走させ、頸部を無文としている。

フ 第28群土器 (第68図29～35)

口唇部を内方に肥厚させ鏝状に仕上げる土器であり、器形および文様帯の全容を把握できる例はない。文様には鋸歯状の多条沈線や、多条の横走沈線の一部をU字状に窪ませる例などが見える。

第68図29は内面への突出部の上面に浅く窪みをもたせており、突出部の下縁をなぞっている。外面には横走沈線2条で区画した内側に多重沈線で鋸歯文を配す。30は波状を呈する口縁部片であり、内方だけでなく外方にも肥厚して沈線1条を横走させるほか、単位文を配すかと思える。31も内方だけでなく外方へも肥厚して沈線1条を横走させ、幅の狭い口縁部および口端部に縄文を施す。32は内方に突出する鏝上面を指頭で横に撫でる。外面には2条の沈線を横走させて文様帯上縁を画し、間隔を空けて施す2条沈線間にU字状の沈線3条を加えている。なお、口端部には縄文を施す。33は内面の鏝上面に浅く幅の広い沈線1条を加える。34は内面への鏝の突出が弱く、上面に浅い撫で状の窪みをもたせる。外面には多重の斜行沈線を施す。35は鏝の突出位置が他に比べ下がり、上面に浅い撫で状の窪みをもたせる。外面には横走する2条沈線を切る、斜行沈線2条を施す。

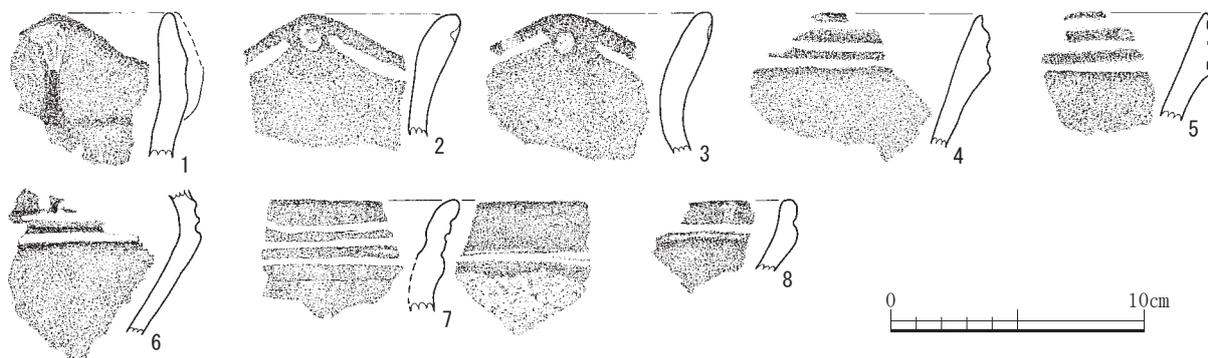


第68圖 有文深鉢形土器第27群、第28群実測図（縮尺1/3）

へ 第29群土器 (第69図)

張りのある胴部がくびれ、頸部から外反して開いて外傾もしくは直立する口縁部に至る土器であり、平縁と波状縁の例がある。文様帯は口縁部と胴部の2文様帯構成を採り、各文様帯には刺突文や貼付文による単位文と横走沈線文から成る横位展開する文様を配す。無文地を基本とする。

第69図1は波頂部直下に垂下貼付文を配す。口頸部の屈曲がわずかに認められる。2、3は同一個体である。口辺部に竹管状工具による円形刺突文とやや幅広の単沈線文を配す。4から6は同一個体である。平縁で短く肥厚する口縁部と胴部屈曲部上方に多重沈線文を配す。6では沈線を区切る単位文の一部が確認できる。7は複合口縁状となり、口端部はすばまる。内面に浅い沈線を施す。8は口唇部直下に単沈線文を配す。



第69図 有文深鉢形土器第29群実測図 (縮尺1/3)

第2節 無文深鉢形土器

出土した無文深鉢形土器は大きく4群に分けた。無文深鉢型土器の各群の内容は次のとおりである。

- 第1群土器 縄文土器
- 第2群土器 櫛描文土器
- 第3群土器 素文土器
- 第4群土器 条痕文土器

ア 第1群土器 (第70図～第77図)

器面全面に縄文を施す土器を本群とする。器形の全容が知れる土器は少ないため、口縁部の形状を主に以下の類に分けた。

- 1類 内弯する口縁部を有する土器。
- 2類 弱く内弯する口縁部を有する土器。
- 3類 外反する口縁部を有する土器。
- 4類 外反する口縁部を肥厚させ面をもたせて、口端部に刻みを施す土器。
- 5類 内弯する口縁部を肥厚させて、稜をもたせる土器。
- 6類 外反する口端部に刻みもしくは、大型の円孔を陥入させる土器。
- 1類 (第70図1、2、5、6、第73図、第74図1～12)

内弯する口縁部を有する土器を本類とする。

本類は口縁部の形状から、内弯する口縁部を肥厚させない土器（A種）、内弯する口縁部を肥厚させる土器（B種）に分ける。

A種（第70図6、第72図1～40）

内弯する口縁部を肥厚させない土器を本種とする。本種の口唇部形態には、丸く収めるもの、方角状に仕上げるもの、つま先状に伸ばすものなどがある。また、口端部への縄文施文にも有無がある。

第70図6は緩く内弯して口縁部に至る土器であり、口端部を方角状に仕上げる。胴部および口端部に比較的大粒の節をもつ斜縄文LRを施す。第72図1～7は口唇部を丸く収めるものである。3は頸部でくびれて、内弯して開き口縁部に至る土器であり、縄文RLを粗く施す。4は口縁部を強く内弯させる土器であり、縄文Lを施す。第72図8～28は口端部を方角状に仕上げる土器であり、第72図18～28は口端部に縄文を施す。17は4に似た口縁部形態をもつ波状縁の土器であり、節の扁平な縄文RLを施す。19は内弯して直立する口縁部をもち、口端部を方角状に仕上げ縄文RLを施す。20は縄文Lを口端部および口縁部に施す。27は内面をスローブ状に仕上げ、面をもたせた口端部および口縁部に縄文RLを施す。第72図29から40は口唇部をつま先状に伸ばす土器であり、37から40は口端部に縄文を施す。第72図29、35、38は口縁部を直立気味に内弯させる。34は斜縄文RLRを施す。38は口端部および口縁部に縄文Lを施している。

B種（第70図1、2、5、第72図41～58、第73図1～12）

内弯する口縁部を肥厚させる土器を本種とする。本種にも口唇部の仕上げや、口端部への縄文施文の有無などバリエーションがある。

第72図41から43は口端部を方角状に整え、外面に玉縁状の弱い調整痕を残すものであり、41は調整痕が縄文に被っている。第70図1、第72図44から48は口縁部を内方に肥厚させる例である。

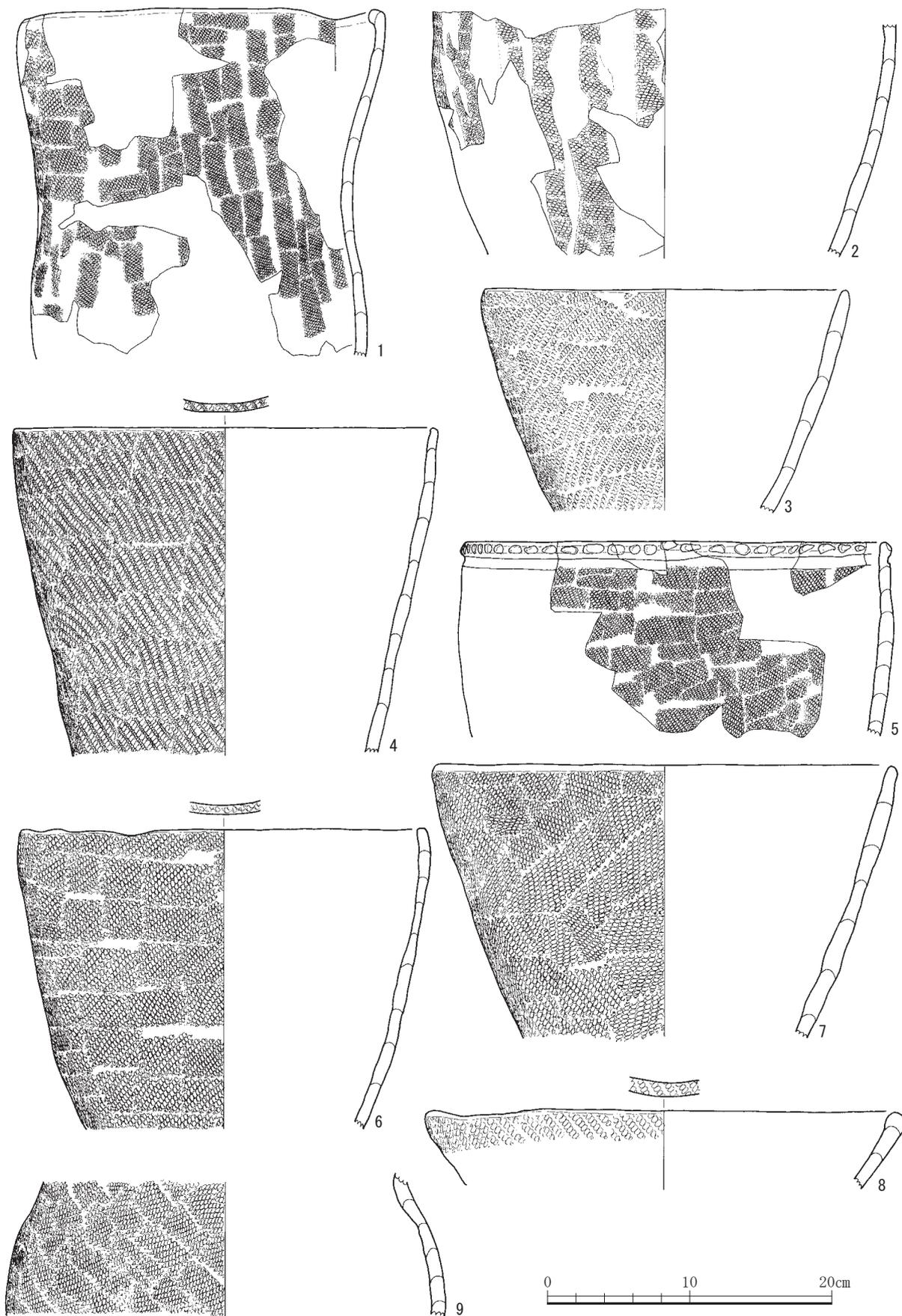
第70図1は口縁部を内側に巻込むように肥厚させる土器である。口端部を平坦に整え、一部に施文の乱れはあるものの、口縁部では縄文原体を横方向に接続して施文し、外反する頸部以下では、縄文原体を縦方向に間隔を空けて施文し、垂下する縄文帯を配している。なお、縄文LRを使用する。第70図2も垂下する縄文帯を配すが、大まかに縄文を配した後、縄文帯の周縁を削り落して帯状に仕上げている。第72図44は内弯して開く口縁部を直立させ、口唇部を内方に弱く肥厚させる。口縁部に横走る縄文帯を配し、頸部以下には間隔を空けて垂下する縄文帯を配すものと思え、縄文LRを施す。46は斜行縄文を口縁下に配し、条が横走る縄文LRを口縁部に施す。47は波状縁の土器であり、節の大きな縄文RLを施す。48は肥厚する口端部に縄文を施す。

第70図5、第72図49から53は外方に肥厚する口縁部に、刺突などを加える土器である。第72図5は弱く張った胴部から直立気味の口縁部に至る土器であり、口唇部を外方にD字状に肥厚させ大型の刺突を加える。なお、肥厚部の下縁を横に撫でて浅皿状の窪みを付け、体部に縄文LRを施す。第72図49は肥厚する口縁部の内角に刻み目を施す。50は口端部に刺突を加える。51、52は口唇部を短く内側に折り、大型の刺突を加える。53は口縁部に縄状に編んだ肥厚部を加える。第72図54から58は、口唇部を内側に引き出す例であり、口縁部を面的に肥厚させる。54は扁平な縦走縄文RLを施し、57は節が細長い縦走縄文を、口端部および口縁部に施す。

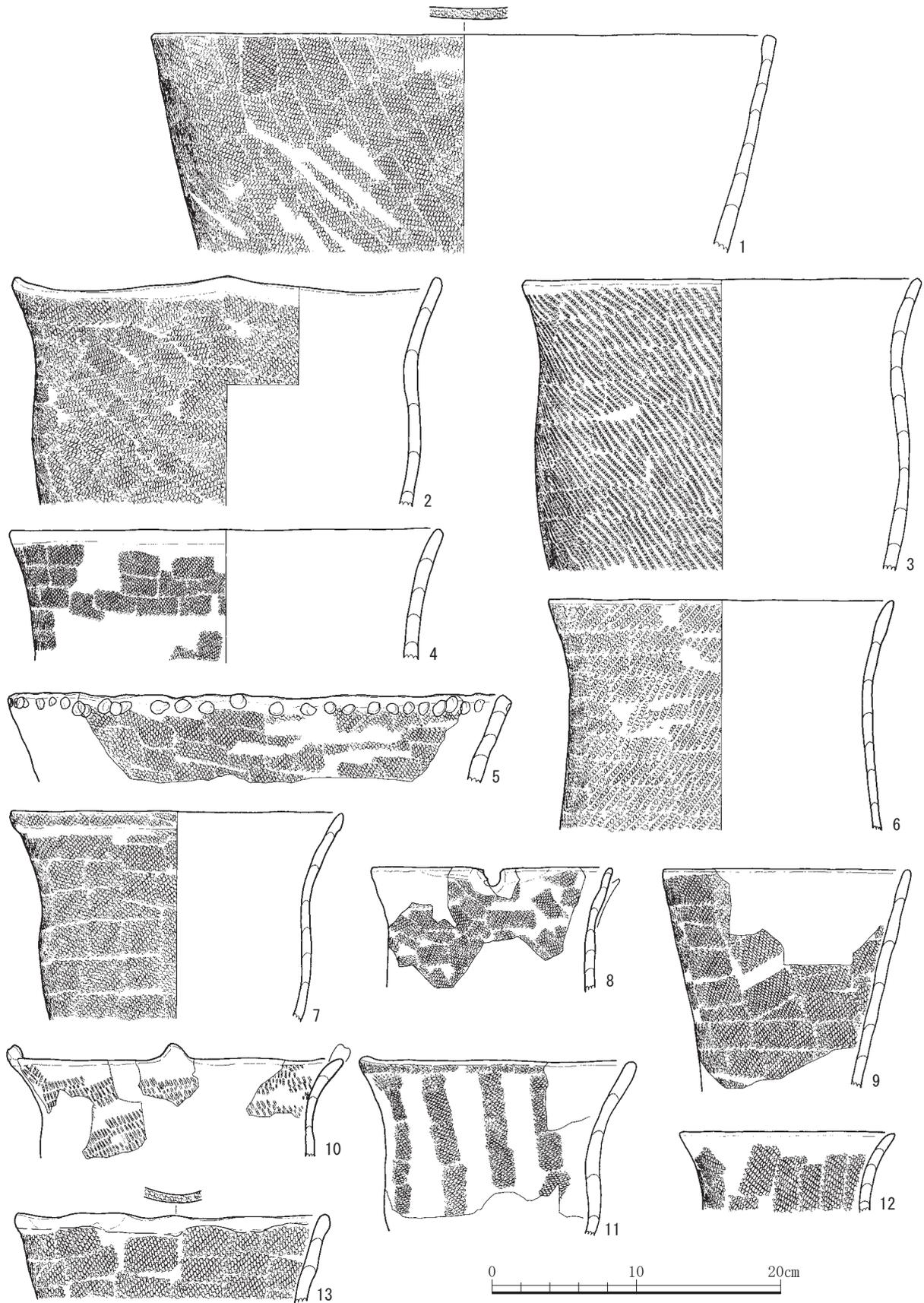
第73図1から12は口縁部を外方に面的に肥厚させる土器であり、10から12は口端部へも縄文を施す。1、4、5は節の大きな縄文RLを口唇部では斜行させ、口縁部以下で縦走縄文とする。3は口縁部に横走縄文を施す。6は縄文の回転方向を変えて羽状縄文とする。9は波状縁の土器であり、口縁部に斜縄文を、胴部に縦走縄文を施す。

2類（第70図3、4、7、8、第71図1、第73図13～48、第74図1～31）

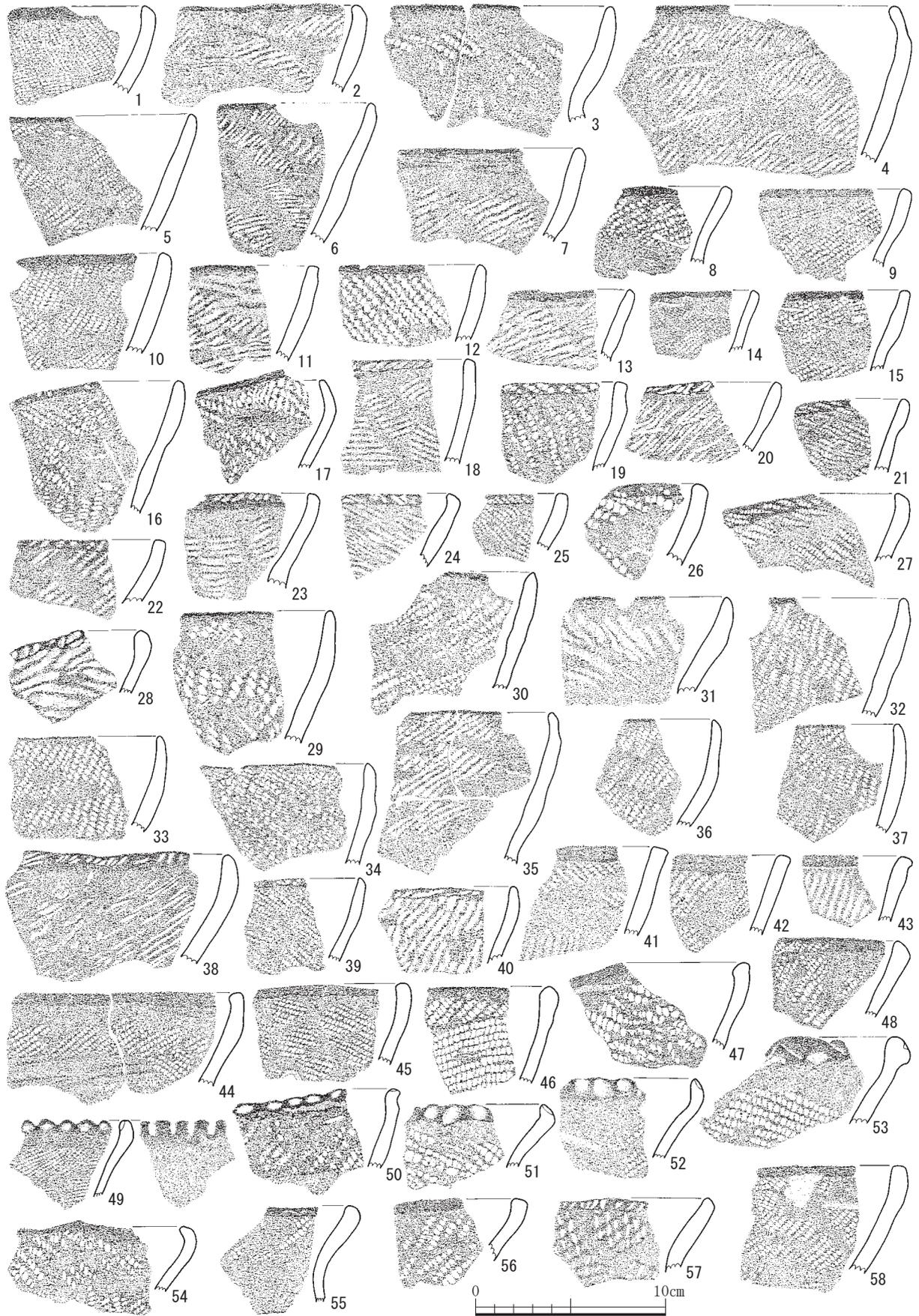
胴部から内弯して開く土器および、やや張りのある胴部が頸部で外反して内弯気味の口縁部に至る土器を本



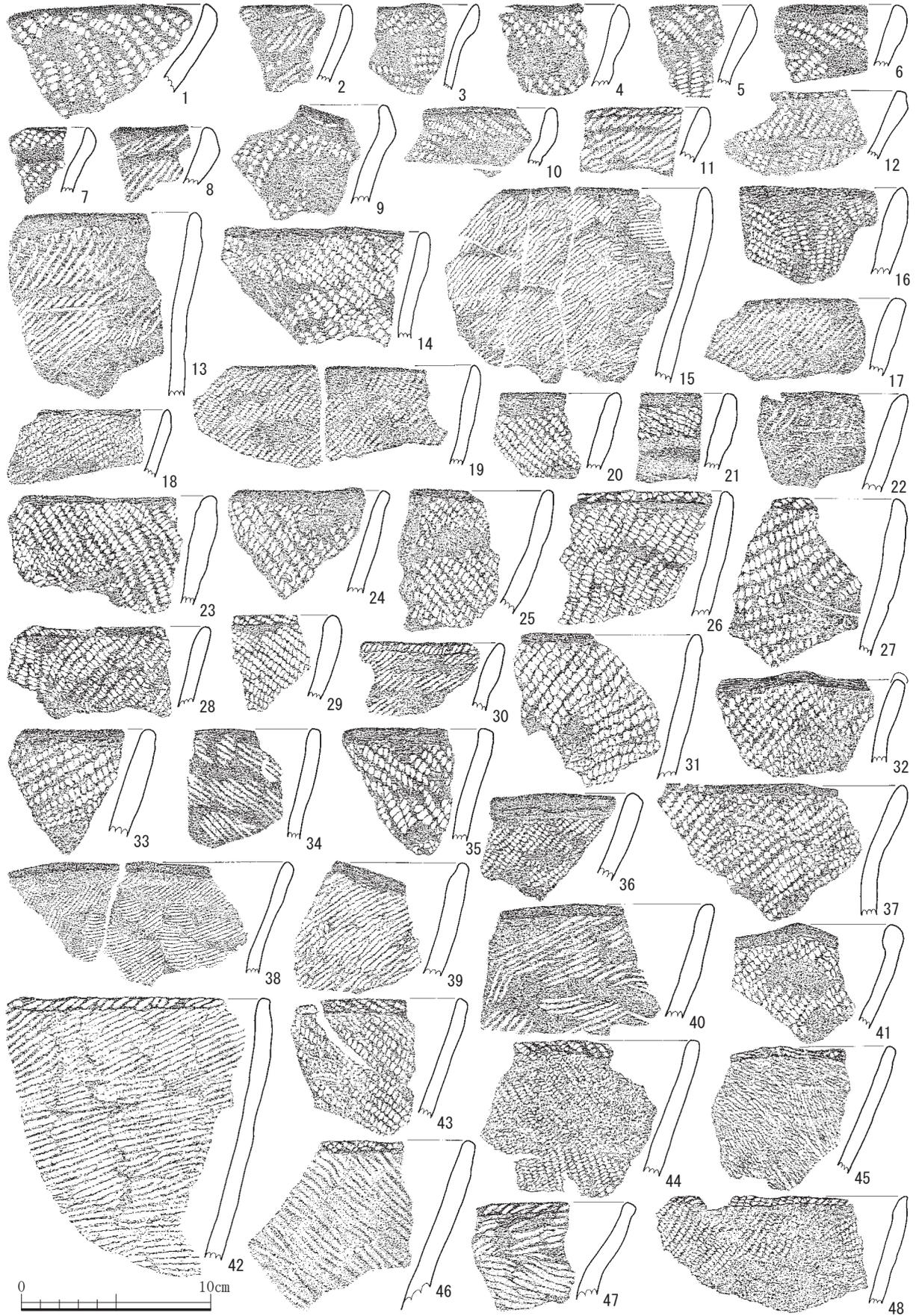
第70図 無文深鉢形土器第1群実測図 (縮尺1/4)



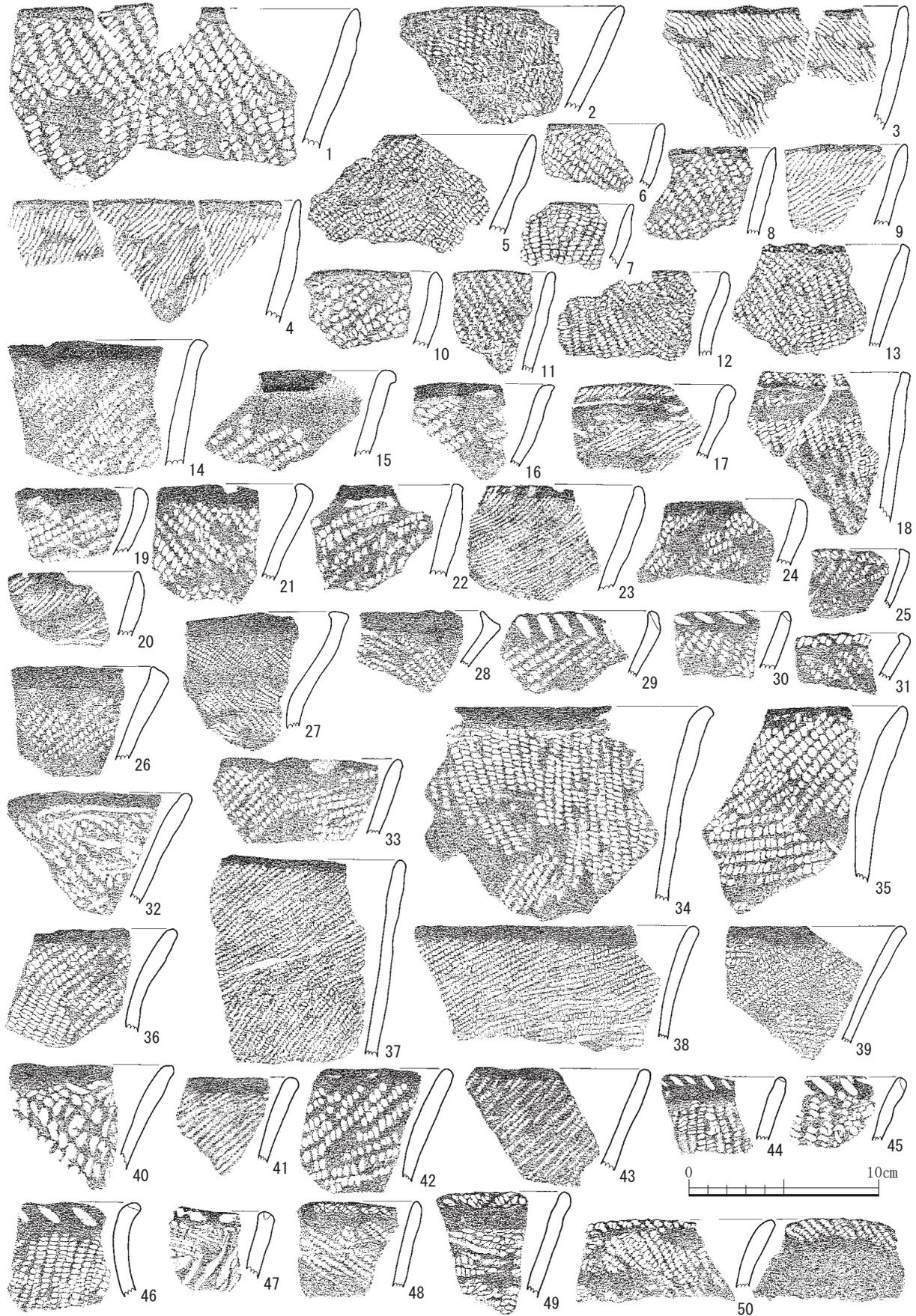
第71圖 無文深鉢形土器第1群実測図 (縮尺1/4)



第72図 無文深鉢形土器第1群実測図 (縮尺1/3)



第73圖 無文深鉢形土器第1群実測図 (縮尺1/3)



第74図 無文深鉢形土器第1群実測図 (縮尺1/3)

類とする。口唇部を丸く収めるもの、方角状に仕上げるもの、つま先状に仕上げるものがあり、縄文の施文にも有無がある。

第70図3は胴部から内弯気味に開いて口縁部に至る土器であり、口唇部を丸く収める。節の大きな縄文LRを施す。第70図7も内弯気味に開き丸く収めた口縁部に至る土器であり、縄文RLを施す。一部に羽状となる部分がある。第70図8は内弯気味に大きく開く土器であり、丸く収めた口唇部および口縁部の上縁に縄文RLを施す。

第73図13から30は内弯する口縁部を有し、口唇部を丸く収める土器である。13は縄文Lを、15は縄文Rを施す。16は口縁部に斜縄文と縦走縄文を施す。21は縄文RLRを口縁部に施す。26から30は口端部にも縄文を施す土器である。

第70図4、第71図1、第73図31から48は口端部を方角状に仕上げる土器である。第70図4は胴部から弱く内弯して開く土器であり、縄文RLの施文方向をずらして口縁部では斜縄文、胴部では縦走縄文とする。なお、口端部にも縄文を施す。第71図1も弱く内弯して開く土器であり、口端部を方角状に整えて横走縄文LRを全面に施す。第74図31から48のうち、42から48は口端部に縄文を施す。32と41は山形の小突起を加え、39は波状縁とする。38は縄文RL、42は縄文Lを口縁部に斜縄文、胴部に横走縄文として施す。

第74図1から13は口唇部をつま先状に収めるものであり、12、13は口端部にも縄文を施す。1は口縁部に斜縄文、胴部に縦走縄文RLを施す。2は縦走縄文LRを施す。12、13も口縁部が斜縄文、胴部が縦走縄文となる。

第74図14から18は口端部が外側に張り出して玉縁状となるものであり、このうち17、18は口端部に縄文を施す。斜縄文とするものが大半であるが、18は縦走縄文RLを施す。

第74図19から31は口端部を内側に引き出すものであり、27、30は口端部に斜行する刻み目を施し、25、31は口端部に縄文を施す。26から28は口端部に面をもたせている。斜縄文を施す例が多い。

3類 (第70図9、第71図2～13、第74図32～50、第75図、第76図1～42)

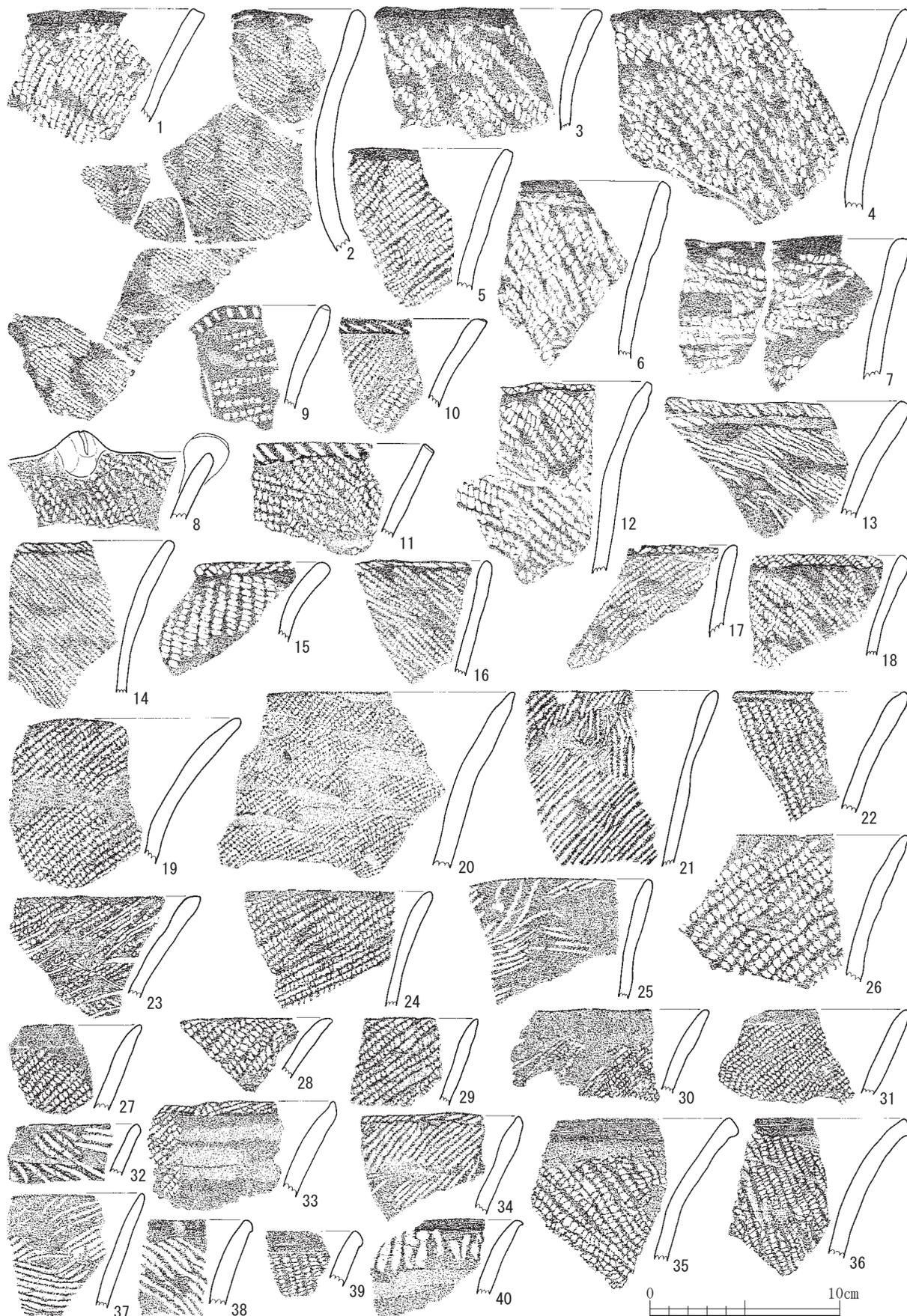
外反する口縁部を有する土器を本類とする。本類は口縁を肥厚させないもの(A種)と、肥厚させるもの(B種)に分ける。

A種 (第71図2～5、8、9、12、第74図32～50、第75図1～32)

外反する口縁部が肥厚しないものを本種とする。本種の口唇部形態にも、丸く収めるもの、方角状に仕上げるもの、つま先状に収めるものなどがある。

第71図2は弱く張る胴部が頸部でくびれ、外反して開く口縁部に至る4単位の山形波状縁の土器である。口唇部を丸く収め、縄文LRを施す。胴部の一部で施文方向の違いから羽状縄文となる箇所がある。

第71図3はやや張りのある胴部が頸部でくびれ、外反して開く口縁部に至る平縁の土器である。口唇部を丸く収め、斜縄文RLRを施す。第71図4は直立気味の頸部から外反して開き、口縁部に至る平縁の土器である。縄文LRの施文方向を変えて、口縁部には斜縄文を、胴部には横走縄文を施す。第71図5は外反する口縁部を有す平縁の土器である。口唇部を丸く収め、外側にやや大型の円孔を一系列に連続施文する。口縁部に斜縄文LRを施す。第71図8は弱く張る胴部が頸部でくびれ、外反して開いて口縁部に至る土器である。口縁部に外方への突出が見え、片口を配すのではと思える。縄文RLを口縁部では斜縄文、胴部では横走縄文と、施文方向を変えて施す。第71図9は胴部から外反して直線的に開き、口唇部を丸く収める土器であり、斜縄文LRを施す。第71図12は直立気味の頸部から外反して開き口縁部に至る土器であり、口唇部をつま先状に整える。節が比較的大きな斜縄文RLを施す小型の土器である。第74図32から50は外反して開く口縁部をもち、口唇部を丸



第75図 無文深鉢形土器第1群実測図 (縮尺1/3)

く収める土器である。34は縄文LRを口縁部に縦走、胴部では斜行させる。35、37は縄文LRを口縁部で斜行、胴部で横走させる。38、39は縄文LRを口縁部で斜行、胴部で横走させる。第74図44から46は口端部に斜行する刻み目を施し、47は口端部に刺突を加える。48から50は口端部に縄文を施すものであり、50は内面にも縄文を施す。

第75図1から18は口端部を方角状に整える土器である。2は口縁部より垂下する縄文帯を、間隔を空けて施す土器であり、縄文LRを使用する。4は斜縄文RLRを施す。7は口縁部に横走縄文RLを施す。8～18は方角状に整えた口端部に施文を行うものである。8は口縁部に卵形の突起を配し、上面に沈線1条を施す。9から11は口端部に刻みを施すものである。9は山形波状縁とする口端部に刻みを施し、横走縄文LRを口縁部に施す。10、11は斜行する刻み目を施す。12から18は口端部に縄文を施すものであり、15は口縁部に縦走縄文LRを施す。

第75図19から34は口唇部をつま先状に整える土器であり、斜縄文を施すものが大半を占める。このうち33、34は口端部に縄文を施すもので、33は縄文LRを口端部外側では斜行させ、口縁部では間隔を空けた垂下する帯縄文としている。

B種（第71図6、7、10、11、13、第75図35～40、第76図1～42）

外反する口縁部を肥厚させる土器を本種とする。

第71図6は下膨れの胴部が頸部でくびれ、外反して開いて口縁部に至る土器である。口縁部全体を弱く肥厚させて口唇部を丸く収める。斜縄文LRを施す。

第71図7はやや張りのある胴部から頸部で弱くくびれ、外反して開き口縁部に至る土器である。口唇部を外方にD字の帯状に肥厚させ、縄文LRを施す。胴部には斜縄文を施す。第71図10は口縁部を外反させ、山形小突起4単位を加える土器である。口縁部全体を肥厚させ縄文Rを施す。第71図11は弱く張る胴部が頸部でくびれ、外反して直線的に開く土器であり、口端部を方角状に整える。口縁部に幅狭く斜縄文を施し、胴部には間隔を空けて帯状の縄文帯を垂下させる。縄文LRを使用する。第71図13は外反して開いて弱く肥厚する口縁部を有し、口端部に面をもたせる。口端部および口縁部に縄文LRを施す。

第75図35から40、第77図1から9は口唇部を外方に引出して丸め、玉縁状の口縁とする土器である。36、39は外反する口縁部に縦走気味の縄文RLを施す。37は胴部に横走縄文LRを施す。40は口縁下に幅狭く縄文Rを施す。第76図5から9は口端部に縄文を施し、6、8は縄文LRを口縁部で斜行、胴部で横走させる。

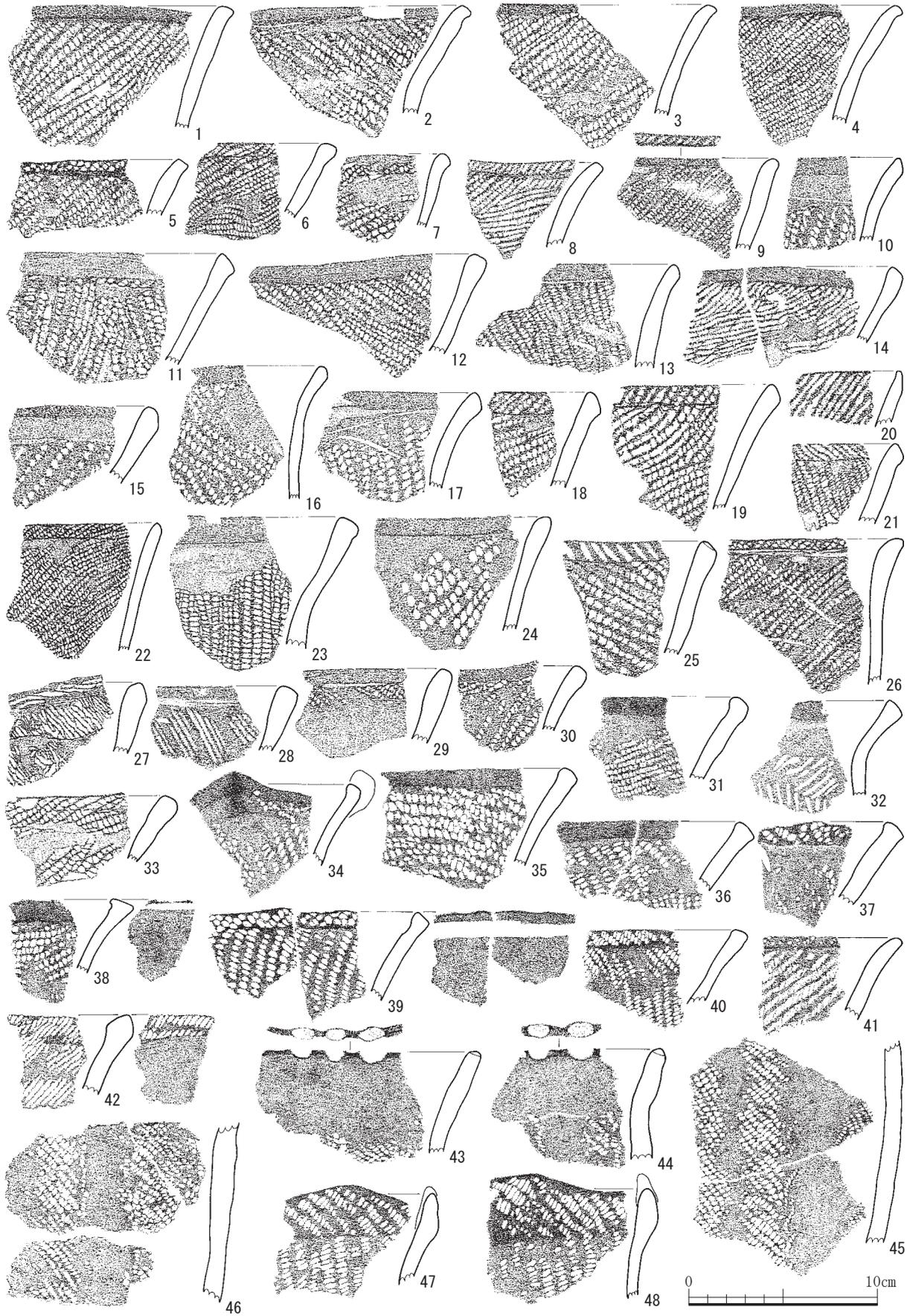
第76図10から22は口唇部を外方に弱く肥厚させて面をもたせる土器であり、10は口縁下を空け縦走縄文LRを施す。11は縦走縄文LRを施す。14は口縁部の斜縄文を徐々に横走させている。14から17は肥厚部に稜をもたせている。18から22は口端部に縄文を施す例であり、21は口縁部に縦走縄文RLを施す。

第76図23から30は口縁部全体を弱く肥厚させるものであり、23は縦走縄文LRを施す。また、口唇部もしくは口端部外面に刻み目や縄文を施すものである。25は口端部に刻み目を施し、胴部に斜縄文LRを施す。27は節が扁平な斜縄文RLを施し、29は口縁部に幅の狭い縄文LRを帯状に施す。

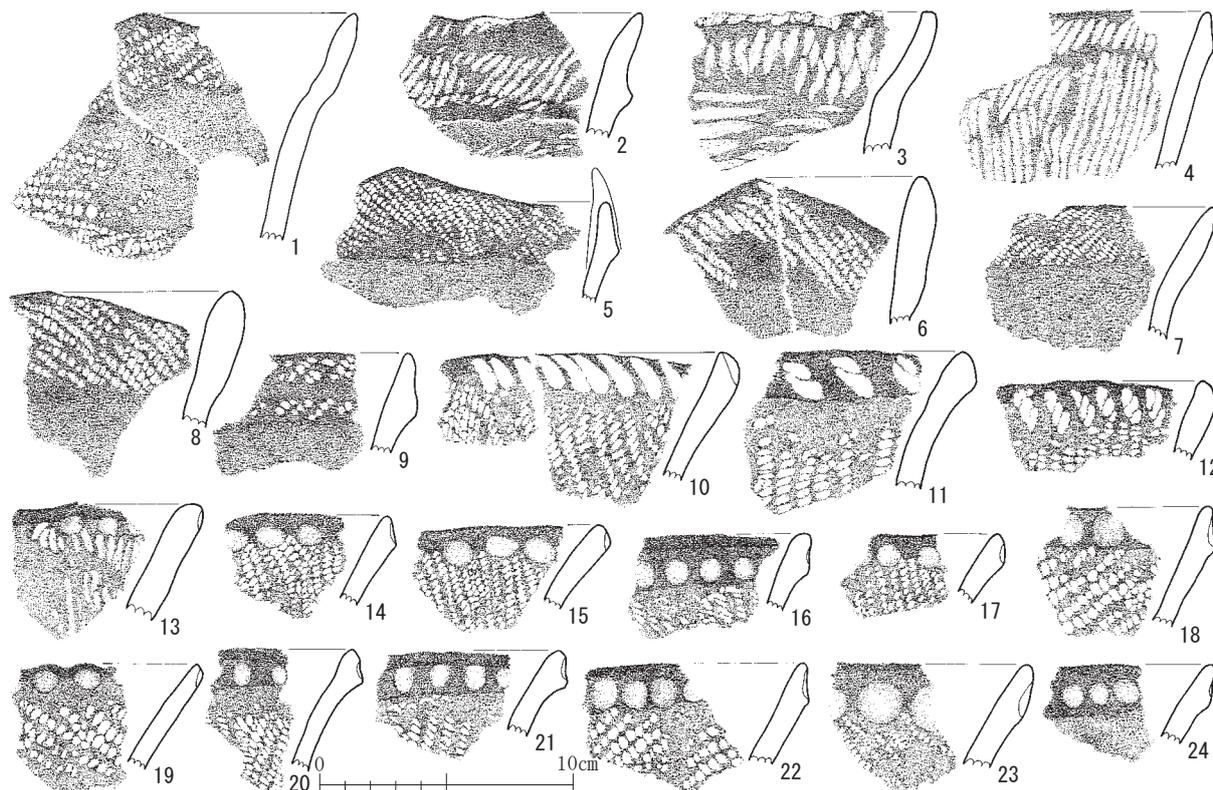
第76図31から42は口唇部を内方に肥厚もしくは張り出させて面をもたせる土器である。34は山形突起を配し、口縁部に縦走縄文RLを施す。35は横走縄文RLを施し、37は縄文RLを口端部と口縁部に施す。38、39は口縁部内面に沈線1条を廻らせ、横走、縦走する縄文LRを施す。41は縄文Lを施す。42は口唇部を内外方に肥厚させ、面をもたせた口端部上面と口縁部外面に縄文LRを施す。

4類（第76図43～46）

外反する口縁部に面をもたせて肥厚させて口端部に刻みを施す土器を本類とする。



第76図 無文深鉢形土器第1群実測図 (縮尺1/3)



第77図 無文深鉢形土器第1群実測図 (縮尺1/3)

第76図43、44はやや張りのある胴部から頸部でくびれて直線的に外反して開く土器である。口縁部全体を肥厚させて下縁を有段とする。口端部には棒状工具による刻み目を施す。胴部には縦位帯状に間隔を空けて縄文を施し、一部に結節縄文を施すもの(44~46)も見える。

5類 (第76図47、48、第77図1~9)

内弯する口縁部外面に稜をもたせて肥厚させる土器を本類とする。

第76図47、48、第77図1、5、6、8は口縁部に山形の突起を施す波状縁の土器である。土器の多くは、胴部に縦走縄文(第76図47、48、第77図4)もしくは横走縄文(第77図1、3)を施し、無文とするもの(第77図5~9)も見える。第77図1、2、5、9は口縁部下縁の肥厚が著しく、隆帯を廻らせているかの感がある。使用する縄文には単節と無節のものがある。

6類 (第77図10~24)

外反する口端部に刻みもしくは、大型の円孔を陥入させる土器を本類とする。

第77図10から12は口端部に刻み目を施すものであり、10は斜行する短沈線を加えている。また、11、12は縄文原体を押捺し刻み状とするものであり、いずれも胴部に縦走縄文を施す。

第77図13から24は口縁部に指頭による円孔を陥入させるものであり、口縁部を断面三角形状に肥厚させる例が多い。胴部には縦走縄文、斜縄文を施す例が見える。

イ 第2群土器 (第78図1~4、第79図)

櫛描文を施す土器を本群とする。口縁部の形状を主に以下の5類に分けた。

1類 内弯する口縁部を有する土器。

2類 外反する口縁部を有する土器。

3類 外反する口縁部を断面三角形状に肥厚させる土器。

4類 口唇部を内側に巻込む土器。

5類 口縁部を外方に肥厚させる土器。

1類 (第78図1、第79図1～15)

口縁部を内弯させる土器を本類とする。本類には頸部でくびれて内弯する口縁部に至るものと、胴部から緩く内弯して開くものがあると思えるが、全形の窺えるものが少なく、口縁部の内弯が強いもの(A種)と、弱いもの(B種)に分ける。

A種 (第78図1、第79図1～11)

第78図1は下膨れの胴部が頸部でくびれ、内弯して開く口縁部に至る土器である。口縁部の立ち上がりは短く、4条一組の櫛描文を縦走させる。

第79図1から5、9から11は内弯する口縁部に、櫛描文を縦走もしくは斜行させるものである。6から8は口縁直下に横走する櫛描文を施す。

B種 (第79図12～16)

口縁部を弱く内弯させる土器である。16は櫛描文を垂下させ、12、13は口縁直下に横走もしくは斜行する櫛描文を加え、胴部に縦走する櫛描文を施す。15は弱く内弯する口縁部を有し、縦位帯状に縄文RLを施した後、斜行する櫛描文を加えている。14は口縁部を面状に肥厚させ、斜行する櫛描文を粗く施す。

2類 (第78図2～4、第79図17～31、35)

口縁部を外反させる土器を本類とする。本類も、頸部でくびれて外反して開くものと、胴部から直線的に開く土器があるが、ここでは一括して取り扱う。

第78図2は張りのある胴部が頸部でくびれ、外反して開く口縁部に至る土器である。7条ほどの櫛を一組とし、口縁直下に空白部をもたせて垂下させている。第78図3は球形の胴部が頸部でくびれて、短く外反して口縁部に至る土器である。篋描きの沈線を縦走させる。第78図4は頸部でくびれ、外反して開く口縁部に至る土器である。胴部には2条一組の沈線を縦走させ器面を分割し、鋸歯状に斜行する櫛描文を区画内に加える。

第79図17、18は口唇部をつま先状に収めるものであり、外面に斜行する櫛描文を施す。なお、18は櫛目が細かく刷毛目状を呈し、内面にも横走させている。19、20、29は頸部でくびれ外反して開く土器であり、櫛描文を縦走もしくは斜行させる。25、27、28は口縁直下に横走する櫛描文を加え、縦走もしくは斜行する櫛描文を施す。なお、28は山形突起を口縁部に施す。30は櫛描文を鋸歯状に施す。31は口縁部内面にU字状の沈線2条を施し、外面には縦走する櫛描文を施す。

3類 (第79図32～34)

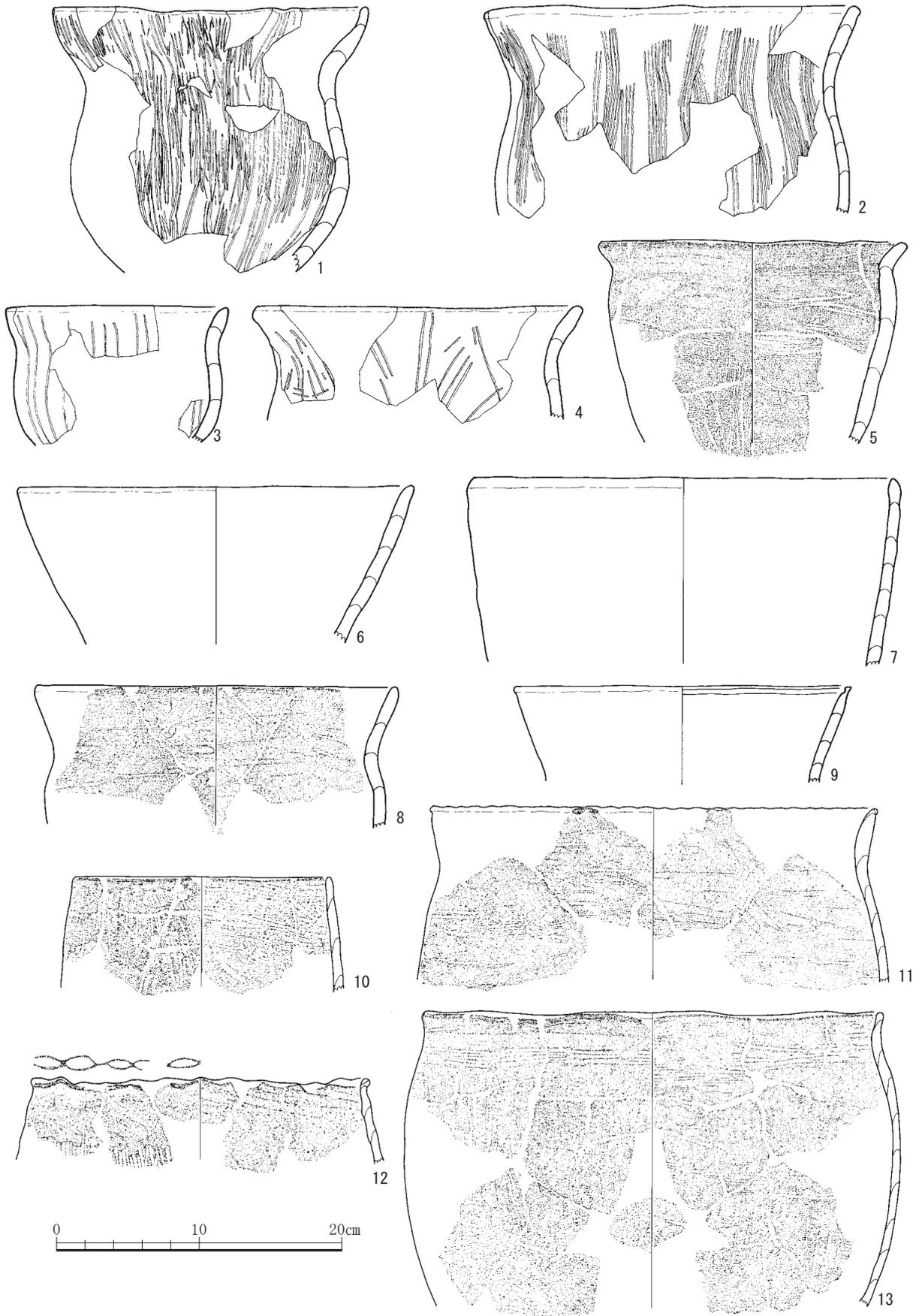
外反する口縁部を断面三角形状に肥厚させる土器を本類とする。

第79図32は胴部片であり、櫛描文を蛇行させて下している。33は口縁部を外方に肥厚させる土器であり、縦走、蛇行する櫛描文を交互に下す。34は口縁部を断面三角形状に肥厚させ、蛇行する櫛描文を下す。34は蛇行および斜行する櫛描文を施す胴部片である。

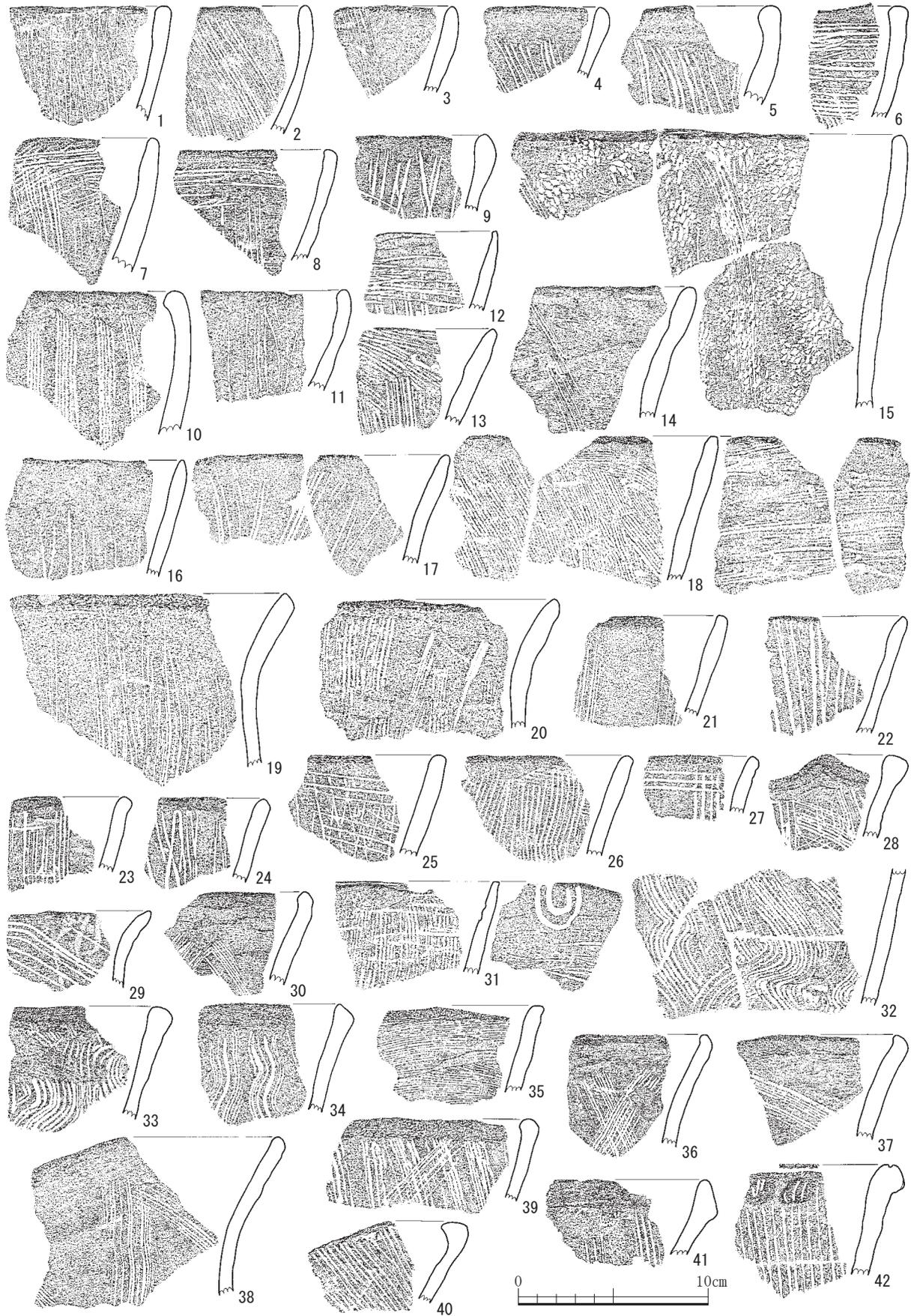
4類 (第79図36～40)

口唇部を内側に巻込む土器を本類とする。

第79図36、37は斜行する櫛描文を交差させる。38は波状縁の土器であり、垂下する櫛描文と斜行する櫛描文を組み合わせる。39は右傾する櫛描文を密に引き、左傾する櫛描文を間隔を空けて施す。40は口縁部を強く内側に巻込ませる波状縁の土器であり、口縁に直行して櫛描文を施す。



第78図 無文深鉢形土器第2群～第4群実測図 (縮尺1/4)



第79図 無文深鉢形土器第2群実測図 (縮尺1/3)

5類 (第79図41、42)

口縁部を外方に肥厚させる土器を本類とする。

41は口縁部を肥厚させ面をもたせる土器であり、口縁部下縁を有段とする。縦位の櫛描文を施す。42は口唇部を丸く外方に肥厚させて玉縁状とする土器であり、口縁部に円形の貼付文を間隔を空けて施し、櫛描文を加える。胴部には櫛描文を垂下させる。

ウ 第3群土器 (第78図5、7～9、11、第80図、第81図、第82図1～6)

文様を施さず素地のままの土器を本群とする。口縁部の形状を主に以下の4類に分けた。

1類 口縁部が内弯する土器。

2類 口縁部が外反する土器。

3類 口縁部が外屈する土器。

4類 口縁部が外弯する土器。

1類 (第78図7、8、第80図1～36、38～50)

口縁部を内弯させる土器を本類とする。口縁部が肥厚しないもの(A種)と、肥厚するもの(B種)に分ける。

A種 (第78図8、第80図1～36)

第78図8は胴部から弱く内弯して開く土器であり、口唇部をつま先状に整える。

第80図1から10は口唇部を丸く仕上げる平縁の土器である。第80図11から13、20から26は口唇部を方角状に仕上げる土器であり、25は口端部に縄文を、26は刻み目を施す。14から19は口唇部をつま先状に仕上げ、17は口端部に縄文を施す。30から36は口唇部を内側に摘み出すように伸ばす。

B種 (第78図7、第80図38～50)

内弯する口縁部を肥厚させる土器を本種とする。

第78図7は胴部から弱く内弯して開く土器であり、口縁部を弱く肥厚させる。

第80図38から47は口唇部を内側に肥厚させるものであり、44、48から50は口唇部を内側に巻込ませている。

2類 (第78図9、第80図36、37、51～59、第81図1～47)

口縁部が外反する土器を本類とする。本類には頸部でくびれて外反する口縁部に至るものと、胴部から外反して開くものがあると思えるが、全形の窺えるものが少ない。口縁部の形態で、口縁部が肥厚しないもの(A種)と、肥厚するもの(B種)に分ける。

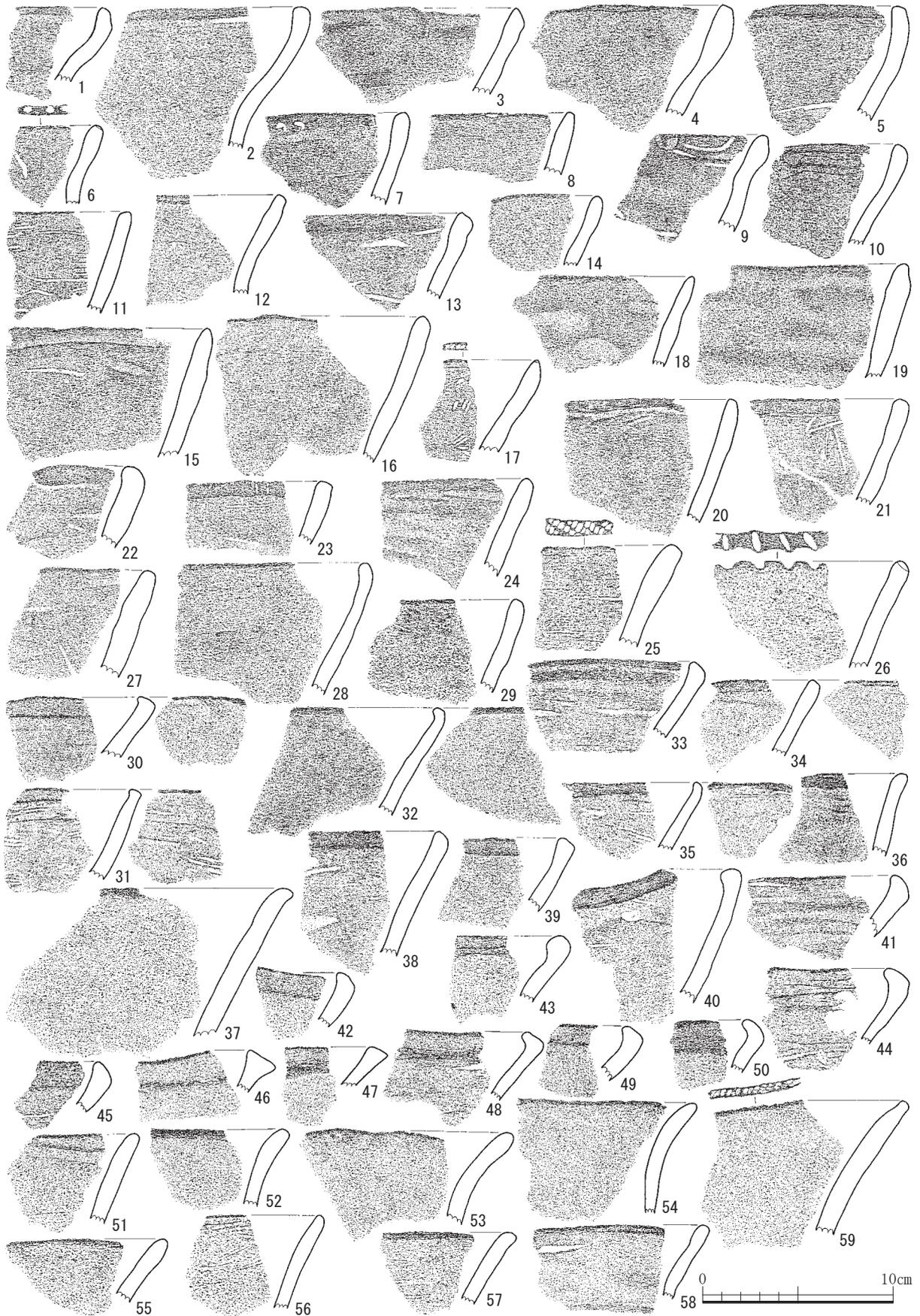
A種 (第78図9、第80図36、37、51～59、第81図1～36)

第78図9は直線的に開き口縁部に至る土器であり、口縁部内面に沈線1条を廻らす。

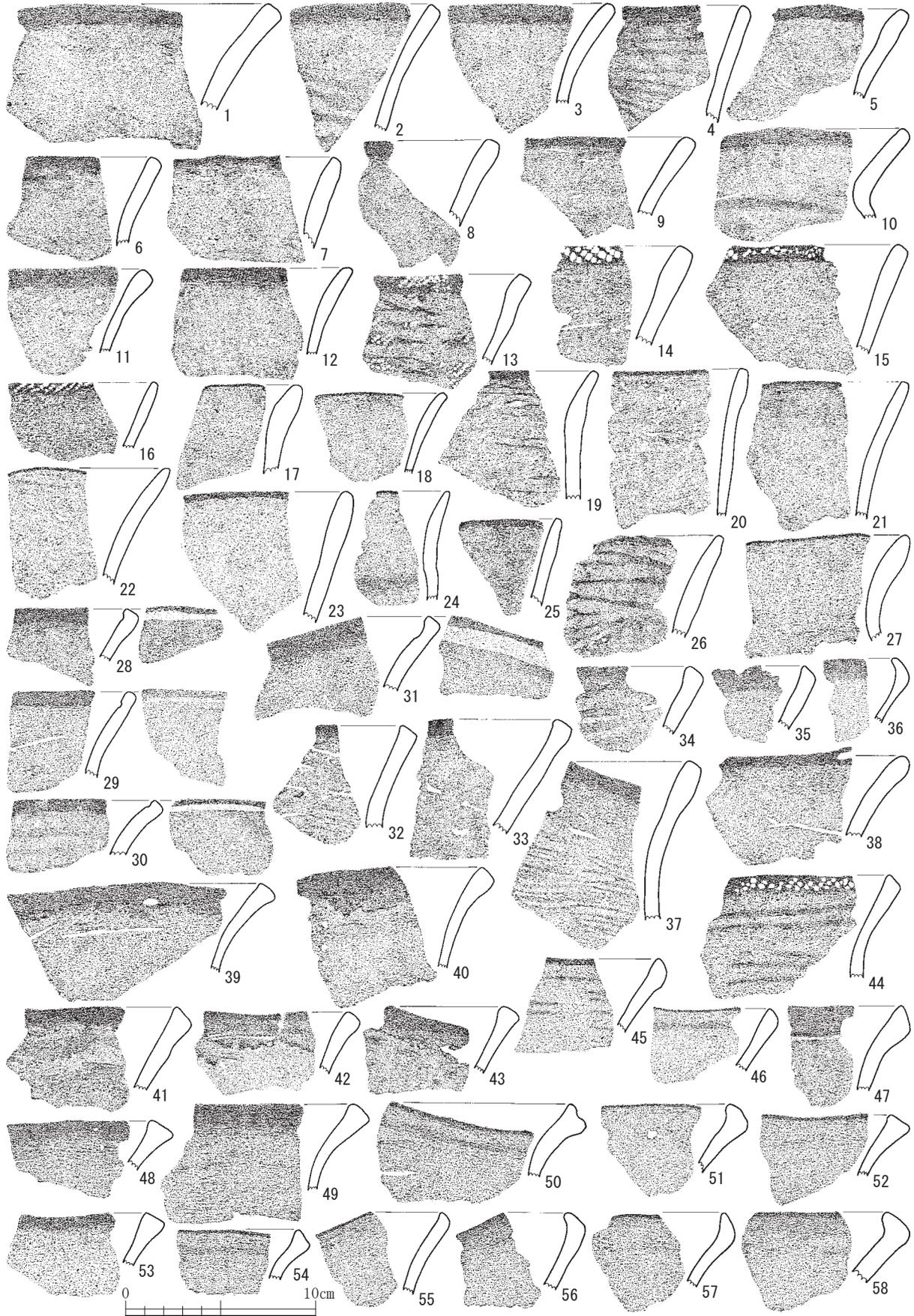
第80図36、37、51から58は口唇部を丸く収める土器であり、59は口端部に縄文を施す。第81図1から16は口端部を方角状に仕上げるものであり、13から16は口端部に縄文を施す。17から27は口唇部をつま先状に仕上げるものである。第83図28から37は口唇部を内側に摘み出すように引き出す土器であり、28から31は口縁部内面に沈線やなぞり状の沈線(31)を施す。36は口唇部の摘み出しが長い。

B種 (第81図37～58)

37、38は口縁部を弱く肥厚させ、口唇部を方角状や丸く仕上げる。39から47は口縁部を外方に肥厚させ、断面三角形に仕上げるものである。44は口縁部に縄文を施す。48から54は口縁部を内方に肥厚させるものであり、55から58は口縁部を弱く内方に肥厚させ、口唇部をつま先状に仕上げる。



第80図 無文深鉢形土器第3群実測図 (縮尺1/3)



第81圖 無文深鉢形土器第3群実測図 (縮尺1/3)

3類 (第78図5、8、第82図1、2)

口縁部が外屈する土器を本類とする。頸部内面に段や稜が認められる例も含める。

第78図5は口縁部から胴部上半にかけての器形がくの字状を呈す。口縁部は短く、端部に面をもつ。外面には撫でを施し、その調整方向は胴部が縦位、頸部が横位となる。第82図1は口縁部に板状工具による連続押し引きを施す。2は口縁部内外面に粗い削りを施す。1、2ともに、器面調整後に口縁端部にも撫でを施す。

4類 (第78図11、第82図3～6)

口縁部が外弯する土器を本類とする。口縁部の傾斜、頸部の屈曲、胴部の張り出し等に多様性が認められる。外面を向く口端部に連続刻みを施す例(第78図11、第82図6)がある。外面調整は横位の撫でを基本とするが、同一個体にも強弱や粗密があり、内外面に輪積痕が顕著に残る例(第78図11、第82図4)もある。

第78図11、第82図3は口縁部を厚く仕上げる。第82図5は外面調整後に、撫でにより口縁端面を作出する。

オ 第4群土器 (第78図10、12、13、第82図7～25)

条痕を施す土器を本群とする。条痕の施文方向により、以下の2類に分ける。

1類 縦位、斜位の条痕を施す土器。

2類 横位の条痕を施す土器。

1類 (第78図10、12、13、第82図7～23)

縦位や斜位の条痕を施す土器を本類とする。条痕の形態により、条痕の幅と間隔が不均一なもの(A種)と、幅と間隔がほぼ一定となるもの(B種)に分ける。

A種 (第78図10、12、13、第82図7～20)

条痕原体は同一ではなく、板状工具や巻貝などが想定される。口縁部形態には、内傾(第78図10、12、第82図10)、外反(第78図13、第82図7～9、11、12)、直立もしくは若干外反(第82図13～16)、内弯(第82図17～20)を認める。口縁端部には、指による連続押圧を施す例(第78図12、第82図8～11)と篋状工具もしくは二枚貝による連続押し引きを施す例(第82図18)がある。

その他、条痕施文後に口縁部のみ横位撫でを施し、無文部とする例(第78図12、13、第82図7～12、17)が多く認める。この無文部は口縁部形態が直立や内弯の場合、該当例が少ない。また、口縁無文部とその直下の条痕部の境には、条痕原体による1条の横走沈線が施文される例(第82図8、11、12)がある。この場合の施文調整順序は、条痕調整→横位撫で調整による無文部作出→横位沈線施文となる。

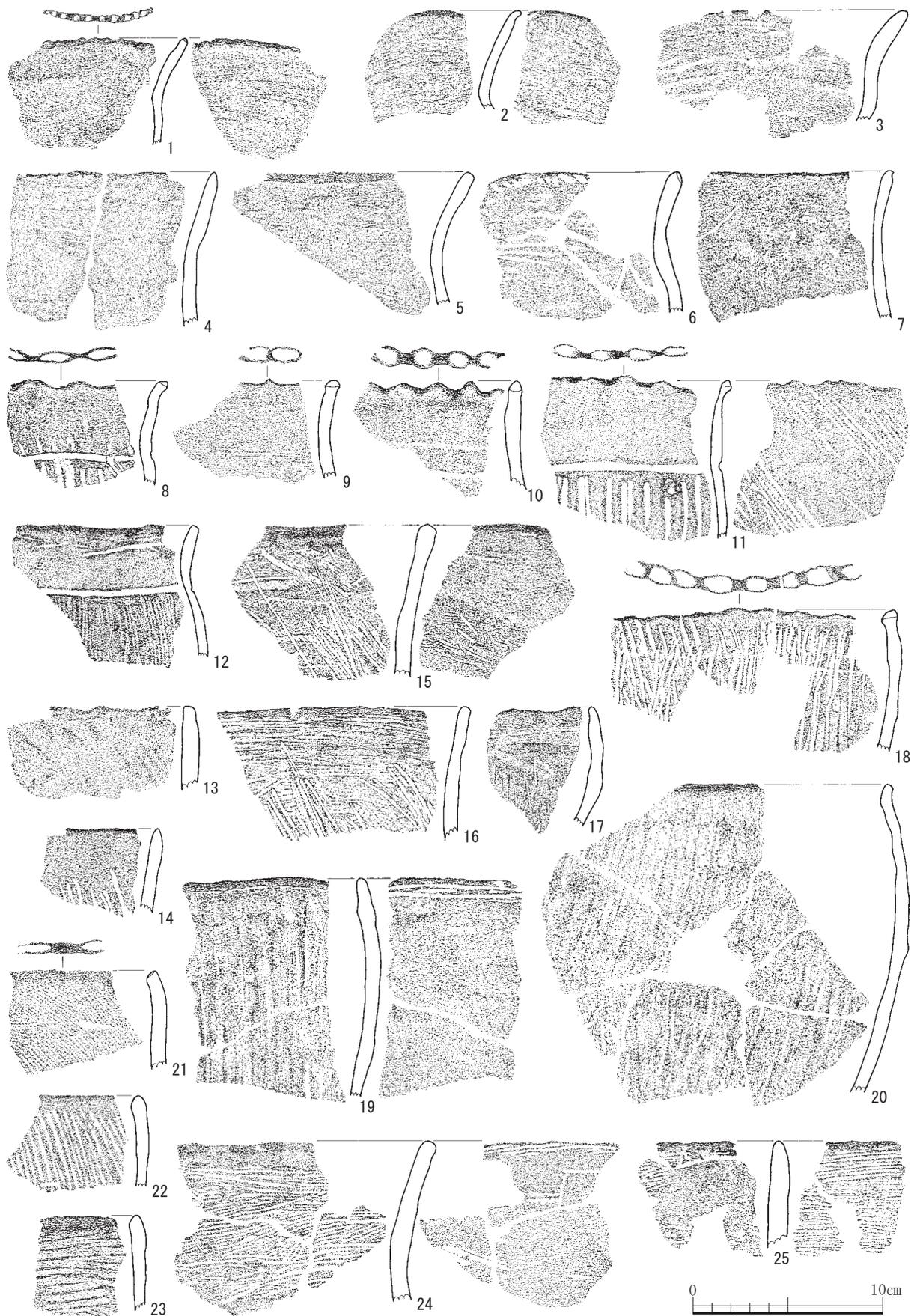
第78図10、11、13は口縁部の内面に巻貝による撫で状の浅い横位条痕が残り、13では口縁無文部にも同様の調整が認められる。第84図15、16の条痕施文順序は口縁部に横位、次いで胴部に縦位であり、他例とは異なる。

B種 (第82図21、22)

条痕原体には板状工具や二枚貝が想定できる。口縁部形態は若干内弯する。21、22ともに胎土に黒色鉱物をはじめとする径1mm以下の微細な砂粒を多く含む。A種は径2mm以上の砂粒を多く含む傾向があり、B種とした2例は搬入品の可能性が指摘できる。22は口端部に指による浅い押し引きを連続して施す。押し引きの間隔はA種と比べ間隔が広く、疎である。

2類 (第82図23～25)

横位の条痕を施す土器を本類とする。条痕の幅や間隔が一定であり、比較的浅いことから、条痕原体は二枚貝であると考えられる。口縁部形態には直立する例(23、25)と外反する例(24)がある。内面にも横位条痕を施す例(24、25)がある。



第82図 無文深鉢形土器第4群実測図 (縮尺1/3)

第3節 鉢形土器・壺型土器

鉢形土器・壺型土器には有文と無文の土器があるが、ここでは一括して器形により分類することとした。なお、各群の内容は次のとおりである。

- 第1群土器 口縁部を内弯させる、身の深いボール形器形の土器。
- 第2群土器 張りのある胴部が頸部でくびれて、外反して短く開く土器。
- 第3群土器 胴部より外反して開く朝顔形器形の土器。
- 第4群土器 球状の胴部が頸部でくびれて外反して開き、口縁部を折って直立させる土器。
- 第5群土器 張りのある胴部からくびれて、直立もしくは内傾する口縁部に至る壺型器形の土器。

ア 第1群土器（第83図～第85図、第86図1～7、第87図、第88図）

口縁部を内弯させるボール形器形の鉢形土器を本群とする。本群土器は口縁部の形状を主に、以下の3類に分けた。

- 1類 口縁部の内弯の度合いが少ない土器。
- 2類 口縁部を強く内弯させる土器。
- 3類 本群土器の胴部片。

1類（第83図1～35、第86図1～6）

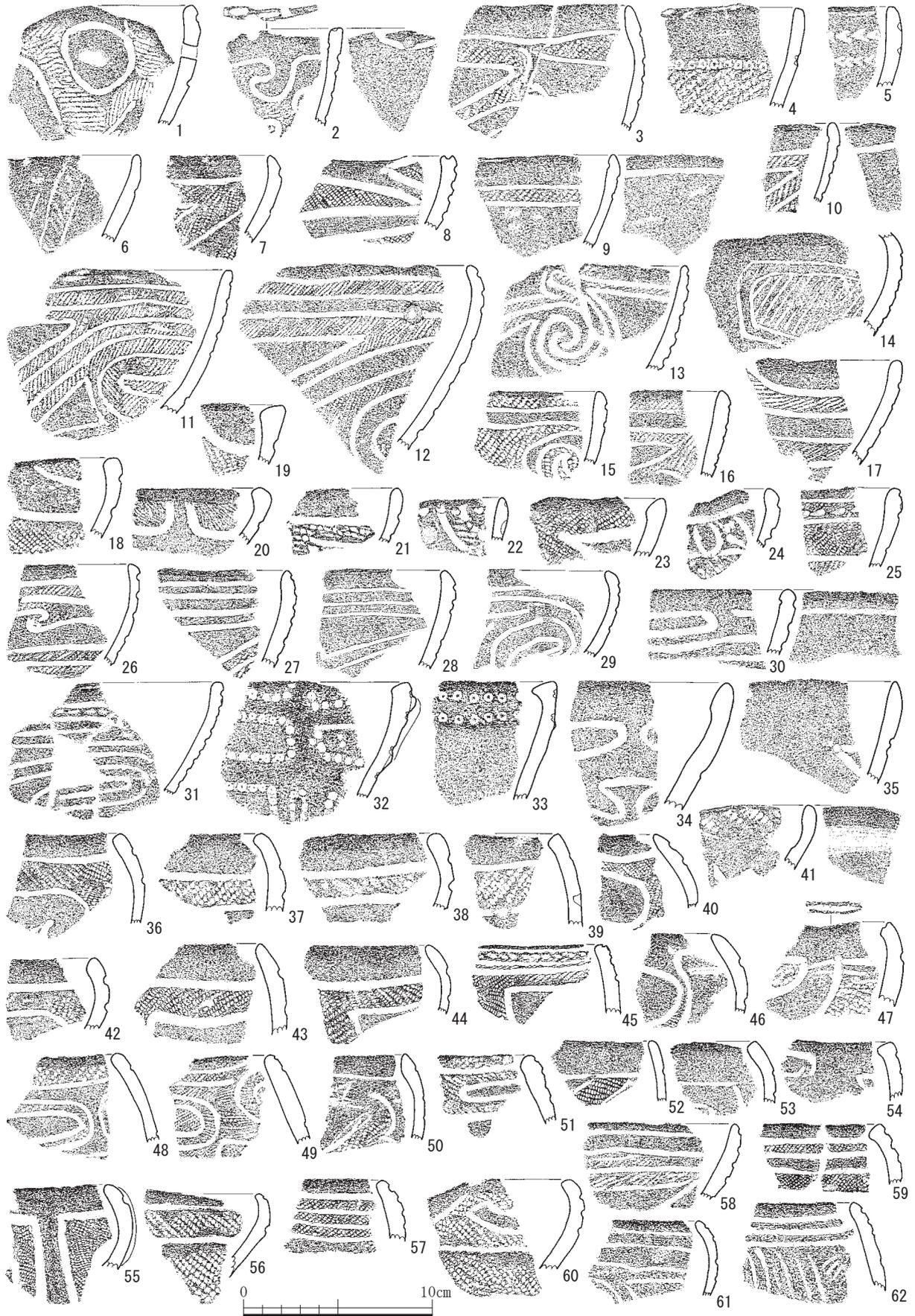
本類は文様構成、文様要素から、2条沈線で文様を描き沈線間に縄文を充填するもの（A種）、多条沈線で文様を描き沈線間に縄文を充填するもの（B種）、多条沈線で文様を描くもの（C種）、刺突文を施すもの（D種）、隆線による区画文を配すもの（E種）に分ける。

A種（第83図1～3、6～10、16～24、第86図6）

口縁部の内弯が弱く、2条沈線による区画内に縄文を充填する土器を本種とする。

第86図6は口縁部の内弯が弱い大型の土器である。口縁下に刻みを施す3条の紐線を横走させ、紐線側縁には沈線を添わせる。紐線および沈線を跨ぐ、2個一対の8字状貼付文を配して単位文とする。体部上縁に横走沈線を配し、8字状貼付文下で浅皿状に窪みをもたせる。体部には三角形に似た撥形の区画沈線を配し、下縁を撥形区画文に合わせて蛇行する沈線を横走させる。なお、さらに下方に文様が連続しており、撥形文をずらして2段に配すものと思える。

第83図1は口縁部に山形突起を配し、突起下に貫通する楕円孔を穿ち、孔の周囲に円文を加える。口縁部を横走する沈線を円孔下でU字状文に窪ませ、口端との間に縄文LRを充填する。2は山形小突起を口縁に配す。突起中央部に窪みを施し、両側に横走する短沈線を加える。内面には刺突文を囲む弧線文を施す。外面には突起下にJ字文を配し、外周に縄文を充填する。3は口縁下を横走する縄文帯をC字状の短沈線で区切り、分岐する斜行沈線を配して縄文LRを充填する。なお、外面に黒彩を施す。6は口唇部から斜行する沈線区画の縄文帯を下し、7、10は口縁下の横走縄文帯から斜行する縄文帯を下す。なお、10は内面に沈線1条を廻らせる。8は口縁部外面から口端部にかけて、やや幅の広い沈線で三角形状の区画を配すほか、口端部にも三角形状の単位文を配し、下縁に横走する沈線2条を施す。なお、各区画内には縄文を充填する。9は口縁下に横走縄文帯を配し、内面に沈線1条を施す。14は2条沈線による楕円区画文に斜行沈線を充填する。16は口縁下に沈線1条を横走させ、口端部間に縄文を充填する。また、横走する縄文帯から斜行する縄文帯を三方に分岐させる。17から20は口縁部に楕円形や矩形で区画を描き、区画内外に縄文を充填する。21、23は口縁下を横走する縄文帯から斜行縄文帯を分岐させる。22は口縁下に刺突列を1条加え、やや大ぶりの円孔を単位文として配し、側



第83圖 鉢形土器・壺形土器第1群実測図 (縮尺1/3)

縁に弧状の縄文帯を下す。24は口縁部に突起を加える。口縁下に2条沈線を横走させ、区画内にU字状文を充填する。なお、沈線下には縦走縄文を施す。

B種 (第83図11~13、15、25、26、31、第86図1、2)

口縁部が緩く内弯する土器であり、多条沈線で文様を描き、沈線帯に縄文を充填するものを本種とする。

第86図1は口端部を欠くが、口縁部が弱く内弯する鉢形土器である。隆帯側縁に沈線を添わせ、隆帯上には刺突を加えた沈線および、縄文RLを施す。高台をもつ底部際を廻らせる隆帯は斜行して口縁部に向かい、口縁部を廻る隆帯と繋げ、渦を巻かせるものと見える。また、J字状の無文部を囲んで縄文帯を配す箇所も見えるが、文様の詳細は不明である。

第86図2は小型の鉢形土器の体部下半である。横走する3条の沈線帯に縄文を充填している。

第83図11は口縁下に3条沈線を横走させ、下縁沈線を途切らせた部分に、渦巻文および斜行沈線を加える。渦巻文下には口縁部と同様に、横走する沈線帯を配して文様帯の下端を限る。なお、斜行沈線の上下には三角形の区画文を残す。沈線帯には縄文LRを充填する。12もほぼ同様の文様構成を採ると思えるが、口縁部の内弯がやや強い。また、縄文LRの充填は1条おきとする。13は2、3条の沈線による縄文帯を段違いに口縁下に横走させ、上段の上縁沈線から渦巻文を下し、巴状に絡んで中央沈線に戻す。下縁沈線は渦巻文を円形に取り囲ませる。上縁沈線は先端をC字状に口端部方に切り上げる。沈線間に縄文LRを充填する。15は2条沈線で文様を描き、沈線区画外に縄文を施す。25は横走沈線3条を配し、上縁沈線間には刺突文列を1条横走させたのち縄文LRを施す。26は口縁下に2条と3条の横走沈線を間隔を空けて配し、横走沈線帯間に1条の先端を丸めて巴状に絡む沈線を加え、横走沈線帯に縄文LRを充填する。31は口縁下に横走沈線帯を配し、上縁の沈線間には刺突列1条を加える。11などと同様に、斜行沈線と渦巻文を組み合わせた文様を配し縄文を充填する。

C種 (第83図27~30、35、第86図3)

沈線による文様を施し、縄文を充填しない土器を本種とする。

第86図3は小型の土器であり、文様は不明な点が多い。口縁部の渦巻文かと思える文様下に、先端を丸め斜行する沈線や、渦巻文外周から下る沈線を配して単位文とする。また、単位文側縁には口縁部へ上る斜行沈線を多条に配している。

第83図27、28は口縁下に横走する多条沈線を配し、斜行沈線を加える。29も同様であり渦巻文を加える。30は口縁下に矩形の区画文を配し、区画文下に横走沈線2条を配す。なお、内面に沈線1条を廻らす。34は口縁部に楕円形区画文を配し、区画文下に撥形の文様を描く。35は口縁下に三角形の区画を沈線で描き、頂部に刺突を加える。

D種 (第83図4、5)

刺突文を施すものを本種とする。

第83図4は口縁下に管状刺突列を横走させ、刺突列下に縄文を施す。5は口縁下に2条の楔形刺突文列を横走させる。

E種 (第83図32、33)

隆線による区画文を配すものを本種とする。第83図32は工字状の隆線区画中央から隆線2条を垂下させ、側縁に管状刺突を加える。33は口縁に並行する隆線1条を配し、2列の管状刺突文列を横走させる。32、33は共に口縁部内面を肥厚させて摘み出し、口端部に面をもたせる。

2類 (第83図36~62、第84図1~15、第86図4、5)

口縁部を強く内弯させる土器を本類とする。本類は文様構成、文様要素から、2条沈線で文様を描き沈線間

に縄文を充填するもの（A種）、多条沈線で文様を描き沈線間に縄文を充填するもの（B種）、多条沈線で文様を描くもの（C種）、単沈線で文様を描き縄文を加えるもの（D種）、口唇部を肥厚させ玉縁状とし、突起等を加えるもの（E種）に分ける。

A種（第83図36～47、51～55、第86図4）

口縁部を強く弯曲させ、2条沈線で文様を描いて縄文を充填するものを本種とする。

第86図4は口縁下を横走する2条沈線で画し、工字状の文様を二つ連ねた区画文を配し、下縁を横走沈線で画す。縄文LRを口縁部の沈線間および工字状の区画文外に施す。

第83図37から39は口縁下に2条沈線を横走させ、縄文を充填する。36、46、47は口縁下を横走する縄文帯からJ字状の文様を下す。36、46は区画内に縄文を充填し、47は区画外に縄文を施す。40から45は横走縄文帯から、縄文帯を鍵の手もしくは曲線的に下し、縄文を充填する。50は横走縄文帯をC字状文で区切り、斜行する縄文帯を下す。51は弱く肥厚する口縁部を2条沈線で画し、窓枠状の区画を沈線間に配す。52は横走沈線下に鋸歯状の縄文帯を配す。53、55は口縁下に鍵の手状の縄文帯を配す。なお、55は縄文帯間に垂下する隆帯を施し、両側に鍵の手状に折れる縄文帯を配す。54は楕円文を間隔を空けて施す。

B種（第83図48、49、57～59、62、第84図1～5、7、8、第86図5）

口縁部を強く弯曲させ、多重沈線で文様を描いて沈線間に縄文を充填するものを本種とする。

第86図5は口縁下に横走沈線を5条配し、下縁沈線に途切れ部を設け、渦巻文を中心に置き対向する多重の弧線文を側縁に配して単位文とする。横走沈線と弧線の交点には刺突文を加える。単位文間には多重沈線による三角文を配す。沈線間には1条おきに縄文RLを充填する。

第83図48は口縁下に間隔を空けて配した2条の横走沈線間に、2条沈線による楕円文を加える。口縁下および楕円文には縄文を充填する。49は口縁下に2条沈線を加え、渦巻文や楕円文を配す。全面に縄文LRを施す。57は多条の横走沈線を口縁下に配し、縄文を充填する。なお、59は縄文充填箇所を1条おきとする。58は横走沈線から斜行沈線を下し、62は多条の弧状沈線を下す。第84図2は口縁下の横走沈線帯から渦巻文を下し、縄文を充填する。なお、外面に黒彩を施す。3は口縁下に2条と3条の沈線帯を配し、沈線帯内に縄文を充填する。4は口縁部に横走する2条一組の沈線を2段に配し、上段には縄文を、下段には方向を変えて鋸歯状となる斜行沈線を充填する。5は多条沈線を横走させ、中間に無文帯を挟む2帯の縄文帯とする。7、8も口縁下に沈線を横走させ、間隔を空けて縄文を充填する。

C種（第83図61、第84図9）

口縁部を強く内弯させ、多条沈線で文様を描くものを本種とする。

第83図61は口縁下の横走沈線から渦巻文を下す。第84図9は口唇部を欠くが、口縁下に多重の菱形文を配す。

D種（第83図56、60、第84図6）

単沈線で文様を描き縄文を加えるものを本種とする。

第83図56、60は同一個体である。56は小波状縁の土器であり、口縁下に2条の沈線を横走させ、口唇部を除く全面に縄文を施す。60は波頂部片であり、2条の沈線を口縁部に配す。上縁の沈線は口縁波形に合わせ、波頂部で小さなJ字状の単位文を描く。口唇部および単位文部を無文とし、これ以外に縄文RLを施す。第84図6は地文縄文上に間隔を空けて2条の横走沈線を加え、口端部に刻みを施す。

E種（第84図10～15）

口唇部を肥厚させ玉縁状とし、突起等を加えるものを本種とする。

第84図10は口縁部に山形小突起を配し、突起下に刺突文2点をハの字状に加える。突起下には、U字状に連



第84図 鉢形土器・壺形土器第1群実測図 (縮尺1/3)

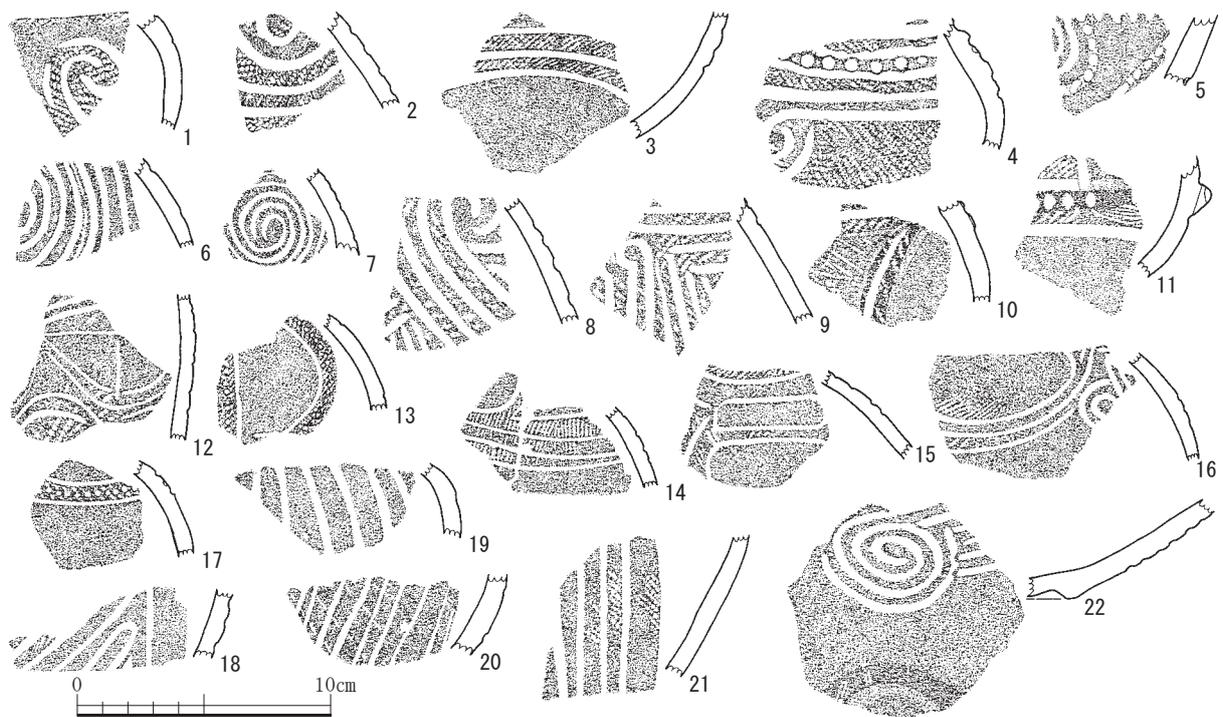
結する弧状沈線を配し、連結部に刺突1個所を加える。突起側縁より、口縁下に沈線2条を横走させる。11は口唇部を拡張して浅く幅広の沈線1条を加え、突起下を貫通する円孔に繋げる。突起下の円孔両側には弧状沈線を加え、2条の横走沈線を口縁下に配す。横走沈線下縁には、多重の扇形文を配す。口端部および円孔下に縄文RLを施す。12は口縁部に双頭山形の小突起を加え、突起下に対向する弧線文を単位文として配し縄文を充填する。13は口唇部を肥厚させ玉縁状とし、口端部に末端に刺突を加えた沈線1条を加える。14は口縁部に半円形の突起を加え、円孔を取り巻く弧状沈線を突起端部に施す。体部には横走および渦を巻く沈線を配し、縄文を充填する。15は口縁部を緩く立ち上げ、口端部を玉縁状に肥厚させる。口縁下および屈曲部に横走沈線を配して口唇部および体部には縄文を施す。

3類 (第84図16~58、第85図)

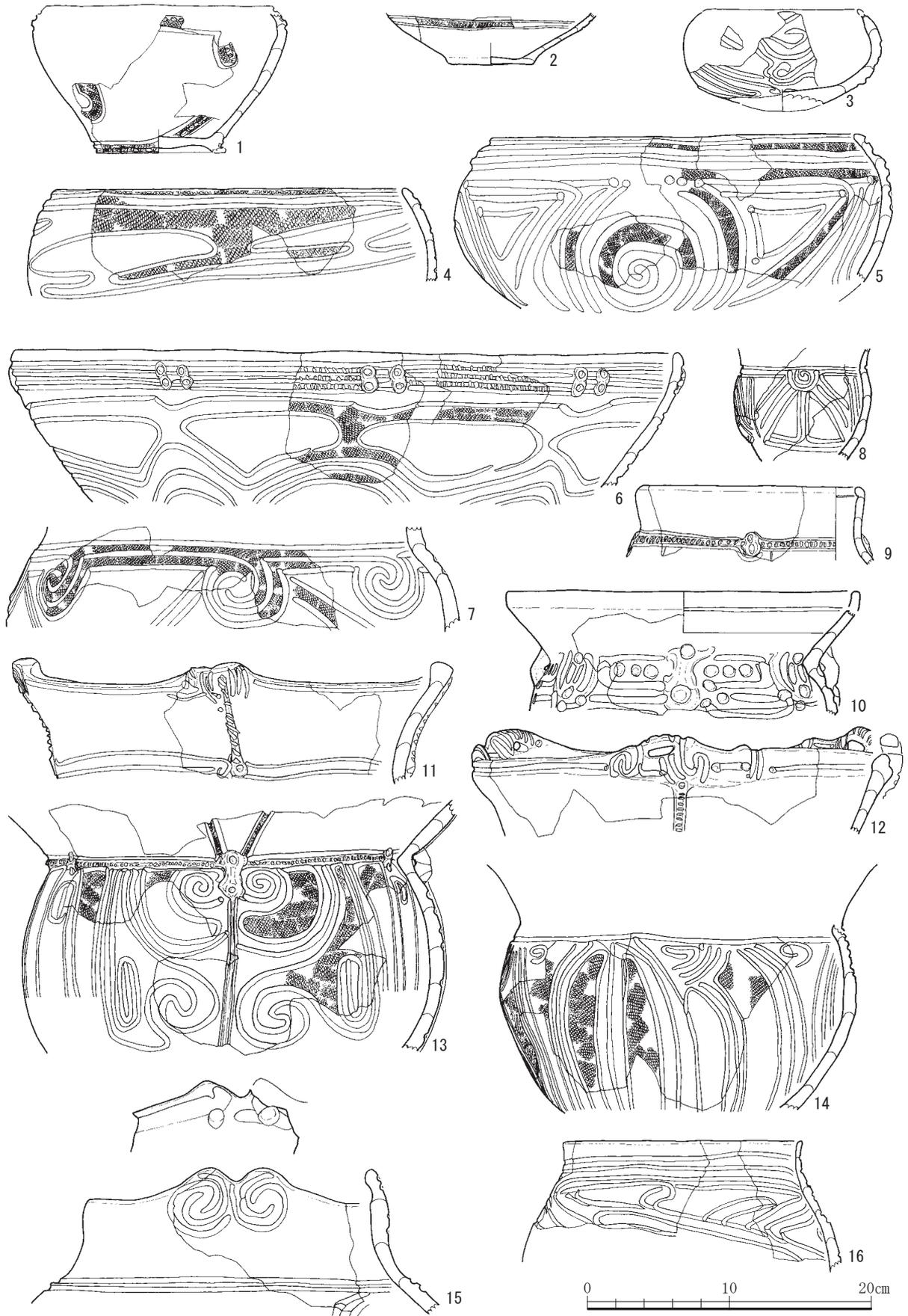
本群土器の胴部片を本類とする。本類は文様構成、文様要素から、2、3条沈線で文様を描き、沈線間に縄文を充填するもの(A種)、多条沈線で文様を描き、沈線間に縄文を充填するもの(B種)に分ける。

A種 (第84図16~45)

第84図16から19は、2条沈線による区画内に縄文を充填する土器である。20は左側を欠くが、三角形状に尖る区画内に縄文RLを充填する。21、22は同一個体であり、21は体部文様帯下縁の破片と思え、垂下する縄文帯を横走する縄文帯が受けている。22は逆に、体部上縁を区画する横走縄文帯から、縄文帯を垂下させる。充填縄文にはLRを使用する。23は横走沈線下に弧線文や楕円形文を配し、縄文LRを充填する。24は横走縄文帯下に弧状に2条沈線を配し、縄文LRを充填し黒彩を施す。25は逆しの字状の区画内に縄文を充填する。26は撥形の区画を単沈線で描く。27は横走する幅広の縄文帯から突出文を下し、縄文RLを充填する。28は垂下、斜行する2条沈線間を短沈線で埋め、縄文を充填する。29は文様帯下縁の破片と思え、横走沈線1条に加えて波状沈線2条を施し、縄文LRを充填する。30は渦文かと思え、31は剣先状の垂下文に2条の弧状沈線を加え、全体に縄文LRを充填する。32は横走する沈線区画内に、2条沈線による渦文を配す。33は矩形の区画を配し、34は渦巻文や円文の間に縄文を充填する。35は弧状の縄文帯下に斜行する縄文帯を配す。37は横走する縄文帯



第85図 鉢形土器・壺形土器第1群実測図 (縮尺1/3)



第86図 鉢形土器・壺形土器第1群～第5群実測図（縮尺1/4）

下に斜行縄文帯や渦巻もしくは弧線文を配し、節の粗い縄文LRを充填する。38は横走する縄文帯と斜行する縄文帯を三角形に配して区画内に沈線を加えており、充填縄文にはLRを使用する。39は横走縄文帯を体部中位に配し、斜行、弧状の縄文帯を加える。41、42は2条沈線による曲線区画内に縄文を充填する。43は体部下縁の破片と思え、2条の横走沈線で画された内部に、略三角形と思える区画文を対向して配し、縦位の列点文3点を加え、区画文外の沈線間に縄文RLを充填する。44も体部下縁の破片と思え、三角形のモチーフを描いて縄文を充填する。45は横走する縄文帯から渦巻く縄文帯を下す。

B種 (第84図46～58、第85図)

多条沈線で文様を描き、沈線間に縄文を充填するものを本種とする。

第84図46は横走する沈線帯下に2条沈線を絡めた渦巻文や斜行沈線を多条で加え、文様帯全面に縄文LRを施す。47は2条沈線で横走、斜行、渦巻の縄文帯を描き、略三角形の沈線区画を添わせることで多条化させる。縄文の充填は1段おきとするものと思え、縄文RLを使用する。48も横走縄文帯下に渦巻文を配す例である。49、50は横走縄文帯の下縁沈線から渦巻文を派生させる例であり、51は渦巻が扁平化している。52は横走沈線下に単沈線による振れ幅の大きな蛇行沈線や渦文を配す。縄文は地文としてLRを施す。53は横走沈線下にU字状の半円文を多重に施す。54、55は横長の渦巻文であり、54は1段おきに、55は全面に縄文を施す。56、57は中央に垂下短沈線を加えたU字状文を、縦位区画内に連続させるものであり、同一個体と思えるが、方向を逆とする。58は渦巻文を上下に重ね、文様施文部に縄文を加える。

第85図1、2は渦巻文の例であり、1は文様全面に、2は1段おきに縄文を充填する。3は文様帯下縁の破片であり、縄文を充填する横走沈線帯を配す。4は文様帯上縁の破片であり、横走沈線帯下に巴状に入組む沈線を配す。横走沈線帯には刺突を加えるほか、入組み部を除き縄文RLを充填する。5は渦巻文や斜行沈線等を配すが、外側の沈線には刺突を加える。6は沈線を多重に引き渦巻文を描き、7は2条の並行沈線により渦巻きを描く。8は4条沈線による入組み状の斜行沈線帯に、横走、斜行する沈線を加える。9は先端を丸めた垂下文の脇に多重の方形区画文を配し、縄文RLを施す。10は横走する隆帯から弧状の隆帯を下すものであり、隆帯上には沈線および縄文を加え、弧状隆帯区画内を無文とする。11は横走する刻みを加えた隆帯側縁に沈線を添え、垂下する沈線を受ける。なお、区画内には縄文を充填する。12は対向する2条の弧線文を配し、上側弧線の中央には垂下沈線を加え、下側弧線下には縄文LRを施す。13は垂下する縄文帯からD字状の突出部を派生させる。沈線間には細かな刺突を列状に加え、縄文を充填する。14は体部上半の破片であり、横走する沈線帯から弧状沈線を伸ばす。15も体部上半の破片であり、横走する縄文帯下に楕円形や鍵の手状の区画文を設け、楕円文を2段に配す。16は弧状を描く沈線帯に渦巻を加え、広い弧状区画内に縄文を充填する。18は垂下沈線に先端をU字状に繋げた斜行沈線を加える。20、21は沈線を垂下、斜行させる。22は上げ底風の底部をもち、体部下縁には渦巻文や斜行沈線を配している。

イ 第2群土器 (第86図7、第87図、第88図)

張りのある胴部が頸部でくびれて外反して開き、短く伸びて口縁部に至る鉢形土器を本群とする。本群土器は、器形および文様帯構成から以下の4類に分けた。

- 1類 張りのある胴部が頸部で強くくびれて外反して開き、短く伸びて口縁部に至る器形を有し、胴部上半に文様帯を配して口縁部内面に文様を施す土器。
- 2類 やや張りのある胴部が頸部でくびれて外反して開き、短く伸びて口縁部に至る器形を有し、胴部に縄文を施す土器。

3類 張りの弱い胴部から外反して開き、短く伸びて口縁部に至る土器。

4類 無文の鉢形土器。

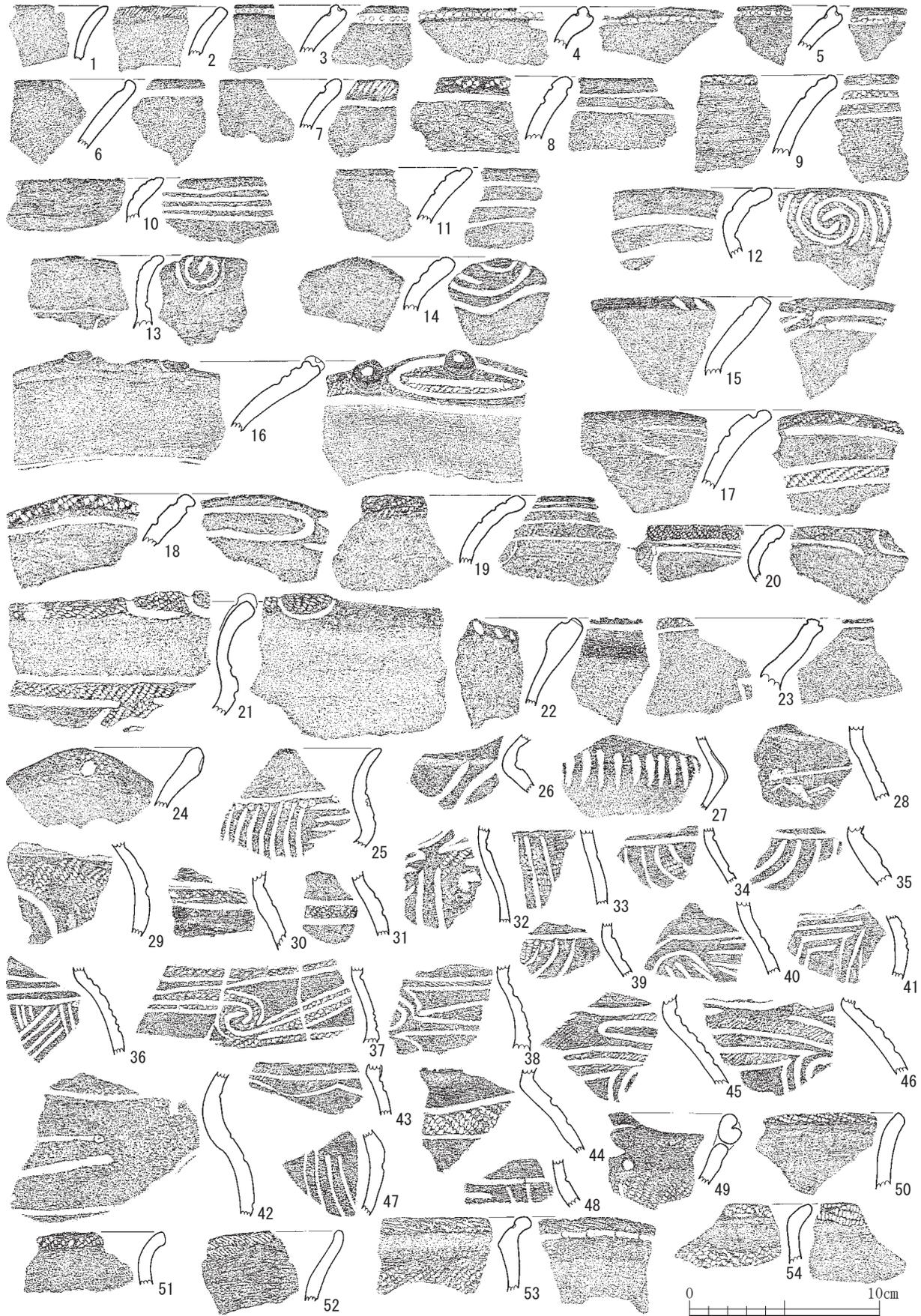
1類 (第86図7、第87図1～48)

張りのある胴部が強くとびれて外反して開き、短く伸びて口縁部に至る器形を有し、胴部上半に文様帯を配して、口縁部内面に文様を施す土器を本類とする。なお、本類は破片部位より、口縁部片(A種)と胴部片(B種)に分ける。

A種 (第87図1～25)

張りのある胴部が強くとびれて外反して開き、短く伸びて口縁部に至る器形を有し、胴部上半に文様帯を配して口縁部内面にも文様を施す土器を本種とする。

第87図1、2は短く外反して開く口縁部片であり、1は口唇部をつま先状に仕上げ、2は口端部を方角状とし縄文を施す。3、4は同一個体の口縁部片であり、口端部を方角状に仕上げて刺突を加えた沈線を口端部および内面に各々1条施す。なお、口端部から内面の沈線下までに赤彩を施す。5も4に似た破片であるが別個体であり、赤彩はない。6は緩く外反する口縁部片であり、内面に沈線1条を廻らす。7は口縁部内面に沈線1条を廻らせ、口端部との間に縄文を施す。8は外反する口縁部に沈線1条を横走させ、丸く収めた口唇部に縄文を施す。また、内面には沈線2条を廻らす。9は外反する口縁部を有し、丸く収めた口唇部に縄文を施す。また、内面には3条の沈線を横走させて縄文を充填する。10は強く外反する口唇部を丸く収め、内面に沈線4条を横走させる。11は外反する口縁部片であり、内面には沈線3条を横走させる。12は頸部から外反して開く口縁部片であり、頸部にやや幅の広い沈線2条を横走させる。内面には沈線2条を絡ませる渦巻文を配し、外縁に弧線文数条を添わせる。13はやや張りのある胴部から外反して開き口縁部に至る。頸部に沈線1条を横走させ、内面には渦巻文に半円形文を添わせる。14は緩い山形突起を施す口縁部片であり、内面に突起頂部を囲む弧線3条を引き、下縁沈線を口縁下に伸ばす。15は頸部から直線的に開く口縁部片であり、方角状に整えた口端部に斜行する刻み目を単位文として施す。内面には口端部の刻み目に合わせ蛇行沈線を配し、末端に刺突を加えた沈線2条を横走させる。なお、口端部および内面の単位文施文箇所には縄文を施す。16は頸部から内弯気味に開く口縁部片であり、頸部と胴部の境に沈線1条を横走させる。口端部を方角状に整え、刺突を加えた円形の貼付文2点を配す。内面には片方の貼付文側縁から扁平な楕円区画文を配し、区画内に末端に刺突を加えた沈線1条を加える。口縁下内面を横走する沈線を単位文下で窪ませ、口端部および内面沈線間に縄文を施す。なお、外面の頸部際および口端部と内面横走沈線間には赤彩を施す。17は外反して開く口縁部片であり、口端部を方角状に仕上げる。内面左端に単位文が見え、口縁下に横走沈線1条を引き口端部との間に縄文を施す。また、沈線2条を単位文下縁に向かわせ、縄文LRを充填する。18は外反する口縁部に沈線1条を横走させ、方角状に面をもたせた口端部に縄文を施す。内面にはC字かと思える単位文脇に、楕円形の区画文を配す。19は外反する口縁部片であり、口端部を方角状に仕上げ縄文を施す。内面には沈線3条を横走させ、下縁の沈線帯に縄文を施す。また、下縁沈線に半円形の突出文を加える。20は強く、短く外反する口縁部片であり、口唇部を丸く収める。口縁部内面には横走沈線の先端を、上下逆方向に折り単位文とする。内面の単位文に合わせ、外面には口縁下を横走する沈線を折り、垂下する2条沈線で画した縄文帯を配す。外面の横走沈線から、内面の沈線までの間に縄文を施す。21は張りのある胴部がくびれて、頸部から外反して開く土器であり、口唇部を丸く収める。口縁部にはL字状の沈線を2箇所施し、内面で半円状に繋げる。なお、口端部および内面半円部には縄文LRを施す。頸部と胴部の境を隆帯状に低く張り出させ、上縁および下縁に沈線を添える。なお、下縁沈線を途切れさせ、渦巻文かと思える文様を加えて沈線を添わせる。横走沈線間および渦巻文には縄文を



第87図 鉢形土器・壺形土器第2群実測図 (縮尺1/3)

充填する。22は外反する口縁部を内方に肥厚させ、口端部には斜行する刻み目を施す。内面の口縁直下に沈線1条を施す。23は頸部でくの字に外反して開く口縁部片であり、口端部を方角状に仕上げ、内外面に沈線各1条を横走させ縄文を施す。24は内弯気味に開く口縁部片であり、山形小突起を加えた口縁部を外方に肥厚させる。突起下には円孔を陥入させ、縄文を施す。25は張りのある胴部が頸部でくびれ、外反して開きつま先状の口唇部に至る。頸部と胴部の境を沈線1条で画し、下縁に管状刺突列1条を加える。多重の弧状沈線を単位文とし、単位文側縁に横走する沈線を多重に配す。

B種 (第86図7、第87図26～48)

張りのある胴が頸部でくびれ、外反する口縁部に至る土器である。

第86図7は胴部上縁を沈線1条で画し、横走沈線下に配した2条沈線により巴状に絡む渦巻文を施す。また、渦巻文両側には斜行する2条沈線を配す。沈線間には縄文LRを充填する。

第87図26は丸味のある胴部からくの字に外反し、胴部に斜行沈線2条を配す。27は胴部中位の最大径部に、短沈線を縦位に多重施文する。28は頸部と胴部の境に沈線1条を横走させ、下縁にハの字状の短沈線を連続させる。29は張りのある胴部上縁を横走沈線1条で画し、沈線2条による円文を胴部に配す。なお、縄文は区画外に施す。30、31は胴部を横走する沈線間に縄文を充填し、帯状の縄文帯とする。32は頸部の横走沈線の間隔を空けて2条沈線を垂下させるほか、横走沈線上縁より上方に弧状沈線を伸ばす。33は弱く張る胴部片であり、2条沈線を斜行させ縄文を充填する。34、35、39、48は胴部上縁の横走沈線下に半円文を多重施文する例であり、半円文の一部に縄文を充填する。36は胴部上端を限る3条の横走沈線から、3条の沈線を垂下させ胴部を方形に縦位分割し、斜行沈線や扇形文を多重に施し充填文とする。37は算盤玉状に屈曲する胴部上半を文様帯とする。文様帯の上下を横走する2条の沈線で画し、区画内に先端を丸めた斜行沈線を巴状に絡ませ、沈線両側に三角形に沈線1条加えて区画文としている。なお、沈線施文部には縄文を充填する。38は張りのある胴部の上下縁を各々1条の横走沈線で画し、下端沈線に添う沈線先端を渦巻き文とし、上端沈線に添う沈線を三角形の区画文とする。また、下縁沈線をC字状に曲げ、渦巻文下に新たな文様を加える。40は胴部上縁を横走沈線1条で画し、2条沈線を弧状に下して斜行沈線を充填する縦位文様とする。縦位文様側縁には横走沈線を多重に配す。41は張りのある胴部に多重の方形区画文を配す。42は張りのある胴部が頸部でくびれて外反する土器である。口縁下および胴部中位に横走沈線を配し、末端に刺突を加える2条沈線を施す。43は横走沈線2条を頸部に配し、下縁沈線に添い弧状沈線を連続施文する。なお、文様施文部には縄文を充填する。45、46は同一個体であり、張りのある胴部上縁を横走沈線で画す。胴部には斜行沈線の先端を渦巻かせ、上縁に1条、下縁に2条の沈線を添わせて、三角形と思える区画文を配している。なお、沈線間には縄文LRを充填する。

2類 (第87図49～54、第88図1～11)

やや張りのある胴部が頸部でくびれて外反して開き、短く伸びて口縁部に至る器形を有し、胴部に縄文を施す土器を本類とする。なお、本類は破片部位により、口縁部片(A種)と胴部片(B種)に分けた。

A種 (第87図49～54)

第87図49は山形突起を口縁部に配し、撚り紐状の文様を沈線で加え、突起下に小円孔を施す。頸部以下には縄文を施す。50は直立してやや長く伸びる口唇部を丸く収め、縄文を施す。51は強く外反する口縁部片であり、口唇部外面に面をもたせ縄文を施す。52は内弯気味に開く口縁部片であり、口縁部外面に縄文を施す。53は球形の胴部が強く折れて外反する土器であり、口唇部を丸く収める。内面には刺突を加えた沈線1条を廻らせ、口縁下に横撫を加えて、胴部および口端部には縄文を施す。なお、内面沈線および外面には、赤彩を施す。54は強く外反する口縁部片であり、口唇部をつま先状に整える。口縁部内外面および胴部に縄文を施す。

B種 (第88図1～11)

本類土器の胴部片を一括して本種とする。

第88図1は扁平な胴部を有すと思え、胴部上縁を横走沈線で画し、胴部に縄文RLを施す。なお、内面頸部側には横位の刷毛目状の調整痕が見える。2は胴部上縁に張りをもつ破片であり、胴部上縁を画すことなく、節のやや大きな縄文RLを施す。なお、内面には1と同様の調整痕が見える。3は張りの弱い胴部片であり、胴部には縄文LRを施す。4は頸部でくの字に外反する胴部片であり、胴部に縄文を施す。5は器高の低い皿状の胴部が頸部で外反して大きく開く土器であり、胴部上縁を横走沈線で画す。胴部には斜行もしくは横走する縄文RLを施す。6から9は胴部上縁の破片であり、強く外反して開くものや、張りの弱い胴部を有するものなどが見える。10、11は胴部片であり、10は縦走、横走する縄文を施す。

3類 (第88図12～16)

張りの弱い胴部から外反して開き、短く伸びて口縁部に至る土器を一括して本類とする。

第88図12は頸部の上縁と下縁を横走する並行沈線で画し、区画内に縄文を充填する。胴部にも斜行する並行沈線や縄文が見えるが、詳細は不明である。13は外反してつま先状に仕上げる口唇部を有し、頸部に3条の横走沈線を廻らせ、下縁に縄文を施す。14は球形の胴部から直立する口縁部に至る土器であり、方角状に整えた口端部に押え状の刻みを施す。口縁部と胴部の境に沈線1条を横走させ区画する。口縁部には口縁直下に円形刺突列を1条横走させ、2条沈線による鋸歯文を配す。胴部には弧状沈線を3条引く。15は外反する口縁部を外方に肥厚させ断面三角形とし、口縁部外面に縄文を施す。16は頸部に文様を施す土器である。頸部上縁を横走沈線で画し、頸部には渦巻文や多重の方形区画文を配して胴部には縄文を施す。

4類 (第88図34～63)

無文の鉢形土器を本類とする。本類はボール形器形の土器で口縁部が弱く内弯するもの(A種)、口縁部が強く内弯するもの(B種)と、外反する口縁部を有すもの(C種)に分けた。

A種 (第88図34～38)

口縁部が内弯して開くものであり、開きの大きなもの(34)から直立するもの(38)までがある。なお、37の外面には黒彩を施す。

B種 (第88図39～49、51)

口縁部が強く内弯するものである。素文のものと縄文を施すもの(44、48、49)、調整痕である刷毛目状の条線を残すもの(51)がある。また、口端部を方角状に整え、刻みを施すもの(47～49)もある。49は口縁部を外方に肥厚させ、外面に稜をもたせる。

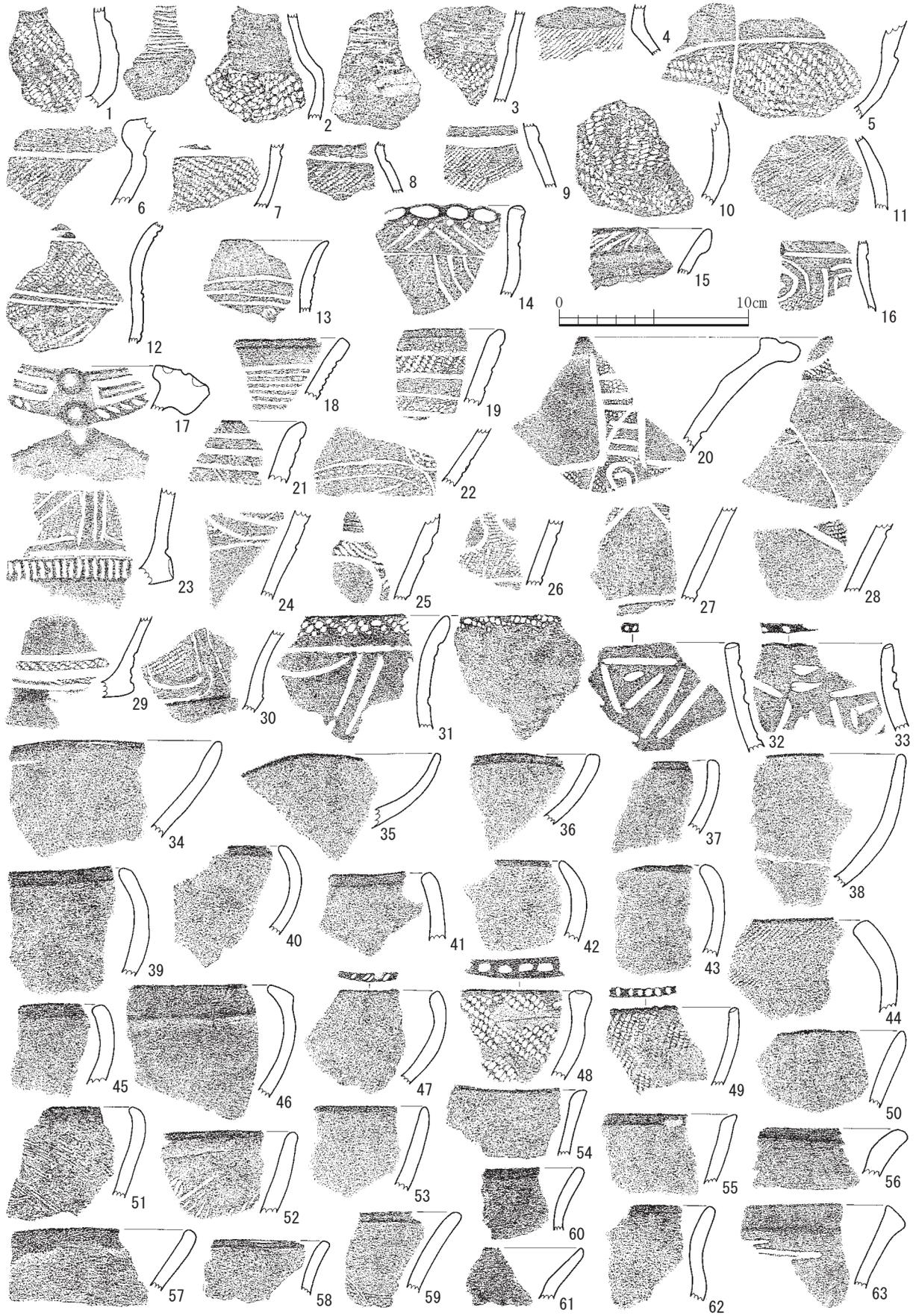
C種 (第88図50、52～63)

口縁部が外反するものである。50、52から55は外反の度合いが弱い。54、55は口唇部を内削ぎとする。62は緩く張った胴部から外反して開き、口唇部を丸く収める。63は口縁部を外方に肥厚させ、断面三角形とする。

ウ 第3群土器 (第88図17～30)

体部から外反して大きく開く、朝顔形器形の鉢形土器を一括して本群とする。

第88図17は体部から外反して開く土器であり、口縁部を外方に肥厚させ上面を文様帯とする。口縁部には8字状の貼付文を配し、円形刺突2点を加える。貼付文両側には矩形の区画文を沈線で施す。また、口縁部外側には斜行する刻み目を施す。なお、貼付文下には突起の欠失部が見え、橋状把手を加えているのかもしれない。18は外反する口縁部に横走沈線を多重に引いている。また、19、21は外反する口縁部に横走沈線を引き、縄文



第88図 鉢形土器・壺形土器第2群、第3群、第5群実測図（縮尺1/3）

を充填する。20は外反して開く口縁部を内外に拡張し、口縁部上面を文様帯とする。上面には弧状沈線を施し、縄文を施す。外面文様との関係から単位文の可能性もある。外面には2条沈線を垂下させ、末端を左右方に伸ばす。垂下沈線間には横位の短沈線を梯子状に引き、縄文RLを充填する。なお、垂下文下には渦巻文が見える。また、内面には有段となる箇所がある。22は沈線2条による弧状区画内に、刺突文列1条を充填する。23は底部際の破片であり、胴部下端に低く隆帯を廻らせ、縦位の短沈線を密に施す。胴部には垂下沈線1条を引き、両側に三角形や方形の区画文を配し縄文LRを充填する。24は横走沈線から弧状の沈線2条を立ち上げている。25、26は横走縄文帯から曲線文を伸ばし、縄文を充填する。27、28は大柄の三角文を沈線で区画された縄文帯で描く。29は胴部下縁の破片であり、底部はやや丸底となるかに見える。胴部下縁に横走沈線2条を配し、縄文LRを充填する。30も底部際の破片であり、丸底風の底部に見える。文様は23に似て、1条の垂下沈線脇に、2条沈線による区画文を描き縄文を充填する。

エ 第4群土器 (第86図10~14、第89図、第90図、第91図1~44、第92図1~47)

球状の胴部が頸部でくびれて外反して開き、口縁部を折り直立させる土器を本群とする。本群土器は口縁部、頸部、胴部の3文様帯で構成され、頸部を無文帯とすることを基本とする。本群は器形、文様帯構成、部位から以下の4類に分けた。

- 1類 く の字に内折する口縁部に突起等を加え、やや幅の広い文様帯とする土器。
- 2類 口縁部を短く折り直立させ、幅の狭い文様帯とする土器。
- 3類 本群1、2類土器の頸部片および胴部片。
- 4類 張りのある胴部上半および、外反して開く口縁部に文様帯を配す土器。

1類 (第86図12、第89図、第90図1~12)

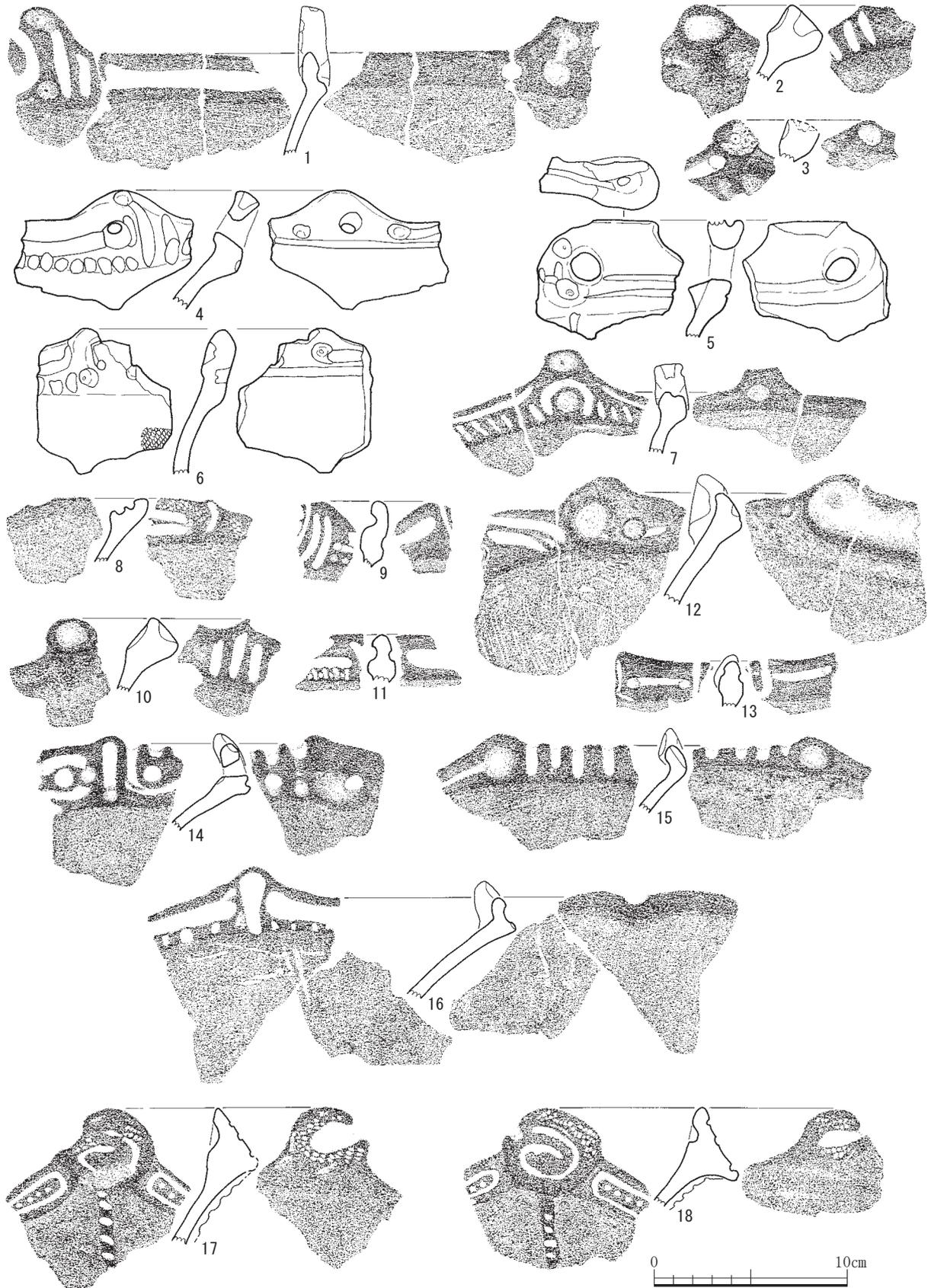
外反して開く頸部から、くの字に内折する口縁部に至る土器であり、口縁部に突起等を加えてやや幅の広い文様帯とする土器を本類とする。本類は口縁部形態から、内面に肥厚帯をもつもの(A種)、口縁部をくの字に折り曲げるもの(B種)、口縁部を外方に肥厚させて断面三角形状とするもの(C種)、口縁部を幅広く外方に肥厚させるもの(D種)および、口縁部に肥厚のないもの(E種)に分ける。なお、本類土器は2類に比べ器厚が厚いものが多い。

A種 (第86図12、第89図1~13)

くの字に内折する口縁部に突起等を加えてやや幅の広い口縁部文様帯とし、内面に肥厚帯をもつ土器を本種とする。

第86図12は無文を基調とする頸部から、外傾して立ち上がり口縁部に至る。口縁部内面をD字状に肥厚させ下縁にはなぞり状の沈線を横走させる。口縁部には大小一対の山形突起3単位を配す。大突起端部には短沈線3条を配して内面まで沈線を伸ばすほか、突起下に楕円形の孔を貫通させる。楕円孔の両側には横位に蛇行する沈線とC字状文とを入り組ませた沈線を配し、先端を口端部まで切り上げる。なお、蛇行沈線の一方を内面まで伸ばし、内面にも横走する蛇行沈線を描く。また、楕円孔下には、蛇行沈線に添わせた2条の弧状沈線を短く引くほか、L字状の短沈線を加える。大突起下の頸部には、末端に円形刺突を加えた刻み目を施す隆線を1条垂下させる。両山形突起間を両端に刺突を加えた沈線1条で繋ぐ。小突起外側には2条の縦走沈線を内面まで引き、先端をU字状に繋げている。なお、内面の突起部両端には円形刺突を1点ずつ配している。外面の突起両側には先端に刺突を加えた沈線1条を横走させる。

第89図1は外反する頸部から直立する口縁部に至る土器であり、口縁部に突起を施す。口縁部内面側に肥厚



第89図 鉢形土器・壺形土器第4群実測図 (縮尺1/3)

帯をもつ。なお、突起は欠けており、全様は不明である。山形突起頂部を円柱状とし、頂部および口縁部下縁に円孔を加える。縦位沈線2条およびC字状の沈線突起下に配す。また、突起側縁から、末端に貫通する刺突を加えた沈線1条を口縁下に横走させる。内面には突起下に大型の円孔2点を縦位に陥入させ、短沈線で繋ぐほか、突起基部の肥厚帯に円孔1箇所を陥入する。

2は波状口縁の波頂部に盃状の突起を加える。内面の肥厚帯は稜をもち縦位短沈線を密に施す。3も波状縁の波頂部に円盤状の山形突起を施し、管状刺突1点を中央部に施す。外面には末端に刺突を加えた沈線1条を口縁波形に合わせて横走させ、口縁部文様帯とする。内面の肥厚帯に八字状に稜を付け、円孔1点を加える。

4は外反する頸部から外傾する口縁部に至る土器であり、内面には稜をもつ肥厚帯を配す。丸山形突起を口縁部に配し、口縁部下縁には稜をもたせる。山形突起下に貫通する円孔を施し、幅広の沈線1条を横走させる。突起頂部に刺突を加えて沈線1条を垂下させ、片側に短沈線1条を添わせる。なお、口縁部下縁の外側部と横走沈線間に、D字状の刺突を連続施文する。内面の肥厚帯には貫通する円孔の両側に円形刺突を加え、片方の刺突から沈線1条を横走させる。

5は外反する頸部から直立する口縁部に至る土器であり、口縁部には頂部を耳状に肥厚する台形の山形突起を配す。なお、口縁部下縁には稜をもたせる。突起下には大型の貫通する円孔を穿ち、側縁には短沈線で繋がる円孔2点を配す。また、円孔際より沈線2条を口縁下に横走させる。なお、波頂下の頸部には沈線1条を垂下させている。耳状に肥厚する突起上面には、円孔を加えた沈線1条を横走させる。内面の肥厚帯には、円孔から伸びる幅の広いなぞり状の沈線を加え、肥厚帯下縁に断面三角形の隆帯を配したかに見える。

6は外反する頸部から外傾気味に立ち上がり口縁部に至る土器である。突起の全容は不明であるが、山形を呈すかに見える。なお、口縁部下縁には稜をもたせる。突起下には鍵の手状に細く沈線を加え、下縁には円形刺突1点を施す。口縁部には横走沈線1条を配し、口縁部下縁外側との間にD字状の刺突を加える。内面の肥厚帯下縁を撫でて稜を際立たせ、肥厚部には末端に円形刺突を加えた沈線1条を横走させる。なお、頸部には無文部をもたせ、一部に縄文の施文が見える。

7は外反する頸部から稜をもって直立して口縁部に至る土器である。口縁部に山形突起を配し、頂部に大型の円孔を陥入させ、突起下には半円状の沈線で囲まれた大型の円孔を配す。突起側面から沈線を両側に引き分け、口縁下縁外側に斜行する刻み目状の短沈線を施す。内面の肥厚帯下縁を撫でて稜を際立たせ、波頂下に大型の円孔1点を配す。

8は外反する口縁部を内方に肥厚させ、上面を文様帯とする。口縁部に配した突起部の破片であり、V字状に沈線を折り返し、側縁にC字状の沈線1条を添わせる。なお、文様帯には縄文LRを施す。9は稜をもって立ち上がる波頂部片であり、内面には肥厚帯をもつ。弧状を呈する細い沈線1条を内面まで縦走させ、2条の弧状沈線を添わせている。末端に刺突を加えた沈線1条を口縁下に横走させ、口縁部下縁の稜との間に円形刺突列1条を横走させる。内面肥厚帯には、外面から口縁部を横断して配した垂下沈線側縁に、末端に刺突を加えるやや幅広の沈線を横走させる。10は2に類似する破片であり、波状縁の頂部に盃状の突起を施す。内面肥厚帯の下縁には稜をもち、縦走する短沈線を密に施す。11は稜をもって立ち上がる口縁部片であり、内面に肥厚帯をもつ。外面には単位文かと思える縦位沈線1条が見え、側縁から沈線1条を横走させ、口縁部下縁に縄文を施す。内面肥厚帯には、外面単位文施文位置から沈線1条を横走させる。13は稜をもって立ち上がる口縁部片であり、内面に肥厚帯をもつ。突起基部の破片と思え、縦位の弧線と内面でU字状に繋がる2条の垂下沈線間に、両端に刺突をもつ短沈線1条を横走させる。内面の肥厚部にはU字状沈線側縁から、横走する短沈線を引き先端に刺突を加える。

12は外反する頸部から、やや内傾する口縁部に至る土器であり、内面に肥厚帯をもつ。口縁部に配した丸山形突起は、大型突起の一部と思える。山形突起外縁をC字状に肥厚させ、中央部に大型の円孔を陥入させる。欠失する突起側には沈線2条を斜行させ、口縁下には末端に刺突を加えた沈線1条を横走させるものと見える。内面肥厚部には突起下に大型の円孔を加え、円孔から撫で状の幅の広い沈線を引く。外見上、口縁下に山形突起から伸びる隆帯を配したかのように見える。外面頸部には縦位の櫛描文を粗く施し、黒彩を施す。また、内面にも黒彩を施す。

B種 (第89図14~16)

くの字に折り曲げた口縁部を文様帯とする土器を本種とする。

第89図14は、くの字に折った口縁部に山形突起を配す土器である。突起下には貫通する円孔2点を穿つ。円孔間には幅広沈線を垂下させ、末端に刺突を加える。一方の円孔側縁には刺突1点を加え、幅広の横走沈線で上下を囲む。他方の円孔には小突起頂部からL字状に沈線を伸ばして区画するほか、沈線を内面まで伸ばし先端に刺突を加える。なお、内面の屈曲部を弱く肥厚させている。

15は外反する頸部をくの字に折り口縁部文様帯とし、丸山形の突起を配す。突起内外面には大型の円孔を陥入させ、口縁部外面を横走する沈線1条を派生させる。突起片側には、口端部まで伸びる縦位の短沈線を密に施している。

16はくの字に折った口縁部に山形突起を加え、突起下に縦位短沈線を施す。また、沈線両側には口縁下を横走する沈線1条を配し、口縁部下縁との間に刻み目を施す。なお、頸部を含め外面には、黒彩の痕跡を残す。

C種 (第89図17、18、第90図2~6)

口縁部を外方に肥厚させ断面三角形状とし、口縁部文様帯とするものを本種とする。

第89図17、18は同一個体であり、外反する口縁部を外方に肥厚させ断面三角形状とし、波頂部に円盤状の突起を貼付する。円形の波頂部外面には渦巻文を、内面には幅広の斜行沈線を配し、両面に縄文LRを施す。突起外側には刺突列を充填する楕円形の区画文を配し、波頂下には刻みを施す隆線を垂下させる。第90図2は外反する口縁部を肥厚させ断面三角形状とし、山形突起を加える。山形突起にはU字状文を加え、弧状沈線を添わせる。突起基部から口縁部に沈線1条を横走させる。3は外反する口縁部を肥厚させ断面三角形状とし、中空の箱型把手を加える。把手上面の左側および正面の円孔下の突起先端を欠く。正面中央に貫通する円孔を穿ち、両側に配した刺突から円孔を囲む弧線を施す。また、円孔下縁にも刺突を加え突起を伸ばすが、先端を欠失する。なお、正面上端にも刺突と沈線を配したと見える。左右両側面には貫通する大型の円孔を加え、口縁部を横走する沈線1条を配す。裏面には貫通する円孔周縁に円形刺突3点を配し、頂点から左右に沈線を引き下ろしている。上面にも円形の貫通孔をもち、側縁に刺突2点とこれを繋ぐ沈線1条を配している。4は弱く肥厚する口縁部片であり、単位文の一部と思える縦位短沈線の側縁から、先端に刺突を加えた沈線1条を横走させる。5は口縁部を外方に肥厚させ尖った三角山形の突起を配す口縁部片である。突起頂部には刺突を加え、外面中央の稜に添い沈線1条を垂下させて下縁に刺突文1点を加える。垂線を挟み左右に刺突を加え、L字状の沈線とC字状文、先端を丸めたL字状沈線を各々口縁部に配す。6は断面三角形状に肥厚する突起部の破片であり、口端部に沈線1条を引くほか、突起から弧状沈線を下す。

D種 (第90図1、7~11)

口縁部を幅広く外方に肥厚させるものを本種とする。

第90図1は外反する口縁部を外方に肥厚させて突起を施す土器である。非対称形の台形状突起には、突起部に横走する沈線2条を引き、口端部に押え状の刻みを加えて外面にはコの字状と円形の刺突を施す。内面の突



第90圖 鉢形土器・壺形土器第4群実測図 (縮尺1/3)

起部下にはやや大型の円形刺突を加えて沈線を横走させる。7は人形を思わせる把手片であり、丸山形を呈すと思える把手頂部には、隆線で囲まれた貫通する円孔を配す。左右方に伸びる円柱状の突起から隆線を斜行させ、末端部に円形の貼付文を加える。8は台形状の突起片であり、突起下に幅広の横走沈線2条を引き、沈線間には円形刺突を施す。9は貫通する円孔を施す把手片であり、円孔側縁に弧状沈線2条を添わせる。10は貫通する円孔を穿つ把手片であり、円孔側縁に幅広の弧状沈線を施す。11も貫通する円孔を穿つ把手片であり、垂下沈線および弧状沈線を円孔に添えている。

E種 (第86図11、第90図12)

肥厚しない口縁部に突起等を配すものを本種とする。

第86図11は外反し口端部をつま先状に収める口縁部に、非対称形の台形状突起を加える。突起中心部を肥厚させ上面を楕円形とし、刺突を加えた円孔を陥入させて左縁に斜行する短沈線を施す。突起中心部から斜行する刻みを施す紐線を垂下させて頸部に配した横走する2条沈線で止め、刺突を施す円形貼付文を先端に加える。突起部の紐線両側には対向する弧線文を配し、口縁に並行する横走沈線を左右に伸ばす。なお、頸部横走沈線の片方は、先端をC字状に折り返す。第90図12は外反して開く波状縁の土器であり、波頂部に円柱状の突起を加えて隆線1条を垂下させる。なお、内面には沈線1条を配す。

2類 (第86図9、第90図13~39、第91図1~44)

外反し開く頸部から、口縁部を短く折り直立させて幅の狭い文様帯とする土器を本類とする。本類は口縁部形態から、口縁部を肥厚させ上面文様をもつもの(A種)、口縁部外面に稜をもち、短く直立する口縁部に至る土器で、口縁部内面に沈線もしくはなぞり状の幅の広い沈線を施すもの(B種)、外反する口縁部を外方に肥厚させ、口縁部に幅の狭い文様帯をもつもの(C種)、外反する口縁部をもつもの(D種)、紐線を施した頸部片(E種)、把手、突起(F種)、胴部片(G種)に分ける。なお、本類は器厚が薄く、外面を磨いたものが多い。

A種 (第90図13、14)

第90図13、14は同一個体である。口縁部を内方に肥厚させ、口縁部に低い山形突起を配す。突起下には、斜行する刻み目を施す紐線1条を垂下させる。山形突起部下縁を肥厚させ、円形刺突文から弧状に伸びる沈線を口端部際に配して先端を渦巻かせる。

B種 (第86図9、第90図15~39、第91図1~4)

口縁部外面に稜をもち、短く直立する口縁部に至る土器で、口縁部内面に沈線もしくはなぞり状の幅の広い沈線を施すものを本種とする。

第86図9は張りのある胴部が頸部で直立気味に立ち上がり、口縁部を短く内方に折る土器である。内面には折り返しに伴う沈線様の谷線を残す。頸部に刺突を加えた紐線1条を横走させ、単位文として刺突を加えた8字状貼付文を配す。紐線文下縁に沈線を横走させ、貼付文下でU字状に窪ませる。口縁部には屈曲に伴う稜を残すのみで、文様の施文はない。

第90図15は外反する頸部を口縁部際に折る波状縁の土器であり、肥厚して内傾する口端部を方角状に整える。外面波頂下に大型の円文を加え、内面肥厚部の突起下には円形刺突2点を加える。なお、内面の肥厚部下縁になぞり状の幅広沈線を横走させる。16は外反して開く頸部を口縁部際に折り、内方に肥厚させて直立する口縁部に至る土器であり、屈曲部に稜を残す。口縁部に山形突起を配し、突起下にC字状に隆線を加え、両側に刺突文2点を施す。肥厚する内面には、波頂下に大型の円形刺突1点を加え、肥厚部下縁になぞり状の幅広沈線を施す。17は外反して開く頸部を口縁部際に短く折り、直立する口縁部に至る土器である。口縁部を内方に肥厚させ、内傾する口端部を方角状に整え山形突起を施す。内面突起下には、円形刺突文2点を横位に配す。口

縁部外面に稜を残し、内面の肥厚部下にはなぞり状の幅広沈線を施す。頸部には沈線1条を横走させる。18は直立し外面に稜を残す口縁部に、大小の山形装飾突起を施す。大突起下には貫通する楕円孔を穿ち、上面に刺突文と斜行沈線を施す。小突起下には弧状沈線1条を配す。口縁部内面を肥厚させ、小山形突起下に弧状短沈線を配し、下縁になぞり状の幅広沈線を加える。19は頸部からくの字に外反して開き、弱く内弯して立ち上がり口縁部に至る。口縁部外面には稜を残す。口縁部を内方に肥厚させ、内傾する口端部を方角状に整え、下縁になぞり状の幅広沈線を横走させる。20は外反する頸部を口縁部際でくの字に折り、内面をスロープ状に仕上げる。口縁部に山形突起を配し、突起下に刺突2点を加える。突起両側から横走沈線を左右に伸ばす。21は外反する頸部から短く直立させる口縁部に至り、刺突文および横走沈線1条を配す。弱く肥厚する内面には沈線1条を加える。22は外反する頸部を口縁部際で短く折って直立する口縁部に至り、台形状の突起を配す。突起頂部に面をもたせ、刺突1点を加える。また、突起下に刺突2点を配し、側縁よりやや幅広の沈線を横走させる。口縁部の内方への肥厚は弱く、内傾する口端部に面をもたせ、下縁になぞり状の幅広沈線を横走させる。23は山形波状縁の土器であり、頸部に横走沈線1条を加えて外反して開く頸部から、直立して立ち上がり口縁部に至る。なお、外面に稜を残す。口縁部を内方に肥厚させて口端部を方角状に仕上げ、口縁下になぞり状の幅広沈線を横走させる。波頂下に刺突文を配し、片側の口縁部下縁に沈線1条を横走させる。内面の波頂下には円形刺突2点を配す。24は外反する頸部を、短く内弯気味に折り口縁部とする。また、口縁部を内方に肥厚させ、口端部を方角状に整えて内面の肥厚部下縁に横走沈線1条を添わせる。外面の刺突文の両側には短沈線を密に施す。25は外反して開く頸部を口縁部際で折り、短く直立する口縁部に至る土器であり、口縁部に山形突起を配す。口縁部を内方にやや幅広く肥厚させて口端部を方角状に仕上げ、内面の肥厚部下縁に沈線1条を廻らす。外面の突起下にはS字状の沈線を横位に配し、口縁部側の先端を内面まで伸ばしてノの字状に収める。また、S字凹曲部には斜行、垂下する短沈線を加えている。山形突起基部に縦位短沈線1条を配し、口縁下に沈線1条を横走させる。内面肥厚部には山形突起部の文様のほか、外面と同様の位置から沈線1条を横走させる。なお、頸部には刻みを加えた斜行する紐線1条を配しており、突起部をV字状に囲むものと思える。26は24と同一個体であり、3条の短沈線側縁から沈線を横走させる。27は外反する頸部を口縁部際で短く直立させる。口縁部を内方に肥厚させて内傾する口端部を方角状に整え、内面の肥厚部下縁に沈線1条を横走させる。口縁部外面には刺突文1点を配し、左右方向に沈線1条を伸ばす。28は山形突起をもつ口縁部片であり、短く直立する口縁部をもつ。内面にはやや幅広い肥厚帯を配し、下縁に沈線1条を添わせる。波頂下に刺突を加えた円形貼付文を配し、右側には多重の弧状沈線を添わせて左側から沈線1条を横走させている。なお、波頂部の円形貼付文より、刻みを施す紐線文1条を垂下させる。内面には頂部からC字状の隆線を貼付し、刺突文から沈線1条を派生させる。また、左側には弧状短沈線2条を添わせて管状刺突文1点を加える。29は短く内傾して立ち上がる口縁部に沈線1条を配し、頸部には口縁部からやや斜行する刻みを施す紐線1条を下す。なお、内面はスロープ状に仕上げる。30は短く直立する口縁部に沈線1条を横走させ、口縁部から紐線1条を垂下させる。内面の肥厚は弱く、口縁下に幅広いなぞり状沈線1条を横走させる。31は波状縁の土器であり、短く直立する口縁部には、単位文と思える刺突を末端に加えた沈線1条を横走させ、口縁部から垂下する紐線1条を配す。内方に肥厚させて内傾する口端部を方角状に仕上げ、内面の肥厚部下縁になぞり状の沈線を横走させる。32は短く内弯する口縁部を有し、内傾する口端部を方角状に整えて内面の下縁になぞり状沈線を施す。口縁部に刺突文2点を配し単位文とし、側縁には縦位の短沈線を密に施す。また、刺突文下から斜行する刻みを施す紐線を下す。なお、紐線両側には、口縁部下縁を限る沈線から繋がる沈線1条を各々添えている。33～39は内傾もしくは直立する口縁部に沈線1条を横走させる例であり、36は内面に肥厚帯をもたない。いずれも口縁部内面

に、なぞり状の幅広沈線を横走させている。37、38は内面の肥厚が弱く、肥厚部下に沈線を施す。また、39は頸部に横走沈線1条を配し、頸部下縁までの間に縄文を施している。内面の肥厚は弱く、下縁に沈線1条を配す。第91図1から3は内傾もしくは直立する幅の狭い口縁部に、文様を施さず稜のみを残すものである。2、4は外面を肥厚させて方角状とするが、1、3は肥厚せず断面三角形状とする。なお、4は頸部に横走沈線2条を引き、縄文RLを充填する。

C種 (第91図5～13)

外反する口縁部を外方に肥厚させて口縁部に幅の狭い文様帯をもつものを本種とする。

第91図5は口縁部を肥厚させず、内面に沈線1条を横走させる。6は外反する頸部を弱く折り、面をもつ口縁部に沈線1条を加え、内面にはなぞり状の幅広沈線を施す。なお、頸部に垂下沈線1条を配す。7は口縁部を外方に肥厚させ断面三角形状とし、幅の狭い文様帯を口縁部に配す土器である。口縁部には円形貼付文を配し、下縁に円形刺突文を浅く施す。貼付文の上半を巻いて先端を丸めた沈線を横走させ、反对方へも沈線1条伸ばす。内面に肥厚は見え、スロープ状に仕上げる。8は外反する口縁部を断面三角形状に整え文様帯とし、沈線1条を横走させる。9も外反する口縁部を外方に面をもたせて肥厚させ、口縁部に山形突起を配す。突起下には先端に刺突文を加えた幅広の沈線を左右方向に伸ばす。10も口縁部を外方に肥厚させて沈線1条を横走させる。なお、肥厚部下縁は、沈線施文前に断面三角形状の隆帯様に整えられていたものと見える。11、12は外反する口縁部を外方に肥厚させ、沈線1条を配して文様帯とする。13も同様であるが、胴部に節の大きな斜縄文LRを施している。

D種 (第91図14～19)

外反する口縁部をもつ土器を本種とする。

第91図14は外反して口縁部に至る土器で、胴部に沈線3条を施す。15も同様の土器であり、口端部に縄文を施し、胴部に垂下沈線2条を施す。16は頸部に沈線1条を横走させ、内弯気味に開く土器である。17は外反する口縁部片であり、頸部に横走する紐線1条を配し、紐線上には縄文を施す。18は外反する口縁部から、刻みを施す紐線1条を垂下させる。19も外反する口縁部から、刻みを加えた紐線1条を垂下させる。

3類 (第91図1～44、第93図1～47)

本群1、2類土器の頸部片および胴部片を本類とする。本類土器は破片の部位により、頸部片(A種)、把手、突起片(B種)、胴部片(C種)に分ける。

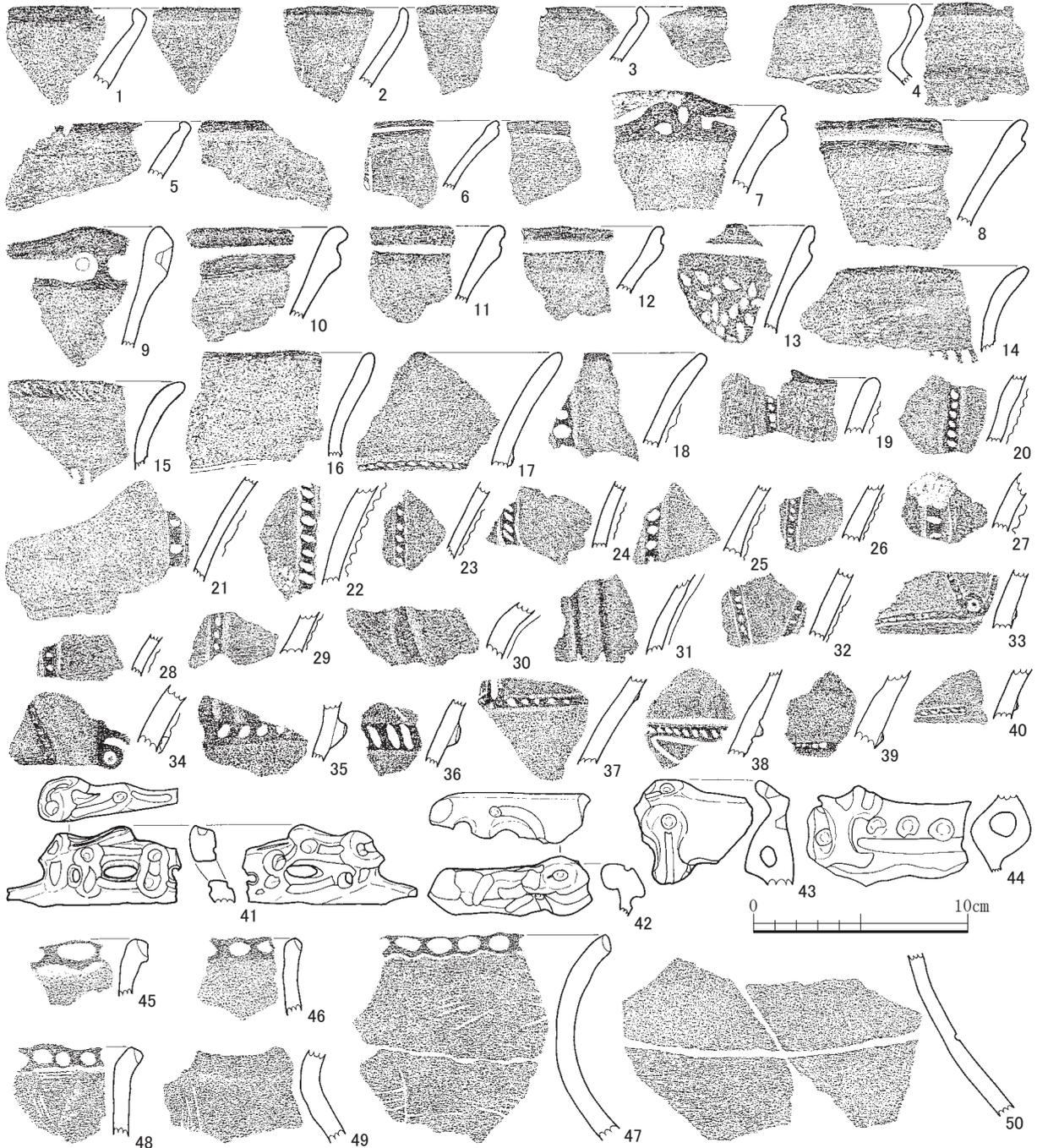
A種 (第91図20～40)

紐線を施した頸部片を本種とする。

第91図20から29は垂下する刻み目を施した紐線であり、21、24は側縁に沈線を添わせる。30、31は紐線上に刻み目をもたない。32、33はV字状に紐線を配すものであり、刻み目を施している。33は横走する紐線に、V字状に斜行する紐線をぶつけ、交点に管状刺突を加えた円形貼付文を加えている。34は垂下する刻みを施す隆帯に円形貼付文を加えるほか、斜行する紐線を折り横走させている。なお、紐線上には刻み目を施す。35から40は横走する紐線を配すものであり、35は横走し刻み目を施す隆帯様の紐線から、2条の紐線を立ち上げる。36も幅広の横走する紐線に、縦位短沈線を刻み目として施す。37は横走する刻みを施す紐線から、2条の紐線を立ち上げて紐線間に沈線を施す。38は横走する刻みを施す紐線の上縁および下縁に沈線を添わせ、うち下縁沈線を折り斜行して下す。39、40も横走する刻みを施す紐線であるが、40は途中で紐線を止めている。

B種 (第91図41～44)

本群土器の把手、突起を本種とする。



第91図 鉢形土器・壺形土器第4群、第5群実測図（縮尺1/3）

第91図41は装飾突起片であり、内外面および上面に文様を施す。台形状の突起左側にさらに突起を施し、右突起下に横位楕円形の透かし孔を穿つ。また、左突起下には縦位の小楕円孔を穿つ。なお、横位楕円孔の右にはさらに孔を設けた痕跡があり、孔の上下を横走沈線で画している。中央の横位楕円孔の上下を横走沈線で画し、右側に両端を刺突する縦位短沈線を配す。左の小孔は2条の縦位短沈線で両側を画し、右短沈線上に刺突文1点を加える。台形状の突起上面の左縁を楕円形の肥厚部とし、8字状の貼付文を配している。楕円形の突起頂部には円孔1個を施し、楕円文側縁に向かう沈線2条を刺突文から派生させる。突起左側縁に垂れさがる横位の8字状貼付文には円形刺突2点を加える。なお、突起外縁の台形状把手上面には、横位の沈線1条を配す。内面の横位楕円孔および縦位小楕円孔周辺を台形状に窪め、窓枠状区画とする。区画上辺に添い、刺突を加え

た横位短沈線を配すほか、斜辺、側辺に単沈線3条を加える。なお、底辺には窓枠区画内の横位楕円孔下に横走短沈線1条を加えている。42は内弯する口縁部に配された装飾突起片である。口縁部に横長の粘土塊を貼付し、縦位の貫通する円孔、刺突などを施すものと見えるが、欠失のため詳細は不明である。上面には末端に刺突をもつ弧線文を円孔際添える。突起下縁にも沈線で弧線文などを施す。43はくの字に屈曲して開く頸部を口縁部際で折り、短く直立する口縁部に至る土器であり、くの字屈曲部に橋状把手を配すほか、口縁部に山形小突起を加える。口縁部外面には屈曲に伴う稜を残し、内面屈曲部には沈線を廻らせる。なお、口縁部の肥厚は見えない。橋状把手基部には円形刺突を加え、橋上部上面に沈線1条を垂下させる。また、山形小突起にも刺突を加え、横走する沈線1条を派生させる。44もくの字に屈曲する頸部に橋状把手を配し、頸部に大型の円孔を列状に施して下縁に沈線1条を加える。

C種（第86図8、10、13、14、第92図1～47）

本群土器の胴部片を本種とする。

第86図8は球状の胴部が頸部でくびれ、外反して開き口縁部に至る小型の土器である。頸部と胴部の境は2条の横走沈線で画すが、下側沈線には途切れ部を設ける。下側沈線途切れ部に渦巻文とこれを囲むU字文を配し単位文とする。単位文は4単位を配す。単位文から垂下する2条沈線を胴部下半で左右に折り、さらに沈線1条を下縁に加える。また、各単位文の間には2条沈線を垂下させ、器面を縦位に8分割する。区画内には単位文から対角に斜行沈線3条を下す。なお、単位文間に配した2条の垂下沈線下は、開放されている。

第86図10は球状の胴部が頸部でくびれ、くの字に屈曲し外反して大きく開き、直立する口縁部に至る土器であるが、胴部下半および口縁部を欠失する。くの字に屈曲する頸部には橋状把手4単位を配し、把手間に大型で扁平な円形貼付文を配す。橋状把手上下の基部には円形刺突を加え、縦走短沈線で繋いでいる。円形貼付文の上下にも円形刺突を加え、対向する幅広の弧線文各2条で繋いでいる。橋状把手と円形貼付文間には、先端に刺突を加えたコの字状の沈線区画を配し、区画内に大型の円孔3点を陥入する。コの字状区画文下にも、先端に刺突を加えた沈線で区画文を描くが、詳細は不明である。

第86図13は球状の胴部が頸部でくびれ、外反して開き口縁部に至る土器であり、頸部に橋状把手4単位を配す。橋状把手基部には円形刺突を各々配し、縦走する短沈線で繋いでいる。また、把手上縁からは、V字状に開き口縁部に向かう縄文を施した紐線2条を配す。なお、紐線両側にはなぞり状のやや幅の広い沈線を施す。さらに、橋状把手上側縁からは、縄文を施す紐線を横走させて文様带上端を画すほか、下縁より垂下する紐線を配して胴部文様帯を縦位分割する。頸部に配した横走する紐線には、橋状把手間で刺突を加えた8字状貼付文を単位文として加え、下縁に施す渦巻文を加えた垂下沈線により、垂下紐線間の文様帯をさらに2分割し、都合胴部文様帯を縦位に8分割する。胴部文様は基軸となる紐線文に対し左右対称に配され、単線引きの沈線で、楕円形の区画文を伴う渦巻文や、J字状の垂下文などを描く。沈線区画内には縄文LRを充填する。

第86図14はやや肩の張った胴部が頸部でくびれ、外反して口縁部に至る土器である。頸部に沈線1条を横走させ、胴部文様帯上限を画す。また、横走沈線より垂下する沈線1条の両側に、半月形の区画文および弧線文を対向して配して縦位分割文とする。胴部は4分割され、渦巻文を囲む多重扇形文を加えた半月形区画文と、弧線文による文様などを連続させる。なお、区画内には縄文LRを充填する。

第92図1から3は、外反する口縁部をもたない鉢形土器である。本来であれば第1群土器として扱うべきであるが、文様の共通性から本群に含めた。1は口縁下に横走する刻みを施す1条の紐線を配し、二重沈線で隅丸方形の区画を描き縄文LRを充填する。2は口縁下に横走する隆線1条と、分岐して下る斜行隆線1条を配す。横走隆線下縁および斜行隆線両側には沈線を添わせ、口縁下および隆線間の区画内に縄文RLを充填する。

3は口縁下に幅広の沈線を横走させ、胴部に弧状の区画文を配す。区画文の間には刺突を加えた円形貼付文を配して縄文LRを充填する。4は口縁部もしくは頸部に欠く。屈曲部に粗く刻み目を列状に配し、沈線を交える末端をU字状に繋いで折り返す弧線文等を配す。縄文LRを施すが、一部で施文方向の違いから羽状となる



第92図 鉢形土器・壺形土器第4群実測図 (縮尺1/3)

る部分がある。5は頸部に刺突を加えた紐線1条を横走させ、下縁になぞり状の幅広沈線を施す。沈線による楕円形区画文に弧線文を添わせ、区画内に縄文を充填する。6は頸部に刻みを加えた紐線1条を横走させ、単位文として刺突を加える8字状貼付文を配す。紐線両側には沈線を添わせ、貼付文下で垂下させる部分も見える。7は刻みをもつ紐線に円形の貼付文を加え、中心に円形刺突を施す。紐線両側にはなぞり状の沈線を添わせて垂下、斜行する沈線を施す。8は内弯する胴部片であり、斜行する刻み目を施す紐線を横走させ、単位文として刺突を加えた円形貼付文を配す。単位文下にはC字状の沈線を加え縄文LRを施す。9は頸部の紐線文上に横長の刺突文を加える。10、11は同一個体であり、渦巻状の文様両側に、幅広の沈線2条による三角形状の区画文を配し、2条沈線を添わせる。区画内には縄文LRを充填する。12はやや張りの弱い胴部が頸部でくびれ、外反して弱く開き口縁部に至る土器であり。胴部上端を途切れのある横走沈線で画し、途切れ部に円孔を加えた円形貼付文を配す。胴部には幅広の2条沈線による三角形区画文を天地逆にして交互に配すほか、方形文内に渦巻文を加えた区画文などを配す。区画沈線内の一部に縄文LRを施す。13は幅広の沈線で多重の三角形区画文を描き、区画沈線間に縄文RLを施すほか、区画内に黒彩を施す。14は胴部下半の破片と思え、単線引きで弧線文や方形区画文、渦巻文などを描く。15は胴部中位の破片であり、破片右端の渦巻文から垂下する沈線が文様帯縦位分割線であると思え、末端をU字状に折り返す。巴状に絡む渦巻文や弧状の楕円区画文、弧線文などを周辺に配し、多重の渦巻文から放射状に伸ばす沈線で周辺文様と繋いでいる。なお、充填縄文RLを施す。16は横走する幅広の紐線を縦位短沈線で刻み、両側に沈線を添える。下縁沈線から弧状に下る沈線を加え、縄文LRを充填する楕円形の区画文を配す。17は隆帯による幅広の垂下文に梯子状の横位短沈線を加え、周縁に沈線や縄文を充填するU字状の区画文を添えている。18は横走する刺突を加えた紐線文から隆線を垂下させて外縁に沈線を添える。19、21は同一個体であり、刻みを加え横走する紐線下に、沈線を間隔を空けて添わせ、下縁に多重弧線文を加える。20、22は押え状の刻みを加えた紐線文1条を横走させ、鋸歯文等を胴部に配す。23は刺突を加え横走する紐線から分岐する紐線を垂下させる。紐線側縁に2条の弧線を下し、沈線間に縄文RLを充填する。24は頸部に横走沈線を配し、胴部文様帯上限を画す。三角形状の区画文を配して区画間に円孔を陥入させる。なお、充填縄文LRを施す。25は屈曲する頸部下に、3条沈線による方形区画を配し、区画内には対角線状に斜行沈線を下す。26、27は類似の文様を施す。胴部文様帯上端を画す3条の横走沈線を切り、突出した8字状貼付文を加え、刺突文2点を施す。26は突起下に対向する弧線文を配して沈線間に縄文を施す。27は突起下に渦巻文を施し、斜行する多重沈線を左右に下す。28は文様帯上端を画す横走沈線を跨いで8字状貼付文を縦位に加え単位文とし、弧状の多重沈線による単位文から3条沈線を垂下させる。なお、沈線間には縄文を施す。29は垂下する幅広の紐線末端に8字状貼付文を加え、周囲をU字状の多重沈線で囲んでいる。30は8字状貼付文を2条沈線による入り組み文で囲み、沈線末端を斜行させ下している。なお、沈線間に縄文を充填する。31は口縁部より垂下する刻みを加えた紐線の末端に、円形貼付文を加え刺突を施す。円形貼付文両側には沈線1条を交えた楕円形区画文を配す。32は文様帯上縁を画す横走沈線帯を跨いで8字状貼付文を配し、貼付文下に多重渦巻文を配す。33は扁平なC字状の貼付文を配し、貼付文上には円形刺突文と刺突から伸びるC字状沈線を加える。なお、貼付文側縁には沈線を添わせる。34は胴部上縁を画す2条沈線を跨いで8字状貼付文を加え、貼付文下には蛇行沈線を下しており、側縁に縄文を充填する三角形区画文を配す。35は8字状の貼付文上半を2条の弧状短沈線で囲い、下半から左右に2条の横走沈線を伸ばす。36は横走沈線下に垂下する刺突文列に2条沈線を添わせ、方形かと思える区画文を配して縄文LRを充填する。37は口縁部より垂下する扁平で押え状の刻みを施す紐線末端に、8字状貼付文を加えて頸、胴部間を画する2条沈線を横走させる。38も口縁部より垂下する刻みを加えた紐線先端に、刺突を加えた円形貼付文を配す。貼付文両側に2条の横走

沈線を各々伸ばし、胴部には多重沈線による鋸歯文（または菱形文）を配す。39は20、22に類した文様を施す。横走る押え状の刻みを施す紐線に8字状貼付文を加え、貼付文下を頂点とする3条沈線による鋸歯文を配す。なお、横走る1条沈線は三角形の区画を示すのかもしれない。40は胴部上端を限る2条沈線下に横走沈線1条を加え、巴状に絡む渦巻文を配す。また、斜行沈線を渦巻文方に向かわせ、生じた三角形の区画内に縄文LRを充填する。41も横走沈線下に三角形の区画文を配し、区画内を中心に縄文RLを充填する。42は横走沈線下に先端が渦巻く斜行沈線を配し、区画内に縄文を充填すると思える。43も同様に横走沈線下に斜行沈線と渦巻文で描く区画内に縄文を充填する。44は垂下沈線際に方形の区画文を配して縄文RLを充填する。45も横走沈線から渦巻もしくは弧状の文様を描いて縄文LRを充填する。46は45に類似する。47は胴部上縁を2条沈線で画し、渦巻文を派生する斜行沈線を下す。沈線間を除き縄文RLを施す。

4類（第92図48～52）

張りのある胴部上半および、外反して開く口縁部に文様帯を配し、三叉文や雲形文を施す土器である。なお、本類は連結三叉文を施すもの（A種）と雲形上の曲線文を配すもの（B種）に分ける。

A種（第92図48～51）

連結三叉文を施す土器を本種とする。

第92図49～51は同一個体である。低い波状を呈す口縁部（50）が外反し、頸部でくびれて胴部がやや張る器形を呈す。文様帯は口縁部と胴部上半の2帯構成を採る。台形状を呈す波頂部は肥厚し、内面に凹線状の指撫でを施して段を形成する。文様は波頂下に連結三叉文とその直下に3条の横走沈線を、胴部には多条の縦位短沈線と連結三叉文および、最下端に1条の横走沈線を配す。

B種（第92図52）

雲形状の曲線文を配す土器を本種とする。

第94図52は胴部上半の破片である。沈線による雲形状の曲線文を描出後、0段多条の縄文LRを全面に施す。

オ 第5群土器（第86図15、16、第88図31～33、第91図45～50）

張りのある胴部がくびれて外反し、直立もしくは内傾する口縁部に至る壺形の土器を本類とする。本類は文様を多用するもの（1類）と口縁部に連続押圧文を施すもの（2類）に分ける。

1類（第86図15、16、第88図31～33）

張りのある胴部がくびれて外反し、直立もしくは内傾する口辺部に至る壺形の土器であり、口辺部に文様を配す土器を本種とする。

第86図15は張りのある胴部がくびれて直立する口辺部に至る壺型土器であり、口唇部をつま先状に整える。口唇下に引く2条の横走沈線により文様帯の上端を画し、2条沈線で横長の逆三角形の区画を設けて、区画内に舌状の突出文を加えるものと思える。なお、文様帯下縁の状況など、全容は不明である。

第86図16は大きく張る胴部が緩くくびれて、直立する口辺部に至る壺型土器である。口縁部には、双頭山形の突起を配し、外面には2条沈線を巴状に絡めた渦巻文を各々配す。また、内面には山形突起下にやや大型の円孔を陥入させ、突起から下る2条の幅広の沈線をハの字状に分けて口縁直下を横走させる。胴部上端を横走する2条沈線で画し、多重沈線による区画文を配すかと思えるが、詳細は不明である。

第88図31は弱く外反する口辺部を有す壺形土器であり、口縁部直下に沈線1条を横走させて文様帯の上端を画す。なお、口唇部内外面には縄文RLを施す。口辺部文様帯には2条沈線による鋸歯文を配し、頂部間を繋ぐ弧線文を加えるものと思える。32、33は同一個体であり、張りのある胴部がくびれて直立する口辺部に至る

壺形土器である。方角状に整える口端部には、斜行する刻み目を施す。口縁部文様帯は横長の刺突文を2点縦位に配して単位文とし、多重沈線による三角形の区画文を正逆に配して区画内に横長の刺突文を加えるものと見える。

2類 (第91図45~50)

口縁部に連続押圧文を施す壺形土器を本類とする。最終調整は撫でであるが、1次調整の条痕が残る例がある。口縁部の形態により、口縁部が強く外反するもの(A種)と口縁部が直立または外反するもの(B種)に分ける。

A種 (第91図48、49)

口縁部が強く外反する土器を本種とする。外側面を向く口縁部に連続押圧を施す。

B種 (第91図45~47、50)

口縁部が直立またはやや外反する土器を本種とする。粘土貼付により肥厚する口縁部に連続押圧文を施す。50は頸部を横位撫でによる無文部とし、胴部に斜位の条痕施文後に撫でを施すが、一部条痕が残る。これらの後、頸胴部境に1条の横走沈線を配す。

第4節 浅鉢形土器・釣手土器

出土した浅鉢形土器は7群に分けた。また、釣手土器は1点のみの出土であり、第8群土器とした。浅鉢型土器、釣手土器の各群の内容は次のとおりである。

第1群土器 口縁部をくの字に屈曲する土器。

第2群土器 口縁部を強く内弯させる土器。

第3群土器 口縁部を弱く内弯させる土器。

第4群土器 体部から直線的に開く土器。

第5群土器 口端部を内折もしくは肥厚させる土器。

第6群土器 大型の把手をもつ土器。

第7群土器 口縁部をくの字に屈曲させ、並行沈線を施す土器。

第8群土器 沈線と陰刻による三叉状文を配す土器。

第9群土器 直線的に開く器形を有し、口端部に沈線と刺突による文様を配す土器。

第10群土器 内弯や内傾もしくは直立する口縁部に、沈線による工字状文や平行沈線文を施す土器。

第11群土器 直線的に開く器形を有し、工字状文や平行沈線文を施す土器。

第12群土器 釣手土器。

ア 第1群土器 (第93図1、3、第94図1~29)

口縁部をくの字に屈曲させる土器を本群とする。器形の全容が知れる土器は少ないため、口縁部の形状を主に以下の3類に分けた。

1類 くの字に内折した口縁部に文様を施す土器。

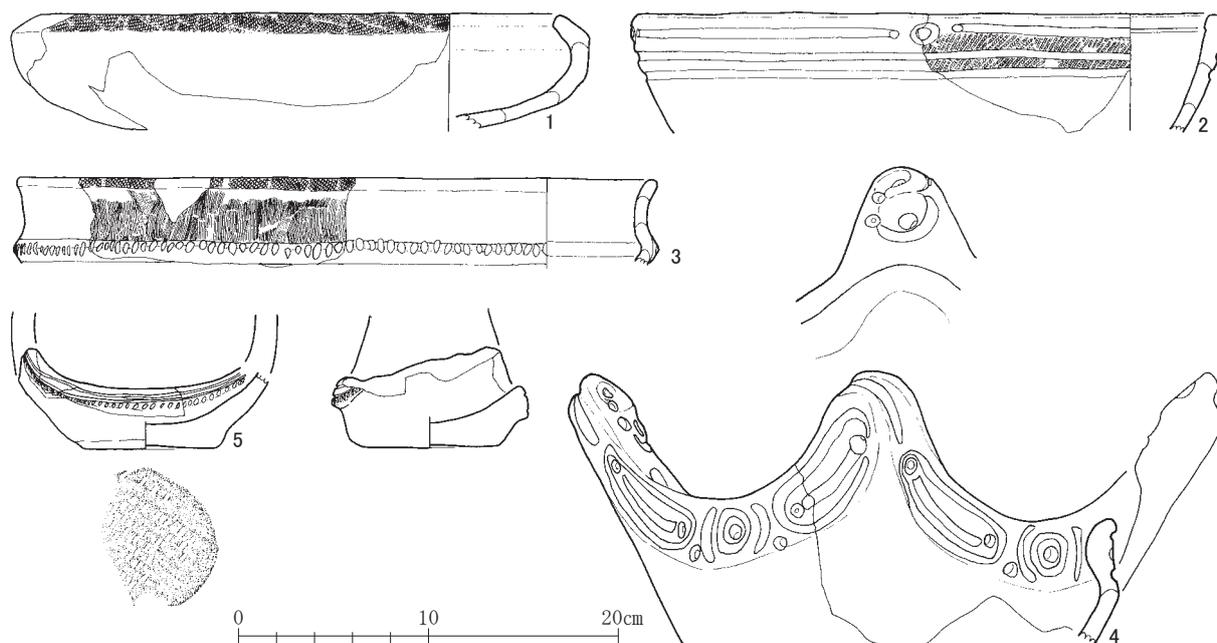
2類 くの字に屈曲して立ち上り、さらに外反して開く土器。

3類 把手や突起を施す土器。

1類 (第93図1、第94図1~18)

くの字に内折する口縁部に文様を施す土器を本類とする。

本類は口縁部の形状から、口端部を方角状に整える土器(A種)、口縁部を内方に肥厚させる土器(B種)、



第93図 浅鉢形土器・釣手土器第1群、第3群、第6群、第12群実測図（縮尺1/4）

口唇部を玉縁状にする土器（C種）、本類土器の体部片（D種）に分ける。

A種（第93図1、第94図1～6）

くの字に内折した口縁部に文様を施し、口端部を方角状に整える土器を本種とする。

第93図1は内弯する体部を口縁部で短く内折し、口端部を方角状に整える土器であり、口縁部には縄文LRを施す。

第94図1はくの字に内折した口縁部に、沈線1条を交えた横長の楕円形区画文を配し縄文LRを充填する。2は内折に伴う稜を外面に残す。口縁部には2条の横走沈線で文様帯の上下を画し、区画内に円文を囲む弧線文を配して単位文とし、単位文から横走する沈線2条を伸ばす。なお、単位文には縄文を充填する。3は器壁の薄い土器であり、くの字に屈曲する口縁部下縁に横走する3条沈線を配し、上縁沈線を鋭角に曲げて斜行沈線とし、三角形の区画を生んでいる。横走沈線帯には縄文を充填する。4は稜をもって内折する口縁部に、2条沈線を上下に間隔を空けて横走させ、口唇部外面に縄文を施す。5は口縁部の上下に2条の沈線を各々横走させる。また、口縁下の上縁沈線を鍵の手に折り幅の狭い区画文とする。6は緩い波状縁の波底部片であり、波底に刺突文1点を加えて単位文とし、両側には矩形の区画文を配す。口端部に沈線1条を横走させるほか、下縁の屈曲部に沈線を施し、単位文下で途切らせて鍵の手状に折る。

B種（第94図7、8、15）

くの字に内折した口縁部を内方に肥厚させる土器を本種とする。

第94図7は短く内折した口縁部に縦位短沈線を密に施し、内面の肥厚部に縄文を充填した沈線区画文を配す。8は口縁部内面を肥厚させ、口縁部文様帯の上下を横走沈線で画し、区画内に先端を丸めて入り組む横走沈線を配す。15はくの字に屈曲し断面三角形状に肥厚させた口縁部に、2条沈線による弧線文を配して縄文RLを充填する。

C種（第94図9～11）

くの字に内折した口唇部を、玉縁状に仕上げる土器を本種とする。

第94図9、11は類似する破片であり、内折する口唇下に沈線1条、屈曲部に沈線2条を横走させ、口唇部外



第94図 浅鉢形土器・釣手土器第1群、第2群実測図（縮尺1/3）

面および2条沈線間に縄文RLを充填する。10は口唇部を外方に肥厚させ玉縁状に仕上げ、口縁直下に沈線1条を横走させ、横長の楕円形区画文を配す。楕円区画外に縄文を施す。

D種 (第94図12~14、16~18)

本類土器の胴部片を本種とする。

第94図12は口辺部文様帯の上下端を横走沈線で画し、区画内に2条沈線による先端に渦巻文を加えた斜行沈線を配し、斜行沈線の上下縁より三角形かと思える区画文を派生させる。なお、文様帯全体に縄文RLを施す。

13は屈曲する口縁部の下縁に沈線を横走させ、斜行する細かい刻み目を施す。14は口縁部の上下縁を横走沈線で画し、区画内に先端を丸めた横走沈線を配して縄文を充填する。16は口辺部下縁に2条の横走沈線を配し、沈線間に条が縦走する細かな縄文を充填する。17も同様の破片であり、文様帯下縁を2条沈線で限って渦巻文と思える単位文を配す。なお、沈線間には縄文を充填し、赤彩を施す。18は屈曲部に3条沈線を横走させ、沈線間に縄文を充填する。

2類 (第93図3、第94図19~24)

くの字に屈曲して、さらに外反して開く土器であり、口縁部の形態から、体部からくの字に屈曲して立ち上がり、口縁部を外反させるもの(A種)、体部からL字に短く立ち上がり、さらに外反して開くもの(B種)、把手、突起を施すもの(C種)に分ける。

A種 (第93図3、第94図19~21)

第93図3はくの字に屈曲した後、外反して開き玉縁状の口唇部に至る土器であり。口縁部下縁の屈曲部に刻み目を施す。また、口唇部外面には縄文LRを施す。なお、口縁部外面には縦走する刷毛目状の細沈線を調整痕として残す。

第94図19は体部からくの字に屈曲して立ち上がり、外反して開いて口縁部に至る波状縁の土器である。口縁部下縁に円形刺突1点を配し、C字状の沈線を縦位に施す。20は口縁部に丸山形の突起を施す。屈曲部に横走する刻み目を施す隆線1条を配し、両側に沈線を添わせる。突起下および横走隆線上に刺突2点を加え、上下の刺突間をC字状の隆線で繋いで沈線1条を上面に施す。なお、内面の突起下にも刺突1点を加える。屈曲部に隆線を横走させ、突起下に刺突文を施す。21はくの字に立ち上がり外反して開く口縁部を断面三角形状に肥厚させて、沈線1条を横走させる。口縁部上縁に刺突文1点を加え単位文とし、口縁部には横長の楕円形区画文を配して縄文を充填する。なお、内面に沈線1条を廻らせる。

B種 (第94図22~24)

体部からL字状に短く立ち上がり、さらに外反して開くものを本種とする。

第94図22は体部からL字状に短く立ち上がり、さらに外反して大きく開く土器である。口縁部下縁の立ち上がり部に沈線2条を横走させる。23は内弯気味の体部を短くL字状に立ち上げ、さらに外反して開く口縁部に至る。立ち上がり部に沈線1条を横走させる。24は短く立ち上がる口縁部下縁に縦位の刻み目を施す。

3類 (第94図25~28)

把手、突起を施すものを本類とする。

第94図25はくの字に屈曲する口縁部に三角山形の突起を加え、多重の三角形文を施す。26、28は同一個体であり、丸山形の突起を加えて突起下に貫通する円孔を穿つ。突起基部に刺突1点を加え、口縁に並行する横走沈線を配す。27はくの字に内折し屈曲部に稜をもつ。口縁部には丸山形の突起を配す。突起下に貫通する円孔を穿ち、円孔を囲んで屈曲部稜線に繋がるC字状の隆線を施す。口縁下には先端に刺突を加えた、幅広のなぞり状沈線を横走させる。

イ 第2群土器 (第94図30~69、第95図1~11)

口縁部を強く内弯させる土器を本群とする。本群土器は、口縁部形態、文様構成および破片の部位から、以下の5類に分けた。

- 1類 口縁部の沈線区画文内に縄文を充填する土器。
- 2類 口縁部に幅の狭い楕円形の区画文を配す土器。
- 3類 口縁部に渦巻文など多重沈線で文様を描く土器。
- 4類 無文の土器。
- 5類 本群土器の体部片。

1類 (第94図30~35)

口縁部を強く内弯させ、沈線区画文内に縄文を充填するものを本類とする。

第94図30は鍵の手に曲がる区画文を間隔を空けて配し、沈線内に縄文RLを充填する。31は内弯する体部から内傾してすばまり口縁部に至る波状縁の土器である。口縁波形に合わせて楕円形区画文を配し、体部に鍵の手に折れる区画文を配す。なお、沈線区画間に縄文RLを充填するが、一部で施文方向を変えて羽状縄文となる部分も見える。32は口縁下に円形刺突1点を配し、横長の楕円形区画文を2段に配す。区画文内に横走沈線を交えるものもあり、縄文RLを充填する。33は2条沈線で斜行文や楕円形区画文を配し、縄文を充填する。34は口縁部に内面におよぶ弧状沈線を引き、区画文外に縄文を施す。35は鍵の手に折れる沈線区画文を配し、区画文間に肥厚部を設ける。なお、縄文RLを鍵の手状の区画文外に充填する。

2類 (第94図36~39)

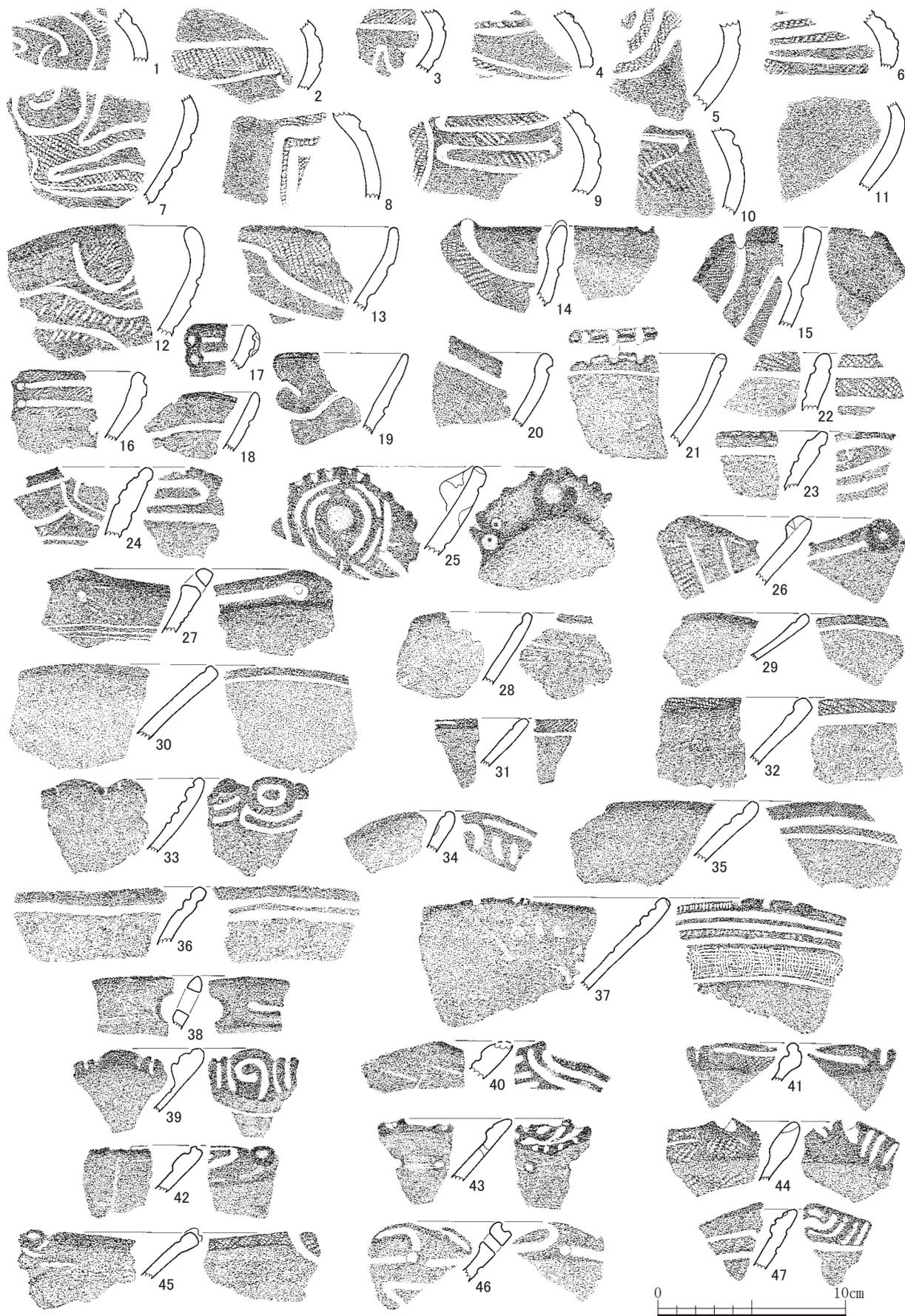
口縁部に幅の狭い楕円形の区画文を配すものを本類とする。

36、37は同一個体であり、口縁下に沈線1条を横走させて楕円形の区画文を横位に連続させる。38は口縁下に円文や楕円文を配す。39は口縁下に沈線1条を横走させ、円文や楕円文を配す。

3類 (第94図40~59)

口縁部に渦巻文などを多重沈線で描くものを本類とする。沈線間への縄文施文には有無がある。

第94図40は口縁部に横走沈線1条を横走させ、巴状に絡む渦巻文を単位文として配す。横走沈線にU字状沈線を添わせ、中央から2条沈線を垂下させる。渦巻文両側には、横走沈線下に添わせた2条沈線を下して対向する弧線文で囲んでいる。41は口縁下に横長の矩形区画文を多重に配す。縄文の充填はない。42は3条の横走沈線帯下縁に、U字状の突出文を加えた細沈線を配す。43は口縁下に沈線1条を横走させ、の字状の単位文下縁で窪む2条沈線を配す。また、横走沈線下には台形状の区画文を配す。44、46は4条の横走沈線を鍵の手に折る。なお、上縁沈線には途切れが見える。45は沈線4条を横走させる。47は口縁下に沈線1条を横走させ、渦巻文を配す。48は口縁下に沈線1条を横走させて斜行沈線を施す。49は口縁下の横走沈線から3条の沈線を垂下させ、両側に弧状沈線を配す。50は口縁下の横走沈線に添う刺突1点を配し、異方向の斜行沈線を引き分ける。51は弱く肥厚する口唇下に沈線1条を横走させて斜行沈線を下す。52は口縁下に沈線1条を引き、2条の斜行沈線と弧状沈線を加えて縄文を充填する。53、54は同一個体であり、口縁部の上下端に空白を空けて沈線を横走させ、口縁部横走沈線下縁に、先端を丸めたしの字状沈線を下す。口縁部横走沈線間には縄文を充填する。55は口唇部を内方に肥厚させ、口縁下の横走沈線から渦巻文を下す。沈線間には縄文を充填する。57は口縁部を内方に押え8字状貼付文を配す。8字状貼付文周囲に円文や弧線文を多重に配して単位文とする。内面には横長の刺突文2点を加えて沈線1条を廻らせる。58は内弯する口縁部に沈線3条を横走させる。59は波状縁の土器であり、口縁に添い沈線3条を横走させ、沈線間に縄文LRを充填する。60は内弯する口縁部に縦



第95図 浅鉢形土器・釣手土器第2群、第3群実測図（縮尺1/3）

位短沈線を密に施す。

4類 (第94図61~63)

無文の内弯する浅鉢形土器口縁部片である。

5類 (第94図64~69、第95図1~11)

本群土器の体部片を本類とする。

第94図64はハの字に開く斜行沈線間に扇形文を充填する。65は多重円文下から弧線文を下す。66は横走沈線帯から渦巻文を派生させる。68は横走沈線間に隆帯を配し、縦位刻みを施して縄文を充填する。69は矩形の横長区画文を配す。

第95図1は渦巻や円形の曲線文を施し、一部にC字状短沈線で区画を閉じるものも見える。なお、区画内に縄文を施す。2は斜行する楕円形区画に突出部をもたせ、区画内に縄文RLを充填する。3は縄文を充填する2条の横走沈線下に波状文を横走させる。4は2条沈線間に刺突を施し、縄文を充填する2条沈線を斜行させる。5は多重円文間に縄文を充填する。6は沈線を多重に横走させ、沈線間に縄文を充填する。7は渦巻文の外周を沈線で囲み、末端を横走させて区画内につま先状の無文部を配する。縄文RLを充填する。8は鍵の手に折れる2条沈線間に縄文を充填する。9は円形の区画文側縁に横長の楕円形区画文を2段に配し、縄文RLを充填する。10は先端を丸めた沈線を横走させ、体部に縄文を施す。11は無文の体部片である。

ウ 第3群土器 (第93図2、第95図12~27)

口縁部を弱く内弯させる土器を本群とする。本群土器は口縁部形態、口縁部文様などから、以下の2類に分ける。

1類 沈線による区画文内に縄文を充填する土器。

2類 沈線で文様を描く土器。

1類 (第95図12~15)

第95図12は口縁下にU字状の区画文を配し、横走する沈線区画の縄文帯をU字文下で窪める。区画内には縄文LRを充填する。13は口縁下に斜行する幅広の沈線2条を引き、口端部との間に縄文を充填する。14は口縁部を内方に肥厚させて幅広の肥厚帯とする。口端部より弧状に下る2条沈線で孤状の縄文帯とする。充填縄文にはLRを使用する。15は口端部を内方に肥厚させて幅広の肥厚帯とする。山形把手を口縁部に配し、把手頂部から斜行する沈線を引くほか楕円形の区画文を配す。なお、区画内に縄文RLを充填する。

2類 (第93図2、第95図16~21)

第93図2は弱く内弯する口縁部に円形刺突文を配し、刺突文側縁から先端に刺突を加えた沈線1条を伸ばす。また、刺突文下縁には沈線2条を横走させ、沈線間に縄文LRを充填する。なお、内面に沈線1条を廻らせる。

第95図16は先端に刺突を加えて横走する2条沈線間に、縄文を充填する。17は口縁下を横走する2条沈線を跨いで8字状貼付文を加える。18から21は単沈線で文様を描くものであり、19が沈線を横位S字状とする以外は、沈線を横走させる。なお、19は口端部に縄文を、21は刻み目を施す。

エ 第4群土器 (第95図22~47)

体部から直線的に開く土器を本群とする。本群は口縁部の形態から以下の2類に分ける。

1類 口縁部を肥厚させない土器。

2類 口縁部を内方に肥厚させる土器。

1類 (第95図22~36)

体部から直線的に開く土器であり、口縁部が肥厚しないものを本類とする。本類は身の深いもの(A種)、と身の浅いもの(B種)に分ける。

A種 (第95図22~27)

第95図22は外反する口縁部外面に沈線1条を横走させ、口端部との間に縄文を充填する。また、内面にも沈線2条を横走させ、口端部と沈線間に縄文を充填する。23は外面に沈線1条を横走させ、内面には口縁下を横走する沈線1条を配し、沈線から突出する小型の矩形文を細沈線で配して弧線文2条でこれを囲む。24は波状縁の土器であり、口縁下の文様帯を上縁を1条沈線、下縁を2条沈線で各々画す。波頂下には2条沈線による半円文を配し、側縁に1条沈線による弧線文を配す。また、内面の文様帯下限を横走沈線1条で画し、波頂下には横長の楕円形区画文を配す。25は丸山形の突起を加える口縁部片であり、口端部に刻み目を施す。突起下外面には円孔を陥入させて対向する弧線文を配し、弧線文より斜行沈線を伸ばす。内面には口縁波形に合わせて隆線1条を加え、波頂下には管状刺突を加えたC字状の貼付文を配す。また、側縁には8字状貼付文を加え、縦列する管状刺突間を沈線で繋いでいる。26は波状縁の土器であり、外面に沈線3条を斜行させて縄文を充填する。内面頂部には刺突を加えた円形貼付文を配し、口縁波形に合わせた沈線を両側に伸ばす。27は小突起を加える土器であり、突起下には貫通する小円孔を穿つ。外面には細めの沈線3条を横走させ、弱く肥厚する内面には横走沈線1条を円孔から伸ばす。

B種 (第95図28~36)

肥厚しない口縁部を直線的に開く土器を本種とする。

第95図28から30は内面に沈線1条を横走させ、31、32は口端部および内面沈線と口端部間に縄文を施す。33、34は内面に意匠文を配す土器である。33は三角山形と丸山形の双頭山形の突起を口縁部に配し、内面の丸山形突起下には円文を加え、扁平な楕円形区画を下縁に配す。また、三角山形突起下には弧状沈線2条を下縁に配す。なお、文様施文部には縄文LRを施す。34は波状縁の土器であり、内面の口縁下に沈線1条を配す。波頂下にはS字文かと思える沈線を下し、下縁に縦位短沈線を加える。なお、口端部および内面横走沈線周縁には縄文を施す。35は内面に2条沈線を横走させて縄文を充填し、36は外面に1条、内面に2条の沈線を横走させる。

2類 (第95図37~47)

口縁部を内方に肥厚させ、直線的に開く土器を本類とする。

第95図37は口縁部を弱く内方に肥厚させ、長方形の突起を施す土器である。内面の肥厚部を横走する3条沈線と、間隔を空けて施す1条沈線で文様帯の上下を画し、櫛描横走沈線を地文とする櫛描対向弧線文および弧線文を縦位に施し文様帯とする。38は口縁部を内方に肥厚させて面をもつ肥厚帯とし、貫通する円孔を穿ち側縁より沈線を横走させる。39は口縁部に山形小突起を配し、突起形状に合わせて内面を肥厚させる。中央突起内面には渦巻文を加え、両側には先端を外面に伸ばす縦位短沈線2条を配す。40は山形突起をもつ口縁部片であり、突起を巻き片掛けする3条沈線と横走する3条沈線を引き分ける。41は口縁部を肥厚させ、緩い山形小突起を配す。面をもたせた外面から内面に向かうU字状の沈線を配し、末端には刺突を加える。突起基部には縦位短沈線を配す。なお、外面には縄文を施す。42は内方に肥厚する口縁部内面の下縁を沈線1条で画す。刺突を加える円形貼付文を口端部に配し、側縁に三角文と思える沈線区画文を施す。なお、内面肥厚部には赤彩を施す。43はリボン状の小突起を口縁部に配す土器であり、文様と思える貫通する小円孔を横位に配す。口縁部内面の突起間を三角形状に肥厚させ、突起間の刺突を囲む弧状沈線を配す。なお、弧状沈線下縁には刻み目を施す。44は口縁部を内外に肥厚させて山形小突起を配す。外面には縄文を施し、内面は口縁部下縁に段を残

す肥厚帯とする。突起頂部に斜行する短沈線を加え、側縁には刻み目と縦位短沈線を配す。45は口端部を肥厚させて山形小突起を加える。突起頂部には刺突を加え、内面を弧状沈線で囲み縄文を充填する。また、突起側縁より沈線1条を横走させ、口端部間に縄文を充填する。46は内面に肥厚帯をもつ山形突起を配す口縁部片であり、突起下に小孔を穿ち、外面は左右に沈線1条を引き分ける。内面にも沈線1条を右方に伸ばす。外面小孔下に区画文を配し、口縁部外面から波頂口端部、内面に向かうS字状文を2単位配す。47は内面に肥厚帯をもつ山形波状縁の土器であり、外面にはU字状に折り返す沈線を横走させ、縄文を充填する。また、内面肥厚部の下縁を横走沈線1条で画す。波頂下には先端に刺突を加えた横位の蛇行沈線2条を絡め、側縁を斜行沈線で囲んでいる。

オ 第5群土器 (第96図)

口端部を内折もしくは、肥厚させる土器を本群とする。本群土器は口縁部の形態から、以下の4類に分ける。

- 1類 口縁部を短く内折させて文様帯を配す土器。
- 2類 口縁部を内外方に肥厚させて文様帯を配す土器。
- 3類 口端部を方角状に面をもたせて文様帯を配す土器。
- 4類 本群に含まれる無文の土器。

1類 (第96図1、2、4～7)

第96図1は内弯気味の口縁部を有し、口端部に縦位短沈線による単位文間に横長の楕円形区画文を配す。2は口縁部を短く内折させ、口端部を方角状に整えて山形小突起を加える。突起側縁より沈線1条を口端部に施す。4は短く内折する口縁部外面に斜行する刻み目を施す。5、6は内弯する体部を短く内折した後、外反して開いて口縁部に至る土器であり、5は波状縁を呈す。また、6は孤状の隆線を体部に配す。7は短く内折する口縁部に縄文を施す。

2類 (第96図3、8～22)

第96図3は口縁部を内方に肥厚させ、口端部に面をもたせる。口縁下の外面には沈線1条を横走させ、肥厚する口端部には弧状沈線を多重に施す。8は口縁部を三角形状に肥厚させ内面に沈線1条を横走させる。口縁部外面肥厚部から内面沈線間に縄文を施す。9は口縁部を内方に肥厚させ、口端部に沈線1条を施す。10は口縁部を外方に肥厚させ面をもたせた口縁部に、中心の円文に弧線文を添えて単位文とし、側縁に沈線2条を横走させ口縁部下縁外側に刻み目を施す。11は口縁部を外方に肥厚させ、刺突文の外縁に弧状沈線を加え単位文とし、末端に刺突をもつ沈線を横走させる。なお、口縁部下縁外側間には刻み目を施す。12は内方に肥厚する口縁部に、沈線1条を横走させ下縁に縄文を施す。13は外方に大きく肥厚する口縁部に、末端に刺突を加えた沈線1条を横走させる。14は内方に肥厚する口縁部に、沈線1条を横走させて外縁に縄文を施す。15は外方に肥厚させた口縁部に、沈線2条を横走させる。16は大きく外方に肥厚して断面三角形状とする口縁部に、沈線1条を横走させる。17は内方に肥厚して面をもつ口縁部内面に沈線1条を横走させ、口端部に斜行する刻み目を施す。18は外方に肥厚する口縁部に、横走沈線および刻み目を施す。19は弱く内方に肥厚させ、口端部に面をもたせ沈線1条を施す。20から22も口縁部を内方に弱く肥厚させ、口端部に面をもたせる。

3類 (第96図23～27)

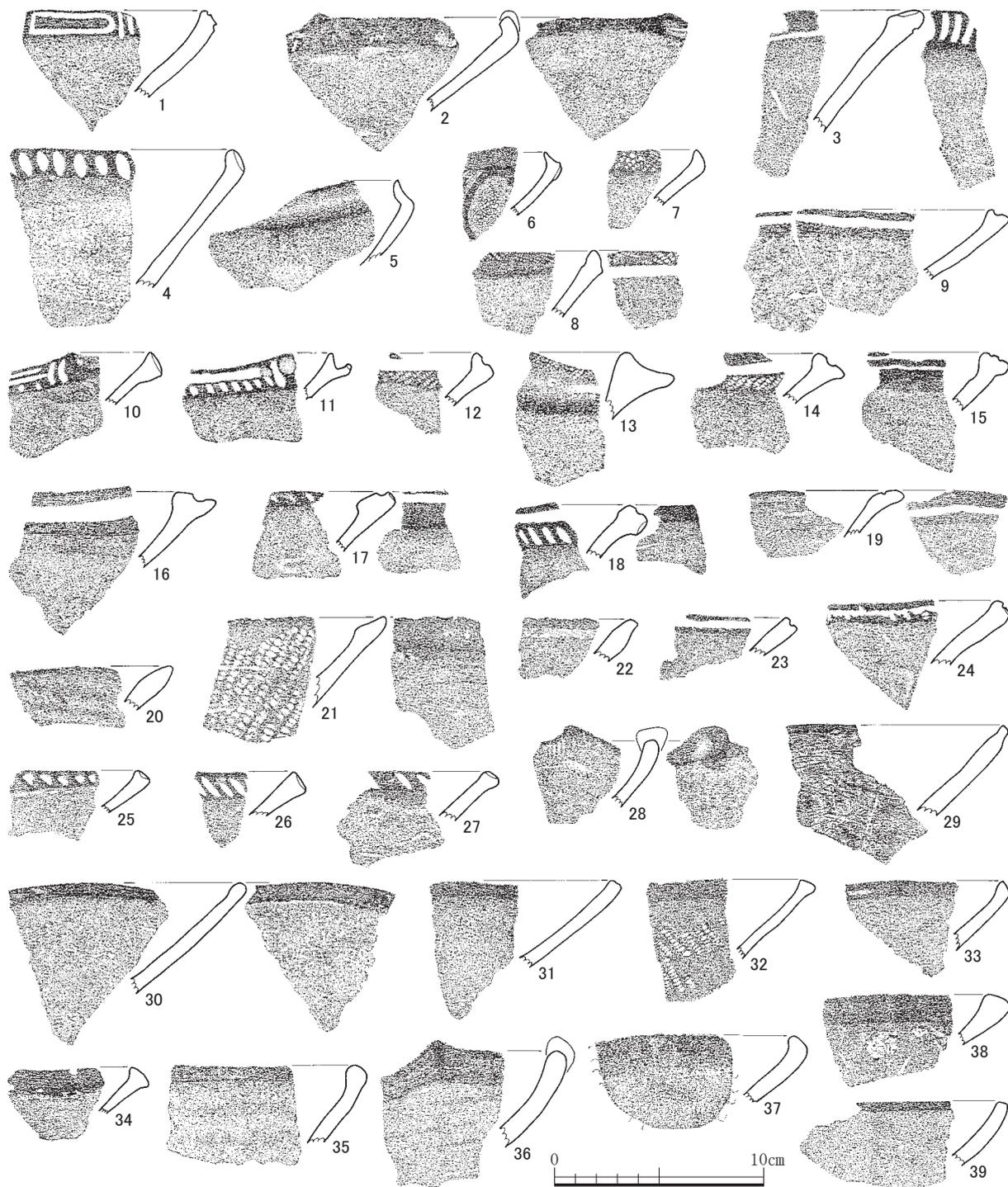
口端部を方角状に面をもたせ、文様帯を配す土器を本類とする。

第96図23は方角状に仕上げた口端部に沈線1条を施す。24は口端部に沈線を横走させて下縁に斜行する刻み目を施す。25から27は方角状に仕上げた口端部に斜行する刻み目を施す。

4類 (第96図28~39)

本群に含まれる無文の土器を本類とする。

第96図28は方角状に仕上げた口端部に、山形突起を配し縄文を施す。29は口唇部をつま先状に仕上げる。30、31は口端部を方角状に仕上げ、30は内面に浅く幅広の沈線1条を配す。32は口縁部を外方に肥厚させ、口端部を方角状に仕上げる。体部には縄文を施す。33は口縁部を短く内折する。34は口縁部を内外方に肥厚させ、口端部に面をもたせる。35は口縁部を内方に肥厚させ、口端部を方角状に仕上げる。36は口縁部を丸く収め、山形突起を配す。37は口唇部を内側に巻込んで丸く収める。38は口縁部を内方に肥厚させて口端部に面をもたせる。



第96図 浅鉢形土器・釣手土器第5群実測図 (縮尺1/3)

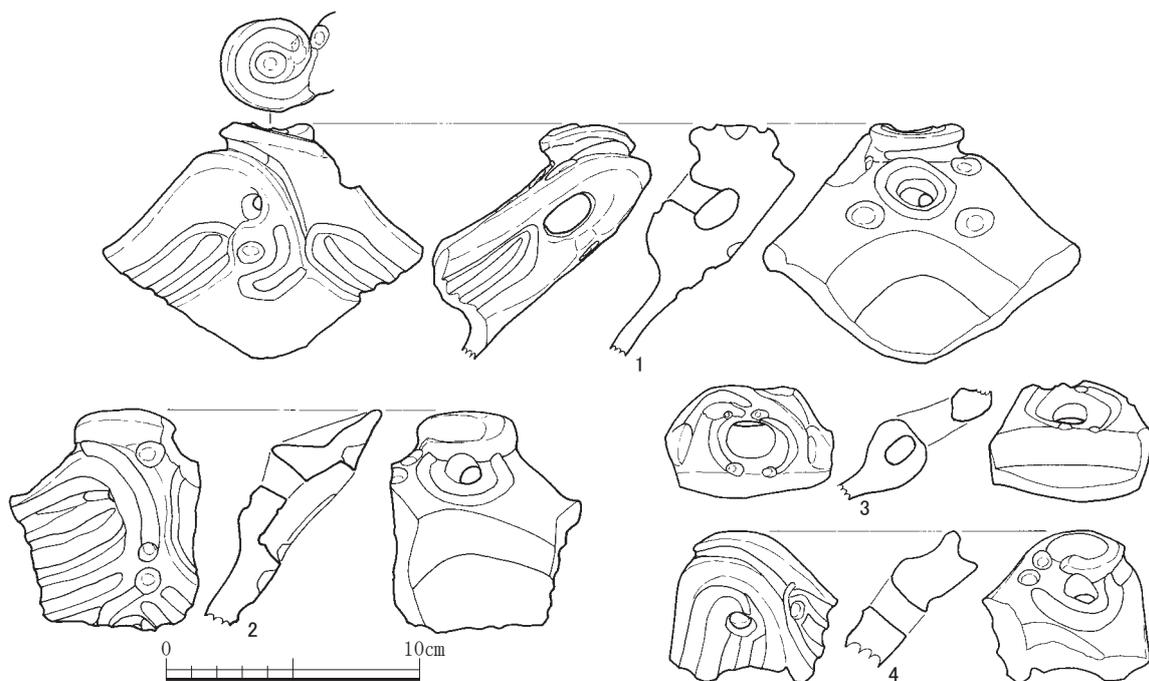
39は口端部を薄く方角状に仕上げる。

カ 第6群土器 (第93図4、第97図)

内弯気味に開く体部をくの字に曲げ、内弯もしくは直立する口縁部に至る土器であり、大型の把手を配す。また、口縁部内面には屈曲に伴う大きな段を残す。

第93図4はくの字に屈曲して弱く内傾する口縁部に至る土器であり、内面を肥厚させ口縁部と体部の境に段をもたせる。また、前後2枚の山形の板をずらして重ねたような、大きく突出する丸山形の把手4単位を口縁部に配し、波頂部を巻き片掛け状に下る沈線1条を施す。波頂部両側の口縁部には、先端に管状刺突および貫通する円孔を加え沈線で結び、楕円形の横長区画文で囲んでいる。波底部には円孔を囲む円文と対向する弧線文を配して単位文とする。なお、楕円形区画文と単位文間の口縁部下縁には、円形刺突2点を加える。肥厚する把手内面の波頂部にはS字状の大型貼付文を加え、幅広の弧状短沈線と刺突2点を側縁に配し、下縁に幅広の沈線によるU字状文を添わせている。なお、S字状文中心の円孔は、外面楕円形区画文内の円孔と繋がる。

第97図1はやや張りのある体部が口縁部で屈曲し外反する口縁部に至る。内面屈曲部には大きな段を残す。前後2枚の山形の板をずらして重ねたような、山形を呈す把手頂部には、渦巻状に隆帯を施し肥厚させる。把手頂部に刺突を加え、隆帯上に引いた沈線を突起側縁まで伸ばして刺突を加えて止める。もう一方にも刺突を先端に施した沈線を添わせ、前板の背後を廻らせる。前板の正面突起下は橋状とし、基部に三角形の突出部を設ける。突出部には円孔を加え、円孔を囲む弧状沈線を配して先端をU字状に折り返す。把手両側の口縁部には、沈線を交えた楕円形区画文を配す。波頂部の渦巻状突起下の内面には大型の円孔を穿ち、外面橋状把手と繋げる。貫通する円孔外縁に沈線を廻らせ、下縁両側にやや大型の円孔を一対配す。2は内弯する体部が屈曲し、外反する口縁部に至る土器であり、口縁部に大型の山形突起を配す。口縁部の突起下両側には沈線1条を交えた楕円形区画文を配す。なお、左側の楕円形区画文外周には口縁部から胴部に向う弧状の隆線を加えており、第97図1などにみられた口縁部の2枚の板の組合せはない。なお、隆線には口縁部から弧状沈線1条を



第97図 浅鉢形土器・釣手土器第6群実測図 (縮尺1/3)

下し、先端に刺突を加える。波頂下および隆線下には円孔各1点を加え、隆帯下の刺突から体部屈曲線に添わせて沈線2条を各々引き、中央に渦巻状の文様を施す。波頂部の内面にはC字状の隆帯を加え、側縁に浅く円形刺突を施す。隆帯下には外面の楕円形区画文に繋がる円孔を穿ち、外周にU字状の沈線を添わせる。3は口縁部に配した丸山形の把手片であり、くの字に屈曲する口縁部内面には段を残す。把手中央に貫通する円孔を穿つほか、側面にも貫通する楕円孔を穿つ。把手内外両面には両端に刺突を加え対向する弧状沈線を、円孔外周に配す。4は第95図5に似る、丸山形の2枚の板をハの字状に重ねて配した大型の把手片である。突起下には口唇部から丸山形の板間を添い下る隆帯を配し、両側の先端に円形刺突もしくは貫通する円孔を加えて沈線1条で結び、楕円形の区画文で囲んでいる。内面には波頂部よりS字状に下る隆線を配し、隆線内側に幅広の沈線および円形刺突2点を加え、下縁から隆帯に添う幅広の沈線を2枚の山形板の間を通して楕円形区画文に繋げる。なお、S字状文下部の円孔は外面の円孔に繋げる。

キ 第7群土器 (第98図1)

口縁部が体部からくの字状に屈曲して立ち上がる器形を呈し、口縁部に並行沈線文を配す土器を本群とする。1は口縁部を欠失する土器であり、口縁部下縁に並行沈線文を施す。沈線は比較的幅広で浅い。

ク 第8群土器 (第98図2～6)

沈線と陰刻による三叉状文を配す土器を本群とする。

横位展開する文様を縦位沈線により画す。三叉文は単独ではなく、縦位・横位に対頂して連結する。本群は器形により、以下の2類に分ける。

1類 口縁部が内弯気味に立ち上がる土器。

2類 口縁部が直線的に開く土器。

1類 (第98図2、3)

口縁部が内弯気味に立ち上がる土器を本類とする。

2は集合沈線を配し、要所に三叉状文を施す。3は横位区画帯を1条の横走沈線で上下に分割し、各区画内に縦位に対頂する三叉状文を配す。

2類 (第98図4～6)

口縁部が体部から直線的に開く土器を本類とする。

4から6は同一個体であり、3条の沈線により文様を描出する。縦位短沈線間には、上下に2条ずつの弧線文を伴う連結三叉状文を配す。外面は文様描出後に研磨する。

ケ 第9群土器 (第98図7)

口縁部が直線的に開く器形を呈し、口縁端部に沈線と刺突による文様を施す土器を本群とする。

7は口縁端部が内方に突出する。外面には研磨を施すが、平滑ではなく凹部が多く残る。

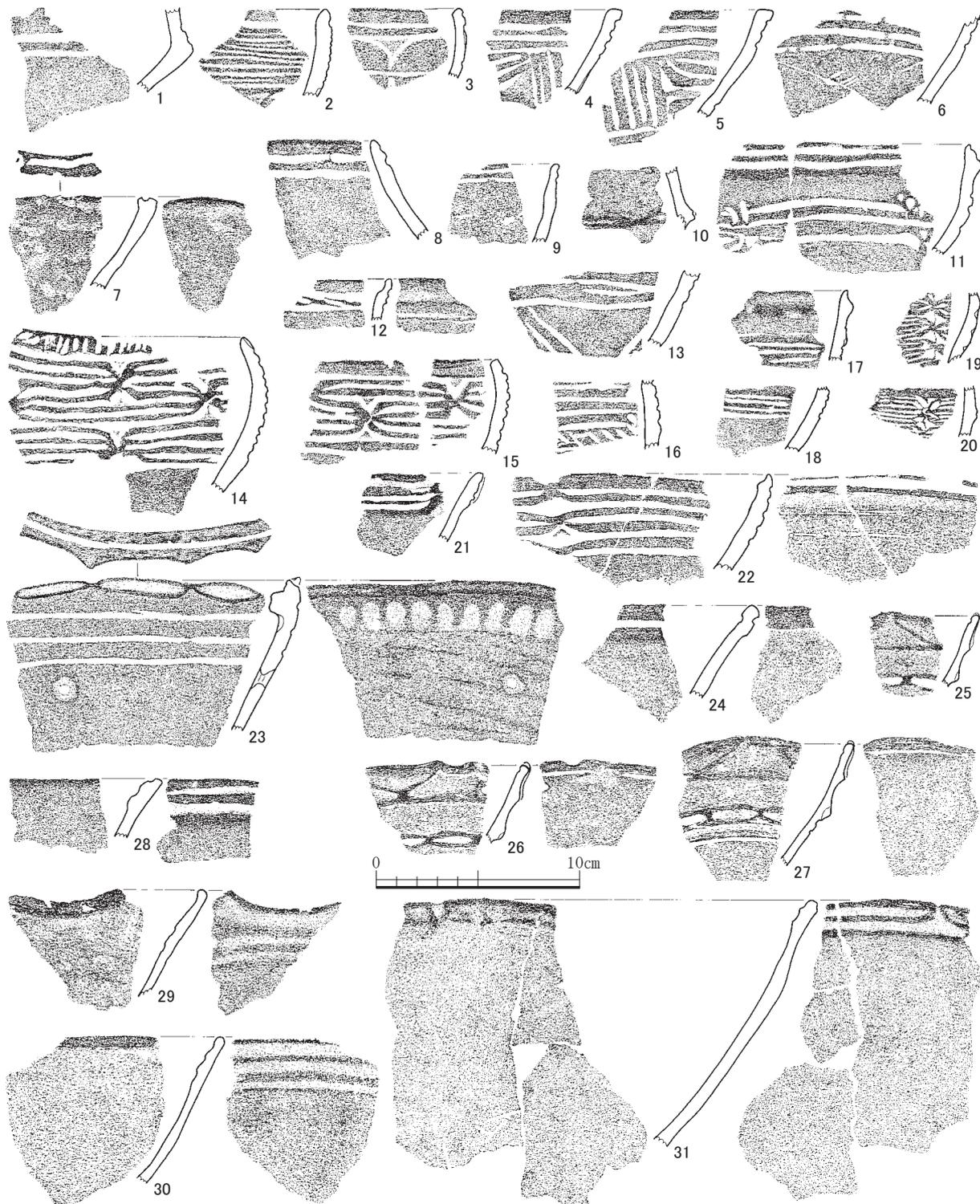
コ 第10群土器 (第98図8～20)

口縁部が内弯や内傾もしくは直立し、口縁部や体部に沈線による工字状文や平行沈線文などの文様を配す土器を本群とする。

外面調整は文様施文後に撫でや研磨を施す例が大半を占める。口縁部に配された文様により以下の4類に分

ける。

- 1類 並行沈線文を主体として配す土器。
- 2類 沈線による三角形文を配す土器。
- 3類 棘状の陰刻文と多条の並行沈線文により文様を描出する土器。
- 4類 本群に伴う体部片。



第98図 浅鉢形土器・釣手土器第7群～第11群実測図（縮尺1/3）

1類 (第98図8、9、11、12)

並行沈線文を主体として配すものを本種とする。

並行沈線文はすべて口縁部に施文され、沈線の内容により以下の2種に分ける。

A種 (第98図8、9、12)

並行沈線文を主体として配すものを本種とする。

12は並行沈線間に斜位の短沈線を重点的に施す。口縁部内面にも凹線を配す。

B種 (第98図11)

並行沈線文を短沈線や刺突による対向する弧線状の区切り文を配す土器を本種とする。

11は肥厚する口唇部と体部上端に配した文様帯2帯で構成する土器であり、口縁部には平行沈線のみを施す。

2類 (第98図13)

沈線による三角形文を配すものを本類とする。

13は体部片であり、上位の横走沈線と斜行沈線は連結しない。

3類 (第98図14~20)

棘状の陰刻文と多条の並行沈線文により、文様を描出する土器を本類とする。文様構成により以下の2種に分ける。

A種 (第98図14~18)

体部に縦位に対頂する三角形陰刻文と並行沈線文により描出する、入組み工字状文を配す土器を本種とする。

三角形陰刻文は内部に横位沈線と連結する人字状・逆人字状の削り込みを伴う。この三角形陰刻文の対頂部は文様の収束点となるが、器面から突出する例はない。文様集束点間は長六角形を呈し、内部に斜行する沈線を施し区画文状となる。

第98図14は長六角文が3帯構成となるが、長六角文の幅は一定ではない。口唇部には板状工具による連続押し引き文を施す。口縁端部は丸みをもってすばまる。外面は研磨により黒色を呈す。15は長六角文が2帯構成となる。口縁端部は内面を向き、端面をもつ。16は体部片で、長六角文が2帯確認できる。下側の長六角文の内部には、斜行短沈線を充填的に施す。17、18は同一個体であり、17の口唇部に眼鏡状貼付文を施す。

B種 (第98図19、20)

体部に横位で底辺が接する三角形陰刻文と並行線文による描出する、長六角形文を配す土器を本種とする。

A種と比べて、長六角形文の接点となる文様集束点が縦方向に揃う点は異なり、文様施文後に撫でを施す点や、集束部の突出が認められない点は共通する。

13、14は沈線が比較的細く浅い。14の長六角文の上方には狭い無文部があり、その上方には横位沈線が確認できる。

4類 (第98図10)

本群土器の体部片を本類とする。

10は眼鏡状の貼付文を配した口縁屈曲部片である。

サ 第11群土器 (第98図21~32)

口縁部が直線的に開く器形を呈し、口縁部や体部に工字状文や並行沈線文などの文様を配す土器を本群とする。

外面調整は文様施文後に撫でや研磨を施す例が大半を占める。文様の施文箇所により、以下の2類に分ける。

1類 口縁部、体部外面に文様を配す土器。

2類 口縁部内面に文様を配す土器。

1類 (第98図21~28)

口縁部、体部外面に文様を配す土器を本類とする。

第98図21は波状縁を呈す。波頂部に三角形陰刻文を配し、並行沈線文2条を区切る。口唇部に指撫で状の凹線を口縁形に添って配置し、三角形陰刻文と連結させる。22は並行沈線の要所に菱形陰刻文を配置し、文様集束点とする。口縁部内面に凹線2条を配す。23は口縁部がわずかに内屈し、屈曲部に眼鏡状貼付文を配す。直下に並行沈線文3条を配し、口縁端部にも沈線を配す。口縁屈曲部内面には整形時の指頭痕が顕著に残る。体部に補修孔が認められる。24は口唇部が肥厚し、沈線1条を配す。口縁部内面には強い撫でが施され、段をもつ。25から27は同一個体である。緩やかな波状縁を呈し、口唇部がやや肥厚する。口縁部と体部の2帯で文様帯を構成する。口縁部には弧線状・直線状の貼付文を配し、各貼付文および口唇部との接続部を突出させる。体部には眼鏡状の貼付文とその直下に並行沈線文を2条配す。口縁部内面にも沈線を配している。内外面ともに文様貼付・施文後にケズリを行い、その後、文様内部を含めて全域に研磨を施している。26の口縁部には補修孔が認められる。25~27は胎土が淡灰褐色を呈し、胎土に1mm以下の砂粒をおおく含むことから、搬入品の可能性が高い。

2類 (第98図28~31)

口縁部内面に文様を配す土器を本類とする。

28は口縁部内面が肥厚し、並行沈線文を配す。29から30は同一個体である。波状縁を呈し、波頂部は中央が凹む大形状を呈す。口縁端部には撫でによる端面をもつ。内面に指撫で状の凹線を3条配し、波頂部下では最上位の凹線を波頂部形状に沿って施す。器面の研磨が顕著である。31は粘土貼付により肥厚する口縁部内面に凹線と三角形陰刻文を配す。文様内は撫でを施すことにより、文様間の凸部が半肉彫り状となる。三角形陰刻文の上端は口縁端部に至り、わずかに凹む。外面には研磨を施す。口縁端部は撫でにより丸く収める。

シ 第12群土器 (第93図5)

釣手土器を本群とする。釣手土器は1点のみが出土した。

第93図5は上面形が楕円形で、身の浅い体部を有する釣手土器であり、比較的小型の品である。口縁部を断面三角形状に仕上げ、沈線2条を横走させ、口縁部の下縁に斜行する刻み目を施す。釣手部は三角形の基部から徐々に幅を狭めて、環状を呈すものと思えるが、口縁部の文様が釣手部の両側面文様に繋がるかを含め不明である。

第5節 注口土器・双耳壺形土器

出土した注口土器は、部位により大きく4群に分けた。また、双耳壺形土器は破片での出土であり、一群にまとめた。注口土器、双耳壺形土器の各群の内容は次のとおりである。

第1群土器 注口土器の口縁部片。

第2群土器 注口土器の体部片。

第3群土器 注口土器の把手片。

第4群土器 注口土器の注口部片。

第5群土器 双耳壺形土器。

ア 第1群土器 (第99図1、5～8、10、第100図、第101図1～13)

注口土器の口縁部片を本群とする。本群土器は口縁部の形状を主に、以下の4類に分ける。

1類 体部上端から直接口縁部に至る土器。

2類 体部からくの字に立ち上がり、外反して口縁部を伸ばす土器。

3類 体部から内傾して立ち上がり、口縁部を伸ばす土器。

4類 体部からくびれて立ち上がり、内弯する袋状の口縁部を付加する、いわゆる瓢形の土器。

1類 (第99図1、10、第100図1～24、58、59)

本類は体部上端から直接口縁部に至る土器であり、口縁部の立ち上がり形状から、直接口端部に至る土器(A種)、体部から弱く屈曲して、つま先状の口唇部を短く上方に伸ばす土器(B種)、体部からくの字に折れて短く立ち上がり、口縁部を肥厚させる土器(C種)、短く立ち上がる口縁部に把手を施す土器(D種)、体部からくの字に折れ、口端部内面に蓋受け状の返しをもつ土器(E種)に分ける。

A種 (第100図5、24、58、59)

体部から屈曲せず、直接口縁部に至る土器を本種とする。

第100図5は口縁部を肥厚させて端部を方角状に仕上げる。口縁下の2条の横走沈線で文様帯上限を画し、垂下、斜行する沈線を施す。24は口端部を方角状に仕上げて口縁下に横走する鐔状の隆帯を配し、下縁に沈線1条を添わせる。58、59は内弯してすぼまる体部上端を方角状に仕上げて口縁部とする。口縁下には沈線3条を横走させ、58では口縁と沈線間に施文方向を変えた羽状縄文を充填する。59は下縁沈線間に縄文を充填する。

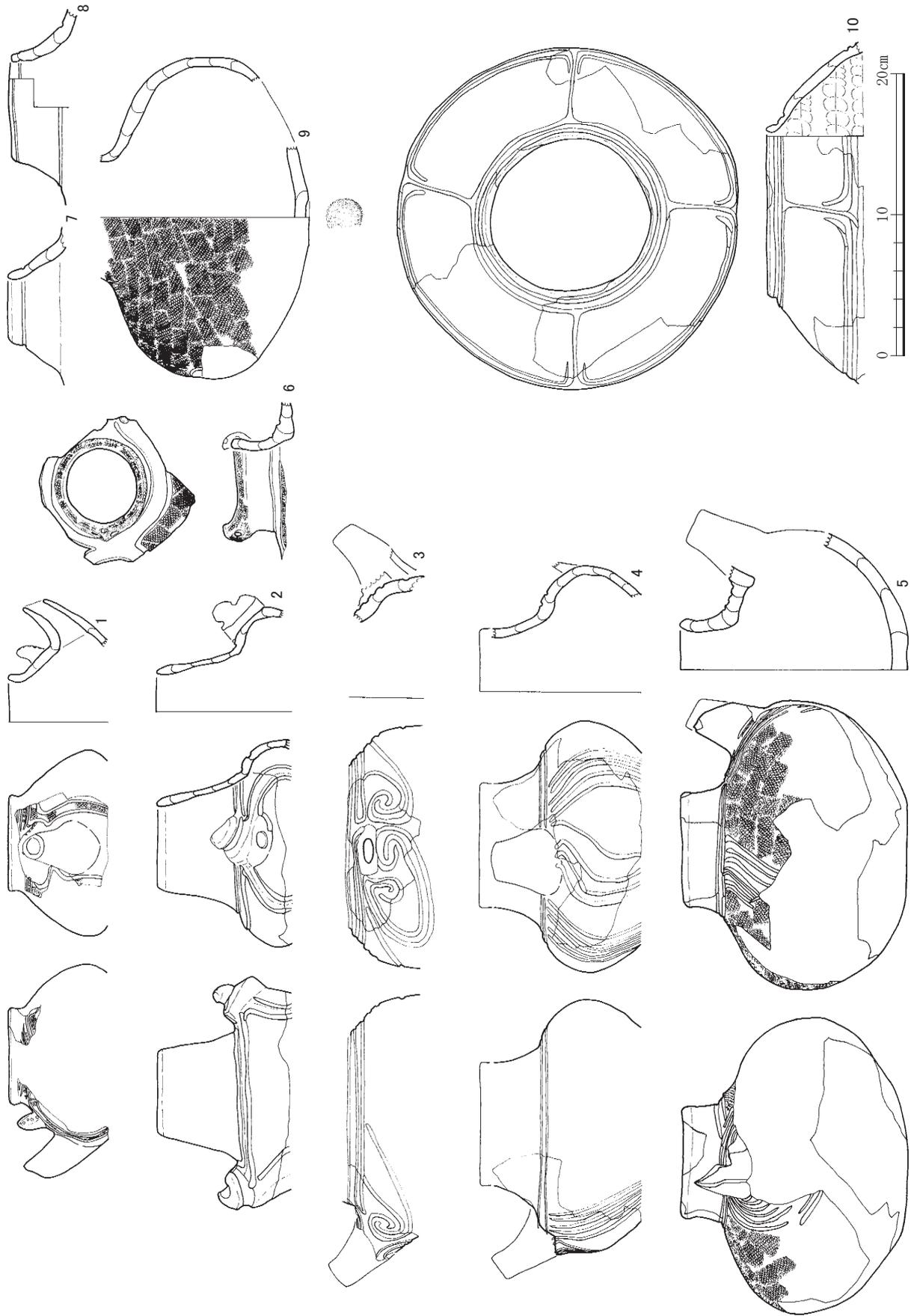
B種 (第99図1、10、第100図1～4、6、7、11、12、14)

体部から弱く屈曲して、つま先状の口唇部を短く上方に伸ばす土器を本種とする。

第99図1は下膨れの体部から、屈曲して短く上方に伸びて口縁部に至る土器であり、口端部を方角状に整える。やや扁平で上反りする注口部を、胴部最大径の位置に配す。注口部上縁には半円形の突起を加え、中央に刺突列を垂下させる。また、外側部にも刺突列を施す。口縁下に沈線1条を廻らせ文様帯上限を画し、沈線間に刺突列を加える4条沈線を斜行させるほか、突起に添わせて垂下する2条沈線を施して縄文を充填する。なお、背面には、沈線区画内に縄文を充填する部分も見えるが、詳細は不明である。

第99図10は扁球状の体部上半の土器であり、注口部は体部下半に配すと思える。体部から短く内傾して立ち上がり、口唇部を丸く収める。口縁下および体部下縁に沈線2条を廻らせ、口縁部下縁沈線から4箇所沈線を垂下させて器面を4分割する。垂下沈線と下縁横走沈線の交差部を三叉状に削り取り、両端を角状に曲げた沈線を下縁沈線に添わせて各区画内に配す。内面には輪積痕と抑えの調整痕を残し、外面を研磨する。

第100図1は口縁部を内傾して立ち上げ、沈線を交えた楕円区画文内に縄文を充填し、区画文間に円孔2点を縦位に配する。2、3も内傾した短い口縁部を立ち上げ、3は口縁下に2条沈線を横走させる。4は内傾する口縁部を肥厚させて山形突起を配す。突起下には円孔を穿ち、円孔下に刺突を加えた円形貼付文を加え、刺突から貼付文外周を廻って口縁下を横走する沈線を施す。なお、突起には斜行する短沈線を加える。6は注口部背面に配した、二股の三角形突起の基部片と思える。口縁部を断面三角形形状に内方に肥厚させ、突起基部と体部を分割する沈線1条を横走させ、突起部には多重沈線による三角形文を施す。体部中位を横走沈線で画し、斜行沈線およびU字状文を加える。なお、沈線間には縄文を施している。7は内傾する体部を短く曲げて直立する口縁部とし、口縁下に施す横走沈線と口端部外面間に縄文を施す。11は体部を短くくの字に折って口縁部とし、口縁下に沈線1条を横走させ赤彩を施す。12は体部を短くくの字に折って直立する口縁部とする。屈曲部に沈線3条を横走させ、楕円形や隅丸方形の区画文を配し、区画外に縄文を充填する。14は体部を短く折つ



第99図 注口土器・双耳壺形土器第1群、第2群、第5群実測図（縮尺1/4）

て直立する口縁部とし、口唇部を外方に肥厚させる。また、口縁肥厚部から斜行する隆線を下し、側縁に沈線を添わせる。なお、口縁肥厚部と隆線交差部には、斜行する沈線2条を加える。

C種 (第100図9、13、15~17)

体部からくの字に折れ、短く立ち上がる口縁部を肥厚させる土器を本種とする。

第100図9は体部上端を短く伸ばし、外方に肥厚させて口縁部とする。肥厚部下には沈線1条を添わせ、口唇部には鍵の手状に折れる沈線1条を配す。13は体部上端を外反させ、内外に肥厚させて面をもつ口縁部とする。口縁部には沈線2条を横走させ、くびれ部にも沈線を横走させる。15、16は同一個体であり、体部から外反して立ち上がり、外方に肥厚させて面をもつ口縁部とする。口縁部には間隔を空けて、貫通する小孔を1列に配す。17は体部をくの字に折り立ち上げ、肥厚させ口端部に面をもたせる。口端部には沈線2条を施す。

D種 (第100図18~20)

短く立ち上がる口縁部に把手を施す土器を本種とする。

第100図18は体部を短くくの字に折り、盃状の把手を施す。把手上面および背面に円孔を穿ち、把手内で連結させる。把手頂部から斜行する隆線を下すが、先端を欠失する。把手両側に各々円孔1点を加える。屈曲部には把手下で途切れる沈線1条を配し、途切れ部で沈線を垂下させる。19は内傾する口縁部を弱く肥厚させ、平山形の把手を配す。突起頂部を円形に肥厚させて円孔を施す。波頂下には貫通する小孔2点を並置し、外縁を対向する弧線文で画す。また、小さく突出する突起下縁に刺突を加える。なお、口縁肥厚部下には沈線を横走させ、突起下では斜行沈線2条を下す。20は体部末端が口縁となる土器であり、体部と口縁部を繋ぐ橋状把手を配す。把手頂部を平坦とし、浅く窪ませる。把手外面には沈線を交えた楕円区画文を縦位に配し、縄文を施す。

E種 (第100図21~23)

体部からくの字に折れて口縁部に至る土器であり、口端部内面に蓋受け状の返しをもつ土器を本種とする。

第100図21は体部からくの字に短く外反し、やや直立気味の口縁部内面に沈線1条を廻らせ、内面を玉縁状に仕上げる。屈曲部に沈線2条を廻らせて文様帯の上限を画す。先端に刺突をもつ垂下沈線脇に、三角形や楕円形の区画文を配し、楕描沈線を鋸歯状に充填する。なお、三角形に折れる部分には刺突を加える。22は体部からくの字に外反し、口縁部内面に沈線1条を廻らせて内面を玉縁状に仕上げる。23も同様の口縁部をもつ小型の土器であり、体部上縁に沈線を横走させ、節の細かな縄文を充填する。

2類 (第99図5、6、第100図25~40、47)

体部上端からくの字に立ち上がり、外反して口縁部を伸ばす土器を本類とする。本類は口縁部の形状から、直線的に外反して開く土器(A種)と緩く外反して開く土器(B種)、外反して開く口縁部に把手等を施す土器(C種)に分ける。

A種 (第100図25~27、47)

体部から直線的に外反して開く土器を本種とする。

第100図25は体部からくの字に屈曲して開く口縁部片であり、口唇部をつま先状に収める。26は外反して直線的に開く口縁部から、短く内折して口唇部に至る土器であり、口唇部に縄文を施す。27は外反して開いて方角状に整えた口端部に至る。47は口端部に沈線1条を施す。

B種 (第99図5、6、第100図28~30)

体部から緩く外反して開く土器を本種とする。

第99図5はやや扁平で張りのある体部から、緩く外反気味に立ち上がり、玉縁状に肥厚する口縁部に至る。

注口部上で途切れる2条沈線で体部上端を画し、注口部を囲む対向する多重弧線文を配す。体部両側縁には横走する沈線下縁から、多重沈線を弧状に下す。なお、文様施文部を除いて胴部上半に縄文LRを施す。

第99図6は体部から緩く外反して立ち上がり、玉縁状に肥厚する口縁部に至る土器である。口縁部に小山形橋状把手を配し、頂部に円形刺突を施す。玉縁状の口唇部には縄文LRを施す。口縁部下縁に沈線1条を施すが、突起対面では体部方へ伸ばしており、こちらに注口部を配すものと思える。体部には沈線区画内に縄文を充填する文様を配す。

第100図28は緩く外反する口縁部を有し、口端部を玉縁状に仕上げ刻み目を施す。29は緩く外反して長く伸びる口縁部を有し、口端部を玉縁状とする。体部上端および中位に沈線各1条を横走させて文様帯を画し、区画内に斜行する櫛描細沈線を施して縄文LRを加える。30は緩く外反して開く口縁部片であり、口端部に小突起を加えて内面に円孔1点を施す。体部上縁に横走沈線1条を配す。

C種 (第100図31~40)

外反して開く口縁部に把手等を配す土器を本種とする。

第100図31は体部から外反して開き長く伸びる口縁部に、橋状把手を配す土器である。把手は方角状に薄く整えた口端部から、横走沈線で画した体部上縁を繋ぐ。台形状の基部から方柱板状の把手を立ち上げ、把手頂部の円盤状の肥厚部に繋げる。把手頂部の円盤には、沈線を螺旋状に渦巻かせて下す。方柱板状の把手部には、円孔を縦位に2点配し、上側の円孔を弧状沈線で囲んでいる。台形状の基部には沈線2条を横走させる。文様帯上端を画す横走沈線は、把手下も横走させ、把手基部を囲む沈線2条を施す。32は緩く外反する口縁部に、基部が三角形を呈す橋状把手を配す。33は外反して開く口縁下に沈線1条を横走させ、細い円柱状の橋状把手で口縁部と体部を結ぶ。34は緩く伸びた口縁部と体部上端を結ぶ橋状把手であり、三角形の基部と扁平な円柱状の突起部から成る。三角形の基部内縁には沈線を添わせ、突起部には同心円文を配す。35は外反して伸びる口縁部に山形の突起を加え、突起下に八字様の橋状把手を配す。山形突起頂部および突起下に刺突各1点を加えるほか、内面に刺突2点を並置する。把手部外面には末端に刺突を加えた縦位沈線を配す。36はくの字に外反して伸びる口縁部に橋状把手を配す。口縁部側の把手末端が口端部を乗り越え、山形突起状としている。橋状把手は長方形板状を呈し二重の方形区画文を配している。把手基部には刺突を加えた小さな円形突起を四隅に配す。体部上端の把手内には、左右方から矩形の沈線区画を伸ばしている。なお、内面にはの字状の沈線を配す。37は外反して伸びる口縁部に、三角板状の上下の基部間を円柱状の把手部で繋ぎ、頂部には円形の突起を加えて三重の同心円文を施す。天井部の三角板の内縁に沈線を廻らせ、円柱状の把手部には横走沈線を多重に配す。38は外反して長く伸びる口縁部と体部上位を繋ぐ橋状把手であり、把手頂部の円盤状の突起は口縁部から飛び出す。把手基部は三角形の板状を呈し、円柱状の把手部がこれを繋いでいる。把手頂部の円盤内にはの字文を描き、三角形板状の底板内縁には山形の沈線を添わせる。体部文様の詳細は不明ながら、文様帯上端には横長の楕円形区画文を配し、渦巻文や方形区画文を組み合わせ文様を描く。39も橋状把手であり、正面に8字状か見える縦位の橋状部を配し、末端の円孔から沈線を垂下させる。側面には貫通する円孔を縦位に2箇所穿ち、円孔間に円形刺突文を加える。40は半円柱状の把手先端に円孔（もしくは半円孔）を加えた天板を加えるものと思える。扁平で把手付近が最も張りをもつ体部からくびれて、外反する無文の口縁部に至るものに見える。文様は把手中央に配した縦長の楕円形区画文を軸に左右対称に配され、くびれ部に矩形の区画文を配して体部には三日月形の二重の沈線区画文を配す。

3類 (第99図7、8、第100図10、41~56)

体部から内傾して立ち上がり、口縁部を伸ばす土器を本類とする。本類は口縁部の形態から、口唇部を肥厚

させるもの（A種）、口唇部を短く外方に折るもの（B種）、口唇部に肥厚や折り返しをもたないもの（C種）に分ける。

A種（第99図7、第100図10、41、42、48～50、55、56）

体部から内傾して立ち上がり、口縁部を伸ばして口唇部を肥厚させるものを本種とする。

第99図7は体部から内傾して立ち上がり、外面に稜を残す。やや幅広く肥厚する口唇部下縁に沈線1条を横走させる。

第100図10は内傾して立ち上がる口縁部を伸ばし、口唇部を外方に肥厚させて肥厚部上端に沈線1条を廻らす。口唇肥厚部下縁には縄文を充填する。また、体部上縁に沈線2条を横走させる。なお、外面に赤彩を施す。41、42は口唇肥厚部下縁に沈線を廻らせる。48は弱く肥厚する口端部を方角状に整え、49、50、54は肥厚部に縄文を施す。また、55は肥厚部に縄文を施して下縁に沈線を廻らせる。56は肥厚する口唇部に山形突起を加え、円文を配す。通例無文とする口縁部に沈線による曲線文を描く。

B種（第100図45、46、51）

第100図45は内傾する口縁部から、口唇部を肥厚させて立ち上げる。46は口唇部を折り返して玉縁状に仕上げ、口縁部に垂下沈線を施す。51は口唇部を短く外方に折る。

C種（第99図8、第100図43、44、52、53、57）

体部から内傾して立ち上がり、口縁部を伸ばす土器である。口唇部に肥厚や折り返しをもたないものを本種とする。

第99図8は内傾して立ち上がる口縁部から、直立する口唇部に至り口唇部を丸く収める。口縁下の内外面に沈線各1条を横走させる。また、体部上縁のくびれ部に、沈線1条を施し文様帯の上限を限る。

第100図43は内傾してすぼまる口唇部に沈線1条を加え、44は口唇部を丸く収める。52は口端部を方角状に整え、53は口唇下に沈線2条を横走させる。57は弱く内傾して立ち上がる口縁部を外反させて口唇部を丸く収め、体部上縁を横走沈線で限る。

4類（第101図1～13）

体部からくびれて立ち上がり、内弯する袋状の口縁部を付加する、いわゆる瓢形の土器を本類とする。

本類は袋状の口縁部形態から、算盤玉状に屈曲するもの（A種）と内弯するもの（B種）に分ける。

A種（第101図1、2）

第101図1は袋状の口縁部を断面三角形状に外方に肥厚させ、内折する口唇部に沈線1条を施す。なお、沈線下には縄文を施す。2はくの字に内折する口縁部に山形突起を配し、突起下に橋状把手を配する。橋状部の円孔から2条沈線を引くほか、屈曲部下にハの字状に沈線を配す。

B種（第101図3～13）

第101図3は内弯する口縁部の上下端を横走沈線で限り、区画内に単位文となる縦走沈線と横走する3条沈線を配す。なお、区画内には縄文RLを充填する。4は口縁部に縦長の刺突を加える8字状貼付文を配して単位文とし、両側に間隔を空けて2条沈線を横走させる。5は口唇部を欠くが、垂下隆帯を口縁部に配し、末端に刺突を加えた沈線3条を横走させる。6は内弯する口縁部に斜行する隆帯を配して単位文とし、楯描沈線を施す。また、屈曲部にも横走する隆帯を配し、口縁下および隆帯側縁に楯描沈線を横走させる。7は山形突起を配する口縁部片であり、突起部にはねじれた横位の8字状貼付文を配して下縁に沈線を施す。8は内弯する口縁部に横位の橋状把手を配す土器であり、把手上面には刺突文1点を加え、外面には刺突文から伸びる沈線を横走させる。9は口縁部に山形突起を配す土器であり、楕円形を呈し外方に肥厚する突起部には、縦位に貫通



第100図 注口土器・双耳壺形土器第1群、第2群実測図（縮尺1/3）

する円孔を穿ち、両側に沈線2条を施す。袋状の口縁部下縁には沈線1条を配す。10は山形突起をもつ口縁部片であり、中央にS字かと思える単位文を加え、両側に口縁下の横走沈線から縦位短沈線を下す。11は内弯する口縁部を断面三角形に肥厚させ、面をもたせた口端部に沈線1条を横走させる。山形状の突起頂部を単沈線で割り、突起下には円柱状の貼付文を配して多重沈線を側面に施す。なお先端部を欠失する。12は内弯する口縁部に8字状の橋状把手を配す。把手下縁には大型の円孔を加え、把手頂部から円孔に向かう貫通孔を穿つ。また、把手下縁からは微隆起線を2条下し、横走する微隆起線を分岐させる。微隆起線には管状刺突を加える。13は内弯し袋状を呈す口縁部と体部を結ぶ橋状把手であり、突起を配す口縁部を山形に隆起させる。板状を呈す橋状部に、皿状の天板を乗せ把手とする。天板中央部を盛り上げ、貫通する円孔を施すほか、貫通孔をもつ小橋状突起を一对配す。やや肥厚する口縁部下縁および体部上縁には各々沈線1条を横走させる。

イ 第2群土器 (第99図3、4、9、第101図14~71、第102図1~32)

注口土器の体部片を本群とする。本群は器形、文様帯区画、文様要素から以下の4類に分ける。

- 1類 体部上端を肥厚させ、有段状に仕上げる土器。
- 2類 体部上端区画を隆線で画し、体部文様を隆線や沈線で描く土器。
- 3類 体部上端区画および体部文様を沈線で描く土器。
- 4類 体部文様を無文とする土器。

1類 (第101図14~22)

体部上端を肥厚させ、有段状に仕上げる土器を本類とする。

第101図14は胴部上縁を肥厚させて有段状に仕上げる。肥厚部には基部が二又に分かれる橋状把手を配すものと思え、斜行沈線を施す。肥厚部には沈線2条を横走させ、沈線間に縄文を充填する。なお、肥厚部上縁に沈線を施して肥厚を強調する。15は体部上端を断面三角形に肥厚させ、肥厚部上縁に1条、下縁に2条の沈線を横走させる。なお、上下の沈線間に縄文LRを施す。16、17も体部上縁を肥厚させて有段状に仕上げ、横走沈線2条を配し縄文を施す。18は肥厚する体部上端に、途切れをもつ2条沈線を横走させ、空間には渦巻文を施すほか、横走沈線を曲げて斜行させ区画文とし、縄文を充填する。19~22は体部上端を断面三角形に肥厚させて有段に仕上げる。21、22は体部に縄文を施す。

2類 (第101図23~54)

体部上端区画を隆線で画し、体部文様を隆線や沈線で描く土器を本類とする。本類は隆線の種類から、細い紐線状の隆線を使用するもの(A種)、やや幅の広い隆帯を使用するもの(B種)、幅広で断面D字状の隆帯を使用するもの(C種)に分ける。

A種 (第101図23~34)

体部文様帯上端区画を紐線状の細い隆線で画す土器を本種とする。

第101図23、24は同一個体であり、体部文様帯上端を斜行する刻み目を加えた紐線状の隆線で画し、隆線から2条沈線を下して沈線間に刺突を列状に配す。25は刻み目を施す細い隆線の両側に沈線を添わせ、多条沈線による区画文を派生させる。26は断面三角形の細い隆線上に刻み目を施し、下縁に垂下沈線や区画沈線を配す。27は体部上端のくびれ部に、2条の刻み目を施す細い隆線を横走させる。28は刺突を加える低く細い紐線様の隆線で文様帯上限を画し、体部に縦位の多重弧状沈線を間隔を空けて配し、無文部に縄文RLを充填する。29は紐線状の隆線に細かい刻み目を密に加える。30はくびれ部に刻み目を加えた紐線を横走させ、下縁に横走沈線を加えて2条沈線を垂下させる。31は口縁部下縁に刺突を加えた紐線状の隆線を横走させ、32は体部上縁に

刻み目を加えた紐線を横走させ、体部に縄文を施す。33は刻み目を加えた紐線下に沈線を横走させ、下縁より沈線を垂下させる。34は体部中位に刺突を加えた紐線を配す。

B種 (第101図35～45)

体部上端区画に、やや幅広の隆帯を使用する土器を本種とする。

第101図35～37は体部上端に刻み目を施す隆帯を配す土器であり、36は隆帯の両側に、37は隆帯の下縁に沈線を添わせる。38は体部上縁に刻み目を施す隆帯を配し、体部に弧状の隆帯を配す。なお、いずれの隆帯にも両側に沈線を添わせる。39は体部下縁に刻み目を加えた隆帯を配す。40は刻み目を加えた隆帯を横走させ、両側に沈線を添わせて体部に縄文を施す。41は斜行する刻み目を施す断面三角形の隆帯下縁に、沈線2条を添わせる。42、43は断面D字状の隆帯に刺突を加え、両側に沈線を添える。44は刺突を加えた隆帯をくびれ部に配し、体部に施した2条沈線で区画する弧線内に縄文を充填する。45は体部上端に刺突を加えた隆帯を横走させ、上縁に沈線を添わせる。

C種 (第101図46～54)

幅広で断面D字状の隆帯により体部上端を画すものや、隆帯により文様を描く土器を本種とする。

第101図46は低く幅広の隆帯を体部上端に配し、下縁に弧線状の沈線区画を施す。隆帯上および区画内には縄文を充填する。47は体部上端を低く幅広の隆帯で画して二股に分岐させる。隆帯側縁には幅広の沈線を添わせ、隆帯上には縄文を施す。48は体部中位を横走する縄文を施す隆帯であり、両側に沈線を添わせる。49は体部中位に2条の隆帯を横走させ、隆帯から口縁に向かう斜行沈線を配す。50は口縁部下縁に隆帯を横走させ、両側に沈線を添わせる。51、52は横走する隆帯両側に沈線を配し、沈線下に縄文を充填する。53は口縁部下縁に断面D字状の幅広で低い隆帯を配して沈線を添わせる。54は体部上半に隆帯によるC字状の文様を描き、両側に沈線を添わせる。

3類 (第99図3、4、第101図55～71、第102図1～31)

体部上端区画および体部文様を沈線で描く土器を本類とする。本類は体部の文様要素から、充填縄文を施すもの(A種)、細沈線を充填するもの(B種)、多重沈線で文様を描くもの(C種)、貼付文を加えるもの(D種)に分ける。

A種 (第101図55～71)

体部上端区画および体部文様を沈線で描き、区画内に縄文を充填する土器を本種とする。

第101図55は体部上端を2条沈線で画し、沈線間に縄文を充填する。縄文帯下には対向する弧線文や方形区画文を沈線で描く。56は体部上端のくびれ部に沈線1条を横走させ、体部には横長の楕円形区画文を配して縄文を充填する。57はくびれ部に沈線1条を横走させ、体部に楕円形の区画文を配して区画外に縄文を充填する。58は体部中位に2条沈線を横走させ、上半に斜行沈線を下す。沈線区画内に縄文LRを充填する。59は弧状の沈線区画内に縄文を充填する。60は体部上端を2条の横走沈線で画し、体部に対向する弧線文を配した紡錘形の区画内に縄文を充填する。61はくびれ部に2条の横走沈線を配し、区画内に縄文を充填する。62はU字状に折り返す沈線間に、縄文を充填する。63は体部上端を2条の横走沈線で画し、体部中位に弧状沈線を連続横走させる。上端区画沈線と弧線間に縄文を充填する。64は注口部基部の破片であり、体部上端を2条沈線で画し、注口部基部を2条沈線で囲む。沈線区画外に縄文を充填する。65は矩形の区画文を描き、区画外に縄文を充填する。66、69は同一個体であり、体部上端を画す横走沈線から2条の斜行沈線を下して両沈線間に縄文を充填する。67は体部上半の破片であり、沈線3条を横走させて沈線間に縄文を施す。68は円形区画内に縄文を充填する。70、71は曲線区画内に縄文を充填する。



第101图 注口土器・双耳壺形土器第2群実測图 (縮尺1/3)

B種 (第102図1～10)

体部上端を沈線で画し、沈線で区画する文様内に短沈線や細沈線を充填する土器を本種とする。

第102図1、2は同一個体であり、体部上端を横走沈線で画し、末端に刺突を加えた沈線を垂下させ文様帯を分割する。垂下沈線両側には沈線による方形かと思える区画文を配す。なお、区画沈線屈曲部には、刺突を加える。区画外には縄文LRを充填し、区画内には刺突文列や、末端に刺突を加えた斜行短沈線を充填する。3は区画内に縦位短沈線を充填する。4は体部上端に沈線を添わせた隆線を横走させ、間隔を空けて3条沈線を配して沈線間に斜行する短沈線を充填する。なお、C字状沈線を2段に配して単位文としている。5は垂下する2条沈線間に、短沈線を梯子段状に充填する。6は横走する2条沈線間に斜行細沈線を鋸歯状に充填する。7から10は同一個体と思え、体部上端に扁平で角状の隆線を横走させて文様帯の上限を画す。隆線下には沈線を横走させ、三角形の区画文を配す。区画内に細沈線による渦巻文や同心円文、弧線文、刺突文列等を施す。区画内の空白部には細かな沈線を充填する。なお、9は体部文様帯下縁の破片である。

C種 (第99図3、4、第102図11～28)

沈線で体部上端を画し、多重沈線で文様を描く土器を本種とする。

第99図3は扁平な体部をもち、体上部に注口部を配す土器であり、口縁部、体部下半、注口部を欠失する。体部上端を沈線で画し、注口部から緩く曲がって体部上端沈線に添う2条沈線は、先端をU字状に結合する。また、注口部基部には、先端を巴状に入り組ませた渦巻文を配す。側面にも巴状に沈線に入り組ませて斜行する2条沈線を配し、うち沈線1条を側面まで伸ばす。なお、器面は4分割されているものと思え、縄文の施文はない。

第99図4は体部上端でくびれ、外反する口縁部を直立気味とする土器であり、口縁部を欠く。体部上半に注口部を配し、注口部脇から沈線2条を横走させて文様帯上縁を限る。体部には、注口部から対向する多重弧線文を下し、注口部下にはS字状に蛇行する多重沈線を下す。なお、縄文の施文はない。

第102図11は体部文様帯下縁の破片であり、沈線3条を横走させて沈線間に条が横走する縄文RLを施す。12は体部上端を横走沈線帯で画し、下縁の2条沈線を切り渦巻文を配す。13は体部上位に渦巻文を配し、側縁まで文様帯上限を画す2条沈線を伸ばして下縁沈線を渦巻文に添わせる。なお、沈線間には縄文を充填する。14は体部上端を2条の横走沈線で画し、下縁沈線をハの字状に分けて渦巻文を加えている。なお、沈線間には縄文を充填する。15は体部上端を画す沈線下に、渦巻文および先端に刺突を加えた半円文を多重に施し、沈線間に縄文を施す。16は薄手の土器であり、体部上端を限る横走沈線下に弧状沈線を多重に施し、1条おきに縄文を充填する。17は体部上端の屈曲部に横長の楕円形区画文を配し、下縁に2条沈線を添わせて体部文様の上端を画す。体部には三角形の区画文を配し、横走沈線間に縄文を充填する。18は体部上端を横走沈線で画し、沈線下に円文を加えて縄文を充填する。19は体部上端を2条沈線で画し、円孔を中心とする同心円文を多重に配す。20は体部上位の破片であり、横走する縄文を施す隆線を挟み、多重沈線による楕円形もしくは方形の区画文を配している。21から24は体部上端を多重の横走沈線で画している。25は多重の同心円文から縦位に沈線を下す。26は体部上端を横走沈線で画し、の字状の沈線の周囲を多重弧線文で囲んでいる。27は渦巻文もしくは同心円文から斜行沈線を下す。28は体部文様帯上端を横走沈線で画し、2条一組の垂下沈線で文様帯を縦位分割し、区画内に渦巻文を配す。

D種 (第102図29～31)

沈線により文様を描き、貼付文を加える土器を本種とする。

第102図29は体部中央を3条沈線で画し、区画内に刺突を加えた円形貼付文2点を並置する。また、横走、垂下する3条沈線を絡め、交差部および横走部に刺突を加えた円形貼付文を施す。なお、沈線間には縄文を充填

する。30は刺突を加えた円形貼付文の周囲を、多重沈線で囲んでいる。31は沈線を上面に加えた隆線を渦巻かせ、先端につまみ状の半円形貼付文を加える。なお、隆線上には縄文を施す。



第102図 注口土器・双耳壺形土器第2群、第3群実測図（縮尺1/3）

4類 (第99図9、第102図32)

第99図9は扁球状の体部がすばまり、外反して立ち上がる土器であり、口縁部を欠失する。体部には縄文R Lを施す。第102図32は体部上端を2条の横走沈線で画して体部に縄文を施す。

ウ 第3群土器 (第102図33~53)

注口土器の把手片であり、把手の断面形および部位から以下の5類に分ける。

1類 楕円形もしくは板状の断面を呈し、上面にのみ文様を配すもの。

2類 円形の断面を呈し、上面にのみ文様を施すもの。

3類 二股状の把手基部の破片。

4類 突起の破片。

5類 上面および側面の一方に文様を施し、口縁間を繋ぐ横位の橋状把手。

1類 (第102図33~37、41~43)

楕円形もしくは板状の断面を呈し、上面にのみ文様を施す把手片を本類とする。

第102図33は断面が楕円形の把手片であり、末端を撥上に広げる。口縁部方向に対して接合方向が直行する痕跡を内面に残す。把手上面両側に2条の沈線を空間を空けて配し、末端を横走短沈線2条で限る。区画内には垂下沈線先端に円文を加えた文様を施す。34は体部上半から伸びる断面楕円形の把手片であり、末端を外方に裾広がりとする。側面から蛇行沈線を立ち上げ、途中から沈線1条を添わせる。基部および沈線間には縄文を充填する。35も体部上半から伸びると思える断面楕円形の把手片であり、把手を横断する隆線を2箇所配す。隆線間には垂下沈線を両側に配して区画し、区画内に縦位の楕円文を施す。36は板状の把手片であり側縁に沈線各1条を添わせる。なお、先端が振じれる。37は板状の把手片であり、基部側を撥状に広げる。中央に二重の円文を配し、下縁に多重弧線文、上縁に横走多重短沈線を配す。41も体部上半から伸ばす把手片と思え、破片上部を肥厚させ、末端に刺突を加えた沈線を縦走させる。42は板状の把手片であり、横走短沈線を下縁に配し、末端に刺突を加えた沈線2条を縦走させる。43は35に似る把手であり、把手を横断する隆線を配し、隆線の上下に縦長の楕円文を配す。

2類 (第102図44~47)

円形の断面を呈し、上面にのみ文様を施す把手片を本類とする。

第102図44は円形の断面をもち、刺突を加えた円形貼付文を上端に配し、末端に刺突を加えた沈線1条を縦走させる。45は円形の断面を呈し、大きく環状に廻るものと思え、把手内面に稜をもつ。46、47は粘土紐2条をより合わせて断面半円形に仕上げたものであり、環状に廻るものと思える。なお、46は縄文R Lを粗く施している。

3類 (第102図38~40)

二股状の把手基部の破片を本類とする。

第102図38は破片下縁に円孔の一部が見え、二股に分かれると思える。側縁に添い沈線2条を縦走させ、先端に渦巻文を加える。39は三角形を呈す把手基部片であり、基部中央に円孔を穿つ。側縁に添う沈線を各々配して側面との間には縄文L Rを施す。40は三角形の把手基部片であり、大きな円孔を穿ち二股状に仕上げる。なお、把手頂部を欠失する。

4類 (第102図49)

第102図49は卵形の突起片であり、側縁に沈線を廻らせて先端付近に刺突文2点を加える。また、上面に刺突

文列1条を縦走させる。

5類 (第102図48、50～53)

上面および側面の一方に文様を施し、口縁間を繋ぐ横位の橋状把手であり、本来は有文深鉢形土器第22群に含めるべきものであろう(第54図7～9など)。

第102図48は末端部に横走する隆帯を配す。隆帯施文部内面には把手方向と平行する口縁部との接合方向の痕跡が見える。50は方柱状の把手片であり、上面には隆帯による渦巻文を配し、内側に沈線を添える。また、渦巻文横には楕円形の沈線を施す。なお、側縁のうち一面には、把手の弯曲に合わせて沈線1条を配す。51は把手基部片であり、口縁部との接合方向の痕跡を残す。基部末端に隆線を横走させて管状刺突を列状に配す。上面にはU字状の沈線間にD字状の刺突文を加える。なお、側面のうち一面には、先端に刺突を加えた沈線を施す。52は板状の橋状把手であり、沈線3条を配し縄文を施す。53は方柱状の把手片であり、上面に3条、側面のうち一面に沈線2条を配す。

エ 第4群土器 (第103図)

注口土器の注口部片を本群とする。本群は注口部の形態から、以下の8類に分ける。

- 1類 把手と円柱状の短い注口部が一体となるもの。
- 2類 円柱状の短い注口部先端を斜方に伸ばすもの。
- 3類 やや扁平な注口部を内反らせ、先端を上方に伸ばすもの。
- 4類 注口部基部に貼付文を配すもの。
- 5類 太めの注口部基部からすぼまり円錐形に仕上げ、注口部先端を斜方に伸ばすもの。
- 6類 太めの注口部基部から丸みを帯びてすぼまり、注口部先端を斜方に伸ばすもの。
- 7類 注口部先端に変化を加えるもの。
- 8類 先端部が一本の注口部を、基部側で2本に分けるもの。

1類 (第103図1)

第103図1は把手と円柱状の短い注口部が一体となる土器であり、浅く扁平な体部をもつ。注口部と口唇部を橋状に結ぶ把手上面には、貫通する小孔を穿つ。短く伸びる注口部下縁には、微隆起線による同心円文を配す。なお、外面に黒彩を施す。

2類 (第103図2)

第103図2は円柱状の短い注口部先端を斜方に伸ばす土器であり、基部に沈線2条を廻らす。

3類 (第103図3～5)

やや扁平な注口部を内反らせ、先端を上方に伸ばす土器を本類とする。

第103図3は扁平な注口部を内反らせ、先端部を環状に肥厚させる。注口部下面に楕円形文との字文を加え、器面をよく研磨する。4はやや扁平な注口部を内反らせ、先端部を環状に肥厚させる。5は短くやや扁平な注口部を弱く内反らせる。

4類 (第103図6、7)

注口部基部に貼付文を配すものを本類とする。

第103図6は注口部先端に縄文LRを施し、基部下面に半球状の貼付文を加える。なお、器面をよく研磨する。7はやや扁平ですぼまる注口部の基部に沈線1条を廻らせ、下面に8字状貼付文を配す。器面は平滑に仕上げ、黒彩の痕跡を残す。



第103図 注口土器・双耳壺形土器第4群実測図 (縮尺1/3)

5類 (第103図8～10)

ための注口部基部からすぼまり円錐形に仕上げ、注口部先端を斜方に伸ばすものを本類とする。

第103図8は扁平な体部を有す土器であり、体部上端を横走沈線で画す。横走沈線際の体部上面に円形の貼付文1点を配す。基部の側面から下面にかけて、末端に円形刺突を加えた低い隆線を廻らせ、注口部基底で左右方向に伸ばしている。両側に沈線を添わせ、隆線上および区画内に縄文を充填する。器面を丁寧に研磨している。9は太い基部から円錐状に急激にすぼまる注口部である。10はやや扁平な注口部であり、基部から弱くすぼまりための先端部に至る土器であり、体部および基部まで縄文を施す。

6類 (第103図11～14)

ための注口部基部から丸みを帯びてすぼまり、注口部先端を斜方に伸ばす土器を本類とする。

第103図11は扁平な体部から丸みを帯びてすぼまる注口部片である。体部上端を横走沈線で画し、体部上端と口縁部を繋ぐ小さな橋状把手を注口部基部上縁に配す。注口部下縁から側縁には、片掛け状に多重の扇形文を施し、菱形状の区画文となる多重沈線を体部に配す。また、体部右側面には多重の弧線文を施す。12は基部から内弯してすぼまる注口部片である。13、14は極太の基部から内弯してすぼまり注口部先端に至る。

7類 (第103図15～25)

注口部先端に変化を加える土器であり、丸味のある注口部基部がくびれて、先端部を円柱状とするもの(A種)、先端部を環状に肥厚させるもの(B種)に分ける。

A種 (第103図15～17)

注口部先端を円柱状に仕上げるものであり、第103図16は円柱部下縁に沈線を廻らせ、先端部に縄文を施す。17は円柱部先端を太く仕上げる。

B種 (第103図18～25)

注口部先端を環状に肥厚させるものであり、第103図19～21、25は肥厚部下縁に沈線を廻らせる。なお、19の注口部先端には黒彩を施す。25は先端部に縄文を施すほか、基部に沈線を廻らせて体部には沈線で文様を描く。22は注口部基部上面に突起を加え、基部に沈線を廻らせる。24は注口部基部の両端に刺突を加えた隆帯を巻き、内側にやや幅広の沈線1条を添わせる。体部には注口部に向け広がる、ハの字状の斜行沈線を多重に配す。器面をよく研磨する。

8類 (第103図26)

先端部が一本の注口部を基部側で2本に分けるものを本種とする。本類は1点のみ出土を見た。

第103図26は大型の注口土器と思え、注口部基部では2本の管を先端部で1本に束ね、先端を環状に肥厚させる。

オ 第5群土器 (第99図2、第104図)

双耳壺形土器を本群とする。双耳壺形土器は注口土器に類似する器形を有す。体部上縁の対角線状に把手一対を配し、上面形は紡錘形を呈す。把手には上下に貫通する円孔を穿つ特徴をもつ。なお、双耳壺形土器の体部片は注口土器体部片と区別できず、一括して注口土器体部片として扱った。本類土器は双耳把手の形状から、以下の4類に分けた。

1類 扁球状の壺体部を張り出させて双耳把手とする土器。

2類 突起等を加える土器。

3類 弧状の鏢状隆帯に上下方向の円孔を加え、把手とする土器。

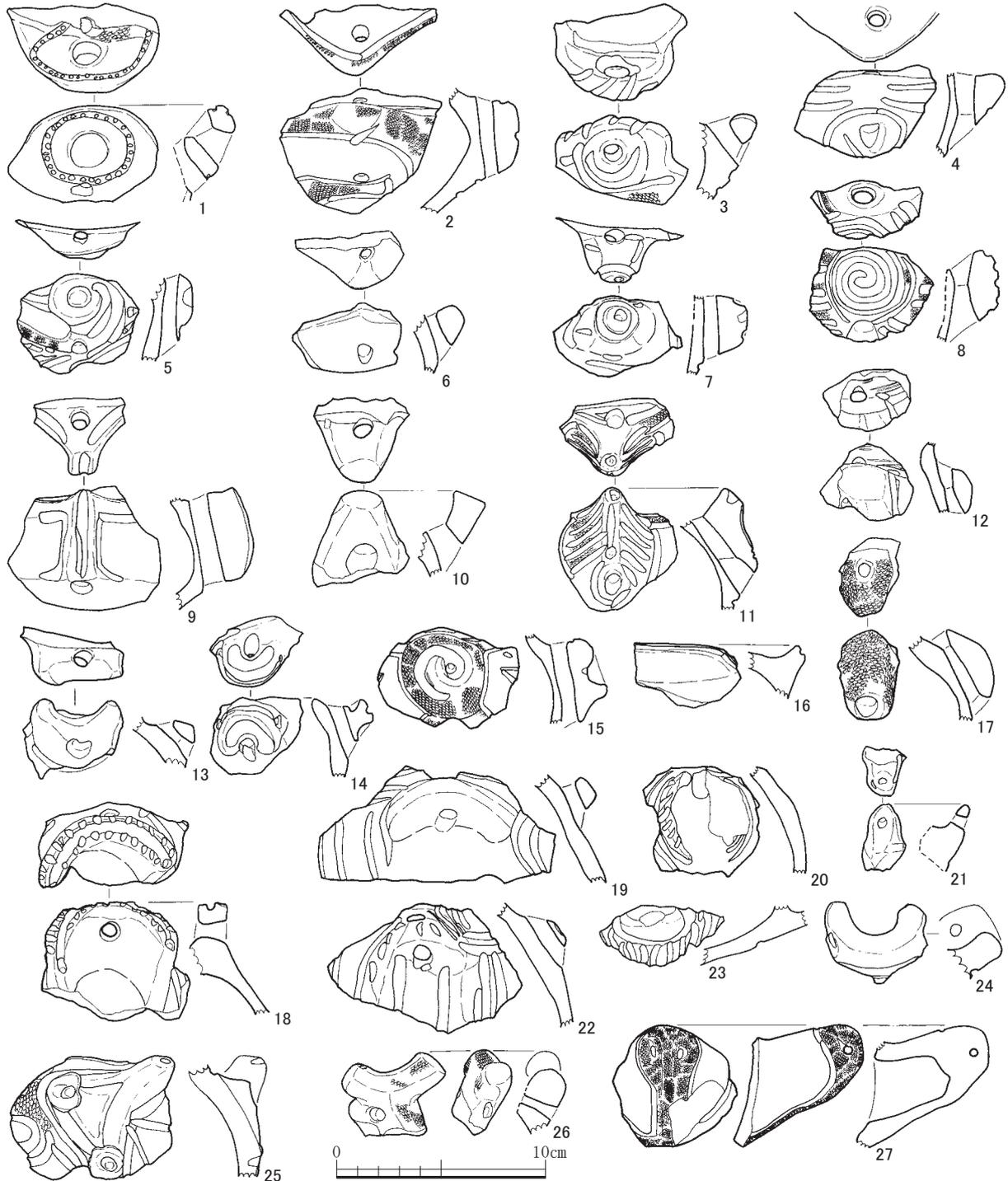
4類 円柱先端を丸く収めた中空把手を施す土器。

1類 (第99図2、第104図1～6、8、9、11、15)

本群土器は双耳把手の上面の形状から、船の舳先状にとがらすもの(A種)、箱状とするもの(B種)、台形状とするもの(C種)に分ける。

A種 (第99図2、第104図1～4、6)

扁球状の壺体部の上縁の対角線上に、上下方向に貫通する小孔を穿つ把手一对を配し、船の舳先状とするも



第104図 注口土器・双耳壺形土器第5群実測図 (縮尺1/3)

のを本種とする。

第99図2はやや扁平な体部からくびれて、内傾して長く伸びて口縁部に至る双耳壺形土器である。体部上縁のくびれ部には一对の渦巻状把手を配し、縦位の貫通孔を穿つ。体部上縁を隆線で画し、両側にやや幅広の沈線を添える。双耳把手に連結させた隆線から、対向する弧状の隆線を下す。

第104図1は半円形の把手を体部上半に施すものであり、把手中央部に大型の円孔を、基部にやや小ぶりの円孔を、縦位に穿つ。外面には大型円孔を囲み、円形に刺突を加えた沈線を廻らせ、内面には小ぶりの円孔から、把手内側に添わせて楕円形の刺突を加えた沈線を廻らせる。2は体部上縁を三角形状に拡張し、厚みのある双耳把手を配す。体部上縁を画す沈線を把手外縁に添わせて配し、くびれ部に貫通する円孔を穿つ。体部には沈線によりJ字状の区画文を突起下に配して縄文LRを充填する。3は浅皿状を呈す口縁部に、半円形の把手を配す双耳壺形土器である。把手外面中央部には貫通する円孔を配し、下縁をやや幅の広い2条の弧状沈線で囲み、下縁沈線を口縁に添わせて伸ばして縄文を施す。内面は橋状把手様に粘土紐を渡し、斜行沈線を加えて撚り紐様に仕上げる。4は体部上縁を三角形状に拡張して双耳把手を配す。把手中央部には貫通する円孔を穿ち、外面では円孔を囲む沈線による円文を施す。把手外縁の屈曲部には、先端で途切れる2条沈線を左右方に引き分け、弧状に切り上がる下縁沈線により半月形の区画文を構成すると見える。6も4に似た形状を呈する小型の双耳壺の把手であり、把手周辺を無文とする。

B種（第104図5、8、12、15）

上下方向に貫通する小孔を穿つ把手一对を体部上縁に配し、把手先端に渦巻文を加えて上面形が台形状となるものを本種とする。

第104図5は上面形を台形状に肥厚させ、体部上縁のくびれ部際に上下方向に貫通する小孔を穿つ。把手上縁には円孔を陥入させる円形貼付文を加え、下縁に幅広のなぞり状沈線を施す。体部には末端に管状刺突を加えた斜行沈線を多重に施す。8は厚みのある把手部を上面形が台形状に肥厚させ、体部上縁のくびれ部際に上下方向に貫通する円孔を穿つ。平坦とした把手端部には渦巻文を配し、側縁より左右方に多重沈線を伸ばす。なお、沈線間には縄文を施す。12は上面形が台形状を呈す小型の把手片であり、体部上縁のくびれ部に上下方向に貫通する円孔を施す。体部屈曲部稜線上から把手を囲む沈線を配す。15は厚みのある把手部を上面形が台形状とする。体部上縁のくびれ部際に上下方向に貫通する小孔を穿つ。把手先端の平坦部には、隆帯による渦巻文を配し、末端に刺突を加えたなぞり状の沈線を添わせる。把手内縁に添う沈線と、体部屈曲部稜線上から渦巻文と円孔に添い下る沈線による区画内に、縄文RLを充填する。なお、体部側縁の空間には、先端が三角形状に尖る沈線区画の一部が見える。

C種（第104図7、9～11）

上下方向に貫通する小孔を穿つ把手一对を体部上縁に配し、把手先端に稜をもたせ、上面形が三角形状となるものを本種とする。

第104図9は把手部を上面三角形状に肥厚させ、中央部に上下方向に貫通する円孔を穿つ。把手外縁に添い沈線1条を引き、厚みのある把手中央の稜線上に沈線1条を垂下させる。把手側縁には矩形の窓枠状区画を沈線により配す。11は把手部を上面三角形状に肥厚させ、体部上端を限る横走沈線を切り、上下方向に貫通する円孔を穿つ。把手中央の稜線上には両端に刺突を加えた沈線を垂下させる。把手基部をU字状に囲む沈線末端を横走させて区画文とする。区画内には中央稜線から左右方に伸びる短沈線を配して縄文を充填する。下端の円孔周囲にはU字状沈線を配す。7は裾広がり的小型の円柱状把手を体部上縁に配し、上下方向に貫通する円孔を穿つ。把手端部には刺突を加えて円文で囲む。把手基部には半円形に沈線を添わせる。10も裾広がり柱状

把手であり、基部に上下方向に貫通する大型の円孔を加えて二股状とする。

2類 (第104図17、21、26)

上下方向に貫通する小孔を穿つ、小ぶりの突起等を加える土器を本類とする。

第104図17は卵状の突起を体部上縁に配す土器と思え、上下に貫通する円孔を穿つ。なお、突起には縄文を施す。21は角状に反る突起片であり、先端部に貫通する小孔を穿つ。なお、片側の側縁に沈線を施す。26は逆ハの字状に円柱を配した双頭突起であり、基部に斜行して上下に貫通する円孔を加えて縄文を施す。

3類 (第104図13、14、16、18～20、22～25)

弧状の鏝状隆帯に上下方向の円孔を加えて把手とする土器を本類とする。本類は鏝状の隆帯を配すもの(A種)と小さな橋状把手を配すもの(B種)に分ける。

A種 (第104図13、14、16、18、20、24)

弧状の鏝状隆帯に上下方向の円孔を加えて把手とする土器を本種とする。

第104図13はU字状の隆帯の中央部に上下に貫通する円孔を穿つ。なお、隆帯下縁に沈線を添わせる。14は上面形が半円形の円盤を屈曲部に配し、中央に上下方向に貫通する円孔を穿つ。把手側縁には両端に刺突を加えた沈線を横走させる。16は体部上縁に半円形の鏝状隆帯を配して把手とするものであり、側縁に沈線1条を横走させている。18は半円形の鏝状隆帯を配し、中央に上下に貫通する円孔を穿つ。把手側面には両端に刺突を加えた沈線を施し、両側に刻み目を施す。なお、把手基部に沈線1条を添わせる。20は斜行する刻み目を施す馬蹄形の鏝状隆帯を配し、中央部に上下に貫通する小孔を穿つ。隆帯側縁には対向する弧状沈線を多重に配す。24はU字状の隆帯を配して把手とし、両方の突起を貫通する横方区の円孔を穿つ。なお、下縁には沈線を添わせている。

B種 (第104図19、22、23、25)

小さな橋状把手を配す土器を本種とする。

第104図19は隆帯を横位に配し、中央部に上下方向に貫通する小孔を穿って橋状に仕上げる。隆帯周縁には2条沈線による横走、垂下、屈曲する沈線を配す。22は隆帯を横位に配して中央部に上下に貫通する円孔を穿つ。把手左縁には弧状沈線を下し、右縁には2条の沈線を横走させて器面を上下に分け、上部に多重扇形文を充填して下部には2条沈線を垂下させる。また、把手下にも沈線2条を垂下させる。23は扁平な体部上端に横方向の貫通孔をもつ橋上把手片を配しており、基部を沈線で囲んで多重沈線を垂下させる。25は三角形を呈す貼付文の先端を伸ばして橋状把手とするものと思え、三角形頂部に刺突を加えて区画内を浅く抉り取る。把手外縁に沈線を添わせるほか、楕円形や三角形の区画文を沈線で引いて縄文を充填する。

4類 (第104図27)

円柱先端を丸く収めた中空把手を施す土器を本類とする。本類は1点のみが出土した。

第104図27は先端部に横方向に貫通する円孔を穿つ。先端部を円形に囲み基部に向かう沈線を、再度左右に分けて基部際を廻らせて区画内に縄文LRを充填する。

第6節 底部

出土した無文深鉢形土器は大きく5群に分け、台付き土器の脚部および底部圧痕を加えた。無文深鉢型土器の各群の内容は次のとおりである。

第1群土器 底部から外反して開く土器。

第2群土器 底部から大きく開く土器。

第3群土器 丸底状の底部から内弯する体部に至る土器。

第4群土器 底部を尖底とする土器。

第5群土器 高台をもつ土器。

第6群土器 台付き土器の脚部。

第7群土器 底部の圧痕。

ア 第1群土器 (第105図、第106図、第107図1、2、4、5)

底部から外反して開く土器を本群とした。本群は底部からの立ち上がり形状から、以下の3類に分ける。

1類 底部から弱く内弯して開く土器。

2類 底部から外反して開く土器。

3類 小さな底部を突出させる土器。

1類 (第105図)

体部から弱く内弯して開く土器を本類とする。

本類土器の体部下半には、縄文を施すものと、素文とするものがある。縄文を施すものには、斜行縄文(2～5、8)を施すものと、条が縦走する縄文(1、6、7、9)を施すものがある。また、底部際まで丁寧に縄文を施すもの(3)もある。なお、底部圧痕は、2本越え、2本潜り、1本送りを基本とするが、無文とするものもある。

2類 (第106図1～12、第107図3)

底部から外反して開く土器を本類とする。

本類土器の体部下半に縄文を施すもの、素文とするもの、条痕を施すもの(第107図3)がある。縄文を施すものには、斜行縄文(1、2、4、5、9)と条が縦走する縄文(8)があり、節の粒が大きいもの(1)も見える。底部形態では、立ち上がり部を外方に張り出すもの(8)や丸く立ち上がるもの(12)も見える。底部圧痕は、2本越え、2本潜り、1本送りを基本とするが、無文のものや木葉文(2)のものもある。

3類 (第106図13～18、第107図1、2、4、5)

小さな底部を突出させる土器を本類とする。

本類土器の体部下半には、素文とする土器のほか、条痕を施す土器がある(第107図1、2、4、5)。なお、底部圧痕は、擦痕状のもの(第106図15)を見る以外、無文とする。

イ 第2群土器 (第107図6～13)

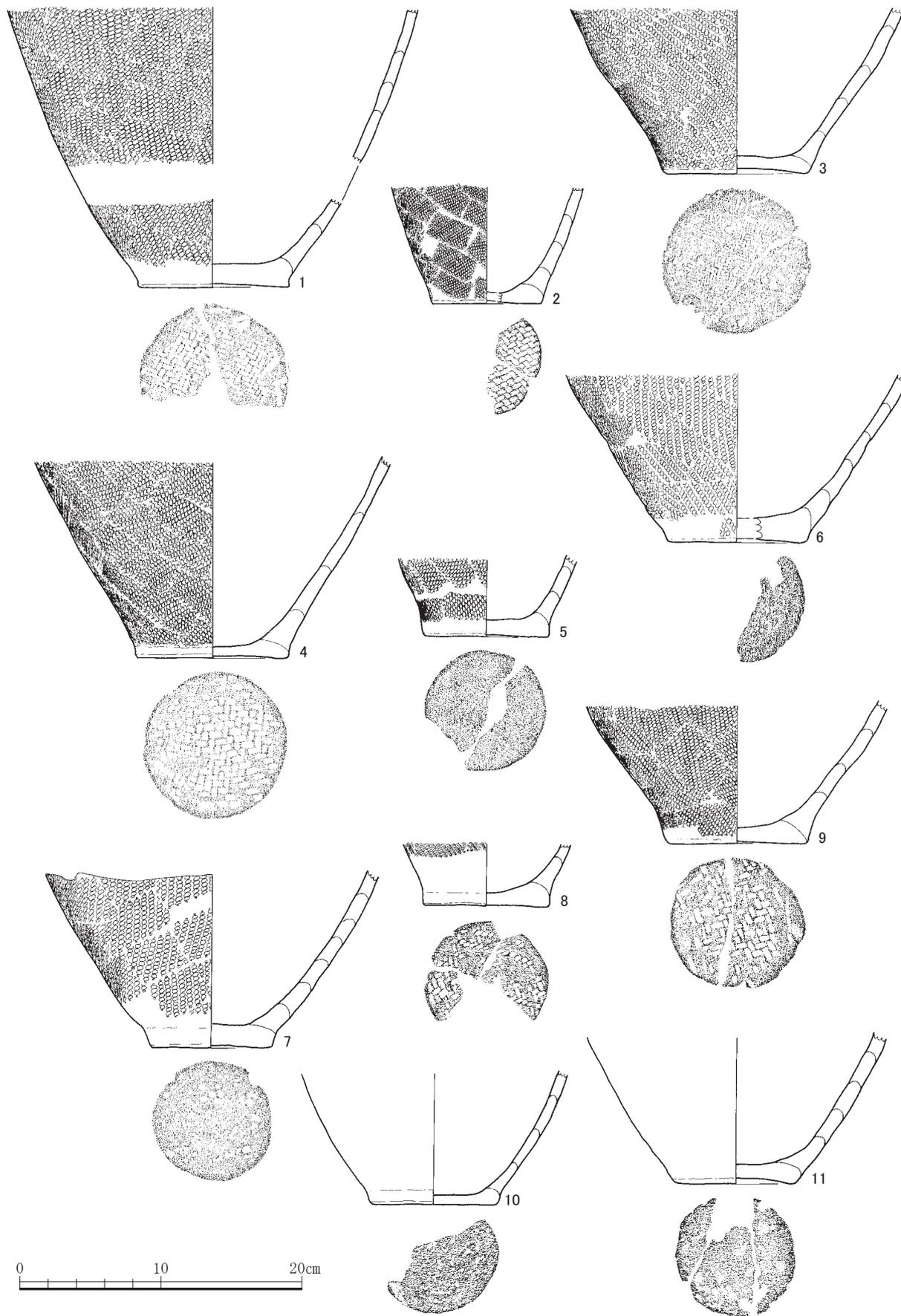
底部から大きく開く土器を本群とする。

体部下半には条痕を施すもの(第107図6)や縄文を施すもの(7)を僅かに見るほかは、素文とするものが大半である。底部圧痕は7で認めるほかは、無文としている。なお、6と13の底部外縁には、粘土を環状に加え低く高台状としている。

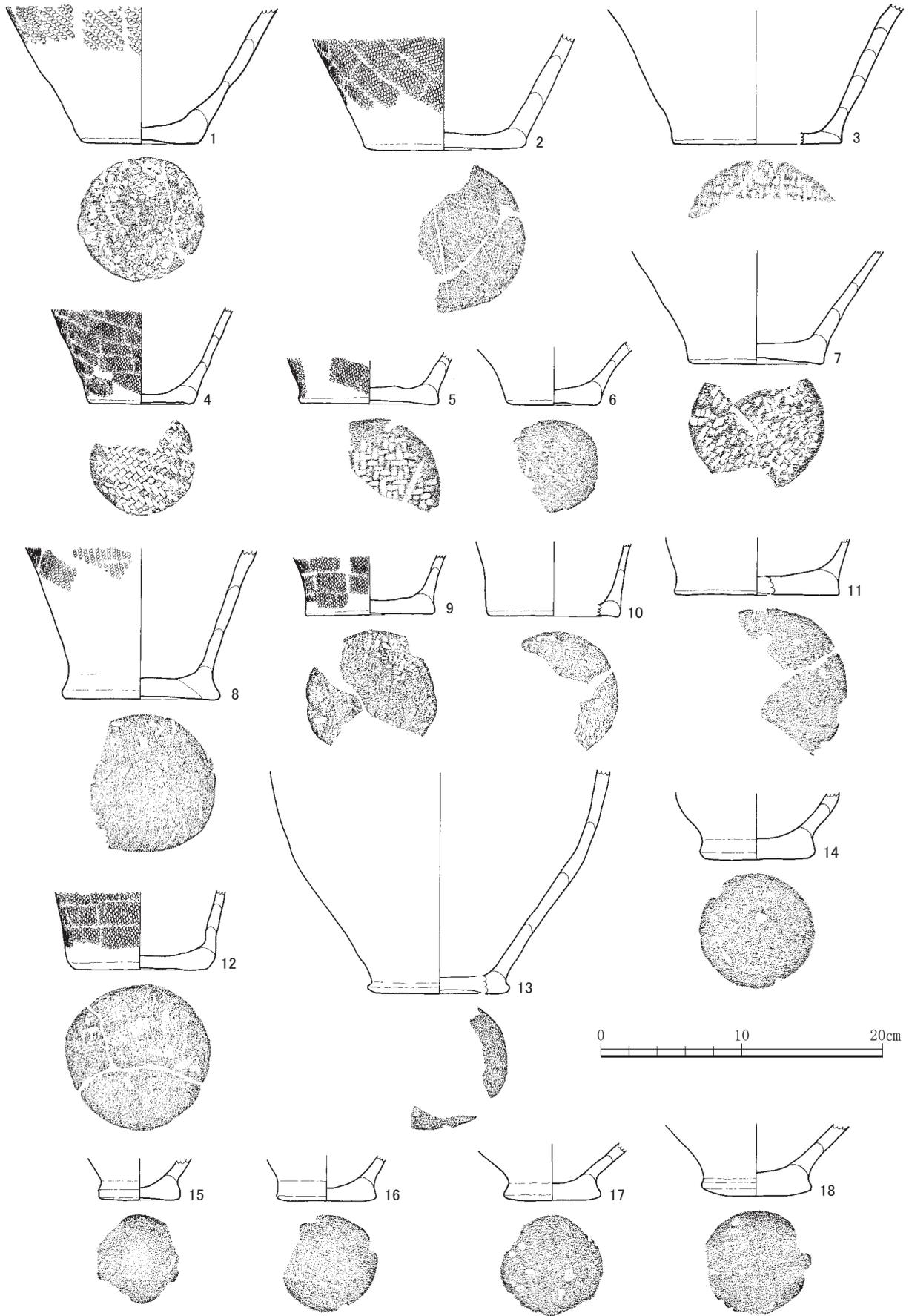
ウ 第3群土器 (第107図14～16、18)

丸底状の底部から内弯する体部に至る土器を本群とする。

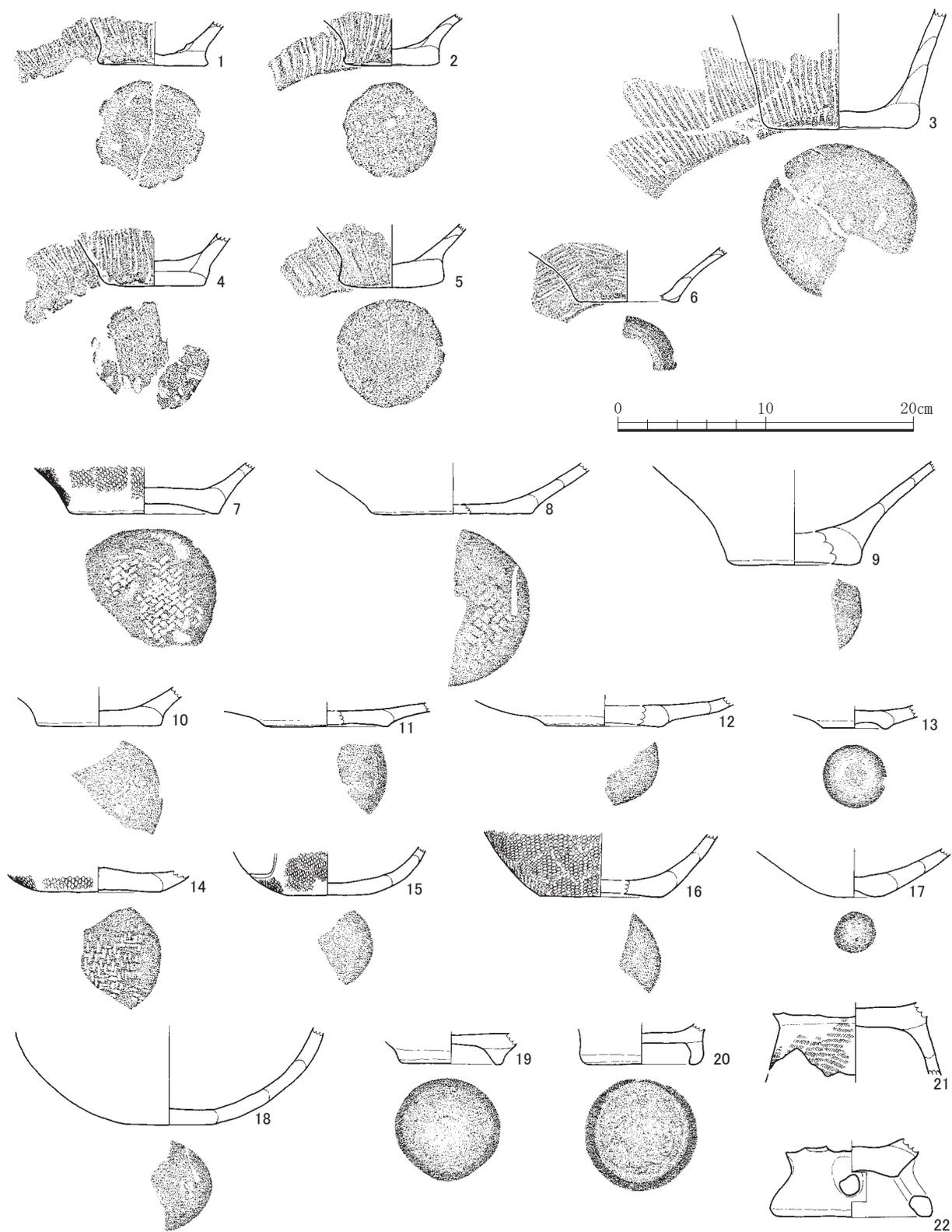
本群土器の体部下半には縄文を施すもの(第107図14～16)と素文とするもの(18)がある。なお、底部圧痕をもつものは少なく、1を見るのみである。



第105図 底部実測図 (縮尺1/4)



第106図 底部実測図 (縮尺1/4)



第107図 底部実測図 (縮尺1/4)

エ 第4群土器 (第109図17)

底部を尖底とする土器を本群とする。

第107図17は、底部を厚く作り中央に円孔を陥入させ、内外面とも素文とする。

オ 第5群土器 (第107図19、20)

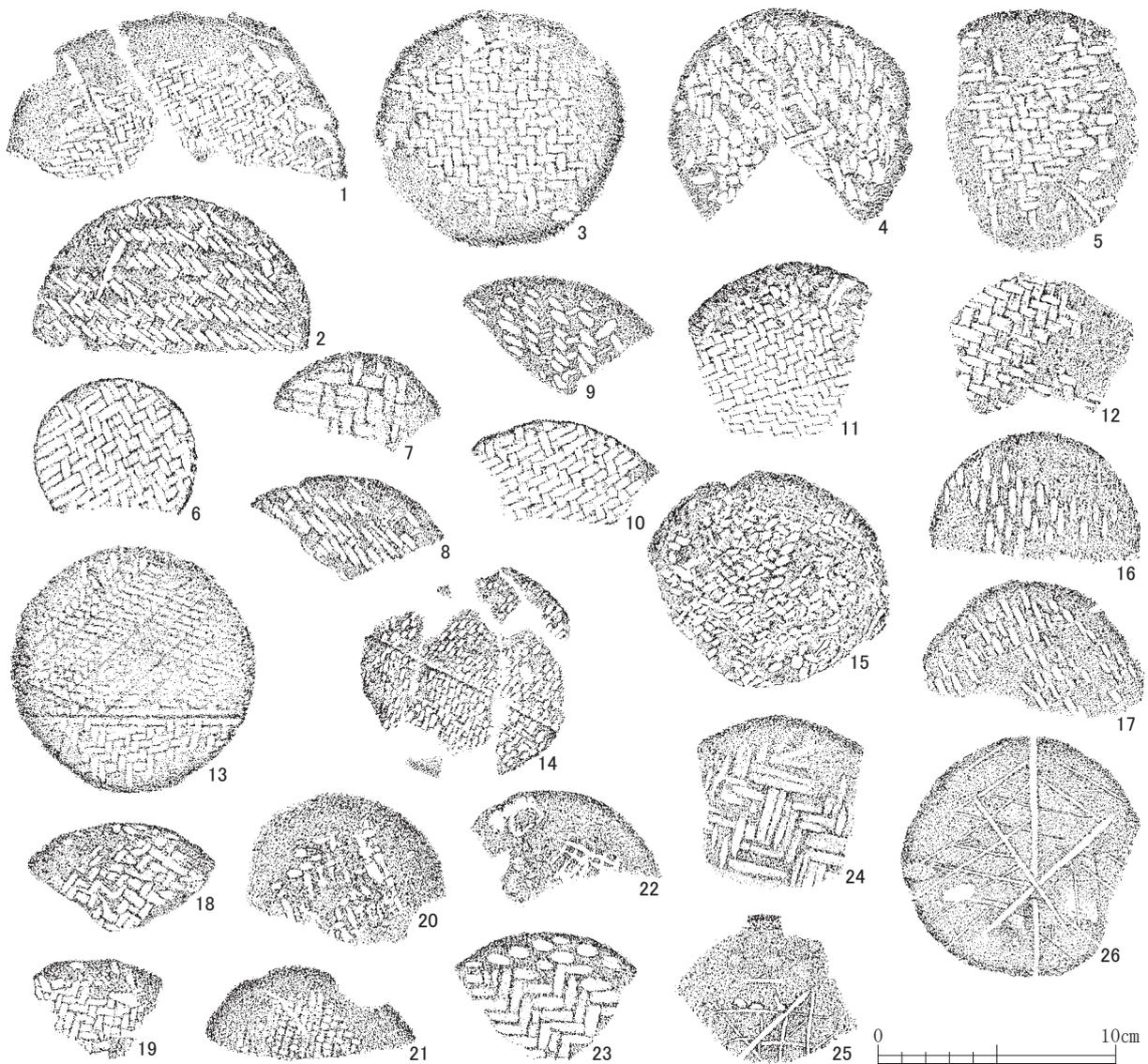
高台をもつ土器を本群とする。

第107図19は断面三角形の高台を底部に加える。高台内部は浅皿状に窪めている。20は板状の粘土を底面に加え、円柱状で高みのある高台とする。畳付状の端部は、外側を削りつま先状としている。なお、底面は平坦である。

カ 第6群土器 (第107図21、22)

台付き土器の脚部を本群とする。

第107図21はやや薄手で円柱状の脚部を、体部底面に加えて外面には無節の縄文Lを施す。22はやや厚手で短く外方に踏ん張る脚部を体部底面に加える。4箇所に円孔を穿ち、透かし孔とする。



第108図 底部圧痕拓影図 (縮尺1/3)

キ 第7群土器 (第108図)

底部圧痕を本群とする。

底部圧痕の編み物は、2本越え、2本潜り、1本送りが大半である。13、14は2枚を繋いでいる。20はすだれ状圧痕と思え、21、22は1本越え、1本潜り、1本送りとする。23は3本越え、3本潜り、1本送りとする。なお、24は文様編みとする。編み物以外では木葉の圧痕がある(25、26)。

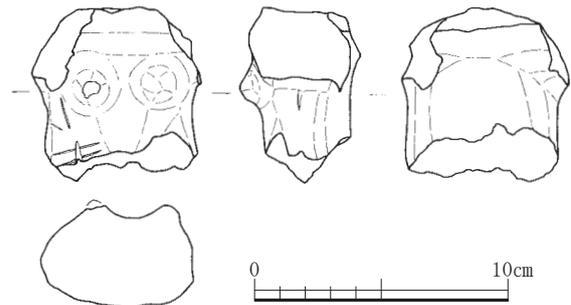
第2章 縄文時代の土製品

波寄三宅田遺跡の調査で出土した縄文時代の土製品には、土偶、土製円板がある。本章では土製品を種別ごとに記述することとする。

第1節 土 偶 (第109図)

土偶は河跡内から1点が出土した。

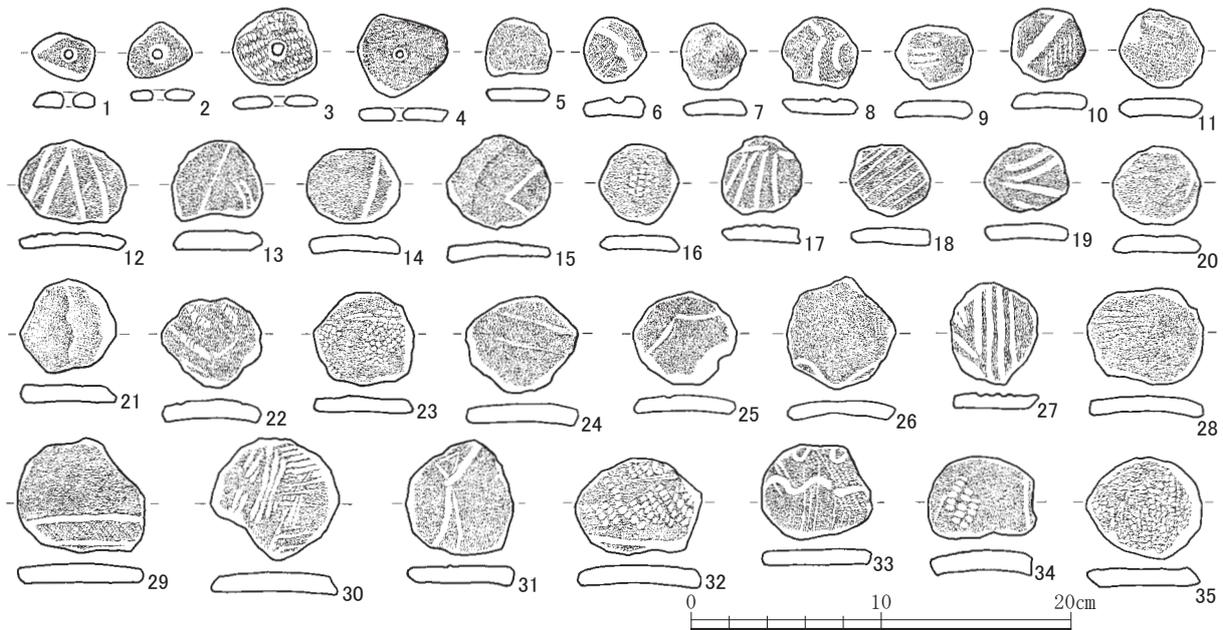
土偶は楕円柱状の胸部のみを残し、頭部、両腕部、胴部下半および脚部を欠失する。乳房を表す円形の突出部を胸部に施す。また、胸部上端は緩くくびれ、頸部を表出する。なお、背面および側面は緩やかに弯曲させ柱状に仕上げている。胸部側縁に沈線を施す箇所が見えるが、意図的な文様かは判断できない。残存部での最大幅6.6cm、最大長6.0cm、最大厚3.6cm（胸部最大厚4.0cm）、重量は179.8gを測る。



第109図 土偶実測図 (縮尺1/3)

第2節 土製円板 (第110図、第1表)

縄文土器の破片を円形に整えたものであり、193点の大部分が河跡内から出土した。所謂「メンコ」に相当し、有孔(第110図1~4)と無孔のものがある。径は最大で7.2cm(第110図35)、最小で2.9cmを測り、重量は最大で44.9g(第110図34)、最小で5.2gを測る。



第110図 土製円板実測図 (縮尺1/3)

第1表 土製円板観察一覧表

番号	出土位置			寸法 (cm, g)				備考
	地区	遺構/区	層位	径	厚さ	重さ	遺存率	
1	8区	川	VI層	4.7	0.7	15.5	3/4	有孔
2	8区	川	VI層	4.5	0.7	13.5	3/4	有孔
3	8区	F 9	包含層5層	3.4	0.6	6.2	2/3	有孔
4	8区	川	VI層	3.3	0.8	6.5	1/2	有孔
5	8区	川	V-2層	3.4	0.7	13.5	3/4	
6	8区	川	V-2層	3.3	1.1	12.1	一部欠	
7	8区	川	V・VI層	3.4	0.8	9.4	3/4	
8	8区	川	VI層	4.0	0.8	12.3	一部欠	
9	8区	川	VI層	4.1	0.9	13.6	3/4	
10	8区	川	VII層	3.9	0.8	14.0	一部欠	
11	8区	SD 1		4.4	1.0	17.0	一部欠	
12	8区	川	VI層	4.6	0.9	20.6	一部欠	
13	8区	川	V-1層	4.5	0.8	14.2	3/4	
14	8区	川	VII層	4.2	0.9	14.5	3/4	
15	8区	川	VI層	4.1	0.8	15.3	一部欠	
16	8区	川	V-2層	4.2	0.7	13.5	一部欠	
17	8区	川	VI層	5.2	1.0	22.4	3/4	
18	8区	川	VI層	4.8	0.8	19.1	3/4	
19	8区	川	V-2層	4.7	1.0	20.6	3/4	
20	8区	川	V-2層	5.6	0.7	18.3	2/3	
21	8区	川	V-2層	5.0	1.0	27.1	一部欠	
22	8区	川	V-2層	5.2	1.0	27.3	3/4	
23	8区	川	V-2層	5.2	0.8	23.3	一部欠	
24	8区	川	VI層	5.9	1.0	34.7	3/4	
25	8区	川	VI層	5.4	0.9	21.7	3/4	
26	8区	川	VI層	6.0	0.8	31.6	3/4	
27	8区	川	VI層	5.5	0.8	22.5	3/4	
28	8区	川	VI層	6.0	0.8	31.5	一部欠	
29	8区	F 9	包含層3層	6.1	1.0	33.7	3/4	
30	8区	川	V-2層	5.6	1.0	34.2	3/4	
31	8区	川	V・VI層	5.9	0.8	26.2	3/4	
32	8区	川	V・VI層	6.6	1.0	40.0	3/4	
33	8区	川	VI層	6.1	1.0	34.1	一部欠	
34	8区	川	VI層	6.7	1.1	44.9	3/4	
35	8区	川	VI層	7.2	1.0	42.9	3/4	

第3章 後期初頭から前葉土器群の検討

第1節 はじめに

第1章において波寄三宅田遺跡出土土器群の分類を行い、有文深鉢形土器を29群に分けた。このうち本遺跡出土土器群の中心は、第11群土器から第28群土器であり、大略して縄文時代後期初頭から前葉の時期に比定できる。

本章では、出土した後期初頭から後期前葉にかけての土器群の型式および変遷階梯について検討することとしたい。既に記した通り、本遺跡出土品は河川跡からの出土であり、層位的に先後を把握することはできず、各土器がもつ器形、文様帯構成、文様構成、文様要素などから、型式差、系統差および変遷の階梯を類推するに止めざるを得ない。

また、検討は本書の性格から波寄三宅田遺跡出土土器群を中心とし、他遺跡出土土器群の取り扱いが必要最小限に止めることとしたい。なお、検討の対象を有文深鉢形土器とした。

第2章の分類では、群を型式に類を系統に相当させることを意図したが、複数の群で型式を表すものや、類が系統差を示すのではなく、文様要素の差を示すに止まっているものもある。ここでは第1章での分類を基本に、周辺各地の編年を念頭に置き検討を進めることとしたい。

第2節 第11群土器の分別と変遷 (第111図)

第11群土器は2条沈線間に縄文を充填して文様を描出する土器であり、関東地方では称名寺式、関西地方では中津式および福田K2式と編年する土器群の一部に相当する。なお、分析・記述に際しては、2016年3月に開催されたシンポジウム「称名寺貝塚と称名寺式土器」での北陸地方の後期初頭の編年観を参考にした。^①

第111図は本遺跡より出土し、第11群土器に分類した主要な土器群および、福井県大野市右近次郎遺跡^②から出土した同時期の資料である。本稿では出土数が比較的多い、中津Ⅱ式期から検討を始めることとする。

第111図に示すように、本遺跡より出土した中津Ⅱ式期の土器群には、

- ・口縁部に配した横走縄文帯を含む口縁部文様と、胴部文様の連繋が保たれた土器群。
- ・口縁部文様と胴部文様の連繋が断たれた土器群。

の二つの系統の存在が推定でき、前者を組列A^④、後者を組列Bとして検討を進めることとしたい。

ア 組列A変遷の検討

組列A 第1段階

3、4、15が当該の土器群である。このうち3は把手側面を拡張し耳朶状とする大型の山形把手4単位を口縁部に配し、把手間にも山形小突起4単位を配している。口縁下を横走する縄文帯の上縁沈線を、把手および突起の側縁で口端部方に切り上げ、口縁部に半円形の区画を残す。波頂下の横走縄文帯下縁沈線を途切らせ、垂下する2条沈線で繋いだ円文および渦巻文を縦位2段に配し、縄文を充填して基軸文様とする。また、突起下でも横走縄文帯下縁沈線を途切らせ、L字状の縄文帯を下している。なお、破片を欠失するが、基軸文様の渦巻文下縁から縄文帯を伸ばし、L字状文下で山形に突出する文様帯下縁区画を配したと考えている。なお、胴部文様の空白部には文様を追加配置し、縄文充填部と空白部のバランスを保っている。

4は貫通する円孔を穿つ山形突起4単位を配し、小円孔を加えたドーナツ状の貼付文を突起間に加えている。

口縁下を横走する縄文帯上縁沈線を、突起・貼付文に添い口縁方に切り上げ、口縁部に区画文を残す。横走縄文帯下縁沈線を突起下および貼付文下で途切らせる。突起下では垂下する2条沈線で繋いだ渦巻文を縦位に2段配し、縄文を充填して基軸文様とする。また、波底部の貼付文下にはL字状の縄文帯を下す。なお、胴部文様帯下縁を画す山形の縄文帯部の破片を欠失するものの、口縁部区画文および基軸文様とする突起下の2段縦位の基軸文様や波底部のL字縄文帯など、3と共通する要素が多く確認でき、同時期、同組列の所産と判断する。

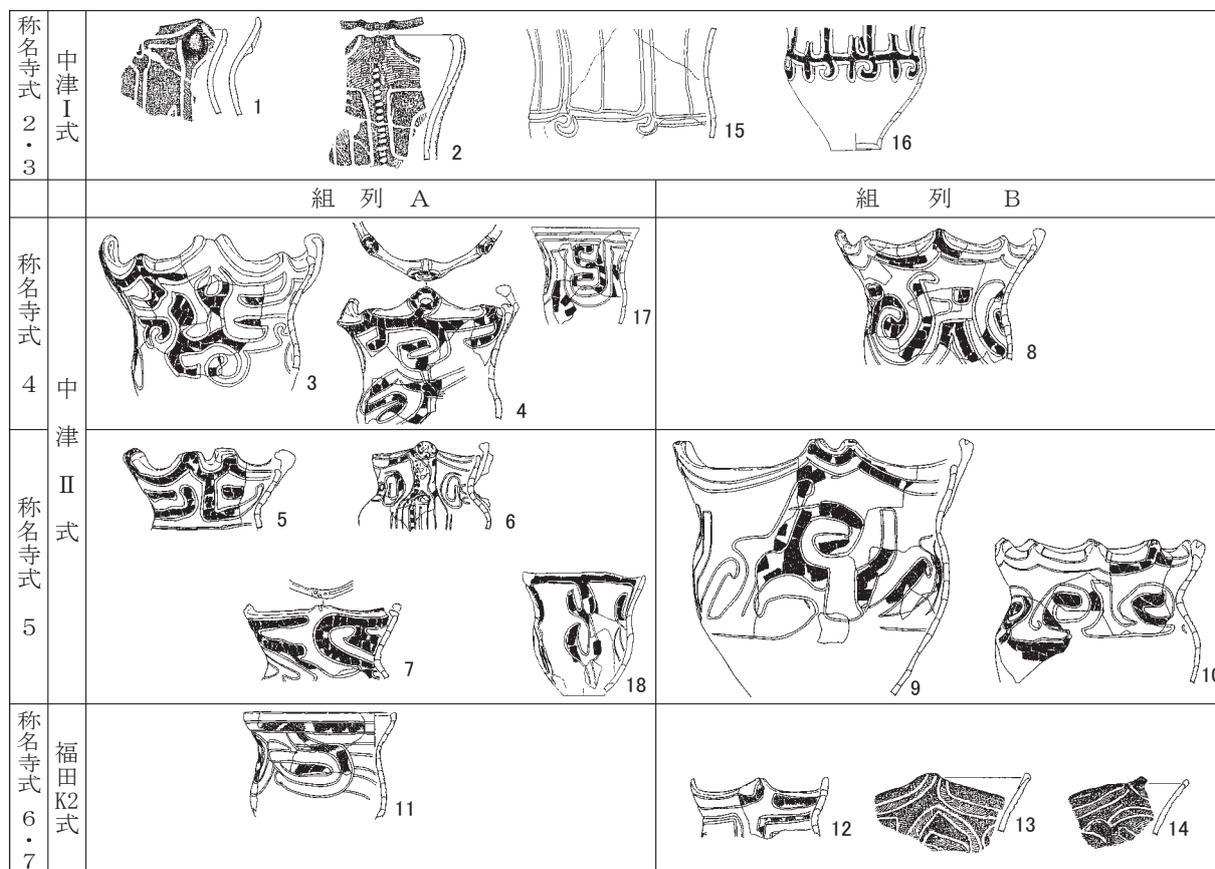
17は右近次郎遺跡出土の平縁の土器であり、口縁下を横走する縄文帯下縁沈線を4箇所途切らせ、2段の渦巻文を縦位に配して基軸文様とする。さらに、基軸文様を取囲むように山形に突出する縄文帯を配している。

本段階の特徴を挙げれば、口縁下の横走縄文帯から2段の基軸文様を下し、文様帯を縦位に分割する点。基軸文様から縄文帯を伸ばして、胴部文様下縁に山形の突出部を配す点。波状縁の土器では口縁部に区画文を残し、波底部にL字状等の縄文帯を下して山形に突出する縄文帯と対峙させる点などが指摘できる。さらに、胴部の文様帯幅が広く、縄文充填部が文様帯内で多くを占める点も留意すべきと考える。

組列A 第2段階

5から7は本遺跡出土、18は右近次郎遺跡出土の土器である。把手、突起を加えた波状縁の土器（5、6）と平縁の土器（7、18）があり、7は口縁部に小突起を加えている。器形は胴部最大径が頸部近くに移り、強くくびれて外反して開く土器が多くなる。なお、18は本組列第1段階の器形に近いが、この点については後述する。

5は双頭の方角突起を口縁部に4単位配した波状縁の土器である。口縁下に縄文帯を口縁波形に合わせて横走させ、突起部では上縁沈線を波頂までU字状に伸ばし、外見上は口縁部に区画文を残すかに見える。口縁部下縁沈線を突起下で途切らせ、横長のL字状の縄文帯を下す。頸部にも横走する縄文帯を配しており、同様の



第111図 第11群土器変遷図（縮尺不同） 15～18右近次郎遺跡 他は本遺跡出土

文様を施すと思える。また、胴部文様の空白部には文様を追加し、空白部と縄文充填部のバランスを保つが、やや白勝ちとなる。

7は平縁の口端部に2個一対の小突起を4単位配し、口縁部を4分割して口端部に沈線1条を、単位文間で交互に配している。口縁下の横走縄文帯は無く、口縁部に半円形の区画文を残さない。突起下でC字状にうねり下る縄文帯は、途中スパー状の文様を加える。文様末端の頸部では、下方へ文様を下す痕跡が残り基軸文様と判断する。また、左右方向に連繋する縄文帯を伸ばす跡も残り、基軸文様を頸部の横走縄文帯で繋ぐものと考えられ、文様帯は上下2段に分けられるものと判断する。

6は大きく張りのある胴部が頸部で強くくびれ、外反する口縁部に至る。口縁部にドーナツ状の貼付文を、突起として2単位加え波状縁とする。口縁部の貼付文と胴肩部は撚り紐状の橋状把手で繋ぐものと思え、上面に刺突文を加えている。口縁部横走縄文帯の上縁沈線を、貼付文に添わせて切り上げ、口縁部に細長い半円形の区画を残す。また、横走縄文帯の下縁沈線を波頂下で途切らせ、垂下する縄文帯を橋状把手両側に下している。なお、把手末端は櫛歯状に縄文帯を下している。頸部の屈曲部には、沈線による楕円文や渦巻文を単独文として配し、縄文を充填している。

18は右近次郎遺跡の出土品であり、器形は組列A第1段階の17に近い。平縁の土器であり、口縁下に引いた横走沈線1条と口端部間を横走縄文帯としている。縄文帯下縁沈線からJ字文を縦位2段に配し、文様末端を閉じずに開放して沈線を垂下させて、基軸文様としている。

組列A第2段階の特徴を挙げれば、胴部の最大径が頸部方に移り、頸部で強くくびれて外反して開くなど、器形面での変化が大きい。また、文様帯では頸部に配した横走縄文帯による、文様の上下2分化と横帯化が顕著となり、第1段階にみられた文様帯下縁から陥入する大型の山形の縄文帯は見えず、文様帯下縁（胴部下縁）の横走縄文帯による連繋についても不明である。また、文様の空白部と縄文充填部のバランスは、白勝ちとなる。

18は胴部文様帯下縁の縄文帯の陥入がない点や、J字文下端を開放する点など、第1段階からは下降する要素が多く、第2段階とした。本例に見えるJ字文の存在は、その形状から関東的色彩が濃いと思え、文様下端の解放も称名寺式後半の土器群との関係を考えさせ、本段階に位置付けることが妥当と考える。なお、6については類例が少なく、今後の資料増加を俟ちたい。

イ 組列B変遷の検討

組列B 第1段階

8は本段階では唯一の復元実測個体であり、類例に乏しい。やや大型の山形突起4単位と小型の山形突起4単位を口縁部に交互に配した波状縁の土器である。やや張りの弱い胴部が頸部でくびれ、大きく開いて口縁部に至る。口縁下を横走する縄文帯上縁沈線を突起部で弧状に切り上げ、口縁部に区画を残す。また、下縁沈線を上縁沈線に添わせて、弧状を呈する縄文帯としている。胴部に配される文様は口縁部横走縄文帯と接せず、大型突起中軸線からずれた位置に、先端を渦巻状に多重に巻いたJ字文を縦位に配している。また、文様帯下限を画す縄文帯も接点をもたず、J字文下縁を通り、大型突起下で大きく山形に文様帯内へ陥入させている。空白部には文様を追加し、空白部と縄文充填部のバランスを保っている。

組列Aの土器群と組列Bの土器を比較すると、器形および口縁部の形状に大きな差はなく、口縁下横走縄文帯による口縁部区画にも変化が見えない。大きく異なるのは以下の点であろう。第一には、口縁下の横走縄文帯と胴部文様が接点をもたない点であり、本型式の成立期から続く、口縁部文様帯と胴部文様帯の連動性が途絶えている。このほか、胴部文様帯および文様帯下縁を区画する、山形に突出する縄文帯の位置の変更がある。大突起

下の中軸線からずれて胴部の基軸文様が配され、代わりに下縁縄文帯の突出部がその位置を占める点がある。なお、縄文施文部については口縁部横走縄文帯下に空白が目立つが、文様帯の施文域には大差はないと感じる。

組列B 第2段階

9は胴部最大径が頸部方に移り、やや肩の張った胴部となり、頸部でくびれて弱く内弯して開き口縁部に至る。口縁部には双頭山形の把手を4単位配し、先端部に円孔を陥入する。口縁下の横走縄文帯を口縁波形に合わせて配し、突起下では沈線1条を加えて縄文施文部をずらし、口縁部に明確な区画を残さない。胴部には渦巻文を中心に斜行文・弧線文等を単沈線で描き、複数の文様を組み合わせた単位文様として4単位を配す。胴部下縁を文様から派生する沈線1条で画している。なお、下縁沈線の施文範囲は概ね単位文様の幅を示すが、完全に胴部下縁を閉ざすには至らない。縄文の充填個所は不規則となり、波頂下では沈線区画をはみ出し、口縁下の縄文帯際まで施文域を拡げている。

10も胴部最大径が頸部方に移動し、肩の張った胴部が頸部で強くくびれ、外反して開き内弯ぎみの口縁部に至る。口唇部は断面三角形状に肥厚させる。口縁部には先端に小孔を陥入する方柱状の山形突起10単位を配す。口縁下に配した横走縄文帯上縁沈線を、突起部で内方に鍵の手に折り、矩形の区画を口縁部に残す。縄文帯下縁沈線は上縁沈線に添わせ、弧状の縄文帯としている。胴部の文様は単沈線で描かれ、渦巻文や撥形文、斜行沈線等を組み合わせて単位文様としている。文様帯下縁は撥形文下縁線を揃えることで、下縁区画に似せている。縄文の施文は不規則となり、文様描出部周辺に施文する形となる。このため、口縁下および胴部下半に広く空白部を生んでいる。なお、胴部文様帯の施文幅は、胴部上半から頸部にかけてまでに狭まる。

組列B第2段階での特徴は、器形面では組列Aの第2段階と同様に、胴部最大径が頸部方に移動し、肩の張った胴部が頸部で強くくびれて、外反して開く点がある。また、口縁部に区画を残さないものも見え、2条沈線を基本とする横走縄文帯に沈線1条を加え、口縁下の縄文施文箇所にずれを生じるものも見える。口縁部文様と胴部文様が接続しないだけでなく、文様描出の基本であった2条一組の沈線の使用が後退し、単沈線による描出とする箇所が増加する点が、最も大きな違いといえる。これに伴い縄文充填の個所や範囲も不規則となる。また、胴部文様体の下縁区画も、沈線1条や文様の一部を利用した、見せかけの区画となる。なお、文様群を単位文様とする手法や、文様帯下端を完全に閉じない点は注意すべき手法と考える。

ウ 中津Ⅱ式に先行・後続する土器群について

1は緩く張りをもつ胴部が頸部でくびれ、内弯気味に開いて口縁部に至る、山形小突起を加えた4単位波状縁の土器である。口縁下の横走縄文帯を小突起下で八の字状に分け、口縁部方に切り上げて半円形の区画とする。縄文帯下縁沈線を波頂下および波底下で途切らせ、波頂下で縄文帯を垂下させて基軸文様とする。波底下では小さなJ字文を加え、下縁より縄文帯を垂下させる。また、基軸文様の中位には突出文を加えている。さらに、波頂下の口縁下横走縄文帯内に、ドーナツ状の貼付文を加えている点は特徴的である。貼付文の位置が縄文帯下縁に移り、沈線区画による縄文帯と変化すれば、3の文様構成に近い。垂下縄文帯下縁の状況が不明であるが、15や16の右近次郎遺跡例を見れば、下縁に小さなJ字文もしくは渦巻文を加えることが考えられる。なお、波頂下の垂下縄文帯が長く、波底下にも小さなJ字文を加えた垂下縄文帯を配し縦位分割を行う点は、3に先行する段階を特徴づけると考える。

2は三つ山状の大型把手を口縁部に配す土器であり、口縁下の横走縄文帯上縁沈線を把手上縁で切り上げ、口縁部に細長い区画を残すと思える。また、下縁沈線を横走させて口縁下に三角形状の縄文帯を配している。把手中央部より隆線1条を垂下させ、口縁下の横走縄文帯の下縁沈線を鍵の手に曲げて隆線に添わせて下して

いる。隆線には口縁部では管状刺突を、胴部では刻み目文を加えている。なお、垂下縄文帯からは左右に伸びる文様を加える。大型の山形把手や基軸文様に垂下隆線を使うなど、Ⅱ式とは異なる縦位方向の文様区画意識が見えるが、1よりは新しい傾向と見える。なお、15、16には中津Ⅰ式中ごろの時期が与えられている。

11は組列Aの福田K2式期の土器であり、やや張りの弱い胴部がくびれて、頸部から内弯気味に開く平縁の土器である。器形的には組列Aの第1段階の器形に似ている。口縁下に横走する縄文帯を配し、切り合いをもちS字状に縄文帯を下す。破片を欠き全体像は不明である。なお、本組列については次項で述べることとしたい。

組列Bの福田K2式期の土器は少なく、縄文帯で文様構成する点や、口縁部文様と胴部文様が接続しない等の点から本時期の土器と判断した。

12は頸部でくびれて内弯気味に弱く開く土器であり、山形小突起を4単位口縁部に配すが、口縁部の幅は狭い。口縁下の横走縄文帯は無く、波頂下で口縁方にL字状に曲げる縄文帯を4単位配している。胴部には口縁部の単位幅に合わせて、方形文を多重に配し縄文を充填しており、口縁部文様との接続はない。

13は外反して開く波状縁の口縁部片であり、器形上での口縁部と胴部の区別はなく、波頂部をやや肥厚させる。口縁部には波頂部に向かう弧状沈線を左右から伸ばし、一方を波頂部に他方を波頂下に曲げて切り上げている。胴部には渦巻状の縄文帯と方形の縄文帯を交互に配すものと見える。口縁部、胴部の文様に接続はない。

14も外反して開く口縁部片であり、口唇部に三角形状の突起を施す。突起を片掛けする弧状の縄文帯を口縁部に配し、他方から突起下まで縄文帯を伸ばしている。口縁下を横走する縄文帯はもたない。胴部文様は縄文を充填する曲線文を配すが、詳細は不明である。

12と9、10の胴部文様を比較した場合、組合せ文様の単位文と単独の単位文に差があるほか、13、14の外反器形とも差が大きい。これらの点から組列Bの福田K2式期も、数段階に分かれるものと思えるが、現状では資料の蓄積がない。なお、本組列については、後に再度触れることとしたい。

エ 小 結

以上のように、本遺跡出土の中津Ⅱ式期土器群には、中津式本体と思える組列Aと、中津Ⅱ式とは系統を異にする組列Bが混在していると判断した。本遺跡の出土品で確認できる組列Aは、中津Ⅰ式期中ごろもしくは末の段階（第2もしくは第3段階）からであり、中津Ⅱ式期終末（第111図7）まで続いて福田K2式期土器群へと引き継がれて行く。

これに対し組列Bは、出土資料で判断する限り、中津Ⅱ式第1段階には分立し、同第2段階では組列Aの文様構成とは大きく相違する土器群に変容している。また、資料的な不足から変遷の段階を十分に追えないものの、福田K2式終末（12）まで変遷を続けるものと考えられ、新たな系統の存在を考えさせる。

北陸地方中枢域^⑤の後期初頭土器群は、富山県小矢部市桜町遺跡^⑥の調査で中津式土器が大量に出土し、これまでの中期土器群を後継する土器群のみでの編年観は、再検討が迫られるものと思える。しかし、中津Ⅱ式に並行する土器群の出土は、同地域全域でみても希少である。本遺跡で確認した組列Bについては、北陸地方中枢域で展開した土器群との比較・検討が必要と思え、今後の資料の増加と研究の深化を俟って再度検討したい。

第3節 第12群、第19群土器の分別と変遷（第112図）

ア 第12群、第19群土器の概要

第12群土器は縄文を充填する2条もしくは3条沈線により文様を描出する土器群であり、文様描線が切り合う特徴をもつ。口縁部文様帯と胴部文様帯は連繫を保つ。口縁部文様帯は縮小し、胴部文様帯は横走する縄文

帯により上下2段に分割され、横方向に展開する文様が主体となる（第112図11）。なお、一部に上下2段の横走文様帯を陥入する縦位の基軸文様を配すものも出現する（第112図3）。関東地方では称名寺式末期、関西地方では福田K2式前半と編年する時期に相当する。

本遺跡出土土器群を分類・検討する中で、第12群土器における口縁部の形態差が、後続する第13群および第19群土器において、分布圏を異にする土器に分岐した指標となるのではと考えた。

第12群土器の口縁部形態には、

- 1、3、5類…口縁部を外方に肥厚させ、口唇部を内方に摘まみ出す土器群。
- 2、4類…肥厚した口縁部を内折・内屈して内面に谷線を残す土器群。

の二つの土器群が確認でき、前者を後継する土器群を第19群土器、後者を後継する土器を第13群土器と分類し、その特徴等を下記の通りとした。

第13群土器…外方に肥厚した口縁部を、内屈・内折して内面に谷線を残す土器群であり、関西地方（山陰地方東部を含む）を主な分布圏とする土器。

第19群土器…口縁部を外方に肥厚させて断面三角形とし、口縁部内面をスロープ状に仕上げる土器群であり、北陸地方西部域および白山麓周辺を主な分布圏とする土器。

特に、白山麓周辺を主な分布域とする第19群土器の文様帯構成の特徴を、口縁部文様帯と胴部文様帯が分離し、

- ・頸部に無文帯を配し、胴部文様帯を縦位の基軸単位文様の連続で構成する土器（組列B1）。
- ・横走する縄文帯で器面を横位分割する土器（組列B2）。
- ・基軸文様と横位分割縄文帯を組み合わせる土器（組列A）。

の大きく三つの組列に分かれて、第12群土器を後継するものと考えた。

各土器群の編年上の位置は、第12群土器は福田K2式期（第1、第2段階）および称名寺式末期（第6、第7段階）に第13群土器および第19群土器は、福田K2式期（第3段階）および関東地方堀之内1式古段階以降に並行する土器群と考えている。

なお、第14群土器については後述するが、近畿地方において北白川上層式1期と編年する土器群に関係する時期と考えている。

分析・記述に際しては、2016年3月に開催されたシンポジウム「称名寺貝塚と称名寺式土器」での関西地方の後期初頭の編年観^⑦と、千葉 豊氏の長年の研究成果^⑧を参考とした。

第12群土器終末の土器群の状況については、既に冒頭で述べた。ここでは、第12群土器終末を特徴づける土器の展開について考えることとする。なお、展開の把握には、第11群土器と同様、組列の把握と変遷階梯の把握により検討を進めることとしたい。

イ 組列B1の変遷について

第19群土器は当地域を分布域の中核とする土器群と考えられ、その祖型は第12群土器終末の土器に求めることが可能と考える。現状では、第12群土器を後継・展開する第19群土器の組列の数は2、3に止まり、組列の全てを明らかにすることは、資料的な限界もあり成し得ていない。また、各組列は空白の段階を含むものも多い。ここでは、第12群土器からの展開が、ほかの組列に比して把握し易い組列B1の展開から検討に入りたい。なお、第11群土器に求められる組列の祖型には、第112図1を組列A、同図2を組列Bにそれぞれ充てている。

組列Bの主系統は14から21であり、これを組列B1とする。これ以外（22～38）は頸部に無文帯を配す土器の類例を集めた。また、組列B2として口縁部、頸部、胴部を横走する縄文帯で画し、器面を横位に3分割す

るものを独立させた。さらに、組列Cとして胴部文様帯に大型の単独文を配すものを置いたが、後継する土器を見だせていない。なお、第11群土器の組列A、Bとの呼称上の関連付けはなく、第11群土器の組列Aを後継し第12群、第19群土器が成立し展開したと考えている。

第12群土器 組列B 1の検討

組列Bの祖型となる第11群土器（第112図2）は、口縁下を横走る縄文帯からL字状の縄文帯を下すものと推定でき、同様の文様を頸部下にも配して、文様が2段の横帯構成を採ると想定している。

福田K 2式は後期初頭並行期で2段階に分かれるが、ここではまとめて説明する。なお、本組列の第1、第2段階の資料を近県に求めたが適当な例がなく、山陰地方の土器群を選択するに至った。地域内の土器群の変遷を考える上では問題があるが、当地における資料の零細さから止むを得ない^⑨。

第114図11は島根県堀部第1遺跡の出土品であり、口縁部の横走縄文帯から波頂下でL字状の文様を下し、先端には巴状の入り組み文を加えている。頸部に配した横走縄文帯は、口縁部のL字状文下で途切れ、先端に巴状の入り組み文を加えた鉤状文で繋いでいる。

12は鳥取県島遺跡^⑩の出土品であり、口縁下に配した横走縄文帯の波頂部からノの字状に縄文帯を下し、波底間を結ぶややための横走縄文帯に繋いでいる。また、波底下の横走縄文帯にもノの字状の縄文帯を下し、波底間を連繋する横走沈線の波底方に先端を伸ばしている。さらに、波底部側の横走沈線下縁からも類似した文様を加え、波頂下の下縁の横走縄文帯には渦巻状の文様を加えている。

この文様構成は、波頂下のノの字状の縄文帯を、11のL字状文の基部に求めれば、上段が右方向を向くL字状文、下段が左方向を向くL字状文と判別できる。すなわち、異方向のL字状文を上下2段に組み合わせて波頂下および波底下に配し、下縁に先端を入り組み状に絡めた鉤状文を陥入させた横走縄文帯を配したものと理解できる。L字状文部が頸部文様帯の位置に、鉤状文部が胴部文様帯の位置に各々配置され、口縁部、頸部、胴部の文様帯構成が再構成されたと考える。なお、口縁部文様帯には口端部に配した半円形の区画が相当する。

13は島根県原田遺跡^⑪の出土品であり、12の頸部文様下縁の横走沈線帯から先端を巴状に入り組ませた鉤状文を下し、左右方向に伸びる横走沈線帯を二重に伸ばして連繋したと理解でき、11が福田K 2式第1段階、12、13が第2段階の所産と判断する。

第19群土器 組列B 1の検討

次に福田K 2式第3段階、堀之内1式古段階に並行する、組列B 1について考えてみたい。

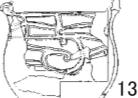
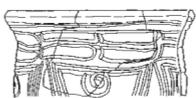
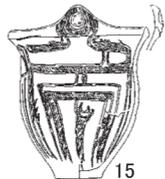
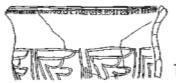
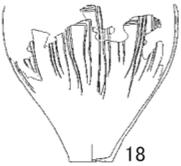
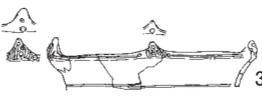
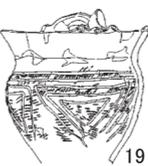
14の土器は頸部に楕円形の区画文を2段に横帯させ、胴部には逆三角形の盾形区画文を配す土器であり、胴部区画文の中心に、小型の渦巻状の入り組み文を加えている。頸部の楕円形区画文の側辺は上下共に、ノの字状を呈しており、12、13と同様に11のL字状文を2段に重ねて配したものを祖型としたと考えられる。また、胴部の渦巻文を加えた逆三角形の区画文も、12、13の文様帯下縁に配した、先端を巴状に入り組ませた鉤状文を、入り組み文を中心に配して円形の鉤状部を分断して三角形に切り分けた文様と理解できる。円形文の下縁を割り、文様下端を開放する三角文への変化は、横帯文様から縦位文様への変化を示すものであり、前段階の口縁部、頸部、胴部の3文様帯分化と相まって、文様帯構成が変革を完了して新たな展開を開始した段階と考えている。

次に頸部および胴部文様の変化について、15を使い検討したい。

15は石川県旧吉野谷村吉野ノミタニ遺跡^⑫出土の土器である。2単位の山形突起を配した土器であり、やや張りのある胴部が頸部でくびれて内弯気味に開き、断面三角形状に外方へ肥厚させた口縁部に至る。口縁部内面はスロープ状を呈し、突起内面はスプーンのつぼ状となる。突起中央には円孔を陥入させ、U字状の沈線で外

周を囲んでいる。外周沈線のうち両側の2条を頸部に下し、一方をL字状に止め、他方はS字状として頸部の横走縄文帯に繋いでいる。また、頸部の横走縄文帯の左端の沈線を口縁方に引き上げると共に、横走縄文帯両端より2条沈線による縄文帯を下し、胴部に逆三角形の盾形区画を描く。区画内には3条沈線による逆三角形の文様を配し、中央に渦巻文を加えて縄文帯を垂下させており、区画の下端は開放としている。また、頸部の横走縄文帯とS字状縄文帯を短沈線2条で繋ぎ、楕円形区画を生んでいる。胴部文様帯では、頸部横走縄文帯下縁と逆三角形の文様をC字状の短沈線2条で繋ぎ、区画内で向き合う白抜きの7字状のモチーフを生じさせている点は注意される。なお、口縁部と胴部の各文様帯には、沈線間に縄文を充填している。

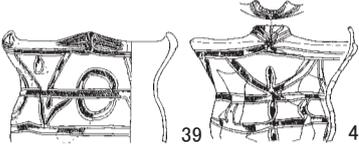
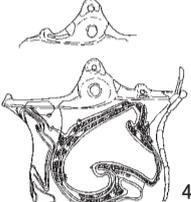
14と15の土器を比較すると、口縁部の形態に類似性が認められ、文様においても沈線や刻み目などの加飾をもたない点が共通している。また、胴部文様でも逆三角形の区画形状に類似が認められる。15が口縁部の単位文と頸部の横走縄文帯との連携により、両文様帯の連動性を残す点や、14で示した福田K2式との連続性などを考え合わせると、14、15の土器は福田K2式を後継する第3段階（堀之内1式古段階）の土器と判断する

			組列 A	組列 B	
第11群土器	称名寺式5	中津II式			
第11群土器	称名寺式6・7	福田K2式1・2			B 1
					
第19群土器	堀之内1式中	福田K2式3			
					
第19群土器	堀之内1式新				
					
第19群土器	堀之内1式古				
					
第19群土器	堀之内1式新				
					

第112図 第12群・第19群土器変遷図（縮尺不同） 3、4五明田 5八尾南 7、20、21、41右近次郎 9三室 10北寺

ことができよう。22、23の吉野ノミタニ遺跡出土の土器も、口縁部に単位文以外の文様をもたず、口縁部形態も類似性が強いことから、同期の土器群と判断できる。なお、胴部の対向する弧線状モチーフ（23）など、本組列における異なる胴部文様の存在も予測させる。

次に、口縁部の加飾について考えておきたい。古段階の口縁部は単位文以外を無文とする例が多い。第19群土器の大半を占める、横走沈線と口縁部下縁外側に刻みをもつ土器との間には、大きな隔たりがある。第112図24から31は口縁部に配した突起部付近の破片であり、口縁下を横走る沈線帯には有無がある。突起部の文様を見ると、逆しの字状や円孔を中心文様とする例が見える。24、28、29は逆しの字状の文様を対向する弧線文で囲み、28は波底に向かい斜行する短沈線を加えている。24は山形突起を配した口縁部片であり、逆しの字状の中心文様の両側を縦位短沈線4条で画している。また、波底寄りの頸部には二重の円文を配し、先端を丸めた横走沈線帯で連繋するものと見える。29は逆しの字状文を組み合わせた単位の単位文であり古段階と考える。また、同様に斜行する短沈線を単位文から派生させる土器も、古手の土器群に含まれるものとする。

		組 列 C	
		B 2	
	 35	 39 40	 42
 28  29  30  31	 36  37	 41	
	 38		

11堀部第1 12島 13原田 15、22、23吉野ノミタニ 18、19塚奥山 35気屋 39小路頃才ノ木 他は本遺跡

26、30は口縁直下に配した沈線を単位文上縁まで引き延ばし、沈線下に短沈線を加える例であり、32から34に見える、単位文側縁で横走沈線を止める例とは異なりを見せる。同様の例は36にも見え、同じく古手の様を示すと思える。25、31は単位文側縁より伸びる短沈線列を沈線で区画する例である。31は波底部での状況を示している。これらの文様は単位文の拡大したものとして、古手の手法と理解している。

次に堀之内1式に並行する、中段階と新段階の土器群を比較・検討したい。まず、胴部文様について検討する。

15で成立した7字状の文様は大きく展開し、7字状の文様を多重に積み重ねたり(16)、並置する(20、21)文様へと展開する。このうち16は、15で存在した外郭の縦位区画文を沈線1、2条で残すが、20では縦位区画沈線が消失し、7字状の文様3個を組み合わせて単位文様を示すように変化する。また、21では7字状の文様を並置するのみとなり、縦位区画文は消失している。なお、地文に縄文を粗く施している。

17では逆三角形の盾形区画間に沈線を下し区画するが、19では区画する沈線を欠いている。17で区画内に残された3条の垂下沈線は、19では1条の蛇行沈線に置き換えられ、区画線を切っている。なお、18は7字状文の下端の状況を示す例であり、下縁を開放して区画をもたない。

口縁部では古段階で成立した単体の単位文から、拡大方向にあった単位文は、横走沈線と口縁部下縁外側の刻みを加えて、口縁部文様として定型化する(16、17、20)。また、中段階では口縁部横走沈線の末端に刺突を加える例(32~34)や、単位文の外側文様に横走沈線を直接繋ぐ例(20)も見えてくる。口縁部形態は、中段階では内面をスローブ状とする形態を残すが、新段階では口縁部の内傾を強くする例(20)がある。肥厚を弱めた例(21)は、中段階と新段階の品があるが、明確には区別できない。

35から38は波状縁の波頂部に縦長の貼付文を配し刻みを加え、外縁に対向する弧線文を添わせる例である。35は石川県旧宇ノ気町気屋遺跡出土品であり、単位文間を口縁波形に合わせた弧状の縄文帯で繋ぎ、頸部に短い弧状の縄文帯を配した福田K2式期の土器である。なお、下縁の縄文帯は横走化しており、頸部と胴部の境かと思える。36は口縁部に配した肥厚する単位文上縁の刺突から、沈線を口縁に添わせて引き分け、沈線下縁に刺突を施す。37は大小二つの山形突起を口縁部に加え、大突起中央に刻みをもつ隆線を垂下させる。口縁部には沈線1条を加え、斜行する短沈線を口縁部下縁との間に引いている。なお、小突起では沈線を突起側縁まで引き上げている。また、頸部と胴部の境は、両端を丸めて途切れる沈線を横走させて画している。38は波頂部付近の破片であり、突起側縁より沈線1条を横走させて口縁部の下縁外側に連続する刻み目を施している。38は口縁部下縁の刻み目や、横走沈線の状況から中段階と思え、36、37は古段階の特徴を保つと考える。

組列B1 変遷の概要

組列B1を概説すれば、中津式終末で頸部と胴部の2段に分化し横帯する文様帯は、福田K2式古段階で中津II式の組列Aの文様帯構成を展開させる。L字状文を配した上段文様と、鉤状文を配した下段文様を再度接合させ、口縁部、頸部、胴部の各文様帯が連繋する土器(11)へと変化する。

福田K2式中段階では、頸部に配したL字状文(上段文様)を多段化させるほか、胴部に配した鉤状文間を連繋する横走縄文(沈線)帯も数を増やす点が特徴と考える。

福田K2式新段階(堀之内1式古段階)では、口縁部文様帯は単位文で構成される文様に変化し、頸部・胴部の文様帯の連携を弱める。また、鉤状文と連繋する横走縄文(沈線)帯で構成する胴部文様帯が、下端を開放する逆三角形の縦位区画文へと変化すると共に、頸部文様帯の無文化が開始される。

堀之内1式中段階には、口縁部文様帯で単位文間を繋ぐ横走沈線と、口縁部下縁外側の刻み目との構成が定型化する。また、頸部の無文帯は幅が広がる。なお、頸部と胴部境の横走沈線の施文には有無がある。胴部を縦位区画する垂下沈線を残存させ、区画内に7字状文や逆三角形文を、多段化・多重化させて施す。

堀之内1式新段階では、口縁部形態が変化して内方への屈曲が強まり、一部内面に浅く谷線を残すものも見える。胴部文様帯では縦位の区画沈線が消え、7字状文を組み合わせて単位文化するほか、沈線による文様の描出が減少する。地文縄文とする土器も出現し、胴部を縄文帯とする堀之内2式期土器群の先行形態かと思える。

ウ 組列B2の変遷について

次に組列B2について考えておきたい。組列B2もB1と同様に、中津Ⅱ式終末の横帯する文様帯を、口縁部と胴部の2段に配する土器からの展開と想定するが、縦位基軸文様を配した組列Aの文様構成の影響は少ない。

40はやや張りのある胴部がくびれて頸部から大きく開き、口縁部を短く内折させる土器である。口縁部に2単位の半筒形の平山形把手を配し、頂部に刻みを施す。外面には垂下沈線1条を基軸に逆ハの字状に沈線3条を施している。口縁下、頸部、胴部下縁に横走する縄文帯を配し、器面を3段に分割する。把手下を大きく空けて、口縁下と頸部の縄文帯を繋ぐ弧状の縄文帯を配し、頸部の縄文帯との接合部には、上方に剣先状の突出文を加え、下方に先端がループ状に交差する剣先状文を加えている。さらに、胴部下縁の縄文帯からも弧状および剣先状の突出文を加えるものと思え、上段と下段に弧線文帯を、中段にC字状の連繫文を配して波頂下に上下方向の突出文を加えた文様構成とすると思える。

39は兵庫県旧関宮町小路頃才ノ木遺跡出土の土器である。やや張りのある胴部が頸部でくびれ、内弯気味に開いて口縁部に至る。口縁部には三角形の山形突起4単位を配し、口縁下の横走縄文帯上縁沈線から伸びる三角形の文様2個を加え縄文を施す。口縁下、頸部、胴部下縁を横走縄文帯で画して器面を3分割する。突起下の頸部横走縄文帯を中軸に円文を加え、左右に雨滴状の突出部を挟むV字状の縄文帯を上、中段に配している。

39、40とも口縁下、頸部、胴部下縁に横走沈線を配し、器面を横方向に3分割する点は共通しており、40に見える中段のC字状の文様が、12、13と同様に先行文様の存在を予測させ、福田K2式の第2段階に位置付け得るものとする。なお、組列B1との差は、横走縄文帯による器面の横位分割にあると考える。

組列B2変遷の概要

本組列の展開は資料が少なく明確ではない。41に示す弱く張った胴部が頸部でくびれ、外反して開き口縁部に至る土器が後継と考える。外反して開く口端部を方角状に仕上げ、口縁下、頸部、胴部下縁に3条沈線による横走沈線帯を配し、器面を横位に3分割している。上段および中段には、斜行方向を交互に変えた3条沈線による鋸歯状の文様を加えている。文様帯下縁の横位分割沈線は、後期前葉土器群の縦位分割の方向および、基軸文様の下端開放する流れからは外れていると思える。本土器の位置を判断することは資料的な制約から困難だが、後期初頭の横帯文様の残影として、堀之内1式の古手の段階に求めておくことが、現状では適切と考えている。

エ 組列Aの変遷について

組列Aは海馬文に代表される縦位基軸文様を配し、口縁部下縁、頸部および胴部下縁に配した横走縄文帯と、その間に加える斜行縄文帯で、縦位基軸文様を連携させて胴部文様帯を構成する土器群である。

第12群土器 組列Aの検討

第112図1の土器は、口端部の2個一対の小突起下を広く空けC字状の縄文帯を口縁下から下し、途中スパード状の突出文を加える。頸部では左右方に横走縄文帯を、下方に基軸文様を下すと見え、福田K2式において盛行する海馬文に似た文様と考えており、中津Ⅱ式の終末に位置づけ得ると考える。

3、4は島根県旧頓原町五明田遺跡出土の土器であり、4単位の波状口縁下に横走沈線を廻らせ、上縁沈線を口縁部方に切り上げ区画文を残す。波底部から斜行する沈線を伸ばし、波頂下で大きく上方に巻き上げて大柄の

海馬文頭部とし、交点より鉤状文を下して海馬文体部を現し、さらに左右方向に連繋する横走縄文帯を伸ばす。

5は大阪府八尾市八尾南遺跡出土品であり、同様の文様を配すが2単位波状縁のためか、波底下での海馬文の展開となるほか、海馬文頂部が口縁下横走沈線と結合する。

6は把手を欠失する口縁部片であり、把手下に大柄の海馬文を配し、文様上端を口縁下横走縄文帯に接合させている。3、4が第1段階に、5、6が第2段階に位置づけられるものとする。

第19群土器 組列Aの検討

7は右近次郎遺跡出土品であり、口縁部形態は15に近似する。4単位波状縁の土器であり波頂部には円孔を穿ち、周囲に対向する弧線文を添えて単位文としている。また、口縁下に2条沈線を横走させ、胴部文様带上縁を画している。波底部からC字状の2条沈線を波頂下に向かって下し、末端から立ち上がり先端を丸める2条沈線を加えて基軸文様とする。基軸文様は波底部に4単位配すと思え、各基軸文様は頸部に配した2条一組の横走沈線二組で繋がれるほか、横走沈線の上下で斜行沈線を加えている。口縁部形態の近似は15の土器との同時性を示し、基軸文様末端の開放も後期前葉の時期を占めることを示すと考える。

8は口縁部を欠く（報告中では第22群として分類）。2条一組の横走沈線で口縁部上縁を画すものと見え、基軸文様として3条一組の弧線文を下し、下端を折り返して文様带上縁で、先端を丸めるものと見える。頸部および胴部中位で2、3条一組の横走沈線で基軸文様間を連繋し、3条一組の斜行沈線を加えている。基軸文様の折り返し状況や、口縁部文様帯の状況は不明であるが、紡錘形の基軸文様モチーフは23にも見え、古手の例と考えている。

9は本県勝山市三室遺跡出土の土器である。口縁部内面がスロープ状を呈する、2単位波状縁の土器と思える。山形突起部に貫通する円孔を加え、上縁に隆線を加え渦巻状に円孔を巻く。口縁部を横走する沈線1条を突起上まで伸ばし、沈線と口端間に斜行する短沈線を加えている。口縁下に沈線1条を配して、胴部文様帯の上縁を画し、突起下からL字状に3条沈線を下して先端を丸めている。L字状文屈曲部から3条一組の弧線文を下し、先端を折り返してL字状文先端に至る紡錘形の文様を基軸文様としている。基軸文様下縁は開放せず、切り合っている。基軸文様は4単位配すと見え、基軸文様間（L字状文とL字につながる弧線文の間）には多重の弧状沈線を充填している。単位文まで伸びる沈線や口縁部に配した短沈線、基軸文様に加えた先端部を丸める手法などが古手の様相を示しており、古段階の所産と思える。なお、基軸文様間に斜行沈線を充填する例は少ない。

10は福井県旧三方町北寺遺跡出土の土器であり、2単位の筒状把手と4単位の山形小突起を口縁部に配す土器である。断面三角形に肥厚させた口縁部に、沈線1条を横走させて口縁部下縁外側に刻みを加えている。筒状把手頂部に刻みを施し、頂部から垂下する刺突を加えた沈線両側に横走短沈線を加えている。また、小突起には小型の円孔を加えている。口縁下には突起下で途切れる沈線3条を横走させる。途切れ部よりS字状に2、3条の沈線を垂下させ、末端を上方に折り返し先端を丸く収め、紡錘形様に仕上げで基軸文様とする。基軸文様の中位および下端に横走沈線帯を配し、紡錘形の文様から対角に伸ばす斜行沈線で基軸文間を連繋させている。

組列A変遷の概要

口縁部文様帯の横走沈線と下縁外側刻みは、組列B1に対比すれば、中段階の特徴である。また、口縁部に配した筒状把手は第12群、第19群土器に通有な形態といえる。7から9と比べて胴部の張りが強い点は後出的な特徴と判断できる。なお、基軸文様の構成は9に近いが、細部ではL字状文に紡錘形の対向する弧線文を配す9と、S字状文に弧線文を加える10とは異なりがある。さらに、口縁下、胴部中位、胴部下縁で基軸文様を連繋する横走沈線や斜行沈線は、福田K2式の2段階に確立する文様である。特に胴部下縁での横走沈線の連携は、文様帯の下端を開放する組列B1と大きく異なっており、時期の判定をさらに困難とするが、文様帯

下縁の状況を重視し、古段階に止めておくこととしたい。なお、現状では組列Aの中段階での変遷を示す例は確認できていない。基軸文様を繋ぐ横走・斜行する沈線帯の配置は、中段階までは下らないのではと考えている。

オ 組列Cについて

組列Cは大柄の単独文様を連繋させて、横帯する文様帯を展開する土器を本組列とするが、類例に乏しい。

42はやや張りのある胴部が頸部から外反して開き、口唇部を弱く内方に摘まみだし、弱く内弯する口縁部に至る土器である。8字形の貫通する円孔を加えた山形大把手と、刺突と短沈線を施した丸山形小突起を組み合わせ一組とし、口縁部に2単位を配すほか、大把手間に刺突を加えた小突起2単位を配す。頸部から胴部までを広く文様帯とし、縄文を充填する3、4条の沈線で、大柄でいびつな楕円文を描き、入り組み文で接合させたコの字状の張り出し部を加えている。なお、隣接する楕円文とは張り出し部で連繋させている。

組列Aや組列Bに見られた、連繋のための横走縄文帯を欠き、張り出し部で接合させる特異な例である。楕円文とコの字状文の接合部に見える入り組み文の類似から、福田K2式の第2段階に位置を与えておきたい。

カ 小 結

以上が本遺跡で把握できた福田K2式および堀之内1式に並行する土器群であり、分布の中心を北陸地方西部域および白山麓周辺に置くと考えている。口縁部内面の形態がスローブ状となる点が最も特徴的であり、この特徴は後述する気屋式の口縁部内面形態に近似している。福田K2式の第2段階での各組列を比較すれば、B1とB2は、器面を横走縄文帯で横位分割する点で共通する。また、AとB1は文様帯下縁の連繋帯に鉤状文を配し、縦位の基軸文様を残す点で共通点が認められる。

第19群土器の組列A、B1、B2のうち出土量が多く最も変遷期間の長いB1が、組列の中心となると考えている。堀之内1式並行期に成立・展開する、口縁部文様帯、頸部無文帯、胴部文様帯（後に胴部縄文帯）の3帯で文様帯構成する土器群の流れは、堀之内2式から加曾利B式へと続き、長く当地土器群の一角を占めて受け継がれて行く。また、資料不足や検討の粗さから確定はできないものの、組列Aと組列B2が堀之内1式中段階以降に長く継続しないと思える点は、福田K2式の成立・展開・終結を含めた位置付けを考える上で、留意が必要と考えている。このように、当地における後期前葉への移行は、第19群土器の組列B1が成立する堀之内1式古段階と考えられ、関東地方などとほぼ同様な時期に、新たな階梯に入ったものと判断している。

第4節 第13群、第14群土器の変遷（第113図）

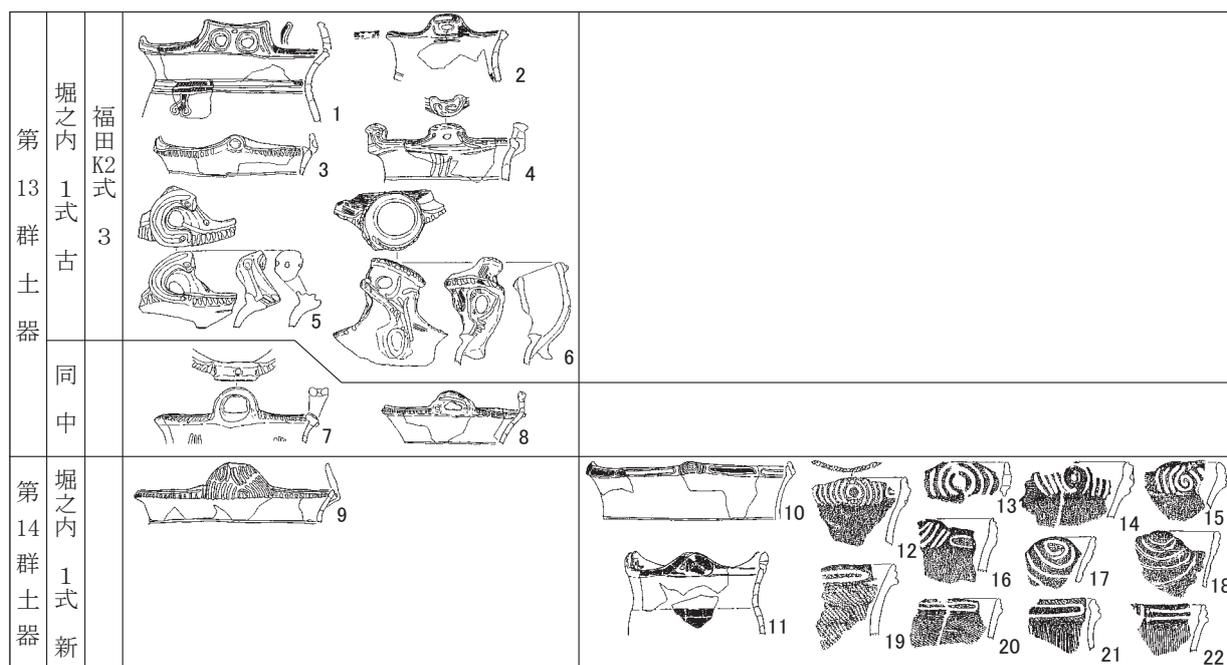
前節で示したように、第13群土器は第19群土器に並行し、関西地方（山陰地方東部を含む）を主な分布域とする土器群と考えて分類した。分類は、胴部文様の展開を把握できる資料の少なさから、口縁部の形態によるものとし、外方に肥厚した口縁部を、内屈・内折して内面に谷線を残す土器群として分別した。第14群土器は、頸部から外反して開き、口縁部を外方に肥厚させて直立気味の口縁部に至る土器であり、口縁部に単位文と楕円形の区画文による文様帯を配す土器と特徴づけた。なお、その編年的位置は、関東地方で編年する堀之内1式の新しい段階頃と考え、関西地方の北白川上層式1期、東海地方に分布する同時期土器群に並行すると判断した。

ア 第13群土器の変遷

第13群土器は、第19群土器がいくつかの組列に分かれたのに対し、ほぼ1つの組列で展開する土器群と考えられ、その変遷は第19群土器の組列の中心であった組列B1の展開に類似する内容となっている。なお、第113

図9に示す土器は、第2章において、口縁部に配した丸山形の板状把手の形状から第14群土器に含めたが、口縁部の形状や横走沈線と口縁部下縁外側の刻み目の特徴から、第13群土器に含むべきと判断するに至り、本節においては第13群土器の変遷の中に位置づけた。第13群土器は胴部文様の全容が把握できる例はなく、口縁部および頸部下縁までの特徴による変遷の把握となった。

第113図1は張りのある胴部から頸部が外反して開き、口縁部を短く内折する土器である。口縁部には一対の円孔を穿った、内弯する方形板状の把手2単位を配すと思え、把手間に浅く円孔を加えた山形突起一対を加える。把手側面から沈線1条を口縁部に横走させ、突起側縁で刺突を加えて止めている。沈線と口縁部下縁外側間には縄文を充填している。口縁下には沈線1条を横走させ、頸部に配した縄文を充填する3条の横走沈線の間を、広く無文帯としている。頸部横走沈線下縁には、スぺード状の突出文を加え、縄文を充填する。突出文の位置や形状には、第112図23との類似が認められ、本資料も突出文下に垂下する縄文帯を配す可能性がある。把手側面まで沈線を伸ばす点や、沈線と口縁部下縁外側間に縄文を充填する手法を見れば、福田K2式第3段階に位置づけ得るものと判断している。2は口縁部を内方に肥厚させ断面三角形として端部に面をもたせる。口縁部には中央に貫通する円孔を加えた丸山形の把手一対を配し、把手間に小突起一対を配す。円孔上の把手頂部には楕円形文を、円孔下にはU字状文と横走沈線各1条を配している。把手側面から沈線2条を口縁に引き、小突起部で先端に刺突を加えて止めて単位文としている。2条沈線間および把手区画文内には縄文を充填する。頸部下縁に斜行する縄文帯を見るが、文様の詳細は不明である。なお、頸部は広く無文帯としている。1と同様に、把手側面から下す沈線や沈線間への縄文充填を区画沈線内への短沈線充填の置き換えと見れば、同様の段階に位置づけ得るものと考えられる。3は頸部から外反して開き口縁部を内折させる山形波状縁の土器であり、内面に弱く屈曲に伴う谷線を残す。波頂部外面を肥厚させて円孔を施す。円孔側縁の肥厚部を弧状に囲む沈線を口縁部に伸ばし、口縁部下縁外側との間に縦位短沈線を施している。頸部と胴部の境に沈線1条を横走させ、頸部をやや幅の狭い無文帯とする。4は直立気味の頸部が弱く開き内折する口縁部に至る土器であり、4単位の半筒状把手を口縁部に配している。なお、頸部の立ち上がりは2に近い。把手中央部に円孔を穿ち、頂部にはC字状の板状粘土を貼付して面をもたせ、先端を丸めた沈線2条を施す。把手外面には、円孔を囲む沈線を三角形に配し、沈線末端に



第113図 第13群・第14群土器変遷図 (縮尺不同) すべて本遺跡出土

は刺突を加える。また、把手側面から口縁部を横走する沈線1条を隣接の把手側縁まで引き延ばし、末端に刺突を加える。口縁下および頸部に沈線各1条を横走させ、把手下の頸部に沈線3条を下している。

5は三角形を呈する大型の把手であり、頸部の無文部外面には刷毛目状の調整痕を残す。把手中央に大きく円孔を穿ち、正面にC字状の隆帯を加えて両端に刺突を加えたC字状の沈線を施す。また、隆帯内側に沈線を添わせ、先端を口縁部下縁外側の刻み目に繋げている。把手左側面より、末端刺突を加えた沈線1条を口縁部に引き延ばし、口縁部下縁外側のやや長めの丁寧な短沈線状の刻み目に繋げている。6は中空の大型柱状把手であり、正面および側面に貫通する円孔を各々1個配すほか、把手内面基部をアーチ状とし、柱状部と繋いで中空に仕上げる。把手上面に面をもたせ、側縁に刻みを施す隆帯を螺旋状に下し、把手正面に配した窪みのある楕円形貼付文に繋いでいる。把手側面の円孔を囲む沈線を口縁部に伸ばし、口縁部下縁外側に刻みを施す。なお、内面および外面の一部には刷毛目状の調整痕を残す。

これらの土器群は、既に記した通り、把手に繋がる沈線を口縁部に引き伸ばしており、第13群土器組列B1の特徴で言えば、福田K2式第3段階に位置づけ得るものと判断する。なお、口縁部の縄文充填も同様の段階で確認できるが、第13群土器の組列B1と比べれば、より福田K2式2段階に近く見える。これに対し、頸部の無文帯幅が広い点は注意され、組列B1とは別の変遷で無文帯を獲得した可能性を残す。把手は大型の品が目立つ。また、5、6は刷毛目状の調整痕から、山陰方面東部との関連が窺える。なお、6の口縁部下縁外側刻みは5に比べ粗く、本段階でも比較的新しいものかと思える。また、5の把手中央に配した隆帯上に、末端に刺突を加えたC字状の沈線を施す手法は、称名寺式末から堀之内1式古段階の土器に見える文様との関連が考えられる。

次に堀之内1式中段階頃に並行する土器群について検討する。7は外反して開く頸部を内屈して口縁部に至る。口縁部内面には、内屈に伴う谷線を強く残す。口縁部には輪状の把手を2単位配すと思え、正面に大きく窓状の円孔を空けている。把手側縁から口縁部を横走する沈線1条を施し、口縁部下縁外側に刻みを施す。なお、口縁部文様帯は上面文様に近く、把手際で横走沈線を内方に切り上げる点は、帯縄文土器群の突起周辺での文様処理を思わせ、注意が必要かもしれない。頸部と胴部の境を横走沈線で画すことなく、3条一組の垂下沈線を把手下からずらして引いている。8は頸部から外反して開き、口縁部を直立気味に折る。7と同様に口縁部に輪状の把手2単位を配すかと思える。中央の孔は崩れ略三角形となり、上縁に沈線1条を引き、基部に円形刺突を加える。把手基部から口縁部を横走する沈線を引き、口縁部下縁外側に刻みを施す。頸部と胴部の境に沈線1条を横走させ、頸部を広く無文とする。

7に見える頸部と胴部の境を沈線で画すことなく突如胴部文様の垂下沈線を引く手法は、当地の土器群（第19群土器）ではあまり目にしない手法であり、山陰地方を含む関西地方の同期土器群に見える特徴と思える。

最後に堀之内1式新段階の土器について考えておきたい。本段階の土器は類例に乏しく、1点を提示するに過ぎない。9は頸部から外反して開き、外方に肥厚し断面三角形とした口縁部を内傾させ、端部に面をもたせ文様帯とする。なお、口縁部内面の谷線は認められない。口縁部には丸山形の板状把手を2単位配すかと思え、内傾が特徴的なほか、把手下縁を下方にやや強く張り出させる。把手中央下縁に小型の渦巻文を配し、これを取囲むように多重の扇形文を4単位に分割して施す。口縁部には沈線1条を横走させ、口縁部下縁外側に施した浅く疎らな刻み目で、幅の狭い口縁部文様帯とする。頸部と胴部の境に沈線1条を横走させ、頸部を無文帯とする。

口縁部を内傾する点は、第19群土器の口縁部形態に近い。口縁部下縁外側に施す刻み目は浅く散漫であり、衰退の方向を示していると思える。

第13群土器を、関西地方（山陰地方東部を含む）に分布の中心をもつ土器群と位置づけて分類を行った。土器群の一部に見える刷毛目状の調整痕はこれを裏付けており、堀之内1式の各期を通じて、継続的な交流が保

たれていたことを示している。また、頸部を無文帯とする土器は山陰地方においても主軸を構成する土器群と見え、当地土器群の組列の中心が同様の文様帯構成をもつことは、その親縁性の高さを示すものであろう。なお、第19群土器と同様に、その成立が堀之内1式古段階にあることは、注意が必要であらう。

イ 第14群土器について

第14群土器は張りの弱い胴部が頸部でくびれ、外反して開き断面三角形もしくは面的に肥厚する口縁部に至る土器である。口縁部には円文や渦巻文を中心に、対向する弧線文や同心円文を周囲に配した単位文および、楕円形の区画文を配す土器である。頸部と胴部の境を横走沈線1条で画し、口縁部、頸部、胴部の3文様帯構成を採るものと、口縁部と胴部の2文様帯構成とするものがある。なお、頸部文様帯は通例無文帯とする。

第113図10は頸部から外反して開き、口縁部を弱く肥厚させて内折し、4単位の小突起を加えて小波状縁を呈する。波頂下には刺突文を中心に、円文および対向する弧線文を周囲に配し単位文とする。単位文間には楕円文2単位を配して口縁部文様帯とする。なお、頸部と胴部の境に横走沈線1条を配して頸部を無文帯とする。12、13は10と同様に口縁部を小波状縁とする土器である。14から16は単位文が口縁から低く張り出し、17、18は口縁部から、円文や弧状沈線による単位文を丸山形に突出させている。15の頸部下縁に縄文の施文を見るが、多くは頸部を無文とする。19から20は口縁部に配した文様の例であり、楕円文や口縁下を横走る2条沈線末端に刺突を加え単位文とする土器があり、頸部以下には縄文や縦位の条線文を施している。口縁部における波頂下の単位文と、単位文の突出は、時間差を示す可能性をもつが確定はできない。

以上の土器について、近畿地方および東海地方では北白川上層式1期および堀之内1式末の時期を与えている。なお、口縁部文様帯に配された楕円文の成立を、第13群土器および第19群土器に求めることは困難に思え、別の系統からの展開を想定する必要があると考える。11に示した土器は頸部と胴部の境に弱く段をもたせており、山陰方面の堀之内1式終末の土器との関係を考えているが、口縁部に配した文様には違いが大きい。

第5節 第15群から第17群土器について（第114図、第115図）

第16群土器と第17群土器は、関東で編年される堀之内2式から加曾利B1、2式に並行する土器群であり、第15群土器は堀之内2式並行期に当地を含む地域で展開した土器群と考える。これら土器群については、福井県永平寺町鳴鹿手島遺跡^②の報告で、その系統および変遷について検討したが、その後当地において新たな資料の蓄積は進んでいない。ここでは、鳴鹿手島遺跡での検討を基礎に、各群の内容について再度触れることとしたい。

ア 第16群土器の分別と変遷

第16群土器は、鳴鹿手島遺跡の報告での第5群から第7群土器に相当する。第114図11や16など2、3条沈線の描線間に縄文を充填し、弧線状のモチーフを多用する土器群を「弧線文系土器群」と仮称した。また、これ以外の2、3条沈線で幾何学文を描く土器群を「鋸歯文系土器群」とし、その対比の中で系統差と変遷について検討を行い、弧線文系土器群を東海方面と鋸歯文系土器群を関東方面（もしくは土器群を受容した関西からの再流入）と位置付けた。ここではまず「弧線文系土器群」に相当する、第114図11、15、17について見ておきたい。11は岐阜県旧徳山村塚奥山遺跡出土の土器である。体部下半で強く屈曲して立ち上がり、外反して開いて口端部に至る土器であり、口端部を短く内方に折り内面に沈線1条を廻らせている。体部下半の屈曲部と口縁下までを広く口辺部文様帯とし、横走る2条沈線による縄文帯により文様帯の上下を画し、沈線による菱形文と三角文を組み合わせ文様を描いて縄文を充填する。菱形文を取り巻く三角文の斜辺を弧状としており、

弧線文成立の状況を示すと考える。器形および文様帯幅および構成から、堀之内2式古段階の土器と考える。

17はやや張りのある胴部が頸部でくびれて、外反して開き口端部に至る土器である。4単位の山形波状縁を呈する口辺部内面には、波頂下でS字状に下る沈線1条を廻らせ、口端部との間に縄文を施す。口辺部に間隔を空けて縄文を充填する2条沈線を配し、文様帯の上下を画している。横帯する文様帯には、斜行する2条沈線先端を丸めた入り組み状の渦巻文を加え、隣接する文様と連繋させて横位に連続展開させている。また、斜行沈線と横走する文様帯上下限区画帯との間に、変形の三角形の撥形文様を加えており、沈線帯間には縄文を充填している。撥形文は弧線文と関連して成立する区画文である。器形および撥形文の形状、渦巻文の状況から中段階でも古手の土器と考えている。なお、15は文様の組み合わせが把握できないが、弧線文を連続横走させており、中段階から新段階の時期と判断する。弧線文系土器群で古段階に上る可能性のある土器の出土はこれまで少なく、系統の成立を考える上で重要であろう。

さて、次に「鋸歯文系土器群」と仮称した土器群について検討したい。なお、多条沈線で構成することを基本とする、本群中には12、13に見るように2条沈線による帯縄文で文様構成する土器があり、より関東的色彩の強い土器として分別すべきかもしれないが、ここでは一括して取扱うこととする。

第114図1は11の器形に類似し、口縁部を弱く面的に肥厚させた、4単位の山形波状縁の土器である。体部下半の屈曲部に横走沈線1条を廻らせ文様帯下縁を画すが、上縁を画す沈線はなく口縁部の肥厚帯をそれに代えている。3条一組の沈線帯で菱形文と三角文を組み合わせた文様を描き、口辺部文様帯としている。なお、縄文の充填は不規則である。11と同様古段階と判断する。2、3、6は同一個体であり、口縁下に刻みを加えた細めの紐線を、内面にはやや幅広のなぞり状沈線を、各々1条横走させている。口辺部には2条沈線により、菱形文と三角文を組み合わせた文様を描き、沈線間には縄文を、菱形文内には多量の斜行沈線を充填している。なお、4は三角文と菱形文内に多条沈線を充填している。5は外反する口端部に縄文を施し、口辺部には沈線1条で鋸歯状の山形文を加え、多重の三角文を充填している。7から9は多条沈線で菱形文や三角文を施すが、8の菱形文中央には、2条の横走沈線を施している。なお、5、7から9に縄文の充填はない。全体として古段階と考えるが、特に5、7から9の多条沈線で文様構成する土器は古相と考えている。

12は2波状の比較的小型の土器であり、波頂部上端を楕円形に整えて3条の短沈線を施す。内面には幅の広いなぞり状の沈線1条を、口縁波形に添い横走させている。外面の口縁下には刻みを加えた紐線1条を廻らせ、波頂下および波底下に8字状の貼付文を加えている。口辺部文様帯上下を2条一組の沈線による横走縄文帯で画し、文様帯内に両端を渦巻させる斜行沈線による縄文帯を配している。13も内面に幅広のなぞり状の沈線1条を廻らせ、口縁下には8字状貼付文を加えた紐線1条を横走させる。口縁下を横走し文様帯上縁を画す2条沈線による縄文帯を、貼付文下で皿状に窪めて、同所より斜行沈線による縄文帯を下している。14は口端部を短く内方に折り、内面にやや幅の広いなぞり状の沈線1条を廻らせる。口縁下には刻みを施す紐線1条を廻らせ、沈線1条で文様帯上限を画し、沈線下に三角文を配して縄文を充填する。16は口縁部下縁を画す横走縄文帯から斜行する縄文帯を伸ばして途中から渦巻文を派生させると考え、渦巻文の下縁から垂下する2条沈線を下している。12、14は中段階の土器と判断する。13の紐線は太めで、施す刻みも粗いなど新しい特徴が見え、16の斜行縄文帯から派生する渦巻や垂下沈線も新しい要素と思える。

18は口縁部の突起が内面文様の一部となる土器であり、内面を肥厚させて下縁になぞり状の沈線1条を廻らせる。口縁下を横走する紐線両側に沈線を加えて口辺部文様帯上縁区画とし、横走する2条沈線で文様帯下縁を画している。文様帯内には斜行沈線1条の両端を丸めて、隣接する沈線と絡め大柄の三角文を描く。また、斜行沈線両側に沈線1条を加えて三角文を付加している。文様帯幅は概して狭い。19は山形波状縁下に刺突を加えた紐

線1条を垂下させ、口縁下を横走する3条の紐線を繋いでいる。なお、内面の波頂下に円形刺突を加え、沈線を左右に分けている。20は口縁部に突起を配し、突起側面を廻る沈線文様を加える。口縁下に間隔を空け、刺突を加えた紐線1条を横走させ、下縁に沈線を添わせる。なお、内面には沈線を施さない。21は口縁下に刺突列1条を横走させ、2条沈線による幅の狭い縄文帯で文様帯上限を画し、斜行沈線や渦巻文を組み合わせた文様を口縁部に配している。22は弱く外反する口縁部に、刻みを加えた紐線2条を横走させ、垂下する紐線で繋いでいる。また、口縁部内面にはやや幅広の沈線1条を横走させる。口辺部上縁を横走する沈線1条で画し、文様帯内に3条沈線による鋸歯文を配して縄文を充填している。内面文様の盛行や口縁部に配した紐線の条数の増加、紐線の太さが増す点のほか、紐線上加える刺突の形状などが、新しい段階を示すと思える。また、21は口辺部文様帯の定型的な文様から大きく外れ、口縁下の刺突列を含めて第17群への移行を示すものと思える。

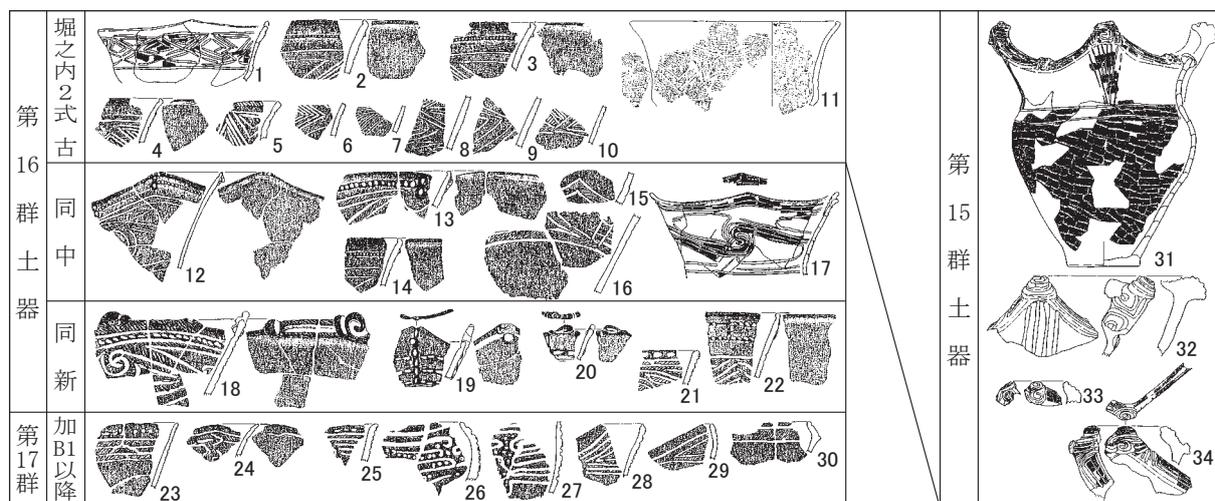
イ 第17群土器の変遷について

第114図23から25は、鳴鹿手島遺跡での第7群土器に相当し、26から29は第10群土器に相当する。

23は外反する朝顔形器形の土器であり、口縁下に刺突列1条を配し、口辺部文様帯を構成する縄文充填の3条沈線を横走させる。22も小波状口縁を呈し、外反して開く朝顔形の器形の土器である。口縁部内面には細い沈線1条を配す。外面には沈線1条で文様帯上縁を画し、横走する沈線帯を2条の蛇行沈線で区切り、縄文を充填する。25は外反する口辺部を持つ朝顔形器形の土器であり、口縁下に刺突列1条を廻らせる。口辺部文様帯上縁を2条沈線で画し、横走する沈線帯を蛇行沈線で区切り文様帯としている。第16群土器を後継する終末の土器群であり、後述する第15群土器を後継する土器と共に、新たに成立・展開する鳴鹿手島遺跡第10群土器の祖型となっている。

28、29は26、27に後続する土器群である。第16群土器で盛行した鋸歯文様を引き継ぎ、第15群土器がもつくびれた器形の口縁部と胴部に文様帯を配し、頸部を無文帯とする土器として再編された土器群であり、北白川上層式3期土器群に並行し、加曾利B1式の段階に相当する。

26、27は同一個体の口縁部と胴部の破片であり、文様帯の上下縁を横走沈線で画し刺突文を充填する楕円文を2段に配し、先端を丸めた横走沈線で連繋している。文様帯幅は29に比べ広く、古式と思える。28、29は3波状を呈する波頂部片であり、波頂部に多重沈線による三角文を加えている。なお、口縁部の文様幅が26に比して狭いことから、胴部の文様帯幅も狭くなる中段階の土器と判断する。



第114図 第15群～第17群土器変遷図 (縮尺不同) 11塚奥山 他は本遺跡出土

30はくの字に曲がる口縁部に、2条沈線で上下を画して縄文を充填した文様帯を配しており、その形態から加曾利B 2 式期に下る時期の所産と判断する。

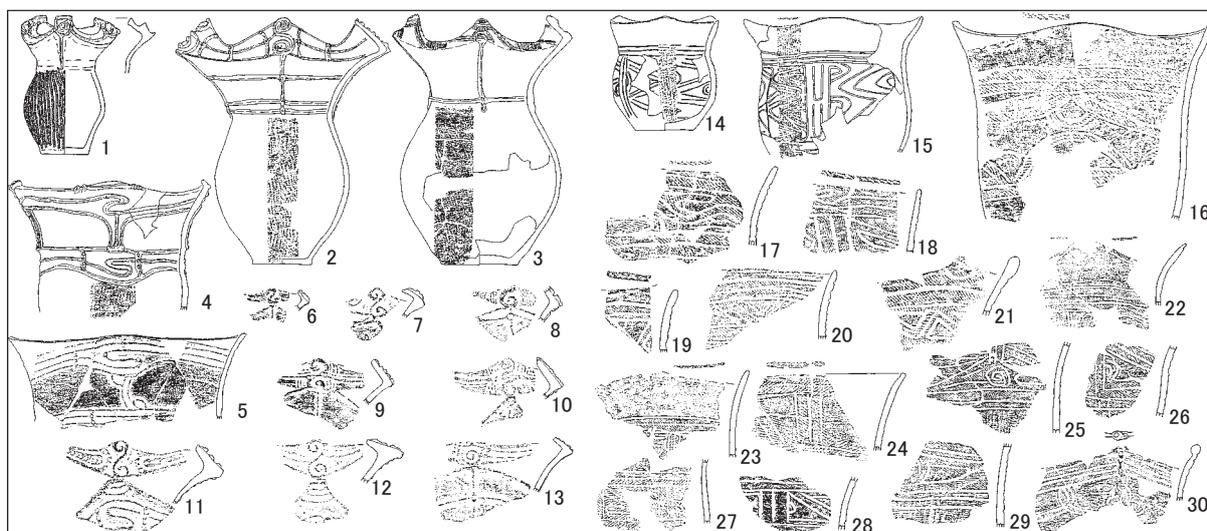
ウ 第15群土器について

第15群土器は、口縁部、頸部、胴部の3文様帯で構成する土器である。胴部上半に最大径をもち肩の張る胴部がくびれて外反して開き、口縁部をくの字に内折させている。口縁部に4単位の把手を配した大波状縁の土器であり、口縁部下縁を顎状に張り出させる特徴をもつ。

第114図31は口縁部下縁を顎状に張り出させ、大把手を口縁部に配した4単位波状縁の土器であり、波底部にも小突起を配す。肥厚する大把手頂部に配したS字状文を把手上面から下し、両側に横走する短沈線や弧線文を配している。波底部の突起には、2条一組の短い隆線を配して隆線上に円形刺突列を加えている。波頂と波底間の口縁部には沈線3条を横走させ、口縁部全体に縄文を充填している。頸部と胴部の境を、横走する沈線2条で画し、胴部には縄文を施す。無文勝ちの頸部には、把手下で上向き放射状に開く多条沈線を配している。

ここで、把手頂部に配されるS字状文の出自について考えておきたい。第115図1は富山県旧大沢野町布尻遺跡^②出土品であり、強く内折する口縁部に把手3単位を配し、面をもたせた把手頂部から隆線によるS字状文を下し、把手間の口縁部に隆線1条を配している。無文勝ちの頸部には、把手下で隆線1条を垂下させ、胴部には条が縦走する縄文を施している。なお、隆線は細めで断面三角形状を呈す。

第115図2から30は岐阜県旧宮川村塩屋金清神社遺跡（A地点^④）出土品である。2は胴部中位に最大径をもち、頸部でくびれて外反して開き、内折する口縁部に至る4単位波状縁の土器である。山形を呈する波頂下には隆線によるS字状文を単位文として配し、口縁部に配した横走する隆線3条で単位文を繋いでいる。横走隆線には波底部および単位文際で隆線を下し、交点に円形刺突を加えている。頸部には3条の横走する隆線を配し、波頂下で垂下する隆線との交点に円形刺突を加えている。なお、胴部には条が縦走する縄文を施す。6から12もS字状文を波頂下の口縁部に配す例であり、単位文側縁に多条沈線による弧線文を加える例（8から10）や、隆線を添わせる例（11、13）がある。また、単位文には渦巻文（13）が見え、貼付文側縁に多条沈線で横走線文や弧線文を添わせる例（3）も見える。なお、単位文間の連携には横走隆線が使われ、刻みを施すもの（10）も見える。頸部には2と同様に縦横の隆線を配す例（8から10、13）のほか、11では横走隆線により画された文様帯内に、



第115図 参考図（縮尺不同） 1 布尻 2～30 塩屋金清神社

波頂下で横走隆線をS字状に下す文様を配す例も見える。同様のS字文様は、外反する口辺部の上限区画文や区画内文様に隆線を使用する例(4、5)や、沈線による例(17、18)も見え、時間差があるのではと思える。なお、遺跡の存続時期の後期前半では、14に見える堀之内1式終わり頃から30に見える加曾利B1式までの品があり、報告者は隆線による土器群をVI期2群と分類して、堀之内2式を中心とする時期に充てている。

把手を配した口縁部に文様を集中させ、無文勝ちとする頸部と、縄文地となる胴部の3文様帯構成を本群土器の通例とする。鳴鹿手島遺跡では第13群土器として、堀之内2式期における本群土器の変遷を概観した。口縁部の顎状の突出は徐々に衰退し、張り出しをもたず幅狭く内折する口縁部に変化し、方角状に整えた口端部を文様帯とするまでに縮小する。また、口縁部に配した把手は突起へと変化する。なお、把手、突起部文様もS字状文や渦巻文、並行短沈線文等が見えるが、隆帯から沈線への変化を認める。

本第15群土器の把手や突起波頂部文様にも、S字状文のほか、32に見える渦巻文、同心円文、並行短線文などがある。把手頂部全体を肥厚させ、深い沈線による文様を描いて立体感のある加飾を生むものと、肥厚の弱い把手や突起頂部の外面に縦位の稜をもたせ、沈線による単位文を配したものがある。前者を代表する例として31から34に示す把手があり、鳴鹿手島遺跡では例を見ない。また、後者の例は鳴鹿手島遺跡に見えるものの、口端部を方角状にするまで縮小した例は本遺跡では見えない。鳴鹿手島遺跡の盛行する期間が、堀之内2式中段階から加曾利B1式にかけてであることから、加飾性の強い把手は堀之内2式古段階に伴うものと考えてきた。なお、本群土器が堀之内1式まで遡る可能性を現状では否定できないが、第15群土器が第19群土器を後継する土器群と位置づけた場合、胴部文様の有無などに差があり、堀之内1式の同一段階内での変化とは考えにくい。現状では第15群土器を、概ね堀之内2式古段階に位置づけておくこととしたい。

第15群土器のS字状文や口縁部の内折などの特徴は、富山県と岐阜県の県境地帯の土器群と親縁性をもつことを確認したが、その発生と展開を十分把握できたとは考えられず、今後、岐阜県飛騨地方から奥美濃地方での資料増加を俟ち、再度検討する必要がある。さらに、本遺跡第14群土器も文様帯構成など類似点が多く、第15群土器との関係を再度検討する必要がある。

第6節 第20群・第21群土器について (第116図)

内弯する口縁部を有する第20群土器と外反する口縁部を有する第21群土器は、前者を中津式の影響を受けた土器群、後者を北陸地方中枢域である石川・富山両県を分布域とする串田新式の影響下に成立・展開した土器群として前田式^⑤(能登においては高波式^⑤)と呼ばれ、両者共に後期初頭の段階に位置づけられている。また、沈線による文様を主体とするこれら土器群に対し、富山県では隆線による土器群の存在が明らかとなっており、岩嶽野式^⑦と呼称され、同じく後期初頭に位置づけられている。

第20群、第21群土器の出土量は比較的少なく、個別に分別を行い変遷の方向を示すことは困難であり、既存資料から大まかな変遷の方向を考えておきたい。

第116図1から28は本遺跡出土土器であり、内弯する口縁部を有する第20群土器(1から11)と外反する口縁部を有する第21群土器(12から28)に分類した。両群土器の文様要素には、沈線、波状沈線、刺突文(管状を含む)、口縁部の楕円形文など共通点が多い。違いは器形差のほか、内弯する口縁部に配された小さなJ字状文や渦巻状文などの単位文と、外反する頸部に配された台形状の区画を伴う蛇行沈線に認めることができる。

39から57は石川県珠洲市高波ふるや遺跡^⑧出土品であり、39から41の太い沈線は中期からの展開をうかがわせるが、概して細めの沈線を使用する土器も多く見え、口縁部が外反するもの(44、45、48、49)と内弯するもの(46、47、50から57)がある。

58は富山県氷見市四十塚遺跡^④出土品であり、外反して開く頸部までの器形および文様に、内弯する口縁部を乗せたかのような器形を呈しており、口縁部にはJ字状文もしくは渦巻状文を配し、下縁に横走沈線1条を添わせている。頸部には楕円文を配し、文様帯下縁を画する多条の結節沈線との間に、台形状の区画を設けて蛇行沈線を加えて単位文としている。内弯する土器と外反する土器の文様が、同一器面内に描かれている点が重要と思える。なお、文様帯下縁の横走する結節沈線が多条化している点は注意すべきである。

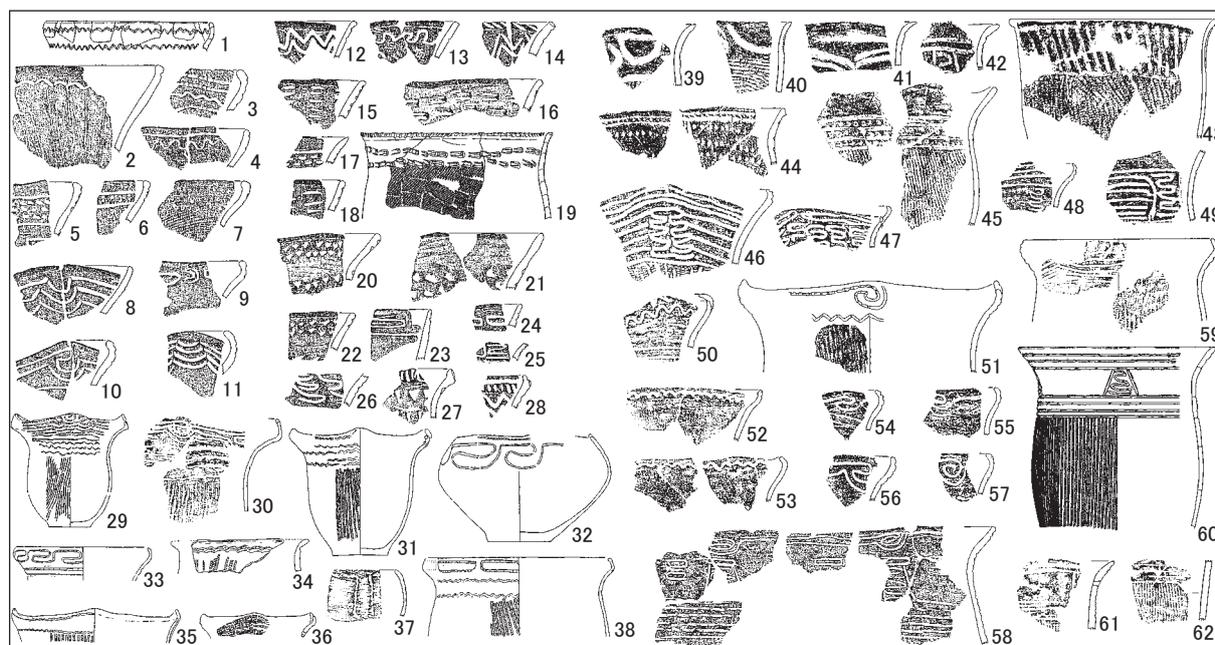
59から62は富山県旧福光町是ヶ谷遺跡^④出土の炉内一括資料であり、口縁部を内弯する土器と外反する土器が共伴している。59は内弯する口縁部に2条一組の弧状沈線を二重に配し、文様帯下縁を横走沈線1条で限っている。60から62は外反する口縁部を有する土器であり、60は口縁下と頸部に3、4条の結節沈線を横走させ、沈線帯間に台形状の区画を設け、区画内に蛇行沈線を施す単位文4単位を配している。

上記のような状況から、内弯する口縁部を有する土器と、外反する口縁部を有する土器は39から43に見える太い沈線で文様を描く土器を除き、同時に並存するものと考えられ、本遺跡で見える文様の、器種を越えた共通性も、大まかな時間の中での同時性を示すものと思える。

29から38は米澤義光氏が気屋I b式^④とかつて呼んだ、内弯する口縁部を有する土器群である。このうち深鉢形土器の51は、波頂下にJ字文を派生させる結節沈線と、頸部を横走する蛇行沈線1条で文様構成しており、29や31の波頂下での単位文の集約化と、頸部を横走する波状沈線、横走沈線が多条化する土器とは、結節沈線の使用も含めて差が見え、より58に共通する特徴が見える。

内弯する口縁部を有する土器群において、口縁部単位文の集約化と頸部横走沈線の結節沈線使用と多条化は、後続する気屋式を考える上で重要な変化と考えており、前田式系統の土器群において終末に位置づくものと考えている。このことについては、次章で改めて記すこととしたい。

なお、外反口縁の土器に見える楔状の刺突列は、前田式期に存在するものか後続する気屋式期になり発生・展開するものかは現状では確定できていないが、前田式期での使用はごく限られたものを想定している。なお、27、28は気屋式期における波状文、楔形刺突文の例として提示した。



第116図 第20群・第21群土器参考図 (縮尺不同)

29、31～33、35布尻 30大沢 34気屋 36、37真脇 39～57高波ふるや 58四十塚 59～62是ヶ谷 他は本遺跡

第7節 第22群から第24群土器について（第115図、第117図、第118図）

第22群土器から第24群土器は、北陸地方中枢域で気屋式と編年される土器群に相当する。本遺跡は手取川より西の北陸地方西部域に位置し、これまで気屋式の主体的分布域からは外れた地域とされてきた。事実、気屋式土器の出土は少なく、本節が目的とする土器群の変遷についての本県での検討事例も多くはない。

北陸地方中枢域では、1951年に久保清氏と高堀勝喜氏が「河北郡宇ノ気町気屋遺跡^②」を報告し、出土遺物を実験した山内清男氏が気屋式と仮称して以来、調査・研究が続けられてきた。2008年『総覧 縄文土器』^③において、米澤義光氏が気屋式の研究史や編年についてまとめられた論考が、最新の成果であろう。

本節では本遺跡の遺物整理・分類などの作業を通じて把握できた事柄について、関東地方の堀之内1式および同2式を念頭に置き、その変遷の見通しを述べて置くこととしたい。なお、前述のとおり本県出土の気屋式は少なく、北陸地方中枢域の気屋式の資料^④も使い、段階的な変遷の方向を記すこととしたい。また、気屋式の前後に位置づけられる土器群についても触れることとしたい。

ア 称名寺式、福田K2式終末期での状況

第117図1から3は本章第1節ウにおいて福田K2式に並行する組列Bの土器と考えた。中津Ⅱ式期末の土器と比較すると胴部文様の構成に大きく差が見え、福田K2式でも終末期の土器と考える。1、2に見える胴部に配した多重化する方形文、楕円形文などの単独の単位文様が連続横帯化している点を特徴とする。4から10は北陸地方中枢域で前田式と編年される土器群のうち、結節沈線を多用して頸部の横走沈線が多重化する特徴をもち、終末期に位置づけられる土器群である。気屋式との関連では、口縁部に配されたJ字状文や渦巻文、弧線文などの単位文や楕円形文および、頸部に配された多重横走沈線帯が注意される。11は本県大野市右近次郎遺跡出土の同時期と判断する土器であり、口縁部に配された渦巻状の単位文および、頸部に配した横帯するやや幅の狭い文様帯が5、6との関連を示すと考える。特に頸部の文様帯に見える3条沈線による三角形の連続文様に特徴がある。以上の点を中心に、堀之内1式期における気屋式変遷の方向について考えてみたい。

イ 堀之内1式期での気屋式変遷の方向

堀之内1式期における気屋式の変遷を、古・中・新の3段階で考えることとしたが、土器群はさらに細別できる可能性が高い。また、資料的に十分でなく、検討も不十分なことから、現状で把握できたことを記すに止めたい。

気屋式古段階での変遷の概要

気屋式を特徴づける楔形の刺突文は、本段階で多用が開始される。器形は大きく分けて2種あり、張りのある胴部がくびれて頸部で外反して開き、内湾もしくは内傾させて短く面をもつ口縁部に至る土器（12、14、23、26）と、弱く張る胴部から外反して開く土器（24、27）がある。前者は幅の狭い口縁部と頸部に文様帯をもち、後者は口辺部に文様帯をもつ。なお、24は口縁部に幅狭の文様帯を配すと理解すべきかもしれない。

12は口縁部に山形突起と双頭の山形突起を配し、山形突起に乗り上げるように刺突列を加えた楕円形区画文を配している。また、頸部に配した方形の多重渦巻文を連続横帯させ、方形渦巻文の一部には縄文を充填する。

14の口縁部文様帯に配した刺突を加えた楕円形区画文や突起は、12に類似する。大きく異なるのは頸部文様であり、連続施文する楔形刺突文列を多重に横走させている。この多重化する横走文様は、9などの多重化した横走結節沈線を、連続楔形刺突文に置き換えたものと考えられ、21では胴部に配した縦走縄文までも、縦位の連続楔形刺突文に置き換えている。

楕円形区画文は4の口縁部文様に見えるほか、刺突列や多重横走沈線帯も前田式から辿れる文様である。また、堀之内1式期の大把手を配した浅鉢の口縁部にも、楕円形区画文内に刺突列を加えた例が散見できる。頸部に単独の単位文様を連続して横帯化させる手法は、1の胴部文様との関連が指摘でき、2では文様が接続して横帯化の方向を強めている。

18は貫通する円孔を加えた丸山形突起の両側に、一对の山形小突起を配して隆線で繋いでいる。中央突起の円孔上には両端には刺突を加えたC字状の短沈線を配し、円孔下縁から両側の突起に向かい沈線を伸ばして先端を渦巻かせている。なお、頸部には楔形の刺突文列を横走させている。口縁部突起の文様は、5や6の波頂部の単位文を後継すると思え、頸部を横走する多重の楔形刺突文列は、横走結節沈線帯の文様の置き換えと考える。

20の突起下のC字状沈線の先端と短沈線を入り組ませる文様は、6の波頂下の渦巻文に近似している。本来は7の口縁下に配した横走沈線から派生する、J字文、L字文、渦巻文などの後継文様と見ることができよう。特に、23の波頂下の単位文は、口縁下を横走する沈線先端をC字状に丸め、下縁に弧状沈線を添わせるものであり、横走沈線から派生する小型のJ字文の下縁に横走沈線を添わせる文様に由来すると考える。

同様に、21の突起下に配したU字状の刺突文列は、8の波頂下のU字状の弧線文の写しと見え、22は9の頸部の横走結節沈線帯を楔形連続刺突文帯に置き換えたと考えられる。

次に三角形の文様の展開を見ておきたい。11は4単位の波状縁の土器であり、口縁下を横走する沈線を波頂下で渦巻かせている。また、頸部には2条の横走沈線で画した横帯する区画内に、3条一組の沈線でV字状の文様を連続充填し、V字底に向かう沈線1条を垂下させている。口縁下の沈線と頸部上縁区画沈線の間には縄文を充填し、胴部にも縄文を施す。

23は4単位波状縁の土器であり、先述したように波頂下には渦巻文を後継する単位文を配し、これと接続する形で頸部に三角形の文様を基調とする横帯文様を配している。また、渦巻文に隣接して弧線状に3条沈線を配している点は、充填文様の開始として注意される。11の口縁下と頸部間の充填縄文帯が消失し、口縁部文様と頸部文様が一体となる間の時間的推移が、段階的な変遷に要した期間であろう。

24は頸部を間隔を空けた横走沈線2条で画して文様帯とし、垂下・斜行する3条沈線で三角形のモチーフを連続させる。沈線間には管状の刺突文列を、位置をずらして充填している。なお、文様帯上下を画す沈線にも沈線1条を添わせて刺突文を充填する。口縁部には斜行する3条一組の沈線帯を配し、沈線間に刺突文列を充填している。頸部文様のモチーフは23と大きな差はなく、11のV字状文の一边を垂下文に変えたと考えられる。

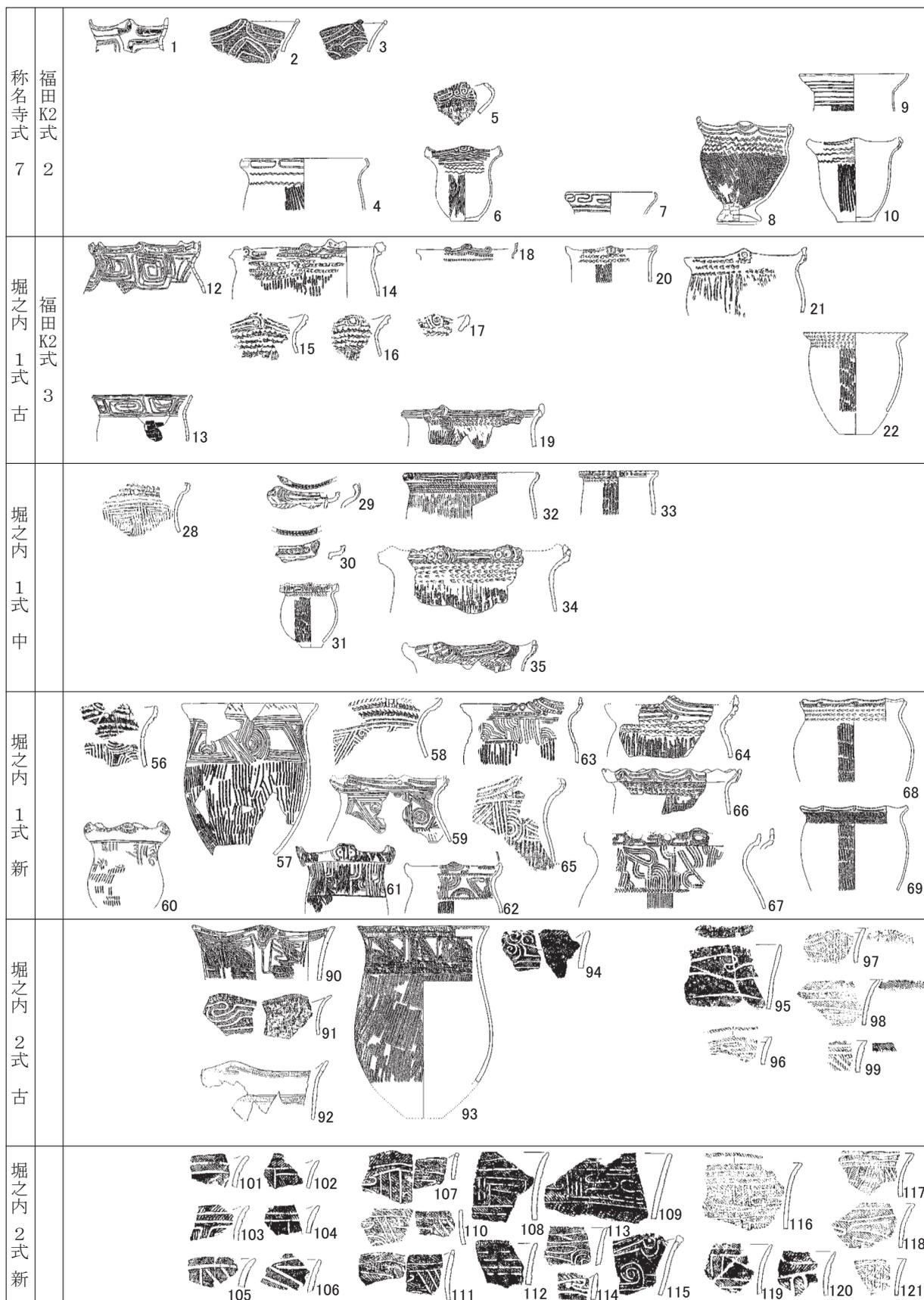
26の口縁部文様は、本遺跡有文深鉢形土器第19群の堀之内1式古段階の土器に近似しており、頸部には24に見える三角文を基調とする横走文様帯を2段に配している。なお、区画内には渦巻文やU字状文などを充填文として使用する点は、23と同様に新たな特徴と考えている。

27は外反する口辺部を間隔を空けた2条沈線で画して文様帯とする。区画内には斜行沈線を鋸歯状に配しており、外反器形の土器が本段階まで継続し、文様および文様帯構成を含め38へと続くと考えられる。

25は頸部に多重方形文や、U字文充填の方形文、垂下沈線充填のU字状文など、異種の単独の単位文様を横帯施文する。口縁部文様帯が単位文と横走沈線に縮小するものの、12の組列下での展開と考えている。

最後に19について触れておきたい。口縁部には三角山形の突起を配し、突起側辺の一边を耳袋状に拡張して楕円形の区画文を乗せている。この突起形状は34など次の段階にも継続し、人字状と呼ばれる山形突起を巻き片掛けする文様へと繋がると考えている。なお、突起下の単位文は20に近い。

本段階において、気屋式の特徴とされる楔形刺突文の多用が始まる。本段階を気屋式の成立段階とするが、



第117図 第22群～第24群土器変遷図（縮尺不同） 4, 6, 7, 9, 10, 18布尻 5, 14, 21, 40, 41, 63, 71, 135～137真脇 8, 19, 26, 35, 37 吉野ノミタニ 11右近次郎 15～17, 29, 30福浦ヘラソ 20, 22, 31, 33, 43, 45, 51, 62, 67～70, 87安居五百歩 32紺屋町ホンデン 23, 25, 34,



36, 39, 42, 44, 52, 57, 59, 64, 66, 73, 77~79気屋 28, 80, 83, 95~99, 116~121赤浦 56道下鷹塚 58, 65高波ふるや 60, 61, 81, 82, 84, 100, 122~130境A 72曾幅 74大津くろだの森 90, 91道下元町 92, 101~106万行 93, 107~115上田うまばち 131~134波並西の上 他は本遺跡出土

文様構成要素には後期初頭末段階の充填縄文帯を欠く点に大きな差がある。本段階の特徴は楔形刺突文を多用して多条化した文様を施す点や、12と14の間に見える近似する口縁部文様帯をもち、頸部文様帯（方形多重渦巻文と多重楔形刺突文列）を置き換える手法が挙げられる。また、耳朶状突起の成立、充填文様の開始などにも特徴を認める。文様帯の構成などは前代と大きく変わらず、横帯する文様帯構成を維持する。

気屋式中段階での変遷の概要

34は前出の耳朶状に拡張する突起を後継する単位文を、口縁部に配した土器である。耳朶状部に大型の円形刺突2個一組を配し、側縁に弧状沈線2条を配している。耳朶状突起は平板化して口縁部文様帯に入り込んでいる。口端部に刻みを施すほか、口縁部下縁外側にも刻みを施す。頸部には楔形の刺突文列4条を横走させる。

35は耳朶状の突起部でU字状に開く、刺突を加えた沈線区画文を口縁部に配し、沈線末端に大型の円形刺突文を加える。区画文下には刺突を加えた沈線1条を添える。また、突起基部に施す刺突を加えた弧線文末端にも大型の円形刺突を加えており、頸部には楔形の連続刺突文列を2条横走させる。

29、30は同一個体であり、29は波頂部の突起を耳朶状に仕上げ、口縁部に配した楕円区画文と基部間に、楕円区画文に添う弧状沈線3条を施している。30は波頂部に多重沈線による単位文を配すと思え、口縁部の楕円区画文内に刺突列（斜行短沈線列）を充填している。なお、口端部には矢羽根状の刻みを密に加える。

31は単位文となる渦巻文を逆U字状文で囲い、沈線末端に刺突文を加えている。単位文両側には対向する弧状沈線2条を添え、下端に刺突文を加えている。また、33では背中合わせの弧線文3条を単位文とし、単位文両側に刺突文2点を加えて沈線を伸ばす。

28は頸部に多重の方形文を接続して配している。口縁部に配した2条の楔形の連続刺突文列間に大型の円形刺突文を加えており、口端部には刻みを施す。波頂部の形状が不明で、片掛け状の文様となる可能性があり、新段階に下る可能性がある。

中段階においては、古段階での12と24で認めたような、近似する口縁部文様帯をもち、頸部文様帯を置き換える手法をもつ土器は、28以外には確認できていない。

次に三角形の文様を配す土器を見ておきたい。36は頸部に多重の三角形文を正逆に接続して配し、下縁に結節沈線1条を加えて横帯する文様帯とする。口縁部には楕円形の区画文を配し、突起基部に添わせた弧状沈線1条が残る。なお、口唇部には斜行する短沈線を施す。頸部文様は整然としており23の発展形と見える。

37は口縁下と頸部を横走る沈線帯で画し、U字状の斜行文様と縦位文様を接続して施文すると見え、25の変形であろう。38は27を後継するものであり、口縁部に末端に刺突をもつ沈線1条を横走させ、口縁部下縁外側に刻みを施す。第19群土器の堀之内1式中段階の口縁部文様帯の文様構成に近似している。

39から45は頸部に配した文様帯が拡大して胴部全体に展開する土器群であり、これまで見られなかった縦位方向への胴部文様帯分割が始まる。なお、器形・文様構成など多様であり、複数の組列に分かれると思える。

39は口縁部に本段階に特徴的な耳朶状の扁平な突起を加え、楕円区画文に弧状沈線を添わせた文様帯を配す小波状縁の土器である。胴部文様帯は広く展開し、口縁部波頂下の位置で多条の弧状沈線と垂下沈線を組み合わせて、文様の基軸となる縦位分割文様を萌芽させている。なお、基軸文様の垂下は胴部下縁までは及んでいない。文様は多条沈線による曲線文を主体とし、沈線交点に刺突を加える。楔形刺突文の施文はない。

40も小波状縁の土器であり、口縁下と頸部に2条の押し引き沈線を配して文様帯とし、大型の円形刺突を波頂下に加えている。胴部文様帯は広く展開し、三角形と方形の多重沈線による文様を、曲線的に崩して組み合わせ文様としている。

42はくの字に外反する口縁部を無文とし、頸部以下を広く文様帯とする。U字状の多重沈線文を正逆に配し

て文様の基軸となる垂下文様とし、周囲に弧線と垂下線を組み合わせた文様を添わせる。空白部も台形状の文様で埋め、胴部全面を文様で覆った気屋式特有の文様夥多の様相を生んでいる。

43は口縁部を横走る2条沈線を突起下でC字状に曲げ、下縁沈線の屈曲部および末端に大型刺突文を加え、側縁に3条の弧線を添わせて単位文とする。また、口端部には刻みを施す。胴部には垂下文と円文を多条沈線により大柄に描いている。垂下沈線を縦位分割の基軸文様としていると思える。

これら4点は、胴部の縦位分割基軸文様を文様の組み合わせで表現している点は注意が必要であろう。

41は平山形の突起を配して突起下に円孔を穿つ。円孔の片側に弧状沈線を添わせ、両側に大型の円形刺突文を加えて単位文としている。単位文間には横位のU字状文を対向させ、円形刺突1点を加えて口縁部文様帯としている。なお、口端部には刻みを施す。球形を呈する胴部には器面を縦位に分割する縦位多条沈線を、胴部下縁まで垂下させて明確な基軸文様としている。縦位区画内は斜行する多条沈線で小分割し、扇形文やU字状文などを充填しており、次の段階で盛行する文様要素の大半を保有している。

44は外反する口縁部に横走沈線3条を配し、大型の円形刺突文を上下縁の横走沈線に加えて単位文とし、口縁部文様帯を構成する。また、口端部には刻みを施す。張りが弱く長い胴部には、多条の垂下沈線を縦位分割の基軸文様として配し、両側に弧状沈線と垂下沈線を組み合わせた多条沈線による文様を添わせている。なお、区画内は斜行沈線で小分割して扇形文などを充填している。

45はくの字に外反する口縁部に、2個一組の円形貼付文を加えて単位文とする。単位文下に間隔を空けて2条沈線二組を垂下させ、垂下沈線間に弧状の2条沈線を連続して縦位に充填して胴部文様帯縦位分割の基軸文様としている。胴部文様帯上縁を頸部に配した横走る2条沈線で画し、区画内を斜行して中間で入り組ませた多条沈線で小分割して扇形文などを充填すると思える。

これら3点は、胴部文様を縦位に分割する基軸文様が、胴部下縁まで垂下沈線により施され、次の新段階での文様展開に近い。先述の文様の組み合わせによる縦位分割の基軸文様とは、縦位分割の手法に大きな差がある。

なお、本段階には46から50に示す胴部を縄文とする土器や、頸部を無文帯とする土器が伴う。頸部を無文帯とする土器は有文深鉢形土器第19群との交流により生じたと思え、文様夥多の気屋式にあっては異質である。

中段階での気屋式は、堀之内1式系土器群に特徴的な、胴部文様帯の縦位分割手法を導入する。縦位分割の基軸文様は組み合わせ文様の形で開始され、胴部下縁までを貫く垂下沈線で確立を見る。また、これに伴い胴部文様は、数種の文様を組み合わせた曲線文様から、垂下沈線による縦位分割基軸文様と、斜行沈線により小分割された区画内への充填文様に変化する。口縁部の耳朵状の突起は扁平化し文様帯内に組み込まれるほか、基部への弧状沈線の追加や、大型円形刺突文の施文などに新たな展開がある。なお、共通する口縁部文様帯での頸部文様帯入れ換えを確認できる事例はないが、新段階では確認しており本段階でも存在が推定される。

気屋式新段階での変遷の概要

中段階で有文深鉢形土器は、口縁部、頸部の有文帯と胴部の縄文帯の3帯構成とするものと、口縁部と広い胴部の有文帯の2帯で構成するものに分かれ、さらに口縁部のみを有文帯とする2帯構成のものと、頸部を無文帯として口縁部と胴部の有文帯で3帯構成するものに分かれたが、新段階でもその構成を継続する。口縁部文様帯では、これまで突起周辺の文様変化を見てきたが、新段階では大きく変化して気屋式特有の片掛け文様を生む。また、頸部文様帯では、縦位基軸文様を中心に充填文様が整備されるほか、文様帯下縁に区画沈線を配したのも現れる。2帯構成の胴部文様帯も整備されて一部に充填縄文を施すものも現れ始める。

頸部文様帯の下縁を画す手法には、大きく分けて3種あり、頸部文様の底辺を揃える手法(57)、部分的に横走沈線等で画す手法(61)、横走沈線で画す手法(60、65)がある。なお、堀之内2式に並行する土器を見ると、

口縁部文様帯は消え、口辺部の文様帯に胴部の縄文と異なる細い充填縄文を施し、胴部に節の大きな縦走縄文を施す特徴がある。堀之内2式段階の土器の口辺部文様帯は、縦走する基軸文様で文様帯を分割し、さらに斜行沈線で小分割を加えて区画内に蛇行沈線などを配した、簡素化した文様を通例とする。また、横走沈線で文様帯下縁を画す土器は、口縁部文様帯を残す例が大半を占める点（61、62、67、74）は、93などと大きく異なる。74は頸部文様帯の文様に、2条沈線による区画内に縄文を充填する縄文帯で文様を構成するが、沈線区画内に縄文を充填する手法はすでに78でも見えている。さらに、堀之内2式段階の土器は下膨れの胴部が、頸部から外反して開く器形を呈し、67や74などの張りの強い胴部形状とは差が大きい。なお、61は頸部文様に充填縄文を施し、文様にも簡素化の方向が見えており、堀之内2式期の土器群に近いが60と相伴している。

このように、文様帯下縁を限る土器はその手法だけで、堀之内2式段階まで下る時期を与えることは困難と考えられ、ここでは堀之内1式の新段階に止めることとし課題を残した。

63は山形突起を口縁部に4単位配した波状縁の土器である。前段階での耳朶状に肥厚した突起と楕円形区画文、基部への弧状沈線、大型の円形刺突文で特徴付けられた突起部および単位文は大きく変化する。山形把手を巻き片掛けする2条の楔形刺突文を加えた沈線を口縁部に伸ばし、次の突起下で上縁沈線は先端に大型円形刺突文2点を打って止め、下縁沈線は先端を弧状に曲げて片掛け沈線に添わせる。頸部文様帯は上縁を横走する沈線1条で画し、垂下する4条沈線を頸部文様帯の縦位分割基軸文様とする。区画内には扇形文と沈線を組み合わせた文様を充填する。なお、基軸文様である垂下沈線帯を除く文様帯下縁は、刻みを加えた横走沈線で閉じている。

64は63に類似する口縁部文様帯を配し、頸部文様帯には4条の楔形連続刺突文列を横走させる。これら2点は、頸部文様の入れ換え手法により成立しており、古段階の12と14の手法を受け継ぐものと理解できる。

56は突起を加えた口縁部に片掛け文様と大型円形刺突文を配し、胴部文様帯上縁を3条の楔形連続刺突文を加えた沈線で画している。波頂下の胴部を縦位多条沈線により基軸分割し、多重の方形文と扇形文に垂下沈線を組み合わせた文様を充填している。方形多重沈線文は、古段階での単独文様（12）を充填文として残している。

59は口縁部文様帯を片掛け文様と大型円形刺突文で構成する。頸部に配した横走沈線で胴部文様帯上縁を画し、突起下で沈線1条を下して縦位分割基軸文様とする。文様帯内には三角文を多条沈線の組み合わせ文様として施して斜行する小区画を生じさせ、小区画内に渦巻文や斜行沈線を充填する。文様帯下縁の一部に刻みを加えた横走沈線を配している。

57は口縁部に縄文を施し、頸部にのみ文様帯を配す。垂下沈線1条を基軸文様とし、多重沈線による台形文や三角文、斜行沈線を組み合わせて文様帯内を小分割し、小区画内に扇形文や同心円文を充填している。

これら2点は、気屋式にしては文様の白抜き部が多い。

65は63と同様の文様を口縁部に配し、頸部文様帯上限を沈線1条で画す。胴部文様帯を基軸文様である2条の垂下沈線で分割し、さらに斜行する沈線1条で小分割して小区画内に多重の三角文や扇形文を充填する。

66、68、69は口縁部に幅の狭い文様帯を配し、頸部文様帯に横走する楔形刺突文列を多条に配している。口縁部文様には弧状を呈する文様を多く選び、円形刺突文を加えている。古・中段階でも口縁部文様帯が狭く簡素な文様を配す例（20、33など）があったが、これを後継する組列なのかもしれない。

60は5単位の山形突起を配した波状縁の土器であり、突起部を3条の弧状沈線で囲い、うち中線に楔形刺突文を加えている。波頂間には末端に刺突を加えた、楔形刺突文を施す沈線1条を横走させている。頸部を横走沈線1条で画し、胴部文様を縦位分割する基軸文様として垂下沈線を配して扇形文や渦巻文を充填すると思える。なお、文様帯下縁を限る沈線は施していない。

70は円形の大型刺突文を加えた三角山形突起を口縁部に配し、口唇部に縄文を施す。頸部には方形区画文の

変形やU字状の区画文様を多重沈線で描き、区画内に扇形文などを充填する。文様帯下縁には刻み目文列1条を横走させる。縦位分割の基軸文様をもたず、区画文を接続配置して横帯する文様帯を構成する手法は、古段階に見うける手法であるが、下縁の刻み目文列の存在から本段階と判断した。

71、72は口縁部の山形突起に、弧線やU字状の楔形刺突文を加えた沈線を施す。このうち71は口縁部に楔形刺突文を加えた横走沈線2条を加えて文様帯とする。頸部には多重沈線による三角文を正逆に配置し、横帯する頸部文様帯とする。なお、三角文内縁には刺突を加えた沈線を廻らせる。また、文様帯下縁は刻みを加えた横走沈線1条で画す。72は口縁部文様帯上限を1条の横走沈線で、下縁を楔形刺突文列1条で各々画し、1条の垂下沈線を基軸文様に、多重のL字状文を充填する。

73は気屋式の指標とされる気屋遺跡出土の土器である。張りのある胴部が頸部で外反して開き、つま先状を呈する口端部に至る。口縁部には円孔を施す三角山形突起を配し、刻みを加えた横走沈線1条の両端に大型の円形刺突文を加えて文様帯としている。なお、口端部にも縄文を施す。頸部文様帯の下縁は刻みを加えた横走沈線で画し、波頂下の位置に円形刺突を加えた縦位の楕円文と沈線1条を添わせた縦位の蕨手状文を、胴部分割の基軸文様として配し、多重の方形文および方形文を対角線で割った多重の三角形文を文様帯内に配している。なお、文様の交点には円形刺突文を加えている。

77は小さな突起を加えた平縁の土器であり、突起部を巻き片掛けする2条沈線を口縁部に配し、口唇部との間に縄文を施す。頸部文様帯を縦位分割する基軸文様として4条の垂下沈線を配し、斜行する4条沈線で小分割して扇形文や斜行線文を多条沈線で充填している。なお、下縁を画す沈線等は不明である。

以上が、口縁部、頸部の有文帯2帯で文様帯構成する土器群であり、文様帯下縁を限る横走沈線を一部もしくは全周して配すものが出現している。頸部文様帯は縦位分割基軸文様による分割のほか、斜行沈線で小分割するものが多く、充填文を密に配すもの(73)と粗なもの(59など)がある。なお、胴部下半には縄文を施す。

75、76、78は口縁部と胴部の有文帯2帯構成の土器である。75は皿状の大型把手4単位を配す土器であり、把手側面のほか上面から片掛け状に多条沈線を施す。なお、把手端部には刻みを施す。把手下の両側に4条一組の垂下沈線を下して縦位分割基軸文様とし、弧線文、扇形文、横走文、縦走文などを充填文として配す。

76は双頭の山形突起間をU字状に窪め、突起を巻き片掛けする楔形刺突文を加えた沈線3条を引き分けている。また、U字状の窪み下には、両端に刺突を加えた沈線3条を横走させている。胴部文様帯上縁を横走沈線2条で画し、垂下沈線1条を胴部文様分割の縦位基軸文様としている。基軸文様両側に配した垂下沈線を左右に引き分け、隣接の基軸文様側縁の垂下沈線に繋いでいる。区画内には斜行する3条沈線を、区画ごとに方向を変えて引き区画内を小分割し、各小区画内には扇形文を充填している。

78は口縁部に8単位の山形突起を配した内弯する口縁部を有する土器である。突起部に縦位の粘土を追加して肥厚させ、両端に刺突を加えた垂下する結節沈線1条を施す。突起間の口縁部下縁には、両端に刺突を加えた結節沈線1条を加え口縁部文様帯とし、口縁部には縄文を施す。なお、口縁下には方形の区画文を配している。胴部上縁を横走沈線1条で画し、垂下沈線1条で胴部文様縦位分割基軸文様とし、H字状の区画文や斜行沈線文で区画内を小分割して縄文を充填する。小区画内にはJ字状文や、扇形文と垂下沈線を組み合わせた多重沈線文を配して縄文を充填する。充填縄文に使用する縄は細く、胴部下縁に施す大粒の縦走縄文とは異なる。

79は口縁部文様帯をもたない土器であり、口端部に刻みを施す。胴部上縁を2条の横走沈線で画し、先端を渦巻させる3条の斜行沈線を胴部文様縦位分割基軸文様とする。区画内には斜行線文、扇形文、同心円文などを、密に組み合わせて配している。なお、文様帯下縁は開放しており、文様帯内には縄文を充填する。

80から83は胴部文様帯に縄文を施す土器である。口縁部には渦巻文や入り組み文を配し、両側に弧状沈線を

加えて単位文とする波状縁の土器であり、単位文間には両端に刺突を加えた横走沈線を配して口縁部文様帯とする。なお、82は突起間の文様と思え、沈線1条を介した楕円区画文間に、刺突文と弧状沈線を組み合わせた単位文を配している。80は2条の垂下沈線を胴部文様縦位分割基軸文様とし、多重の斜行沈線で区画内を小分割するものと思え、小区画内には多重沈線によるU字状文や扇形文、斜行線文などを配して縄文を施す。なお、83のように文様下縁は開放されているものと思え本段階に止めた。

61は口縁部に60に近似する文様帯を配している。頸部の上下限を刻みを施す横走沈線各1条で画して、垂下沈線2条を胴部文様分割基軸文様として配し、斜行する3条沈線で区画内を小分割している。区画内には扇形文や弧線文などを配している。

62は富山県旧朝日町境A遺跡で住居址より、60と共に出土した共伴資料である。有段となる口縁部には山形突起4単位を配し、突起下に2条沈線を垂下させて対向する弧状沈線2条を添えている。なお、弧状沈線内側には刺突文1点を各々配している。頸部文様帯下縁を横走沈線1条で画し、上縁を口縁部の有段で画す。胴部文様帯縦位分割基軸文様を垂下沈線4条とし、L字状文や扇形文を区画内に充填する。

67は円孔を加えた山形突起を3個一対に加え、周辺に刻みを加えた沈線や刺突文を配している。頸部上縁を口縁部の肥厚帯で限り、下縁を矢羽根状の刺突文列で限る。文様帯内は扇形文と沈線を繋げた垂下文を縦位分割の基軸文様とし、U字状文、斜行線文、扇形文などを配している。頸部の文様は同じ安居五百歩遺跡出土の62に近い。

74は本段階（堀之内1式新段階並行期）で成立する突起を巻き片掛けする文様を口縁部に配しており、頸部文様帯の上縁を1条沈線で、下縁を縄文充填の2条沈線で画している。なお、下縁沈線には刺突文を加えている。区画内には鍵の手に曲がる縄文帯を基軸文様に、先端を巻く斜行沈線、渦巻文などを2条沈線で描いて細めの縄文を充填する。また、胴部下半には節の大きな大粒の縦走縄文を施す。充填縄文は78などにすでに見えている要素であることから、前述したように堀之内1式新段階に止めておくこととした。

84から89は口縁部に幅の狭い文様帯を配し、口縁部以下を縄文帯とする土器および頸部を無文帯とする土器であり、中段階に続き本段階でも存在が確認できる。

ウ 堀之内2式期での気屋式変遷の方向

周辺地域土器群の状況

気屋式の中心的な分布域の土器を検討する前に、第115図に示した岐阜県旧宮川村塩屋金清神社遺跡出土遺物を見ておきたい。堀之内1式から2式の資料を図示したが、他に後期中葉以降に下る遺物も出土している。第115図14は頸部横走沈線から沈線3条を垂下させ縦位基軸文様とし、基軸文様間には方向を変えた斜行文や扇形文を配し、胴部には縄文を施す。15は14に類似する文様を配すが、文様帯下限を2条の横走沈線で画しており、口縁部から胴部にかけて縄文を施す。14は堀之内1式期と思え、15は下限区画沈線の存在から2式初め頃かと思うが、文様の類似性から1式に止めておきたい。2、3、6から13は第15群土器で検討し、堀之内2式古段階の土器と判断した土器である。11に見える頸部の横走隆線をS字状に下す手法と、4、5の口縁部文様とを同時期と判断し、堀之内2式古段階の位置を与えた。堀之内2式中段階以降の資料は16から30に示すものであり、うち30は長野県方面に由来する加曾利B1式期の土器と判断する。16は4単位波状縁の土器であり、口縁下を無文として口端部に縄文を施す。口辺部文様帯の上下限を2、3条の横走縄文帯で画す。文様帯内には、対向する弧線文を配し弧線接合部にも小ぶりの弧線文を加えて縄文を充填する。ややくびれのある器形や弧線文様など、東海地方蜆塚貝塚出土品に類縁する資料と思え、堀之内2式中段階に位置づけたい。

17、18は口縁下に4、5に似た文様を配しており、これを後継する中段階の土器と考える。19は菱形文を構成するかと見える。21は三角山形突起を配し弧状沈線を加える。口辺部文様帯の上下を横走沈線帯で画し、区画内に3条沈線による鋸歯文を加え、沈線帯に縄文を充填する。沈線のタッチや文様帯の幅から、堀之内2式新段階の所産に思える。22は波状縁の土器であり口縁波形に合わせて沈線1条を廻らせ、口端部間に縄文を施す。口辺部文様帯上縁を多条沈線で画し、垂下沈線で文様帯内を分割し、先端が渦を巻く斜行沈線を配している。23から28は文様帯の上下を横走沈線帯で画し、文様帯内を縦垂下沈線帯で基軸分割し、斜行沈線帯で小分割して渦巻文や扇形文、弧線文、蛇行線文などを充填する土器であり、気屋式に近似する堀之内2式中段階から新段階の土器と思える。このうち25は文様帯内を横走沈線で2段に分けるものと思える。29は22に似た斜行する渦巻文を配している。波状口縁の口縁部を広く無文とする点を除き、土器群は北陸地方中枢域に分布する気屋式に近似する部分が多い。なお、口縁部内面に縄文の施文を行うものは少ない。

堀之内2式期での気屋式変遷の方向

前述の飛騨地方の事例を参考に北陸地方中枢域の気屋式を見てみたい(第117図)。なお、堀之内2式に並行する気屋式は資料は少なく古段階と新段階に二分するに止めた。

90は4単位波状縁の土器であり、口縁下を横走する沈線を波頂下でU字状に窪めて単位文とし、下縁に沈線1条を添えている。U字状沈線から沈線3条を垂下させ、文様帯分割の基軸文様とし、さらに文様帯内を2条の垂下沈線と斜行沈線で小分割している。区画内には先端が蛇行する斜行沈線を加えている。内面には沈線2条を口縁波形に合わせて横走させ、沈線帯と口端間に縄文を施す。91、95は波状縁の土器であり、口縁下を横走する沈線を波頂下でS字状に蛇行して下す。下縁に沈線1、2条を添わせて沈線間に縄文を充填する。頸部には横走する縄文帯を配して口縁部内面には縄文を施す。92も近似する文様をもつが、内面の縄文施文はない。98は小ぶりの蛇行線文様を施す。内面への縄文施文はなく口端部に縄文を施す。同種文様は岐阜県資料に見ることができ、隆線文様の第117図4、5および、縄文充填の第117図17、18があるが、内面への縄文施文はない。

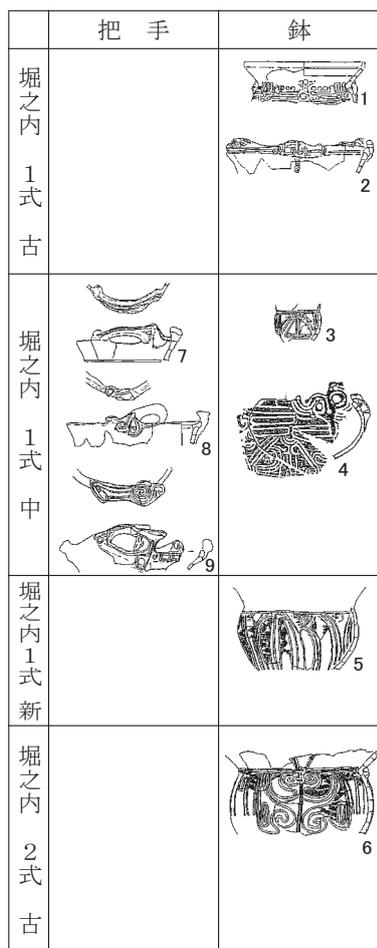
93は下膨れの胴部を持つ平縁の土器であり、口辺部に間隔を空けて沈線3条を横走させ文様帯を限る。区画内には垂下沈線3条を縦位分割基軸文様とし、斜行する3条沈線で小分割する。区画内には蛇行沈線を充填して、内面には縄文帯をもつ。94は口縁部文様帯の上限を口端部とし、下限を横走沈線帯で画す。文様帯内には渦巻文を2段に配して縦位分割基軸文様とし、先端が渦巻く斜行沈線で小分割する。分割文様に添い沈線1条を配し、縄文を充填する。内面に縄文帯を配す。96は90に類似し、97、100は口縁部に横走沈線帯を配す。98は横走沈線帯下の区画内に、斜行する3条沈線を配す。いずれも内面に縄文帯をもつ。なお、口縁部文様帯に施す縄文は細く、胴部に施す節の大きな縦走縄文とは原体を意図的に替えている。また、口縁部内面に縄文帯をもつものや、口辺部文様帯内に横走沈線をS字状に下す文様も例が少ない。古段階の資料は少なく、増加を俟ちたい。

堀之内2式新段階に並行する気屋式は、口辺部に横走沈線帯で上下を限られた文様帯を配し、文様帯内を縦位分割する基軸文様として垂下沈線を配す点および、沈線帯への縄文充填は共通する特徴である。口辺部文様帯の斜行する小分割沈線帯をもたないもの(107から109、116)も出現するほか、文様帯幅が狭くなるもの(131)もある。参考として加曾利B1式段階の土器(135から137)を提示するが、量的には少ない。

以上のように、堀之内2式に並行する気屋式は、堀之内1式新段階の文様(61)を簡略化させ、口縁部文様帯を消失する土器が中心となる。なお、文様帯に充填する縄文と胴部に施す縄文を替えることは、通有する特徴とすることができる。

気屋式に伴う堀之内式系土器

第118図に示した土器は、気屋式に伴う土器と思える堀之内式系の鉢形土器であり、これ以外に大型の把手



第118図 鉢形土器および把手
(縮尺不同) 4は気屋 他は本遺跡

をもつ浅鉢形土器がある(浅鉢形土器第6群)。鉢形土器は6のように、長野県方面の特徴をよく示す。1の1式古段階の土器以降、継続した流入を認める。なお、3、4は気屋式の可能性が高い。また、7から9の把手は、2の土器の口縁部の小さな透かし孔および胎土の類似から堀之内式系土器と判断した。東海地方に分布する第19群土器に近似する土器群に、同種把手の存在が確認できるが、自生的に成立したものか、他地域との交流でもたらされたものかは不明である。特に鉢形土器は、今後、気屋式との共伴関係が明らかとなれば、並行関係の把握に有益な手段となる。

エ 小 結

気屋式の成立から終末まで、土器群の変遷を概略的に見てきた。その成立には、中津Ⅱ式の組列Bから変遷したと考える土器群と、北陸地方で前田式と呼ばれる後期初頭の土器群が関係すると推定できた。また、気屋式開始期が、これまで型式の指標とされた「楔形の刺突文」を多用する時期に相当していることも推定できた。

堀之内1式段階での気屋式の変遷は、新段階で確立する突起を巻く片掛け文様の確立への行程と考え、古段階での耳朶状突起の成立、中段階での突起基部への弧状沈線付加と大型円形刺突文の施文開始、新段階での片掛け文様確立と大型円形刺突文の配置を考えた。また、変遷の中で、口縁部文様帯を同一とし、頸部文様帯の文様(沈線文様と楔形横走刺突文様)を入れ換える手法が確認できた。しかし、堀之内1式から2式並

行期での気屋式の移行過程を、十分に説明し得なかった点は、今後の検討課題としたい。また、堀之内2式に並行する気屋式の状況を、近隣の岐阜県の資料を使い検討したが、十分なものとはならなかった。

今回の気屋式の検討を通して、文様帯構成差に関連した組列存在の一端も確認できたと考えている。今後、組列ごとの検討を通して、より確かな変遷過程を明らかにすることも可能なように思える。

今回の検討では、本来分布域外である本県の資料だけでは不十分と考え、北陸地方中枢域の土器群を多用したが、資料検索の不十分さもあり、変遷の見通しを示すに止まった。

第8節 おわりに

本章で検討を加えた後期初頭から前葉の時期は、本県において土器群の変遷を考えるに十分な資料を欠いた時期であった。今回の調査で得た資料により、土器群変遷の一端を明らかにすることができ、今後の当該期の土器群を考える手掛かりを得たことは大きな歩みであった。また、同期の土器群の検討を通して、多様な系統型が入り混じる本県の特徴も再確認できた。今後は、変遷過程のさらなる検討と共に、系統間相互の関係を明らかにすることも課題である。特に気圧式については検討を継続する必要がある、今後の課題としたい。

なお、本書の執筆に際して、石井 寛、長田友也、加納 実、千葉 豊、松井政信、米澤義光、綿田弘実の各氏には、多くの貴重なご意見・ご教示を賜った。記して謝意を表したい。

註

- ① ここで言う関西地方とは、近畿地方のほか中国地方の東部までを含む。
- ② 2016年 横浜市歴史博物館 企画展「称名寺貝塚」関連シンポジウム『称名寺貝塚と称名寺式土器』第二部 における石井 寛「関東南西部の称名寺式土器」、加納 実「関東東部の中期最終末から後期初頭の土器群」、江原 英「北関東地域の様相」の発表および、2017年 横浜市歴史博物館紀要 第21号『シンポジウム「称名寺貝塚と称名寺式土器」の報告』に掲載の「関東地方における称名寺式土器の7段階区分（石井・加納・江原）」での編年観を参考とした。
また、白川 綾「北陸地方における中期末から後期初頭の土器群」に掲載の「型式学的単位と層位的単位」により北陸地方における称名寺式変遷の年代観を参考とした。
さらに、千葉 豊「関西地方の後期初頭土器群 - 研究現状と課題 -」に掲載の「福田K 2式の3段階区分」および「関西と関東の編年対比試案」を参考とした。
なお、本書における称名寺式の段階区分および、福田K 2式の段階区分もシンポジウム資料によった。
- ③ 工藤俊樹ほか『右近次郎遺跡Ⅱ』大野市文化財調査報告第3冊 1985 大野市教育委員会
- ④ 組列とは土器の系統的な変化を示すシリーズであり、類型に類似する。型式は複数の組列の集合体で構成されるのが通例である。
なお、組列は型式学的操作によってのみ把握したものであり、層位的な裏付けをもっていない。
- ⑤ 北陸地方中枢域とは、手取川以北の石川県・富山県を含む地域を、北陸地方西部域は手取川以南の福井県を中心とする地域を指す。
- ⑥ 久々忠義ほか『桜町遺跡発掘調査報告書』2006年 小矢部市埋蔵文化財報告書第57冊 小矢部市教育委員会
- ⑦ 註②文献と同じ。なお、中津Ⅱ式については所収の「奈良県御所市玉手遺跡出土の後期初頭土器群について」小泉翔太・井ノ上佳実を参考とした。
- ⑧ a 千葉 豊・曾根 茂「形式論の可能性—福田K 2式を素材にして—」2008年『縄文時代 19』縄文時代研究会
b 千葉 豊・曾根 茂「緑帯文土器の成立—続・形式論の可能性—」2013年『縄文時代 24』縄文時代研究会
- ⑨ 関西地方の後期初頭段階、特に福田K 2式期では、類似する土器群が広域に分布するものと思え、その差異が明確となるのは後期前葉（福田K 2式第3段階）以降と考えている。千葉が⑧b「Ⅱ．緑帯文土器成立期に関する諸形式について」で、堀之内1式に並行する各地の土器群を分けて取り扱っていることもその現れかと思える。
- ⑩ 赤沢秀則ほか『堀部第1遺跡』2005年 鹿島町教育委員会
- ⑪ 久保篠二郎ほか『島遺跡発掘調査報告書第1集』1983年 北条町教育委員会
- ⑫ 久保田一郎ほか『原田遺跡（4）縄文時代以降の調査 第2分冊』2008年 島根県教育委員会
- ⑬ 米澤義光ほか『吉野谷の石器時代（Ⅲ）』1997年 石川県石川郡吉野谷村教育委員会
- ⑭ 気屋式土器検討委員会『気屋式土器検討会資料』「気屋遺跡の久保資料・山内資料」1995年
- ⑮ 矢野健一ほか『小路頃才ノ木遺跡』1990年 関宮町教育委員会
- ⑯ 田中迪亮ほか『五名田遺跡』1991年 島根県頓原町教育委員会
- ⑰ 大阪府教育委員会『八尾南遺跡Ⅱ』1993年 大阪府教育委員会
- ⑱ 仁科 章ほか『三室遺跡Ⅱ調査概要』1983年 勝山市教育委員会
- ⑲ 田辺常博ほか『一港遺跡・北寺遺跡』1992年 福井県三方郡三方町教育委員会
- ⑳ 頸部と胴部の境を撫でて稜をもたせる土器は、山陰地方の崎ヶ鼻1式に類似する例を見るが、口縁部文様帯の構成には大きな差がある。
- ㉑ 工藤俊樹ほか『鳴鹿遺跡』主要地方道勝山・丸岡線改良工事に伴う調査 1987年 福井県教育庁埋蔵文化財調査センター
- ㉒ 三輪晃三ほか『塚奥山遺跡 第2分冊』2007年 財団法人岐阜県教育文化財団文化財保護センター
- ㉓ 狩野 睦ほか『富山県大沢野町布尻遺跡緊急発掘調査概要』1977年 大沢野町教育委員会
- ㉔ 河野典夫ほか『塩屋金清神社遺跡（A地点）発掘調査報告書』2000年 岐阜県宮川村教育委員会

- ②⑤ 斎藤道保『氷見地方 考古学遺跡と遺物—氷高歴史クラブ報告書N011—』1964年 富山県立氷見高等学校歴史クラブ
- ②⑥ 高堀勝喜「先史文化」『能登 自然・文化・社会』1955年 平凡社
- ②⑦ 柳井 睦ほか『岩峯野遺跡 緊急発掘調査概要』1976年 富山県教育委員会
- ②⑧ ⑭文献と同じ。このほかに下記の文献がある。
- a 杉島孝博「第二節 縄文時代の遺跡・遺物—高波ふるや遺跡」『石川県珠洲市史第一巻 資料編自然・考古・古代』
- b 加藤三千雄ほか「高波遺跡」『能登縄文資料 山内清男考古資料6』1993年 奈良国立文化財研究所
- ②⑨ 小島俊彰「第6章 仏生川流域 四十塚遺跡(081)」『氷見市史 資料編5 考古』2002年 氷見市
- ③⑩ 小島俊彰「3. 是ヶ谷遺跡」『富山県福光町鉄砲谷・向山島・是ヶ谷遺跡発掘報告書』1973年 富山県教育委員会
- ③⑪ 米澤義光「気屋式土器様式」『縄文土器大観 4 後期 晩期 続縄文』1989年 小学館
- ③⑫ 久保 清・高堀勝喜「河北郡宇ノ気町気屋遺跡」『石川考古学研究会々誌 3 』1951年 石川考古学研究会
- なお、気屋式が編年表上に現れるのは②⑤文献による。気屋遺跡の調査資料は②⑧b文献による他、⑭文献にも掲載がある。
- ③⑬ 米澤義光「気屋式土器」『総覧 縄文土器』2008年 (株)アム・プロモーション
- ③⑭ a 布尻遺跡 ②⑧文献と同じ。
- b 真脇遺跡 米澤義光「第14群土器 気屋式期」、「第15群土器 気屋Ⅱ式期」『真脇遺跡』1986年 能都町教育委員会
- c 吉野ノミタニ遺跡 ③⑬文献と同じ。
- d 右近次郎遺跡 ③⑬文献と同じ。
- e 福浦ヘラソ遺跡 米澤義光ほか『福浦ヘラソ遺跡』1991年 能都ダイヤモンド・ゴルフ場(予定地)内埋蔵文化財調査委員会
- f 安居五百歩遺跡 山本正敏ほか『富山県福野町安居五百歩遺跡Ⅰ』1990年 福野町教育委員会
- g 紺屋町ホンデン遺跡 加藤三千雄「押水町紺屋町ホンデン遺跡出土土器の再検討」『石川考古学研究会々誌 第34号』1991年 石川考古学研究会
- h 気屋遺跡 ⑭文献のほか、米澤義光ほか『宇ノ気町気屋遺跡』1996年 石川県河北郡宇ノ気町教育委員会
米澤義光「気屋遺跡」『能登縄文資料 山内清男考古資料6』1993年 奈良国立文化財研究所
- i 赤浦遺跡 ⑭、②⑧b文献のほか以下に以下の文献がある。高堀勝喜ほか『赤浦遺跡』1977年 七尾市教育委員会
- j 道下鷹塚遺跡 ⑭、②⑧b文献と同じ。
- k 境A遺跡 ⑭文献のほか以下に以下の文献がある。狩野 睦ほか『北陸自動車道遺跡調査報告朝日町編—境A遺跡土器編—』1991年 富山県教育委員会
- l 曾福遺跡 ⑭文献のほか、米澤義光ほか『曾福遺跡』1980年 穴水町教育委員会
- m 大津くろだの森遺跡 久田正弘ほか『田鶴浜町 大津くろだの森遺跡』2002年 (財)石川県埋蔵文化財センター
- n 道下元町遺跡 ⑭文献のほか以下に以下の文献がある。西野秀和ほか『門前町道下元町遺跡』1985年 石川県埋蔵文化財センター
- o 万行遺跡 ⑭、②⑧b文献と同じ。
- p 上田うまばち遺跡 ⑭文献のほか以下に以下の文献がある。西野秀和ほか『上田うまばち遺跡』1983年 押水町教育委員会
- r 波並にしの上遺跡 ⑭文献のほか以下に以下の文献がある。高堀勝喜ほか『能都町波並西の上遺跡発掘調査報告書』1976年 石川県教育委員会
- ③⑮ 同様の把手は吉野ノミタニ遺跡で確認できるほか、三重県新徳治遺跡や同県贄遺跡でも出土しているほか、近畿地方にも類似品がある。
- a 小濱 学ほか『新徳治遺跡』1997年 三重県埋蔵文化財センター
- b 松本茂一ほか『鳥羽 贄遺跡』1975年 鳥羽市教育委員会
- c 上田文雄『勝楽寺遺跡(5次調査)—本文編・遺物図版編—』1997年 能登川町教育委員会

第4章 まとめ

波寄三宅田遺跡の調査で出土した縄文時代の遺物については、第1章において分類を加え、その内容について述べた。ここでは主に、分類した有文深鉢形土器の土器編年上の位置づけを、大まかに記すこととしたい。

第1群土器は、発掘調査で一括出土したものではなく、表裏に縄文を施す土器を確認したことから、無文土器などから抽出したものであり、時期の異なる品が混入している可能性が高い。表裏に縄文を施すもののほか、内面に条痕や撫で痕を残すもの、丸底風の底部、微量な繊維の混入などから判定した。なお、篋状工具による刺突文を口縁部に施す土器は、東海地方で編年される粕畑式に類似する。また、表裏に縄文を施すものや条が縦走や横走る縄文など、県内の福井市北堀貝塚出土土器^①や、玦状耳飾りが多数出土したあわら市桑野遺跡出土土器に類似が認められ、早期末葉に位置づけ得ると考える。なお、北陸地方中枢域でも同期の資料の蓄積が進んでいる^③。

第2群土器は微隆起線を施すやや薄手の土器である。微隆起線には断面三角形のものと、素麵状のものがある。北陸地方で編年される蛭ヶ森式もしくは、近畿地方で編年される北白川下層Ⅱc式に相当すると思える。

第3群土器は北陸地方において中期初頭に編年される、新保式もしくは新崎式に含まれる土器と思える。また、第4群土器および第5群土器は中期中葉の土器であり、第4群土器が東海地方において編年される所謂咲畑式に、第5群土器が北陸地方の古府式に含まれる土器と考える。この両群は福井県を中心とする北陸地方西部域において、深鉢形土器を前者が占め、鉢形土器を中心に後者が占め、これに在地系の大型の深鉢形土器を加えて、異型式土器群がセットを組むと想定されている^④。

第6群土器および第7群土器は中期後葉に位置づけられ、このうち第6群は楕円と渦巻を組み合わせた口縁部区画文や矢羽根状沈線の充填を特徴として、北陸地方西部域で大杉谷式と編年する土器群に当たる。また、第7群は区画内充填文に縄文を使用する加曾利E式的色彩の強い土器であり、第6群に伴う。これら土器群に関する資料は、東海地方から長野県の伊那谷にかけて分布している。特に、岐阜県が徳山ダム建設関連で調査した、戸入村平^⑤、塚奥山^⑥などの遺跡で出土した土器群は、古段階の様相を検討するうえで重要な資料であり、大杉谷式および伴出する加曾利E式系土器群や、先行する咲畑式系土器群との関係について再度検討する必要がある。

第8群土器は、第5図56、57など、近畿地方において北白川C式として編年される土器群に相当するものと思える。また、第9群土器は口縁部に幅の狭い文様帯を残す土器であり、北白川C式終末期の土器と思える。なお、中期終末から後期初頭にかけてと思える、充填縄文を施す土器も本群に含めている。

第10群土器は瓢形を呈する土器であり、微隆起線により文様を描く。関東地方においては加曾利EⅣ式から堀之内1式にかけての時期で類品の出土が知られており、同様な時期を与え得るものと思う。

なお、第11群土器から第24群土器については、前節で検討を行ったため再述を控えたい。

第25群から第28群土器は、概ね堀之内1式に並行する時期の所産と考える。この内第25群土器は地文に縄文を施し、沈線で文様を描く。第26群土器は口辺部に隆帯や沈線により、方形の区画文を配す土器であり、器形は口縁部を外反させる朝顔形を呈す。なお、第28群土器は口端部を内方に肥厚させ、蓋受け状の鐔状凸帯を廻らす土器であり、気屋式に伴うものと考えている。

第29群土器は後期後葉に位置づけられ、近畿地方に分布する宮滝式、あるいは北陸地方に分布する井口式などに対比でき、凹線文系土器に含まれる土器群である。

有文深鉢形土器以外の器種は、共伴関係も把握できないことから、特徴的な例に限り説明を加えておきたい。

鉢形土器・壺形土器で後期初頭と考えるものは、幅広の縄文帯で文様を構成する。第83図1や小さなJ字文を施した2のほか、第83図17から23、32から34など口縁部に縄文帯の沈線を切り上げて区画文を配すものがある。第83図36から44、55も同期の所産であろう。また、第86図1、2は福田K2式に伴うものと思う。

なお、第83図5や第86図3は気屋式に伴うものである。第86図6は堀之内1式期の所産と考えるが、沈線の交点に加えた刺突など、気屋式の特徴も見える。第86図6は堀之内2式に比定できる大型の鉢であり、隅丸三角形の撥形区画文を残す。また、第83図11、12も堀之内2式期の所産である。なお、第83図26は横走る縄文帯間に先端をしの字状に丸めた入り組み文を加えており、四国方面の土器であろうか。第86図9から14は堀之内式系の土器であり、13のように長野方面との関係が強い。第86図15、16の壺形土器は、石川県万行遺跡や火打谷大垣内遺跡などに類例があり、気屋式に伴うものと思える。第87図1から23は、内面文様を施し大半が堀之内2式に伴うと考えるが、19は文様から時期がやや下ると思える。なお、21は九州方面の鐘崎式系土器であろう。

浅鉢形土器のうち第93図1や第94図1から4のくの字に屈曲する口縁部を有す土器は、多くが後期中葉に下ると思える。また、第94図19から21は大型の刺突文などから後期前葉の所産と思える。なお、22、23の屈曲して大きく開く土器は、時期が大きく下る可能性が高い。第94図30から39は口縁部に残る区画文から、後期初頭の所産と考える。第93図3は器面調整に刷毛目状の細密沈線を使い、山陰系の土器と思える。第93図4や第98図の大型把手を配した浅鉢は関東系の土器であり、気屋式に伴うことが知られている。第93図5の釣手土器は気屋式に伴うものであり、いくつかの出土例がある。

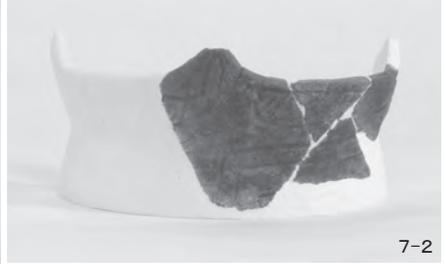
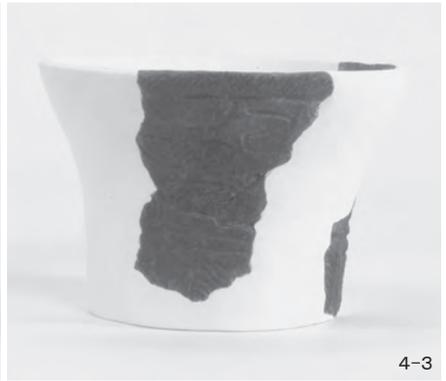
注口土器では第99図1、3が後期初頭の所産と思えるほか、4、5が堀之内1式並行期の所産と思える。また、第102図1から4、6から10は堀之内2式並行期の所産であろう。第103図1は注口部と把手が一体となっており、堀之内1式期の所産と思える。なお、第101図10は時期が大きく下る晩期の所産である。双耳壺形土器は、把手部が多く出土したが、全形を窺える例は第99図2に止まる。全体として時期の特定には至っていない。

最後に、後期初頭および後期前葉の土器群は、層位学的な裏付けを欠くものの、当地の土器編年を考える上で重要な資料と考えている。当地において同期土器群がまとまって出土した事例はなく、試行錯誤を繰り返してまとめた今回の検討は、土器群がもつ内容の複雑さと時間幅の広さから、十分なものとはならなかった。また、先学諸氏が積み上げた研究についても言及することができなかった。今回の検討を緒として、土器群の研究をさらに進めたい。

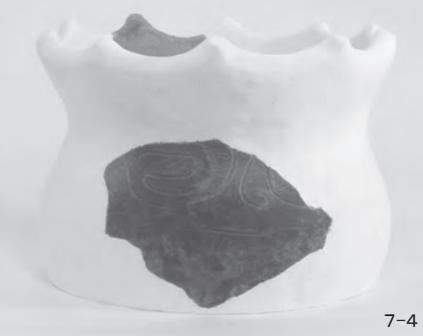
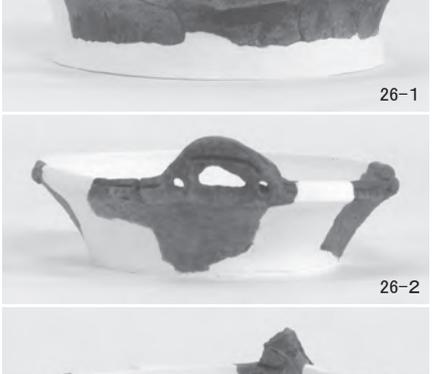
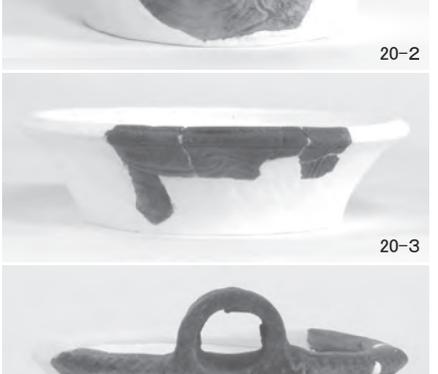
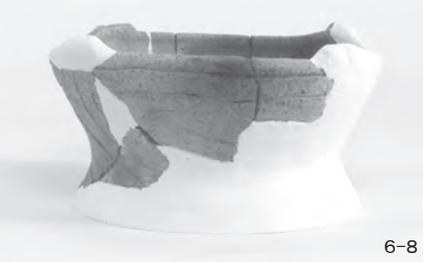
註

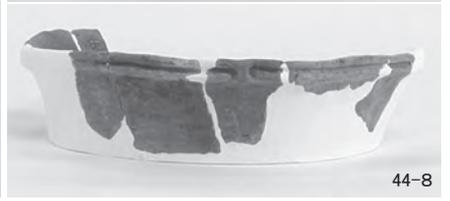
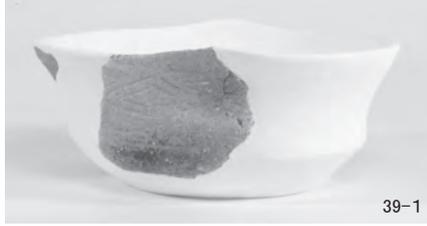
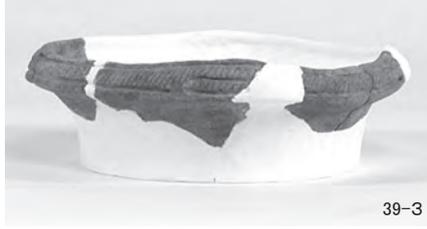
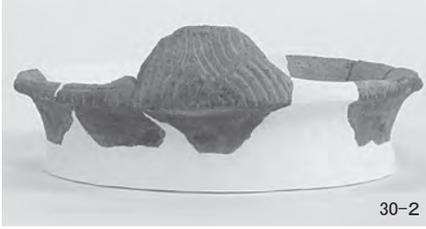
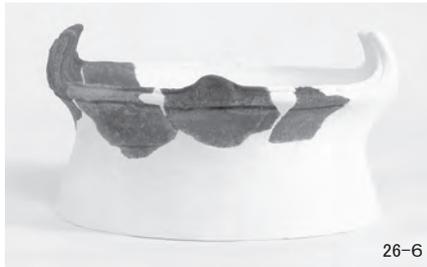
- ① 工藤俊樹ほか『北堀貝塚』1991年 福井県教育庁埋蔵文化財調査センター
- ② 松井政信ほか『桑野遺跡』2019年 福井県あわら市教育委員会
- ③ a 小坂 大ほか『六橋遺跡』1997年 石川県埋蔵文化財センター
b 町田賢一ほか『上久津呂中や遺跡発掘調査報告書』2013年 富山県文化振興財団埋蔵文化財調査事務所
c 金山哲也ほか『三引遺跡Ⅲ』2004年 石川県埋蔵文化財センター
- ④ 山本孝一ほか『栃川遺跡』2004年 朝日町教育委員会
- ⑤ 武藤貞昭ほか『戸入村平遺跡』1994年 岐阜県文化財保護センター
- ⑥ 三輪晃三ほか『塚奥山遺跡』2007年 岐阜県文化財保護センター

写真図版



図版第二 有文深鉢形土器





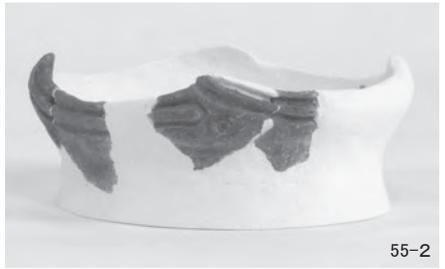
図版第五 有文深鉢形土器・鉢形土器



54-9



54-9



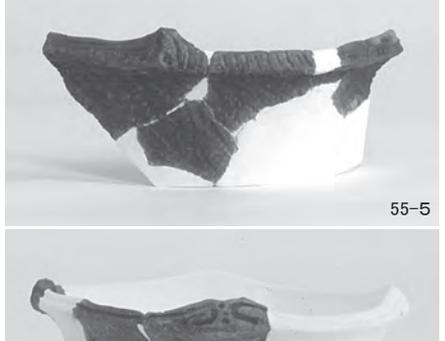
55-2



55-3



55-4



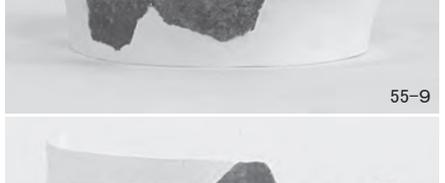
55-5



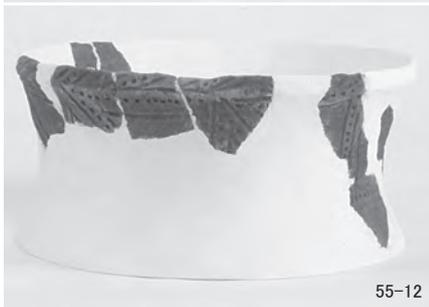
55-8



55-10



55-9



55-12



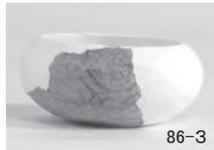
55-13



55-11



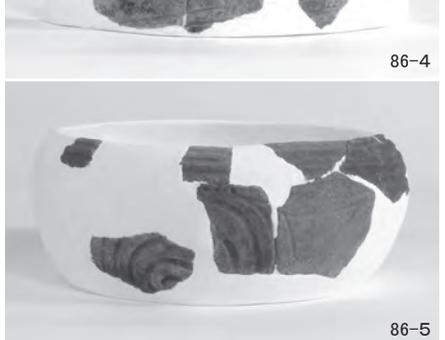
86-1



86-3



86-8



86-4



86-7



86-9



86-5



86-6



88-12



86-10

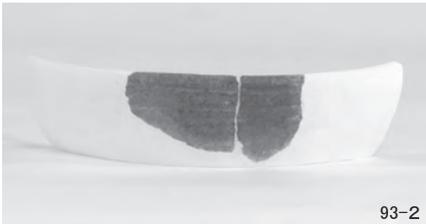


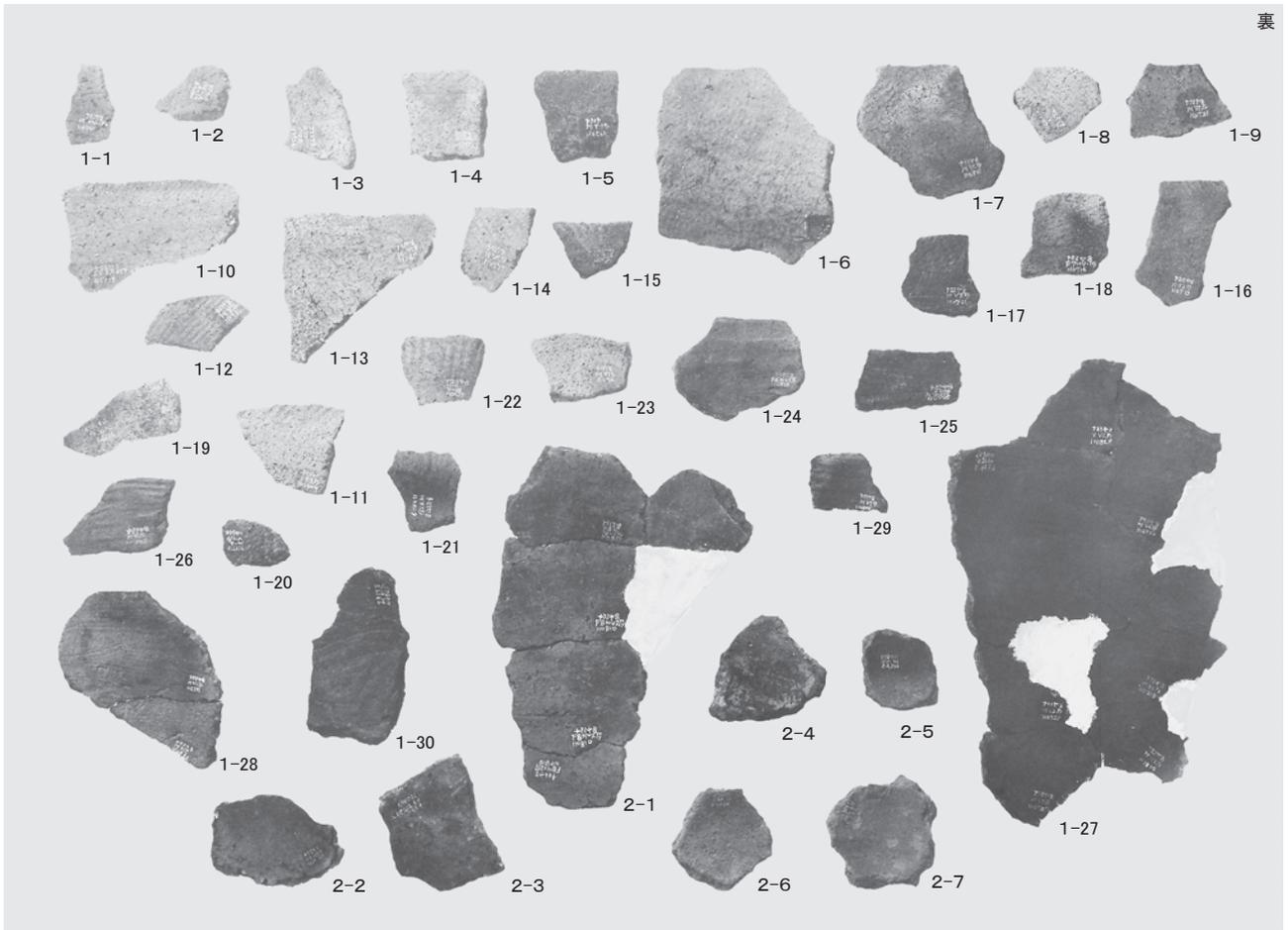
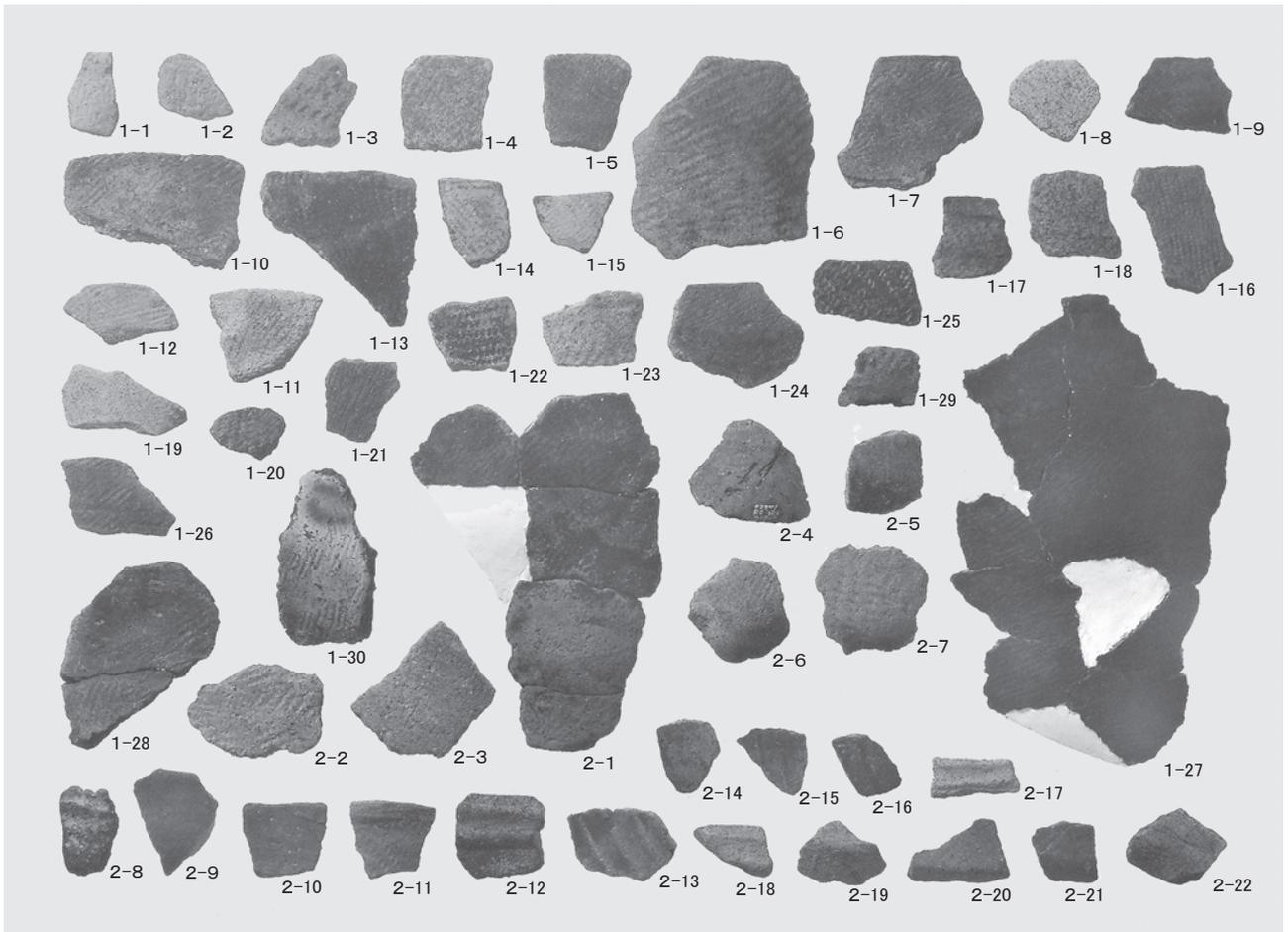
86-12



86-11

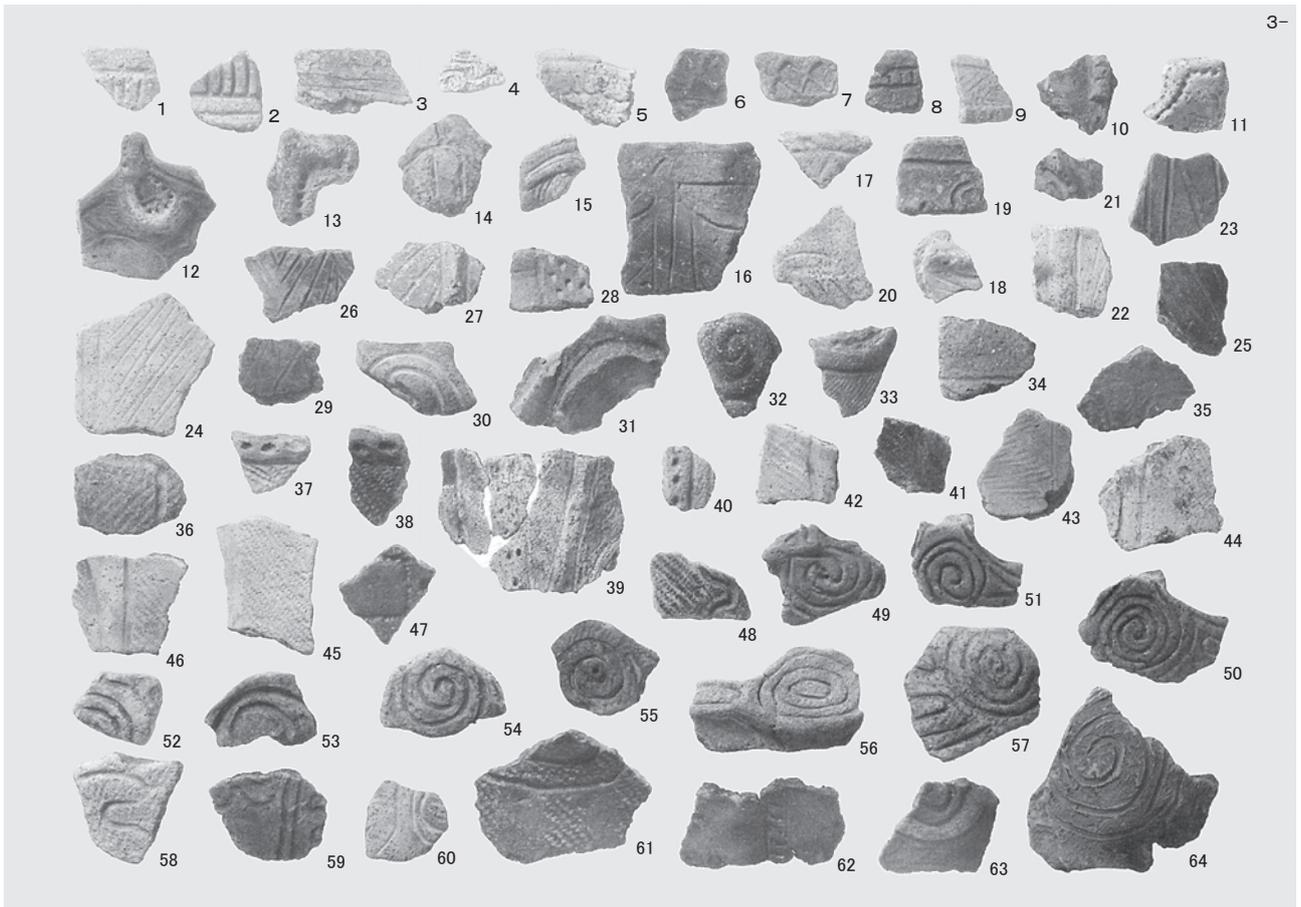
図版第六 鉢形土器・壺形土器・浅鉢形土器・釣手土器・注口土器・双耳壺形土器



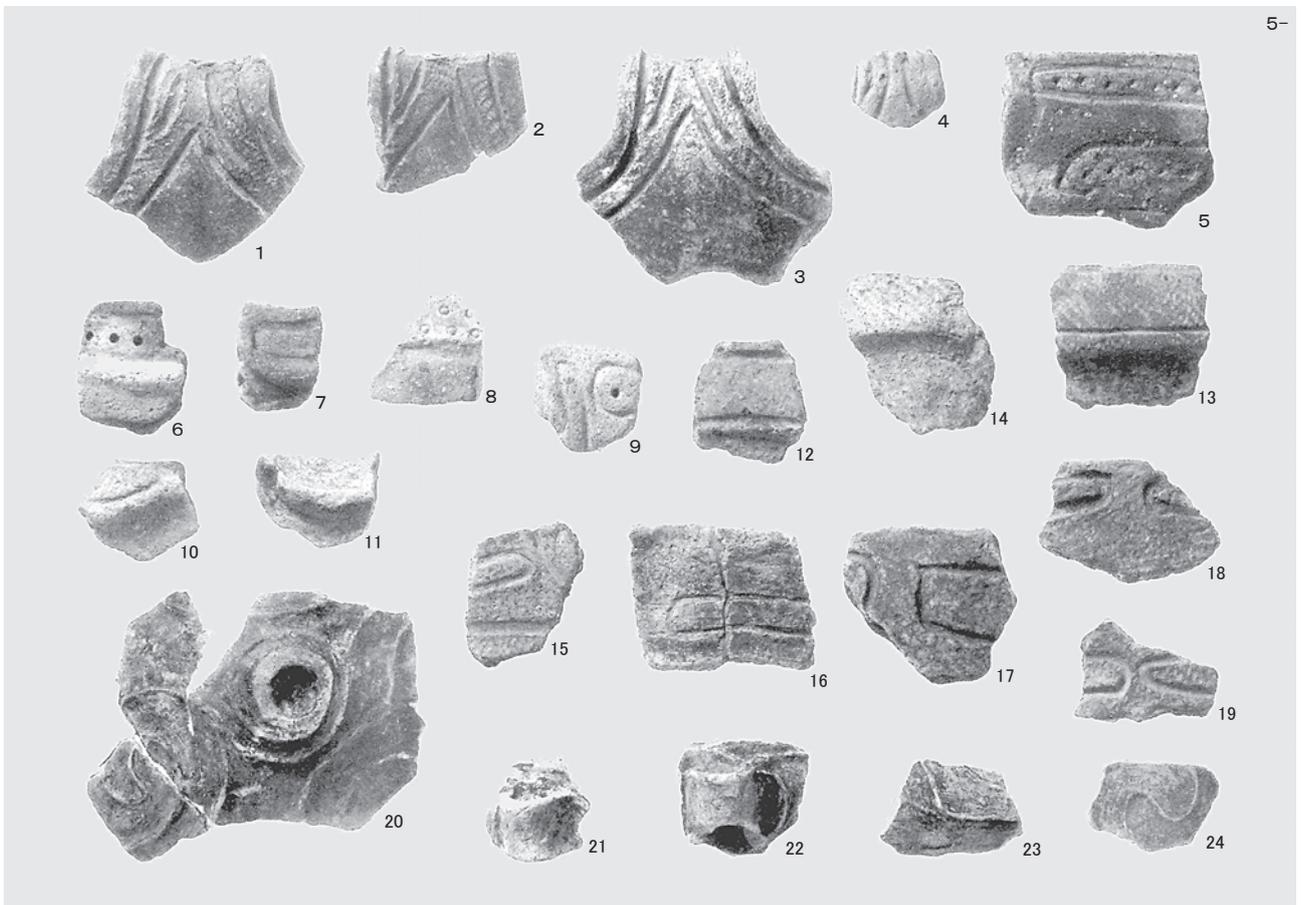


(1) 有文深鉢形土器第1群、第2群

図版第八
有文深鉢形土器



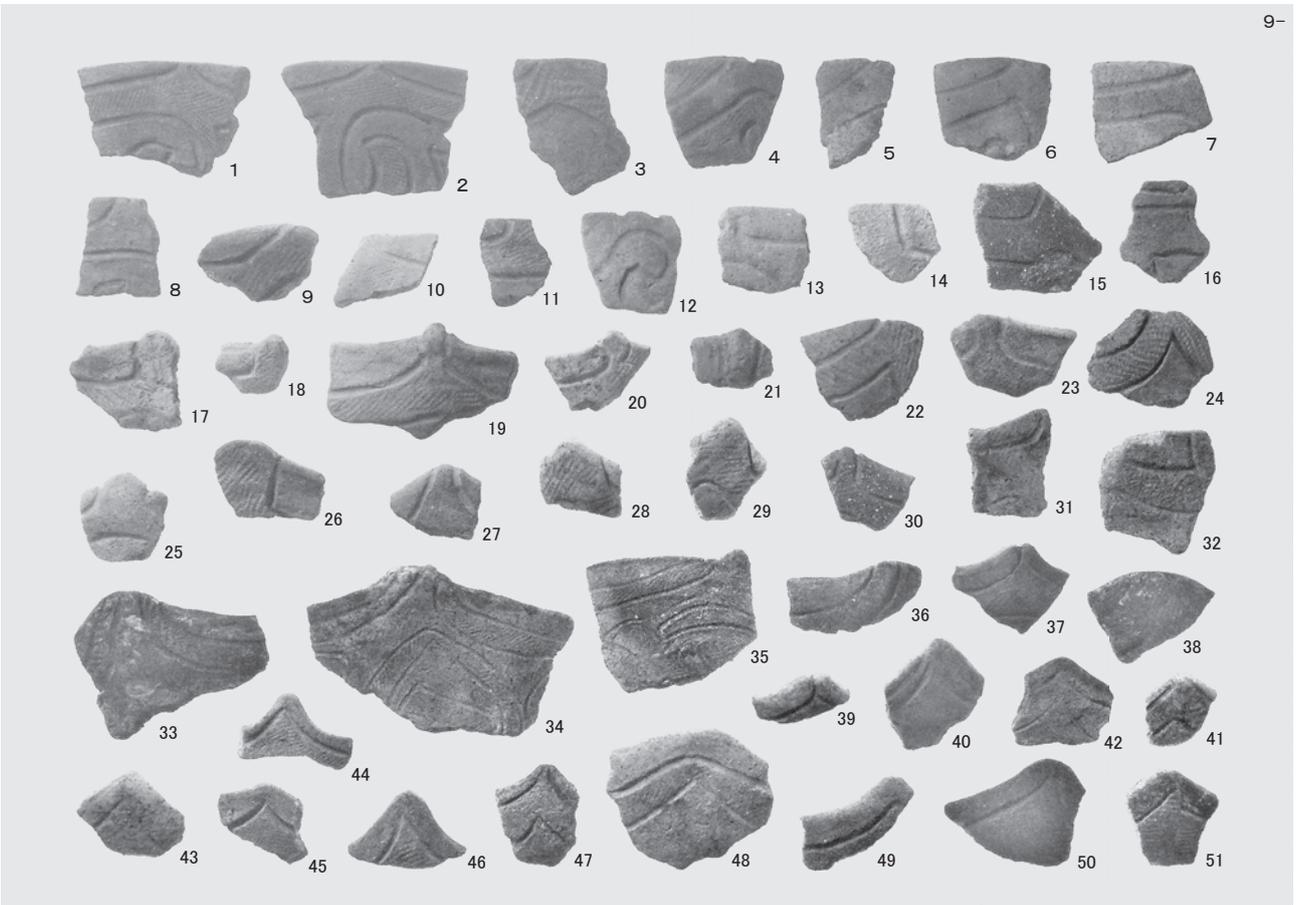
(1) 有文深鉢形土器第3群～第8群



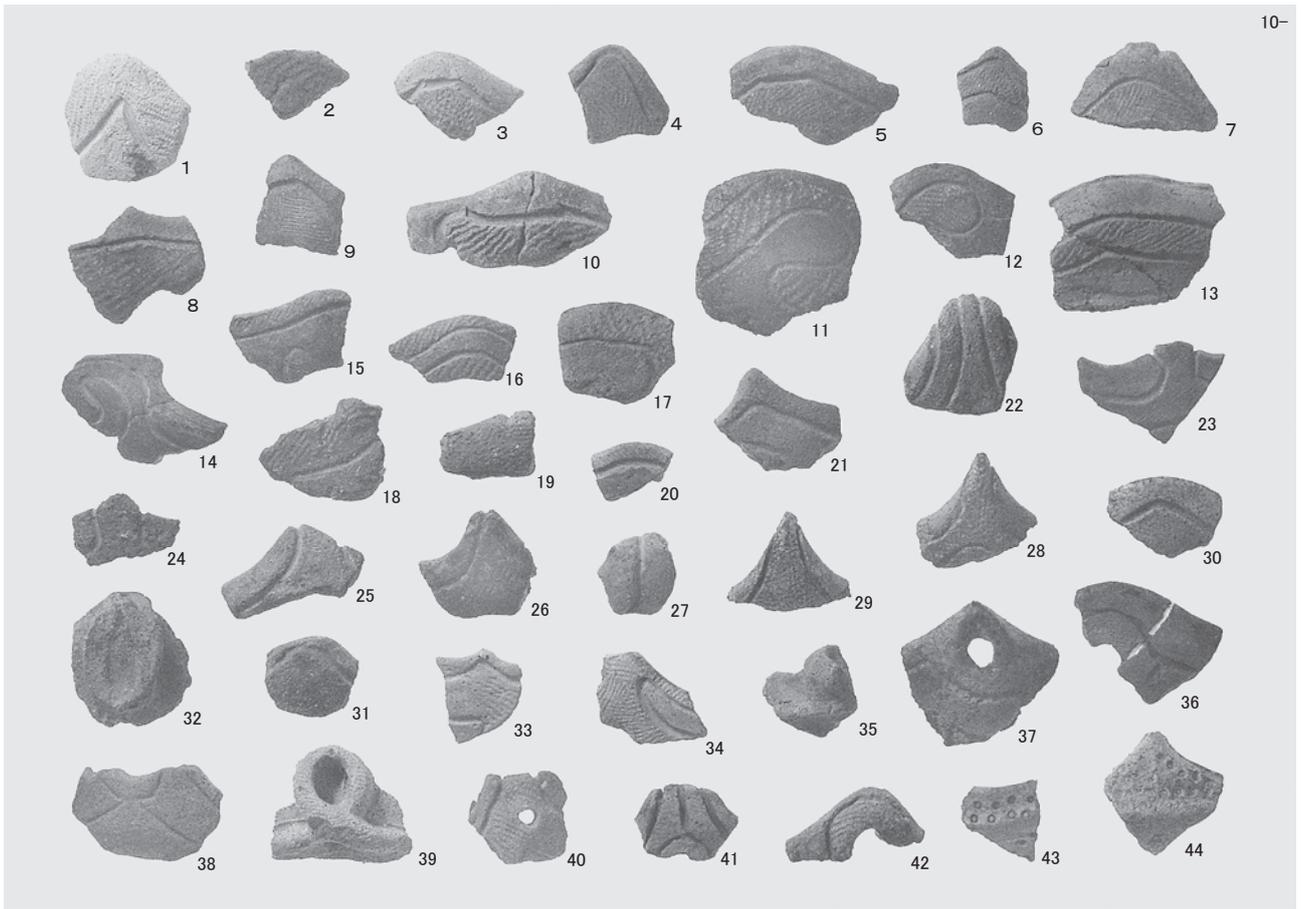
(2) 有文深鉢形土器第7群～第10群



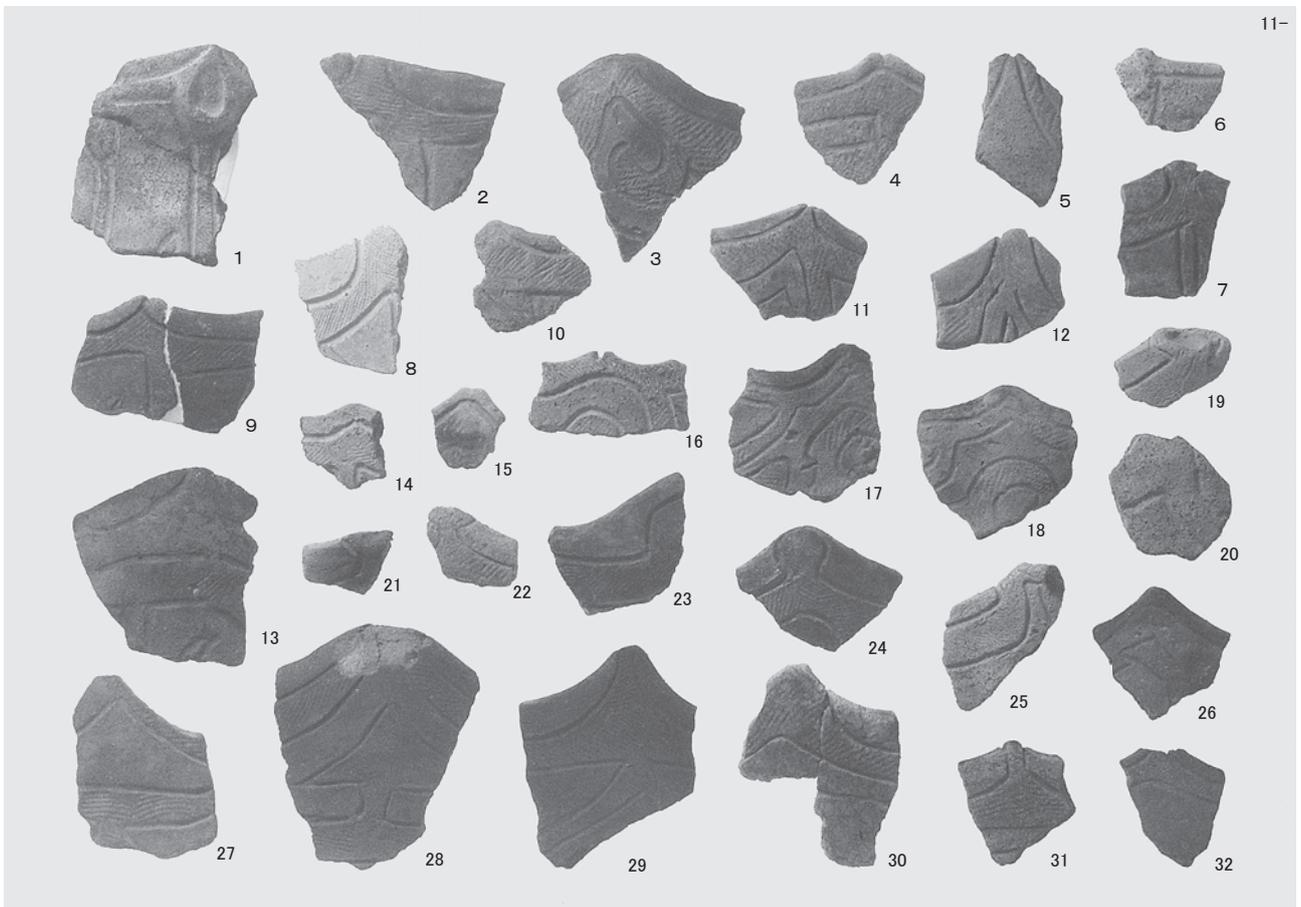
(1) 有文深鉢形土器第11群



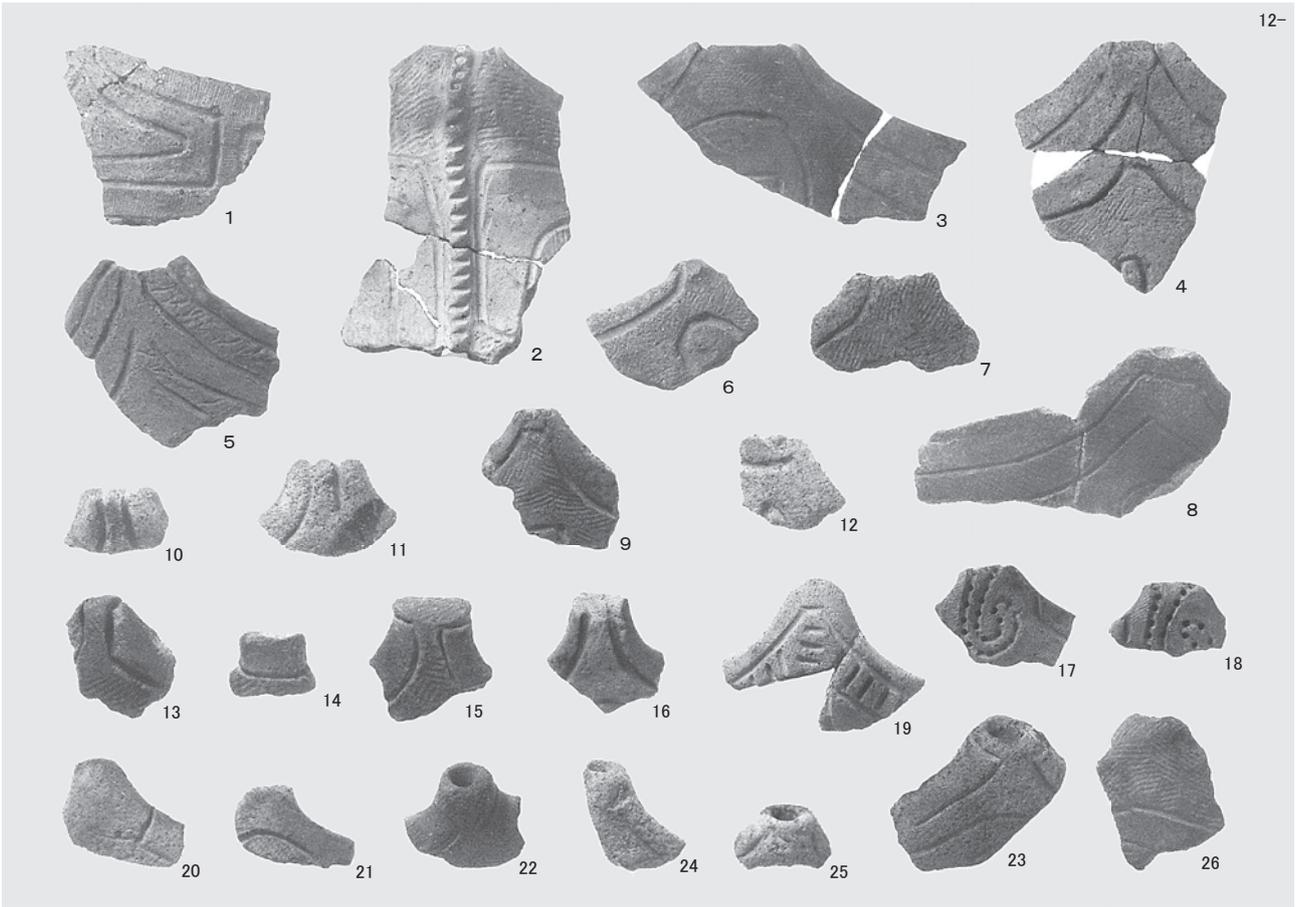
(2) 有文深鉢形土器第11群



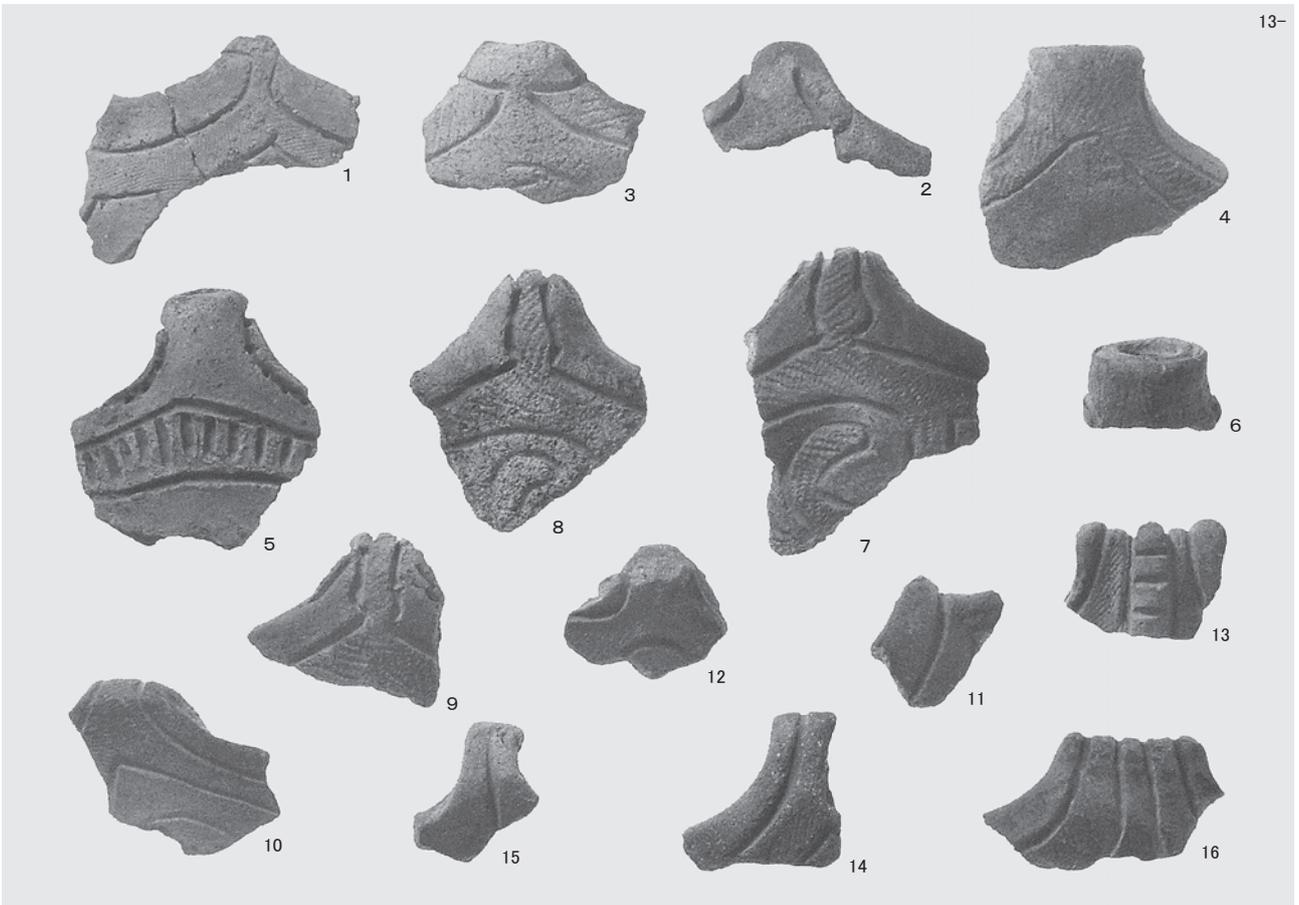
(1) 有文深鉢形土器第11群



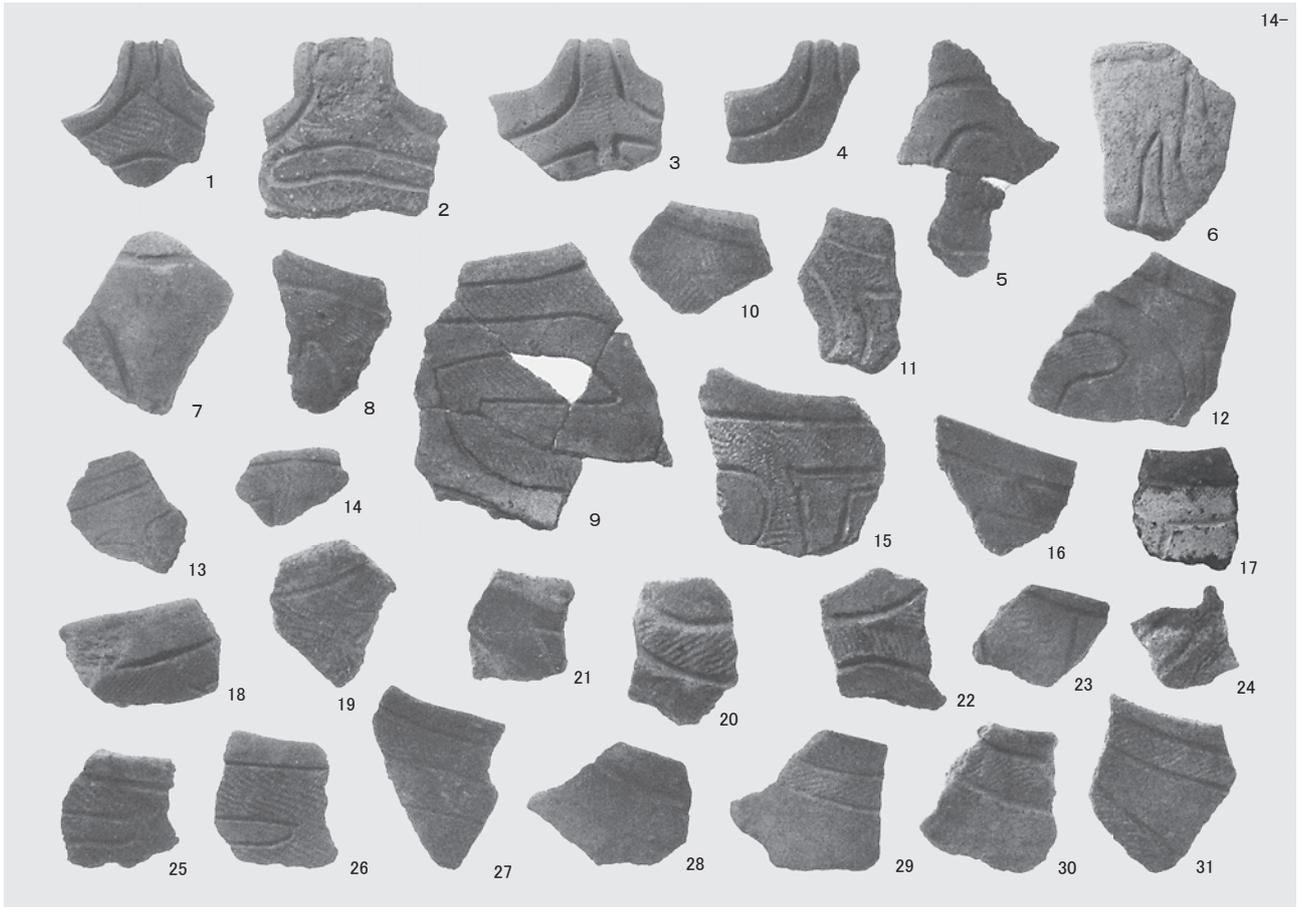
(2) 有文深鉢形土器第11群



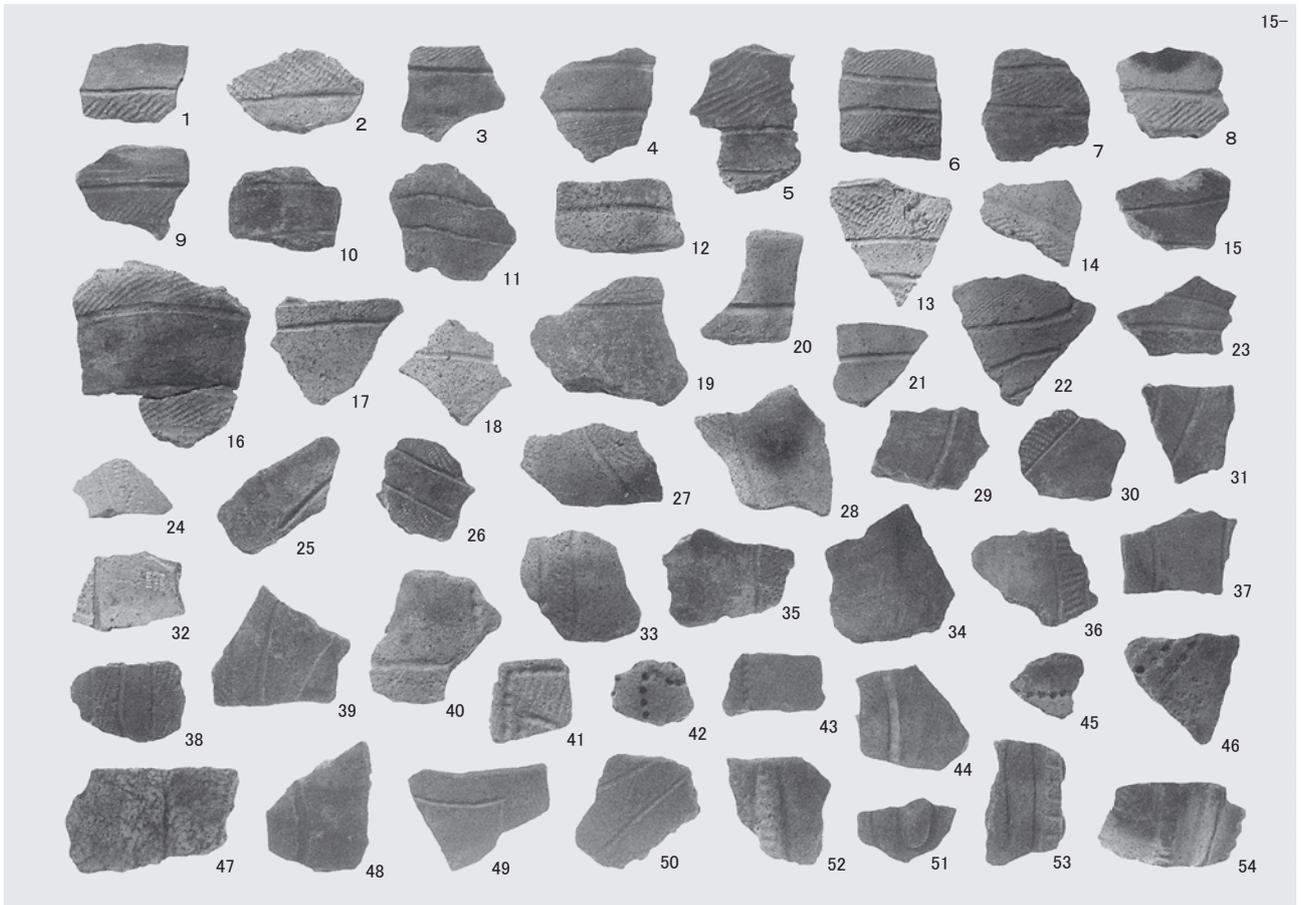
(1) 有文深鉢形土器第11群



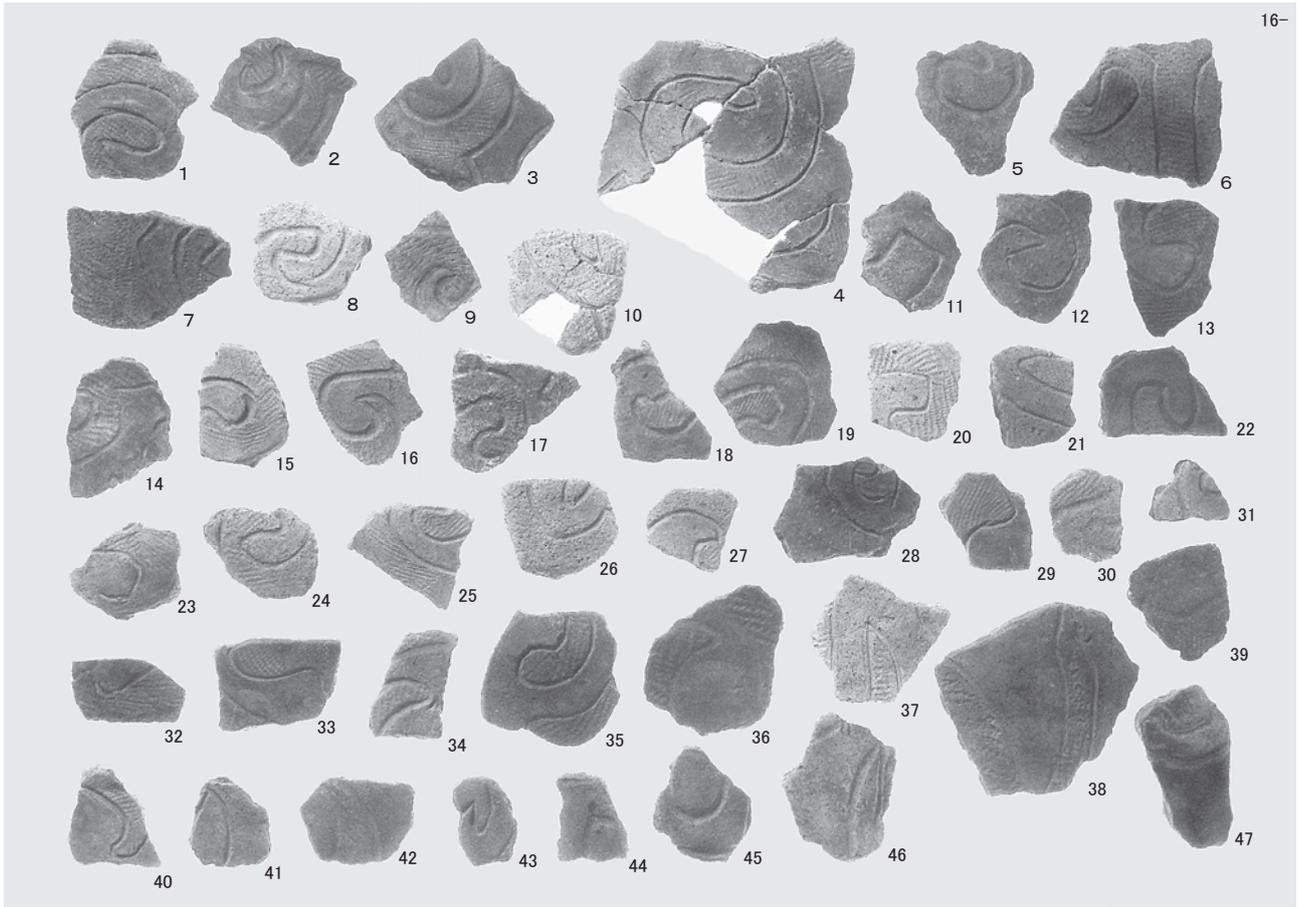
(2) 有文深鉢形土器第11群



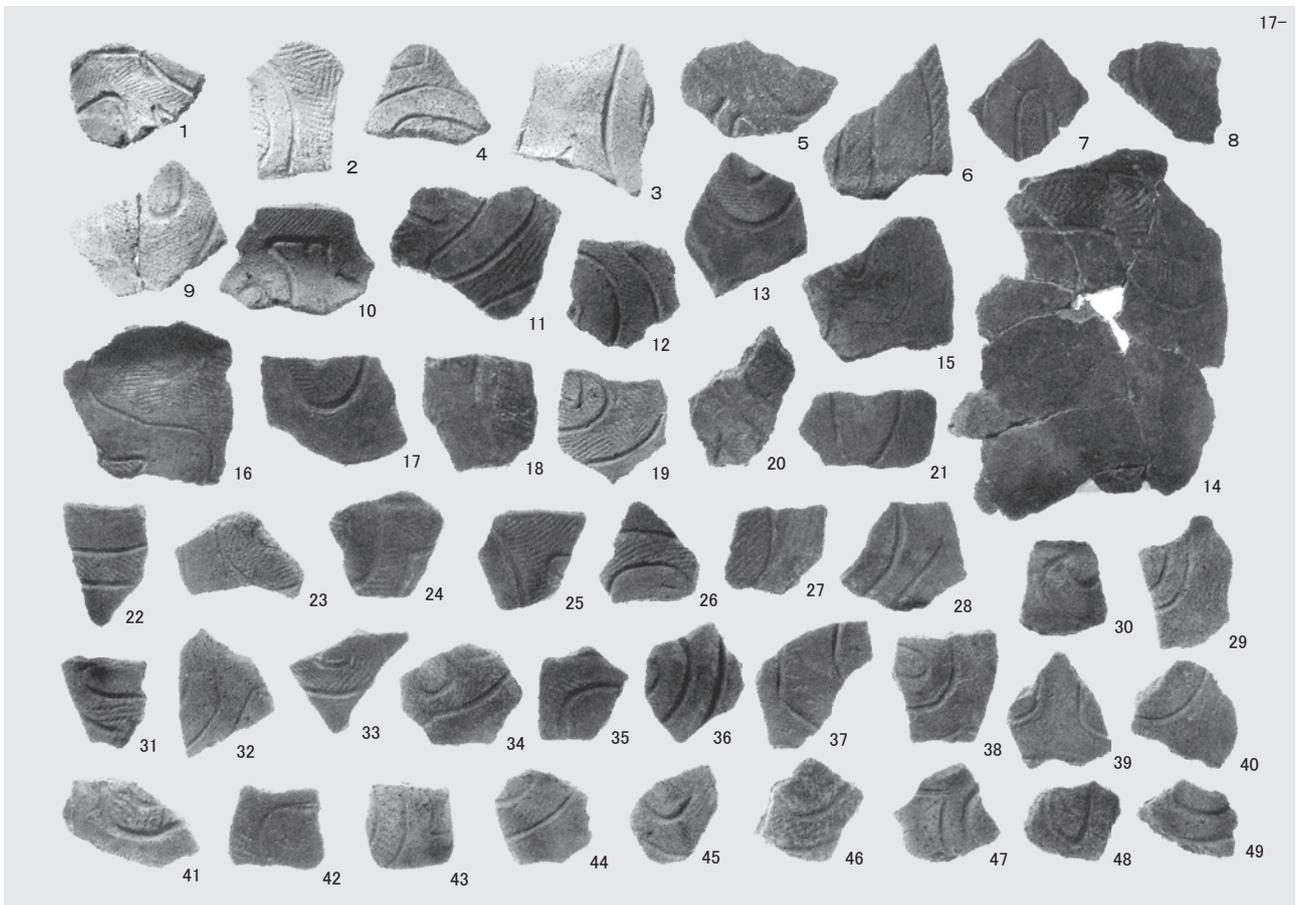
(1) 有文深鉢形土器第11群



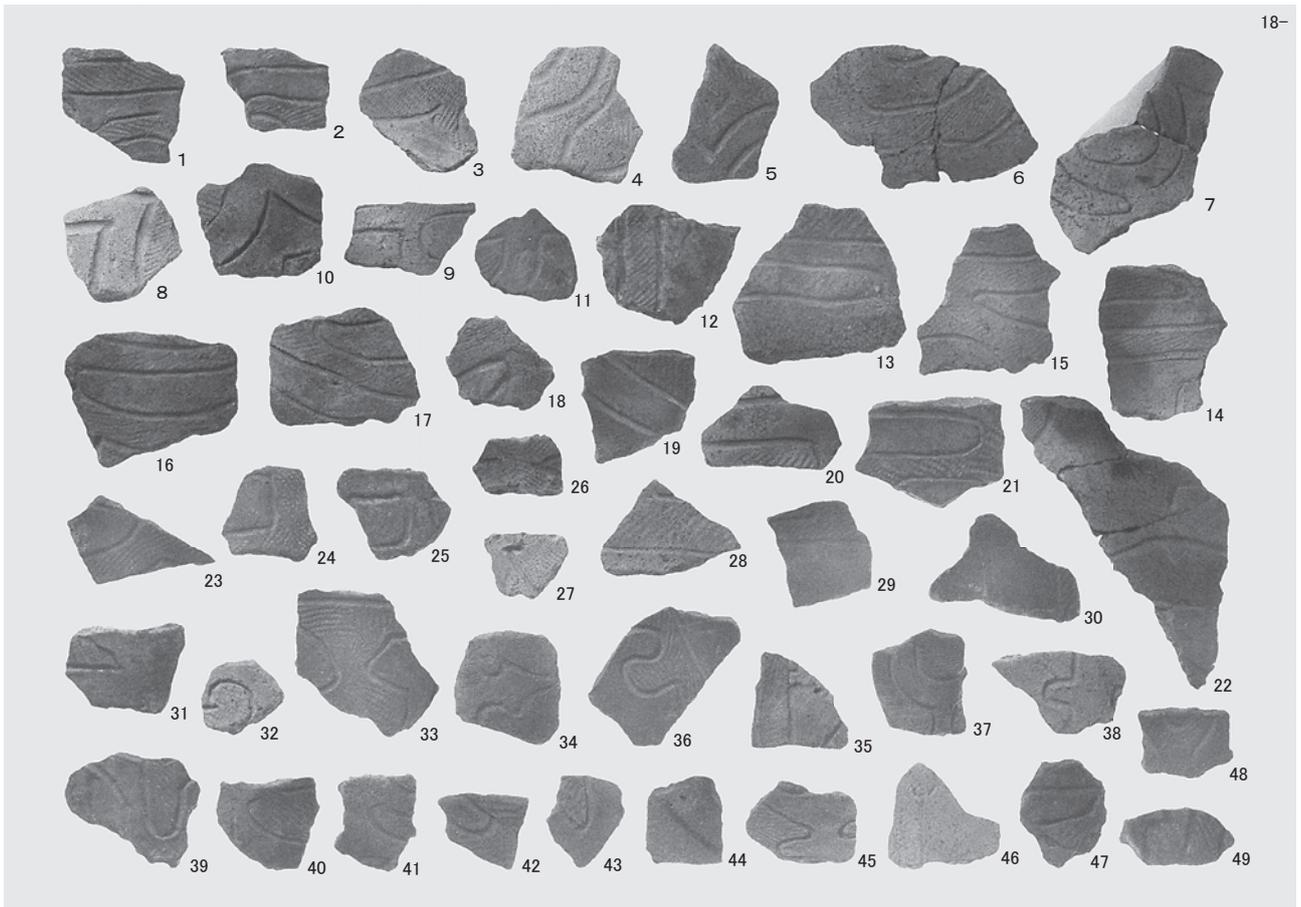
(2) 有文深鉢形土器第11群



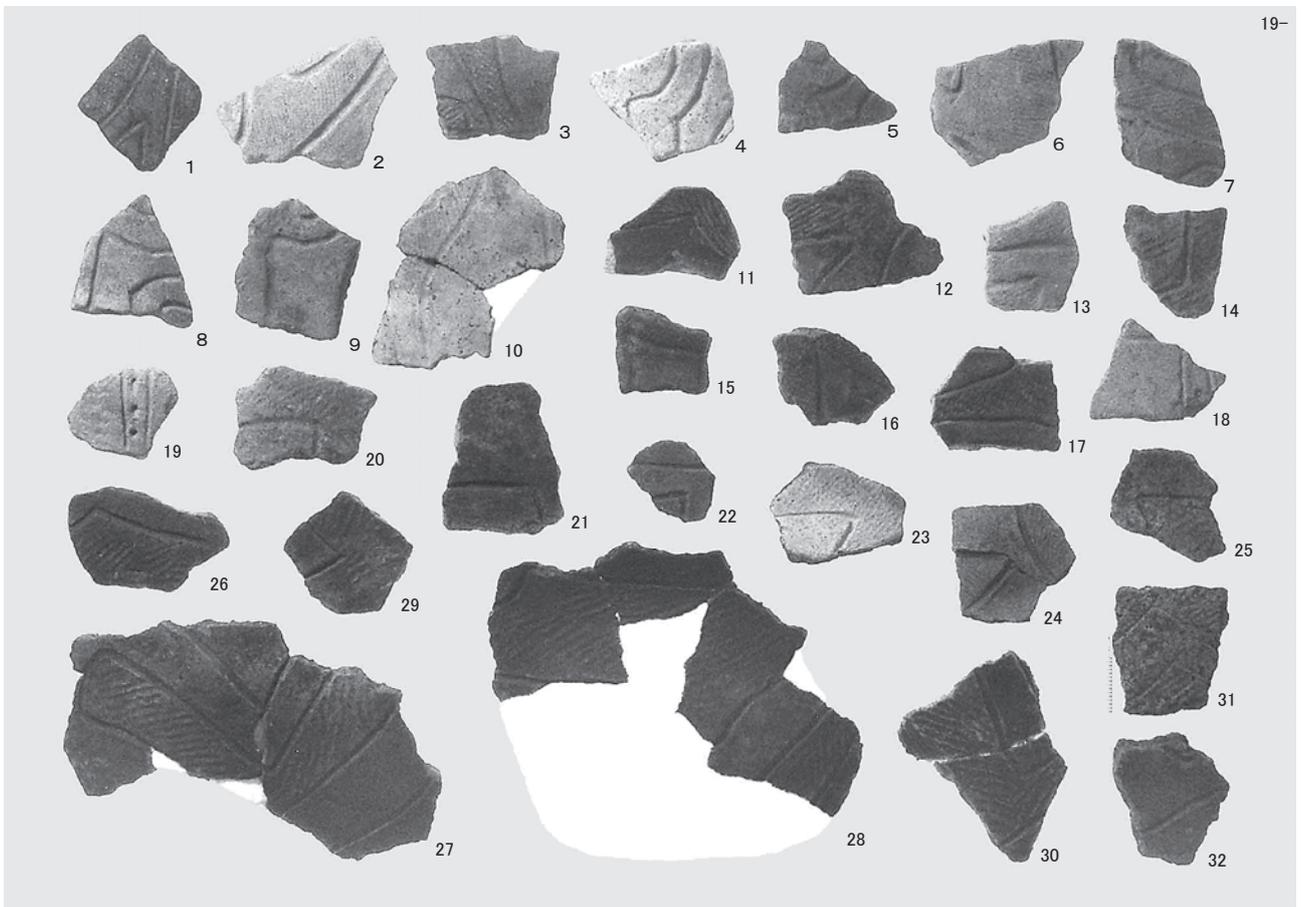
(1) 有文深鉢形土器第11群



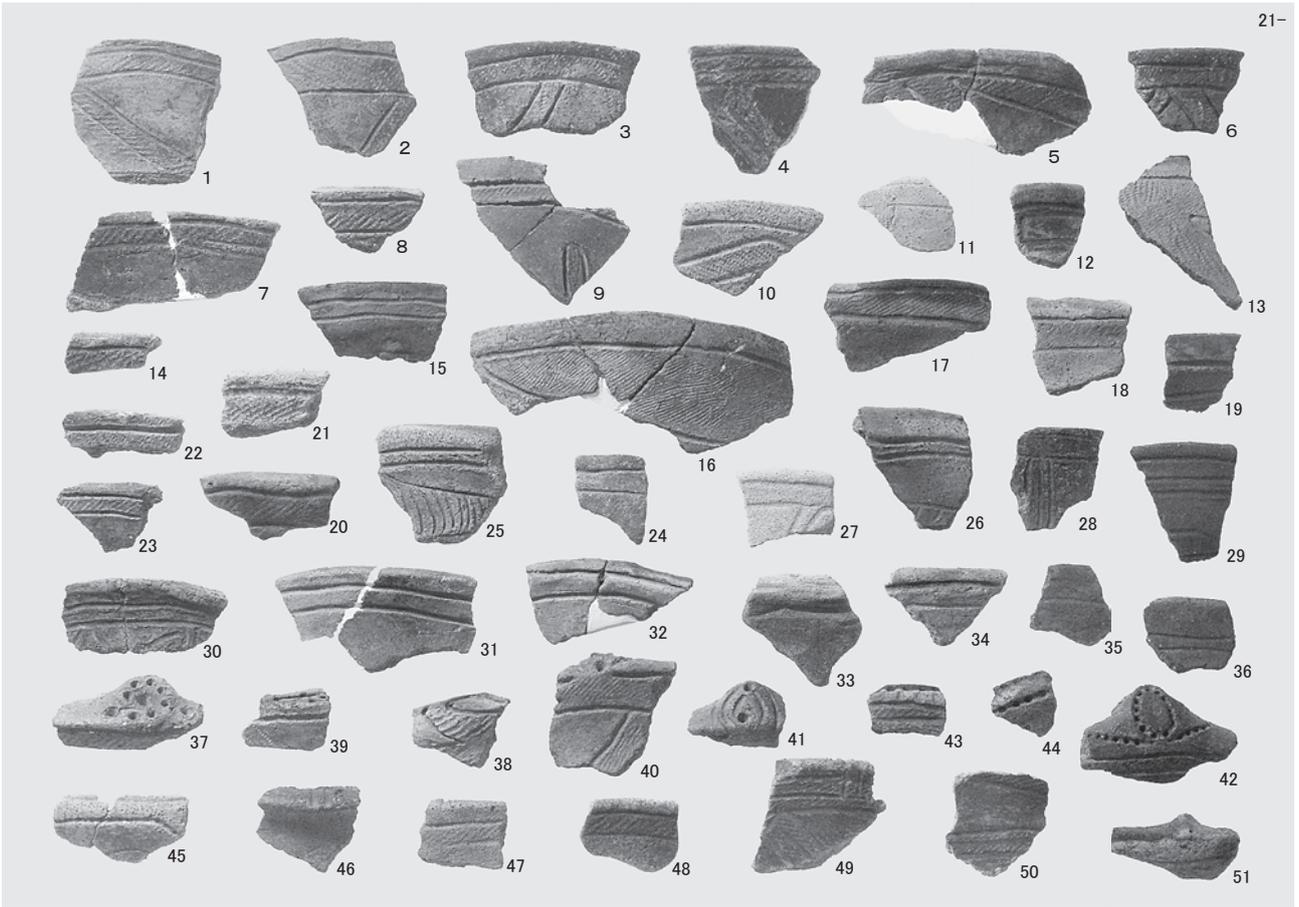
(2) 有文深鉢形土器第11群



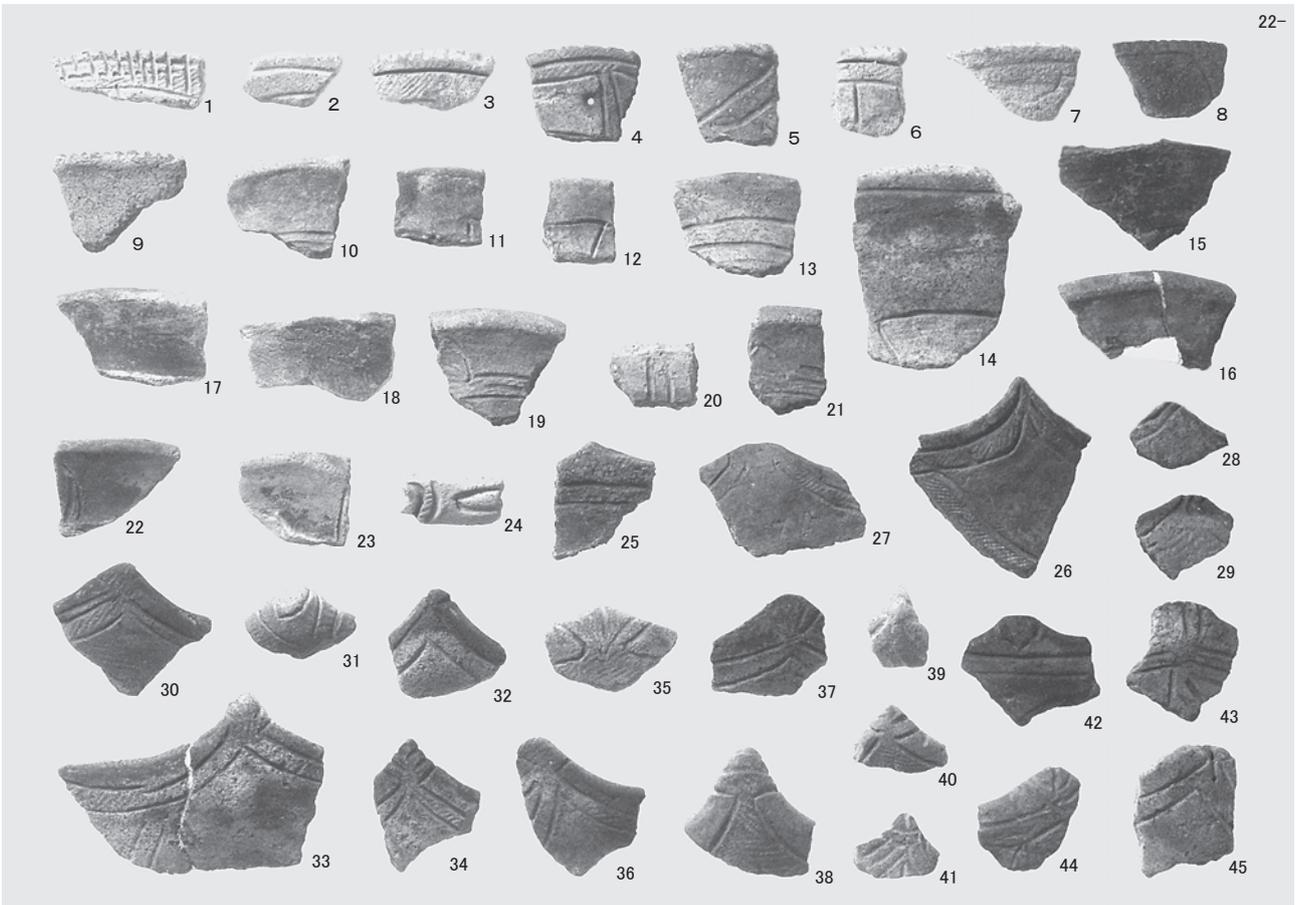
(1) 有文深鉢形土器第11群



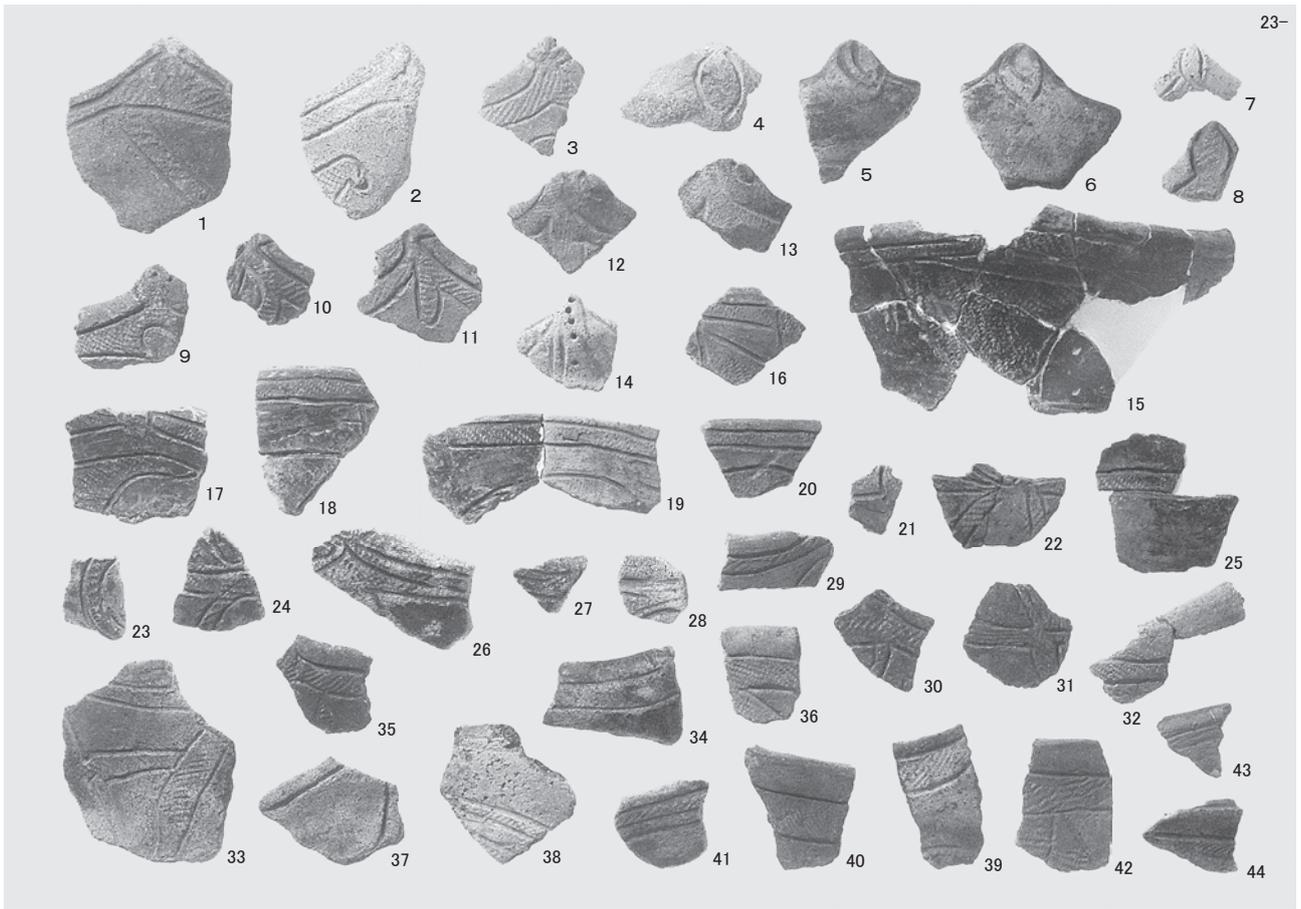
(2) 有文深鉢形土器第11群



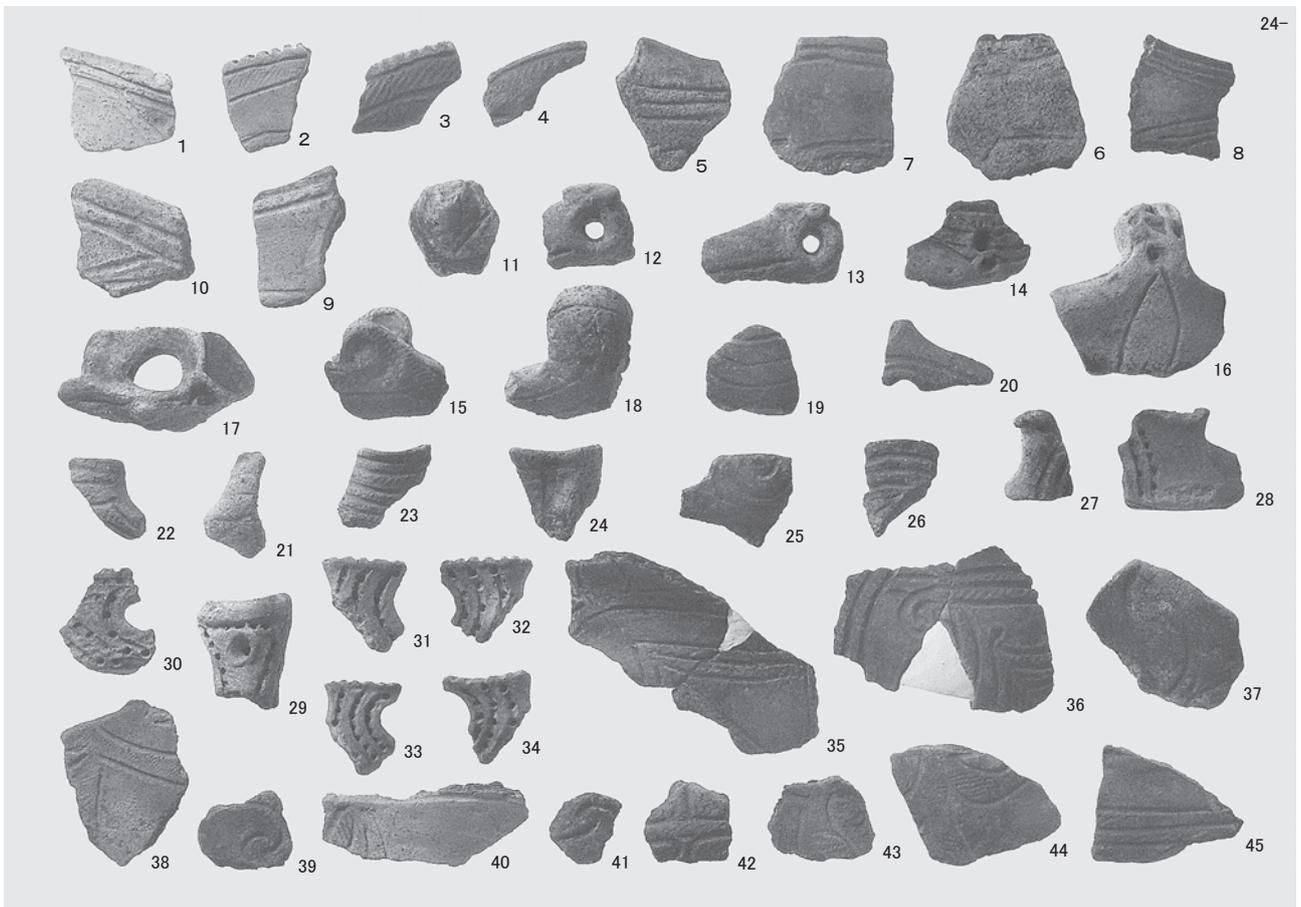
(1) 有文深鉢形土器第12群



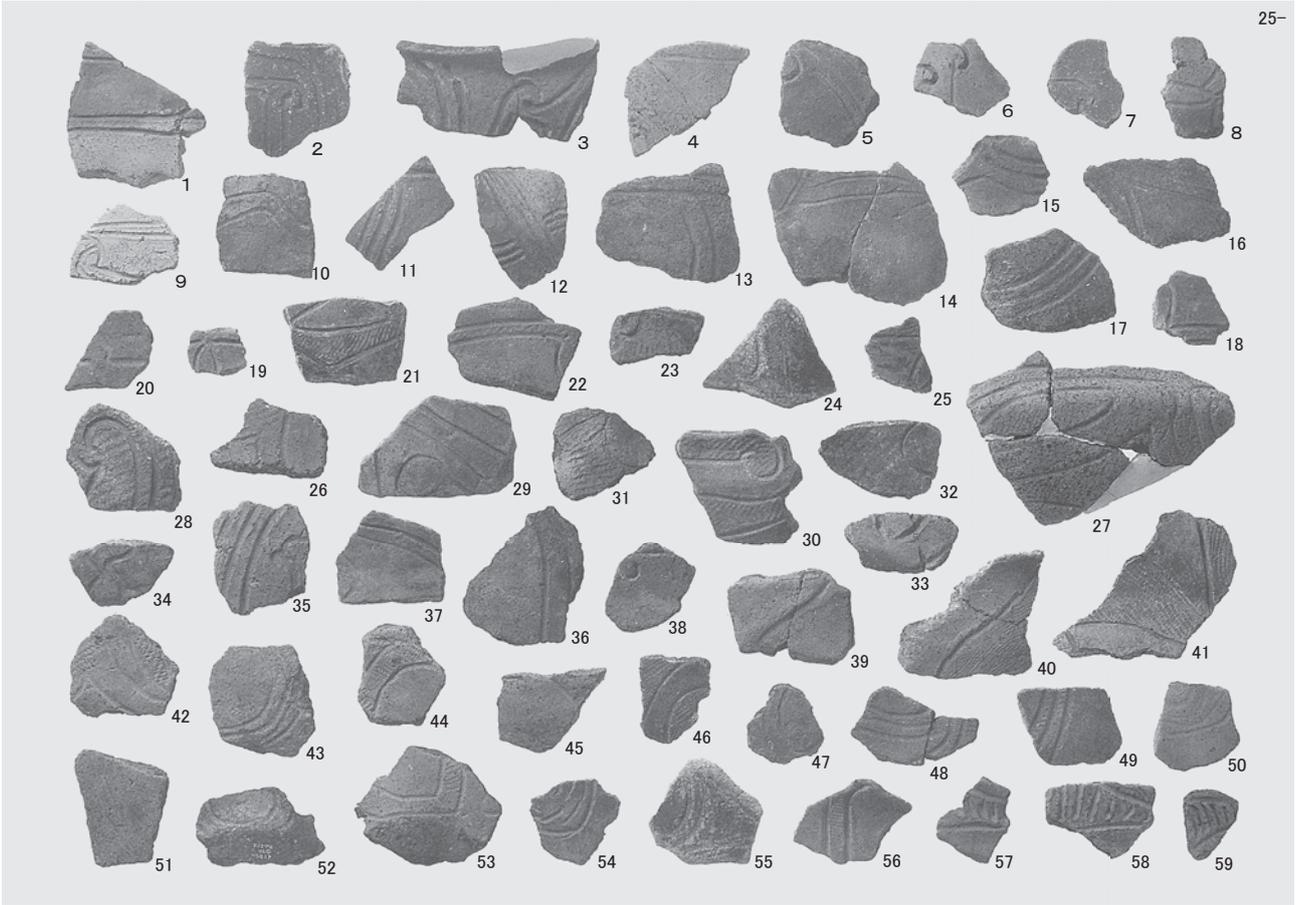
(2) 有文深鉢形土器第12群



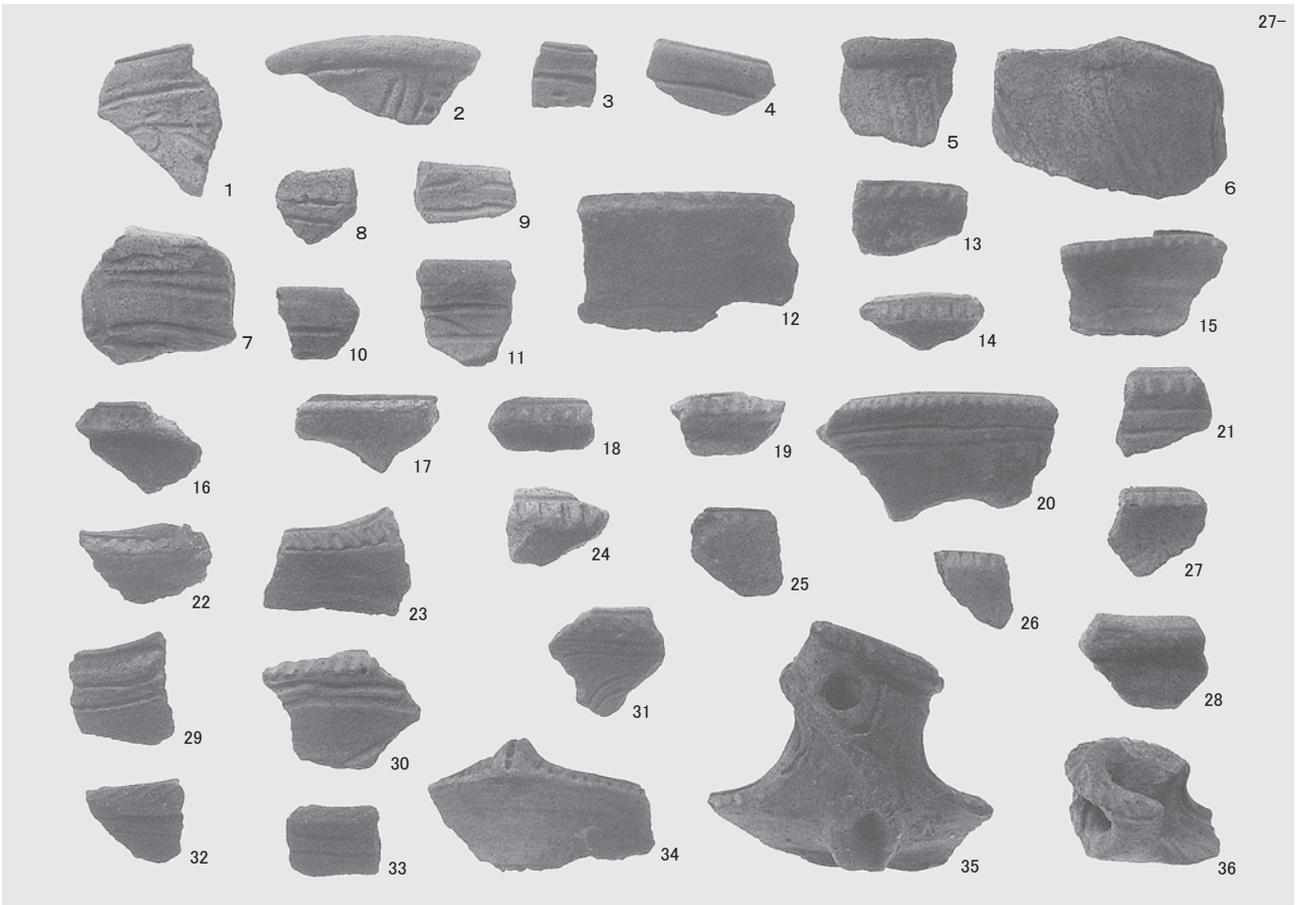
(1) 有文深鉢形土器第12群



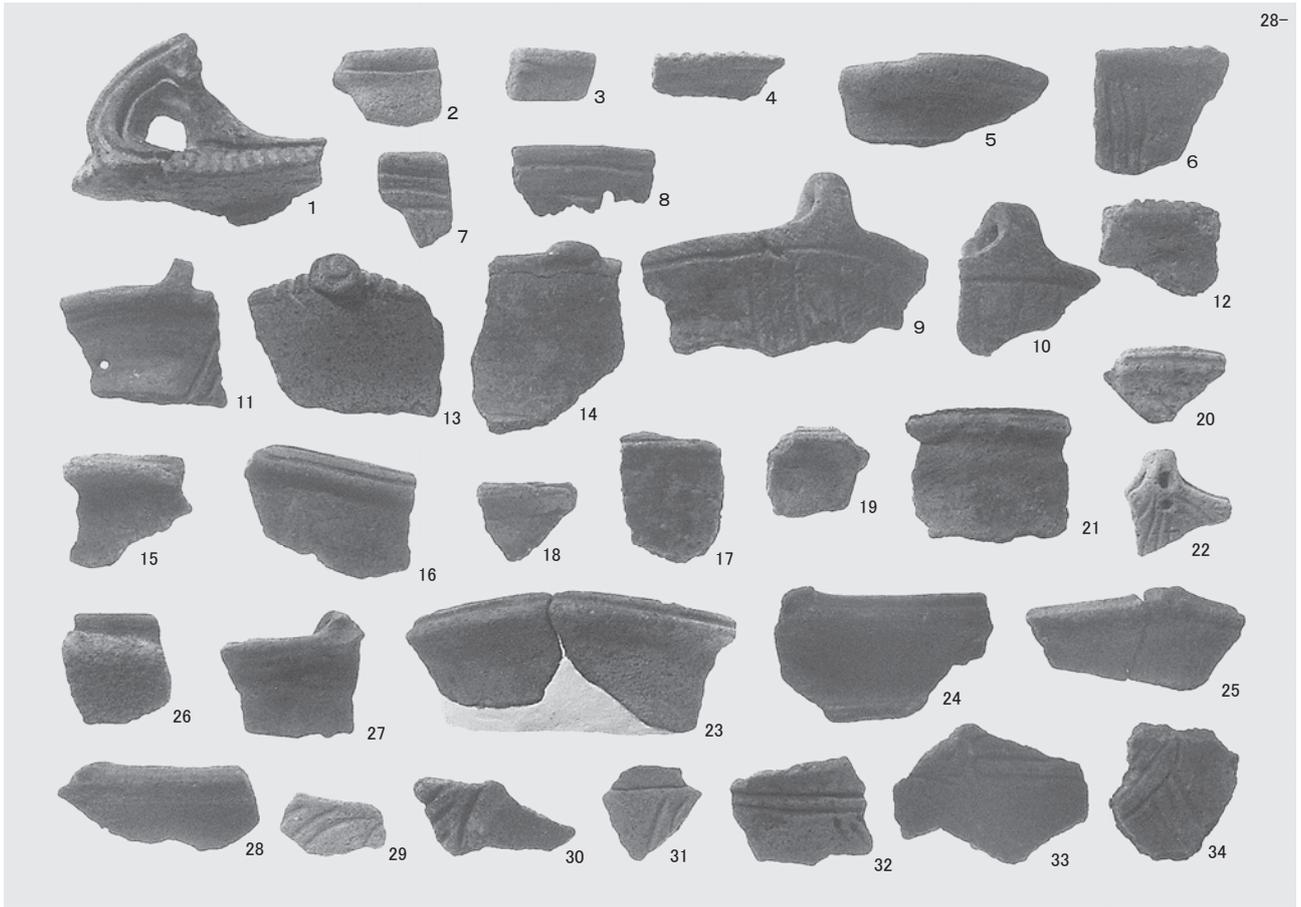
(2) 有文深鉢形土器第12群



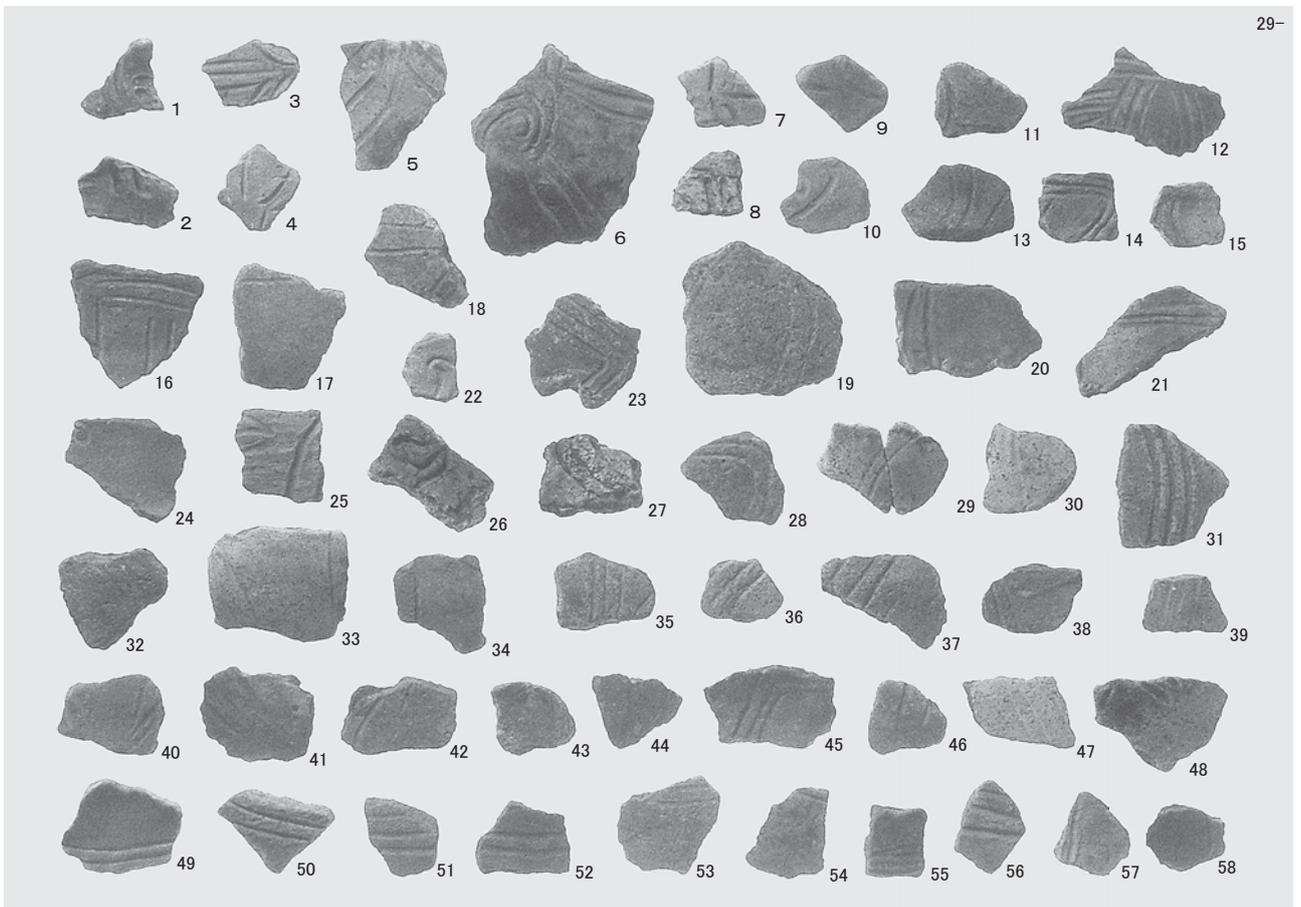
(1) 有文深鉢形土器第12群



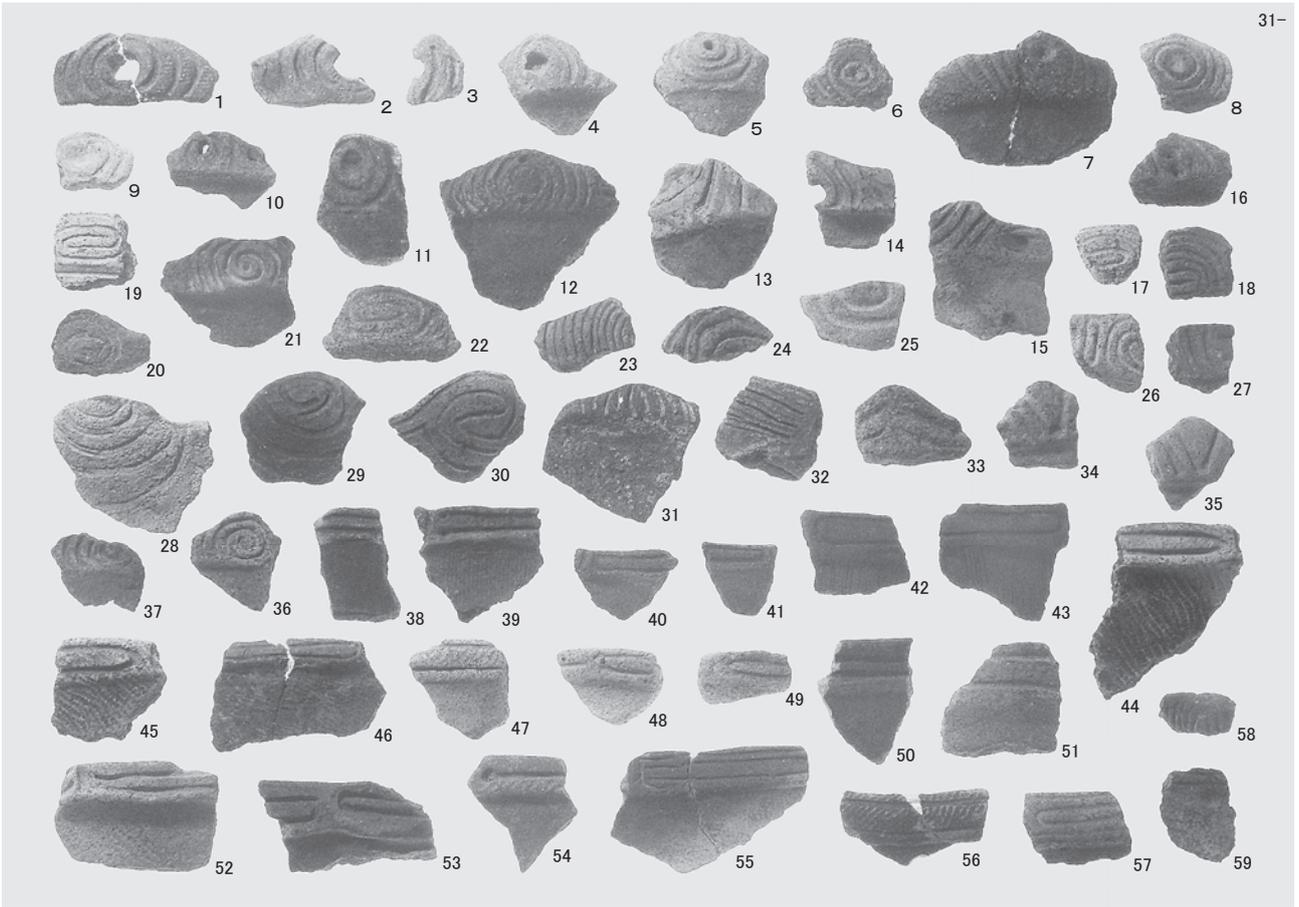
(2) 有文深鉢形土器第13群



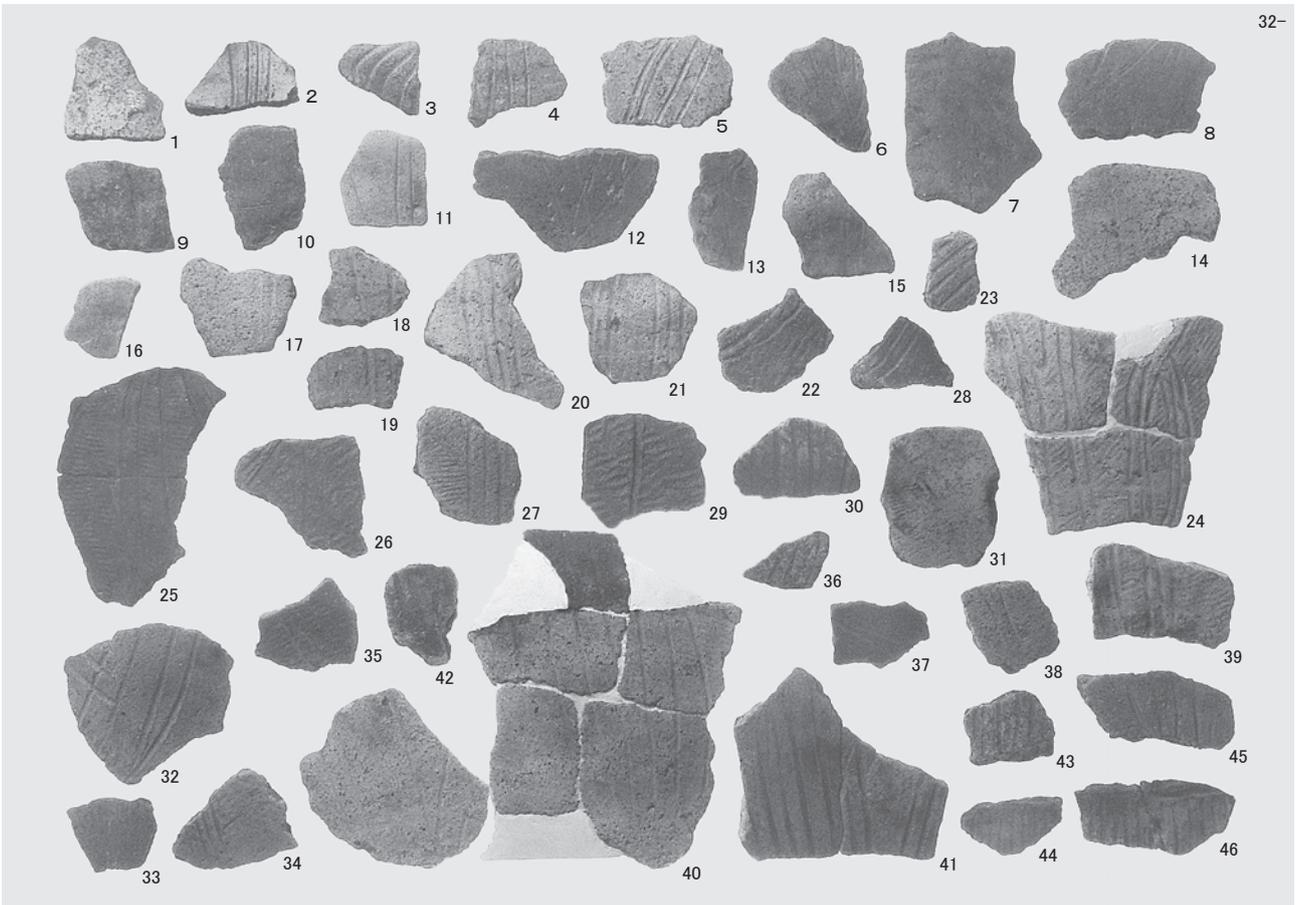
(1) 有文深鉢形土器第13群



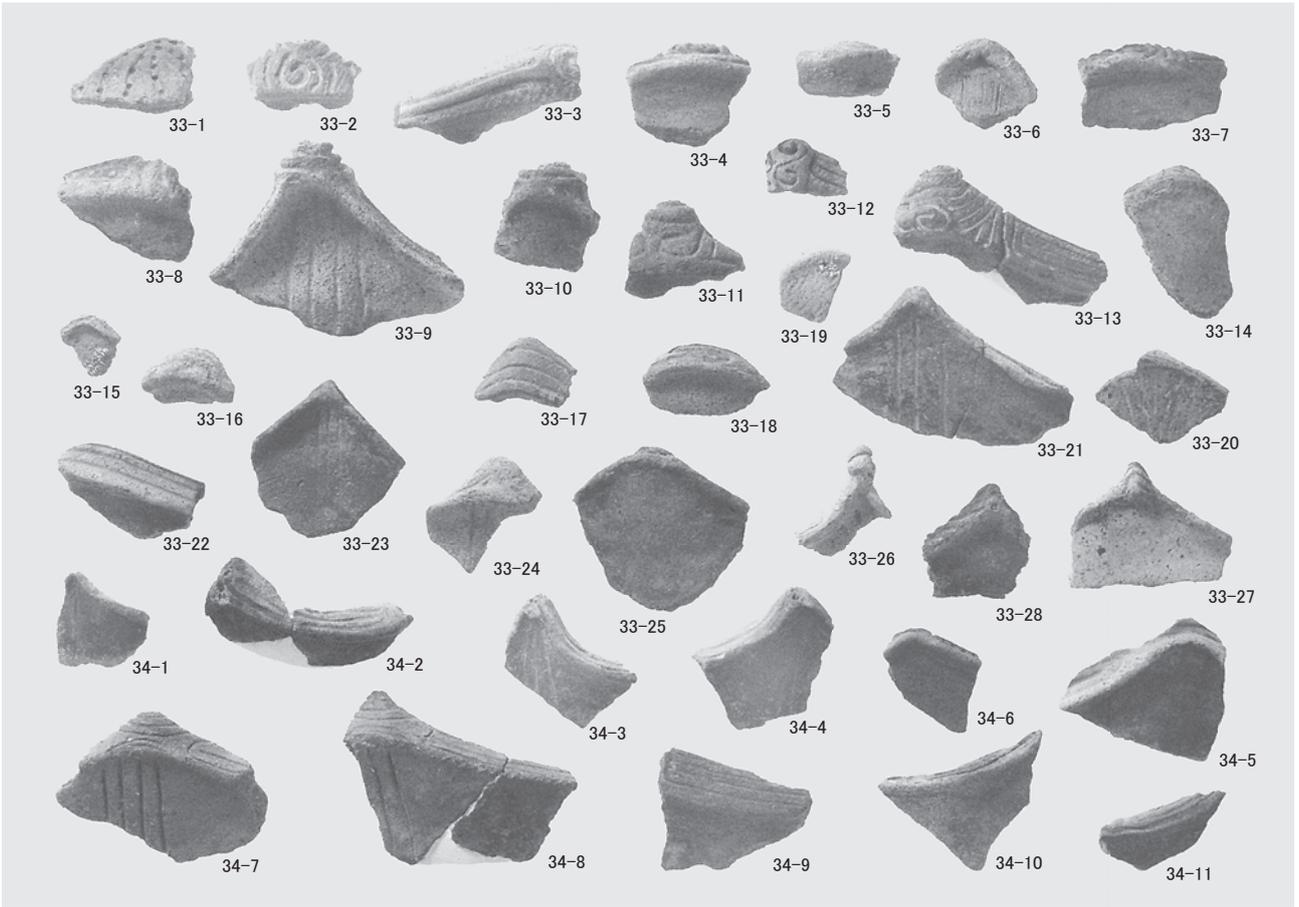
(2) 有文深鉢形土器第13群



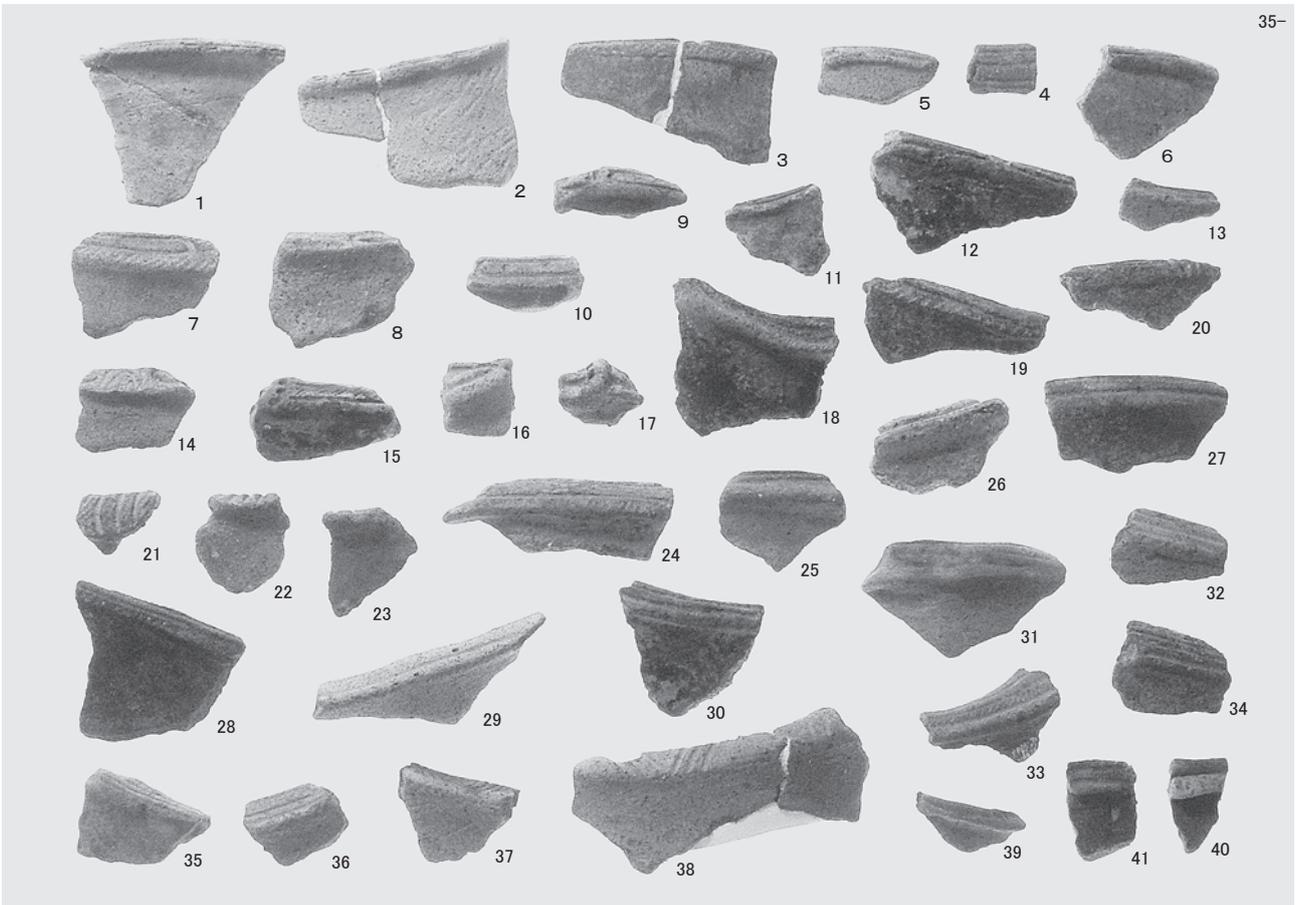
(1) 有文深鉢形土器第14群



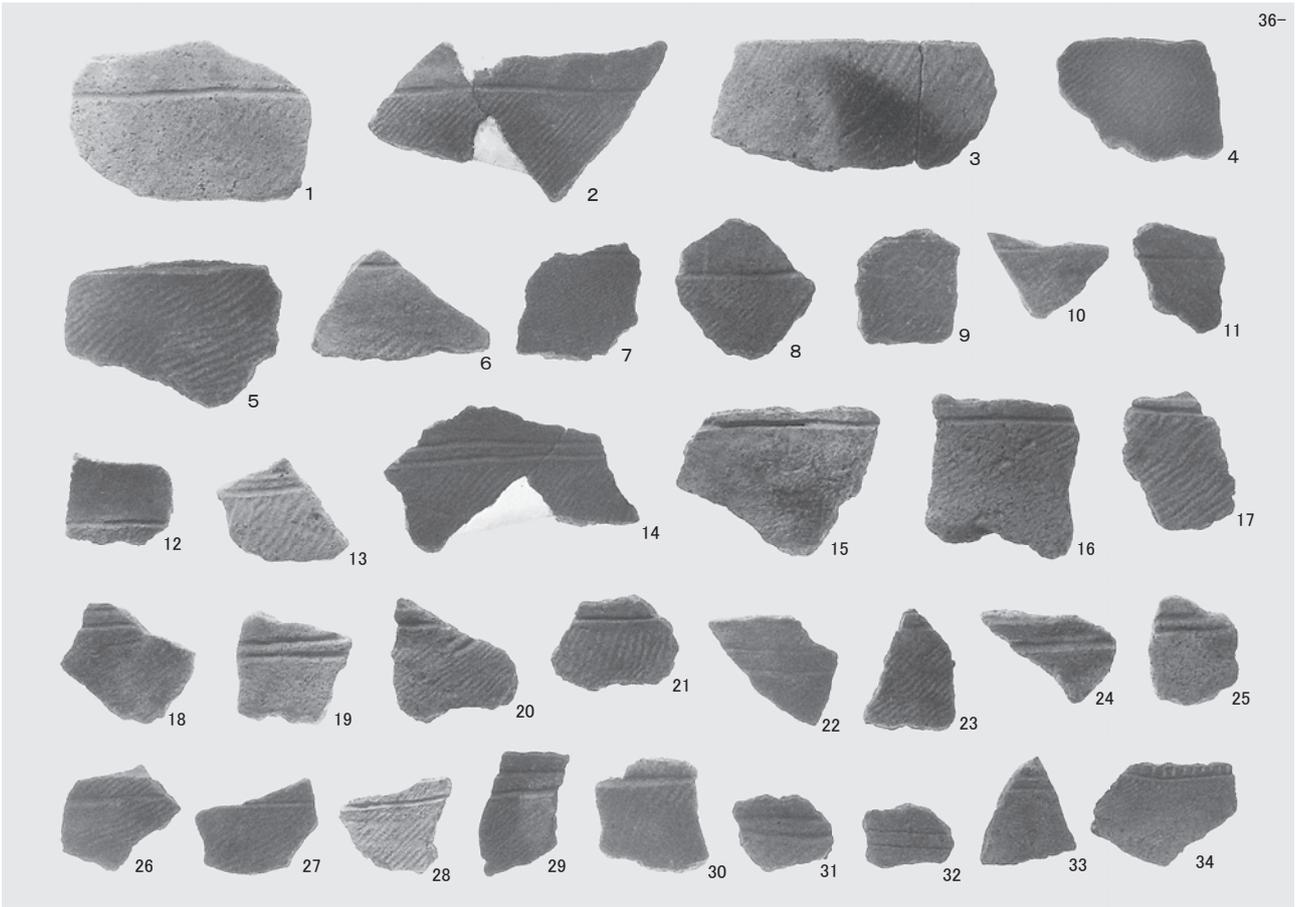
(2) 有文深鉢形土器第14群



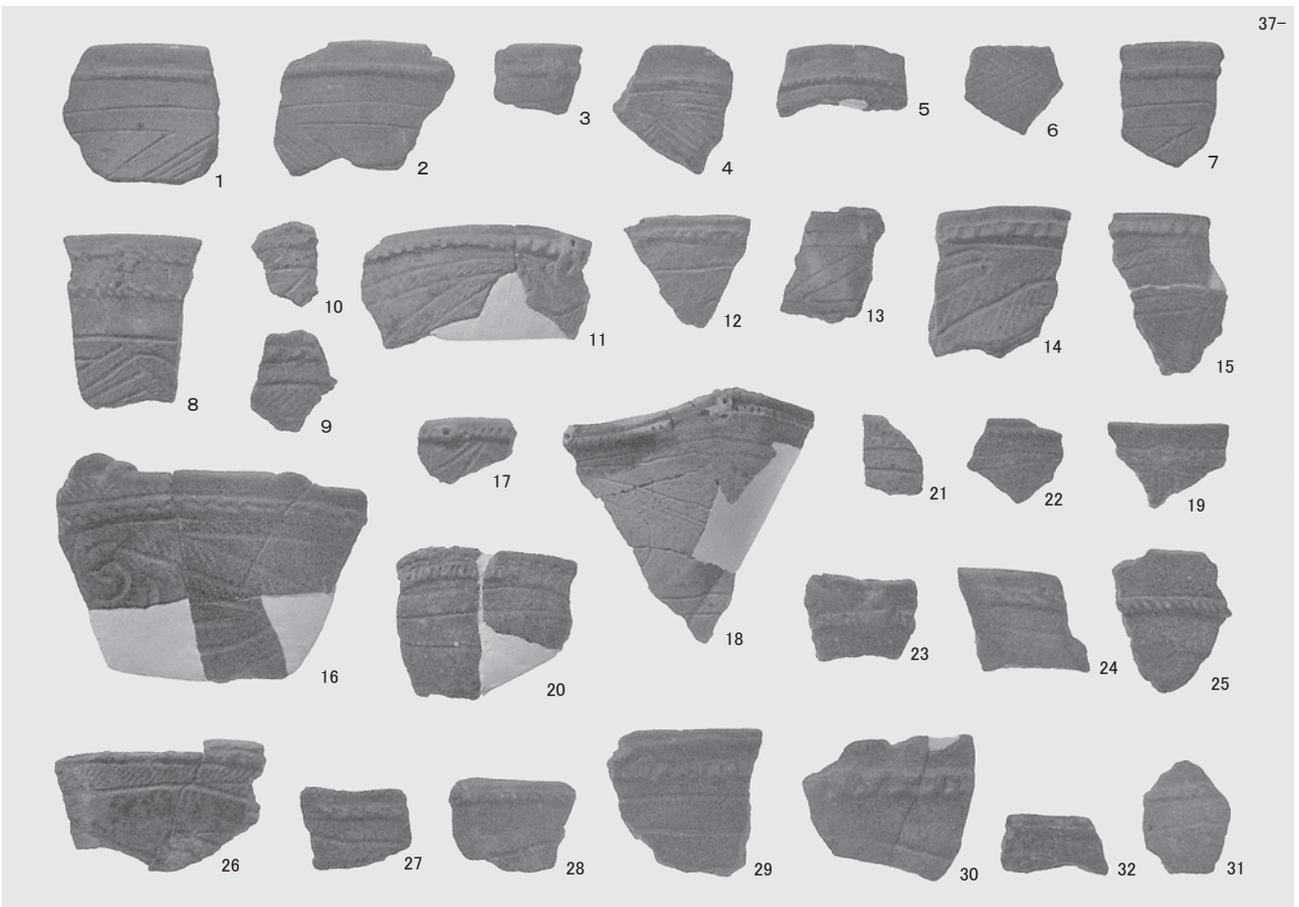
(1) 有文深鉢形土器第15群



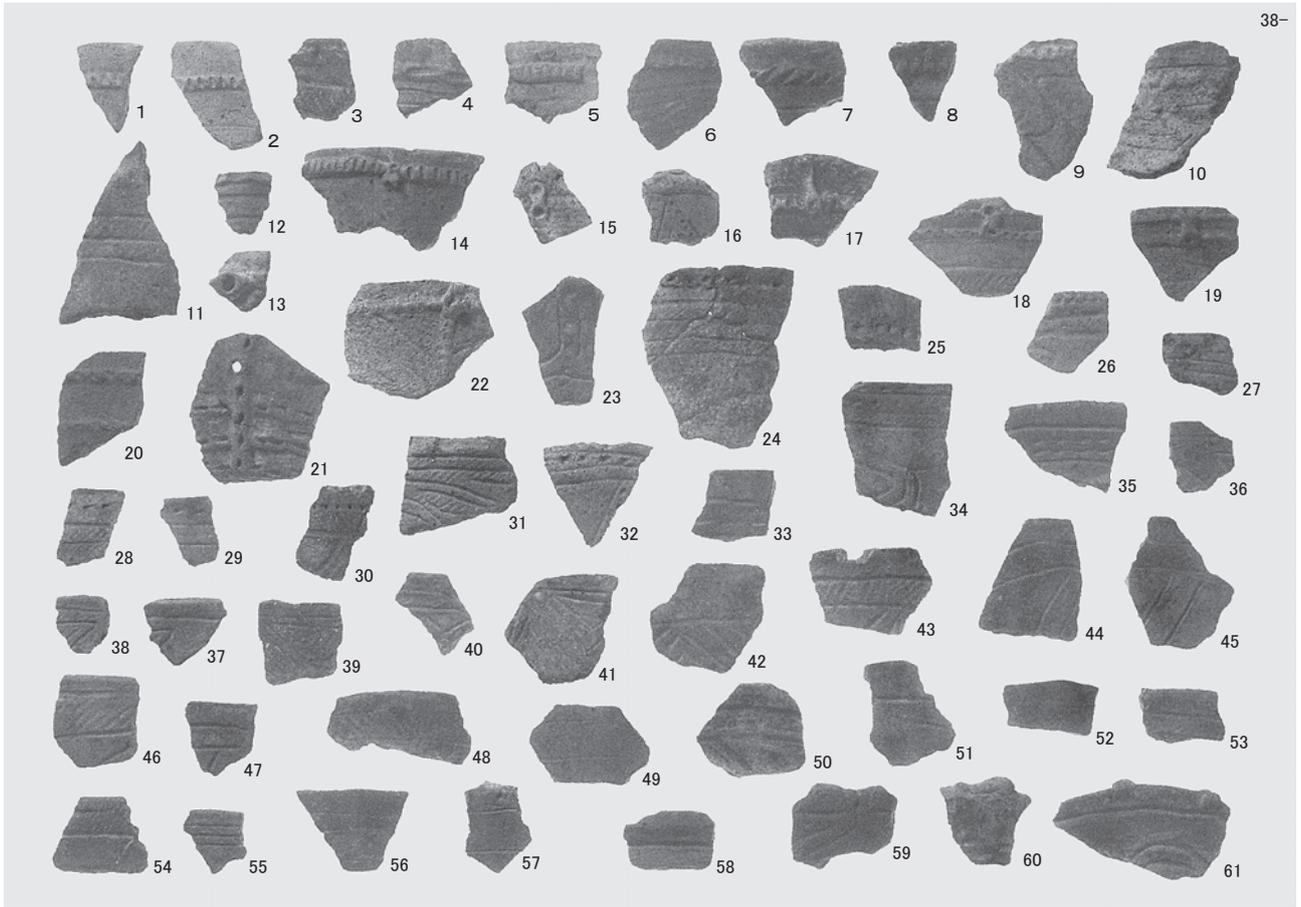
(2) 有文深鉢形土器第15群



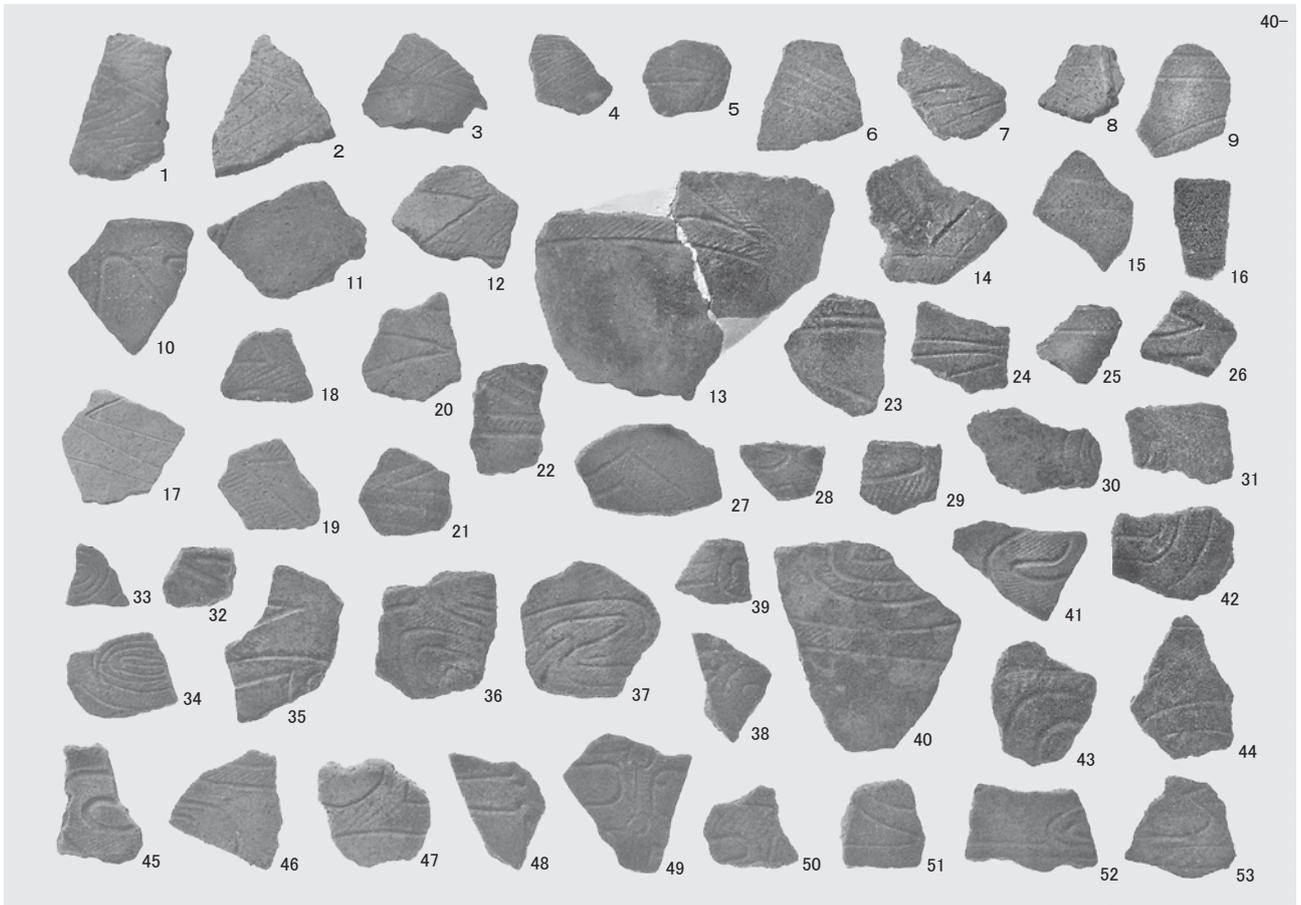
(1) 有文深鉢形土器第15群



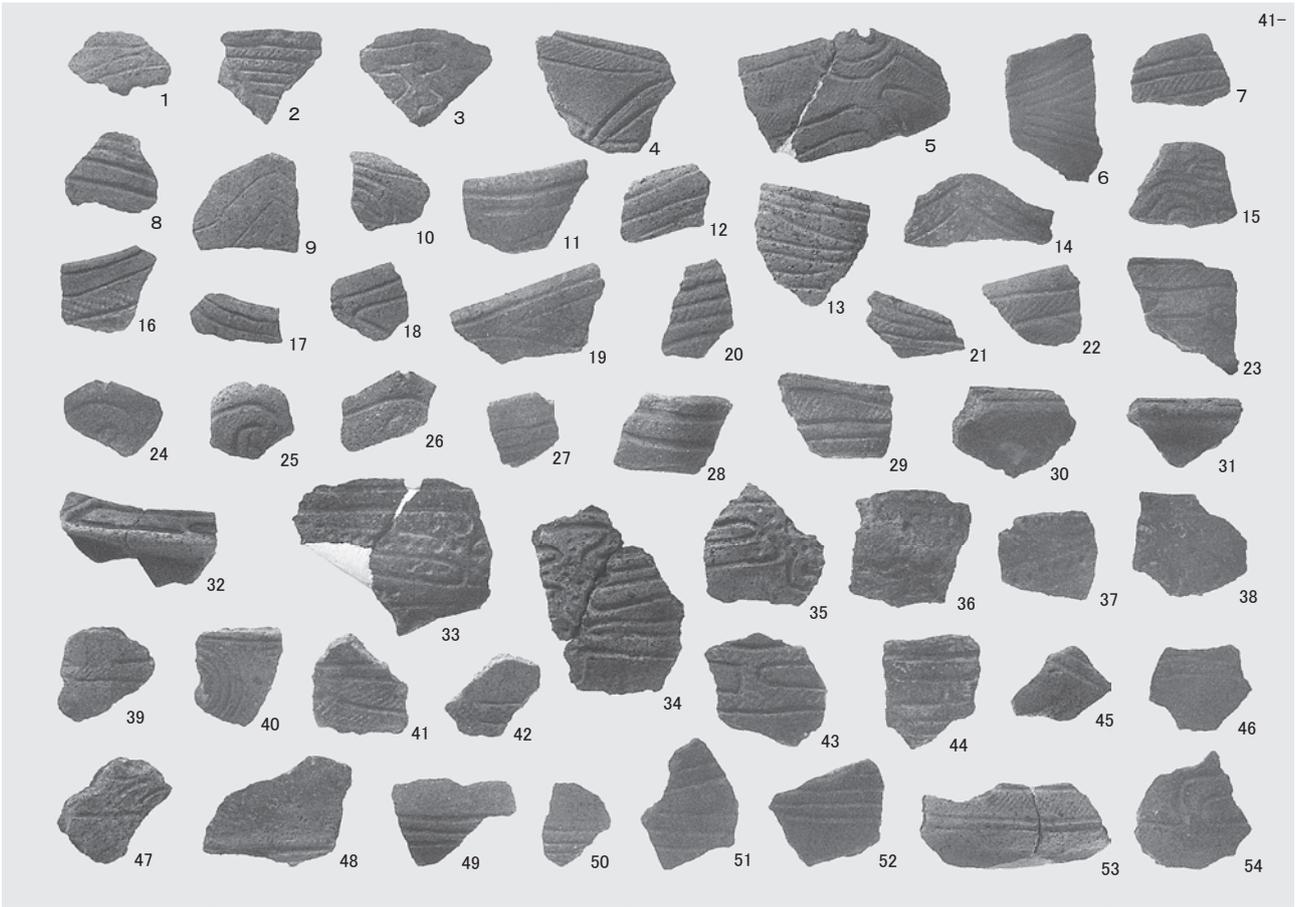
(2) 有文深鉢形土器第16群



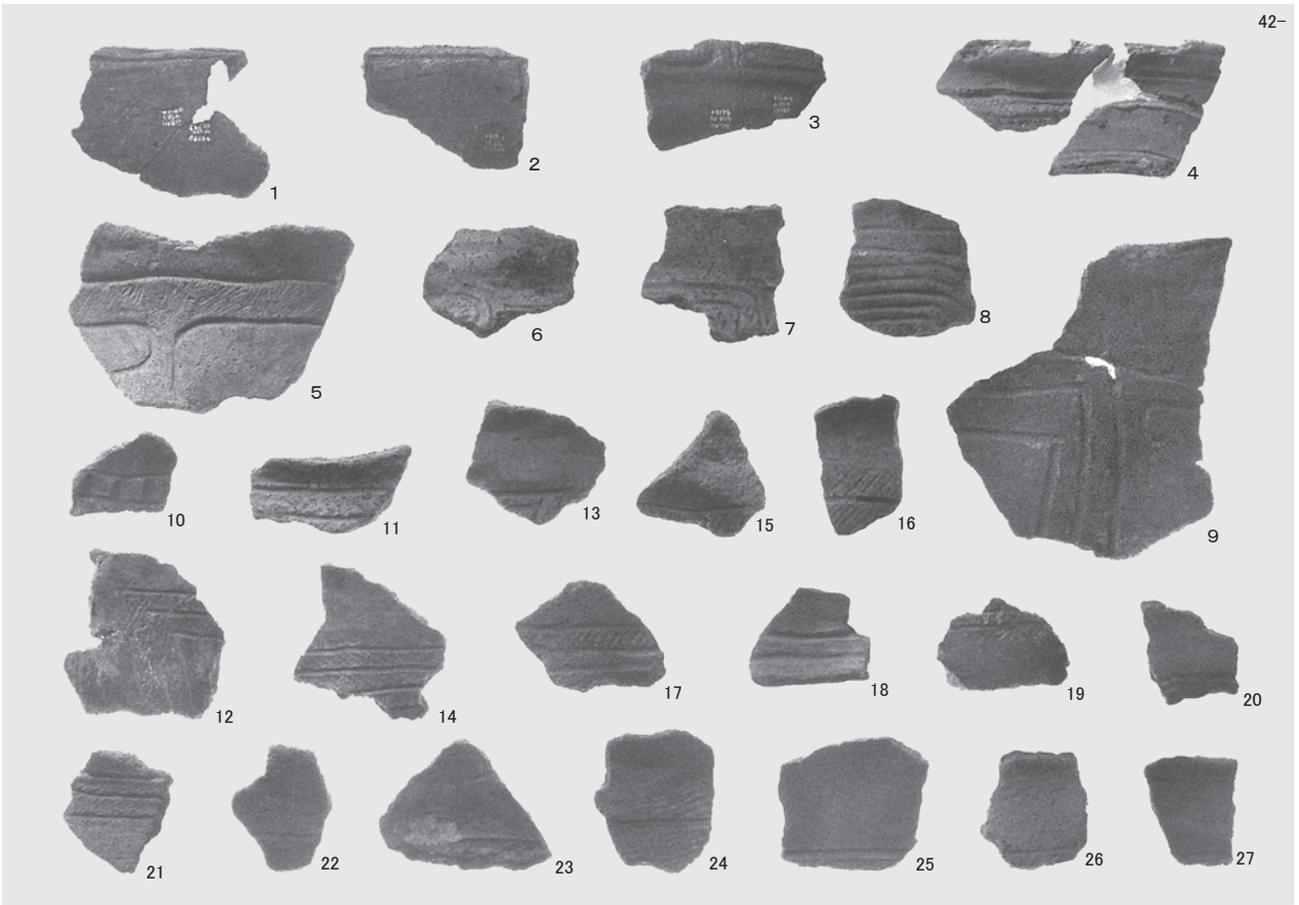
(1) 有文深鉢形土器第16群



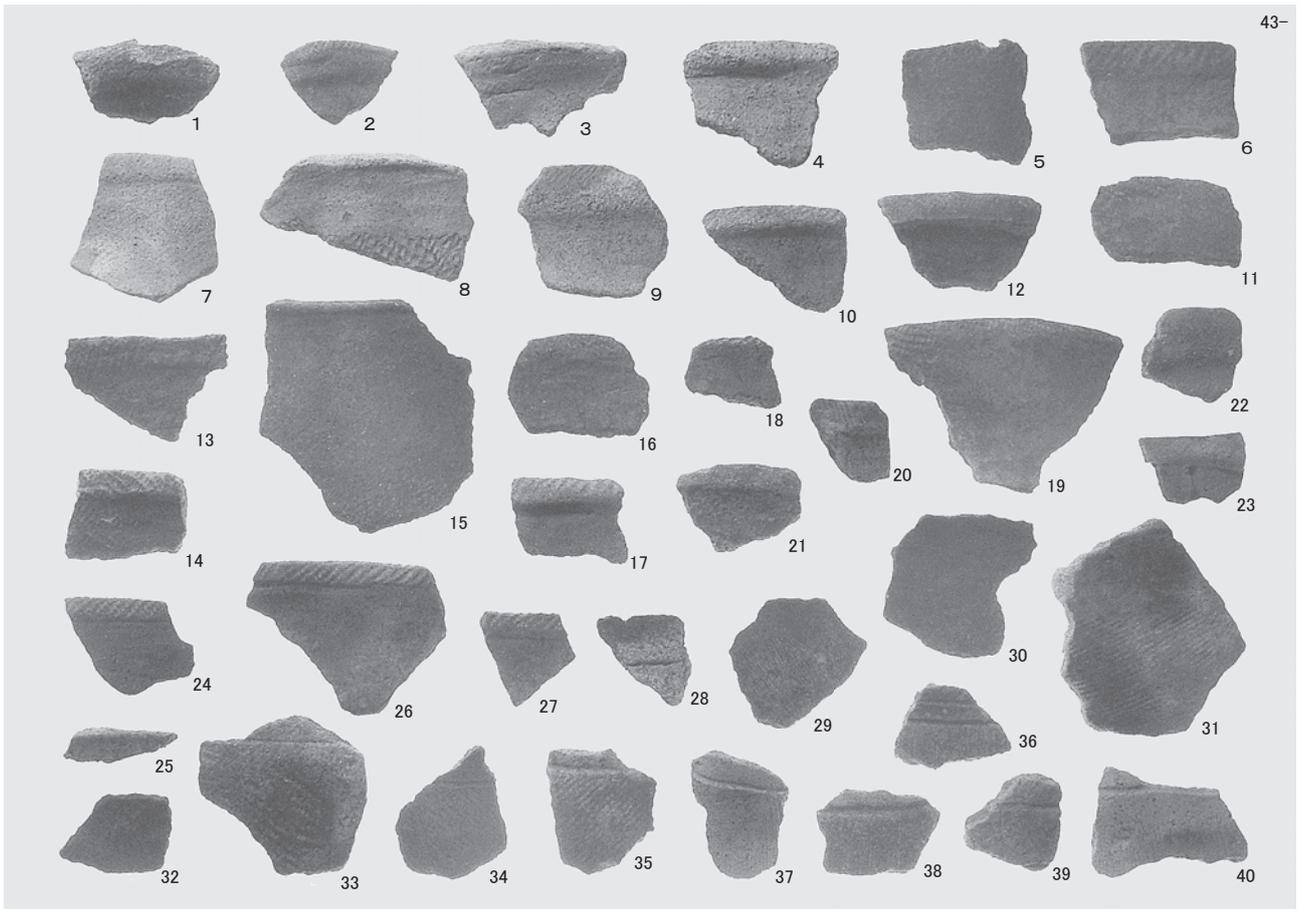
(2) 有文深鉢形土器第16群



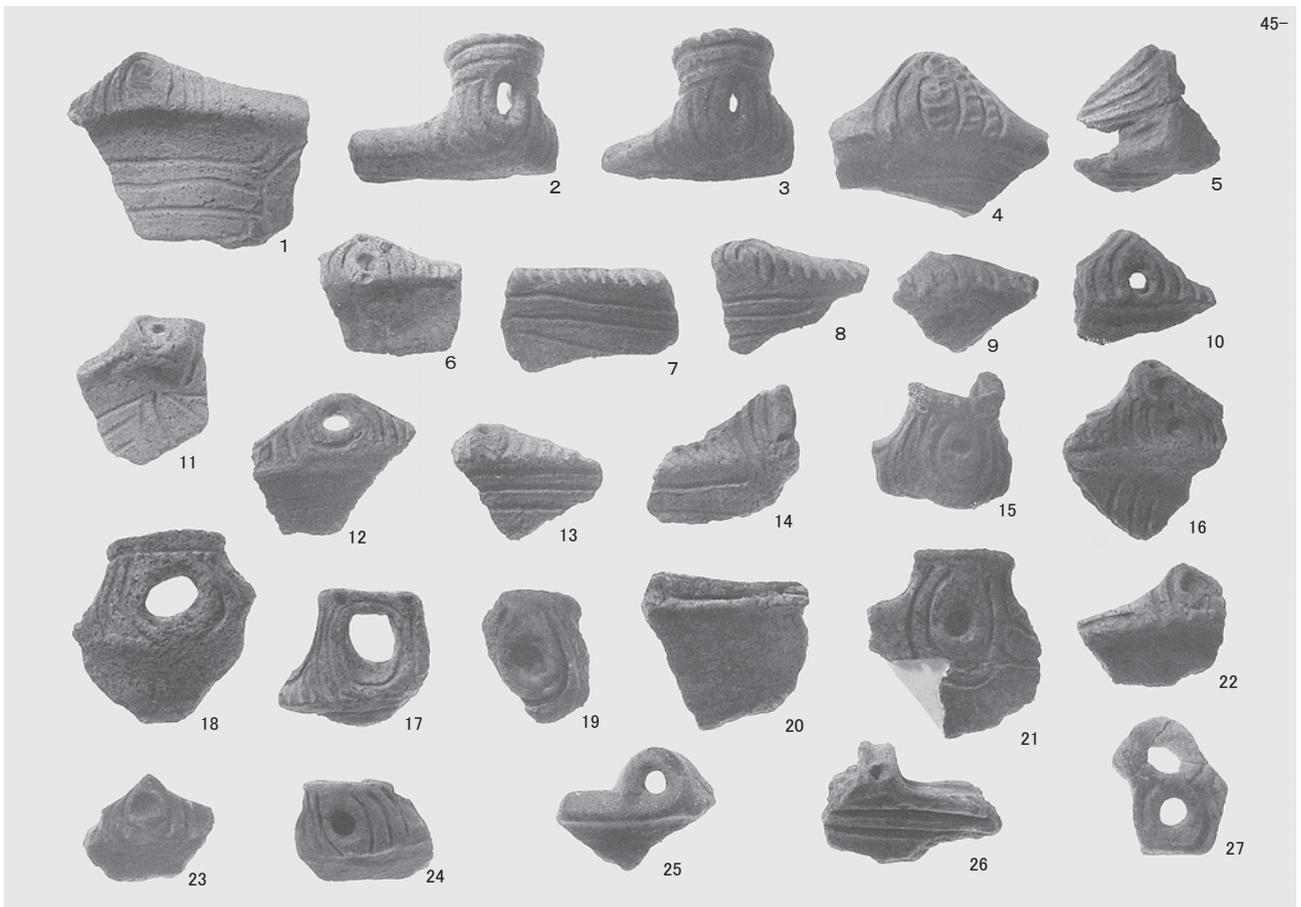
(1) 有文深鉢形土器第17群



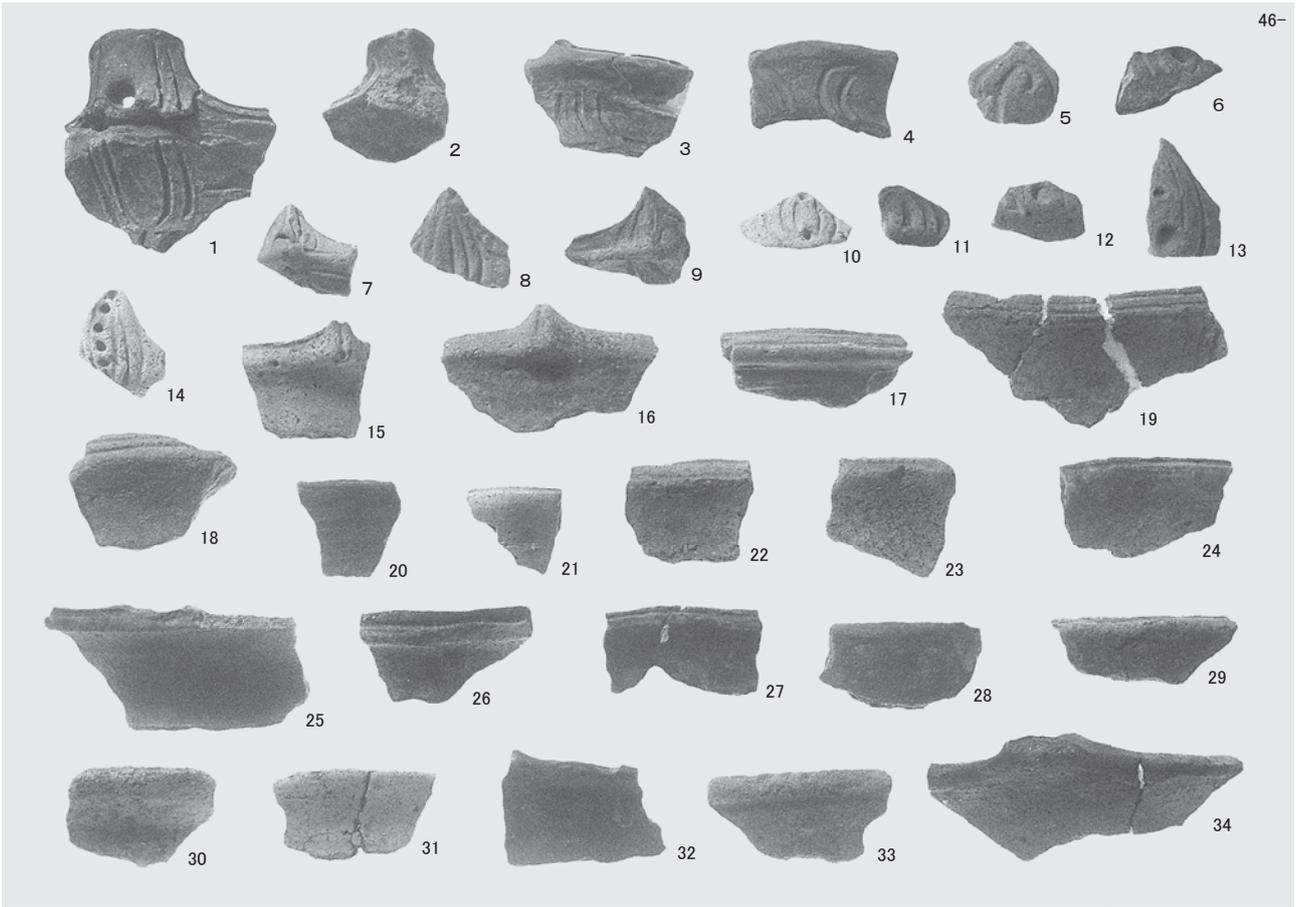
(2) 有文深鉢形土器第18群



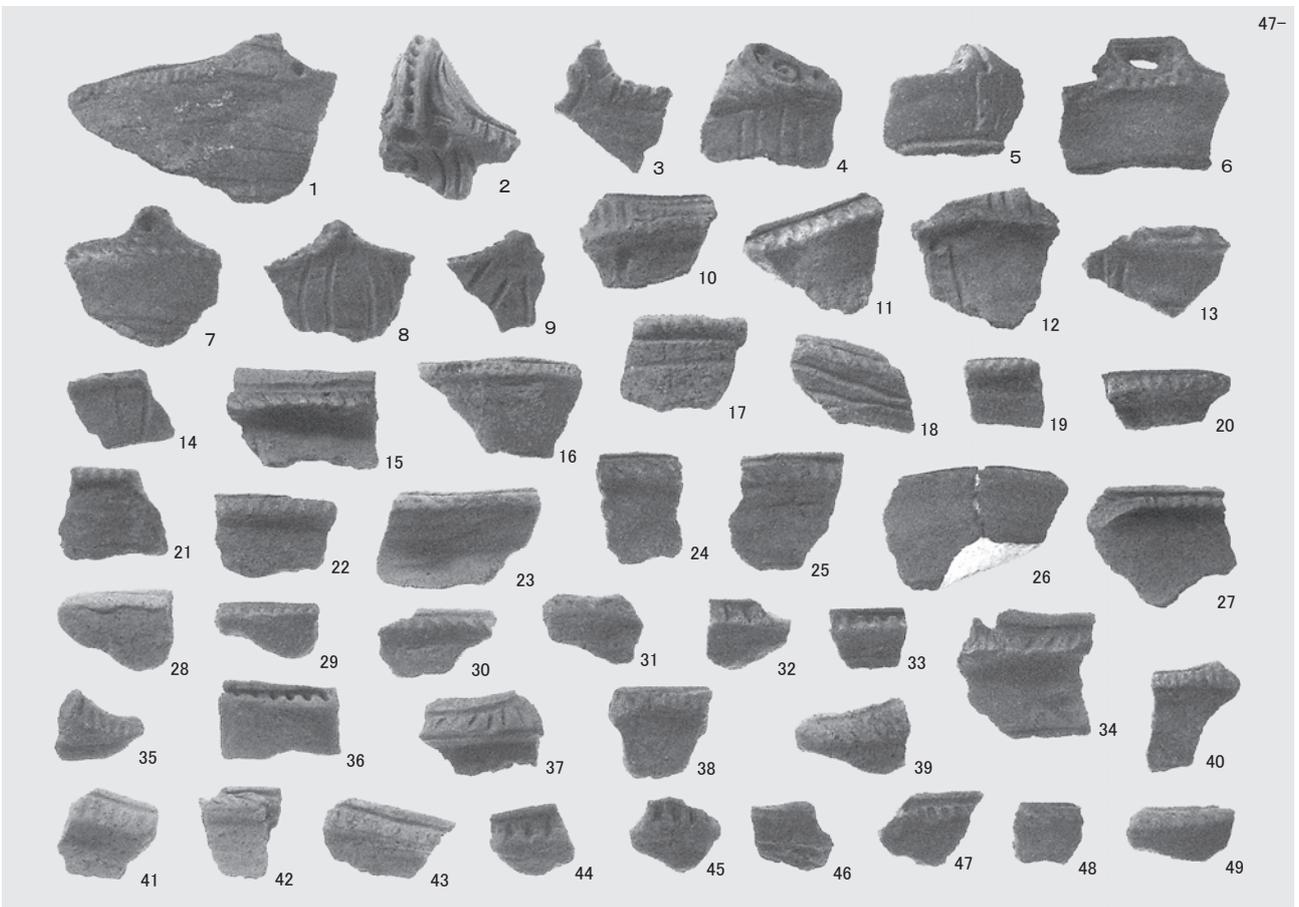
(1) 有文深鉢形土器第18群



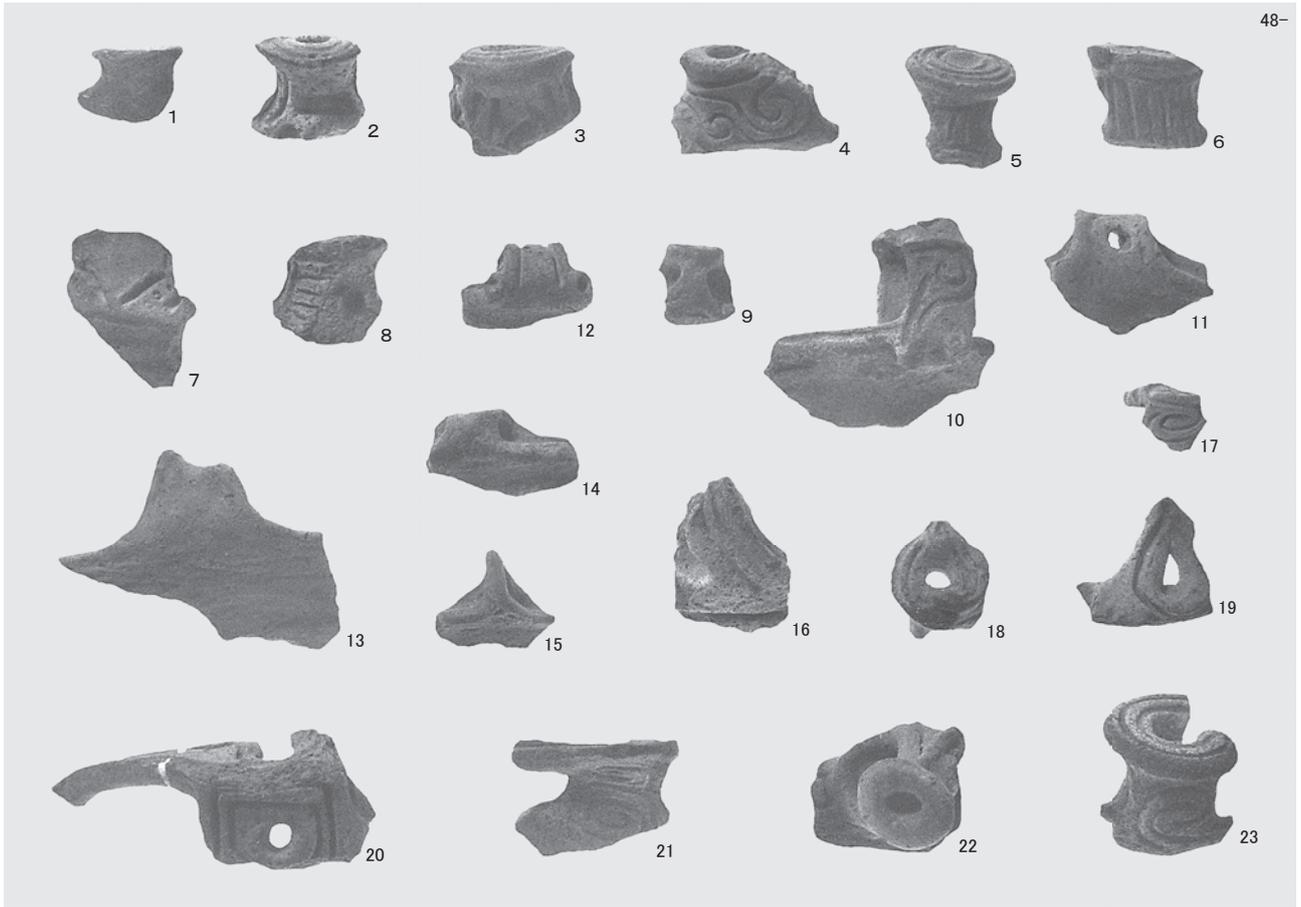
(2) 有文深鉢形土器第19群



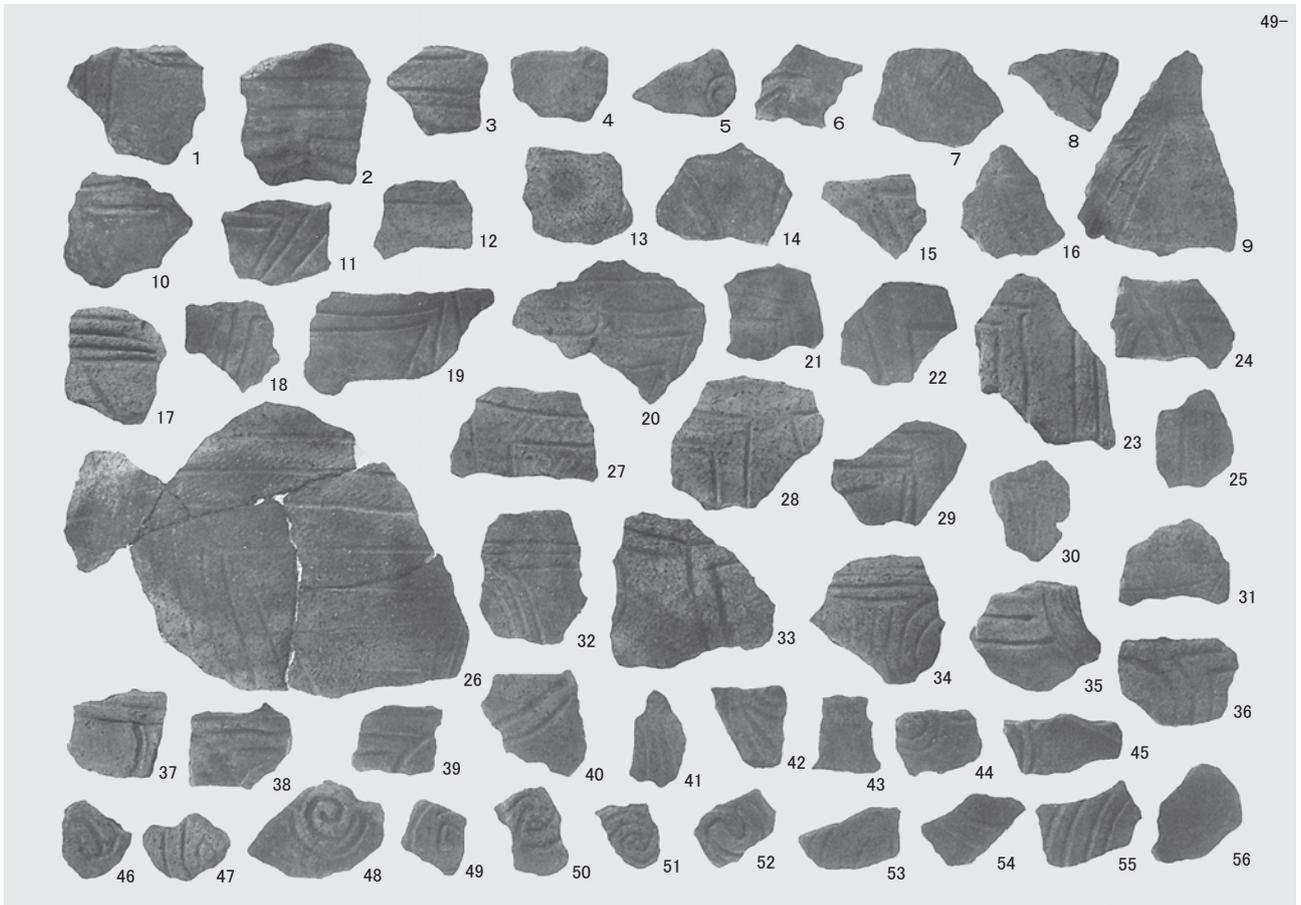
(1) 有文深鉢形土器第19群



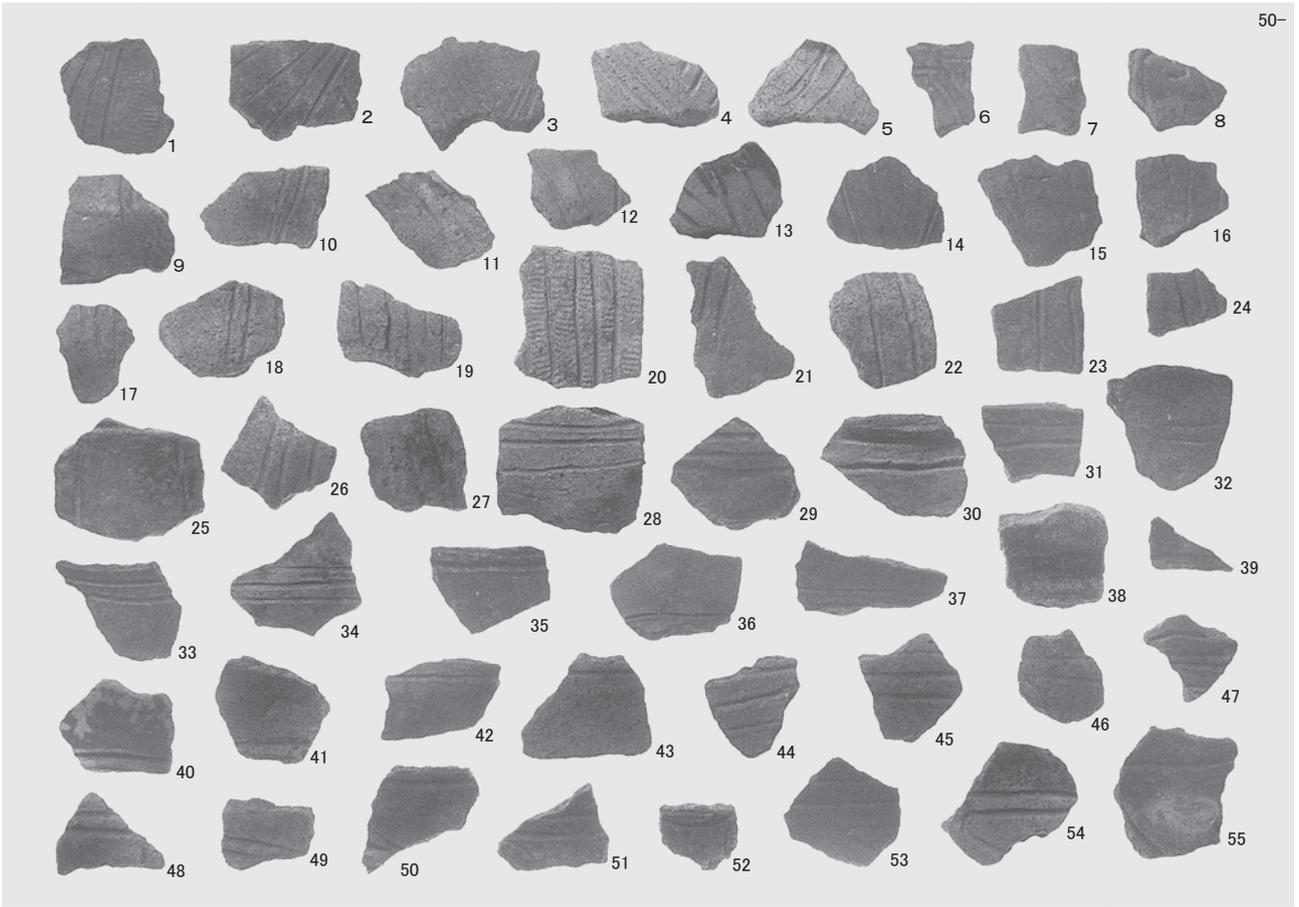
(2) 有文深鉢形土器第19群



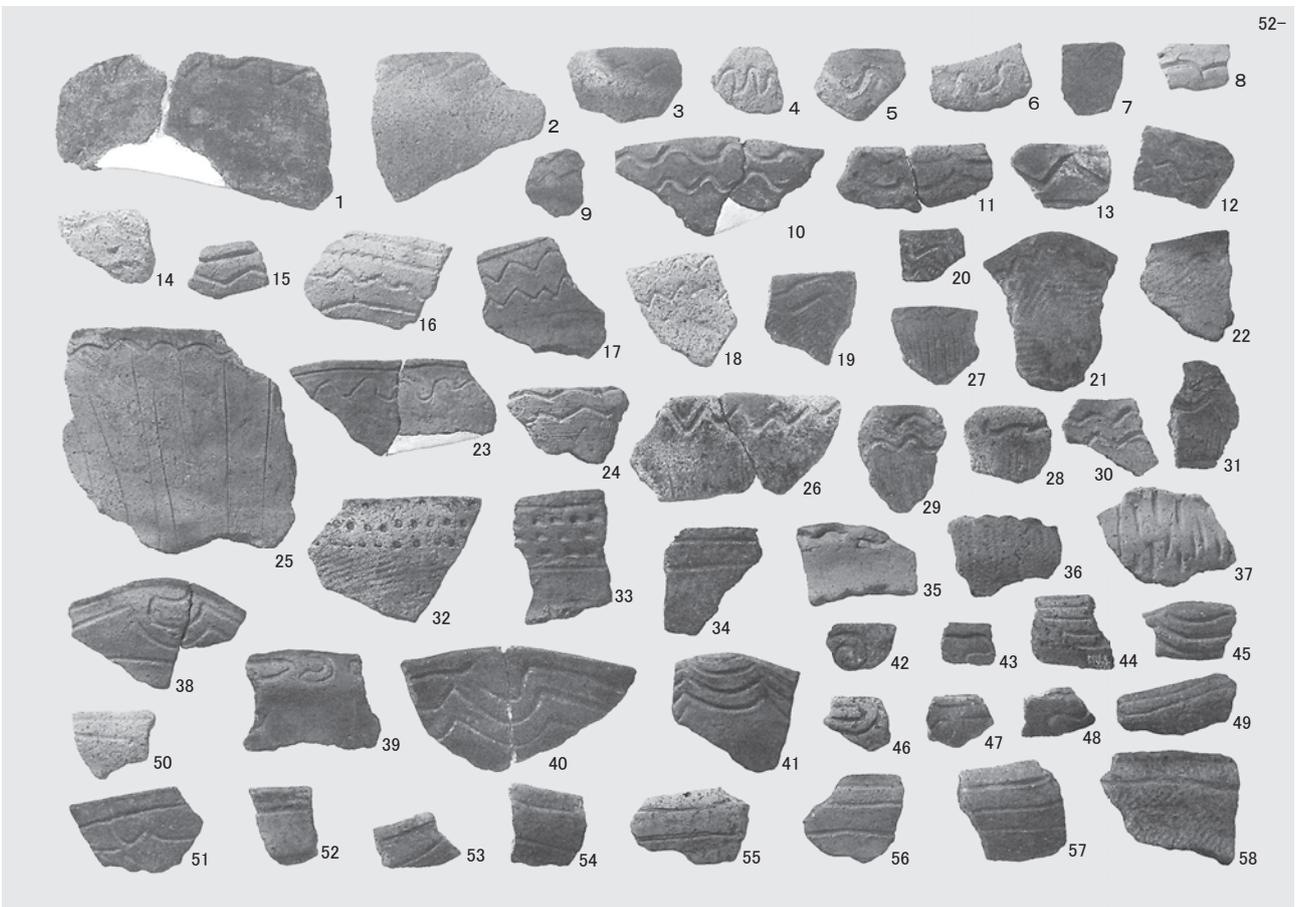
(1) 有文深鉢形土器第19群



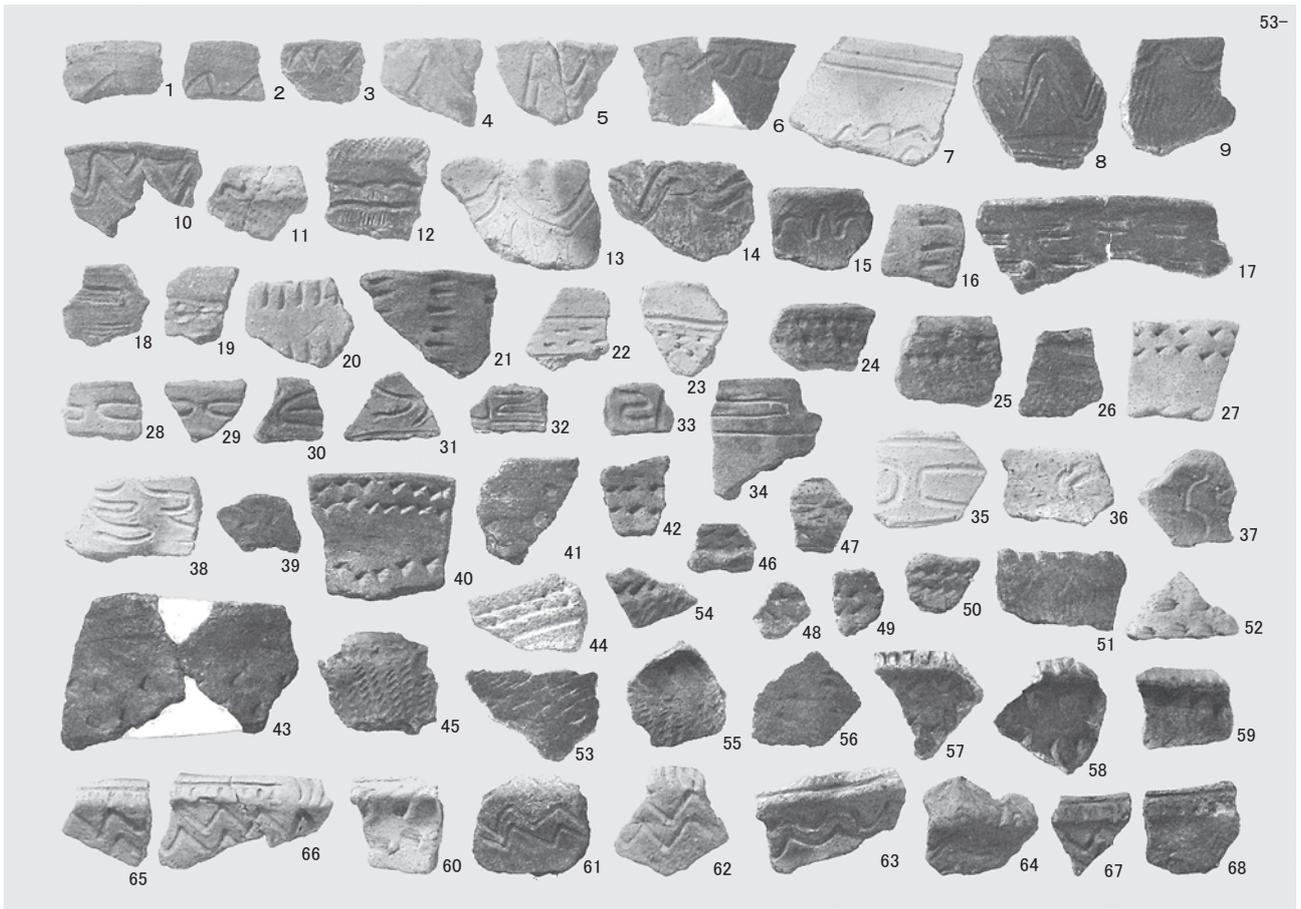
(2) 有文深鉢形土器第19群



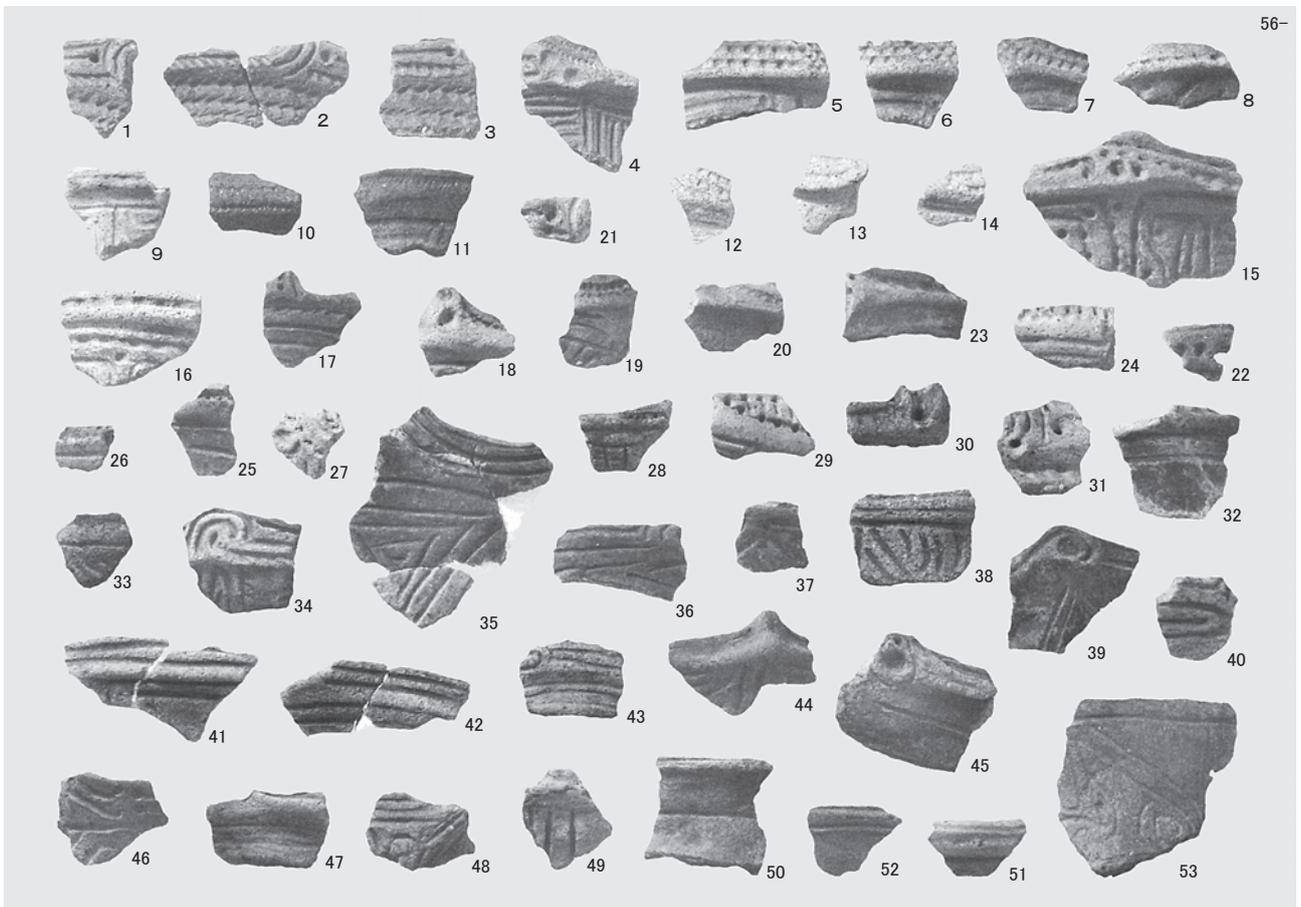
(1) 有文深鉢形土器第19群



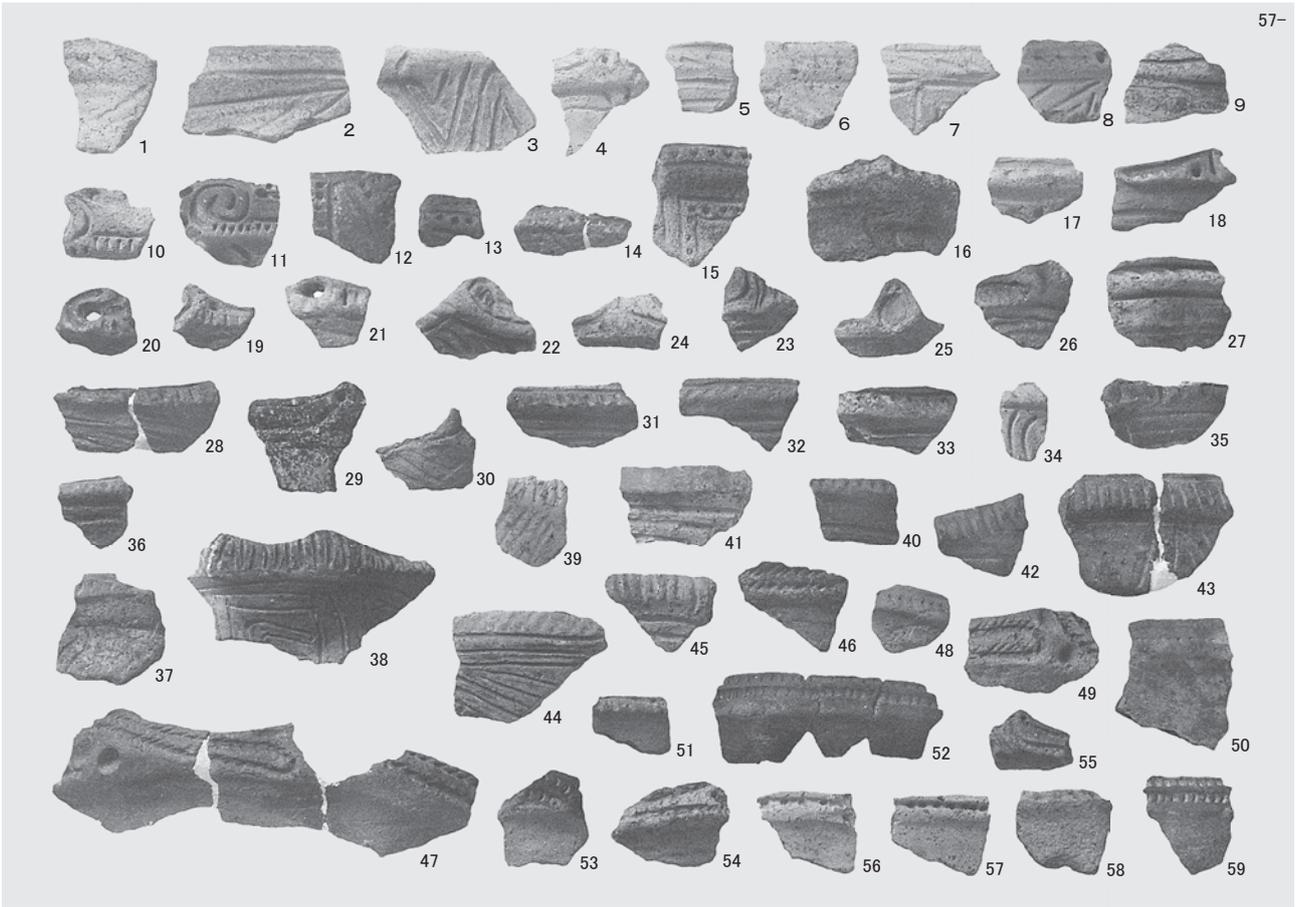
(2) 有文深鉢形土器第20群



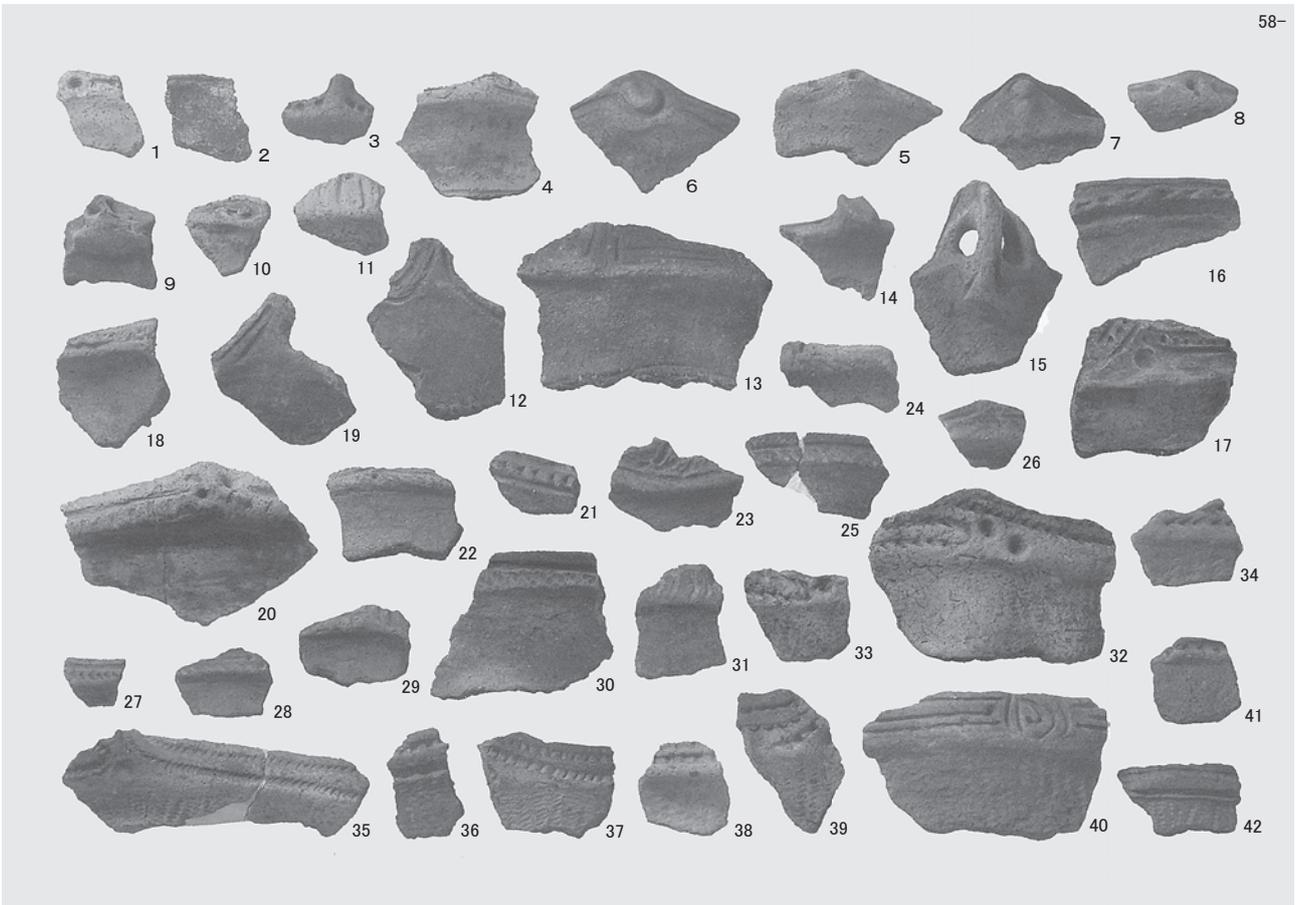
(1) 有文深鉢形土器第21群



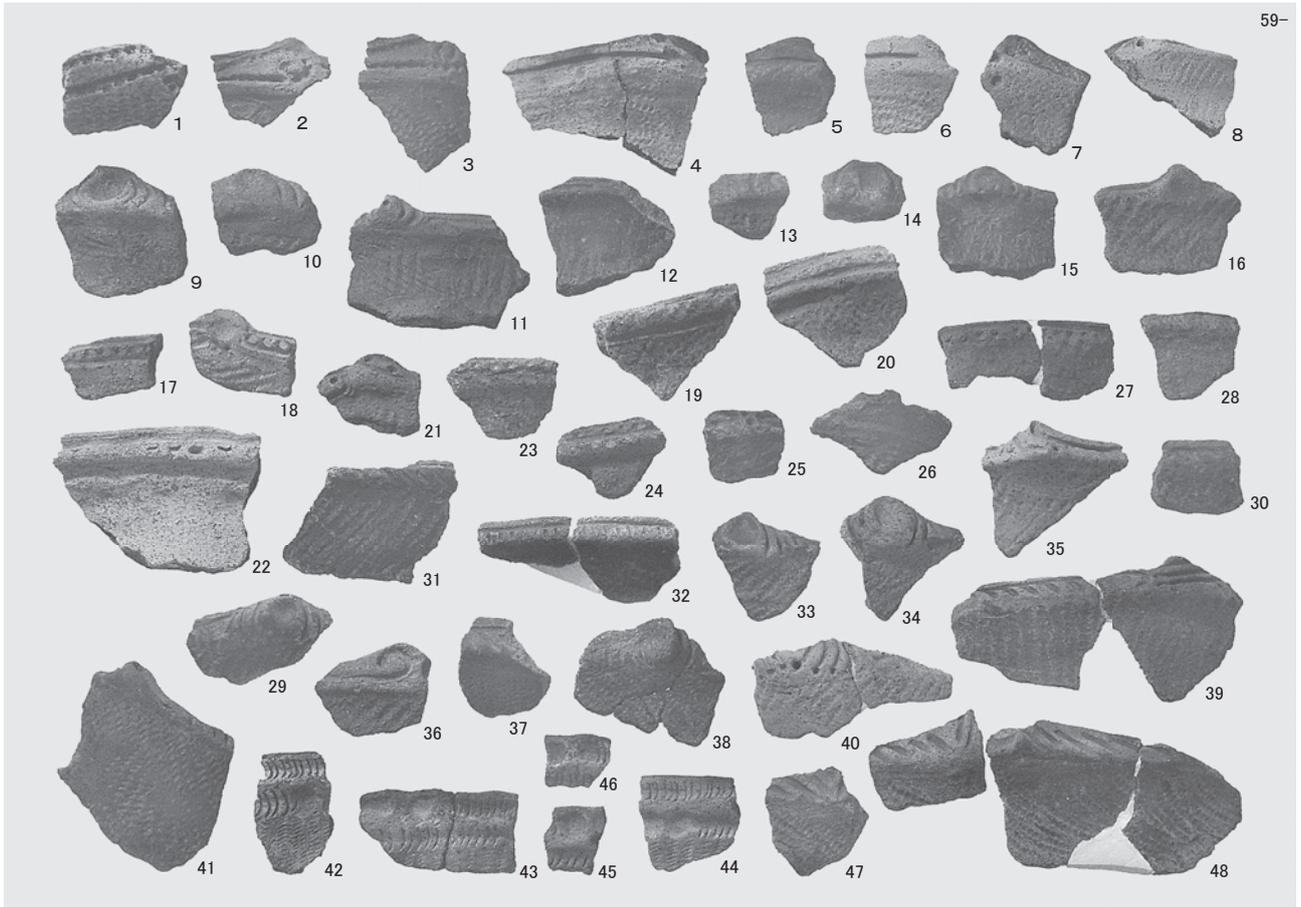
(2) 有文深鉢形土器第22群



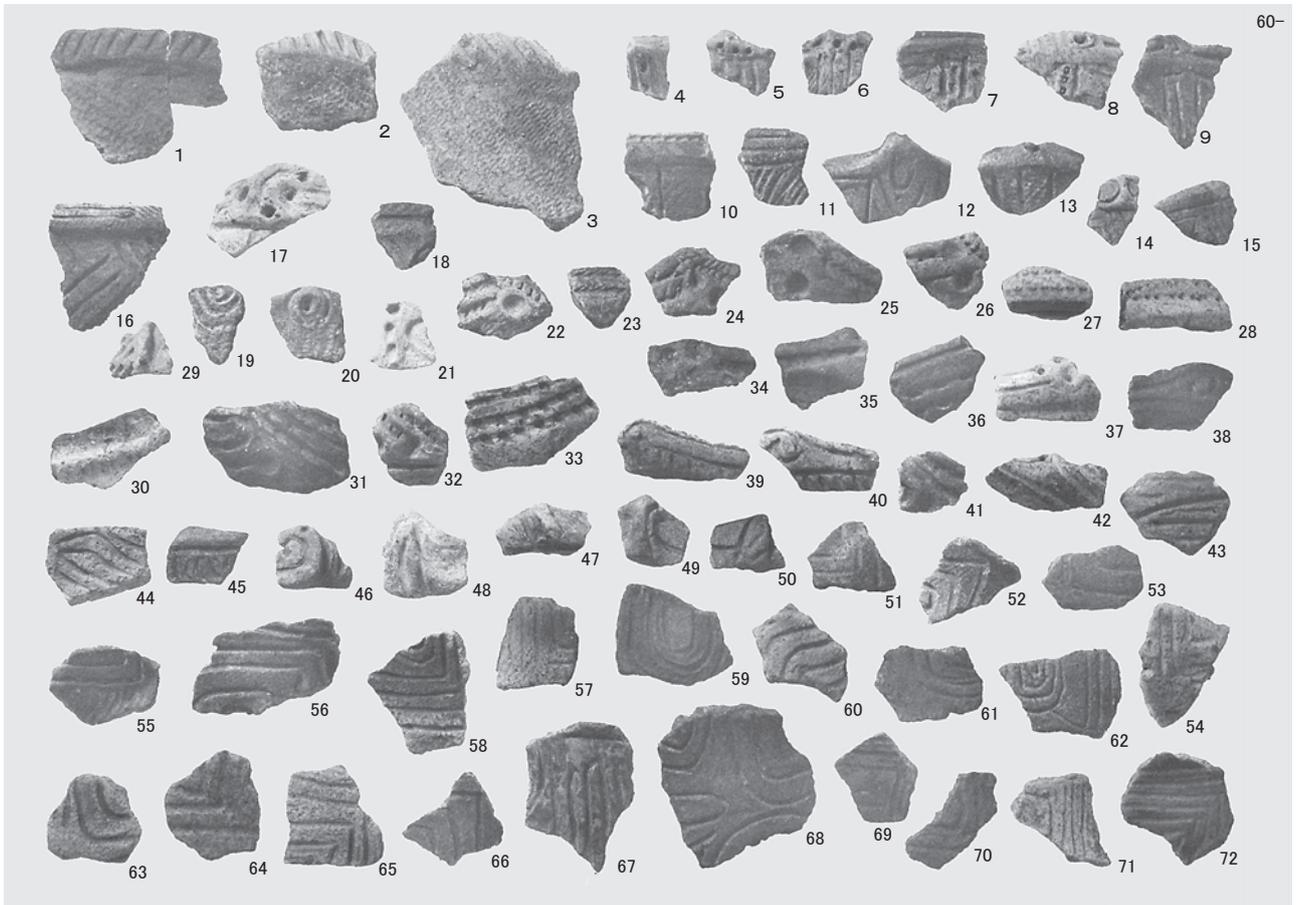
(1) 有文深鉢形土器第22群



(2) 有文深鉢形土器第22群



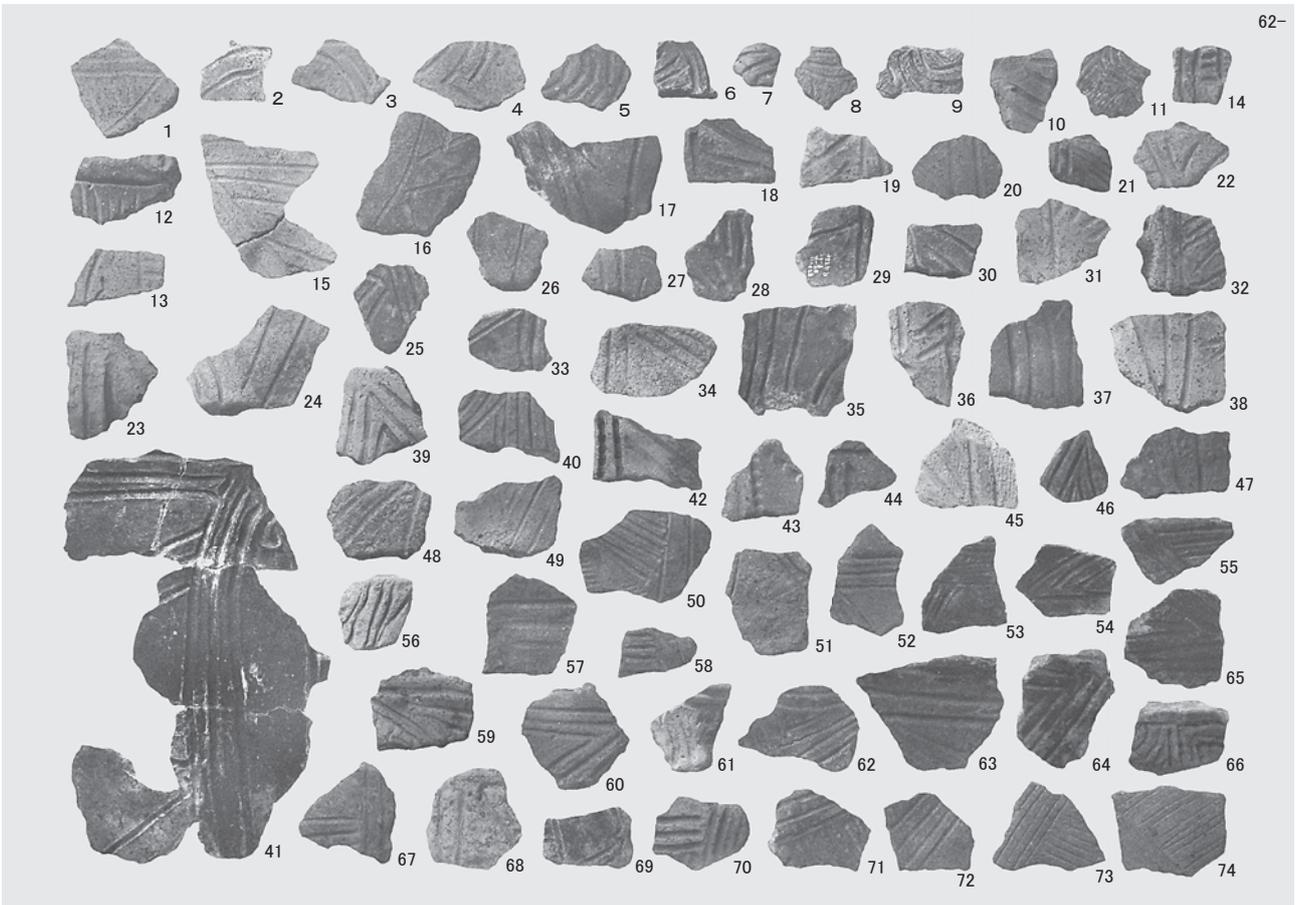
(1) 有文深鉢形土器第22群



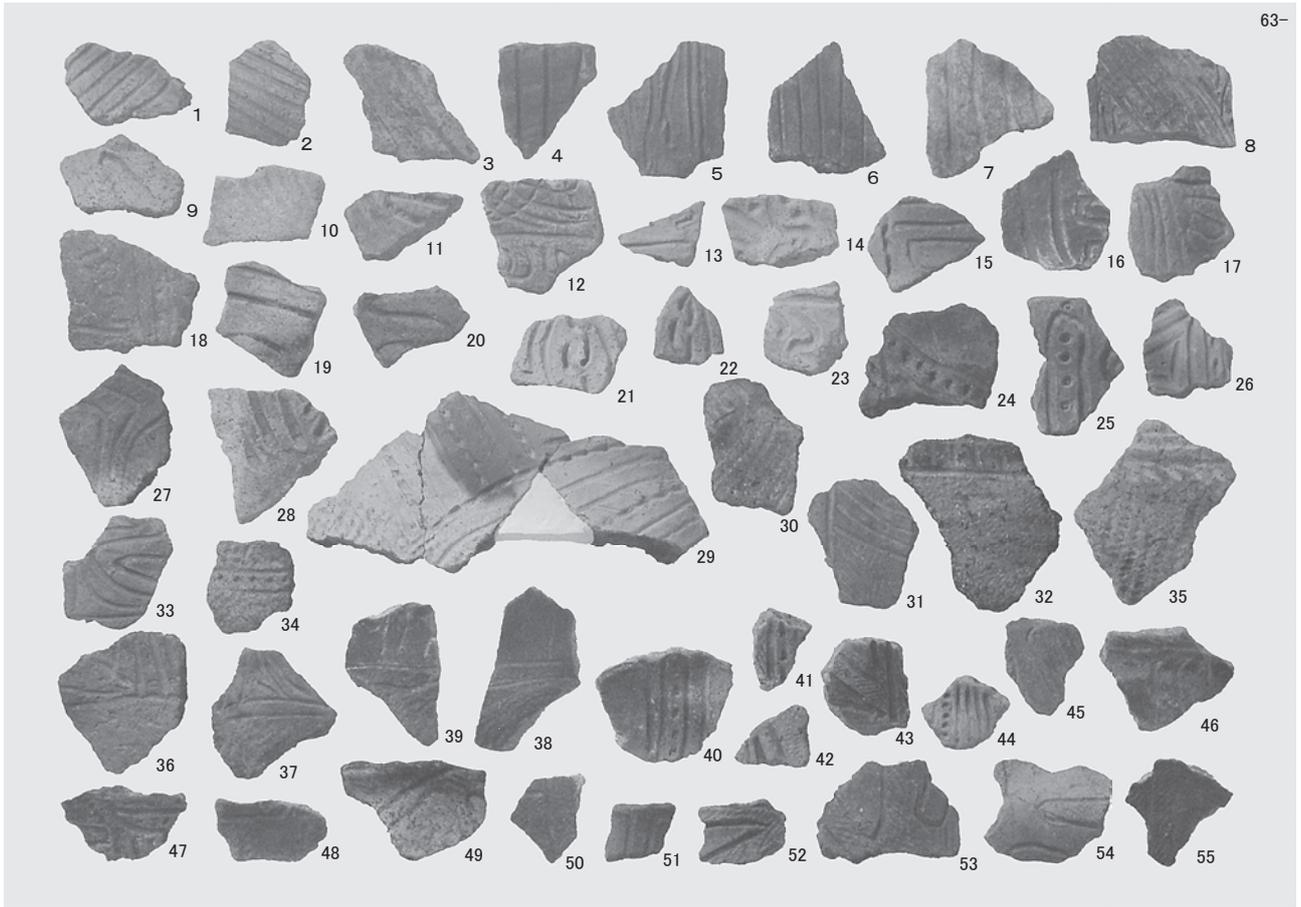
(2) 有文深鉢形土器第22群



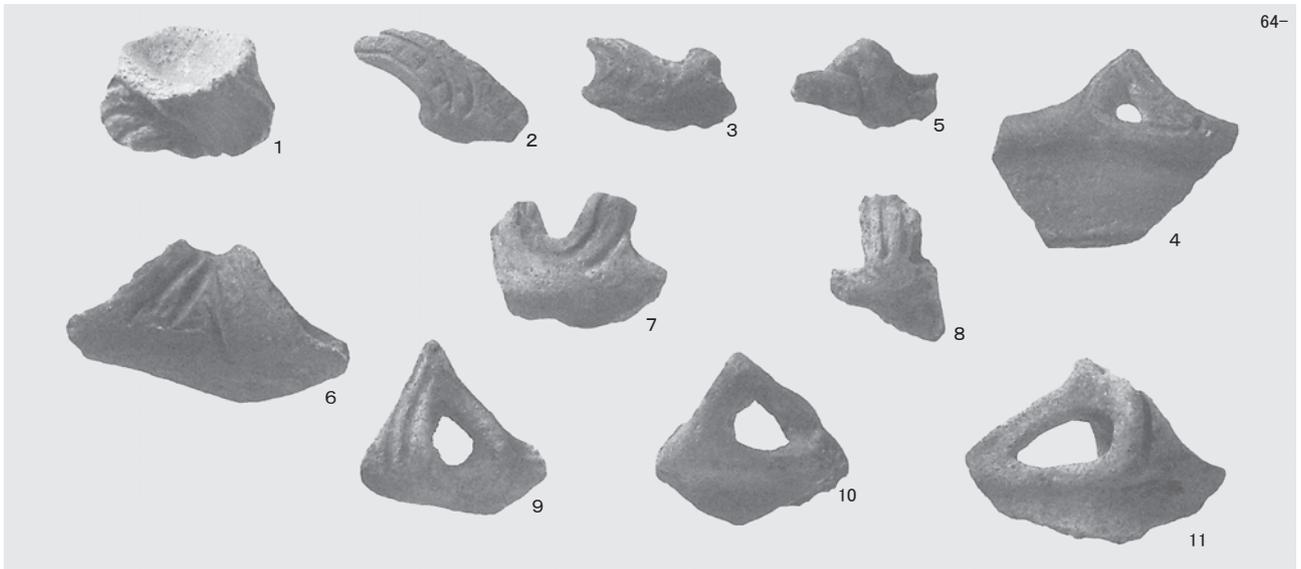
(1) 有文深鉢形土器第22群



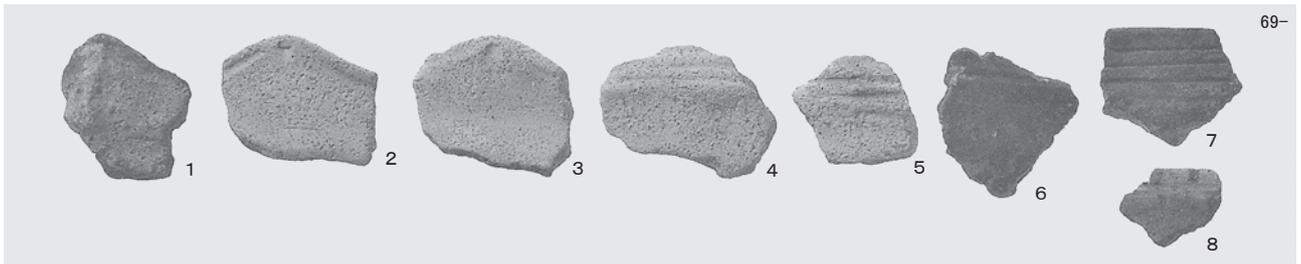
(2) 有文深鉢形土器第22群



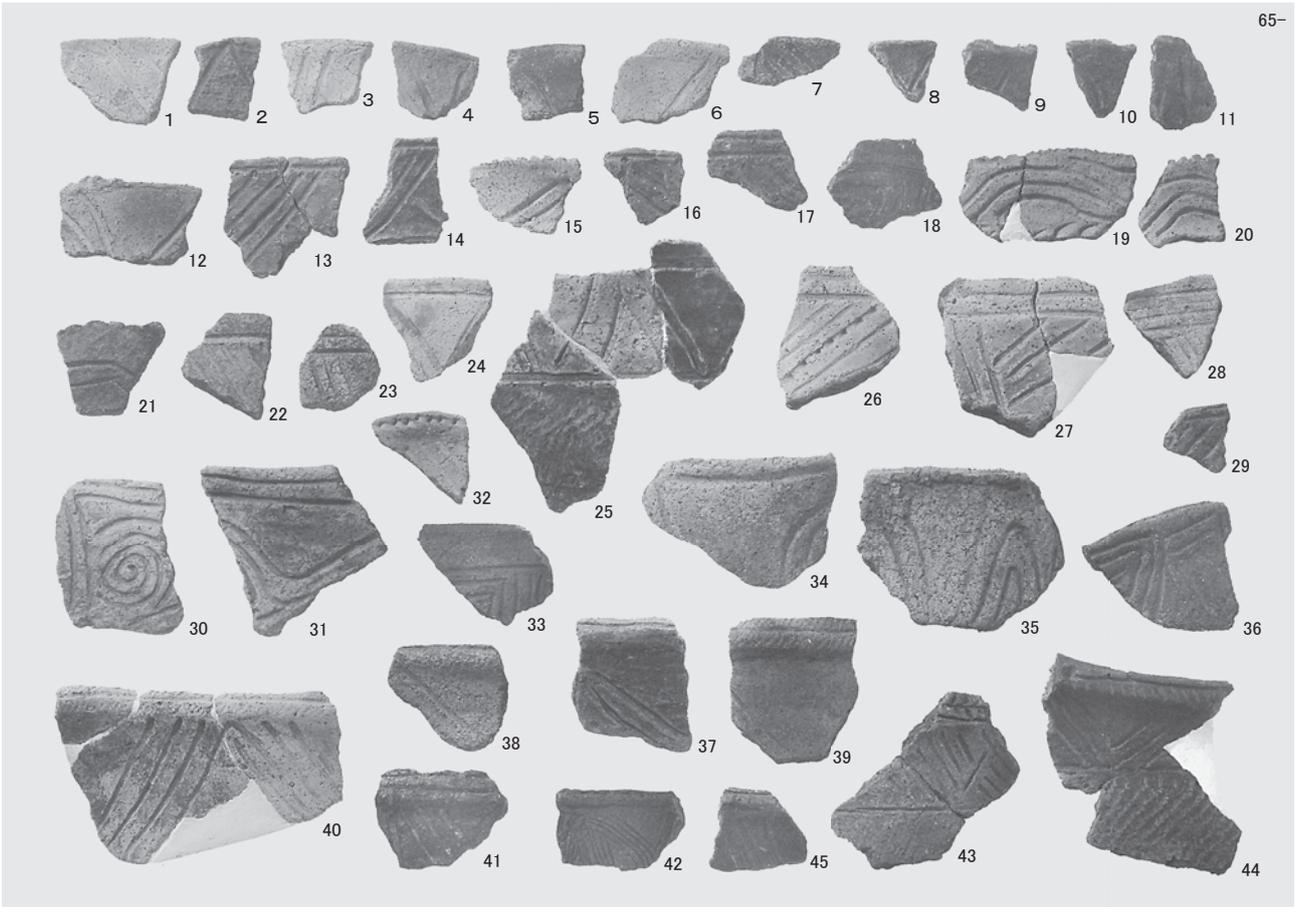
(1) 有文深鉢形土器第22群



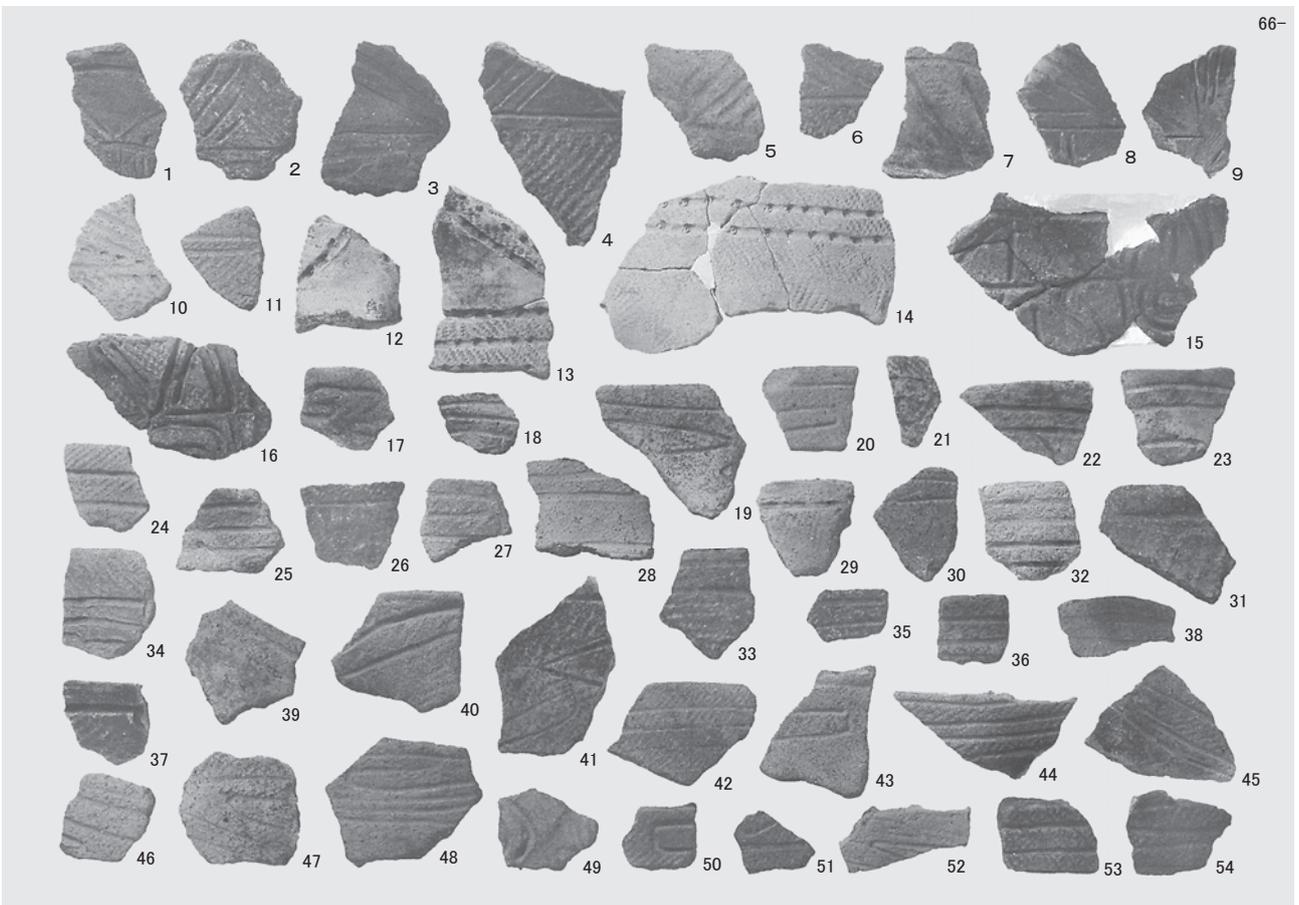
(2) 有文深鉢形土器第22群



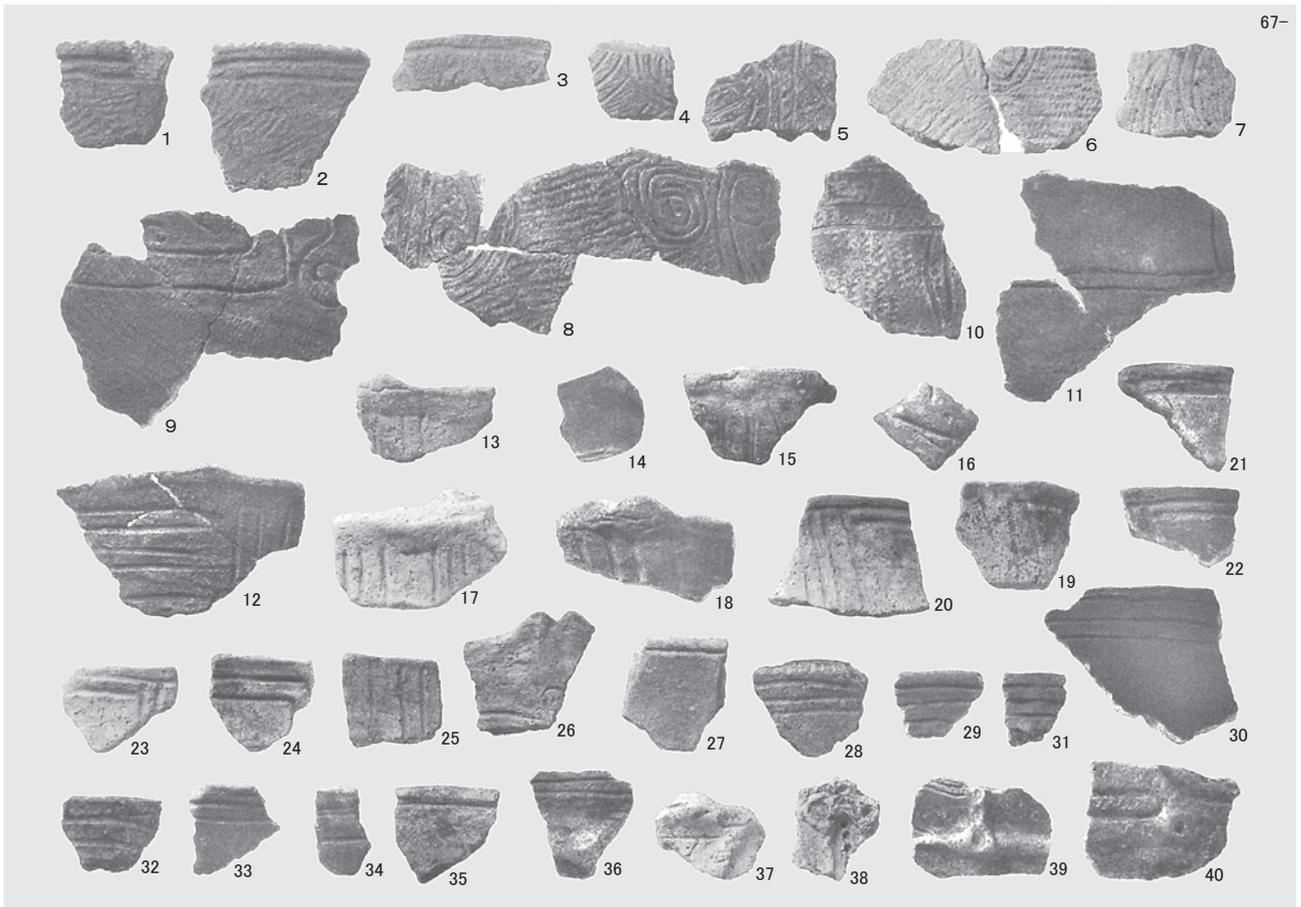
(3) 有文深鉢形土器第29群



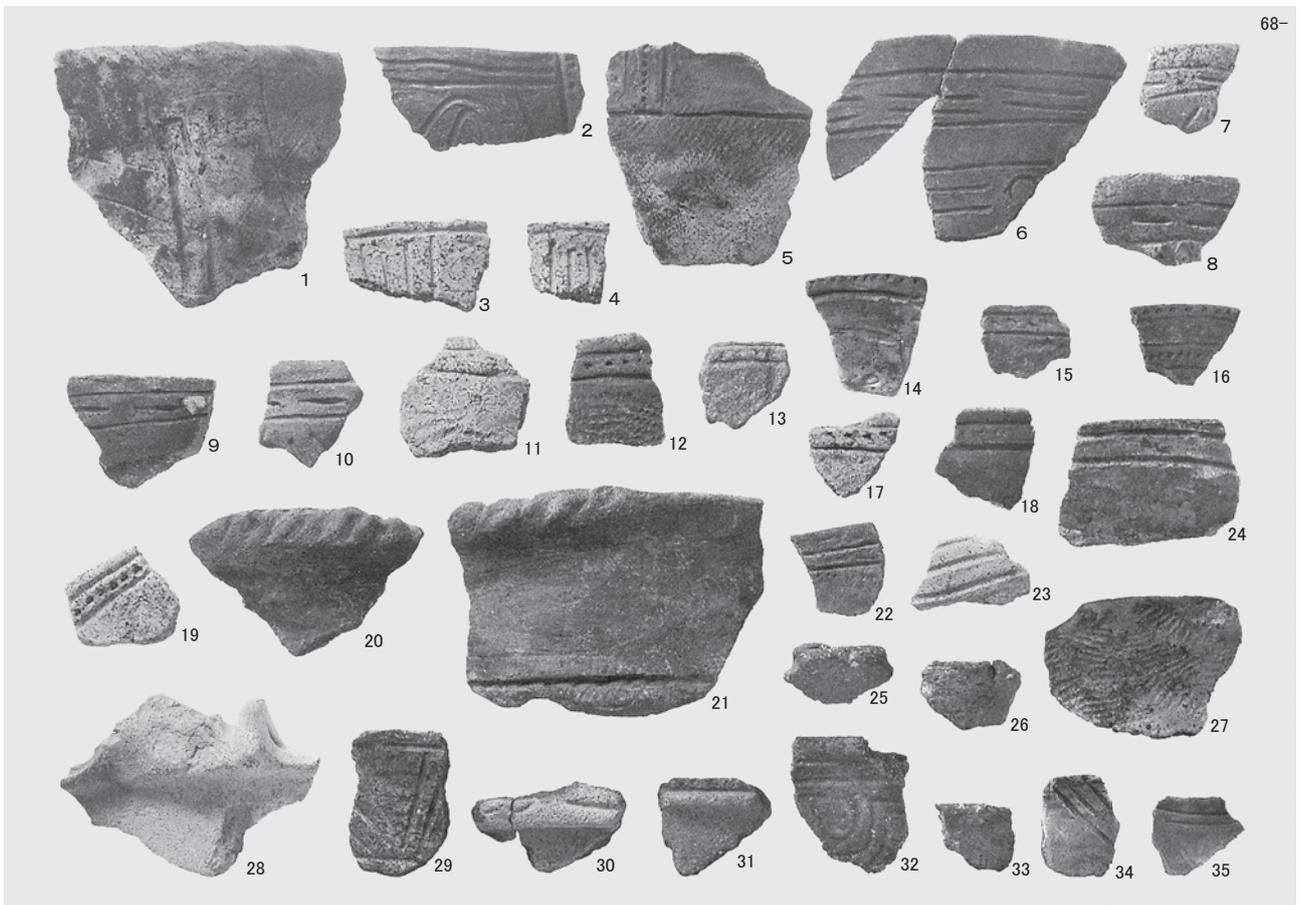
(1) 有文深鉢形土器第23群



(2) 有文深鉢形土器第23群、第24群



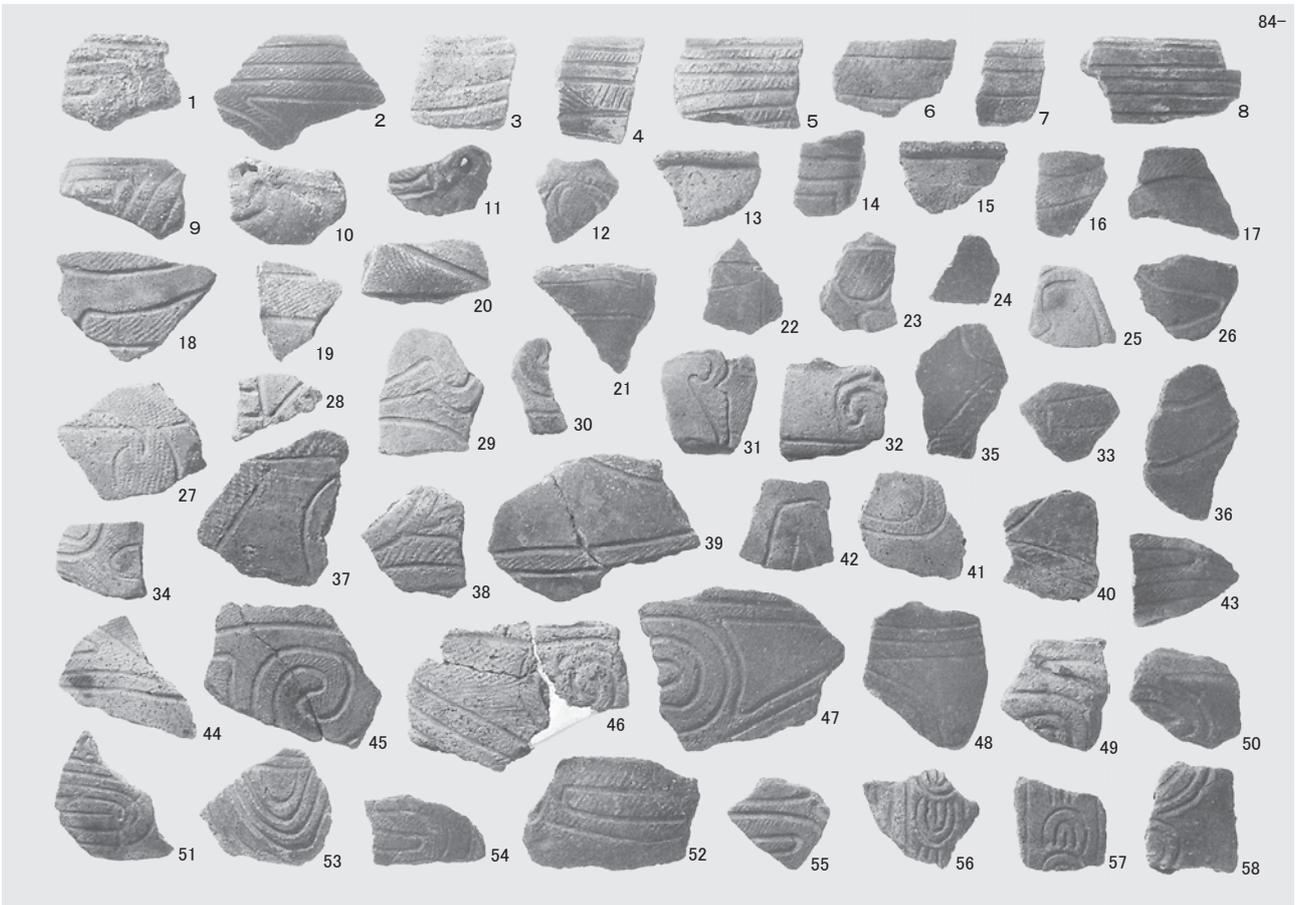
(1) 有文深鉢形土器第25群、第26群



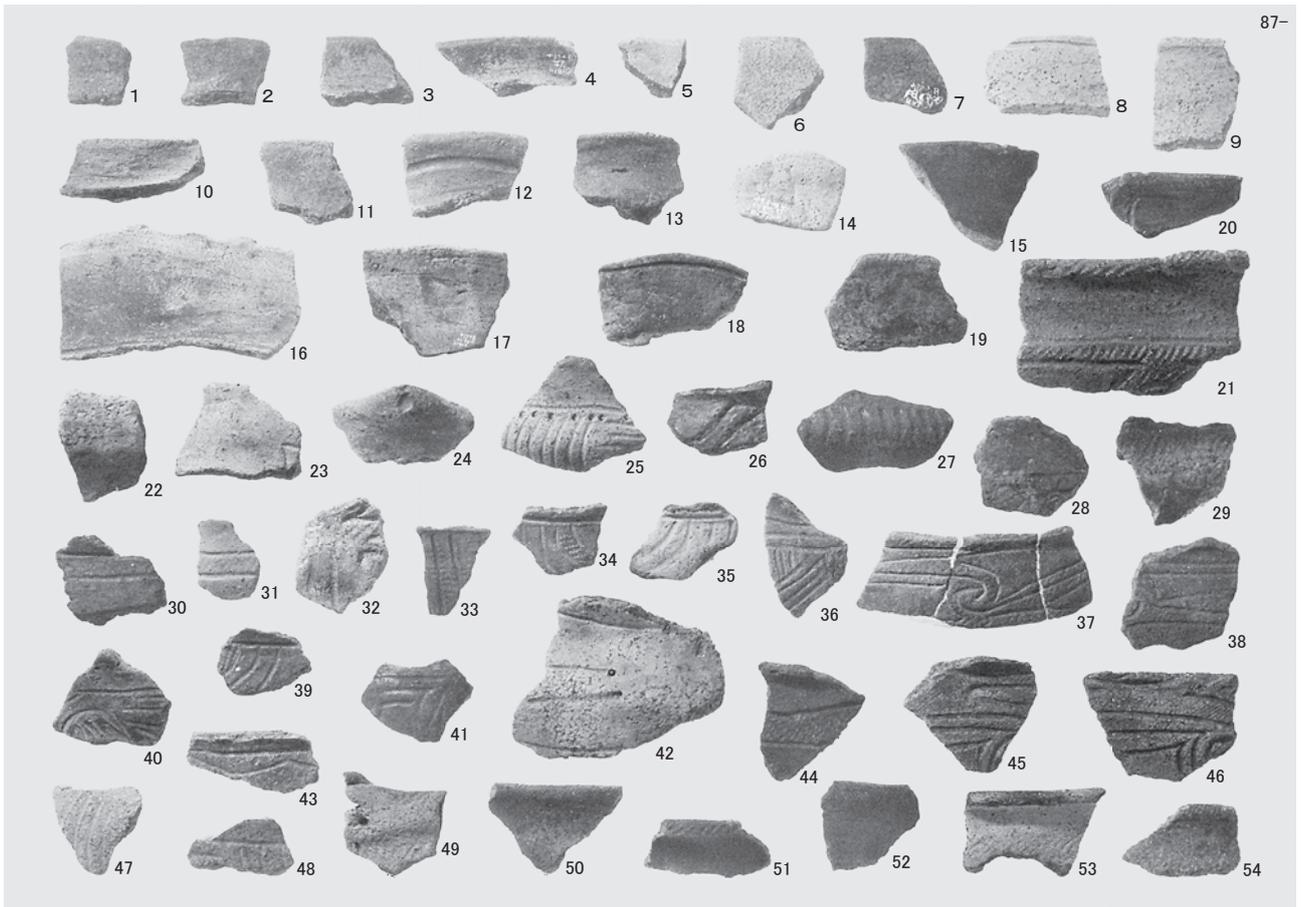
(2) 有文深鉢形土器第27群、第28群



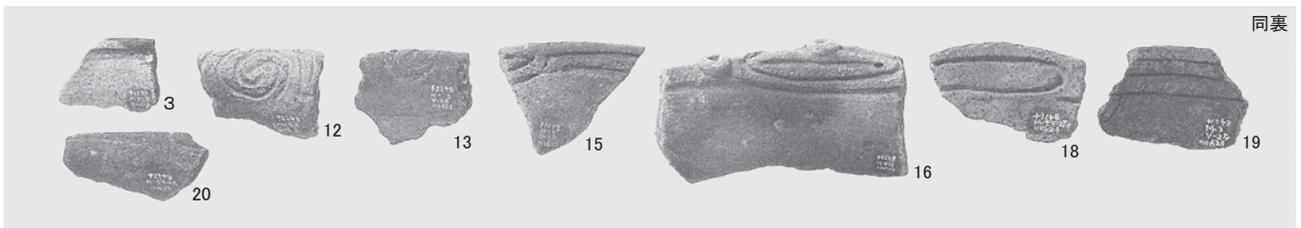
(1) 鉢形土器・壺形土器第1群



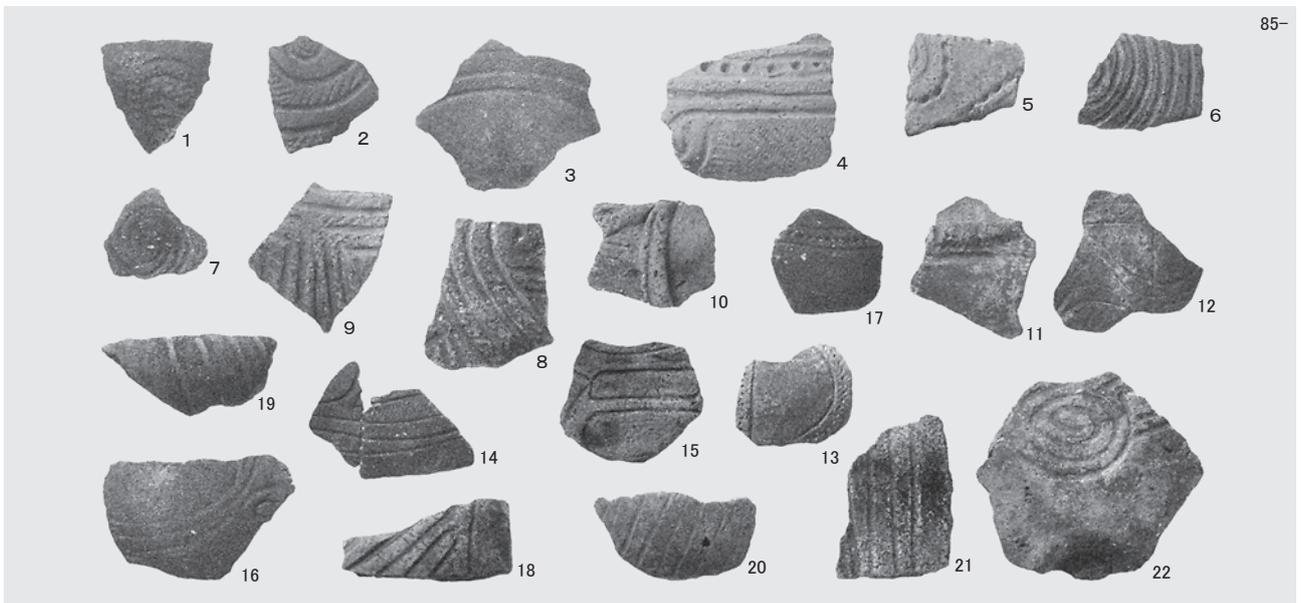
(2) 鉢形土器・壺形土器第1群



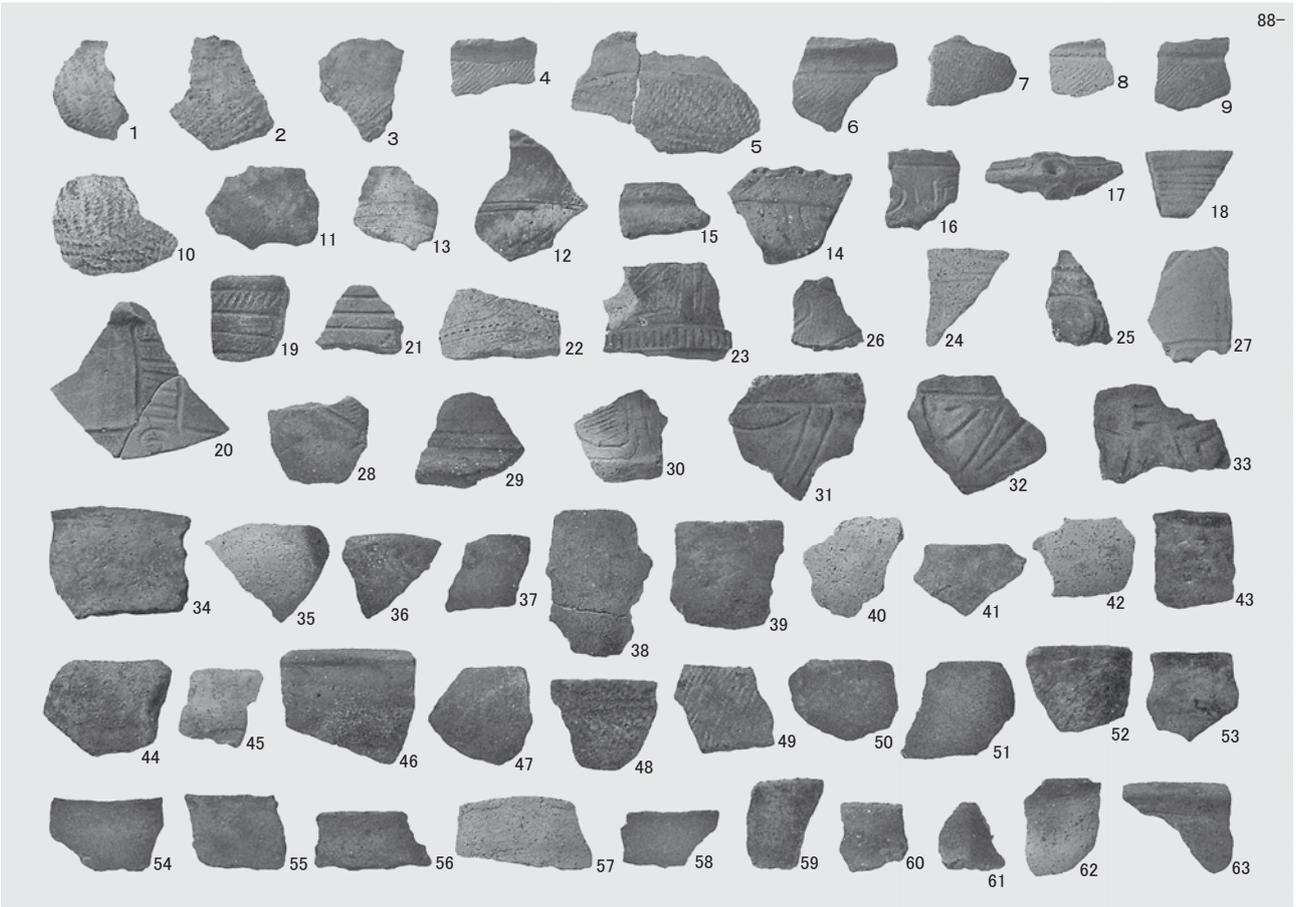
(1) 鉢形土器・壺形土器第1群



(2) 鉢形土器・壺形土器第2群

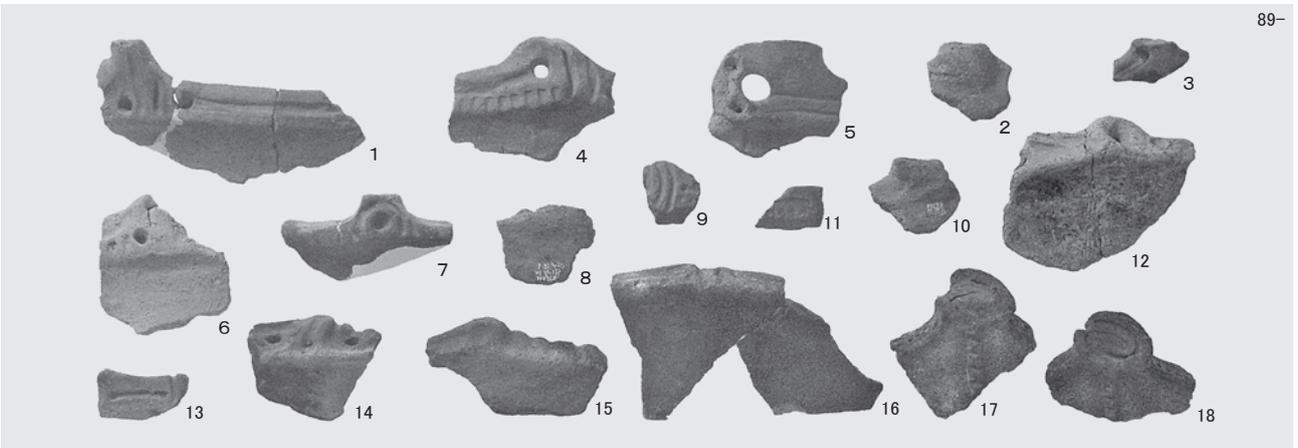


(2) 鉢形土器・壺形土器第2群

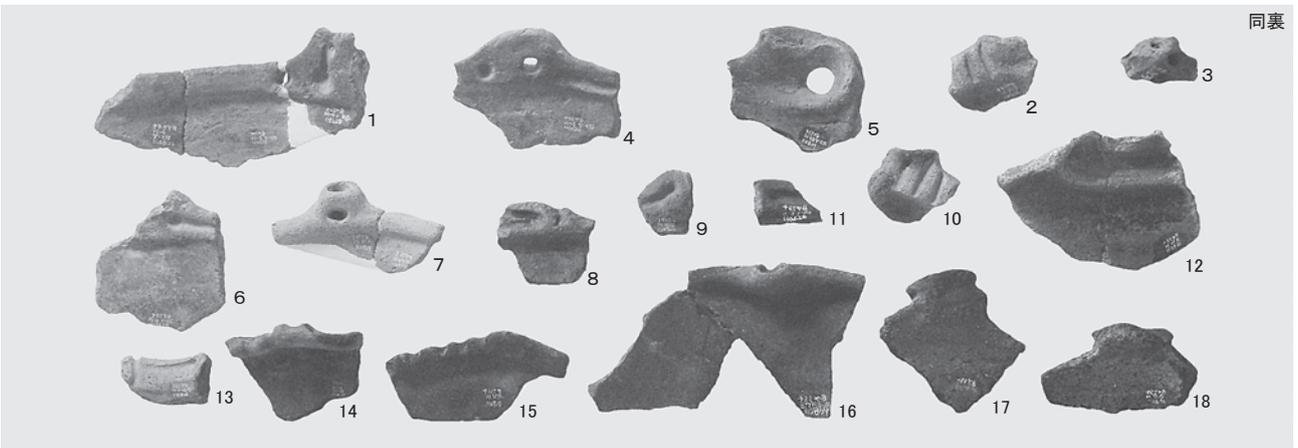


88-

(1) 鉢形土器・壺形土器第2群、第3群、第5群

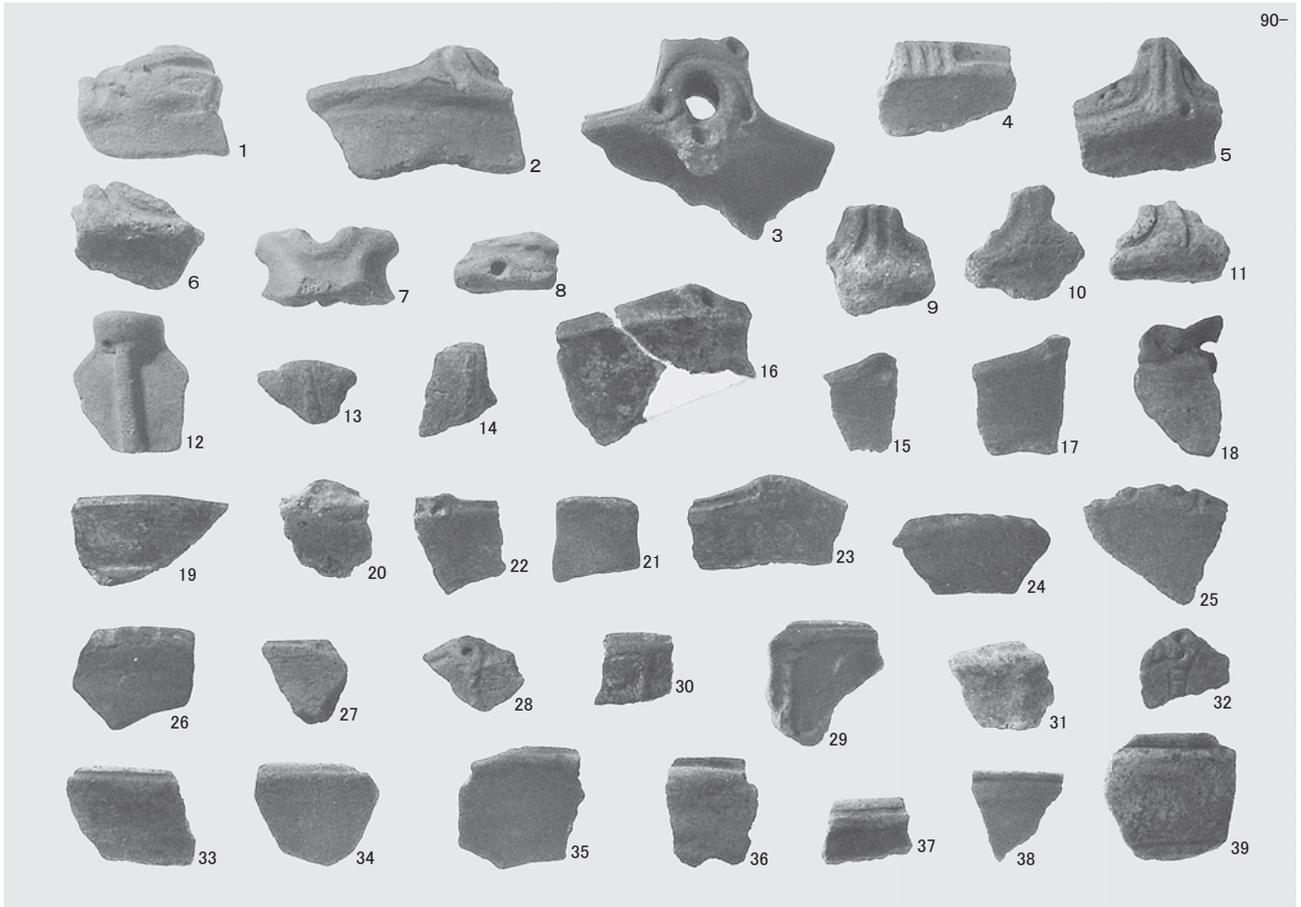


89-

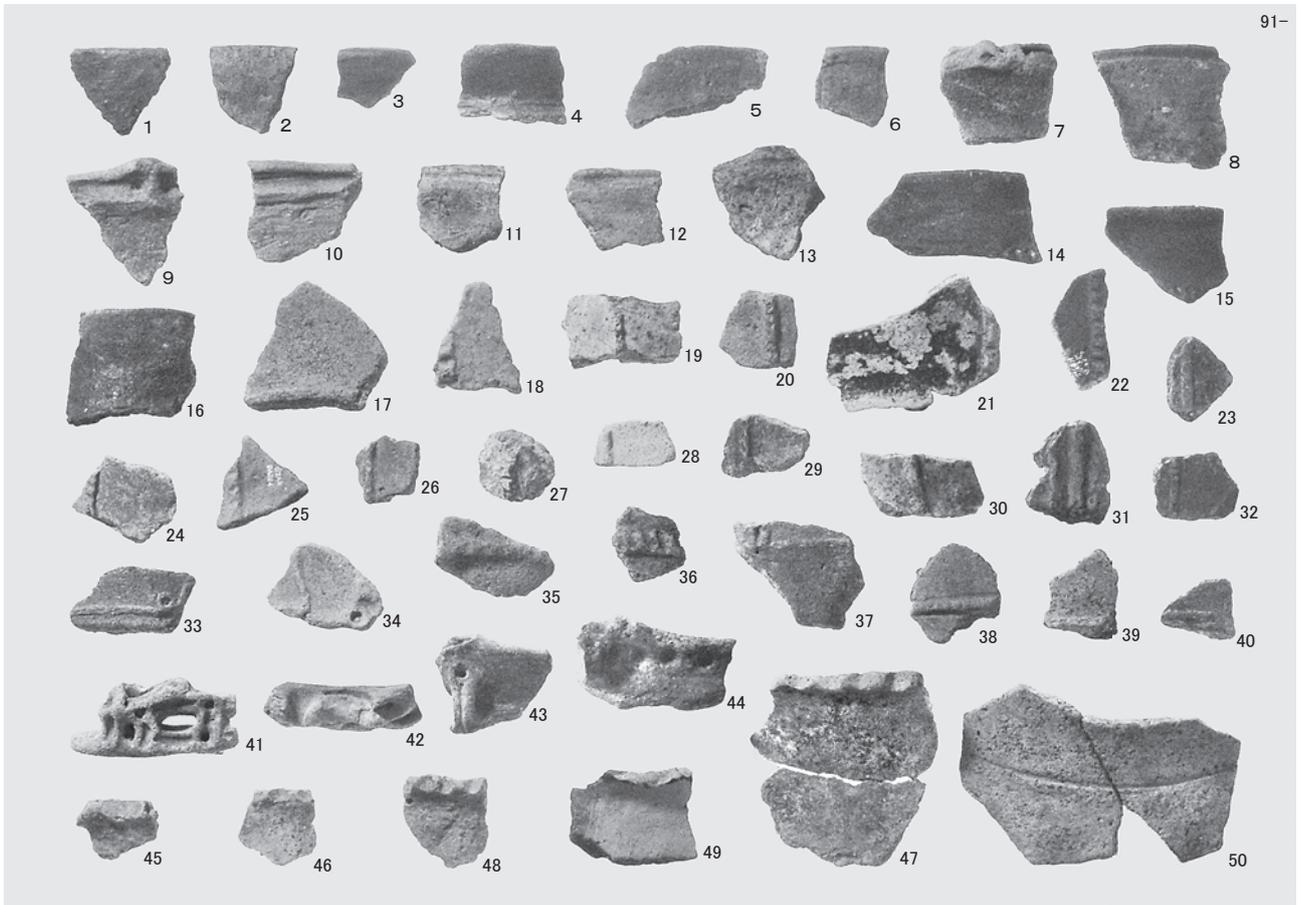


同裏

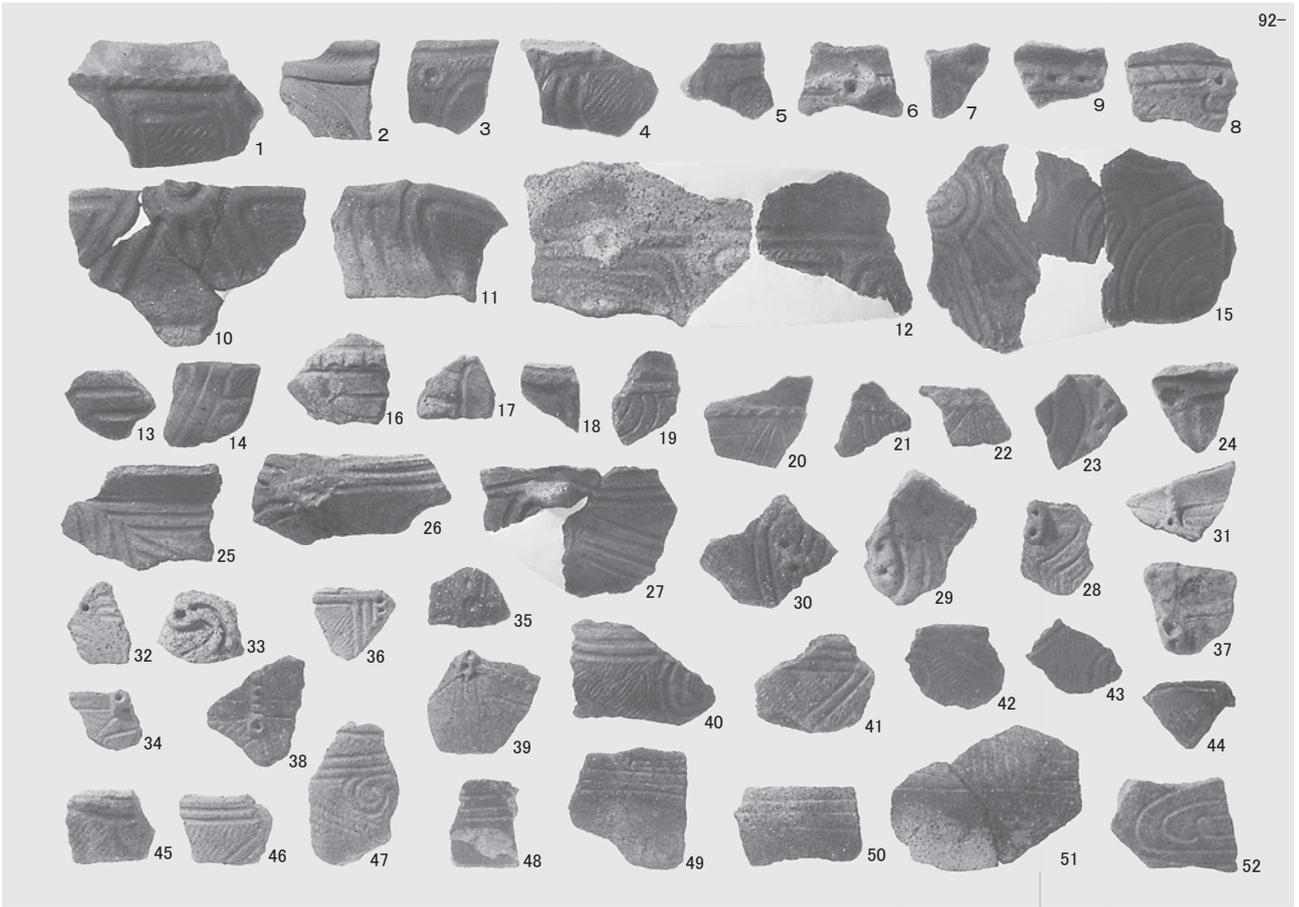
(2) 鉢形土器・壺形土器第4群



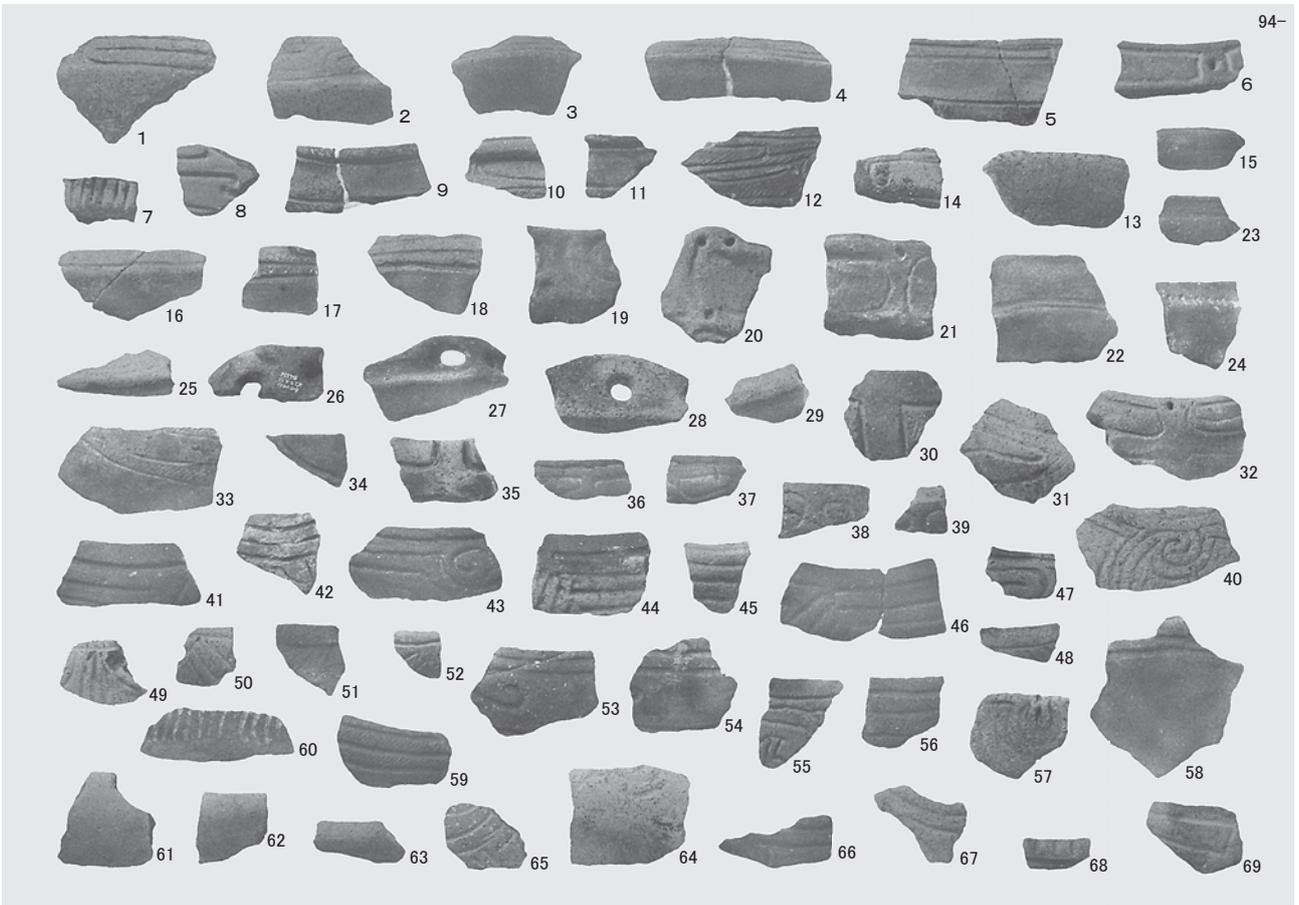
(1) 鉢形土器・壺形土器第4群



(2) 鉢形土器・壺形土器第4群

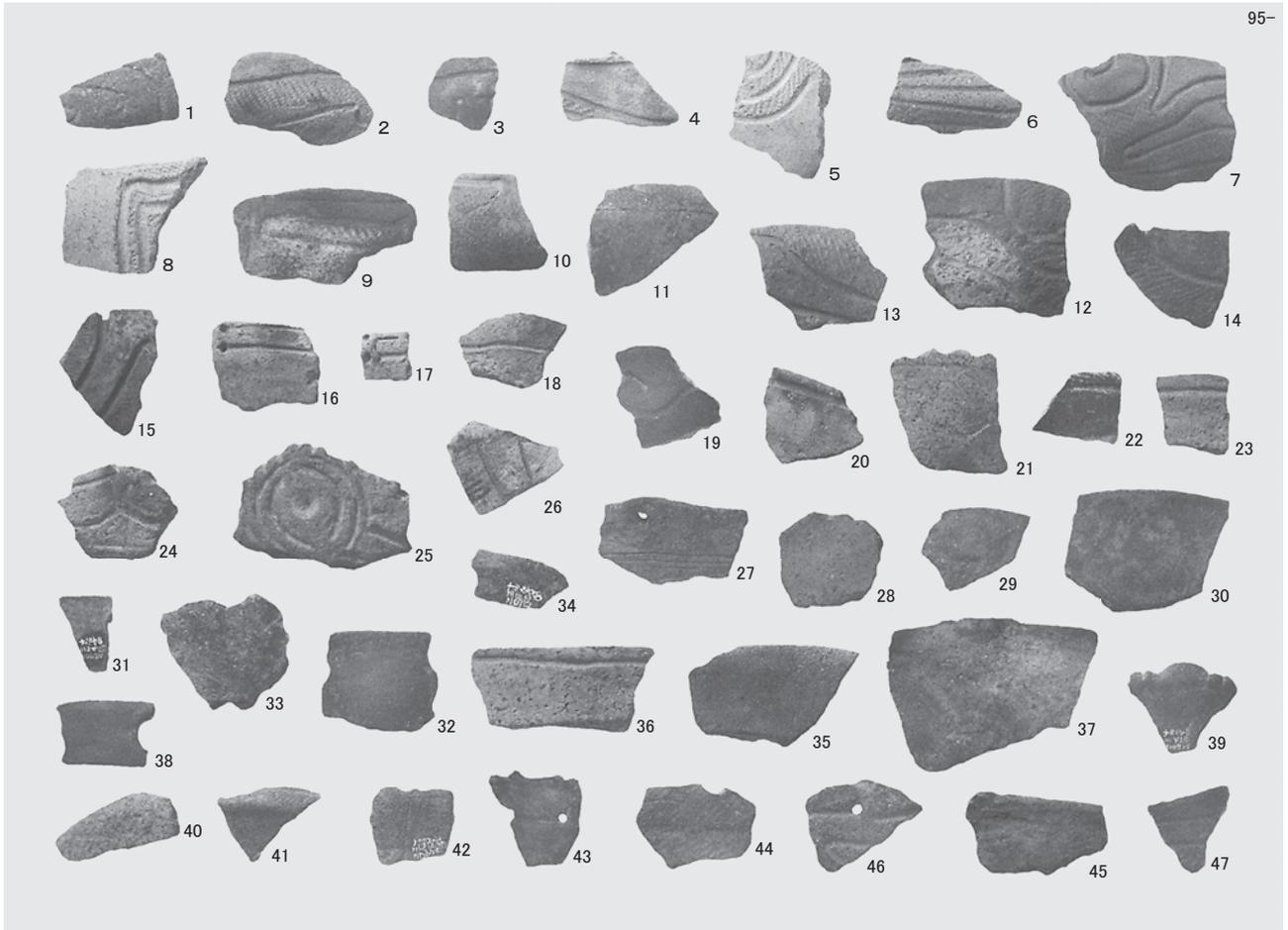


(1) 鉢形土器・壺形土器第4群

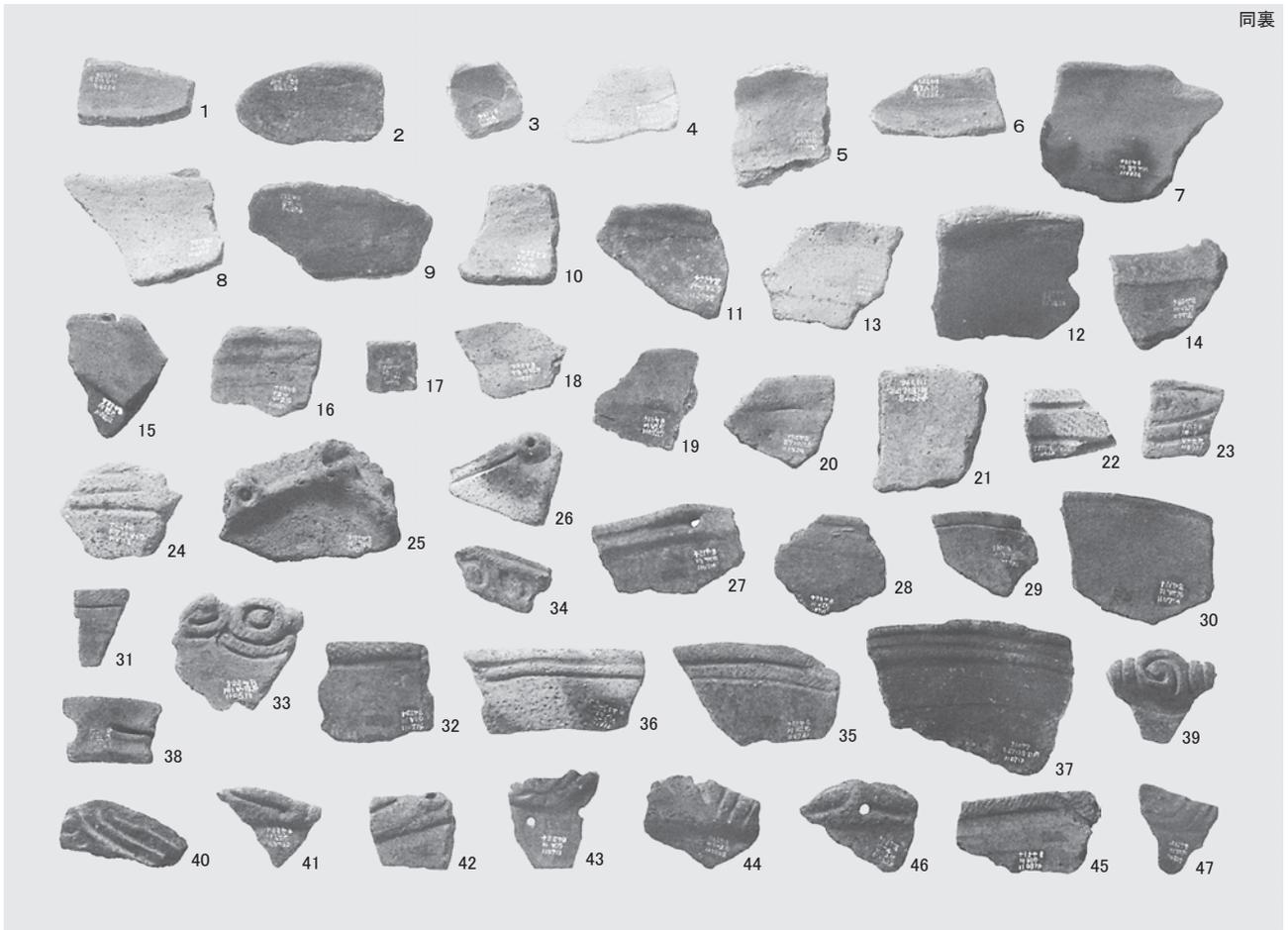


(2) 浅鉢形土器・釣手土器第1群、第2群

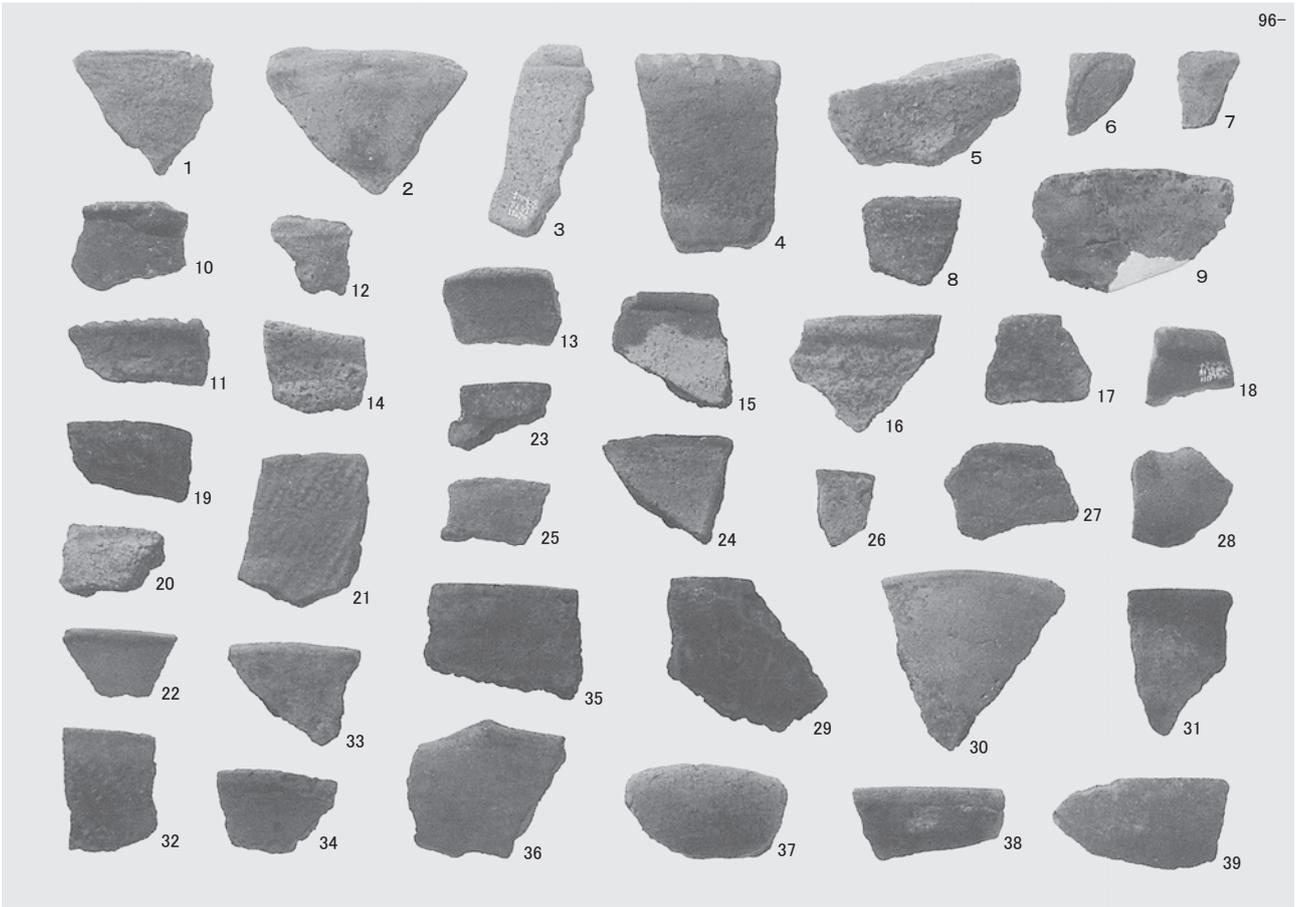
図版第四十
浅鉢形土器



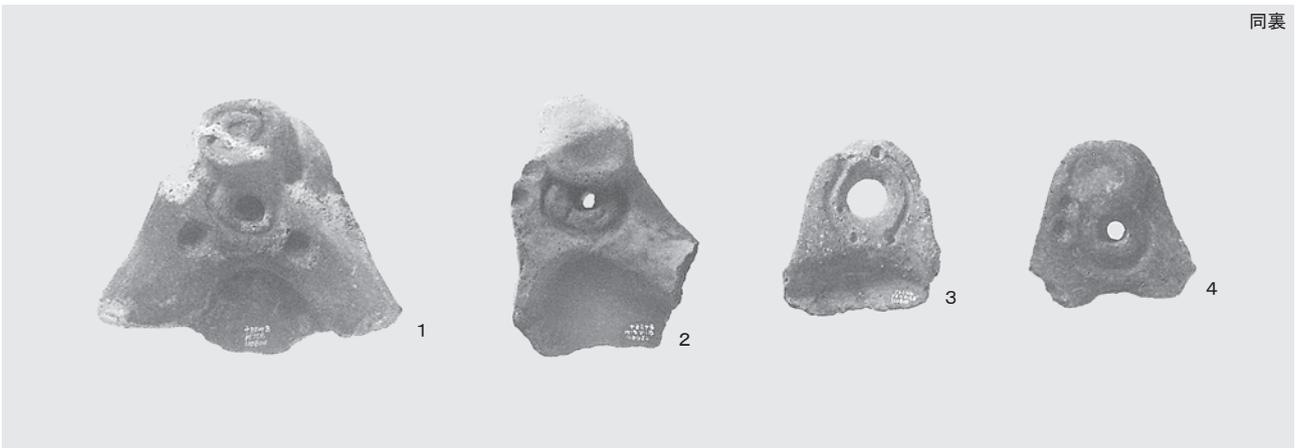
同裏



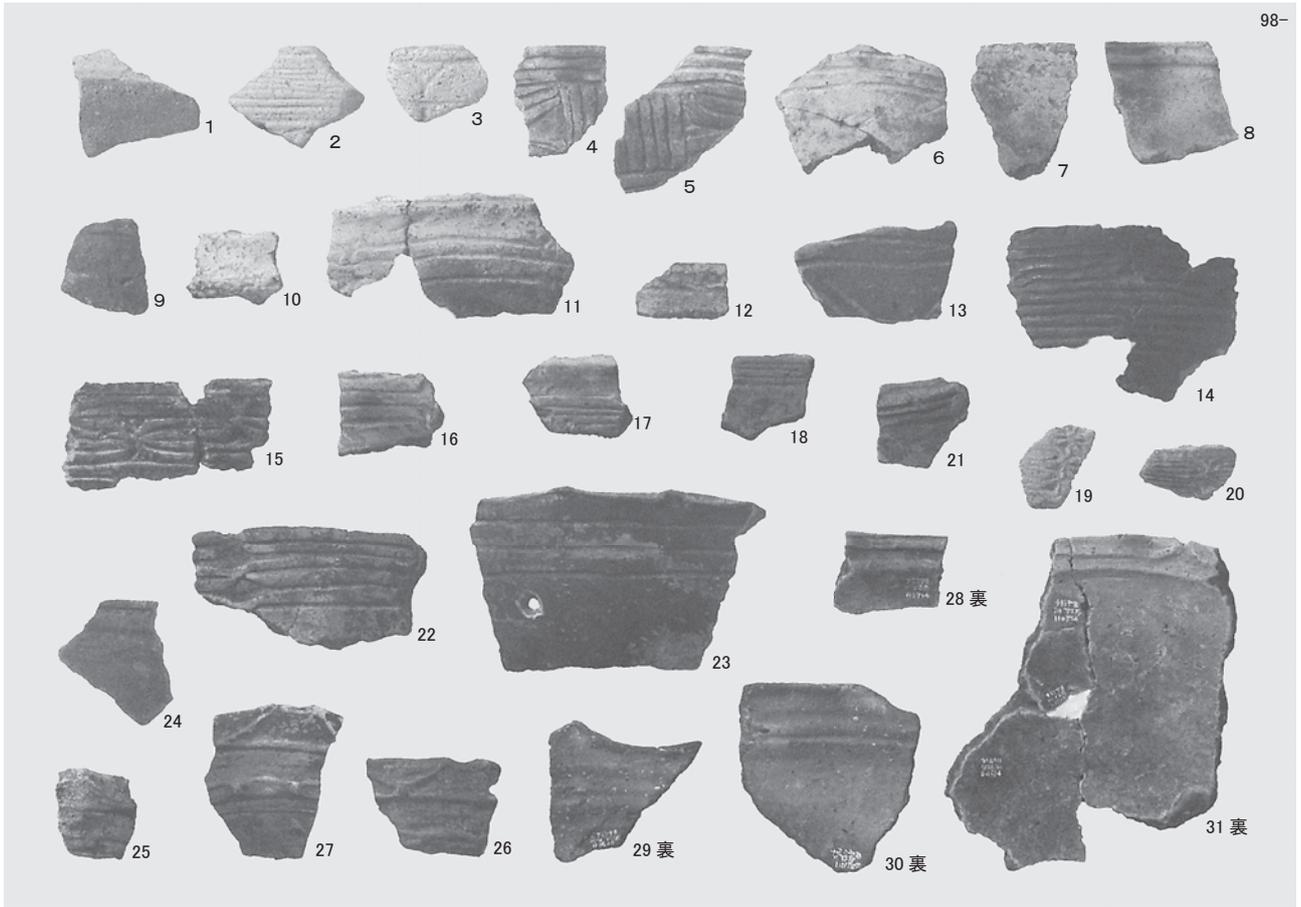
(1) 浅鉢形土器・釣手土器第2群、第3群



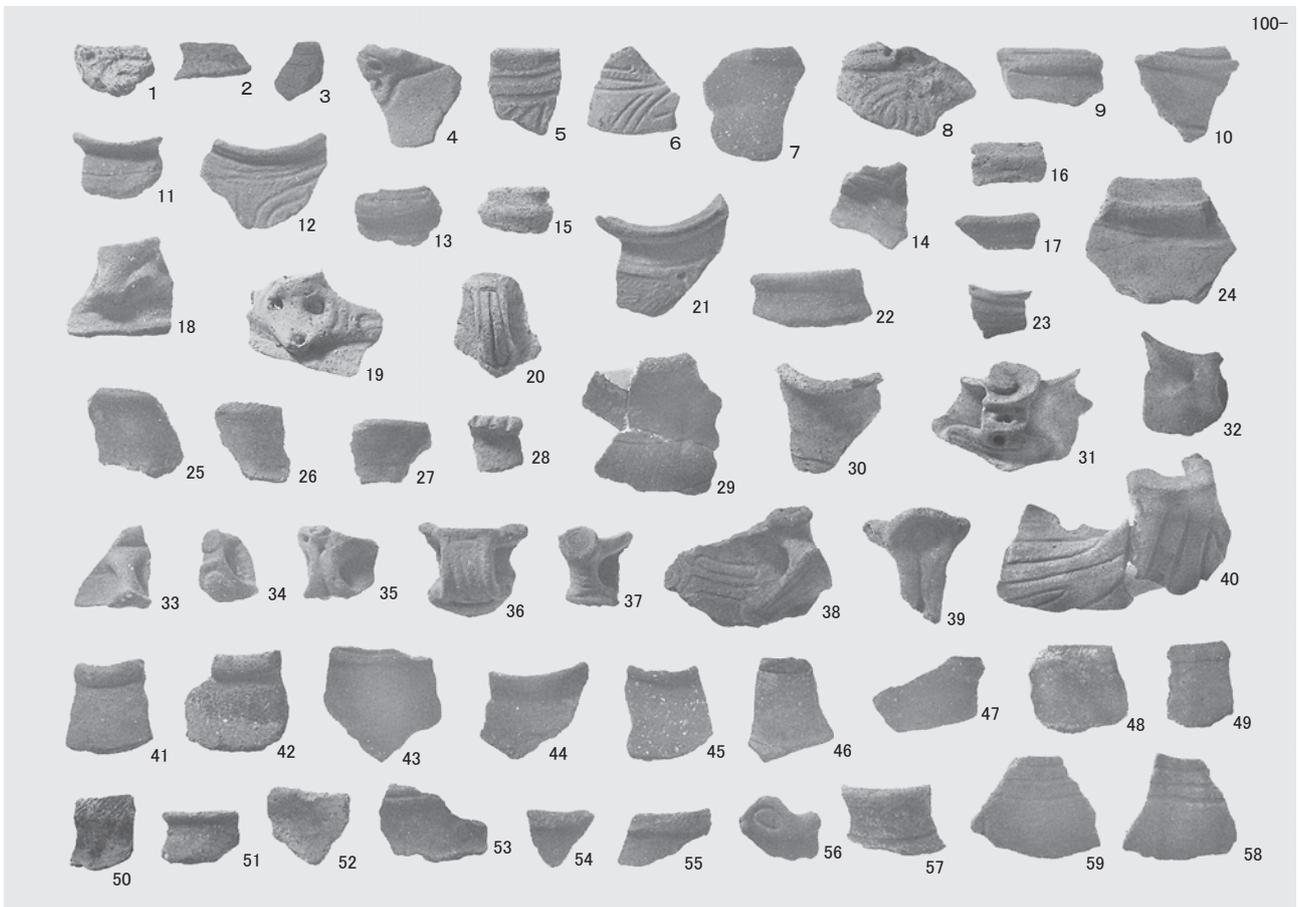
(1) 浅鉢形土器・釣手土器第5群



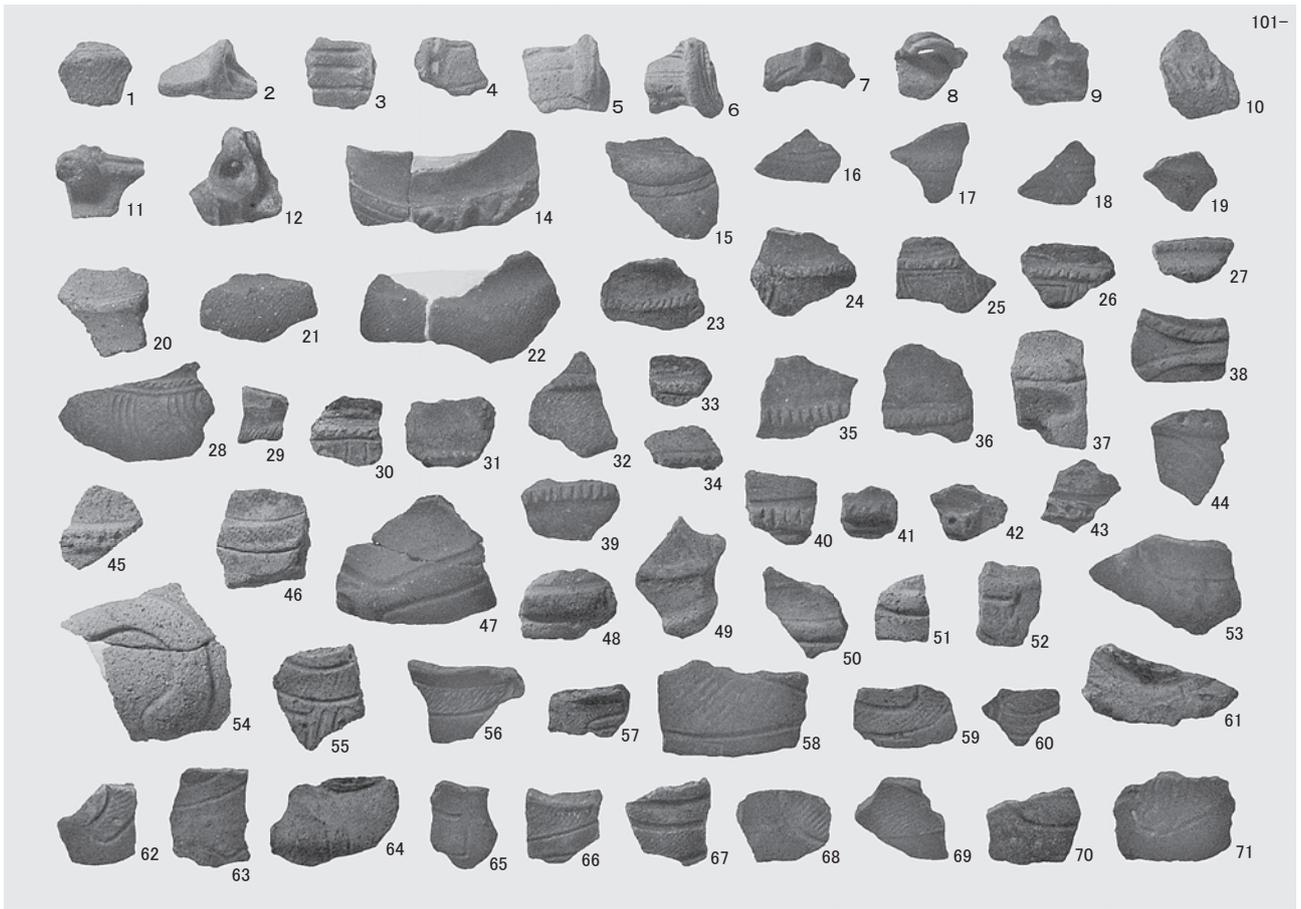
(2) 浅鉢形土器・釣手土器第6群



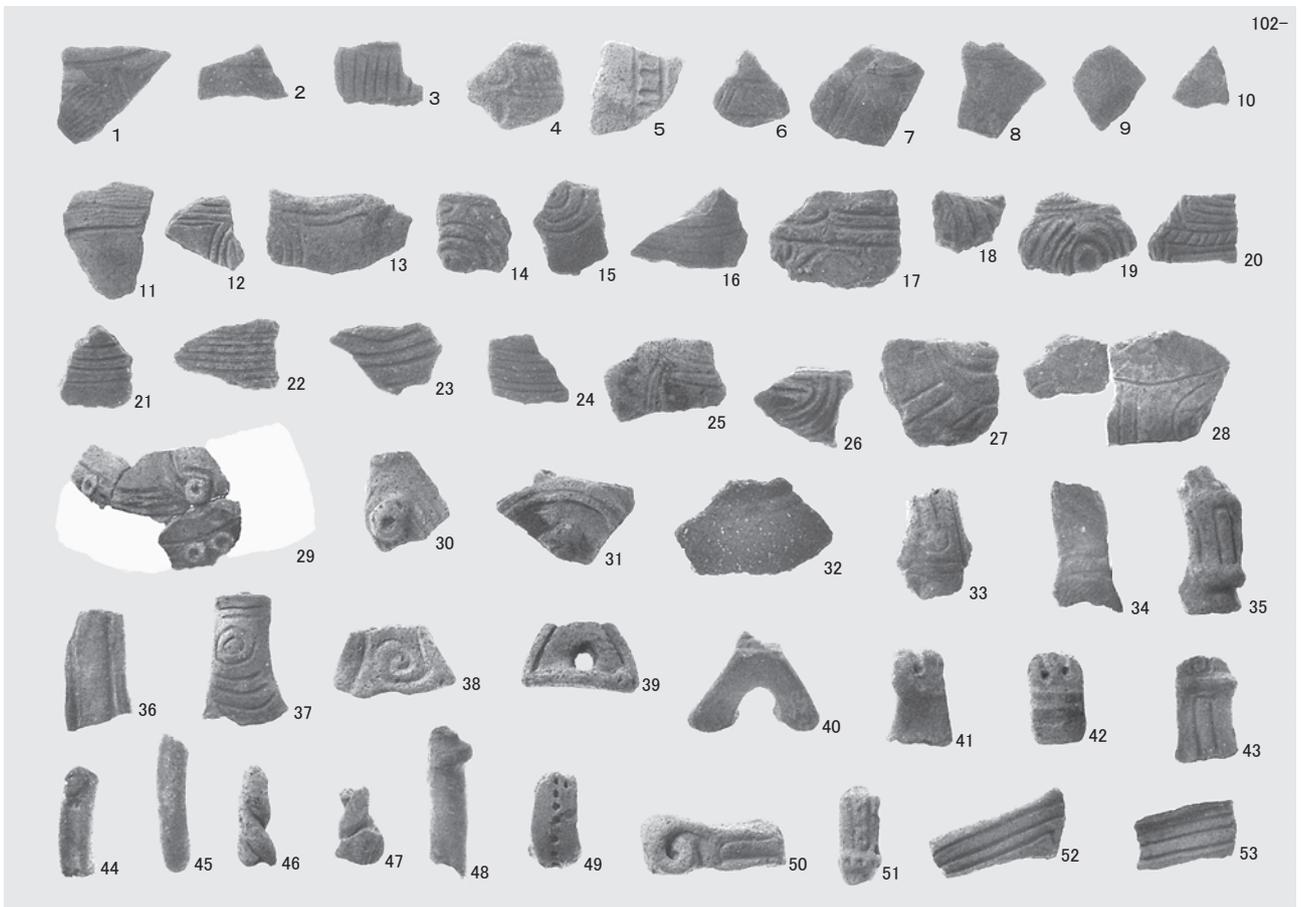
(1) 浅鉢形土器・釣手土器第7群～第11群



(2) 注口土器・双耳壺形土器第1群、第2群

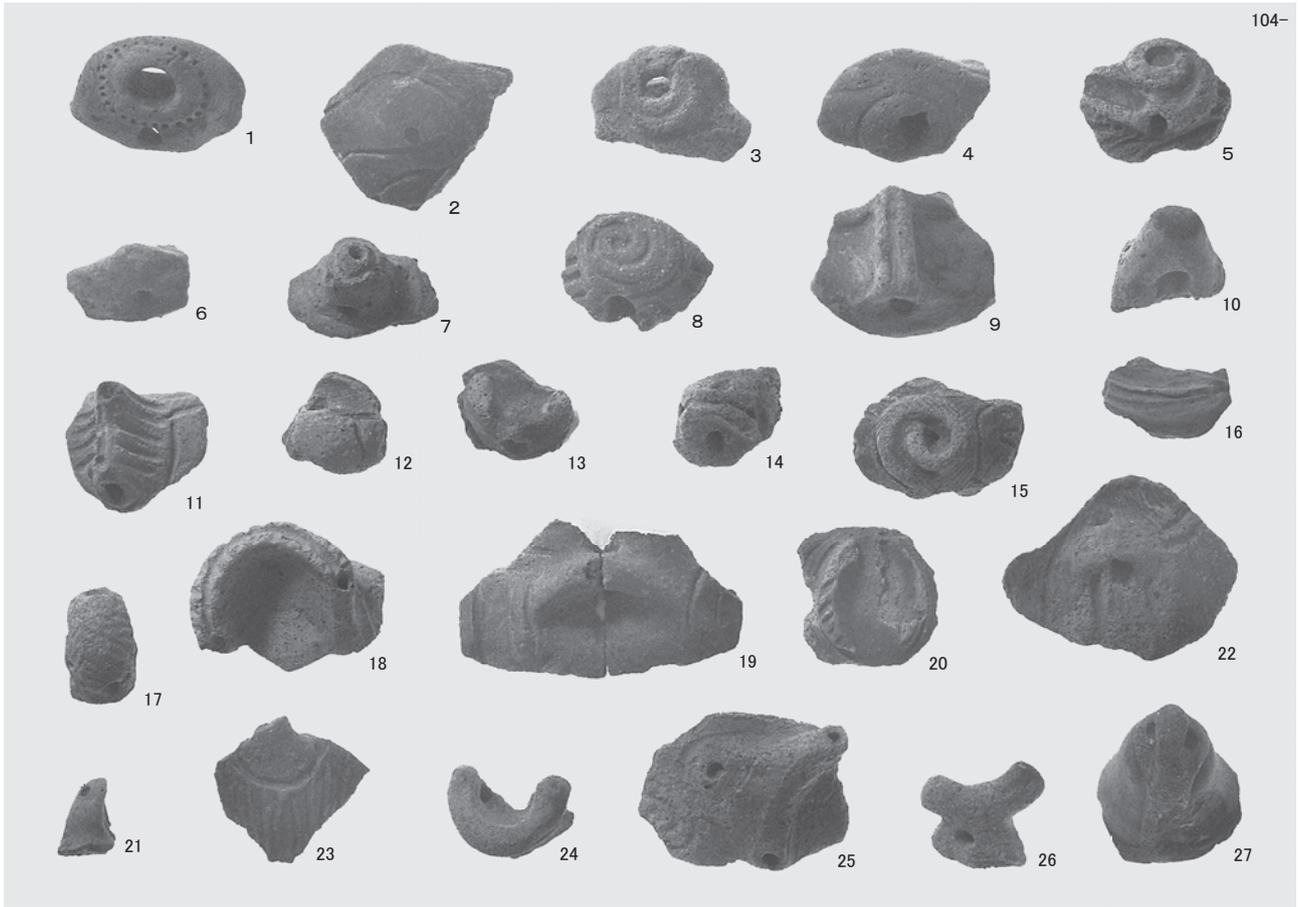


(1) 注口土器·双耳壶形土器第2群

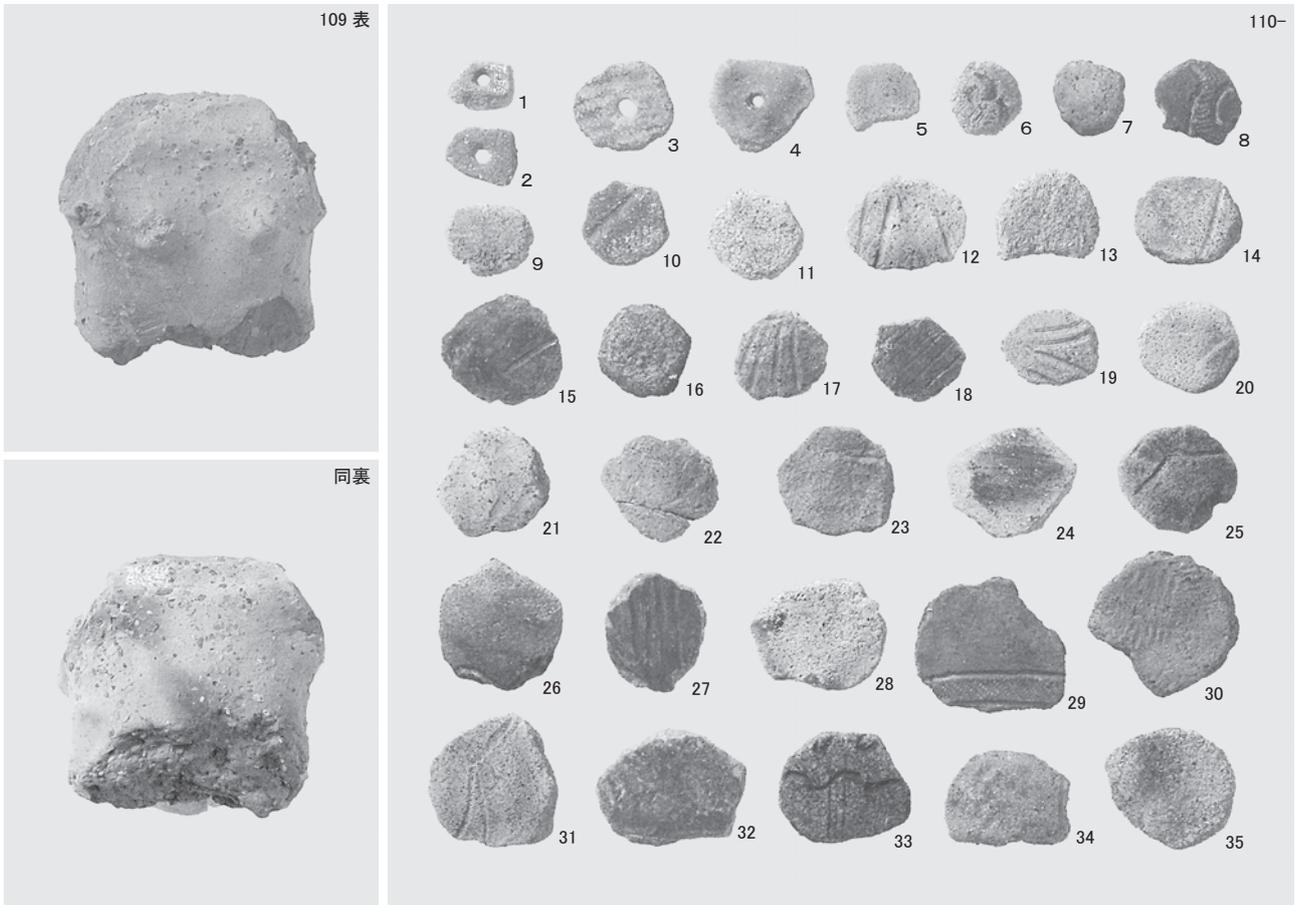


(2) 注口土器·双耳壶形土器第2群、第3群

図版第四四 双耳壺形土器・土偶・土製円板



(1) 注口土器・双耳壺形土器第2群、第3群



(2) 土偶

(2) 土製円板

報 告 書 抄 録

ふりがな	なみよせみやけだいせき							
書 名	波寄三宅田遺跡							
副 書 名	一般国道416号道路改良工事に伴う調査							
巻 次	第1分冊遺構編・第2分冊遺物編Ⅰ・第3分冊遺物編Ⅱ							
シリーズ名	福井県埋蔵文化財調査報告							
シリーズ番号	第172集							
編 著 者 名	清水孝之(編) 工藤俊樹(編) 山本孝一(編) 鈴木篤英 赤澤徳明 富山正明 中原義史							
編 集 機 関	福井県教育庁埋蔵文化財調査センター							
所 在 地	〒910-2152 福井県福井市安波賀町4-10 TEL 0776-41-3644 E-mail : maibun-c@pref.fukui.lg.jp							
発行年月日	2021年3月31日							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積 m ²	調査原因
		市町村	遺跡番号					
なみよせみやけだ 波寄三宅田 いせき 遺跡	ふくいけん 福井県 ふくいし 福井市 なみよせちよう 波寄町	18201	01044	36° 9′ 28″	136° 8′ 56″	20100701～ 20101228 20110401～ 20110831	10,670	記録保存 調査
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物		特記事項		
波寄三宅田 遺跡	集落	縄文時代 早期～晩期	川	縄文土器・石器・ 石製品・土製品		8区川から遺物が多量 に出土し、大珠・石棒・ 土偶も出土した。		
		弥生時代後 期～古墳時 代前期	方形周溝墓・ 溝・土坎・ 井戸・川	土器・玉作り関連 遺物・玉類・木器・ 木製品		主に第Ⅰ・Ⅲ・Ⅳ区域 に展開する。		
		古代	掘立柱建物・ 井戸	須恵器・土師器・ 墨書土器・瓦		主に第Ⅱ・Ⅲ区域に展 開する。		
		中世	掘立柱建物・ 井戸	陶磁器・土師器・ 土製品・木製品		主に第Ⅲ区域に展開す る。		
要 約	<p>波寄三宅田遺跡は、福井市波寄町集落の北東側に位置し、九頭竜川左岸の氾濫原に広域に展開する。現状は標高3mを測る水田地帯であるが、古代まで遺跡の北西側には三里浜の砂丘を境に潟湖が存在していたと考えられ、潟湖を利用して集落が営まれたと考える。</p> <p>遺構の主な時期は、弥生時代後期～古墳時代前期および奈良・平安時代の古代に大別でき、前者については第Ⅳ区域1区SD1と第Ⅳ区域8区川において大量の土器を検出した。後者については第Ⅱ・Ⅲ区域においては整然と配置された建物群を検出し、遺跡の中心部を捉えることができた。建物群は、重複して構築した形跡がなく、共伴する遺物も少量の供膳具を主体としていることから、居住集落ではなく荘園を管理するような公的施設であった可能性が高い。</p> <p>遺物は、第Ⅳ区域8区川から出土したものが大半を占め、川の上層で弥生時代後期～古墳時代前期の土器、玉作り関連遺物、木器が出土し、川が形成される以前の最下層から膨大な量の縄文時代の土器、石器を検出した。縄文土器の時期は早期～晩期におよぶが、後期初頭から前葉が量的主体をなす。</p>							

福井県埋蔵文化財調査報告 第172集

波寄三宅田遺跡

— 一般国道416号道路改良工事に伴う調査 —

第2分冊 遺物編 I

令和3年3月5日 印刷

令和3年3月15日 発行

発行 福井県教育庁埋蔵文化財調査センター
〒910-2152 福井県福井市安波賀町4-10
印刷 白崎印刷株式会社
〒910-0843 福井県福井市西開発3-715
